



日本漢文史

籍叢刊

第五輯

地理

六



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

第六冊目錄（總第126冊）

駿河風土歌	一
柳橋新誌	三九
新瀉雜記	七五
山川名勝古迹	
日本名山圖會	九九
三山記略	一五三
山水奇觀前編	一七七
日本形勝叢談	二一九
淡海廿四勝圖記	三七三
飛鳥山勝景	四一五
鴨東四時雜詞	四二七
前王廟陵記	四五七
山陵志	五〇一
陵墓一隅抄	五二三

平山陳平 著

駿河風土歌

明治七年（一八七四）静岡足田正喜刻本

據明治七年（一八七四）

靜岡疋田正喜刻本影印

緒言

國有風俗、講地利者不可不識焉、地有沿革、讀歷史者不可不察焉、是古昔盛時、所以令國司貢風土記也、豈唯 皇朝、江漢野有死麋、意同風異、東山黍離、沿革不一、宣尼輯之以教後世、乃風土沿革不可不識也、必矣、我 國家戊辰龍興之後、治具畢張、文章輩出、著書之夥、奚啻汗牛充棟、而未有言及國風者、客歲濱松內田氏始有遠江風土歌之作、其意尤善、惜乎專述今日之盛、而不及沿革、雖既得隴、又不可望蜀、然畢竟未完璧矣、抑風

三省堂平山陳平著
昆塘菊池基書
挿畫
訓蒙
駁
河風土歌
靜窩 西田正喜藏版

土廣漠難索，沿革久遠難泐。顧予之曹
材非識，豈得盡其蘊。所謂非曰能之，願
學焉者也。作駿河風土歌。

明治七年七月旬一日書于靜岡三省堂錢荷
池邊

權大講義平山陳平識

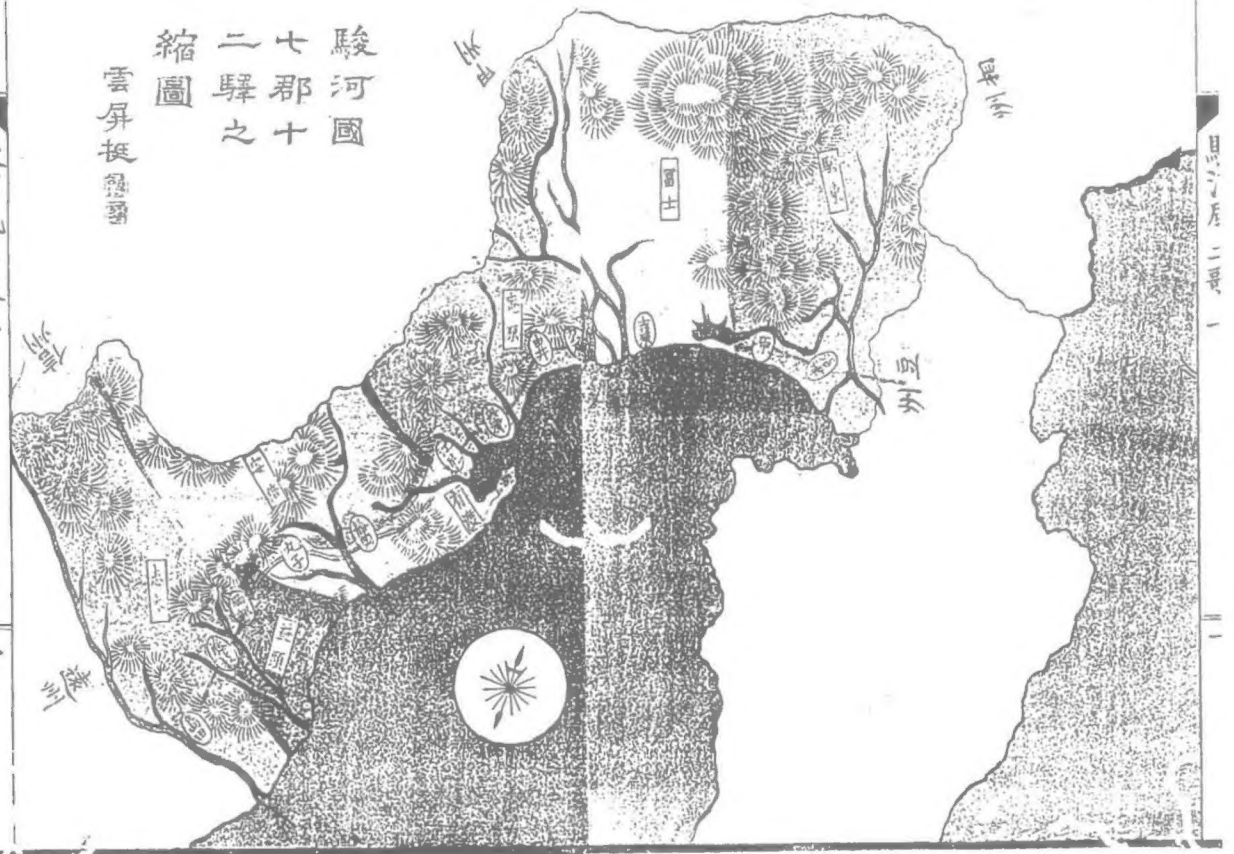
駿河風土歌上

靜岳 平山 陳平 著

此國を打寄る。駿河の
國と名つゝあるを。菅下ふ
三つの川あるを。西乃

駿河風土歌上

果て冬大井川。中ふ安
倍川東にそ。富士山落
此三つの流も。身とて
旅起るを。鞭をさす
ぬる水も。春ふに流川



北心をて。す。新河の國と
傳ふるん。北の堺。甲斐
の根や。路を。嶺。足
曳乃。山梨縣の管轄
所。南に。相模。若。沙。原。

駿河風二歌上

三

霞罩を。は。春の夕。伊
豆の山。ほの。見。えて。棹
歌。遠く。間。也。東。海。五
ノ界。足。柄。縣の支
配。所。西。に。河。摺。大

井川。渡。も。も。志。河。淡
海の國。濱。相。縣の管。ハ
なり。國乃。形。ハ。國。ハ。く。
能。長。く。て。横。狭。く。
北乃。堺。多。名。嶺。長。

駿河風二歌二

四

峯。嶺。山。嶺。南。清。水
乃。港。も。て。八。里。餘。と
なり。と。也。東。西。里。程
二十四里。郡。も。七。の。後
東。に。河。す。ま。若。原。よ

有^う渡^わ郡^{ぐん}。安^あ倍^{ばい}志^し太^た益^{えき}頭^づ
村^{むら}数^{かず}も。八^{はち}百^{ひゃく}二^に十^{じゅう}九^くと村^{むら}を
七^{しち}の^の大^{だい}區^くと定^{さだ}ま^まる^る解^{かい}。
小^{せう}區^く乃^{なり}部^ぶ分^{ぶん}四^し十^{じゅう}五^ご區^く。
去^こ詔^し在^{ざい}申^{しん}乃^{なり}調^{てう}ま^ます。

駿河風土歌上

三

五^ご別^{べつ}三^{さん}万^{まん}八^{はち}百^{ひゃく}と。四^し十^{じゅう}六^{ろく}と
餘^{あま}ありと一^{いち}や。歳^{さい}額^{がく}の
米^{こめ}数^{かず}少^{すく}な^なし。九^くと九^くと
九^く石^{いし}の^の餘^{あま}。金^{かね}を三^{さん}十^{じゅう}六^{ろく}
万^{まん}と。六^{りく}と九^くと三^{さん}十^{じゅう}區^く。石^{いし}

數^{かず}の總^{そう}計^{けい}七^{しち}萬^{まん}と。五^ご百^{ひゃく}八^{はち}
十^{じゅう}六^{ろく}戸^こと。人^{ひと}口^{こう}三^{さん}十^{じゅう}一^{いち}人^{にん}
と。二^に千^{せん}六^{ろく}百^{ひゃく}七^{しち}十^{じゅう}四^し。然^{しか}
る^るに。此^こ數^{かず}ハ年^{とし}と
變^{かは}る^るも。去^こ年^{とし}と

駿河風土歌上

六

今^{いま}年^{とし}と。日^ひふ月^{げつ}と。聞^{きこ}え
ゆ^ゆ世^よを。後^{のち}終^はに。あも
人^{ひと}數^{かず}と。孫^{ひこ}榮^{さか}え。倍^{ばい}す
程^{ほど}不^ふ到^{たう}。水^{みづ}魚^{うい}。少^{すく}し
只^{ただ}凡^{ふつ}を。記^{しる}す。の^の。季^き候^{こう}

春上穩中。冬暖
可春寒久。雪稀
去風多。全國
肥饒。只
安倍。西一郡。甲斐

駿河風土歌上

七

鄰。山峻。土質
甚劣。利。嗚呼。造
物主。仁。裁。か
瘠。山。住。列。住
室。の。其。摘

製。茶。の。名。曰
月。に。盛。今
皇國。乃。盛。產物
と。大。心。此。實
や。山。溪。と。園。丘

駿河風土歌二

八

陵。冬。園。と。愛。孤。兔
柘。と。茶。と。ふ。開。拓
起。年。時。雨。降。神
月。乃。初。つ。咲。摘
茶。の。花。と。黄。金。白。銀

そ古事記も見えたり。ハ
其ハ信ともてまゝ難し。
歌人紀貫之。古今集
に。一巻。とて。ふた
の山を。烟立次成り云と

駿河風二歌一

一一

あはれむ。ハ。常。ふ
立身。も。烟。如。や。堂。を。焦
る。や。人。言。や。英語。の。何。
かの。も。皇。國。語。の。火。山
を。も。今。と。て。再。度

燃。出。る。多。る。ハ。あ。と。冬
云。難。し。此。山。近。く。住
人。心。は。く。通。り。不。ふ
お。ん。山。乃。高。さ。冬。英
尺。と。て。一。千。四。百。十。七。丈

駿河風二歌上

十二

三。小。國。に。踏。り。と。て。十
三。州。より。見。ゆる。や。外
交。開。き。さ。り。日。ち。世。り
珍。り。き。大。山。と。て。な。と
ま。や。勢。ハ。然。り。あ。る。寸。

駿河風土歌上

十四

聴^きけや印^{いん}度^どの喜^き馬^ば
拉^ら冬^{ふゆ}。高^{たか}さ二^に千^{せん}八^{はち}百^{ひゃく}丈^{ぢやう}。西^{せい}
墨^{くろ}利^り如^{ごと}洲^{しゅう}の安^{あん}得^{とく}。高^{たか}き
二^に千^{せん}百^{ひゃく}丈^{ぢやう}。何^{なん}れい^りこ^こハ^ハ仲^{ちゆう}
ふ。七^{しち}千^{せん}百^{ひゃく}丈^{ぢやう}。誇^{こほ}るも。只^{ただ}ら
祢^ねとと。千^ち度^た祢^ねら
や。祢^ねとと。有^{あり}功^{こう}卿^{きやう}の
有^{あり}歌^かと。白^{はく}扇^{せん}影^{かげ}を倒^{たふ}
ふ。考^{かう}と吟^{ぎん}志^しやん。丈^{ぢやう}山^{さん}
隠^{いん}士^し乃^{なり}詩^しと。思^{おも}ひそ出^で

仙人
掌上
五英
蓉



香峯
圖
印

新玉笑答。抑靈記

山あり。利河。流るる

以ふ。三大河。印。と名

何る。榮科川。朝夷

山や。青木川。三乃川

馬江居士歌上

十五

運送。便利。と多

其。中。彼。富。士。河

積。下。甲。舟。其

國。の。産。物。製。物。積。八

里。新。澤。と。十八里。

箭。よ。早。と。早。と。早。と。

三。時。程。岩。淵。

急。入。り。利。去。り。

此。便。何。と。冬。不。便。

鹽。積。入。り。高。野。等。

駿河風土歌上

十六

三。筋。乃。纒。上。帝。殿。

乃。建。石。也。俵。石。富。士

水。吊。橋。水。深。一。呼。

早。夕。皆。を。曝。玉。

夕。汗。可。起。集。也。

こゝろひ集をー舟賃ふ。
起る烟を細くとを亦
是自主乃世渡り也。
又安倍川を昔より。送
る。急流を。

駿河風土歌上

一七

霖雨の度、水澄き。
舟を流し橋を墮し。
旅客の患多し。
今迄明治の七の乃
と。この縣下れ一

義人自己乃賃財を費
し。造り出せし橋
梁。其長さ三三間。
幅二間。今より。大
橋。建り今より。大

駿河風土歌上

一八

洪水。何れを。此の
旅の患多し。況や
橋の北南。皆飛り上
る。又。九段。三伏の暑。紀

日也。有祓の幣と風誘
引ふ。奈良乃小川ふあ
と祓其袂原と思ふ
野人沿ち浅畑柏原
水族肥と運者。富

駿河風土歌上

十九

士の根と来と見せむ
宮や浮也と志と系
乃。瀧と名高と也
聞え。諸人墨士の歡ふ
供持利。東海道ハ島

田と利。森枝と部丸
釋。静岡江尻興津由
井。廣原越と吉原
原と沿津よ。十二解。架
渡。と電信機。唐土

駿河風土歌上

二十

乃古言に。空飛鳥ふ
玉章と。雲と云
寓言あり利。おれは子
是と又。と和便。眼
の前。百里乃急を面

次とて開きゆく世に生
まれし人々の中なる
福とて皆昭代の賜也。
社乃教を多しとせし
掛卷とて後より畏る本

駿河風二歌二

世二

花咲耶姫をこそ祭
りて國幣中社淺間
乃社を始りて。縣社
古名とておふ静なる。と
そ志つてお起静機山の。

禁ふ祭り奉る。神部浅
間より名古屋乃社吾
妻なる下つ毛の國に。
官幣社と仰るを強ふ。
東照宮の御影を寫

駿河風二歌二

世二

須久能の社。甚分郷
社許多あり。寺數
後々千餘ヶ寺。中少
淨土の寶蓋院。臨
濟宗に臨濟寺。昔

名高紀開河より。名の
みのとせし。清見寺。三
保の杉原田子。浦風
桑む方より。全國
乃聽。靜岡縣の中央

駿河風土歌二

廿三

ふお利。官負甚多。うら
次。實。如。只。其人。今。何。能
也。古人。と。云。あ。ん。宜。な
新。の。郡。奏。任。官。を。合
冬。事。次。に。列。あ。る。三

等。の。屬。に。史。生。縣。掌
と。判。任。凡。四。十。名。朝。か
夕。なり。急。ら。ぬ。出。納
租。税。庶。務。聽。訟。上。ふ
巡。情。乃。以。官。な。り。か。る。

駿河風土歌二

廿四

下。ふ。不。勤。乃。區。戸。長
な。し。結。情。を。汲。意。成
通。し。冤。枉。愁。苦。無。ら
あ。む。士。族。を。凡。七。十。人
む。う。幕。府。の。世。盛。り。に。

市旗本よ牙兵よ
三百年乃出樂り生
合勢なり川となく
奢侈淫佚乃風俗不
色よる多あり飛鳥川

駿河風土歌二

廿五

昨日の雨も今日の瀬と
愛も果ては行路難
實に山なり以てあり
亦人情乃五雷なり
頃即造化の如き殿

錦衣玉食迷樓閣
身を苦むる基を
少能悟る今冬中ふ
特に辛苦を安んず
農工商を扶けく

駿河風土歌上

廿六

若く乃職業を勵
勉むる中よいの
縣乃黎民半饑多
く洋昨少異他
地風俗と余所の眼より

見ゆ通りぬ。情思
つる然いあらし。凡物
皆順序あり。急を趨り
て躓く。たつて、浮世の
事ひたらぬ。牛の歩けり乃

駿河風土歌上

十一

遅くこそ。八智恵あはら
て心う程。趣く開他ふ
何うされも。容貌より
似て非なる。久冥怪他
とてすくのみ。唯教ふ

類ふ如しとて。文教兩
部の学校あり。日と月と
に熾也。一乃大區の沼
津。是北無墨利加の
何某を雇ひ来りて中

駿河風土歌上

十八

學也。教師と成つて大
區乃。静岡町へ龍動
の。大學免許のマグド
ナルト成屋。やう教へる
洋学校。語學の生徒

冬日盛月至。收跡乃
文字手よ熟し。蟹行
乃書耳よ。魚行。況や
區々の小学校。津浦
の果迄と。漏らひ事

駿河風二歌上

廿九

世々殺者立。り。何焼
延座の兒を。杉木熊
男の童を。福ん。手
通む。単語。篇。勸善
訓蒙。何名史。男。加減

乗除の浮算よ。級式
争はふ。業競。石筆
の鋒磨く。中。中教院
志。川。豆。の。浅間。の。社
内。役。の。建。皇祖

駿河風二歌二

三十

神四柱を。拜殿の中央
新ふみ。奉り。月
六度の祝教に。侃夫
器婦を。論。大
中講義よ。訓導よ。

淺間社中教院之圖



泰山画

祢子^{ねこ}を釋^{あや}氏^しも者^{もの}と
 と。進^{すす}て下^{した}勵^げむ三^{さん}条^{じょう}
 教^{けう}憲^{けん}十一^{じゅういち}兼^{けん}題^{だい}十^{じゅう}七^{しち}
 祝^{しゆ}探^{たん}題^{だい}講^{かう}究^{きう}所^{しよ}也^{なり}。
 鳴^{なり}呼^こ其^{その}六^{ろく}の賽^{さい}加^か茂^し

駿河風土記上

三十二

川^{かわ}の水^{みづ}今^{いま}もむに
 いまもむに。僧^{そう}侶^{りょ}を
 一^{いち}度^ど奮^{ふん}發^{はつ}し。御^ご國^{こく}
 恩^{おん}乃^{なり}其^{その}分^{ぶん}一^{いち}報^{ほう}ひ奉^{ほう}
 る也^{なり}。

白河天皇在天の御
魂之歡未忘路ふらむ。
實ふち難に御代あり
奇利。

駿河風土歌上

駿河風土歌下

群島 平山陳平著

根國中乃產物也。一

の大區を廣く其の
沿津の鮮魚ハ海を

駿河風土歌下

一。或は鰯、鮪、白根、箸。

御厨大豆名を為し。

二乃大區を富士

國年。其國生布也。

柴川海苔。精進川ハ

山葵ハ其の三の大區ハ

具津鯛。伊左布半

切。和田島。八。四乃

大區ハ三保砂糖。

或ハ三穗。海苔甘

駿河風土歌下

諸群島。産物ハ其の

三。五の大區ハ其の

石ハ其の安倍乃製茶

ハ其の全圖

用ハ其の左。束紙有。束

木山葵を産物乃一
つありやうに六七の區
おそ藤枝島田米
まゝ一在五中將の安
いそ人よや詠をる。

駿河風土歌下

三

宇都の山邊の産菜
細ふあまふちを食ふ
製物なり。新製物ハ
静島乃。勸三河よそ
おまゝとす。賤様織を

奥國乃。博覽會ふ名
を得を利。桑ふ業
ち夫木桑。富士乃
桑蚕の新綿ハ高根
の雪れ色よ増はす。

駿河風土歌下

四

詠をるを中項ち。
此業絶て多り。そ。
維新の御代よ従ふ
ひと。民の開化を進む
よ也。再起る養蠶術。

全國競進むた利。

まや歴史を根拠と

す。諸家乃雜誌と

海嶽。硯ふ墨を以

てつぎや。二十年來の

駿河風土歌下

五

沿革を。神よふ述を

は。折は後河の因を。

東海の西郷より。大和瑞

籬宮沖宇。天皇乃

大御代。駿河國の

景行天皇

石古書に見え。纏向

の曰代乃宮に。沖宇

天皇の大御代。曰有武尊。

東夷沖征伐の時。こ乃

國の中央を。帝勢終り

駿河風土歌下

六

叢雲の寶劍拔宇。賊

軍を。外掃ひ終り

より。焼津草薙の名。

今を存せり。其後御

代。乃。天皇國大

天武天皇

造^と志^し事^じ治^ちを志^しの^の強^つひ。
遙^{とほ}く年^{とし}強^つて。飛^と鳥^{とり}の
淨^{きよ}見^み系^{けい}。天^{てん}皇^{わう}の九^く年
よ。後^{のち}河^か國^{こく}を割^わて。何^い
立^た國^{こく}を置^おと見^みえ。

駿河風土歌下

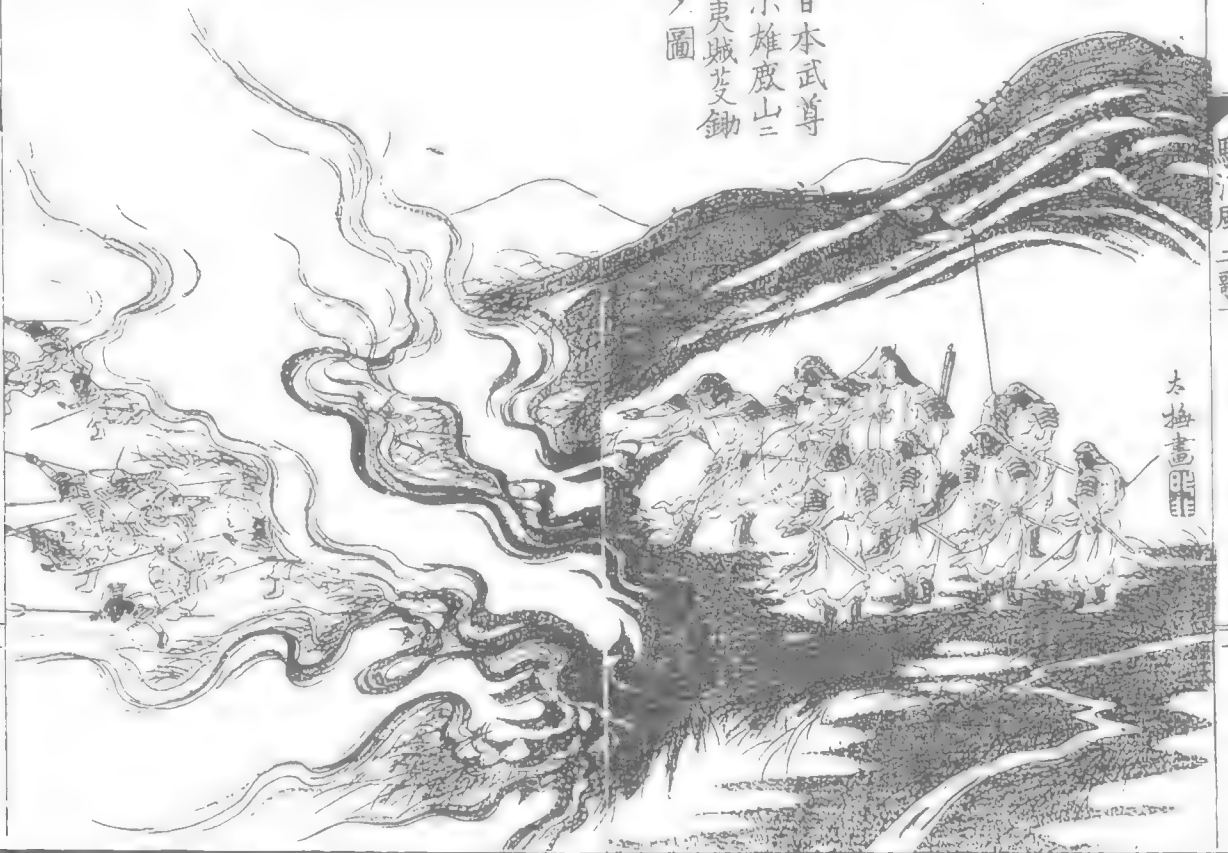
七

嵯^さ峨^あ帝^{みかど}乃^の泚^し代^{しろ}磐^{いわ}
志^し名^な仁^にの十^{じゅう}三^{さん}年
よ。小^この國^{くに}に配^{はい}帝^{みかど}の
新^{あらた}羅^らの夷^{えい}鏖^{あう}板^{ばん}
志^し民^{たみ}弟^{てい}を殺^{ころ}せし

駿河風土歌 下

日本武尊
小雄殿山
夷賊艾鋤
ノ圖

太極畫



駿河風土歌

事何幸。一条天皇
乃永祚元年。前
關白藤原賴忠の卿
薨。時。謚を康
義と賜ひ。駿河とよ

駿河風土歌下

九

封。朝。法。う。と。光
陰。在。再。て。安徳
天皇。幼弱。ふ。存。て。
平清盛。政。を。專。に
治。承。年。中。源

賴朝。伊豆。に。起。關
左。の。國。を。伐。恒。て。
威。を。鎌。倉。に。震。ひ
て。是。清。盛。是。を
伐。每。と。す。雖。盛

駿河風土歌下

十

忠。度。知。度。と。数
乃。軍。勢。引。率。
さ。の。富。士。川。に。陣
取。り。て。水。禽。乃。羽
音。を。驚。き。多。う。と。て

たゞ敗軍一軍。笑を
後せり。留免あり。利。
幾移となく平氏
滅び。後鳥羽天皇
の建久四年。頼朝

駿河風土歌下

二二

たゞ乃富士に根り
狩勢の時。曾我兄弟
乃仇おあり。今も口
碑に傳へる。故東
郡愛鷹山。像を

之名をも。留免む。武
名も青史に赫し。り。
二代將軍頼家乃時。
其倚臣梶原景時。
西國より奔りて。事。

駿河風土歌下

十二

北國を過る。時。豪族
吉香某。多忍ふ。孤
崎。今討つ。る。其水
の何。男。知。れ。と。と。
景時。馬蹄の跡とて。

今^{いま}山^{さん}原^{げん}上^{じやう}殘^{ざん}り^し利^り。
未^{いま}の項^{かう}より^しち^し頼^{らい}家^か乃^{なり}
叔^{しやく}父^ふ阿^あ野^の法^{はふ}橋^{きやう}全^{ぜん}成^{せう}
當^{とう}國^{こく}より^しあり。土^{つち}御^み門^{もん}
天^{てん}皇^{かう}の建^{けん}仁^に三^{さん}年^{ねん}。故^{ゆゑ}

駿河風土歌下

十三

あ^あ理^りて^し誅^{しゆ}せり^し外^{がい}に^し
子^こ何^{なん}聖^{せい}冠^{かん}者^{しや}時^{とき}元^{げん}は^し
國^{こく}上^{じやう}住^す居^ぐより^し。錄^{ろく}倉^{そう}
三^{さん}世^せ滅^{めつ}亡^{かう}乃^{なり}時^{とき}おの^のま^ま
源^{げん}氏^しの嫡^{しやく}流^{りゆう}なり^し。

實^{じつ}朝^{ちやう}の後^{のち}を^し証^{しやう}衣^い令^{れい}で。
北^{きた}条^{じやう}義^ぎ時^{とき}上^{じやう}滅^{めつ}不^ふた^た敷^{しき}。
う^うて^し世^せ運^{えん}令^{れい}傾^{かう}き^き。
御^み裳^{しやう}川^{かう}乃^{なり}流^{りゆう}を^し去^さへ^し
有^あり^しる^し無^むき^きう^うふ^ふ衰^{せう}つて^し。

駿河風土歌上

二四

倍^{ばい}臣^{しん}國^{こく}命^{めい}成^{せい}取^とり^し
時^{とき}是^し。三^{さん}浦^ぷ乃^{なり}家^か部^ぶ
此^{こゝ}國^{こく}の司^{つかさど}たり^し。其^{その}子^こ
若^{ごと}狭^さ身^{しん}泰^{たい}村^{むら}。北^{きた}条^{じやう}
時^{とき}頼^{らい}に^し滅^{めつ}不^ふた^た敷^{しき}。

後醍醐天皇中興
志す。功臣を賞し。臨
幸時。賜屋敷。東に佐
義助を。駿河の守護
職に任ぜらる。天曰

駿河風土歌下

十五

婦人ふ分所を。是
北朝の指揮とす。是
今川貞世八道了俊
此國を守護せし。是
足利家乃七頭なる。

武者頭の一人とす。其
養子仲妹を。教諭せ
し。誓紙乃素く。今を
梓ふ。ちりて免て。児童
の身に熟し。嗚呼

駿河風土歌下

十六

悲し。起る。其子孫。先
其教を忘却す。文道
を。皆失ふ。父義
元を驕寵。乃めく。子の
氏真ハ。豚ふ。似し。

正親町^{たかしはら}天皇^{てんかう}乃^{なり}永祿^{えいりく}の

三つ^{さん}つと^{つと}り。五月^{ごがつ}十九日^{じゅうくにち}乃^{なり}

才^{さい}と^と也^や。尾張^{おわ}國^{のくに}桶^{おけ}

狭間^{さつま}の戦^{いくさ}ふ。織田^{おだ}信長^{のぶちやう}

了^{りやう}不意^{ふい}を^を成^{なり}す。総大將^{そうだいしやう}

駿河風土歌下

十六

義元^{ぎげん}者^{もの}。毛利^{もうり}秀高^{ひでたか}ふ

事^{こと}を^を成^{なり}す。世臣^{よじん}宿^{しゆく}

將^{しやう}戦^{いくさ}犯^{はん}多^{おほ}く。大敗^{たいばい}績^{せき}

者^{もの}。家元^{けげん}の首^{くび}を^を織^お

田^で家^けへ^へ大集^{たいしふ}取^{とり}り。歎^{うしみ}

者^{もの}。志^し川^{がわ}様^{さま}の大龍^{のだいりゆう}

山^{さん}臨^{りん}濟^{さい}寺^{てら}へ^へ葬^{もよう}り。一

う^う然^{ぜん}今^{いま}も^も猶^{なほ}。毎^{まい}年^{ねん}五

月^{げつ}乃^{なり}今^{いま}別^{わか}忘^{わす}。國^{くに}の^の司^{つかさど}を

降^{くだ}り^り。如^{ごと}く^く也^や。か^かと^とて^てを

駿河風土歌下

十六

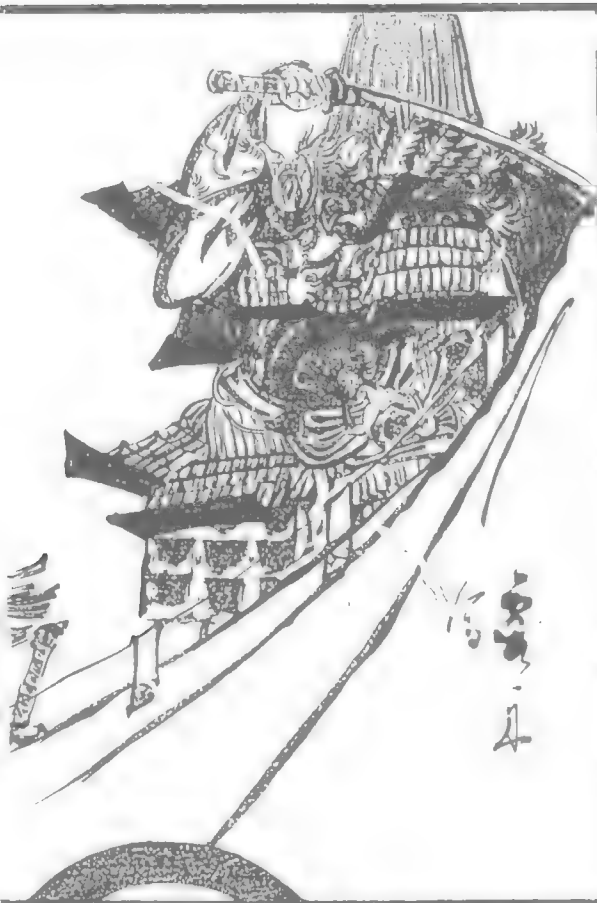
子^こ乃^{なり}氏^し志^し者^{もの}。父^{ちち}の^の仇^{あだ}

討^うむ^むと^とを^を誓^{ちか}ひ^ひ。父^{ちち}月

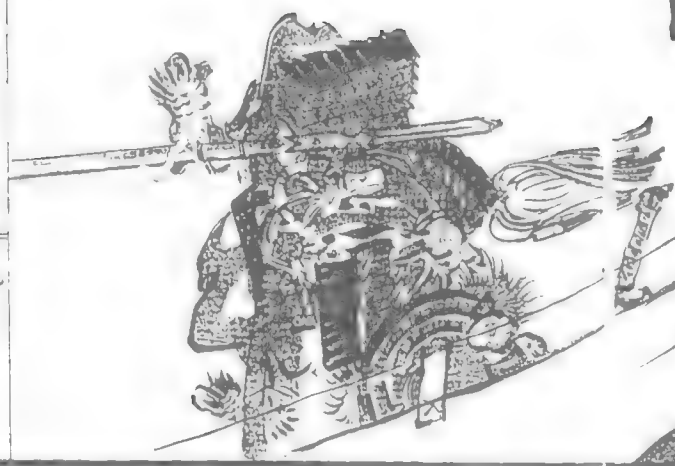
来^{きた}と^とを^を盆^{ぼん}踊^{おど}。飲^のみ^み也^や

歌^{うた}へ^へ也^や。一^{ひと}寸^{すん}先^{せん}者^{もの}。言^いふ^ふ

夢^{ゆめ}の^の世^よ也^や。三^{さん}年^{ねん}の^の夢^{ゆめ}。



今川義元
桶狭殊死
戦之圖



五月

覺て甲斐なり甲斐の
 領主。武田信玄より攻
 撃せり。其身を相撲ふ
 食客。名家。思諸減ひ
 たり。後を

模の北条氏政と甲斐
 武田信玄と。富士
 川東西の地を争ひ
 下。沖津。蒲原。薩埵
 山。合戦。中。あらし

水多。強壯者疲乏。老
弱ハ死ス。實リ世の中
小戦争程。天理リ背
く物あり。天正元
年夏四月。武田信玄

駿河風土歌下

七二

病年一。其子勝頼家
を継。遂政暴飲氏若
志む。織田公亦其を
討。其年。同公十年
春二月。三道。甲

州へ進撃。背リ。三河
乃領。徳川公。先此
國を従之。小河内
路。利甲州の。万澤口
へ討入。り。その。此徳

駿河風土歌下

七三

川上。當國。舊縁
あ。榮。む。今川義元
乃。滅。ち。り。時。竹。代。丸
小。年。七。歳。なり。十
質。と。て。其。國。り。十

年餘もの星霜を送る
跡多し大龍山に
手接乃林あり手習
し。硯文庫に殘字

駿河風土歌下

廿三

去る程に武田
滅び。此國を織田
公より。徳川公の終
り。此國を以神
相摸する。北条氏を

討滅し。東照宮を關
東に移封留し。時此
國を中於式部一氏
に定行し。乃藩國
多し。慶長五年秋九

駿河風土歌下

廿四

月。關の原乃役了り。
此國再徳川氏の。
領地と成り。東照宮
に。終焉の地となり。
あり。後水尾天皇

寛永二年春正月。
三代將軍大猷公の弟
なり。高松忠長を。此
國に封ぜり。駿河
大納言より。幾

駿河風二歌下

廿五

程をたし。衆衆を
上野國高崎へ追放
す。此國長を征夷
府の直隸と成さす。
うす。慶安四つより。

江戸の城下を繕う。
謀叛を起し。事成
らば。その所を屠
す。賊由井乃
正雪。由井の里を賈

駿河風二歌下

廿六

人乃。ふり。有り。あり。理
寺町。正雪。郎乃
名を。子。ま。友の交
率。承。他の國。も。是
絶。無。紀。政。情。吟。や

呼ふ舞所を。西雪晴
吟と名つゝあり。も。実ふ
陰悲乃報ひなる。了。
其後國より干戈は
事なく。府中の番士

駿河風土歌下

十二

三十人。兵力二十騎
同心百人。幕府諸第
乃牙兵の中を。城代
一名命せし。此三府の
加番よ。城番よ。百日

監察より町奉行代
くよ守衛を。星
霜爰より二百年。佚
の民を期せし。了。著
るを常々習ひたる。

駿河風土歌下

十三

終より柔情回復乃。
風俗を亦少く。以。
去る程ふ
今上の御代。初め。次。
明治改元。乃と。

赫怒東征去時。人民草食壹漿。王師を迎へ奉る。志を。介冑狼籍乃中ふありて。この城下

駿河風二歌

廿九

を浪風動つ。次。舊縁。あ利と聞かぬ。徳川三位中将ふ。再此地を賜ふ。數萬の士族お寄る。後

河の國に白波を。靜。密藩と一變。再。變。縣少成。故領主を東京華族。士族を移す。出仕

駿河風土歌

三

志。登庸せらる。者多し。御代も靜。靜岡乃。人の心を。梅の山に。生。出。人。出



静岡新築宗

東時操

うむらひ子。

品塘系池基書

駿河風土歌下

三十二

駿河風土歌下

小松	白木	伊勢	高竹	稻	片柳	田	三	稻	山
西屋	屋	勢屋	丹	岡	野原	中	家	田	中
又	好	太	禎	佐	喜	治	村	佐	市
三	三	右	十		兵	兵	佐	兵	兵
郎	郎	衛	郎	橘	郎	衛	平	衛	衛

成島柳北 撰

柳橋新誌

明治七年（一八七四）東京府奎章閣刻本

據明治七年（一八七四）

東京府奎章閣刻本影印

行刻月四年四廿百九千二元紀

成島柳北戲著

柳橋新誌

東京

奎章閣發兌

柳橋新誌
初編

嚮者何有仙史見示此卷愛而讀之茫
乎不知解也自以為余遊履未遍之由
恬不為怪既而墨蛇之花二州之月綾
瀨之風真乳之雪船必聘妓櫻掬喚酒
者殆將七八年矣於是乎以為粗得箇
中趣矣而再閱之茫乎如初恍然自失
於戲仙史其仙乎何其才之浩博也遺
其文之奇幻無窮致人于五里霧中而
不見津涯也抑凡骨如余果不可窺真
俾境耶浩歎久之仍恐後人之復迷津
筏也贈以一言曰不具仙骨勿讀此卷
己巳年己巳月己巳日己巳時伴鷗
醉漁書

柳橋新誌

序

柳橋新誌序

往日有靜軒居士者著江戶繁昌記備摸八百八街之景狀勝場劇區無所不載無所不說其文極詠諷而其事則明詳使讀者卧知其地之所有雖有諸熟聞都風俗之人亦不能附益一事也然其距今過二十年物換俗移地之熱鬧冷索相變者不為少矣往時新地深川之妓院綺羅為業者今乃索然無踪神明芳坊之變童肆與娼樓相抗者亦寥乎其影其他各處之繁華日衰月瘠能及古者鮮矣若芳原品川亦比當日所說則減五六分嗚呼使居士觀方今之柳橋新誌

自序

狀乃將愕然而驚慨然而嘆不知其人尚存否然此大都之繁華奚其可掃地而盡矣微千古而盛衰今者亦有焉柳橋是也柳橋何因而然因深川之廢也凡物太盛而頓衰者靡不復興矣譬諸將家猶新田氏歟乃今之柳橋亦深川之死灰再燃者而其盛殆踵其舊云噫今而不記其盛乃亦過五年十年安知凋零不如今日余也狂愚一書生凹硯秃筆僅糊其口者無居士之才無居士之學加之赤貧如洗未曾一日遊其境而驗其實焉足記之然喜聞蕩子之說話觀市街之圖冊得窺其繁畧遂偷一夕之閑而記

文之鄙俚事之猥褻使正人君子讀之乃將唾而棄焉然正人君子所能記者固不俟余記之正人君子所不能記者而余輩所當記也蓋記余所知者耳所不知者亦將有狂愚若余者而附益焉
安政屠維協洽之歲早梅將綻之月何有仙史書於鎖春樓之南軒

柳橋新誌

自序

柳橋新誌初編

藤野涼

橋以柳為名而不植一株之柳舊地誌云以其在柳原之末命焉而橋之東南有一橋脩有老柳一樹人呼為故柳橋或云其橋有柳則往昔之柳橋而今之柳橋則後架而奪其名者其說與地誌齟齬焉按故柳橋之正稱曰難波橋而知者少矣彼此錯考則地誌之說似當夫柳橋之地乃神田川之咽喉也而與兩國橋相距僅數十步故江都舟楫之利以斯地為第一而遊舫飛舸為最多矣其南赴日本橋八町渠芝柳青芥菰

初編

浦品川者北向淺草千住墨陀橋場者東則本所深川柳馬道千戶之來往西則下谷本鄉牛籠番街之出入皆無不過此者而遊五街娼肆觀三場演劇及探花泛月納涼賞雪之客亦皆取水路于此故船商之戶舟子之口星羅雲屯非他境所及而釣蝦網舸之徒亦居其間橋之東西連兩國橋之南生各戶之舟舫舳艫相銜楫櫂相擊其數不知幾千艘而盛夏之候遊客藥至搖搖泛去日夕不見一葉楊片可謂盛矣至若酒樓之莊麗覺瓦相映茶肆之繁而蕨蕨瓦甍店芬香襲鼻屠豚舖鮮血汚屨餅店之餅

可也過黃河之水果舖之果可以彈盡齊圓之禽鮮舖如舖曰何曰何所欲無不得飽者而朝所具者暮則乾乾賣盡焉飲食之客來于此者其夥可知也而斯地之繁華超于往日者則非此而在彼彼者何曰歌妓也江都歌妓之多而佳者以斯地為冠芳原品川固皆貯歌妓然以娼為主妓則為之役耳對街亦為觀客設而非專重之竟所以不能及此也其他若新橋芳坊鞠坊仲街松井街者僅比斯地十之二三而已蓋柳橋之妓其粧飾淡而有趣其意氣爽而不媚世俗所謂飲神田山水江戶兒之氣象者而存

初編

柳橋新誌
深川餘風也起乘于他方亦以是非耶聞十年前其貧不甚多近歲月增日滋或三十或五十今茲春夏之際則至一百三四十名土人云未曾有之盛也而酒樓朝招船舖夕邀至熱鬧之日無一人空手在家者蓋妓之售技一歲內以二三五六七之月為最正四八次之而聲譽頗噪者雖三冬寥索之時亦不曠一日云夫都下當今之習士也商也皆自訴曰貧矣困矣不知有何人能達斯地而使為如此之盛耶告子有言曰食色性也斯地富斯二者宜哉客之源源而來昏昏而耽焉夫子嘗稱於水曰水哉水哉易云

舟楫之利以濟不通斯地亦富斯二者宜哉客之來耽者亦稱嘆於此而不通之人亦欲得為通矣豈不盛乎

船商之家俗稱曰船宿船宿之住斯地者分于四區一則在橋之東岸及南路者曰丹波曰上總曰日野曰伊豆曰升田曰中村曰尾本曰吉川曰藤本曰飯村曰若竹曰新上總曰山田曰竹屋謂之柳橋表街則在橋之西岸者曰信濃曰岩玉曰三浦曰相模曰福吉曰新若竹謂之柳橋裏岸一則在橋之東南米澤街者曰福吉三浦橋廐相模長島謂之米澤表

柳橋新誌

初編

三一

街一則在其南故柳橋之側者曰伊勢鈴木海老芳野枯梗二見尾張柏屋謂之米澤裏岸又稱故柳橋岸此四區土俗稱曰四岸合三十三戶傳稱米澤街之地往昔有津今之船宿皆當時獲津者繼業耳年而松吉大黒二家近歲產傾而去始欠舊負而柳橋裏岸之福吉則代松吉開業以四岸之相結也如親戚然患難相援吉凶相問若二岸有爭二岸解之岸有曲三岸讓之故舟子為第一岸通之者三岸亦拒之而若橋北之藤岡八幡相屋者不與其盟也船宿之為家有貧富令熱之異而大抵伯仲家必有

樓樓有門外小者外樓耳家人皆棲止於下迎客于

樓其畜舟于上食四五人下食一二人皆繫屋船猶

牙二三艘而有七家造舟託諸船宿者謂之郎船其

繩梯係鐵以為識各建其家章幟得着紙障如官船

便而有威故船宿自造而假士名者亦有焉遊舫之

最大者俗謂之屋形稍小者謂之汁翻各編其名曰

某次是則非其定業家不能造也若小松屋之小出

丸明石屋之岩戸丸者大都內僅有七艘耳夫遊者

尚酒落與便利者觀月納涼載妓儺西一屋船而足

矣何須屋形之徒莊大而太迂緩乎彼則充農粉艇

柳橋新誌

初編

四

腰之妃嬪逍遙于水上之用供佞佛媚僧之翁媼修施銀兩講之役耳但輕舸則夜闌意急疾赴三谷壽之客可以極街與之脚者任所則暮春潮退傍船于品江之日亦可以扶屋船之役者共不可廢也船宿各家執其家政應接賓客者其妻也世俗所謂女天下者余亦目為女將軍女將軍每家伶俐口給無有一樓過者蓋擇之非將習而熟耶主翁乃日外出叫盧喝棗或曉促講落語若有爭鬭走而解說之否則坐睡于茶爐錢匣之間耳客之來船宿者其趣不一有事而竹舟者有焉乘而遊娼郭劇場者有焉假而

恭者博者賭者話者有焉招妓呼酒者有焉而船宿所貴者則妓客而已夫屋船之價雖係水路遠邇而不出三四銖上指牙閃牙而飛荷足窮足而行僅是四五百錢而止雖日出數艘亦不足以為有贏況恭博賭話之防火丁伍長爺僅投其席價茶錢去者乎故所以妓客為貴也貴中之貴稱曰米櫃以能使其家飽饜耶余恐身為船宿米櫃之人自己家中之米櫃不久乾乾空了名則船宿而其實以妓為業有許客與妓偕宿者呼之謂妓宿亦可聞深川之盛也船宿誘客與芳原稱引手茶屋者同致而此則傳其風

柳橋新誌

初編

而計出其右者也客至女將軍趨而邀之口巧眼捷直省收了其食富與慧愚富與愚是彼之所欲也何也慧則難欺貧則少利至愚而鉅富是真奇貨可居者即時遣人酒肆送來酒散數頃列酒頻沸女將侍杯約話一話笑一笑曰頃日新妓揭名幾個某艷色某絕技請試一招嬌舌銜花滑唇說春客心醉不能不領焉若舊識客有狎妓者來則招之不待其領也妓至開障必唱請恕二字就席必唱今夕奉酬四字先拜客次拜女將既而妍臉獻媚嬌妓表情女將在傍使舵于其間柳楊鼓舞其妙不可口可謂不愧其

業矣客現飛神揚不知手之舞之足之蹈之遂探懷拋金于妓及女將若干而後絃益添嬌枕益加妙若豪客則併妓之從者家之姬婢皆受其纏頭客與妓相識不持絃歌酒肉上者則女將為之解也如此者則五節一季為妓有贈而船宿亦必受賜有力者則若天王祭姪子祭之時亦衣于妓席于船宿是所謂米櫃官家者蓋一船宿而才有一人耳其他勸客舟行伴妓則大也上卯也皆於平常船價之外固利亦多矣之妓之散酒樓船宿招者得其身價于客一方金而千百錢為謝二方而四百三方而六百船宿取

柳橋新誌

初編

看一河四者亦一鉢而獲三百錢許其既獲諸客復獲諸妓復獲諸酒有其利幾許耶所以獲之者則一女將三寸滑舌鋒耳余聞諸浮屠氏曰叫喚地獄有熱鐵鉗能拔取詐人之舌未知果能拔得他滑舌麼又聞世有已姬能揮離刀所敵將于萬人中未知姬之刀及能敵他舌鋒麼中庸云白及可蹈也嗚呼姬之刀及雖鉗余能蹈之若他舌鋒則一踰卽脚滑臂痺骨亦脫氣亦呆軟軟癱瘓與海鼠一般可畏矣哉酒店隔三里腐店距二里此是茂村僻邑之人家當今大都內陋巷小衢猶十步一店百步一樓松江之

鹽杭州之酒可坐而食飲况繁華如斯地者乎酒樓
之夥亦冠于都下曰川長曰萬八在橋之北曰梅川
曰龜清曰河內曰柳屋在橋之南平三也深川也草
加也皆張帘于米澤街之側而柏屋中刺青柳三樓
亦丈八闊水耳其他若九竹若松和泉佐小松亭小
店子肆指不暇僂也就中酒有最佳者川長也柏屋
次之萬八河內中村等家則俗稱貨店者而為石軍
道子之書畫會陶朱猗頓之醪金會及歌舞拂花之
師開筆試技者假以排筵募衆也聞唐代藩士始來
于都者必先飲於梅川若青柳云以其名橋世已久

柳橋新誌

初編

欸然。每青二戶近時漸冷而酒香有味。然不飲及
 清之徒矣。鮮鋪則有安宅與兵中川。饒肆則有王甚
 山口舟泊客若一泊手則珍羞芳餌。要乎而陳。凡酒
 樓各家晨起。使店丁赴日本橋而買魚。歸而邀客。客
 不知而夙至。乃解曰。河岸未歸矣。故客之未始于已
 牌。有士有商有豪農有良工。醫生。數頭。西瓜堆。席宮
 姓一團石曰登梯。長劍橫側。藹肩。而飲者。四海
 新來之藩士也。占閑室。狐貍。鼠。顧而食者。東山。持戒
 之僧侶也。各樓饗客。其法一也。先供茶菓。而酒羹疊
 膾也。炙魚也。以大陳之。陶甌羹為殷飯。則任客之食

不食焉雖有旨美粗惡之異一口之價最下而一鉢上而四鉢耳夏月客至酒前不浴不快故設浴室皆雅潔不若泔堂罵而撒也為客製浴衣各熱其衣章若名浴衣而飲爽涼可膚而可以曝衣襦之汗蓋浴室最佳者柏屋也且四時沸湯風雪之日可以融凍醺醺之夕可以解醒非若他樓唯為炎燄設焉其既浴矣又既飲矣不可以莫妓招妓于酒樓與船宿同致但至留客宿妓之計則無有焉余聞諸一友人梅龜二樓畧有船宿之風蓋主人為不知而使婢為其媒其或然要不如船宿便而密也酒樓之法客携妓

抑揚新誌

初編

而求則為妓設其饌所就我家而招者則不設焉而妓在酒樓不敢醉飽用意謹飭接其主妾及群婢勞於接客否則曰彼兒驕矣彼婆姿矣目以賢婦朝以機客主議口評鼻為牛為馬而不敢復招雖自知已客來命之或答以不在焉故妓往往請客拋婢以一千金如然則敬其客而親其妓昨譏為牛馬者今乃如姊妹主婆面前稱其慧他客席上亦託其美嗚呼人情翻覆唯金而已金也能變化為慧化醜為美故聖人託易曰乾為金又曰乾道變化妙哉其取象也金之利用大矣哉夫士而有祿商而有業豈莫可食

之可飲之酒乎而故就市樓費金于酒食又費于妓又費于婢其費可知也其食所嗜可矣其溺所愛猶可而耽酒之情遂至以其所愛及其所不愛者也可笑而已雖然這般可笑之事亦非余輩赤貧書生所得為也五軻氏之言曰食前方丈侍妾數百人吾得志那為也軻也道不行矣言不聽矣縱令欲得此樂而不能也故有斯言耳若使軻也實得其地則安知其喜而不寐耶若夫余亦得為這可笑之事則將何樂哉雖躍至死不悔矣暇惠他人可笑乎而今援毫費紙記人之可笑亦是出於囊橐題聲隣已羨人之

柳橋新誌

初編

情耳是亦可笑是亦可笑

均是娼妓也賣色而不賣藝者俗呼謂女郎賣藝而不賣色者呼謂藝者往時深川之妓則鬻之以二通證書而許兼賣色藝者也謂之女郎藝者而可柳橋之妓賣藝者也非女郎也而往往賣色者有焉何也以有深川遺風然耶而深川則公賣焉此則私賣焉公者常而易為私者變而難為是其所以不同也凡人嫖女郎也可以與賄招藝者也可以聽其技而不可與賄矣而與其不可賄之人賄使賣其不敢賣之色謂之轉焉按以使他轉移其定業若轉了蹄伏不

動之石也或云轉推倒之意謂屹然執節者失所守而仆也未知孰當俟考證儒家之定說矣夫轉妓也似易而難似難而易何也彼所不敢賣而我使之賣焉犯公禁而為私姦其難一也我悅彼之容技則彼亦釋男子之才貌與女郎不論客之美惡而勉侍牀第者異矣其難二也彼所不肯則我不得強成事強之即去人家主翁於其婢亦然況水中浮萍無所適依者乎其難三也善哉俳歌者有句云萍花今日閑他岸乃可以證是所謂似易而難者也彼亦人也豈無情哉我以情而遇以情而說彼不能不動矣其易

柳橋新誌

初編

一也彼皆長于嬌絲淫哇之間慣於風月烟花之遊

與人家孃子深嚴自守者不同其易二也當入宵窺間無男無女所好所欲者唯黃金而已一事一物縱之則金衡之亦金金而不吝則除却王右軍婦二流之外何等女子有不到手者哉況貧窶鬻身如彼輩者乎其易三也川柳家之詞云守宮課效佐渡環守官俗為媚藥者佐渡環謂金也亦可以證是謂似難而易者也知此三難三易之理者始可與語轉妓之法已矣然徒知其理諳其法而無其具則亦難能為焉轉妓之具有三曰才曰貌曰金而金為重矣其

徒有才貌而無金則計難得而施譬猶無器械而戰必不克焉然有金而無貌則彼愛金而轉也非愛我也金在則親金盡則離譬猶釣魚人餌竭魚即散焉有金而無才則亦詐偽百出貪憚萬方我惜之焉而不知唯欲充其意不久而則盡產傾而已譬猶燒爇片烟者甘其味不覺其毒遂以弊焉故曰三具不備則雖知其理暗其法亦難為焉若夫魚有此三具而能悟得三難三易者則當使柳橋一百餘名妓駢枕繼死而已何啻一轉再轉也哉可謂風流壇上之飛將軍紅粉黑髮之活佛矣此是世間不多有之人請

柳橋新笑

初編

評其欠有金與才者雖無貌亦足以為一大快焉有金與貌者雖無才亦可以得彼愛而為貴客焉無金與才而有貌者無金與貌而有才者並是下等不可為者也試觀一皆才者猶可為也貌者不可為也何也曰貌死物也才活物也死物不能變而活物能變焉夫無器械而戰其敗必矣雖然陳涉之徒鋤耰棘矜起于草莽一朝打破強秦三十六郡清大祖僅以遺甲十二副興于北轍竟奪據支那四百餘州豈非應變而動觀時而發遂成其志耶善哉子輿氏之言口可使制挺以撻秦楚之堅甲利兵矣其如此則

雖無器械亦可以為為矣若夫遊客囊底二三銖金亦猶清祖之遺甲陳涉之棘矜也若能應變觀時而謀其功則焉知此々在金錢使彼妓不取訖虛誕八百話而誠意奉承一時轉來下侍如深草中將九十九夜往而挑之也哉而後益磨我才鏗鏘我舌鋒使彼所覆于外者以棒送於我則我益械亦可以入焉焉是謂之成功其如此則與彼打破三十六郡奪據四百餘州其事雖有大異而其趣則一也嗚之謂哉將亦可矣命之謂活佛亦可矣是無他特以其才耳故曰無金與貌而有才者猶可為也蓋此等討論為

柳橋新笑

初編

有名技者發之耳及觀々折腰妓則一舉手而腰轉詭秘何有一講理說法乎哉嗚呼客之招妓者太多矣有聽技者有耀豪者有為勸酒者有為贊人者何必人人樂其轉者已矣哉而今又覆論說之者則非誣誣誘誘之愈也蓋柳橋所以致今日之盛者即是傾轉之一字耳矣故記其盛則轉之論說不能不審也讀者莫朝而可矣人有長幼之序則妓有大小之別大妓即藝者而小妓俗呼謂御酌以其不彈三絃徒侍御杯杓也大妓之定價晝夜八銖若自辰及子乃或加四銖漏刻

開招之亦四銖小妓則其半也謂之半妓亦可客於
定價外有投謂之花花之為言華也謂華其楚也花
亦大抵四銖于大妓二銖于小妓衣服之制亦有別
大妓曳衣于地左手提其衽行謂之左衽其帶全帛
俗稱金帶者初衣白其襟小妓則束于腰而不曳
帶之面背異其帛謂之合肚帶即束其襟人妓所
職歌舞也其技有長嘔有富本有常態率而清之居
多而宴席上所彈者止于短哇新詞小妓唯有善彈
者不許其彈以儻奪大妓之業也故皆學舞凡小妓
不論年齒之先後必飾事大妓而大妓於船宿女將

柳橋新誌

初編

亦必以姊稱之蓋酒席上大妓彈而小妓舞可以備
觀也而小妓之舞大妓之彈有巧有拙不可一同視
也蓋十個中巧者三拙者七美者多拙醜者多巧醜
者以手謀沽故專攻之美者以面謀沽故疎于手容
亦取面者七而取手者三故拙者多利巧者以利而
有技色共下而亦能沽者可謂奇矣余嘗質于友人
以此奇曰聘妓以技與色耳若而失之則何所取不
若在家弄婢子不須費財友人咄曰吾子知其一未
知其二者繁華都內遊客幾許而人心各異有悅其
色有賞其技有愛其氣有好其風者色與技固所重

也而妓之喜伴俠而不吝其財重然諾而不辱其人
者蓋至嬌媚女所不夢視也姿容深而粧飾淺進退
動止不失其地言辭應對不曠其時則亦非妾婢所
企及者是妓所獨有而他人無得而法者也容技兩
空者之沽以此非耶余聞此編宿疑頗釋而復生
一疑曰藝者而無藝者猶有所取然世之濫者也既
者也亦是着者字之人儒而不知四千六經為何道
匠而不解素問靈樞為何方者亦往往有焉此二者
與藝者而無藝者一般足亦有所取耶尋思推究忽
焉拍髀曰無有焉無有焉不須復質諸人也大修身

柳橋新誌

初編

齊東之講若無所用則不如彼短哇新詞以悅人耳
兵補陽調陰之匙若不辨其治則不如彼鼓與勸解
之象撥兵可笑而已吁嗟濟世播教之士司命救大
之人而却有愧于婀娜纖弱之女可勝哀哉聞藝時
之妓往往巧者技有次拙者技有善其歌調甚者
有以脚為舞以唇為舞者若拙戰則無一人之不巧
今乃否僅撫絃耳拙戰亦皆極拙至有不全解者
而近歲拳戲若藤八來求三拍之手亦無不可抗對
者云噫儒之於文章詩賦匠之於鍼灸物產亦皆無
及古者就彼論此寔使人淚哉一哀一笑又一淚而

記之則非以罵人亦以自罵耳矣

橋之南右折為同朋街乃妓之巢穴其北而裏岸南而廣巷橫比而居街居有表裏熟者居表冷者居裏其為家貧富有差然不大異其趣外捨格于戶內安方火桶榻絮無塵鐵瓶攸簾鐵瓶簾暖暖鴿鴿妓在榻間於倦畫眠大抵妓皆驕人而肯斷不為女工調紋妝脂粉之餘不為一事生至拜祀神佛乃皆勸為作棚設神位有金毘羅有帝釋大有不動尊隨其禱而異棚上必安一尊金毘羅而繫小繩於其傍柱貼紙縛之畢而下蓋客所纏頭挿諸帶歸而

神橋者記

初編

十五

裸其食沽其紙以縛之也謂如此則能招其伴其意蓋誇人以能售耳妓之事佛者倍於事神必主其宗祖而妓家十之九則日蓮宗中崇敬之牢固比常人贏一着蓋自己平素所為詐誑貪婪罪業甚重故欲假祖師之力死後不墮地獄而已余謂彼身即地獄別有地獄乎彼雖為日蓮宗而其魔方幻術雖耶蘇宗不能及也凡妓家有父者十之一有夫者百之一大騷妓與母二人而居猶若獨兒養一併三口而妓善私媚母路而衣猶也獨也必道母子皆吾族何獨獸視我也入獸之穴與獸狎者謂之獸亦可而為獸

者亦多哉客至老路急呼酒般談笑呈諛或貧客之服飾態度或說兒之戀々瞻望雜以家之窮乏喃喃々興熟酒固乃促客上樓而眺樓則囁于粧飾之處僉具伍列若無樓家太虧便及客欲醉時老路稱有事而出避之云蓋狎客在家則雖有他樓之招辭以應若不在余友愛篁子嘗語余曰就妓家而酒勝他家酒肆之多費多眼然亦有所不足妓貧可忍而妾貧不可忍況有妾而帶妬者是豈可怖者然不可一概論妓之引客於家有利其財謀探即無宿而逞已欲者有愛其人欲不令徒失資於無宿而永結

柳橋新記

初編

好者而妓宅之遊比諸他樓費少而事密情密而文久矣可謂佳策故妓亦非洞察其人之身一忘內則不引焉而妾亦有貧不貪猾不猾之異豈可繫視乎貪猾者多假母也否者必生母也而假多而真少何也使母見侍人杯杓承其顏色甚則使之與娼婦同業寔所不忍非貧窶無為者不為也夫少父而為娼妓者老而不能守家事夫故又買貧人之男使為吾舊業者有焉其他買女為妓以為生者甚多是以假多於真也假母之於客也禽視之以女為賄務謀有獲真母之於客也或睥視之至徇情而遺利故

假者謂真者否，二者之得失亦大矣。蓋斯地異花，
猶固其質女子，以售，故假者亦公言。兒為食，樂薄，
酒家利酌人，一家畜數人，皆以姊妹稱。或異家稱，
云大妓之年紀自十七八至三十小妓則十三至
二十，而自稱其齡常縮二三歲，甚者七八人，皆縮
不知帶下，蒙茸芳草一摩，而判春色，漸開，頗淪淪，
微波雖，覺秋風暗起，可一莞耳。假妓之買女子為
妓也，自幼養之，則其價低，其期久，仍教之歌舞，
之衣服，至成立，則可以擅利也。其伎藝累熟，而年紀
恰好者，則非一三十金，而限一二歲，乃不能得，為或
柳喬新誌 初編

半價買之，為母與妓中分其利，者謂之敲。今如此者，
鴉母客之妓亦不母事之也。凡客贖妓而為妻者，
妾者其價從其姿色技藝與冷熱而折，惟多而一百
金寡而二十圓至，權貴富豪不論其計，而假妓貪
財無厭，其妓否以情故也。曼翁板橋雜記云：親妓
則取費不多，假妓則勒索高價，人情無東西可知矣。
親妓或例其衣服器物亦送之，至義妓則利其皮裸
而沽之，故真猶可愛而假可最惡也。況乎假者不知
其誰氏女之兒耶？抑王侯之種耶？贖之為妻妾
何等意思，傳云：買妾不知其姓，則卜之，噫彼徒果能

卜之，與齊戒沐浴，卜諸家廟，則禮也。懷二十四錢走
問，柳原嚴君平亦卜也。余嘗見一卜者為人筮贖妓，
遇蒙䷃之蠱䷑曰：勿用。取女見金夫，不有躬，死攸利。
此其不久而奔乎？蒙昧而不明也。蠱壞而有事也不
明，以信其欺壞，則生變。況此女唯利是視，豈能守家
以終乎？余從傍問曰：此女子其種貴賤如何？卜者曰：
以為馬，巽為臭，艮為毀折，不知個是那處臭馬骨，以
項曰：口以山，凡方之卦也。此是小塚，山之上馬骨
而已。余聞而大笑退，而竊疑彼徒費財，狂奔而購此
馬骨，不知何等所用。既而讀本草云：馬骨，辟瘟疫，氣

柳橋新誌 初編

賊終囊佩之。男左女右，始悟馬骨亦有所用。昔郭院
告燕昭王曰：古之人君使涓人買死馬骨，五百金，然
則彼徒所贖馬骨價百金，豈為高價哉？豈為高價哉？
酒樓船舖之招妓也，非直命妓宅，而迎焉，命妓之家
一有馬曰：岡崎屋，曰：立花屋，共在岡崎，即芳原
郭內稱見板者，開芳原出妓之家，書妓名於小板，揭
之有娼樓之招，則見其板而出之，故謂之見板。柳橋
之地與花街有別，其舊制呼大妓稱酌人，小妓稱給
仕，三四年米小妓，揭名亦稱酌人，而給仕之名竟
泯矣。然至藝者之稱，不能惜尊也。故岡崎立花二戶

亦不得稱見板蓋名否而實同者也其業養傭奴都俗稱人宿者故又有飛脚屋之名蓋養人以給妓之從价圖將立花合三十人許其他雖有業焉者亦微酒樓若川長柏屋亦自養奴而所專業焉者一戶而已妓及酒樓船舖皆呼二戶為箱屋呼其奴曰回箱又曰箱比里歌妓使奴負三絃以箱故有箱屋回箱等之名斯地之妓不得公携三絃箱皆以微服之併更衣負之故三絃皆接蓋也而箱名徒傳稱耳蓋妓奴陪妓妓得一席價而予百五十錢小妓則一鉢而一百錢人陪三四名則勞同而利多故不憚從少

柳橋新誌

初編

九

而喜從衆酒樓船舖招妓某樓命岡崎某樓命立花各有所定屬於奴亦皆有愛惡某奴厚良某奴饒舌品評而使之妓亦然最負各異奴之陪妓也持彈絃則為接蓋懸線方更衣則為變裳飲帶與傳安般遇雨即歸取傘迨暮即走燈燈東奔西馳亦唯命而奴有狎客奴必識之如此者客亦愛而隨之妓亦親之倍他否則揚發其容事罵詈不可沮最負之異蓋因之歟噫夫農者邦之本工商雖賤皆有業矣牛也馬也亦資運輸負重度遠皆為人用狗吠盜貓捕鼠亦各有職也奴輩果何為者乎七尺之軀于僇之髣

而甘為賤女子役結機理屐以媚其意僅利數百錢其辱何如人而殆不若猶狗者余想奴輩死而入地獄雖欲為牛首馬頭之鬼亦當難焉可憫哉狎客之直道妓宅者奴輩靡由獲利故皆憎忌之而狎客若舟行拉妓亦有不倩奴者云蓋酒樓船舖招妓指其名而命則奴走其家否則奴輩之適向而出之故奴亦不為無戚福也余讀輿史往時名妓與奴私者頗多而今則一唯周今鄭困欲賴奴力上售者而之私則眾奴嘲之謂茶人其甘為茶人者則以色茶也

柳橋新誌

初編

十

妓之下不道而在客謂之磴茶未知何典故疑其間暇無聊可以擁白磴茶之謂耶柳柳州詩云日覺無餘聲山重隔竹敲茶臼其事雖不同趣亦以者熟者春夏歲開之候則一月出五六十席餅及三女磴茶甚希至席價謂之玉玉之稱根于北里北里之娼記客者呼謂玉薄此亦傳稱耳妓等每相問本月獲玉幾顆口二十日五十競誇其多皆欲玉而忌茶俗語侮弄人曰茶之蓋原于此歟冷者盛時猶患茶況寒索之天則至不飲糊口故秋風一起皆鎖戶晦迹而去迨花笑柳眠之日復出而售土人稱此輩

為外被妓外被之為物暖則脫冷則着彼輩與此相反故云此地之妓春夏則有百餘名而秋冬則減其半以有外被也外被之外有鴝鵒妓此則不獨名而售技者妓等不齒也鴝鵒水鳥出沒波間而食魚者以彼亦出沒于正妓間而謀利故命焉蓋妓之得名捧饗金於閨中伍長輩若干及酒樓船宿和屋亦有所贈加以服飾之費算非三十金許則不能故為鴝鵒者亦多矣妓之名聲大鳴者一歲所得超百金若且高然而皆窮乏之其故何也雖有所長亦有所出所得一方而為己有者三鉢而二季五節亦有所為

風致小妓則別製腰帶皆有更衣一具酒間必起更之故一新衣服其價豈啻五七圓金雖典舊而嫌新轉泰而為裏其費亦大故各擁狎客以逃遊樂之狎客則不得旁觀而不接其費也板橋雜記云及移若客為之措辦巧樣新裁出於假母衫之類更私之大小隨時變易見者謂是時世粧崇積作今尚一白年地之相去數萬里而風情酷肖可謂奇矣而此所服御之美且加歲長至今春殊其大妓之外更出命婦流人之上小妓亦備極大妓頭上簪飾代用翠然至大妓更備珠翠長簪蓋妓抑簪則其里之制而柳

三、谷溝而不許入郭云、頃歲北郭日、冷柳橋日、熱情
妬之積計至若此、固宜也、而衣服之華、夜深之招禁
出、僅二三旬而又復如故、是則非妓輩不畏官、而自
忿也、蓋大都繁華之執、所以使然者、豈得遏止焉哉、
俚語云、女郎之赤心、烏卵之方形、必無焉、若有則、晦
夜亦出、圓月、其嗚呼媚妓亦人也、豈無赤心乎、但是
于鄭衛風聲之中、熟於詐偽貪猾之事、習與智長、化
與心成、而至如此耳、然歌妓與媚婦、自有間也、妓之
有氣概而不喜媚媚、淑良而不好淫蕩者、往々有焉、
何得不檢其實、且諸、晦月方卵乎、然妓之淫蕩無措、
柳橋新誌 初編

愛例優者、而費財、喜防火丁、而託身竟、於奔而壞了、
一生者、固多矣、世人使見、有斯輩而不察、淋行、偶小
絕、勝如妻、得妾者在、于其間也、亦且矣、蓋取、歌妓
趣、朴約之歡、則非大妓不可、若論其材質、必欲求林
良者、則且擇小妓、小妓質美、而年十五內外、其、醜
習、未深、學、詐術、未熟、而未破瓜者、亦有焉、多情之客
若能、抗、寵、得之、則可謂花柳場裏之至樂也、其懷之
以情、激之以義、則竟無生貪、冒及覆之計、必矣、而大
妓、易、轉、貪、故也、小妓、難、轉、不貪、故也、或曰、小妓少、趣、
大妓多、趣、是言至當然、使、取、杯、杓、上之趣、亦何、用、論、

赤心之有無、我取興騰、歡洽而足矣、世人論赤心、則
其意在、枕席上耳、若然、則非淋良者、不是、如淋良者
則、可求、諸小妓、不可求、諸大妓也、且、既、落、手、小妓
亦不出三四年、為大妓、則杯杓枕席、豈不兩全乎、余
哀風流子弟、不擇其人、而舉事、收、金、地、歡、藉、而、學
長、時、向、名、壞、者、戲、書、之、以、嘲、情、痴、者、亦、足、一、婆、心
而已、金陵名妓李十娘、語余、詹心、言曰、兒雖、風、塵、賤
質、非、淫、蕩、首、流、如、夏、姬、河、間、婦、也、苟、兒、心、所、好、雖
相、若、如、實、情、與、之、洽、也、非、兒、心、之、所、好、雖、勉、可、枕、席
不、與、之、合、也、噫、柳橋之妓、影、矣、若、深、求、之、則、無、一、人
柳橋新誌 初編

彷彿十娘者乎哉
開府不來都下名妓容姿絕倫技藝畢給、侍、名、得
少、留、以、演、劇、者、亦、無、算、焉、今、則、否、彼、此、伯、仲、一、無、超
群、技、者、之、出、於、其、間、矣、而、現、今、猶、可、稱、者、獨、一、州、橋
東之阿菊也、彼雖、非、有、傾、國、之、色、絕、世、之、技、以、纖、々
女、手、之、力、大、學、已、閣、高、樓、于、墨、水、之、面、而、曰、有、明、樓
有明之名、頃、播、都、內、豪、士、治、郎、無、不、一、醉、於、此、樓、者
如、川、口、平、岩、三、樓、稍、就、其、下、而、彼、以、女、主、主、之、其、狹
氣、才、力、亦、似、可、取、雖、有、所、倚、賴、而、成、此、計、然、非、尋、常
折、腰、妓、所、企、及、也、其、他、未、聞、有、一、女、子、能、起、衆、於、此、

上者柳橋之盛也。至與何無一人，才氣雄拔，鳴名于都內者，乎余曼翁列金陵珠市名妓作其小傳，佳人之跡百世不朽。余今欲記柳橋紅裙，以準擬之而未詳。有一個行實可記者，乃徒列所聞之名十之七八于左，而已後之情痴如余者，若索其事作其傳，以繼曼翁之舉，則有以使脂粉色長不朽，一以可徵斯地繁華於後日者矣。所列於此者，不關容色之美醜技藝之巧拙，隨聞乃記。阿一阿三阿金阿翠阿幸阿弓阿豐阿蕙阿文阿紺阿花阿竹阿里阿山阿六阿百阿萬阿久阿鹽阿梅阿大阿濱阿叙阿王阿蝶阿

柳橋新誌 初編

二五

琴阿德阿常阿柳阿綱阿慎阿相阿緬阿鏡阿鶴阿華阿襄阿歌阿芳阿時阿線阿半阿蓮阿元阿滿阿國阿龍阿浪阿雪阿色小勝小春小繁小鶴小萬小蝶小花小照小德小鐵金八久米八米八玉八萬八竹二勃二駒吉榮吉常吉長吉米吉三吉甚吉通吉倉吉泰吉茂吉斧吉梅吉美代喜又喜佐佐濃伊嘉都和廷玉伊呂波豐美佐等大妓也。阿中阿清阿赤阿花阿里阿藤阿奴阿歌阿龜阿吹阿房阿豆小糸小芳小玉小金小路小綸小秋小藤小島政吉久吉三吉千吉種吉里吉駒吉八重勘八權助金太郎等。

小妓也。蓋其優劣等級則人々見得，而別矣。安得私斷其品評乎？將來若有作其傳而晰其迹者，則評論自有所定矣。

此編成于己未仲冬，故列於此者皆戊午己未間之人。而若阿蕙蘭二小照梅吉者，數名皆小妓至令茲庚申而為大妓者，及米八延玉之徒亦皆新揭名在。今年者此等皆係庚申新秋追補而記焉。而若金八常吉者，其落籍在午未之際，阿豐榮吉之輩亦今年後良。此等皆存而不削也。

吁嗟余記柳橋之繁華也，說歌妓之遊趣也，而使繁

柳橋新誌 初編

其隱事露其醜狀，是何等殺風景可謂令古無情人也。其獲罪于才子佳人亦可知耳。然余竟非真無情人也。極多情人也。多情而為無情之言，乃亦有所思也。有所思也，夫多情之事何可與彼蚩蚩之輩語哉？風流之遊亦何得與彼蚩蚩之輩語哉？我其可借以語者則唯天地間第一等達士占今來第一才子而已。達士也，才子也，安可多得焉？故為此無情之言，以欲使彼蚩蚩之輩者能悟外面菩薩內心夜叉之理，而知見為極樂世界者，即是無間地獄，而一旦幡然翻了其流連耽溺之念，以得全其身保其

家耳矣雖然告々字內豈無一个達士才子乎若使此編誤落其人之手乃亦將目余以蚩々之後耶余亦當何辭以對之耶夫風月之情事花柳之遊趣似非而不痴近俗而不俗其訣在自得之趣至何者十韻菊之最竊珠於瓊珠之端則雖非周孔之遺訓亦焉可得瞋目張臂勃々爾而逐之若暴陽鄙倍哉若使人臣如謝安石談笑中能挫百萬疆寇以存社稷則足矣何得可否其東山之遊嬉乎使文士如白居易博識宏辭名照史籍詞賦傳於海外亦足矣其不能忘情何有所損乎今之君子者其論太緻其行

柳橋新誌 初編

大較而未嘗知風流情趣為何物而又不消得時時妾之舌世過於嬌歌妙舞之人也故閨帷不修而一為蕩子治郎鄙笑者亦多矣哉夫花柳之遊其米也久矣故名妓艷姬之跡與英將忠士同傳千載者無慮數百名非有多情人記而存之耶蕪小小之心與曲院仙仙衣負毛惜惜之節與淮海皮關多眉殊殊於崇不日其恩紅拂於靖真知所奔趨蓮香坐卧也峰巒其台風馬玲瓏唱詞也且自安玲瓏顧媚之迷樓巧迷了詞客薛濤之彩牋能呈彩于書閣如葛蕪芳之烈陳李湘真之雅致則全然不似女子也我

邦往昔所謂白拍子者亦妓也若干手鼓琵琶慰重衡於蜀館靜女奏舞不屈賴朝于幕府皆是千古之情事百世之雅談使聞者恍然惘然神飛魂馳而及其美泣其情者世清人設風致如是者今也則上雖外人性無古今人情未變木石今之才于佳人亦猶古之才于佳人耳至風月花柳之遊則豈無彷彿往昔者乎若夫春風解凍宇氣漸佳江東莊々之梅南枝北枝齊開携窈窕于暗香間擁娉婷於疎影傍離枝奪花神之魂縈後鐸鏗和鶯兒之簧買醉而局取此墨塘泥又挑紅李白爛熳之天別現出一絲櫻

柳橋新誌 初編

雲江流逾碧贈殘閃銀金樽醉夕蘭涼夜晨大妓五六人雖妓六七十人左提右挈春服競新加有鬪化拾翠之嬉風詠而忘歸雖不知夫子之與否而優也為與烏兔疾奔三春樂事倏忽如夢裏觀綠樹前園子規啼兩歲昨遊于綺窓說舊情於幽宇嬌悶數句梅霖方罷恰是開河烟戲之夜二州橋頭萬之茶肆千之酒舍所寄齊燭彩燈相射東船西舫喧擊推摩數里大江不見一碧皮或放館舫于中流擬漢武河之遊或輕舸尋絃歌去恍有香山潯陽之愁絲竹徹曉談笑無歇搞下洲外涼颼砭骨城中三伏熱不

覺為何物身青心爽真是伴嫦娥入蟾窟博望仙槎
未必向天可發也七夕星會之夜柳橋乃人間烏鵲
橋織女善彈不暇織雲綃牽牛賣牛而飲酣醉連宵
連宵合歡不似天上一歲一會期太過也況乎中秋
天朗氣晴有登樓逞興之度公有泛舫嘯歌之志即
月逾白風逾清加焉芳醕佳轂加焉橋舷哀樂半尾
松下擊瓊而酌百本代遺鼓枻而行既而柳橋之
霜氣淒涼訪菊于墨東之園觀楓於真崎之折門之
之花視為富貴相傳市惟中見顏如舜英迨
宴之候則俗子僮父履跡已絕而得意之遊可以作

柳橋新誌

初編

三九

也陋妓拙嫖售技方息而至情之事可以適也風東
霞殘之夜綺樓有春情夢正暖酒氣常薰不知外
橋上月影東移人余疑孫臨定情之歡韓愈謝客之
親必在斯辰也天明矣屋瓦皚然於是乎生酒於瓶
安爐于船以為墨堤觀雪之遊豈有興盡而還乎至
暮年華將除人情叙忙之際適別閑介歲之宴豫歸
春遊之契吁亦快矣余村度千古才子佳人之心想
像能肯甘心得意之遊豈得與此間有霄壤之異耶
夫風花雲月之變態絲竹肉之妙趣一悲一歡一
一笑之綢繆可以詩也可以畫也雖然亦焉可與彼

虫々蟲々徒揮其財而炫豪不問其趣唯美是從者
語此等之事乎哉噫後之才子佳人以余為無情人
耶抑亦以為多情情人耶戲記臆語以問焉若夫山川
風月綺羅絃歌之遊多々益善豈有盡于此哉況其
妙籌奇訣則在人々腔子裏而存焉寔非筆墨所得
而形狀也噫

柳橋新誌

初編

三

附錄 仙客所著算法珍書第二條所載

何有仙史嘗著柳橋新誌全篇六千七百廿字
字々金玉蓋仙史之著此編也所費不下貳千
金設如有人以二千金買此編不知一字之值
幾何錢求之術如左

一金即一兩通作六十錢置六千七百廿字
為一率以二十金通銀百廿貫為二率以
一字為三率求得四率應問

答一字之值銀十七文八分六厘二毛有奇

成島柳北戲著
柳橋新誌二編

柳橋新誌題詞

燈火樓臺蘸晚潮
湘簾深袂笑嬌嫖
四時無日不
三月十步有華爭
一橋才子聲名歸
白傅美人色
藝廳紅袖秦淮情
事揚州說也入新篇
添幾條
竹枝聲在水樓間
春入嬌波洗碧灣
柳線織成鸞
羽色零鱗疊得鯉
魚斑板橋記裡多
紅袖畫舫錄
中收翠鬟裁亦明
窻脩黛史欲將彤
管寫眉山

三溪菊池純草

雪江關敬書

眞景所見 寫實圖



序

余與何有仙史一飲於柳橋已樓而別樓指既經三載頃日仙史郵寄其所著柳橋新誌二編曰我今爲無用之人故著無用之書以自樂耳抑子亦好無用之辯者盍爲我一言題之余受而讀之行文諧謔使人嘻笑而不已然細玩其味則寓諷刺于其間者有焉痛感慨于其中者有焉不特令讀者知柳橋之遊趣如何也併知東京今日之事情如何也不特知東京今日之事情如何也推知海內將來之形勢如何也其可不謂之一太奇書乎然仙史固自以爲無

柳橋新誌 序

用之書而世之讀之者亦必以爲無用之書則謂之一大無用之書亦無不可也仙史才錢學博而不肯檢束其行世或識仙史之才之學而未識其志操卑然其事業亦有可稱者也仙史往歲失職于泮林窮卧于家當時人皆輕視之龜崖相公獨奇其才舉而用之仙史將于陸軍也思威兼行雖悍將之上皆服其制馭至若三兵習泰西之法一新其制則仙史之力居多矣當幕朝之末帑藏空竭仙史統轄金穀之權內外費用畢給而海陸將士亦賴而無饑色矣仙史亦知生財之道歟戊辰變後仙史致仕而隱

于市外逸自汗然視其在窮阮困感之地襟懷爽然毫無憂色其亦有所過人者非耶噫仙史抱有用之才而自棄著無用之書以自樂者其情豈不哀乎雖然仙史意其有用而樂其無用者仙史之所以爲仙史也余不得不爲讀此書者一言之而仙史視余之心曠曰曰老奴饒舌又復以無用之辯俗了我書則余將甘受其唾焉

明治辛未暮春碧雲山人識于芙蓉峯下僑居

六十老人堯田大島信書

柳橋新誌 序

柳橋新誌二編

余曾著柳橋新誌，距今既十有二年。當時自以為善記其新而讀者亦或喜其新焉。爾來世移物換，柳橋造趣一變而新誌亦既腐矣。他川氏西遷之後，東京府內朱門粉壁變為柴茶之園，者不鮮而柳橋妓輩依然不失其業。操管絃馳逐于風流場中，比諸幕吏鬼脫鼠伏而偷生者，豈不優哉。蓋王政一新而柳橋亦一新而小有好事者記其新也。頃日有偷刻我柳橋新誌

柳橋新誌

二編

者而風流子弟多買讀之。余慨方此維新之日，讀彼既腐之書也。作柳橋新誌二編。

慶應以降百貨之備皆耗其產之半而割烹家獨擅閭閻之富者何也。府內人口減其半而遊客倍其數之故也。人口減而遊客倍者何也。人人樂王化之美而不為後世子孫之計，獲一錢則食獲一楮則飲故也。柳橋酒樓皆殊勢於往日，河長柳川爭盟于橋之南北，萬八亦將一依衰頹之氣，龜清柳屋拓新境，新柳生而頤懽添色，蓋新柳街抹綠一成而柳橋繁華益加焉。大中村船宿有中村故土人災後起一

大巨閣稱霸於水東而柏屋青柳亦修繕而覺雄若深川柳光幾指大橋皆以燕制勝有信亭之友白髮松中卷之小環蒸共以奇鳴柳升之以甘味酒客則託其甘而免其苦也。余知其味故不欲飲其醜也。各樓競華開美冷熱互換而巴屋興於其間。頃年各樓氣味使熾動華其飾而不美其實貴其價而不用意于客者多矣。若欲耀豪揮快則宜就中河龜柏梅柳之樓而飲若論割烹之真味則二川之樓無出於巴屋之右者。巴屋之吏可謂今之易牙耳。余方春風秋月之佳辰酌于二川之樓者有年而未見賓客之盛

新橋新誌

二編

如今日也。葉之美亦如今日也。蓋非有使之為也。盛美之人安能得如茲乎。余謂方今權貴皆孟官而客皆馬騷歟。何其爭求食之美也。而柳橋諸樓不特春中平原之徒珠履寶劍而至寔使齊楚燕趙之主亦親托駕於其門。噫亦盛哉。

四區之船宿亦有沿革其於表街也。尾本竹屋鎖戶而二河系中村代之新上總亦改稱松葉其於裏岸也。隔古去而瓦屋出焉。新若竹移家于故柳橋而米單行之播磨變為翁屋其地雖貧富冷熱相移皆仍舊貫而升田伊豆鈴木三家盛開猶冠于四區。夫酒

樓私宿雖不與逃于曩昔而酒穀之價舟舫之價皆四五倍于十年前者因金貨濫惡而楮幣代之耳固不足為怪也或問仙史曰當今抑橋之妓大小二百餘名殆倍于古而私宿酒樓獨不增其戶各家聘妓之多寡照諸舊簿則亦相伯仲者其故何也仙史曰抑橋往日之妓無姿色則有技藝無技藝則有才識三者無一而與婢子同妓者其希矣今則否無姿無藝無才徒粉其面錦其身而是妓之稱者十之七八不啻有眼之客鄙而棄之雖槍叉痴漢亦或疑其妓而不收妓獨名月餘未蒙一招者往往有焉故雖妓

抑橋新誌

二編

三

藉日而求使各樓能倍其利也蓋頃年商賈罷業間巷失產者無數皆百計求活故文兒真目稍具而彈得宵待曉怨一曲者爭入妓籍是妓而不妓者日殖之厚也大無姿無藝者自知無由于獲客故盈轉巧術唯利之視其風一掃雖中等以上頗有名聲者亦漸染其習意抑橋聲妓之風一壞而其醜不可言也然則抑橋雖如其盛於往日而其實可謂大衰首欺抑客亦有罪焉不知遊戲有其道不辨風流為何物沈湎耽溺不問其為妓與不妓喜濫轉以為戀已信巧術以為愛已者甚多偶有淑良而不輕浮能存

抑橋性時之遺風者則皆罵以為痴頑不辭事之老妾夫客而如此則安能得遇妓輩之日趨盛風乎哉性昔北里雖盛抑橋雖熟未聞有名公鉅卿一遊以賞其情味蓋文政天係以還幕府禁網極嚴雖麾下之士遊則有譴天朝矯其獎故小過舉賢才正其大綱修其大典如擁花花柳瑣末之事釋而不問故駟馬高蓋有時而三顧蘇小之家彼公子王孫在深閨中畢生不能入狹斜之鄉者一朝放縱任其所之若野鷗出籠而飛洪水決堤而進其快可知也較書幫間俸媚而來采桑顧而候一酌百金一彈千金真是

抑橋新誌

二編

四

一曲紅綃不知數者夫通下情解人事者莫遊若也貴介情紳寓深意于遊戲以察閭巷之情態則於為治不為無益且若泰西諸國帝王同遊于民庶若花旗聯邦貴賤不殊等皆是所謂文明開化者頃歲本邦日除舊弊力新政教可不謂美事乎雖然徒以酒樓之遊媚妓之樂為文明開化之道者余不肯任其祖也

某候酷愛某妓情不啻膠漆余兩識其人而兩忘其名頃將歸其國不堪眷戀之情發駕之日竊命侍臣寄書于其妓云一讀欲絕箴諸其懷且暮不釋珍之

如拱望余一日諭讀其書文曰

愛卿別後無恙否孤自別卿之日情思恍惚卿之
容姿常彷彿于目卿之私語每往來于懷綿々之
恨不知有絕期卿其察諸書則揭卿之寫影夜則
誦卿之手書孤身雖與卿離魂猶在卿則墨水之
道一川之宴回顧一夢悽然愴然卿其察諸書則
一領此是家制雖重臣所下怪與者孤以卿之故
懷制贈之請秘而下語入至囑々々且孤有關心
之事爲卿雲雨長留夜無憾或入夢若然可投書
侍臣走告告知孤來歲東行必贖卿身作離宮以
舊逾此盟卿其察諸情緒不悉只此寄知

柳橋再誌

二編

九

慎名不具

余讀了不覺替々半下也樂譜所傳在納言謫居須
磨浦鍾情于松風村雨者其事凋雅其情悽惋千載
之下聽其曲觀其舞猶教人揪然催泣也世風俗薄
觸人心致點斷無情事肖古者也今讀此書宛然有
古人情和之風何其思之切而哀也余好觀演劇每
嘆新舊高尾之事三义一刃渭水流血何等殺風景
寔不與此候之情事同日而語焉

柳橋再誌

編

之口於子箱奴不投一指勸使人割肚以試其毒
况彼與子箱奴每婢視人寔不可忍縱令彼日冒
安何買乾魚一串亦不欲買姊其諒諸日如不開半
裏岸校兒擒山手大將玩弄三月償了宿債二百圓
真是強挽後生可畏者要常謂真情要清或謂要利
若愛利則宜擇救件以止否則知事華族或委任
任雖貴未足以飽吾曹之腹焉言未畢樓以百人
叫曰一劇俳優給金表妓忙呼箱奴曰榮豐請買取
妓官自給表來

一書生入學校頗通英語一夕飲柳光亭上與妓言

半用英語。妓曰：郎君獨識英語，奴輩不解，是甚無趣。願教奴以英語，書生意甚得曰：卿才，子卿才，子若學之，數月必為大家僕。於英語無所不通，不知卿欲所學何先？妓曰：青華相呼，用常語，似無風致。願郎君先教以奴輩之名。書生曰：妙。妓問阿竹曰：蠻籍問阿梅曰：妙。林問阿鳥曰：弗得問阿蝶曰：酒字應答如響。妓人問美佐吉書生俯首百考不得，又問阿茶羅書生益困，拭汗於其額曰：今者僕不携辭書，適日將懷英漢箋一部來，以答明等百般之問。

柳橋新誌

二編

妓二年間偏同于性，昔故纏頭不得，俗於古也。乃今客之技大妓一方為下一圓為上，雖一妓亦在一二分之間，或遵舊制投妓以一方漫以二錢，則皆罵其吝夫，百物之價皆騰四五倍。妓等衣食亦不得不然，則纏頭獨同諸往，日豈理也哉？若以客為智，則不如不遊也。妓之獲纏頭于客盡付諸婦女之手，則非復我有故偷腰以充私費，三而攫一五而攫二，雖真金子不攫者鮮矣。有一雛妓未幾，技僧之風一日聞先輩之說，始悟攫之妙，急攫一楮而歸，搗母性聰察家無匿楮之地，千思萬慮忽生一計，認樓簾

樓簾自指于板間，自謂神智妙算，真是萬全之策。一日驟雨乍晴，雖妓在家，鵲母出浴，妓欲出楮，買餅挾星飯，則楮之濕而中斷，妓錯愕失色，偷持其半片問諸鄰口一方，楮中斷猶可，值二錢否？聞者笑之。

某藩以舟數名置酒于某樓，般校排列，絃歌沸騰，與一員大旺隊長，令招所愛之妓，不至屢促，諸樓婢一令罷，今日陪客舟行，歸期或慢，公宜擇他隊長拂，按鐵扇而曰：西京之妓若遇卿客之招，則辭他客速來侍，柳橋何獨無律如此？婢曰：東市珠佩

柳橋新誌

二編

異俗，且柳橋校書或有私事而不同，西京之公然不忌也。隊長怒氣勃發，大喝曰：賤婢何多言，失敬失敬。方今取巨盃擲婢之面上，說中燈臺，猶然一聲而碎，燈滅婢愕而逃，隊長將執刀追之，衆皆吃驚，壯腕避前，纖手抱後，且慰且謝，震雷斬後，怒良策，定婢脫而到廚下，語庖丁曰：當今之客多是狂暴使酒，吐無道理之論，或擲碗碟，或拔刀斫，枉每使人憤悶不堪，酒般價加其二三，今而奪之未足為快，真是被髮東人可嘆。可嘆仙史氏曰：太平久矣，則士風急情干戈之後，一氣自壯，戊辰以來，殺氣未平，項莊項伯動劍舞

于青樓匪父雖老亦時怒而碎玉斗其勢難當近朱
酒席有新法獻五于人多擲而送之其掌上李太白
桃李園序云飛羽觴而醉月當今士人好古者多所
謂新法亦取典故于此飛字耶蓋飛觴飛盃古則古
新則新奇則奇達則達畢竟生破額傷眼之變所謂
雷亦易碎者寧如尋常環而獻酬哉余聽諸老奴烏
一妓按絃而歌曰其章桐及菊此是官家章客聽而
嘆曰廣哉熙々乎曲而有直體其天朝之德乎陰
于周文而有大雅之音妓又歌曰其章洛陽花此是
推郎章客不慚曰推十者俳優也俳優者乞食也卿
抑橋新誌 上編 九

以乞丐與天子並歌何等不經妓徐答曰君下知
歌曲之事乎妾聞秦消樂中者民間游弄之詩也聖
人採而列之雅頌之前君不答聖人而答妾何等不
且君不見大友之章乎與薩侯一樣夫薩侯者三
藩之首而天下之所畏也然未聞薩侯令大友遊而
變其章也薩侯不怒于俳優而君獨怒于妾何等不
經客振然而退仙史氏曰頃歲抑橋之妓私於俳優
者多而與角觥者私者亦不少矣三代吉之於謂升
小范之於田之助阿李之於高見山同哉其志者也
于吉委身于相生而死相生為之哭十日夫俳優者

推辭之辭聲震之客婀娜之態與女子一般以筆
戀思思者固不為無理若夫力人狀貌魁偉筋骨鐵
打有如雷公者有如夜叉者而與俳優同為紅裙之
情客余大怪之蓋有所謂四十八手而善擒之耶抑
亦如相撲膏藥有粘着力而然耶余將問諸西洋術
理諸生矣

抑橋新誌



上編

獲僅一可怖之事乙道可怖哉頃聞天王橋昨騎人
踏於一娘眼睛上出騎人相遁而不獲可怖哉自抵
其目道而竊竊々々女兒甲道方今騎人何故無律
或蹴而騎或假而騎有執傘而乘者有懷手而乘者
奇々然與曲馬一樣且馳奔電馳不計於欄人中
而過何其無狀也往日觀公之來馬是々可
謂真七人且今之斷髮代與夷人一般可惜可惜乙
道妹家有春畫本三冊阿姉秘而不示昨會阿姉不
在妹家一過中有標致如訥升者有揮惡如仲藏
者其如鼠尾者有馬如如東葉者有馬然微頭

徽尾不見一個斷髮丈夫與女子寢者妹竊疑斷髮
人不當幹好事歟甲道胡亂休說卿不記半佳節之
客亦斷髮頭顱彼甚淫洩衆姊皆歎為妹謂斷髮人
比諸平人却是好色與劇場所扮法界坊一様奏屋
斷髮之客亦是可厭的動迫人刺囊可厭
長滑南公紫々乍見費成綻裂以豆戲送甲錯愕道
此壞矣乙道此是罵斷髮之

妓而有夫猶酒中注水其味薄而不醇妓而有見猶
酒中加糖其味重而不烈往時妓之孕者皆懷羞作
之心有尋樂打胎者有從良脫籍者頃年風習一變

柳橋新誌 二編

妓等亦見與人家一般多情乳母育之賓客席上亦
公然為之怙乎無愧亦怪也哉一妓既孕有仰客十
人不為其父為誰乃招一客告其孕客曰卿擁數客
何猶出我又問一客答曰卿擁數客何獨目我爾問
十客答如出一口妓甚惑焉乃禱清正公之祠曰安
有娠而不識其父願神語其人清正之神夢見而曰
汝有十夫均同枕席神亦不辨其主為誰汝腹內之
兒當自識其父汝其問諸妓醒而悟夜深無人妓盥
漱焚香坐而撫其腹俯而窺其陰從容語曰神有命
使女識我汝父之名汝其告其實忽肚裏有聲曰

阿娘何族阿娘有十夫見體則係十人協力所造一
人造首一人造腹有造胸者有造背者兩人造兩手
兩人造兩脚臂與陽莖亦各分造之故兒父有十人
也豈得歸諸一人耶而兒之十指別有造之者阿娘
忘之耶未入阿娘之室而徒染指於阿娘之昂者往
往有焉是吾指之父也

一妓長于口短于才人皆命曰饒舌兒又曰無眼娘
一日與眾妓侍某公之宴酒闌妓從容問公曰聞公
卿之在西京也皆造合花牌以為業不知殿下亦曾
造之耶公愕然無語頃答曰往時諸子開散不知

柳橋新誌 二編

或戲造之歟縱有焉亦官爵迫在孤之左者耳近來
國家多事無復一人為這樣閑事者公笑妓拊膝曰
解安々々近來坊間花牌甚之價亦隨貴阿爺每嘆
之安々々不知其故今者奉承殿下之話宿疑冰解夫
生之者寡用之者衆則牌恒不足價之貴亦宜哉滿
座皆捏汗于其掌

士人二個穿錦袴佩金刀對飲某樓酒數行談及字
內形勢竟論郡縣封建之得失辨駁移刻而不決口
角吐火舌頭噴血酒冷敵爛而不顧也數妓侍坐傍
聽而依妓起而如廁一妓從之相會廊下甲曰今日

之客門等。酒亦不飲。亦不食。肝々半日。說不
可解。奴性不棄。所謂議論者。聽之則懊惱。欲與乙
頗有氣力。曰。阿姊休悶。奴將壓彼。兩痴乃相携。反席
而個古戰。值劇乙進。離生於兩客之間。舉一六白而
問曰。公等所論。果何論。客曰。僕等所論。天下之此體
邪。豈封建之利害得失。卿等何間焉。乙厲聲曰。公等
何說也。夫古者封建之得失。秦漢以來。先膠論而世
道。今無公等之言。哉。妾聞米價有貴賤。之
敗極。公等則極止極大。雖唐虞之治。不能過焉。公等
正尊古。人然。何而與。邪。然封建之說。而創共和之兵。

酒肉不食，擲管絃而不奏，空論吳一伎之善，何偶
惟睡，謂之共知而樂耶？公等真不知遊者要將為
大統領，以實領之勢，請先吸此罰盃，於是二客
大慚，而正首而謝曰：謹奉女王殿下之令，
聞頃日有客贖一妓去，余不識其客而識其妓，名
阿娘，年紀十七八，以余眼看之，姿色在中等之上，故
贖在中等之下，問其贖金，曰：七百圓，余一驚欲倒，大
半年間，抑搗校書未有獲七百金而從良者也。阿
娘者，後進也，揭藉未滿一歲而邂逅于若此，豪客可

主幸矣而不恃門侯之幸乃亦為抑橋生一光
 影者歟昔阿幸今稱解五百金之聘于本阿弥氏本
 阿弥氏慚之得召賢在阿幸之右者而獲金當時
 人皆稱本阿弥之豪而張阿幸之健以為美談以
 今視之五百之聘五百之辭奚足為豪乎蓋北
 人非有軒輊也世態有變移故也方今賢位位于上
 者皆一月門獲解五六十步以誌門有霄壤之
 遠奴籍亦蕃疏及二百餘名然擇其精則大半樵
 牛一戍之夏半與柳春二賦任抑橋二十四番花信
 計阿金比梅也阿平比櫻也阿又李花小勝杏花美

柳橋新誌
二編

代海宗阿柑、桃花、阿蕙、菊花、阿清、牡丹、小簪、推霜、阿竹、蓮花、菊壽、紫薇、梅、吉、藤、花、政、吉、燕子、花、千、吉、芍、藥、阿蓮、水仙、小、點、躑、躑、其、他、增、吉、小、系、阿、常、三、代、吉、阿、輕、久、吉、阿、角、阿、直、亦、各、比、衆、芳、而、當、今、存、紫、唯、阿、幸、菊、專、政、吉、阿、今、阿、蓮、四、人、耳、門、清、千、吉、久、吉、三、個、既、載、艷、名、于、鬼、錄、餘、皆、四、散、不、知、其、所、在、者、亦、多、噫、嘻、十、年、之、久、一、子、一、沈、一、枯、一、榮、豈、獨、紅、裙、而、已、也、或、似、轎、而、非、輦、似、輦、而、非、轎、乘、者、仰、而、踞、推、者、俯、而、倚、鐵、輪、木、轆、輾、輾、作、聲、而、來、者、人、力、車、也、一、酒、樓、上、卷、以、手、開、而、觀、一、妓、鎮、在、右、曰、陋、哉、車、也、近、來、此、車、遍、

東帳而歸。時事件時遊客皆情。街
車之為物便而快。與夫亦使連叶較勇。其聲清亮
能使人道音。物象真是八月兒之氣象。不似此車。
阻死與九兒。膝行車一轍也。方今客多。捨與而收車。
論其價。耳何其鄙也。老妓在側笑一笑曰。卿妙齡未
知。車運之變。往年都內觀。侯伯之往來。僕從如雲。雙
槍在前。駑馬在後。張威。覽華。今則不單騎奔馳。簡易
為多。儉者是尚。却是美事。聞官家頃日捨銀萬金。以
造。路所通。氣車。蒸氣車之疾。一瞬十里。一刻百
里。如。而。此。一飯時。眼耳人。坂長崎。可一日而至。

柳橋新誌 二編

即。上。天。生。亦可。三日而達。真是。所謂。妙。車也。
奴。忙。問。以。天。生。可。往。耶。曰。然。曰。然。則。妾。將。駕。其。車。遊
銀。河。之。岸。而。一。觀。牽。牛。織。女。之。會。合。若。何。一。妓。拍。其
背。曰。休。焉。卿。之。美。貌。往。則。被。牽。牛。一。瞥。戀。着。奴。恐。織
女。吃。醋。必。建。留。車。欄。寸。焉。鵲。橋。與。兩。國。橋。一。般。大。笑

天心月高。樓下銀樓。水面風涼。舟子眠升。夜發。蒼
鏡。時。之。已。遠。茶。飯。豆。腐。豉。之。燈。金。成。四。街。升。天
狗。亦。無。聲。一小。樓。內。醉。客。在。床。欲。睡。不。睡。欲。語。不。語
如有。懊。惱。氣。一。妓。悄。然。端。坐。于。枕。頭。各。向。壁。吹。煙。響。

多。今。成。樓。中。情。亦。吐。盡。明白。昨。來。又。以。此。上
本。變。幻。說。論。而。汝。不。肯。汝。亦。不。解。事。我。何。其。如。此。之
其。我。今。天。地。間。不。有。一。人。如。汝。守。愚。師。古。者。汝。不。情
此。我。則。不。持。汝。受。了。便。宜。慈。萱。亦。得。老。境。之。樂。汝
益。思。諸。妓。俯。首。而。默。雙。眼。堆。淚。皓。齒。嚙。袖。良。人。而。曰
主。公。何。故。注。心。于。醜。惡。如。妾。者。妾。賜。恩。謝。安。豈。木。石
也。我。寔。感。公。之。情。荷。公。之。恩。奉。謝。無。辭。而。以。不。肯
奉。命。者。即。亦。有。故。具。以。告。妾。雖。身。子。於。是。則。不。願
與。唱。歸。同。步。結。歌。賞。賜。以。養。母。耳。妾。父。元。武。弁。食。保

柳橋新誌 六編

五日。父。公。而。兄。嗣。兄。少。而。勤。文武。之。業。略。知。忠。孝
道。往。年。之。變。都。下。勾。同。僚。教。百。皆。錯。愕。兄。兄
獨。發。憤。忘。食。建。言。於。執政。者。三。而。不。行。兄。慨。之。餘。遣
言。于。妾。以。託。老。母。與。同。志。之。士。走。東。墮。百。戰。不。捷。竟
死。即。于。鋒。鏑。之。間。爾。來。親。戚。奔。竄。不。知。所。在。明。友。亦
去。而。不。顧。妾。獨。與。母。處。惻。惻。無。依。卻。定。妾。于。官。器。什
纖。于。賊。飢。寒。日。迫。而。無。計。可。支。以。妾。幼。時。曾。見。舞
來。此。揭。指。忍。肚。賣。醢。賴。諸。君。之。德。以。僅。衣。食。于。母。妾
今。從。命。定。身。無。歷。之。福。老。母。亦。安。送。餘。生。焉。雖。然。獨
奈。父。兄。之。名。何。奈。辱。祖先。之。靈。何。主。公。幸。諒。諸。言

終一淘紅灰向自家膝上滴々揮米時聞隣猫舐鼠
々送哀其音忡々

滄海暗變白帆懸知是載柑南紀船此是舊詞曲述

來變其聲新其字以彈之舞之其調從而婉其自也

而雅輪其兩手而舞蹇其一足而跳亦一奇觀今歲

行于宴席世傳紀文者優颺渡海驚南紀之柑以獲

大利斯貨值陶朱之富竟視于人邵彼好狹斜之

遊遊豪窮奢軼前人而盛後世雖兒童于今識紀文

之名可謂一快男兒矣方今東京商戶無一有氣韻

者其其重日耗其財日匱雖力飾外面而內情不

免於歟嗚呼柳橋而橫濱開港以來商賈與外國互

市雖有失業破產者而亦手而往三五午間其興其

家者亦不為少也當今抑橋商而苦遊者橫濱之客

居多後進之妓頗有名聲若阿俊小鳴者亦皆為省

人所購去聞前年濱之一商產傾將鎖戶而公道會

括幣之行百方借金以買括一朝獲利三十分雖後買

采則米賤買由則由貴當今家產及一夕之云余

謂橫濱互市益昌則豪奢之徒亦將益覺不道而入

亦何出如紀文者乎夫亞字英佛之船載百貨陸續

而來則南紀柑船何復足歌乎何復足舞乎

表子才守硯詩云摩挲不釋相愛憐劇於十五真蟬

娟凡愛憐二字可下之少婦而不可下之二十以外

之女性然此子遊練于情者而擁三五二八之鬢畢

竟無時風致與玉互孩兒一般非并年以上稍嘗情

味之甘酸者則不足與語也今之人或美孩兒而責

其不解甘酸或猥以愛憐二字插諸老妓股間可謂

兩失其道者夫投百文之錢于溝中猶向乎作聲若

夫不問其味不認其情徒費財于娼妓者亦有何益

豈善哉彼家中所有金銀器財一併擲之大洋則手

外作柳橋習也彼家金寸欺騙之語破產于耽溺之

心者謂之痴漢抑又有人多年性來于花柳之鄉壯

裏不著一點風流情懷拙詐弄術例奪於娼妓之

懷者謂之惡漢痴漢固可笑而惡漢亦一痴也夫痴

與惡其是過不及可謂善于遊者乎若其其中于

痴惡之間而不失其財不醜其名者則是風流場裏

之盟主吾亦無間然矣

一妓有二押客一商而一士士人有婦而商家未娶

妓屬意于商而不能絕好于士頃日決意將從良于

商一夕與士人酌酒熟將寢妓曰妾蒙君之眷顧久

矣死生不忘妾欲長執其帚以事君而妾母不許母

生員 商家不願與。八姑親且君有金。在
細令。學紅拂以成其願。為。眼。眼。絕。皆。山。下
却是。君。目。曹。人。某。久。變。要。每。括。以。有。為。未。嘗。
回。說。以。杜。席。之。事。頃。日。情。人。請。母。以。安。要。母。照。話。
焉。安。不。能。拒。也。安。不。忍。不。請。君。而。去。今。告。以。實。所以
不。騙。君。也。願。君。快。飲。一。盃。快。眠。一。夕。以。為。永。訣。君。右
走。道。其。父。好。耦。則。幸。有。新。奴。揭。名。者。嬌。晚。可。安。安。為
君。媒。以。報。恩。情。君。意。若。何。士。人。婉。然。作。色。卿。曾。與
嬌。其。人。比。翼。生。地。連。理。僕。亦。欲。刀。以。獻。誓。上。神。今
卿。肯。與。良。家。象。僕。以。嫁。情。郎。僕。何。忍。默。而。是。之。且。且。
柳橋新誌 編

心。以。雙。刀。何。若。被。神。心。何。卿。若。果。作。此。則。望。心
行。策。了。有。精。兵。十。大。隊。僕。亦。指。揮。而。追。卿。家。右。何
奴。口。君。必。無。理。矣。公。賣。身。以。活。妾。賣。君。買。以。謂。買。物
買。品。安。唯。君。命。之。從。安。一。朝。脫。籍。則。雖。賤。家。環。下
也。菲。亦。隨。意。嫁。亦。隨。意。自。由。自。在。君。何。關。焉。敬。令。貴
藩。之。兵。有。何。十。隊。將。余。妾。何。且。各。藩。所。以。為。妾。為
大。少。參。事。戎。以。情。張。私。威。而。用。我。若。良。來。而。迫。妾。以
將。走。鳴。諸。官。不。知。君。之。藩。雖。大。君。之。兵。雖。強。安。能
得。抗。王。家。哉。錦。旗。一。出。亦。潰。而。已。嗟。然。大。笑。下。階。而
去。

埋曲詞云。次。弓。水。風。變。弓。箔。多。情。要。見。船。裏。客。感。復
之。天。紅。日。前。柳。水。色。逾。綠。長。風。一。道。來。於。南。其。遊。訪
教。百。官。隊。向。一。州。水。心。驚。進。來。青。々。之。簾。清。冷。翻。風
全。絃。響。空。紅。羅。映。波。使。人。神。爽。氣。蘇。有。出。無。熱。地。獄
而入。清。涼。世界。之。想。也。蓋。柱。時。遊。舫。之。第。七。松。着。障
巾。取。着。簾。輒。近。其。制。一。壞。各。舫。皆。察。簾。半。障。雪。晨。鐘
暖。風。夕。蕩。春。雅。以。便。宜。而。青。々。之。簾。清。冷。翻。風。之。快
人。以。得。此。去。牛。改。柳。橋。前。之。一。大。船。鋪。而。不。動。中
設。定。第。一。第。二。船。門。口。小。酒。樓。遊。客。皆。繫。舟。而。上。呼
酒。命。吸。酒。而。飲。亦。不。是。其。舫。偏。曰。柳。舫。々。之。名。一
柳橋新誌 編

時。叫。子。都。念。舟。舫。忙。于。熱。而。關。于。寒。秋。風。風。然。船
亦。發。矣。昔。者。軒。輅。氏。之。造。舟。楫。也。蓋。也。諸。與。今。人。造
舟。也。所。取。不。一。取。諸。花。取。諸。月。取。諸。酒。食。取。諸。娼。妓
不。知。後。未。別。造。何。樣。奇。船。以。供。遊。戲。耶。余。不。得。預。筆
諸。今。日。也。
一。客。坐。而。待。時。而。發。燈。影。欲。滅。復。明。酒。味。似。酸。又。苦
子。身。吊。影。快。々。不。樂。婢。來。慰。道。本。日。一。六。各。樓。欲。開
衆。校。書。皆。忙。然。折。已。報。成。想。令。罷。早。晚。帶。米。請。暫。忍
諸。客。道。待。久。矣。肩。頭。血。凝。你。招。按。摩。師。來。婢。話。而。去
乍。見。督。人。及。階。客。道。某。在。此。督。坐。客。背。摸。々。拍。肩。軟

提腕警道尊筋頗硬定感時氣徐々解結而可客
道國手頃日有新聞耶警道無焉江戸亦太哀矣客
道何以知之警道世人皆道哀亦極矣而奴眼不能
視其哀然奴亦有一事以證其哀者客道有何證警
道奴日出舊手每歸家嗅其履必有糞臭乃濯其齒
近來嗅履聞臭甚罕想街衢狗矢亦少夫狗口既減
人之之減可知也非哀而何客道有理々々警道近
年此地貓員都俗戲稱警奴曰貓員以二張貓中也有日須有狗之威
耶奴宅四隣皆貓窠間往往同間左次平者巡四圍
而為狂々一坊女兒皆坐而為貓何其術之捷也

柳橋新話

二編

奴思公亦愛貓者聞近來貓價頗騰買一隻必費一
圓金云云聞金于貓豈不信乎今日貓之盛可證小
貓不論獨莫大貓有一百五十名試以一名一日值
一圓計之一月之金四千五百圓噫亦盛哉奴之先
師者西檢校有遺訓曰神佛不可信其道衣食不可
擇其義視奴勿相愛朋友勿厚交夙興夜寐火於爪
以冀於金唯利是貪則一生安樂真是至言奴輩下
肖不能守遺訓至今亦貪不賄半文錢人而不若貓
者每嗅隔壁貓輩所食之饘香以飯耳忽聞婢自階
下報道令籠來替忙道貓話盡于此尊筋亦頗弛連

忙而可

二少年滿身龍文腕而不帶立於二州橋上倚欄臨
帆橋下遊舫蟻聚泰絲竹于涼風洗盃盤於清月真
是一區歌吹海甲額乙道嘉生那處狂歌喧擾人
當今警奴大行全賴士人好之甚也本地弱民故更
東皆驕故與儒人尊姐一般動不人視人所謂警奴
者口口日說歸來也以畏于閑得拐了到市上那
個那君休道後來客反是客之嫌奴奴得之這哩
乙道星吉近來彼等獲錢多故奢多為風衣毛
晏郎亦自以可指可指可指可指可指可指可指可指

柳橋新話

編

那臉容兒力不肯發其時可見甲道否彼輩鄙吝
夜半時若若若若若若若若若若若若若若若若若若
不聞去年房入漆開書畫會于中村樓當日諸先
生皆為賓客之盛賀金之夥近來無比人皆稱其
會曰處去會豈不妙乎余屢往彼宅未曾見彼摩甲
試覺其謂漢字者而為書畫會先生真是不可
議故乃為書畫先生者古今而有後來妓而為官
者生世間亦不可測也相視而大笑乍見巡邏兵
隊聲聲號叱叱而來而個奴忙下橋而去
天寶後聞三千妃嬪非不義非不履而明皇獨戀々々

下本真者何也蓋頃國絕世之人物與頃德奇之
士一秋一生能得撞着幾人耶余整幾十年間所識
柳橋紅裙其色藝皆相伯仲未見一個佳人一笑百
媚使多少粉黛無顏色者也然強而求之其中一人
有為其名曰阿清麗質天成沈靜寡言笑之瑩然反
玉梅之显然春風余初見之友人永芳山之家年約
三五余有詩云

天桃花上露無聲深鎖仙島夢不驚他日劉郎若
相訪丹唇一笑始相迎

阿清之名一時傾倒教坊而常苦多病壬戌之秋麻

疹盛行阿清亦病在床數旬竟不起年僅十七芳山

吊之詩云
國色古今相遇稀多情淚盡血沾衣夕陽人吊孤

墳下野菊香殘老蝶飛

余次其韻以哭之

舊情欲說聽人稀淚滴當年舊舞衣借問嫦娥何
處去悲魂長向月中飛

芳山亦陽月而沒意才子佳人天不假之年真可痛
哉近來老輩中獨有阿園々々少時與阿清並立雙
美之名久冠于二州往時柳橋妓風與新橋金春諸

柳橋新誌 二編

地無大異而轉近服師贊調一變尚青高幽雅其致
不同他者蓋自一人始為其阿園色藝兩全加之
中年故自即慣不驕下客善誘導後進是以人皆贊
之可謂妓中君子也後進中自習頗多者推阿島為
首阿島中蓋其才而外園其仁事親孝順授人品
未嘗見其全從于聲色亦良妓也阿園既為第一
臘阿島亦從良下今春不知方今以何誰為第一
魁乎矣余未得其公論也余昔與阿西坡飲一談
橋其佳詩其壁云

阿清亦自阿島故無限歡情都惹愁門柳蕭疎人

柳橋新誌 二編

人去年年遠感在此樓
距今僅七八年而西坡老病孤離于此地當時如

皆凋落如星余亦託餘生於風塵中每過故柳橋
如見其如相惜然感舊有相氏金城之嘆嗚呼遊人

多矣其孰同斯感者其孰司斯嘆者

二州繁華之地柳橋狹斜之鄉文士墨客多各視之
然清夜更闌各戶人定之時泛舟水心南望八口北

顧墨河則皎月射波金龍忽奔涼風吹衣羽客欲翔
海大教點明咸平綠莎洲外酒燈一穗點淡於畫樓
簾內其境華而不俗其景幽而不慘真是三都第一

風派之地況又酒美魚鮮名媛麗姝按絃調舞飄飄
宛轉教人神融氣暢以一洗襟懷萬縷之愁也右史
香山樊川之徒一持此地必當裁長歌製新詞以贊
其勝鳴其奇矣世之俗視之者亦唯見其皮相而不
認其真耳余曾作二州雜詩數篇今錄其二以為證
絃歌惱殺幾多人此地繁華世絕倫簾影橫樓
暖夕樓聲近岸小艇々梅薰羅袖梅川夕柳映金
絃此詩見春師林新莊爭嫌煩風派誰學李相真
秦淮山水未嘗遊其勝想當輸二州明月長臨才
子宴清風常滿美人舟送空煙火搖銀漢倚閣涼

一編

五

此日臨此際好呼坡老帚為君一掃十年愁
余曩昔與晴蓑揚江諸子每會飲于二州當時所見
如兒年皆十歲前後蛾眉未知面鼻浮垂口端抱在
後泰然道載者今皆成立蓑紅裳按金絃其態變可
見其歌曲可聽余為之悽然有所感也夫業精於
業於嬉昌黎言諸十載之前蓋媚妓者幾少子也故
舞者小技也然勉勵學之則數歲而足以養其生矣
今夫執國之大政者賜高爵食大祿赫赫有權炎々
有威而禮教未立于國德澤未流于民者何也非其
人庸多不勝其職也因入々樂昇平之澤偷一日之

字急于弊賢使能而卻取阿諛之臣失節之士矣是
無他非下劫于為治而欲擲為風之故耶當德川氏
之季世非無儒才卓識之人而政教頹廢不振者其
失亦在欲擲一字也夫古今為治者未有不成功力
行而壞于放擲者矣故乎擲乎在位君子其戒諸亦
亦放其心擲其業漠然不顧者早晚將乞食于道路
余自大朝于晚女子也哉
山父草其編之然一客偷讀之然頗稱其旨而口予之
書無益於世教而徒罵罵人作無用之文以禍世之
然予何故為也愚若此之事也子其有悔乎山父笑

二納

口吾固愚川之人何暇能為有用之事且吾所罵者
皆世之風派罪過也而吾之罵人亦是吾之風派罪
過也世之風派以風流之贖罪吾風派之筆吾時中暇
其罪何其辭之且世人孰無風派罪過唯有公之與
家之之具耳若有一個道學先生乘殷之輅服周之
冕台樓宮典左繡明律佩々閑々來責吾風派罪過
則吾將對之曰君講道學吾好風流唯是半文惜
不相及也不虞君涉吾事何故彼若人口頭著文章
不讀書者無以解意味不佞是嘆記事妄誕而不實
不佞是疑吾亦將對曰文之不善無學之故也敢不

乞正紀事之不實。若其問諸柳橋。吾亦何恐之有。昔
靜山書。其罪竟逐之。世笑其吏之局量偏隘。而
翁之猶行于今。為且于不聞乎。泰西諸國。所刻新
聞。多是非。謗罵詈之言。而君主不罪。官吏不咎。
君子不怒。小人不怨。爭而讀之。以博聞見。以知警戒。
為書。則亦新聞。然而無用者。君子何慮之過也。
客默而退。出戶而曰。瘡患無藥。

柳橋新誌 二編 尾

柳橋新誌 二編

廿七

後序

余身于偶奉職事而在東京。一日友人來而示何有
仙史。所著柳橋新誌二編。且曰。柳橋十年前情態既
盡。予初編當今。則亦有冷熱易地者。故此編以記其
變清。尤披而知之。余喜而一讀。其筆力跌宕行文。奇
絕。加之解頤之論。以模寫方今人情。名使樂府岳
之徒。讀之必將棄其筆硯。而却退瞠若于車塵之間。
也。夫仙史者。當友也。予具知其為人。而今相與書則
如冒色。陽子然如沈涵。治郎然仙史多。而育於儒林
之果。必於文苑之朗。朝翔韓柳之域。暮棲歐蘇之埭。
柳橋新誌

既而伸翼於九萬里之天者。若此著則亦大鵬之一
羽。驚簪之一翰也。耶。予賦性既弱。加之有嚴父之訓。
戒足不蹈市街之間。若繁華地方耳。聞其情態而已。
今賴仙史之著而得知其繁略。是亦非藉鵬鷺之羽。
翰以為其遊觀乎。曩者仙史棠題霸廷。驅騁曰。君看
千載上二卯。棄干城其慨可想也。既而幡然改途。
著諸諱如此書。以自適其猶。孫臏則之而說。兵司馬
遷係獄而著史之類乎。於是有感于仙史之心而題
區之。莠言者誰東鄙之狂生桂閣子也。
辛未芒種後八日書于江東龍涎窩于時芍藥盛開

風雪滿簾

清泉白石山人筠書

柳翁新誌

明治七年第二月刻成

京橋銀堂三丁目

發售書肆

山城屋政吉

岡田有邦 撰

新瀉雜記

明治二十年（一八八七）新瀉縣刻本

據明治二十年（一八八七）

新瀉縣刻本影印

岡田有邦著

新潟雜記 全二冊

櫻井氏藏版

花前日

醉遊

甲申鞠秋為

畊山岡田有邦先生

學後王仁壽書

對鷗閑霽圖

乙酉六月

桂洲居士信

卓然獨起脫時流
自比謫仙三十秋
筆食屢空寧改
樂圖書漸積
更忘憂百年
富貴真難得
一日清貧最
易求青眼平生
何所見山
端明月水邊鷗

明治十八年乙酉晚春

對鷗閑處主白題



對鷗閑處主白題
乙酉六月
桂洲居士信

為田百石。著新法雜記三卷。
以述年。旦請頌云。讀之。則風
俗之沿革。至如花柳之情。燕
穢之細詳。如親在本地。
目擊其狀。筆力駿逸。伯仲
靜軒。而宛轉活潑。則有過
之。且於官遊吾門。其為學

也。お詞上。則特長。古々
官暇。以志筆。來出稿。不之
宣乎。
明治十八年六月

津齊井部元頌兼出

新瀉雜記序

山人說山水客話水者各言其所得
而已。豈傍人之所能解乎。予飛驒之山
人也。飛驒之為園也。攢峯擁四境。密林
蔽逕。路鹿走郊。坳鳥雀窺窓戶。故不
讀詩而多知。艸木禽獸之名。雖然。如揚
州之鶴解語之。蒼木禽獸。未嘗知之也。越之新
瀉者。在稱風流之仙都。廣厦櫺比。層樓
崖我絲竹如沸。歌舞雲起。遨遊此間者。
日費萬錢。如其地位。則瀕北海。八千八
水合流而朝海。七十四橋卧波而蘸影。
八百八家之花。送靈麝之香。且越多生
女。新瀉又為其洲。藪衆娃。粲然為羣。猶
牡丹与芍藥駢莖。海棠與木蓮接枝。紅
瓣白葩。重疊錯雜。開妍爭美。以故飲酒
之筵。蘭茶之席。必聘妓。觀其賞月之客。
亦莫不携妓。蓋花依妓而添艷。月依妓
而加光。地亦依妓而致繁華也。予自移
籍本地已六年矣。故聊輯錄所見聞。題
曰新瀉雜記。如其真。果妙趣。豈山人之
所能解乎。應自有其人矣。
時明治十八年乙酉晚春也
耕山岡田有邦自題

新潟雜記卷上

藤井德齋曰、僅僅一百餘言、可充一部新潟志、

越之新潟、岡田有邦著、
舟江、居本邦五港之一焉、
信濃、川自信濃來、合八千
八水、而注海、極便於舟楫、
船、輻湊於川口者、帆船
林立、歟、乃之聲、日夕不絕、
街衢、縱橫井然、如碁格、控
信川、為渠、豎三橫五、以界
坊、架一百三十餘橋、植數
百千株、柳翠影凝、凝、可以

渡邊漢村曰、方今到
延有所謂不景氣之
嘆、日費方錢、如豪客
其人、益有之矣、吾未
見之、

遮日光、可以避暑、熱、舟行
其間、使人為汴河之想矣、
遊人、士女、畫舫笙歌、日費
萬錢、視之三都、亦不其讓
也、
往時、寺門靜軒、著新潟富
史、森春濤、著新潟竹枝、而
富史、為祝融氏之所奪、坊
間、纔見蠹餐餘耳、頃者、清
客王治本、亦有舟江雜詩、
之著、余亦仿襲、著新潟繁
昌記一卷、此外、紀述寥寥、

漁村曰、所貴乎妓者、
在色、容與技藝耳、言
語之不雅、抑亦也、何
足深歟、

德齋曰、僕亦取其色、
言語之卑、便不問而
可也、靜軒、漁村、二子
之評、確當矣、

德齋曰、余戲評本地
之妓、云、古街之妓、如
牡丹、香色、宜種
諸君、聞之、毘沙門

寄附之妓、如麗春、其
色雖美、品且劣、宜為
推亭、琴肆、園園之觀、
寺坊、則如木槿、不過
為野、離茶中之物、
耳、有客謂余曰、子評
古街之妓、以此花玉、
則無天下出子、越妓
之右者、耶、余曰、否、否、
未也、嘗評兩京之妓、
謂東京如梅、茶、西京
如海棠、梅花、則其品
清、高、其韻、飄逸、可以
立君子之門、牆、可以

矣、
越、
京、師、女、郎、唯、土、語、之、不、雅、
則、越、璧、微、瑕、也、靜、軒、新、潟、
富、史、有、言、曰、西、施、生、於、越、
真、妃、生、於、蜀、音、吐、必、不、齊、
魯、吳、王、猶、亡、國、明、皇、亦、覆、
天、下、吾、豈、害、色、乎、可、謂、確、
言、矣、

本地、青、樓、中、人、分、色、妓、藝、妓、
二、種、色、妓、但、薦、寢、席、而已、
藝、妓、妙、擅、歌、舞、侍、酌、作、醉、

然、不、能、為、房、裡、之、樂、也、色、
藝、聚、居、以、古、坊、為、第、一、寄、
附、毘、沙、門、二、坊、垂、之、居、寺、
坊、者、唯、色、妓、而、已、
古、坊、一、帶、半、妓、居、紅、樓、夾、道、
廣、厦、連、覺、向、夕、燈、火、星、繁、
笙、歌、雷、沸、邀、遊、其、間、者、車、
馬、如、織、鞦、鞢、之、聲、徹、且、不、
絕、煙、花、之、盛、風、月、之、美、以、
度、色、藝、之、精、妙、衣、飾、之、麗、
都、三、府、遊、郭、亦、不、過、之、也、
寄、附、毘、沙、門、兩、坊、舊、待、船、客、

戴高士之園於海棠
則其地之勝於
媚可以植王侯之階
庭可以倚才人之書
窓其品雖讓於梅花
自有風韻不可掩者
若村則有天然圖
色而未竟其地之氣
何能與海棠與海棠
雖然是皆名花未遽
易軒輊也不知余之
月且果當否客曰當
矣
坂口五峰曰藝妓亦

可為房裡之樂唯北
富貴子弟風流才人
不能知其趣耳
藝妓曰所以破我杜
多之多
又曰越女以容色名
于天下久矣兄先敘
其藝者何哉
小崎葛川曰新潟之
妓歌聲甚悲山却
為山歌無僕未
能信也
蘊齋曰經王何者有
此詭譎不知酬之果

而開場今則為一區之妓
院然歌舞之風趣服飾之
模樣以及容姿音吐比之
古坊妓女則有她嬌與勝
嬌之別云
寺坊隔一水多寺院故名焉
娼妓至夜間皆靚粧炫服
列坐肆頭客有見而悅者
即留宿焉頃讀精華堂刊
新鴻才人詩有三浦鳩村
一絕甚逼真境其詩云後
頭娼戶前頭寺一水中分

本
兩種情樂士不知真就是
按詩聲接讀經聲
地之妓其所長在歌舞絲
竹次之而其操二十五絃
者則寥寥無聞矣蓋以調
高而無相承者故歟頃者
警師左久者自東京來其
人善彈琴衆娃靡然學之
妓風漸向于上位云
寺坊有經王殿妓錯認為月
下水人修福者朝夕不絕
每歲以六月二十二月為

以河橋
蘊齋曰今日豈有此
事
五峯曰罕雖喧嘩可
厭而俗人以為豪舉
可笑
漁村曰往時或然今
日豈其然乎哉

蘊齋曰所謂前門樂
狼後門進虎者

賽會士女游觀熱鬧雜遘
冶服盛粧結隊相翺翔或
云邂逅相遇適我願定情
於其間者多
開歲二日妓盛粧衣飾闐美
官商相和以祝歲首謂之
空囀各樓之繁華以此時
為極矣聞本日妓粧舉體
一新纔不脫皮豫裁之於
客歲中紋理深色極費工
夫競取時樣走人京師託
織造所歲言將暮脚力窮

日力爭刻致之其最快者
賞之以數金照遲速賞有
等差云
情之不可以已一顧脂粉則
猶狂蝶慕蕊終欲移于家
庭專春春色然風雨嫉花青
帝猶不能制也況於人乎
間妓落籍多得之於豪農
鉅商拉去收別莊則已矣
或畜之坊丹為外宅則騙
主而養雛妓陽稱助生理
陰謀自恣矣狎客情郎窺

又曰其類可愛其心
可惡僕若他日得志
寧欲營山莊開置之
呵呵
藍川曰春翁竹枝有
溼一顰眉三十六中
人資產百城傾何此
寶錄也

藍川曰聞近日清商
寓本地者釀酒獲利
利外人校繪真可憎

漁村曰狀得妙

隙而進妓乃得縱意於其
所愛不得拖鬼胎是本地
之恒例也
妓之湮齒亦得於豪客以為
一在之名譽衣飾一新錦
繡盡美大開壽宴觴客餉
眉餅樂籍中是為恒例壽
儀之腴大抵及千金云
坊無處不脂粉樓樓無時
不絲竹燕歌之聲過巫山
之雲趙舞之影欺章臺之
柳使人為遊於仙都之想

秦淮之情莫揚州之風流
亦不如本地也
本地自古無釀酒家皆仰諸
他方而白雪金剛為北越
第一矣又自羽州大山來
者極美不讓丹釀
小千谷多製縹緗緋緋謂之越
後縮其薄如蟬翼而不粘
于體最為佳品矣盛夏眾
娃新裁為衫宛如妃著
較新出洛水也
本地有游園稱白山公園多

繭齋曰解語之花與
無語之花一時並開
可謂一大奇觀矣但
恨近日無解語之花
勝無語之花者耳
又曰此館而閱書畫
會何等裂風景後段
唯有拉妓往觀為數

顏文纔不肖

繭齋曰僕嘗有詩其
一聯云古松寸許龍
麟古新竹尺餘鳳尾
新蓋亦實事

園
植花樹以供游觀南園之
植梅杏桃李紅櫻媚
海棠醉牡丹芍藥取次占
春北地則花信不能應曆
二十番一時開落及花
候衆妓爭游觀蓮步生香
柳腰翻風與群芳鬪艷於
一園中三春之行樂其盛
於此時矣
園中有燕息之所稱借樂館
時閑晷畫之會或張送別
之宴游客常不絕館臨蓮

池夏秋之交最佳錦雲爛
燦潤香襲衣遊人追逐候
拉妓往觀焉冶容艷態兩
不相讓矣
暮靄抹一百三十餘橋街燈
照二百四十餘坊每坊張
夜市士女雜遝而古坊殊
為盛矣花師爭搬來蒼卉
謂之草花市奇花異草淡
紅濃紫千嬌萬態四時無
不春風矣
沿渠而植柳千枝罩春夜之

漁村曰：當是時，遽使
與諸聯數張，則其病
頓愈矣。其效豈是實
丹之類。
蘇川曰：此評先得吾
意。
蘊齋曰：丹釀之未發
聖者，彼之以神薦故
東原之俗亦呼之被

盛
夏則載妓趁涼，信川一帶
微波，載妓趁涼，信川一帶
之香，惱河伯，綠竹之苞，動
龍城，至夜則燈火萬點，倒
射水底，如衆星，隕來，浮
沈于波間也。絳涼士女，集
水濱，爭擲飛螢，長袖飄風，
絳扇映月，涼味與遊趣合。

娼
為夏晚之清賞矣。而不
妓之厭客者，受身值而不
許，仇儂使客通夜守空房，
乃狹斜之常態也。本地之
娼妓，不然。若厭客，則推病
而去。鵠母不敢尤客，亦不
得怒。顧比之使客通夜守
空房，則其情有可恕焉。
非娼妓則其情有可恕焉。
謂之被薦，所謂私窠子是。
也。不詳其昉於何時代，又
不知依何典故，名為蓋潛

據此則名風物因
憶世間司其名而異
其實者，頗有非寡
婦而稱八百八嬌者
焉。得食妻帶而稱
僧者，為商賈而稱
官吏，愚氓而稱戶長
者，吾未聞之也。若使
夫子主于今，茲將不
還正其名也。
蘇川曰：醜俗可厭，不
可無矯正策。

似
娼而非娼，似嬌而非嬌者，
謂之。後家蓋過嫁期而失
良媒，月下冰人不省者是
也。故判眉，淫齒守空房，與
寡婦一般。邦俗呼寡婦為
後家，故亦以彼名。此耶古
有八百八嬌之稱，其盛可
想矣。聞昔者無有娼妓，寡

狹
婦無依者，陪酒奉情，是為
土妓之起本。而後家之名
所由出也。
斜樓主，十之九為婦女。而
亦有如主翁者，或有客誘
樓主者，不敢尤，想有所謀
而然也。歐陽氏教坊記
云：藕五奴，妻張小娘，善歌
舞，有邀遊者，五奴輒隨之。
前人有歌，得其速，醉多飲酒。
五奴亦醉，但多與我錢，喚饑
子亦醉，不煩酒也。今呼藕

漢村曰京妓淡粧越
 妓徒脂粉作者謂之
 擬京樣者不信
 總齋曰予嘗日本地
 之妓稱鶴妓蓋以東
 京其頭髮西京其水
 飾而別帶一種之土
 風似賴政所射性高
 故也
 五峯曰非東京非西
 京總見新編之妓譬

本

妻者為五奴自猶始乃如
 彼主翁亦五奴之類也
 地之妓其粧飾古與京都
 女郎一般今則專擬東京
 然就熱於冷即越女之本
 色也忍呵責執情實者無
 有焉雖然渠亦人也豈皆
 無情者哉不以禍福收蘭
 質不以死生渝蕙心者亦
 復有焉土俗却目為花風
 病而嘲之是其所以致無
 有也

如李詩者唐宗各有
 其長而拘門戶之見
 者揚波抑此一意揆
 微必期通有不知其
 檢性靈尚格調是明
 人之所以多偽詩也
 漁村曰越女入東京
 其價倍蓰焉蓋以其
 輕嫖能接客也京
 妓不然一意撰客以
 為趨舍所謂居養之
 所便然固不可誣也
 總齋曰妓之多情與
 婦之不同各非其本

本

七月七日各坊製一大燈數
 人舉移插鼓取勢闊肆廢
 市排宴饒客書間用山棚
 代燈夜令殊雜道人景闌
 街鼓聲轟天循行坊市之
 間遂出海濱而罷謂之港
 祭祭住吉神云然祭者蓋
 名耳其實出浮圖氏孟蘭
 盆之說漢土所謂燈節之
 類也
 本地之俗中元張燈稱照祖
 先冥途夜中展墓此夜男

色也及之者則受嘲
 周其理

五峰曰夢湖詩題曰
 夜自寶珠津歸柳原
 村途中即見蓋在越
 中時作也非指新編

總齋曰淫人薄命才
 子始發千古一大恨
 重山曰妓中者
 豈有二人思讀到
 此令人息
 又曰忘其名信可惜
 蓋今猶稱舊名
 五峯曰世有十娘
 其人者則余將不厭
 為情死而耕山却忘
 其名實足無情男子

金

女結隊而踏歌謂之盆踊
 喧嘩雜道微且以其蕩人
 心為官所禁今則斂影矣
 卷菱湖有一絕可以徵古
 其詩云幾隊花燈掛半空
 歌聲笑語月明中膝頭古
 墓無人祭一點秋螢照露
 叢
 金陵名妓李十娘語余澹心
 言曰兒雖風塵賤質非如
 淫蕩者流學夏姬河間婦
 也此言誠有道理雖非好

烟

淫蕩者亦不得已而栖
 栖于風塵中者余知其妓
 而忘其名惜哉
 烟花場必有稱幫間者而助
 酒興媒紅情如本地雖則
 無如此徒教客不能越遊
 也蓋越女天質艷麗加以
 歌舞超妙花顏柳態置人
 於春風中是其所以不須
 幫間也
 孫氏北里志曰多有遊惰者
 於三曲中為諸妓所養養

可慨
蘊齋曰赤田碧海信

必號廟客於本地絕無如
此事而僅有之不能其全
終始也

白山祠傍枕信川有酒肆稱

延壽亭青松蔽門碧波蘸
欄劍峯角巒當窓呈秀水
光與山色映盃盤間小妓
舞大妓謠漁唱答棹歌松
籟入翠微晚風吹水涼氣
透簾使人為坐廣寒宮裡
閒寬裳羽衣想真為納涼
第一之地矣

白山祭典為春秋兩度而秋

時殊熱開妓盛粧衣飾闌
美千艷萬嬌結伴賽神紫
袖飄鸞錦帶曳霞羅纖張
碧髮屐鳴玉顧盼翔翔賽
唯託名而已

東帶信川北面於海有一行

樂場稱毘沙門坊酒樓連
軒娼婦聚居焉宴秋之交
商舶輻輳遊客麇至絃聲
鼓韻日夕不絕古有蓮池
起亭于其中客追楚候聘

蘆川曰日和山俗甚
僕欲呼做下晴臺不
知道否

蘊齋曰數字日和山
之景此矣

妓開宴自遠望之真如展
採蓮之圖云今則無矣
坊北瀕海有小丘俗呼日和

山設露臺探張商舶謂之
船見臺佐山可撫信水可
掬與羽之山隱約上掌回
首街市聚眉間有樓青
帝高揭以待遊客客携妓
至此度舞曲彼戰豁拳亦
行樂之一場也
寺坊之西稱太畑坊有酒肆
二一曰行形亭一曰堀田

漁村曰依山築園地
形已得宜矣而酒之
芳烈魚之鮮美亦與
康京八百之調理
相伯仲
五半日山園池
之上月西湖柳一株
傍構小亭翠簾籠簾
清遠可適頃日往遊
則見大閣巍然俯臨
池水雖有壯宏之觀
大損風致令人強解
事者往往如斯

大

樓搭起數榭待客松樹為
林奇草異木春華夏秀庭
園之勝為本地第一矣遊
客携妓而至松韻和絃聲
空翠滴紅衣別有風趣焉
向夕懸燈數千葉嫦娥之
影自遠望之疑星宿聚于
林端也
畑坊之後有丘安穀神祠
松柏蔽堂宇甚幽邃娼妓
日賽猶與漢土祭白眉神
一般前時春夏之交割烹

漁村曰夜間有柳陰引袖之自地可不戒哉
蘇齋曰過譽所謂出里池上雪山者
五峯曰鯉魚價賤而味美尤可入吾輩食士之口

家就_二祠側起_一棚青帘招客
今則漸衰矣
寺坊或稱脫奔巷續隔渠有
唱妓招客繁華亞古坊沿
渠而植花樹楊柳舟行其
間香芬襲人翠色滴衣使
佳入添一層之艷
春風始暖堅冰既泮漁人網
鮓魚觀者翳至於是酒肆
就海濱起棚風帘飄雲芳
烟罩海嬌客拉袂釵來笑
語紛劇綺羅成叢地轉沙
漠境開佳麗亦為遊春之
一勝焉
西風吹荻蘆秋水浮寒光鰕
魚初上漁舟爭先下網銀
鱗刺潑士女往觀恰如楚
人競舟於汨羅或有客之
載妓觴舟中而水色和嬌
歌紅塵中生紅塵外之清
趣焉
鰕魚初上網者謂之初魚以
尺論價一尺抵二十金方

藍川曰善狀

五峯曰蟹之大者謂
鮑場蟹亦他邦所以
也其味尤美比之東
京車蝦更優幾等

蘇齋曰八字形容得
妙

五峰曰春翁亦有詩
云故國青山不得回
此間松蓋斷碑苔招
魂壇上淚如雨血因
進香千里來讀之使
人感愴

俗之結習猶東京於初松

每朝近郊農民擔來野蔬張
露店販之謂之朝市蔬菜
皆帶郊野之露氣甚食清
鮮也漁人亦搬來魚蟹鬻
之銀鱗潑刺鱗蝦跋扈其
新鮮縵離水耳沽者手籃
而至一一論其價市中囉
咆妓亦至一洗海棠之餘
睡云
本地人力車每車繫數鐲於

上十四

背後車輻輳轉鐲鏘鏘鳴
使人為遊仙之想森春濤
有詩云雲帷半捲佩環鳴
有女同車朝玉京徐自水
樺香裏去遊仙一夢出虛

聲
常盤岡有招魂社祭戊辰之

役死王事者紫幕深垂以
護忠魂華表高聳以表義
名使人肅然起敬每祭連
二日晝奏能樂夜揚火戲
觀者自四方集肩摩轂擊

漁村曰淫奔之俗不可無矯正矣

魏齊曰倒枝竹到處有焉何足奇但土人抵死佞之則可謂奇之最奇者矣然則其奇不在彼而在此耳

往來似織嘖嘖重沓無立
雖之地其繁昌與白山祭
禮伯仲焉

本地不許色妓濫出郭外也

近有狴禁冒入歌筵而蒙

罰者清客王治本有詩云

命是錦雲堆裡仙生來薄

怒錯抱琵琶上舞筵

北山淨光寺北越名利也舊

在鳥屋野明曆中始移本

地順德帝北巡馬驛

此寺賜宸翰及御製

歌今猶見存又有稱鷺公

倒枝竹是為北越七奇之

一矣啓合龍之時士女雲集

嘖嘖于山門焉

真城院有二閣士像衆娃爭

賽地藏香火無虛旦觀音

則雕棟丹剝寶帳塵封不

復見賽之者也蓋女子奉

觀音諸方一般而此獨舍

此媚彼余不知其有何因

緣而然也

漁村曰聞此等女子往往過街頭遇人輒呼成尾而去何等歌行

酒樓皆以蓮藕充下物清客

王治本曰蓮實藕片最是

佳品東京人未有生食者

今新瀉咸以供客與吾邦

全又其賞美色香朵稱三

絕商家之女子跣足褰裾以紅

襪結兩袖手提籃夏盛白

雪秋盛青豆行賣之土音

溫柔甚可愛矣

地宜柳皆高大沿渠駢影使

人步階堤之想最可於紙

上十六

蘊齊曰此篇引古今

人許多矣僕以此詩

為壓卷

五峯曰本七無所謂

八百八蝶蓋從八百

八婦轉來也才人逞

才往往杜撰至此人

唯覆鴨渚之名而不

議焉耳

又曰細膩風光耐久

尋思所以傳唱一時

唯揚州留一夢五字

風聲頃讀五山堂詩

話方知三年留一笑

靜

涼。賴鴨崖曾遊此地留一

絕。云柳梢眉月夜微濛江

入。渠流曲曲通八百八樓

涼。似水掀簾七十二橋風

軒。新瀉富史載柏木如亭

詩。二首其一云八千八水

歸。新瀉七十橋為六街

海。口波平吞湊船沙頭草

軟。受遊鞋心顏柳態令人

艷。魚膾蟹殼開酒懷莫道

揚。州留一夢此間何恨骨

長。埋

之誤也

又靜軒詩云八十餘水合走
洋七十多橋分界坊人居
稠密何熱鬧商帆輻湊自
四方絲色鼓韻晚轟歌
吹之海脂粉鄉嬌模嬌樣
嬌紅粧坊中多半是女郎
就中有種老娼妓所謂八
百八家嬌嬌婦淡粧娘濃
抹嬋娟聞媚綺羅香洞房
春暖鴛鴦被流連莫箇不
倒囊誰憐老客情況冷且
呼一盃潤枯腸孤枕支醉

蘇川曰龜井算略全
歐西算法而更便者
惜世少知之

往時龜井津平者受算法於
百川氏某別立門戶是稱
龜井算又曰百川流乘除
之法比世所用極簡本地
之人至今皆用此法技亦
學之云

新瀉雜記卷上

新瀉雜記卷下

越之於雪他州不見其比至

越之於雪他州不見其比至

地厖盈尺耳土人掃集堆

積官覆其上而藏焉待盛

復而掘出之宛如碎崑山

也

盛復則水地之俗相競浴海

乃稱年中不受邪氣就中

以土旺牛日為最有助驗

矣此日以朝自未明至日

渡邊村曰某名越之膏者越之名產也其名為木諸此子嘗有咏詩云晨起有奇韻附前珠万斛人從軒下過雖雪高於屋

出夕自斜陽至日沒為浴度士女集海濱政為與鯽漁之時一般之者焉北戶錄曰娼許扣子入官能變新聲臨卒謂母曰阿母錢樹子倒矣因謂本地妓母大概假母真母亦間有之然不知誨子道其心唯在養成錢樹子而已文人稱本地之橋數或呼七十二橋或呼七十四橋予問之古老以七十二橋為

藤井垣留曰余讀長恨歌知唐天寶之俗不重生男重生女而本地之俗今日亦然蓋其意皆在養賊錢樹子已萬里之異域千載之遠同其俗豈不亦奇哉又曰又人不解事概如此

小崎縣川曰文人非不解其呼為七十二橋者七十四橋者不過謂數之多耳

坂口五幸曰七十四橋是也其為七十二橋者從七十二峰之例耳古人詩文中用數字皆概有定例如

十二樓二十四橋三十六灣七十二峰是也後人妄意增損即不成語

漁村曰雪况

是其為七十四橋者蓋擬揚州二十四橋耳今則至一百三十三橋云

我友銀田石牛曾遊本地有

新瀉詞七闕皆為佳作其一云風吹翠箔鈴聲送花

擁紅欄香影堆為慰空房

蕭瑟夜寫真鏡裡寫郎來

寄居有蓮池廣袤數百步至

花候紅瓣白葩藏薜蘿娜

半開含露如獻媚滿開噴

香如呈笑爭媚開艷近視

之如按漢宮三千之佳麗遠望之如鋪蜀紅萬匹之錦暉朝曦映夕陽潤香襲人惜哉地僻而知者少矣

查所謂八百八孀存名耳靜軒新瀉富史曰八百之稱

今不詳其由或言取八千

八水或言不遇稱數之多

與呼菜肆日八百同余曰

都八百八水之稱亦然與東

七修類纂曰西湖盛起於唐

漁村曰七十二橋增至一百三十三橋八百八孀亦當至八百八孀猶然況於人乎呵呵

蘊齋曰或言八在易數為大陰故本邦舉大數必以八所謂八握鬚八岐蟠蛇八頭

魚之類也。然則八百八十八條。與八百八十八水。皆謂其數之多耳。非必真有婦八百八十八人。河水八百八十八流也。此言似有理。未免穿鑿。

總論曰：詩字刪何如。

藍川曰：余亦刪詩字為可。

漁村曰：本強如予者，亦不得不抵掌贊成。植齋曰：余亦不得不批。藍川曰：比之延壽事，縱觀川身似輸一着如何。

至南宋建都，則遊人士女，畫舫笙歌，日費萬錢，盛之至矣。時人目為銷金窩，我新瀧亦不得不為一銷金窩也。

世稱飄客者，謂寄跡于花柳之間，如物之飄流而無定之徒也。本地則呼為調戲娼妓，不費一錢而過者，謂飄客。其名今而其實異矣。松塘亦嘗滯遊迹，有一絕蓋詠孀婦詩也，遠山剩却。

雙眉黛斜，把牙抵柳，鬢雲司馬琴心，何須挑當壚侑酒。有父君。

面於信川，而有一大酒樓，曰大川樓。信川之水，與羽之山，皆為庭中之物，眼界頗寬。此樓宜于月，宜于雪，又宜于雨，而獨憾無花耳。然換之以解語花，則稱雪月花，皆宜之樓而可也。信濃川發源於飛驒，經信濃合八千八百水而走海，汽船

蘊齋曰：夢塵作爭珠似可。

數十，往復如織，汽笛之聲，日夜不絕，亦可徵本地之繁昌矣。寄居有諏訪祠，例祭為八月十八日。此夜，少年相集，揚烟火，霹靂一聲，黃龍逐壁而降。白蛇噴火，而昇金烏數千，翔白烟中，銀星幾萬，聚黑雲外，奇狀異態，千變萬化，不可名狀。自古火戲之盛，稱本地最第一矣。伊太利亞之俳優數人，演技

漁村曰：獨遺古街精舍軒如何。

藍川曰：前年有為清樓，推為酒樓之巨擘，今則家道大衰零落。

於本地，不得利而去，其主幹某者，獨止而開牛肉店，其入頗解國語，懇待遊客，生理漸盛，而為一大酒肆。亭榭之規模，酒肴之風味，皆擬其園風，自稱西洋料理。本地開此業，實以斯人為鼻祖。次之者為滋養館，今東西樹旗幟。本地稱大酒樓者，有五，在大畑坊者，為行形亭，為堀田樓，在西堀坊者，為崎清，在

為一妓院矣
蘆齋曰昔者陳翁名
書林以高山房而高
山房之名高子世作
者今評酒樓亦以
高山余知高山樓之
色價自此益高子世
余不得為主人不贊
焉

漁村曰就受檢之狀
態作者何不詳述之
呵呵
又曰詳述非難蓋最
出極條河也
蘆川曰星彼腹奔巷
之媚妓余未知果有
此光景乎否也好笑

新路者為鍋茶屋在大川
坊者為大川樓或人曰為
是擬五山以鍋茶屋即為
高山
大川坊之北有連邦壘之津
兩岸繫渡舟數隻一船去
則一船來去者與來者舳
舳相叩指權相擊其往還
之繁他之所不見也
夏秋之交船輻輳於河口
帆檣如林至夜舳燈列星
影映水中自遠望之恰如

電光之擊金蛇亦一奇觀
矣

大烟坊有檢娼妓梅毒之所
稱驅梅院每月數回娼妓
就而受檢其行者與歸者
來往如織或馳鬆車或鳴
蠟展載者與步者爭婀娜
闌嬋妍隊隊吐彩步步生
香政與運華之觸風牡丹之
帶露一般
稅關在綠坊規模擬洋風巍
然聳雲霄森春濤有詩云

蘆川曰家屋之結構
亦然生白妓女之震
動他樓皆不及余未
能信

蘆齋曰東字伏後歟

繁富堪徵入港帆船檣林
立碧山前無端忙煞海關
吏收稅今年多去年
妓院在上位者四具在古坊
者曰鶴揚樓曰灣月樓曰
繡冶樓其在西堀坊者曰
漆屋樓家屋之結構妓女
之麗都他樓皆不及也
距本地東半里許有村曰關
屋即湯浴之場也自中春
及晚秋浴客麇集有酒店
彥峯當窓而簷信水橫門

蘆齋曰與捨美妻妾
而寵阿巖者一般

漁村曰須北老人即
我師也如其詩出一

而派屋後皆松林翠色滴
裳衣自為山中之趣誠近
郊銷夏之地也時有遊客
携妓來終日高卧拏老謝
安者
又里許有平島達弥彦之驛
次也有酒亭雖不甚壯麗
亦足買一醉焉飽大字者
往往就此亭而宴雖僻地
其名周乎州郡矣
本地方言呼少年謂兄也尊
不知依何典故蓋中人以

時之戲作不思派傳
于坊間
蘊齋曰兄也專入詩
俗甚
蘇州曰方言呼少婦
謂嬌媚他方所未聞
也作者遺之何
五峰曰俗言入詩不
必俗事在運用何如
耳

下之尊稱也。溟北老人一
絕云：士女相携，挈作群。趁
涼街上，欲黃昏。阿娘早認
曾知面，團扇遙招兄也尊。
近年，勸東京，閑河之例，浮舟
於信川，場烟火，綠波中，天
流皇浴，水遊船，畫舫紅燈
連，萍實，電光射金波，舳舻
相啣，楫櫂相擊，士女雜道
水濱，無立錫地，夏晚之繁
華，無盛於此時矣。
常盤岡，有鍊兵場，廣袤約一

萬步，至演習之日，喇叭肅
而兵士慎，約束令嚴，而
進退如手足，或縱或橫，或
方或圓，臨機應變，人健而
如虎，馬駿而如龍，旗影飄
劍光閃，萬銃齊發，猛聲轟
天，白烟抹地，望其人馬，則
如叱雷，霆而飛，行雲中也。
今以兵營轉新發田，不能
目擊此壯觀也。
劇場有二，其在古坊者，曰淺
座，其在厩坊者，曰永樂座。

蘊齋曰：信川與鴨河
其清濁有涇渭之別
則其實之美惡可從
知也，而同其質者

繁目互不相讓，青幟紅幕，
各繡頁，二宇以表名望。
若夫，暮靄林柳，街燈點星，
觀者為群，爭欄寓目，士女
帽落，女不知矜脫也。大抵
優人聘之，長岡間有聘於
東京者，終年不過兩三度
也。
信川之水，與鴨河之水，同其
質，雖不甚清，亦適茶以故，
茶人誇稱不已。市中所飲
皆此水也，或有鑿井者，混

所謂茶人之誇稱耳，
雖然，信川一帶之水，
新濁五萬餘民命之
所係，微此濁減，吾亦
不免早晚上枯魚肆，
也其利害，豈暇擇清
濁哉。

濁不可飲，獨在旭臺及寄
居者，甚清而可供飲用，而
已。
本地富魚蝦，固也，獨乏鰻鱺。
大抵自奧州至，所謂客魚
味之佳，貴但得於信川者，
味極美，而得極少，土人謂
之大川鰻，余好釣之，其大
者不下三尺也。
信川至冬，出稱八眼鰻者，漁
父捕來上市，其狀酷肖鰻，
鱗而味不及之遠矣。然略

堪為下物又乾食之能治眼病云

市街之西有村曰寄居農人開園種四時之蔬最有名於無菁俗呼曰寄居無甘脆無比矣今則蔬園漸廢家屋漸構為一條之坊市如其寄居無唯存名耳近日清人以書畫詩文遊本地者有數人焉酒樓之扁額妓院之屏風無到處不見其筆蹟坊間亦有販之

繡齋曰信然信然

繡齋曰吳俊明吾雖未詳其履歷意者俗畫一畫工耳恐不及館卷二先生

者耳食者雖珍襲之足觀者甚稀矣土俗之嘖曰杉樹與男子不成長於新瀾蓋有名於本地者柳樹與美女也想杉直而柳曲男子剛而女子柔是則曲直不並立剛柔難相敵之謂乎我言杉樹與男子不成長於新瀾者非真不成長不得成長其人物也自古至今有名於世者獨有吳俊明

藍川曰余將云新瀾人物有館機卷大任耳如吳俊明抑其末也五峰曰儒家有虎山北海學藝德行亦足可得也

藍川曰徐秋清美人譜有云美人艷處自十三歲以至二十三歲只有十年顏色今作者乃曰越女艷處介

之三等只有二十年顏色余欲袒左右肩也呵呵

耳如館機卷大任抑其末也每朝有擔野花行賣之者紅紅白白楚楚繁繁猶帶郊野之露氣自足一洗睡眸賣花之聲益與鶯兒呼醒曉眠一帳頗有佳趣焉予嘗評越女艷處分三等只有二十年顏色自十三歲以至十七歲譬猶花之初放婀娜可愛是為第一等自十八歲以至二十四

歲譬猶花之正開妖嬌可喜是為第二等自二十五歲以至三十三歲譬猶花之爛熳是為第三等雖則近零謝亦有一種可憐之情態也往時摩沙膠巷有鐘樓創於貞享四年云今僅存口碑耳余適閱新瀾富史載稱竟庵者詩足以徵當時其詩云寶爐猶煖篆雲直翠帳中驚睡濃一枕驚回

藍川曰無晴色不洒
落其然豈其然哉
蘊齋曰任亦重矣果
能否吾未能保證

五峰曰近時有閑浴
室於大畑通首曰群
鶴池湯泉已清命名
亦佳

今合歡夢摩沙那巷五更鐘
鍊兵場北有號砲所霹靂
一聲以報正午或驚胡蝶
之芳夢不必破驚驚之美
睡
每月至日曜日見處女結隊
而遊市中即女子師範
學校生徒也素艷而無驕
色端麗而不洒落真可愛
他日矯正淫風者其在是
等之女子欽
古坊有混堂稱新湯構造之

下十二

壯麗浴室之清瑩為本地
第一矣亞之者乃為藤之
湯各以在狹斜之中央衆
娃繁為群使人追想華清
宮之盛時焉
相生坊有琴平祠祠傍皆妓
樓至例祭之夜妓盛粧蒙
衣欺雲容姿羞花冶艷妖
麗無見而不喜者然而妓
媚賽者賽者顧妓或有相
生眷戀之情互結偕老之
契者云是所以坊名之由

五峯曰水仙王不知
所指

而起也歟
夏秋之交以船舶泊於河口
乃有棹小艇行賣菓實者
船客爭沽之水上下開小
市焉或云不翅開小市或
罷解語花
青柳橋畔有一茅店自古以
賣餅為業在謂之青柳團
子始遊本地者雖劉伯倫
之流亞亦無不試一喫者
云
除夜計算一家之歲入出掃

下十二

室而賽白山及神明之祠
謂之八采即丑牌賽詣之
義也元旦正服又賽此日
禁掃室蓋吐故納新之謂
歟
文人遊本地者無不作詩
作詩必咏柳與妓此二種
勝他處可知也野田笛浦
亦留二十八字萬株垂柳
翠雲長隔岸紅樓半夕陽
錦樣風華人似纖一杯誰
薦水仙王

藍川曰今日則有廣
商館有私商所有私
商館名字異而其實
皆全親商場

五峰曰余亦有新正
一律曰樹上明霞曙
色潤僻村何處放春
回厨湯慧婦幸藏酒
莊僧故人欣有梅海
外客投紅刺去山中
書帶白雲來問身未
免趁常例小擬拜年
過旭臺錄以博笑
西田敬軒曰雙聯絕
佳見卿之老成

今稱學校坊地古有酒肆曰

三獻茶屋土人買醉例擲

三文錢去因曰三文酒值

之賤可驚也後人送客就

此閑離筵因改獻云今則

雖沒迹猶存口碑足以致

古也

近日商人聯合開一大商場

修廊曲直連肆而賣百貨

謂之勸商場買者為群論

價擇物其熱鬧不可言也

向夕紅燈千點懸之於檐

下使人為入不夜城之想

焉松筠揅門正服拜手是我朝

一般元日之禮也如本地

則不翅邦人外客亦猶做

之叩門祝歲首其盛可想

余有新年口占一首雖不

入格姑錄及北地從來春

色晚街頭雪壓阻東君履

痕點點印蟬蛸鳥跡連

綴篆文外客祝詞交鵲舌

醉人名刺帶微醺吾儕何

井部健齋曰結末含
蓄多意思

藍川曰家翁呼阿翁
爹家婦呼阿婆陸女
兒呼丹桂地之俗
往往然也但接豚之
稱下如聞之或恐違
為豚大耳

藍川曰以聖駕北巡
為終筆可謂得神矣

以答新歲羨見梅花發異

白山祠畔有一大老松枝幹

蜿蜒酷肖龍蛇焉俗謂之

蛇招又稱服其皮能療瘡

遐邇爭覓之

方俗呼家翁謂阿爹爹呼家

婦謂阿婆陸男兒謂豚豚

女兒謂丹桂余不詳其義

蓋中人以下之尊敬親愛

之稱也

礎坊有白勢氏之邸宅金碧

輪奐邸內寬宏而亭榭點

綴同廊曲直觀臺簷雲際

高樓抽林梢控信川於庭

中鑿池沼而放魚鼈異木

奇石以逞山川之風致雖

公侯之邸亦或不過焉明

治十一年聖駕北巡駐

驛于此三日恭惟聖上

北巡前古未嘗有之盛典

可謂千載之一遇矣自勢

氏而蒙斯榮豈非累世積

德之所致耶然則為其子

孫者、宜、事、脩、厥、德、無、墮、家、聲、以、傳、斯、榮、於、萬、世、也、

關李茂陵書

新瀉雜記卷下

下十五

水谷與嶺君嘗北遊余訪之新瀉旅館以本書及新瀉志供於一案因有二十八字之贈姑錄及

南摩羽峰曰岡田氏之美譽不可不讀也
一見欸然呼酒杯風流豈啻歎奇才健毫能補治功關新記全州勝事來

新瀉雜記逸序
小原鐵心嘗評三都歌妓曰東京妓竹外梅巷西京妓雨中海棠浪華妓月前梨花各地新樣奇粧雖有時乎不同然一時之評亦足以徵今之獨怪當時越之新瀉妓流之淵藪也獨怪當時鏤心之評不及於此抑為千羊之羣不如一孤之腋乎近查妓風汚卑日趨淫靡三都皆然況於新瀉乎新瀉之妓皆柔佞嫵媚凝濃色飾錦綉一目粲然美則美矣雖然淫媒成風恬然無恥若喚起鏤心於地下而使見新瀉之妓流當

何如評焉予先試評之曰風後牡丹不知鐵心首肯否頃者友人岡田畊山著新瀉雜記予瀏覽之酒樓妓院神祠佛閣凡可足記者一網盡之矣予復何贅姑舉其尤物者以書之卷末如其抑末也
不知耕山亦以為如何
明治十八年初夏第二日曜題於新瀉客寓時庭前薔薇花盛開香氣可愛也

渡邊漁村識

城裡繁華二百春、揚州佳麗見今真、樓
頭歌吹柳梢月、應有腰錢跨鶴人、
芳譽自古遍京城、憐利蘭身絕在清、一
咲越州多火士、鐵教女子漫成名、
斗室炷香坐碧氈、勝遊未得玉人憐、柴
扉斜掩黃昏雨、消遣閑愁是此篇、
右岡田有邦君所著、新潟雜記其事
實其筆艷讀之使人有遊秦淮之思、
覽畢題七絕三首於卷末、但恐夜光
之明珠、翻玷其價爾、明治十八年七
月中、漸、松田虎山題
水谷與嶺日、三首、流麗巧綴、而無

鄙俚猥雜之失、可謂溫柔敦厚、能
得詩人之風神者也、
又曰、十六字亦是可爲一首之看、

明治十九年十二月廿五日版權免許
同二十年七月 出版

編輯人

新潟區警所通一番町第百二番戶

岡田有邦

出版人

新潟區米町通八番丁第廿一番戶

櫻井產作

賣 捌 書 肆

東京	覺張榮三郎	新發田	大瀧九右衛門
全	和田篤太郎	水原	西村六平
長岡	松田周平	全	西村鍊次郎
全	目黒十郎	新潟	小林二郎
高田	藤屋直三郎	全	本間東三郎
三條	樋口屋小左衛門	全	井筒駒吉
加茂	番場吉次郎	全	林富吉
白根	中野長藏	全	佐藤庄八
中條	村山長太郎	全	元桐賢三
新發田	中澤屋仁太郎	全	上野又吉

影刻人 水原町 太田敬太郎

谷文晁 著

日本名山圖會

大阪府文榮堂舊刻本

據大阪府文榮堂舊刻本影印

江戸谷文晁先生著 全三冊

唐土名山之画園は、おのづから、そのとくも我
邦の名山を真寫するものありきなし。たゞ、小湊海
谷文鼎先生嘗て、山水をぬき、その骨をのみ残す、探
せざるを、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、一百一、一百二、一百三、一百四、一百五、一百六、一百七、一百八、一百九、二百、二百一、二百二、二百三、二百四、二百五、二百六、二百七、二百八、二百九、三百、三百一、三百二、三百三、三百四、三百五、三百六、三百七、三百八、三百九、四百、四百一、四百二、四百三、四百四、四百五、四百六、四百七、四百八、四百九、五百、五百一、五百二、五百三、五百四、五百五、五百六、五百七、五百八、五百九、六百、六百一、六百二、六百三、六百四、六百五、六百六、六百七、六百八、六百九、七百、七百一、七百二、七百三、七百四、七百五、七百六、七百七、七百八、七百九、八百、八百一、八百二、八百三、八百四、八百五、八百六、八百七、八百八、八百九、九百、九百一、九百二、九百三、九百四、九百五、九百六、九百七、九百八、九百九、一千、一千一、一千二、一千三、一千四、一千五、一千六、一千七、一千八、一千九、二千、二千一、二千二、二千三、二千四、二千五、二千六、二千七、二千八、二千九、三千、三千一、三千二、三千三、三千四、三千五、三千六、三千七、三千八、三千九、四千、四千一、四千二、四千三、四千四、四千五、四千六、四千七、四千八、四千九、五千、五千一、五千二、五千三、五千四、五千五、五千六、五千七、五千八、五千九、六千、六千一、六千二、六千三、六千四、六千五、六千六、六千七、六千八、六千九、七千、七千一、七千二、七千三、七千四、七千五、七千六、七千七、七千八、七千九、八千、八千一、八千二、八千三、八千四、八千五、八千六、八千七、八千八、八千九、九千、九千一、九千二、九千三、九千四、九千五、九千六、九千七、九千八、九千九、一万、一万一、一万二、一万三、一万四、一万五、一万六、一万七、一万八、一万九、二万、二万一、二万二、二万三、二万四、二万五、二万六、二万七、二万八、二万九、三万、三万一、三万二、三万三、三万四、三万五、三万六、三万七、三万八、三万九、四万、四万一、四万二、四万三、四万四、四万五、四万六、四万七、四万八、四万九、五万、五万一、五万二、五万三、五万四、五万五、五万六、五万七、五万八、五万九、六万、六万一、六万二、六万三、六万四、六万五、六万六、六万七、六万八、六万九、七万、七万一、七万二、七万三、七万四、七万五、七万六、七万七、七万八、七万九、八万、八万一、八万二、八万三、八万四、八万五、八万六、八万七、八万八、八万九、九万、九万一、九万二、九万三、九万四、九万五、九万六、九万七、九万八、九万九、十万、十万一、十万二、十万三、十万四、十万五、十万六、十万七、十万八、十万九、十一万、十一万一、十一万二、十一万三、十一万四、十一万五、十一万六、十一万七、十一万八、十一万九、十二万、十二万一、十二万二、十二万三、十二万四、十二万五、十二万六、十二万七、十二万八、十二万九、十三万、十三万一、十三万二、十三万三、十三万四、十三万五、十三万六、十三万七、十三万八、十三万九、十四万、十四万一、十四万二、十四万三、十四万四、十四万五、十四万六、十四万七、十四万八、十四万九、十五万、十五万一、十五万二、十五万三、十五万四、十五万五、十五万六、十五万七、十五万八、十五万九、十六万、十六万一、十六万二、十六万三、十六万四、十六万五、十六万六、

今試定致之名利之場奔競之衡
蕩之以散色提之以榮位寵辱以
摩其膚得喪以刺其髓攻治以
千之功則何多矣余恐其癖塊不
能除十之一也而今不思所以抽筋換
腸者更使吾文冠國天下名山勝區

轉以為三冬朝夕觀以毒之余不知
翁膏肓可愈之期也既不若自悔
毒又欲舉以毒曰病人行是何說
也凡論此病者爵祿不可以榮之
錢財不可以利之威武不能屈之
姪石如盡心癡少髭頑率迂僻者

天下棄物矣今欲相毒曰病人相害
而為之是不亦可笑乎翁與南計
人也家貧無僭石之貯性又羸弱不
能盡極谷飲斯耕自給有一囊未糊
口都下既又不能勝延請之煩張其
居數里之外雖逼以權要之亦不敢

不肯移寸步刀圭之餘尚反在人於陳
編以自慰不欲為棄物而世不肯
棄之衣食所通又不若自棄世且
擊此而悶也不然則亦乃踴喬岳
亦在天雲之表矣安能自折而往來于
市塵間甯其疾大發動也贖悶拂

亂不能自排於是為以不得已之舉
以順適於己且過一日是亦可憫也余
雖此翁異業而其心計有與翁相
似者今見家事能無感焉於其
屬序也其嘆翁憫翁者乃所以自嘆
自憫也於其圖成也亦不能於捨

取而閱之則山之秀而峙者為某
州鎮水之渚而泛者為某之砦浸
暝坐而想之烟霞之變幻泉石
之奇怪恍如來耳目前使人
忘身在塵縲片時者乃翁賜
也其因之而為益深者公羽
其將如之何

壬戌孟夏東瀛朱邦老叙

跋

古今難得者唯閒。如小嶽之遠泉
水之清花中之色詩賦之趣惟善
說者不能下一語唯造者知之
今人徒慕閒之名求閒之似於是
品藻畫圖涉獵羣書以為
閒寄意玄靈脫跡塵氣以為得
焉又其下者貪生而又畏死故祝
延與求胤者此等皆冒之皮毛者也
何關神情矣夫閒得之自然者深
得之皮毛者淺矣古人所以互偷閑
之嘆也余從弱冠有此癖喜誦
左抗之言曰讀未嘗見書歷未嘗
到山水如獲玉寶膏興味一啟

奇快難以語人也又曰遊山者須
藉同調地之或要丘壑為僧策
杖扶藜惟意所適一境在旁勿
使錯過一步未了莫憚而前寧
緩毋速寧困無逸到頭而無所
得勿中道而生厭怠攜友勿太多
多則意趣不同資糧勿太堅乏
意無中敗動許見解之奴希鼓
其勇富厚好事之主時借其力
勿偕酒人勿攜孱伴每到境界
切須領畧時置筆研備遠忘此
遊山之大都也此數之與余所癖
好此相符雖然余孤貧業無閒暇
身世膠果何以當之若在家鄉

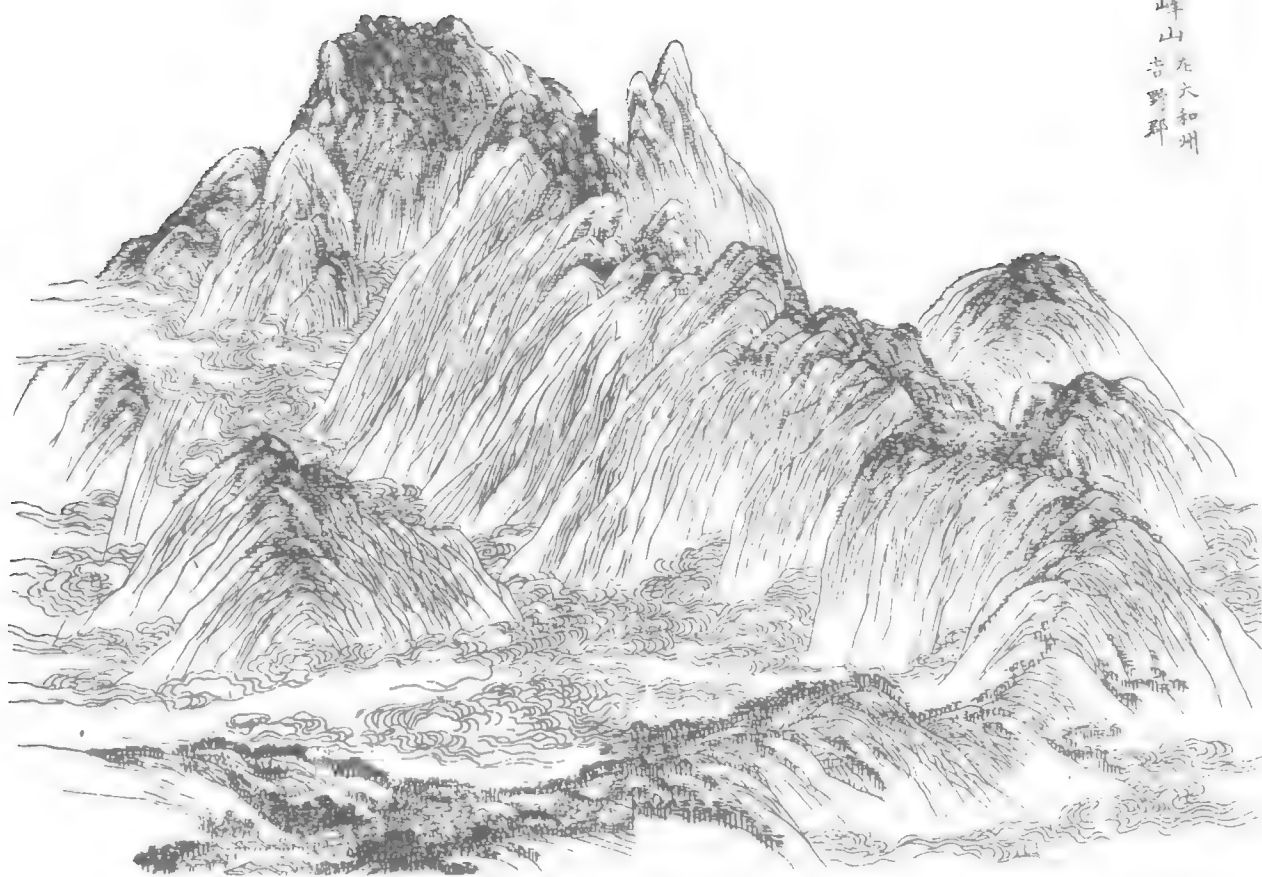
俯壤輪蹄絕跡之處埋沒不稱
 者亦多矣故非瑰奇特偉清
 高絕塵之士則偏不能足跡於天
 下也余所經歷僅十得五二耳余
 畏友谷文晁與余同病而素好畫
 因至如山水者實推鄭處孝與
 視之高孝也蓋視其其地寫真景
 者亦不為少今併以此舉嗚呼
 此之與余同病者誰居余將從
 而後得其自然者皆
 文化元年甲子秋日

南部川元善

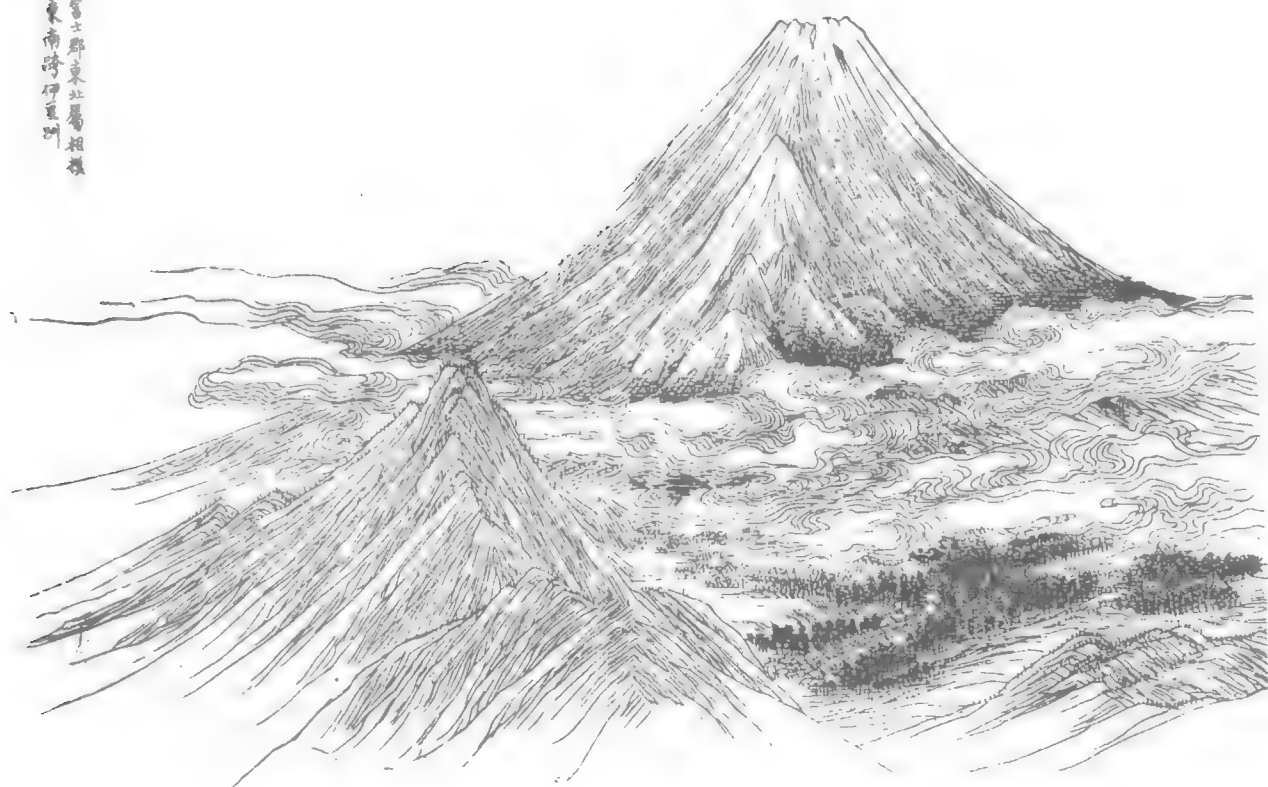
在土 蓬生為義書

余自幼好山水遠遊四方每過名山大川必因而收焉
 蓋以山豈奇勝得之于天遠者其風景象自有無
 盡之意味也錦城之王性與余同癖平生所清
 玩一山水非真則不喜凡海內山水諸勝悉因而
 藏以表之靜室中為臥遊歡娛者不數十幅多
 皆余所寫贈也去歲夏小編百餘景以成冊子
 顏曰名山圖文化元年九月刻成正景識

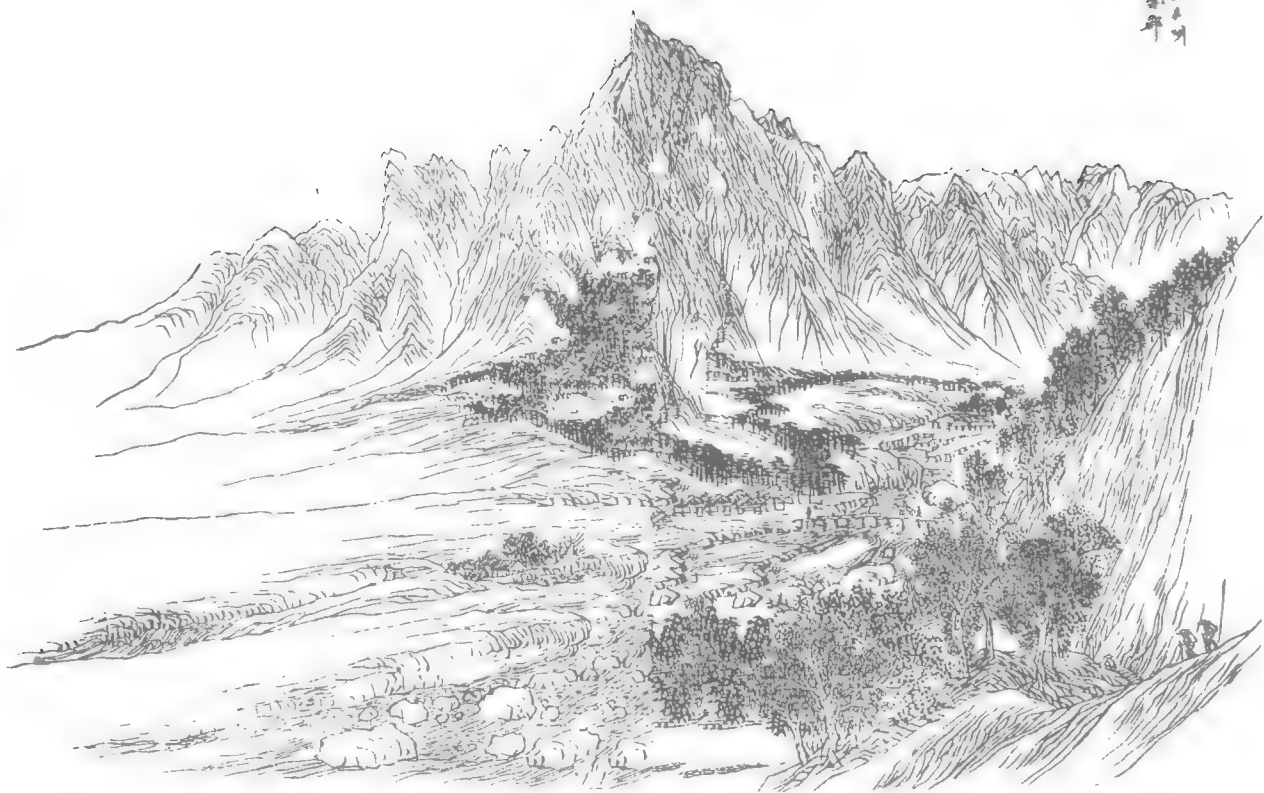
金峰山 左六和州
吉野郡



長谷川河原富士郡東北屬相模
甲斐二州東南伊豆州



神儀山
新上
中樂
年



浅間山
在信濃州
佐久郡



磐梯山 在陸奥州
會津郡



吾田多良山 在陸奥州中
達郡二本松
城西



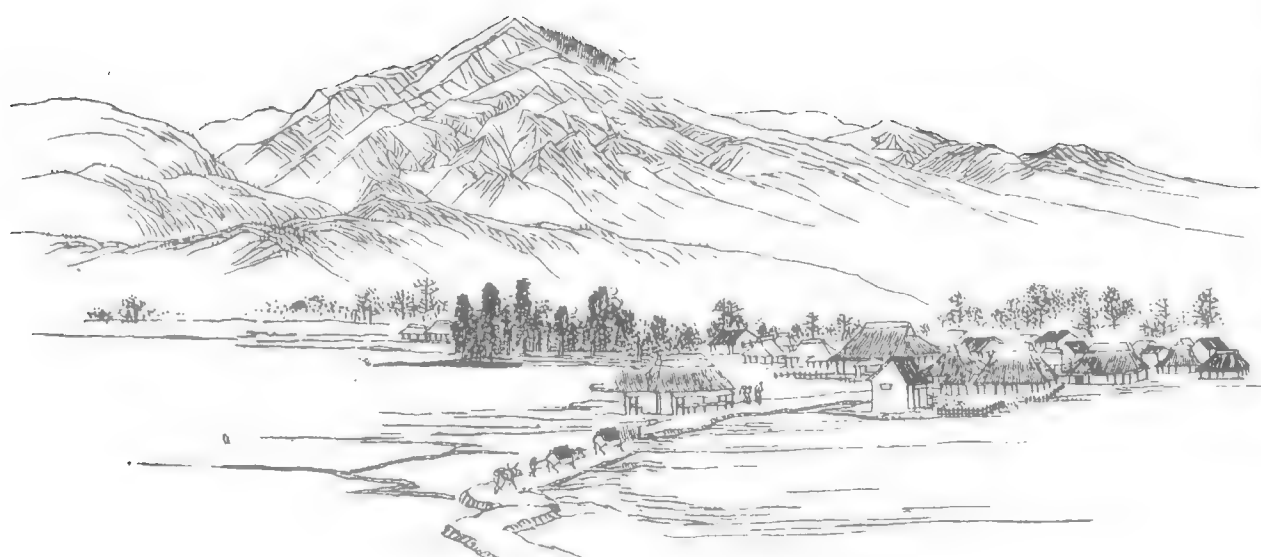
岩鷲山
 在陸奥州南部磐手
 郡盛岡城西



鳥海山
 在出羽州
 由理郡



金剛山
在河内州
石川郡東
大和州界



尚野山
在伊都郡
伊都郡



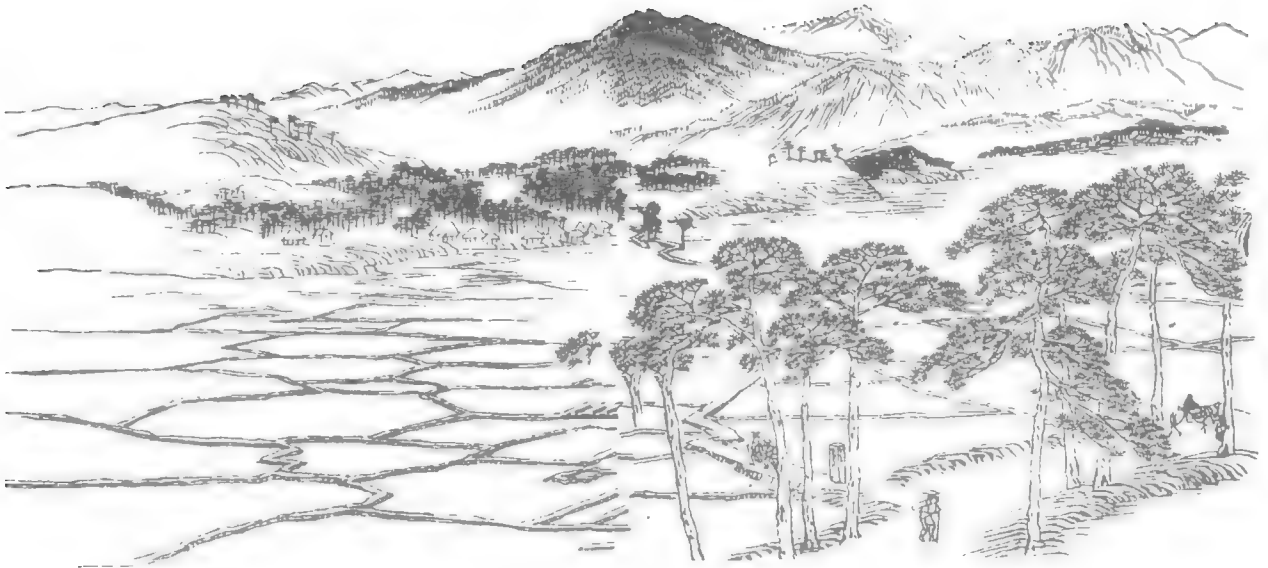
妙
在山
在近江
屬山部東
山城州



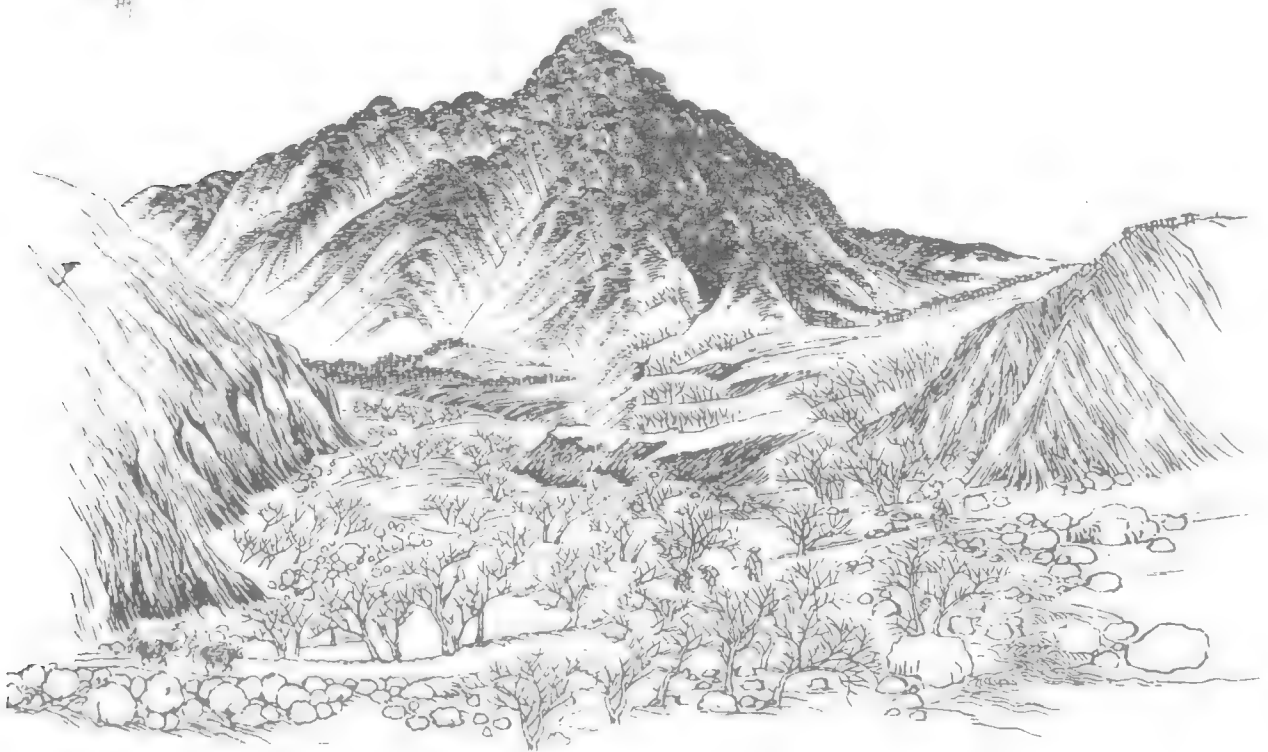
白山
在加賀州石
川郡
飛騨
郡中一州界



秋葉山 在遠江州
岡知郡



駒嶺 在信濃州
岡谷郡



御嶽
在信濃州
筑摩郡



七時雨山
在陸奥州南部
栗原郡



愛宕山
在山城州
愛宕郡



膳炊山
在近江州
栗本郡



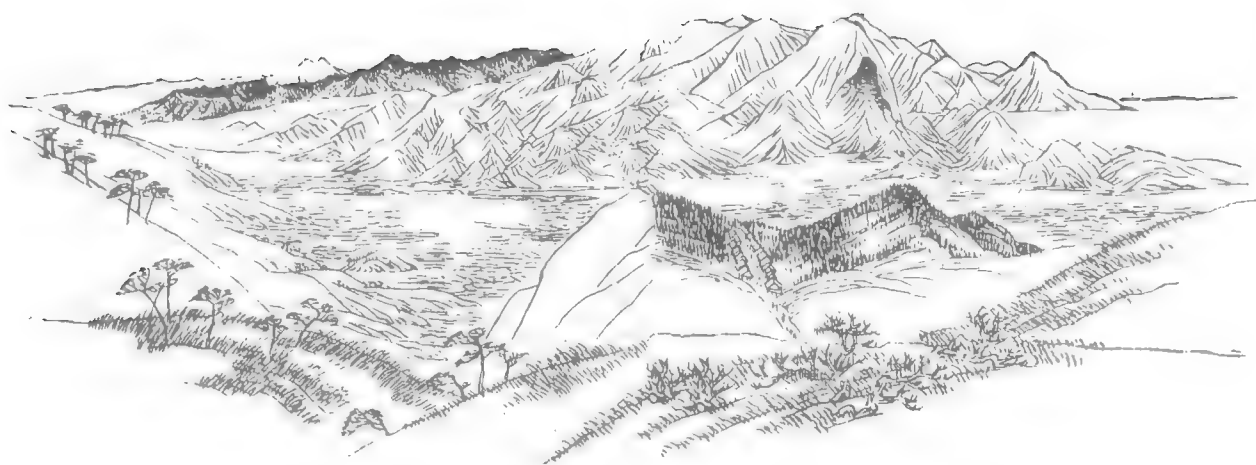
大山
在相模
太田郡



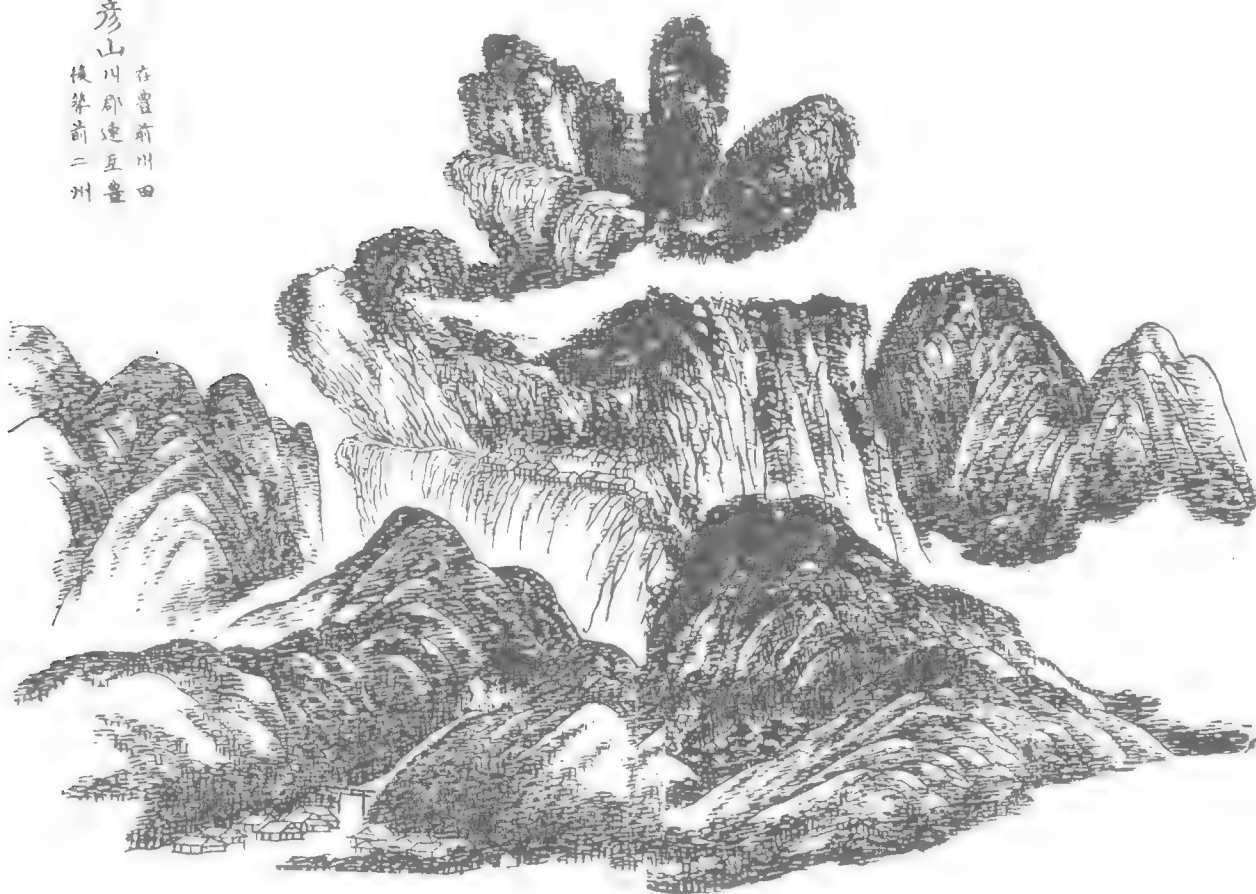
那須山
在那須
郡



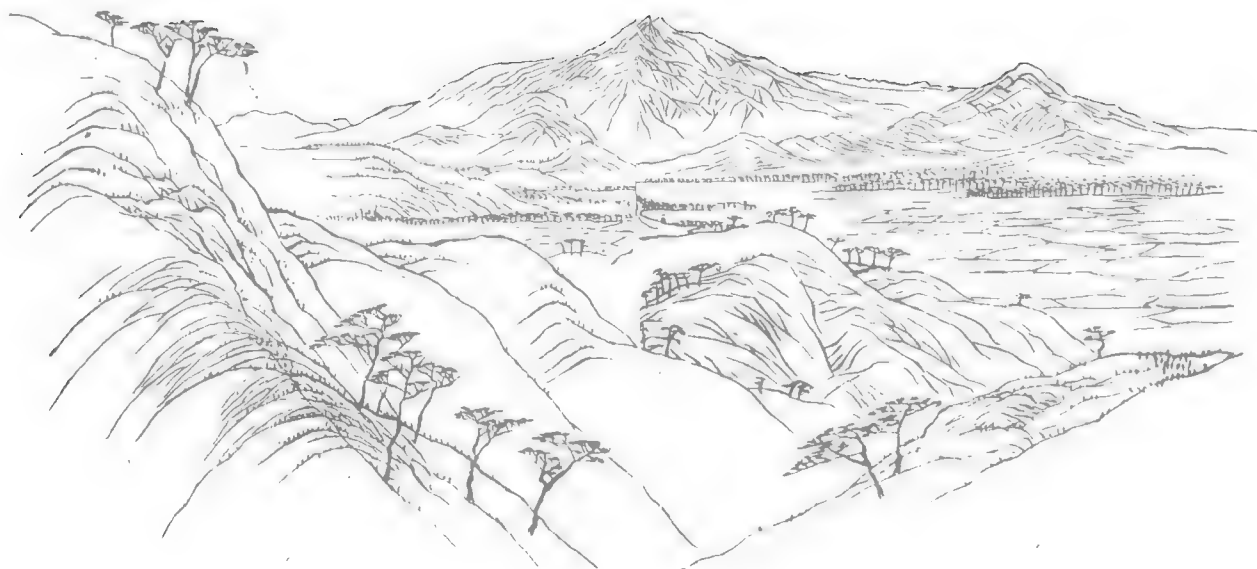
天城山 在伊豆州
田方郡



彦山 在豐前州
川郡連豆壘
後築前二州



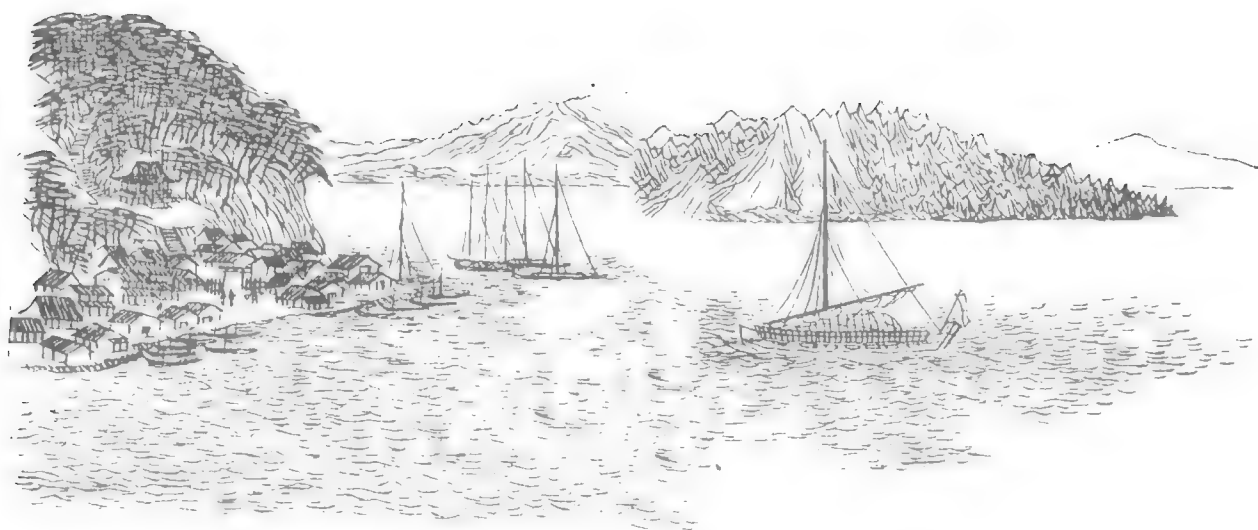
笠置山
在攝磨州



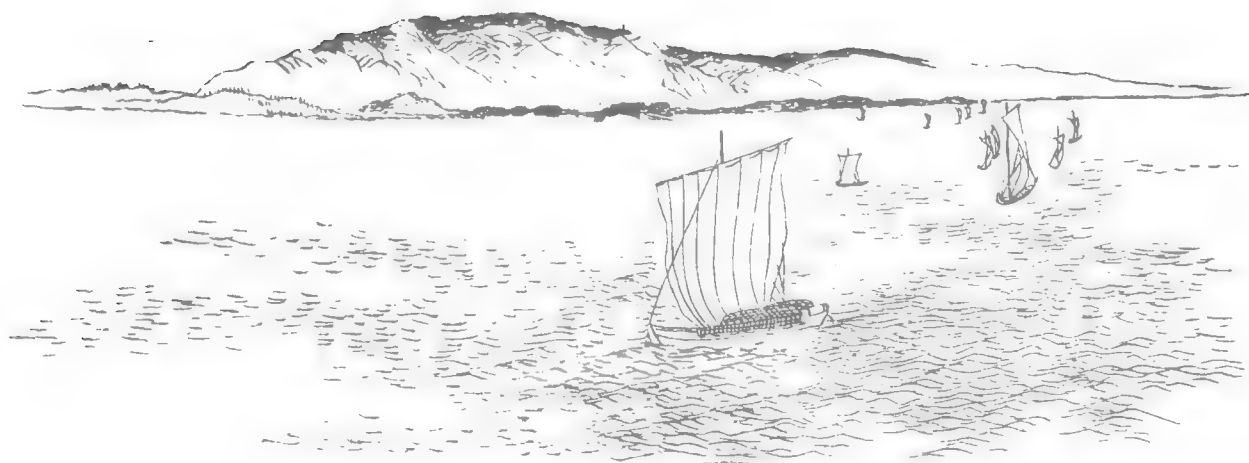
葛城山
在河内州石川郡
東屬大和州



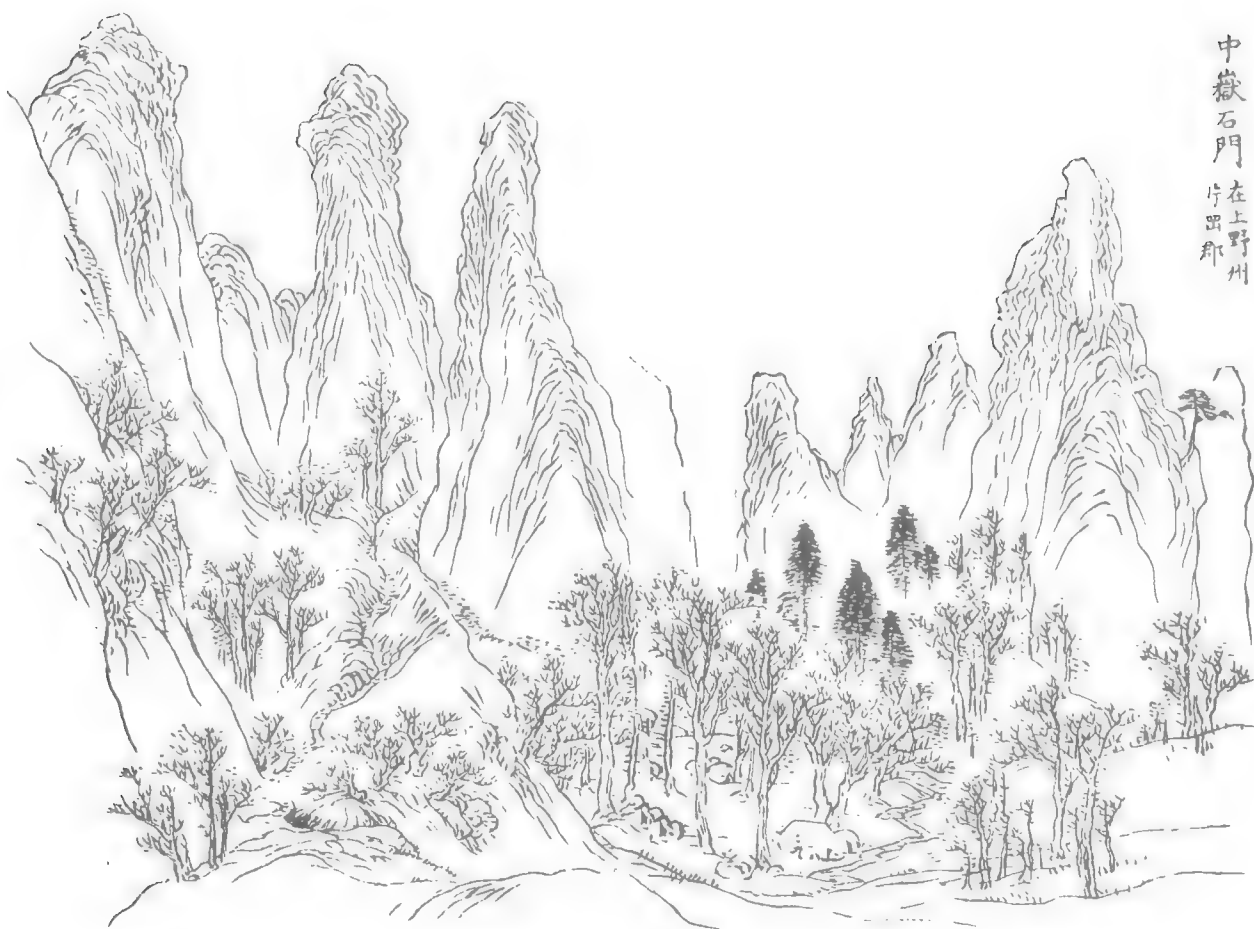
鉅山
在安房州
平郡



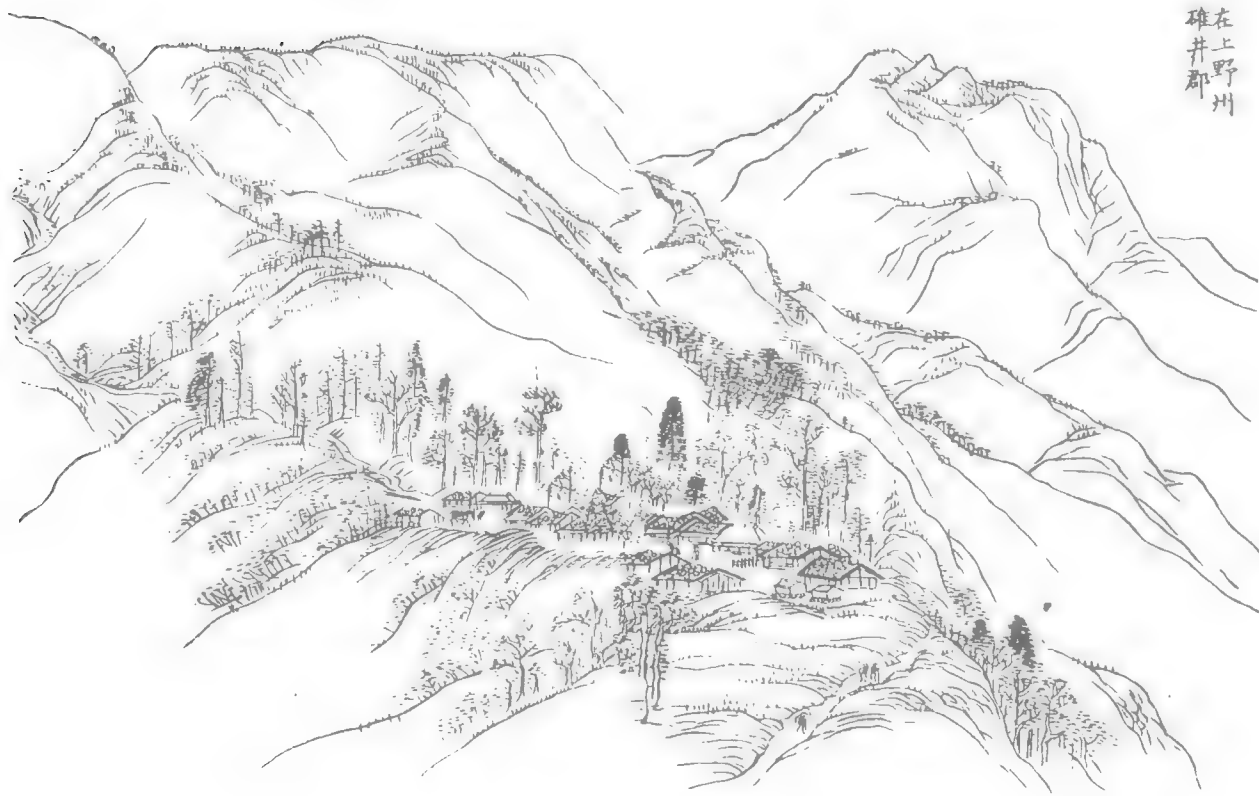
加納山
在上
餘州



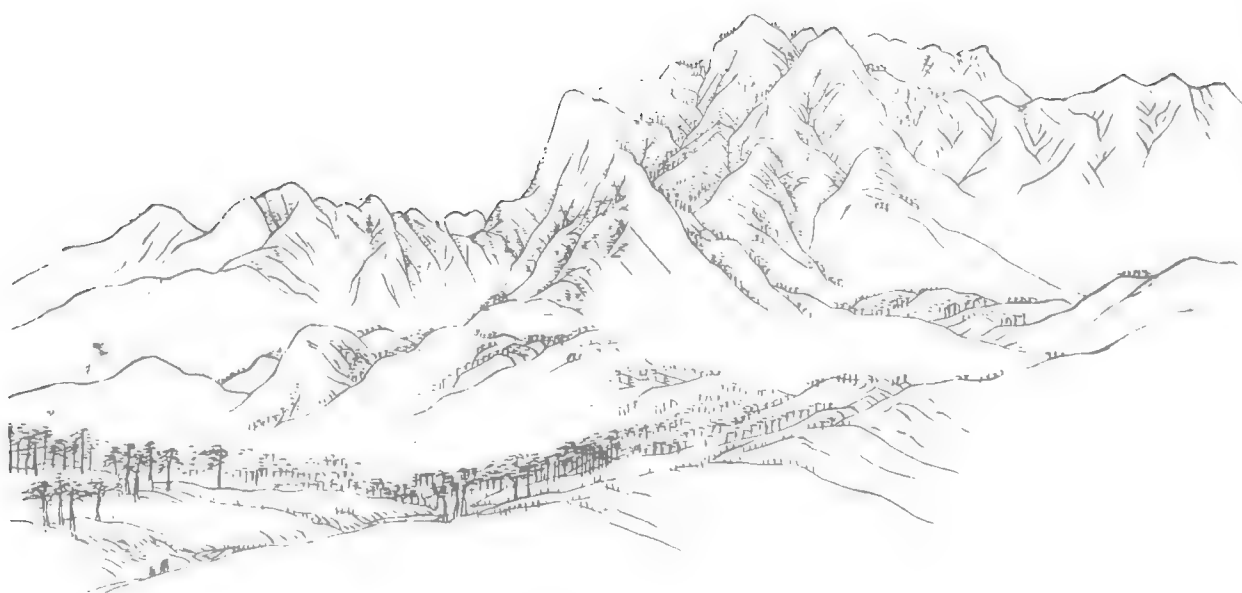
中嶽石門 在上野州
片田郡



碓井嶺 在上野州
碓井郡



天岳
在伊賀州
名張郡



皆根嶺
在相模州
足下郡



日光山
在下野州
河内郡



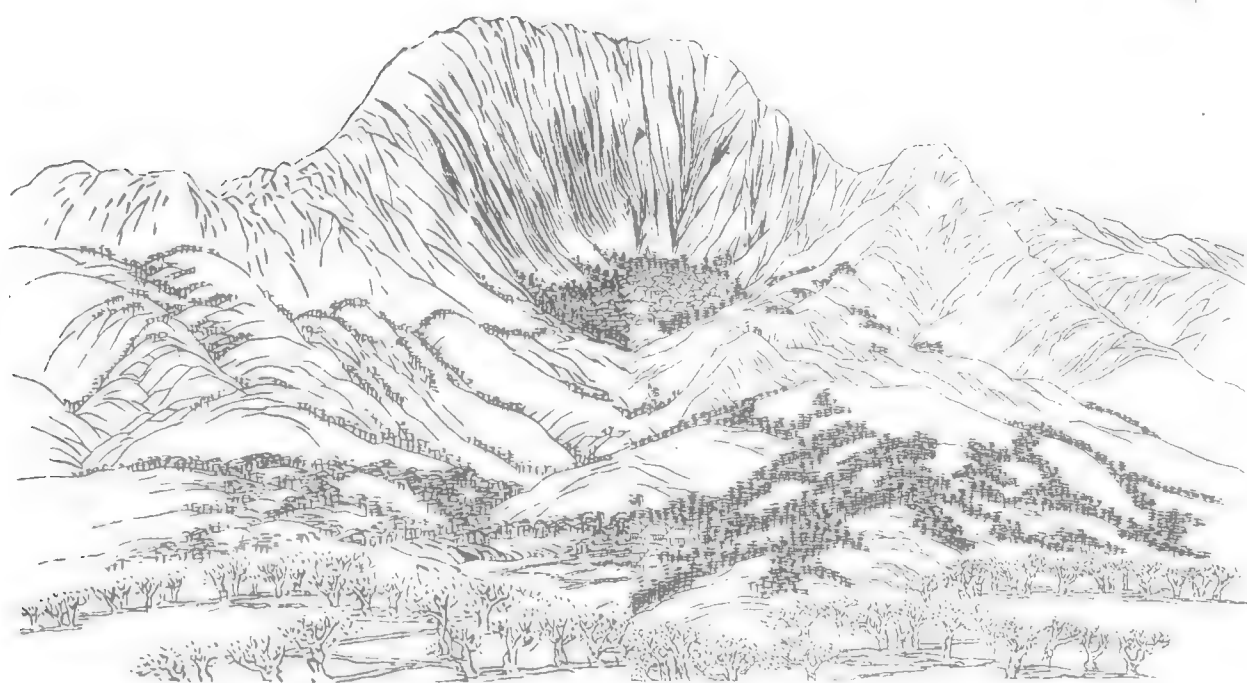
無終山
在紀伊州
日高郡



大薊田山
在陸奥州
薊田郡



半田山
在陸奥州
信夫郡



三上山
在近江州
蒲生郡



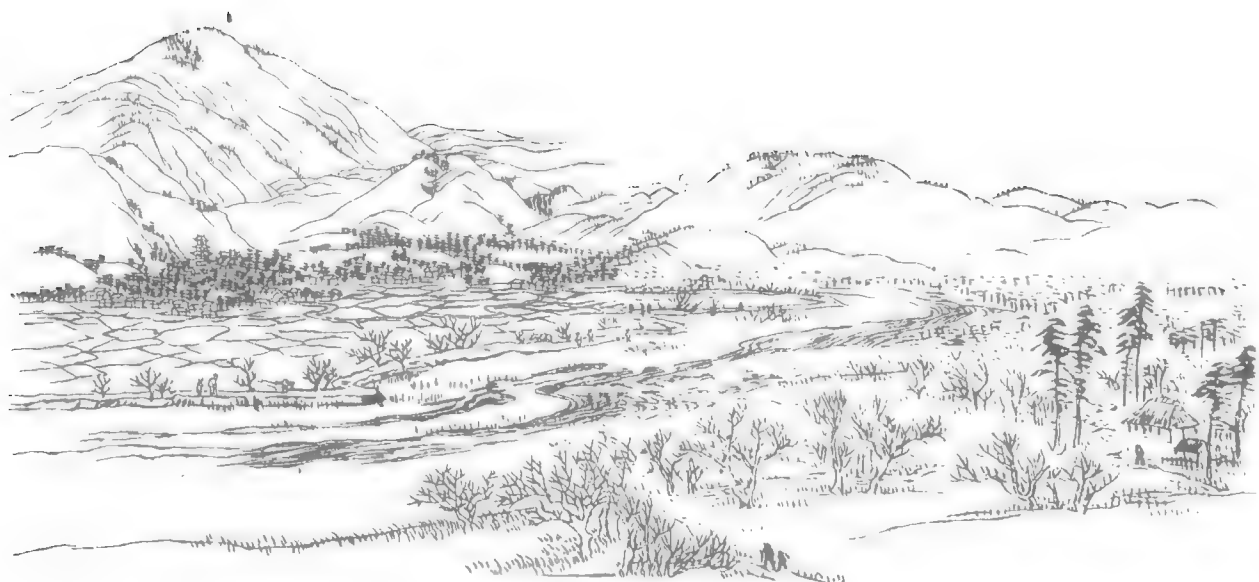
那智山
在紀伊州
牟婁郡



象頭山
在讚岐
那加郡



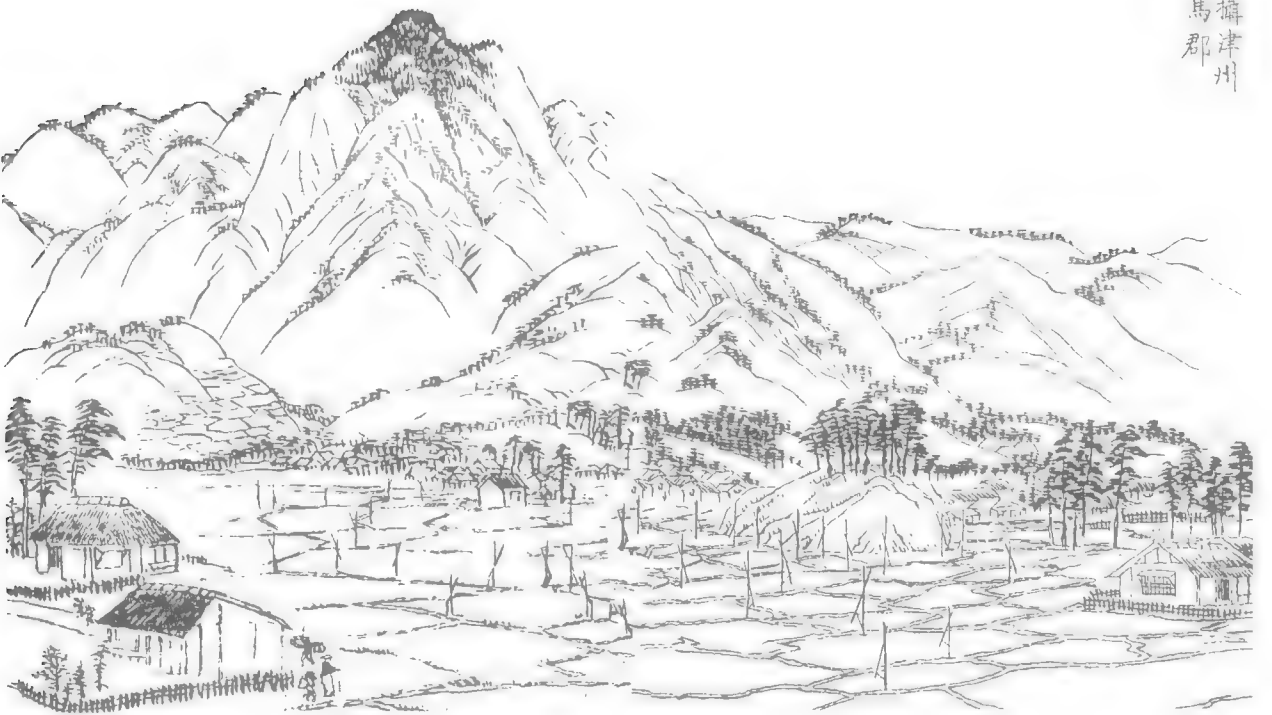
書寫山
在播磨
志加郡



春日山
在大和州
漆上郡



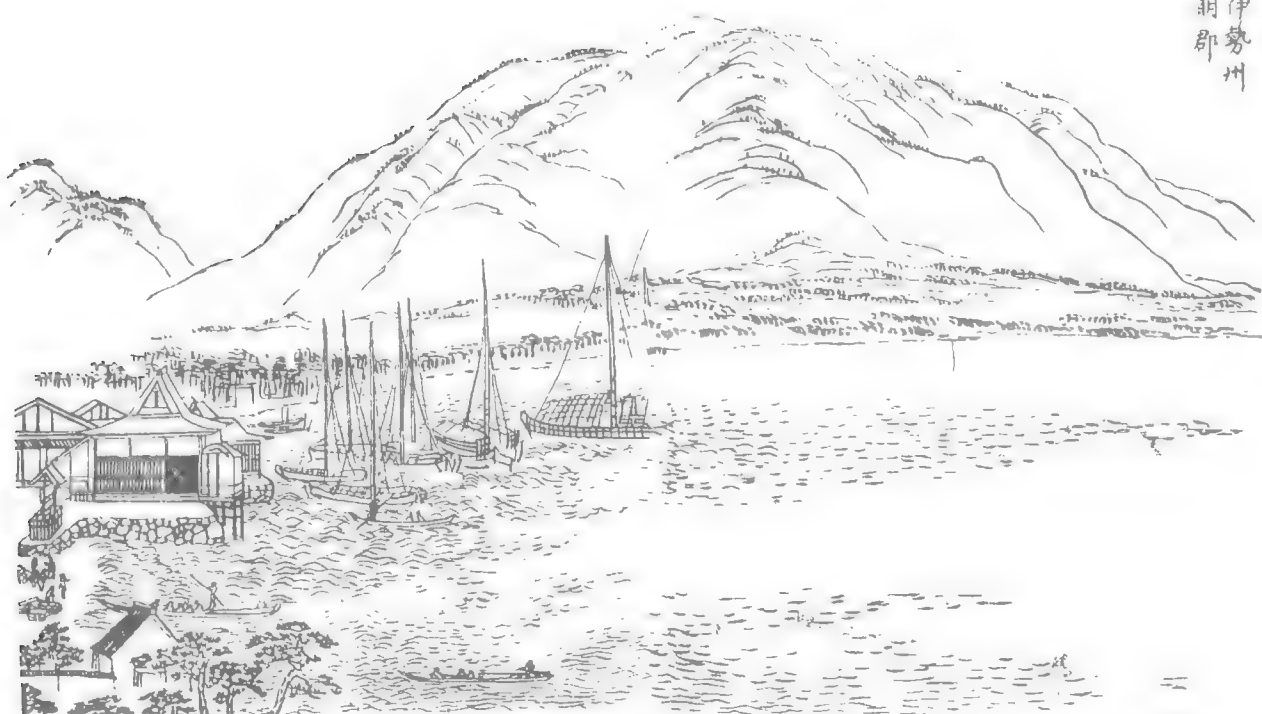
摩那山
在攝津州
有馬郡



足高山
在駿河州
富士郡



夕度山
在伊勢州
朝明郡



鳳來寺山
在參河州
設樂郡



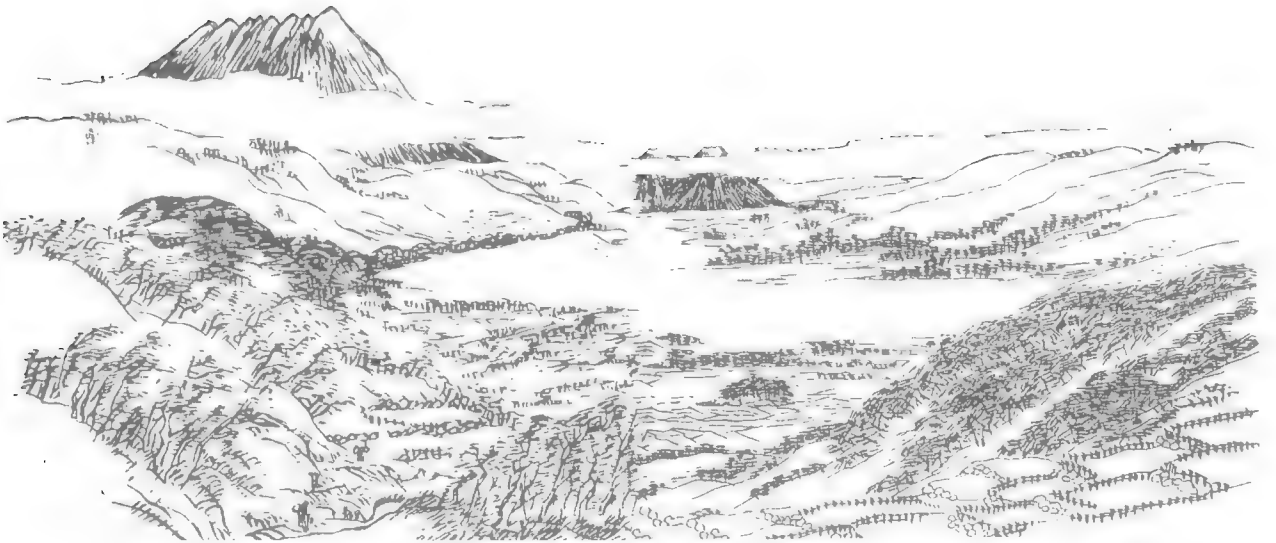
足柄山
在相模州
足上郡



二上山
在大和州
葛下郡



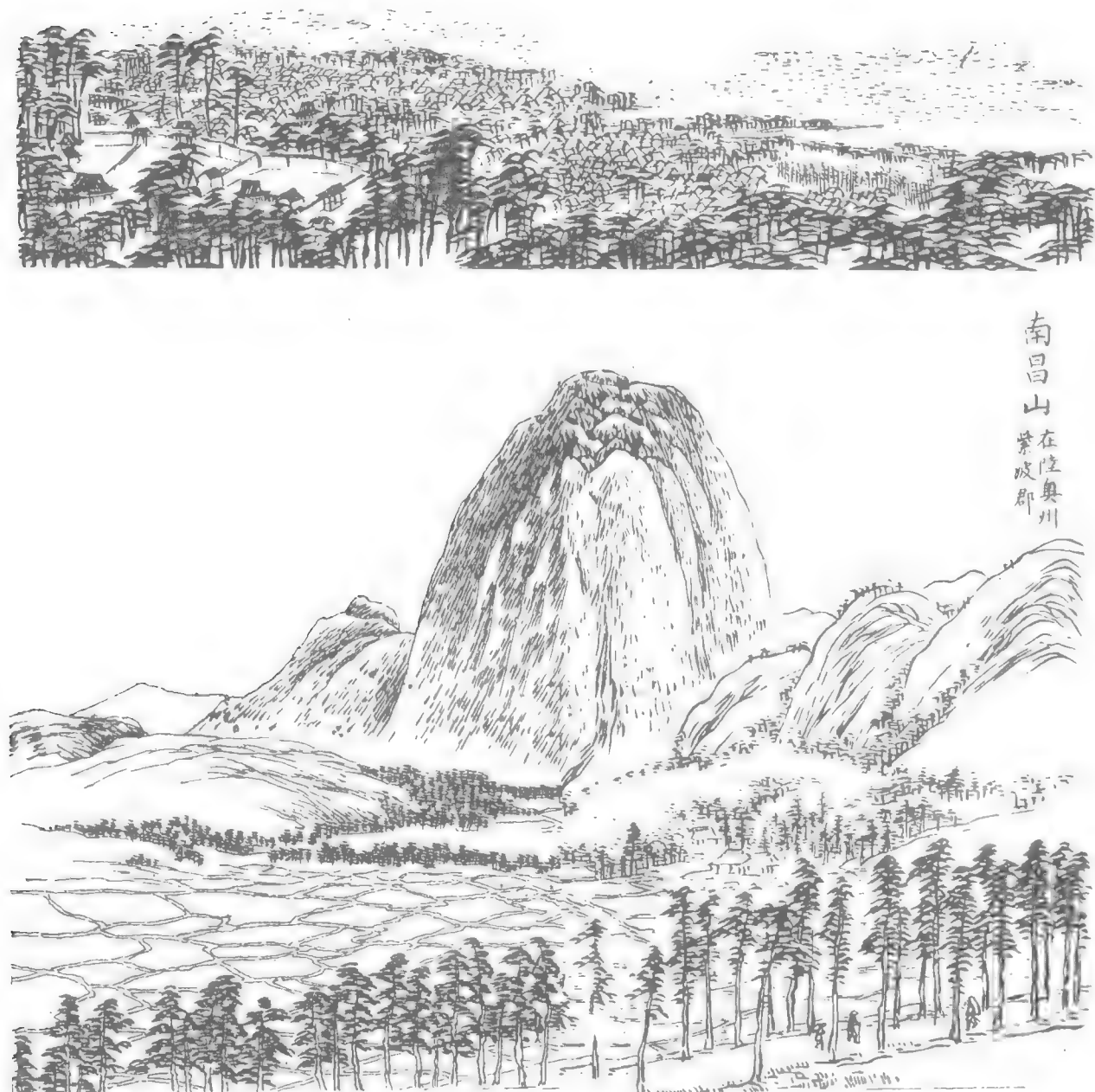
八岳
在甲斐州
山梨郡



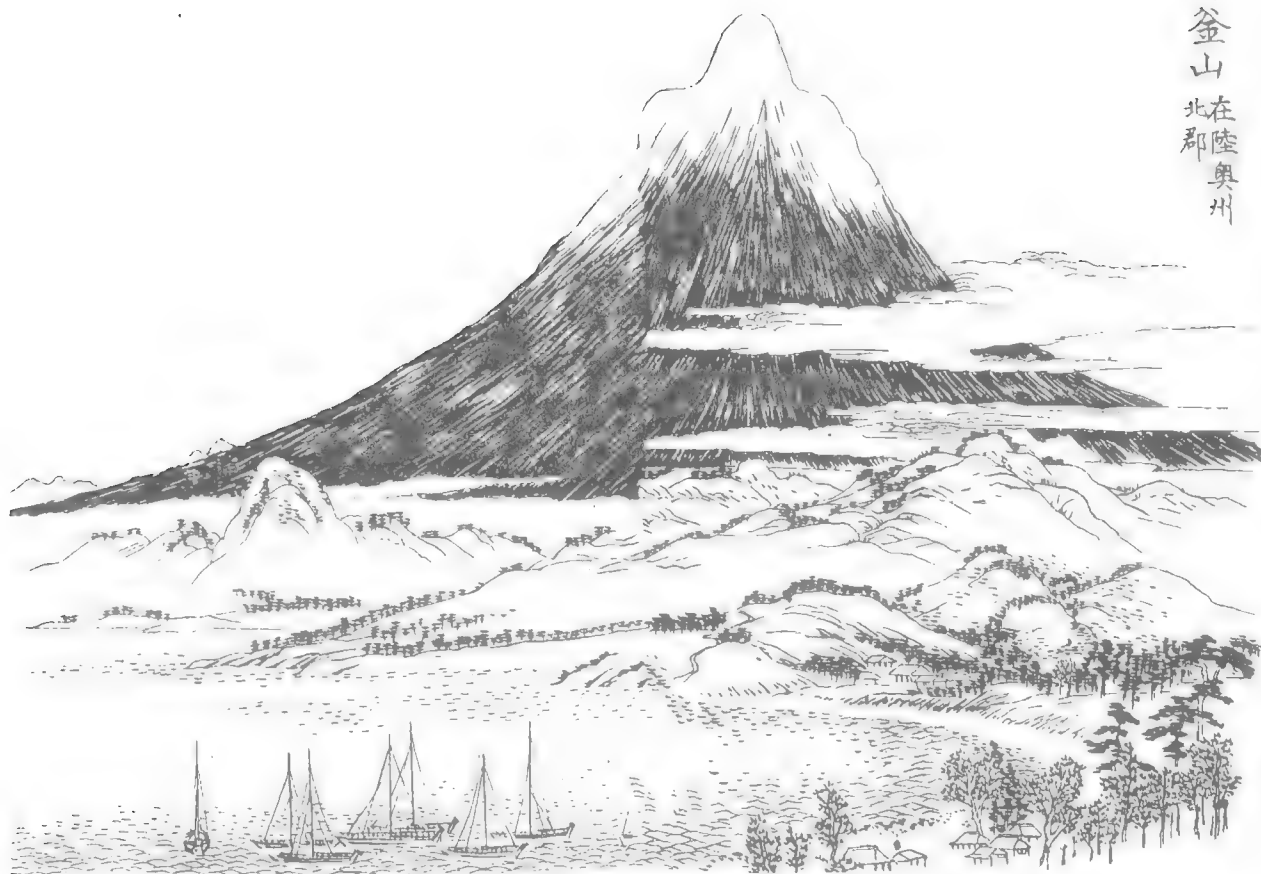
先山
在淡路州
津和郡



南昌山
在陸奥州
紫波郡



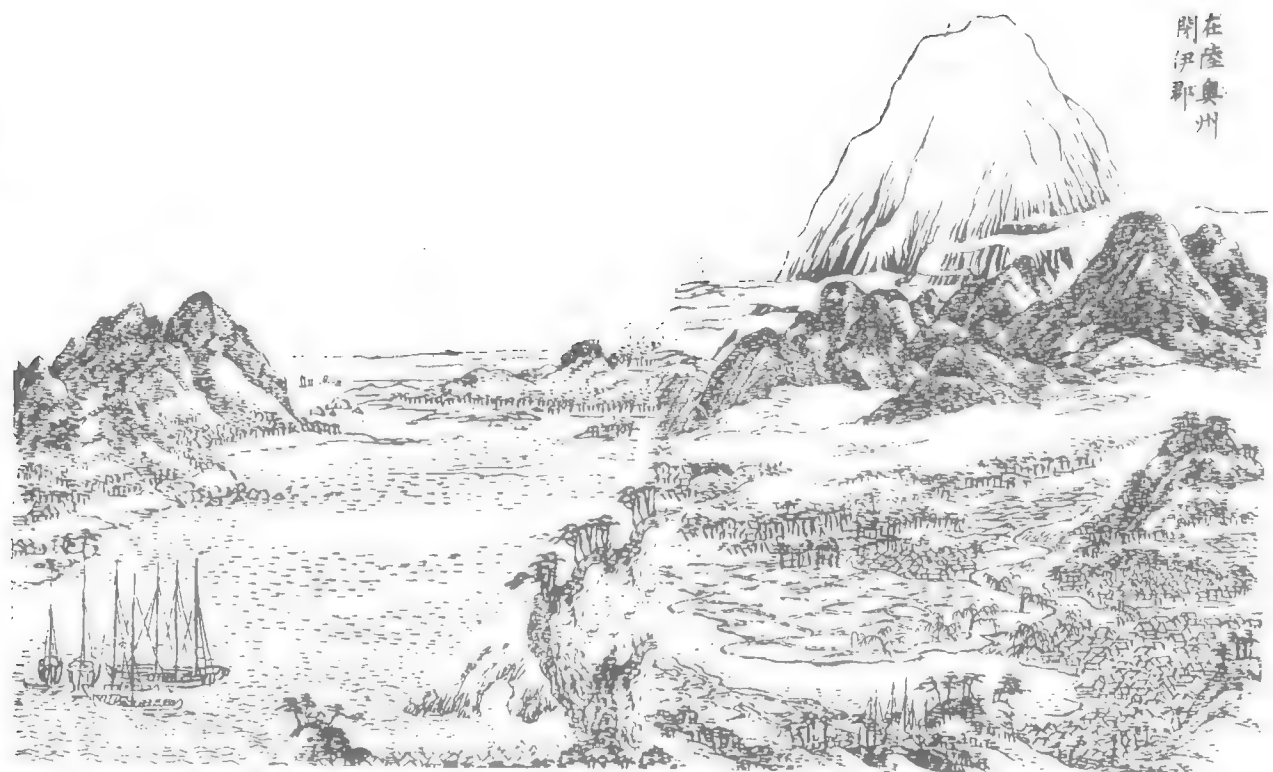
卧釜山 在陸奥州
北郡



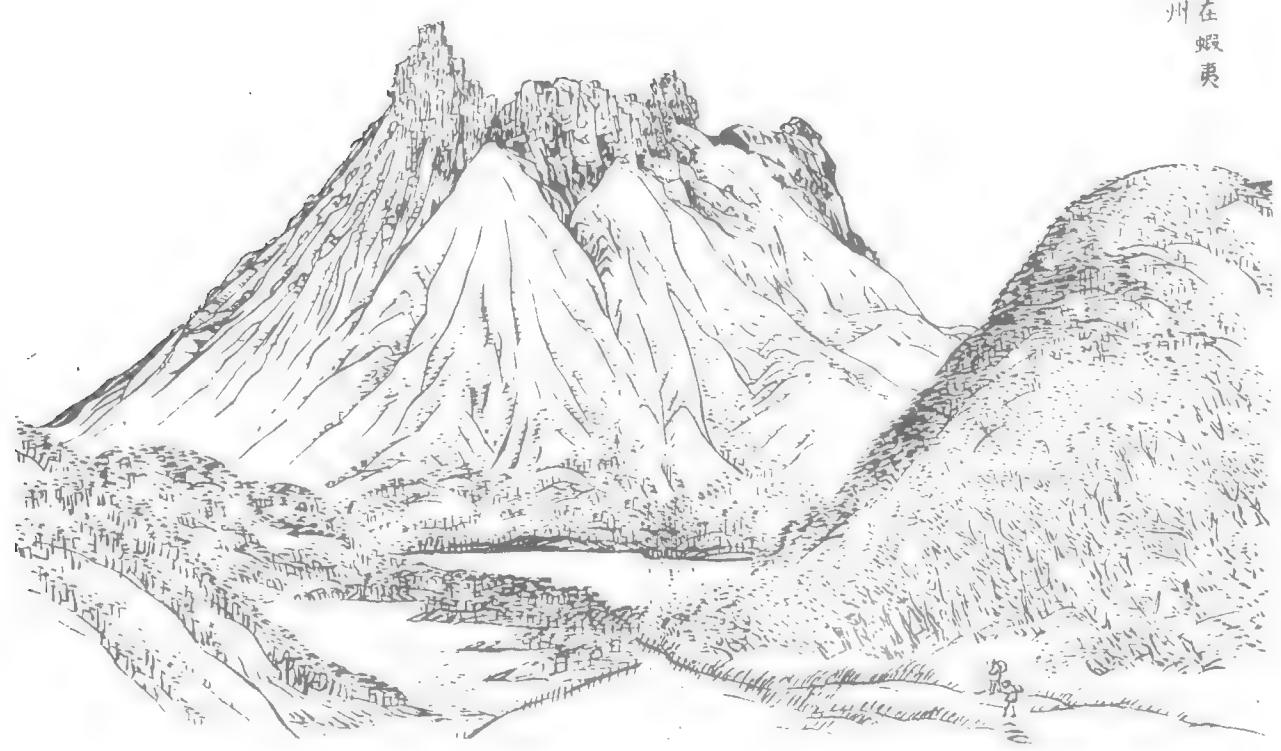
御駒岳 在陸奥州
和賀郡



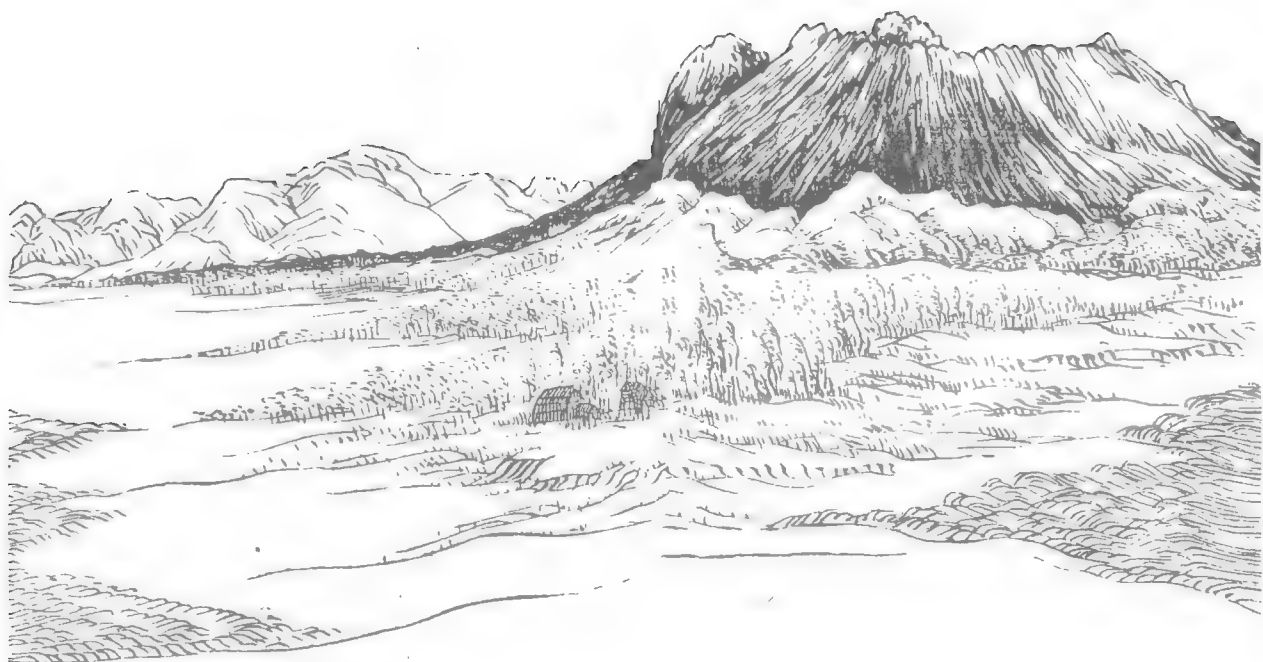
早池峯
在陸奥州
開伊郡



内浦岳
在蝦夷
州



白岳
川在蝦夷



惠山
州在蝦夷



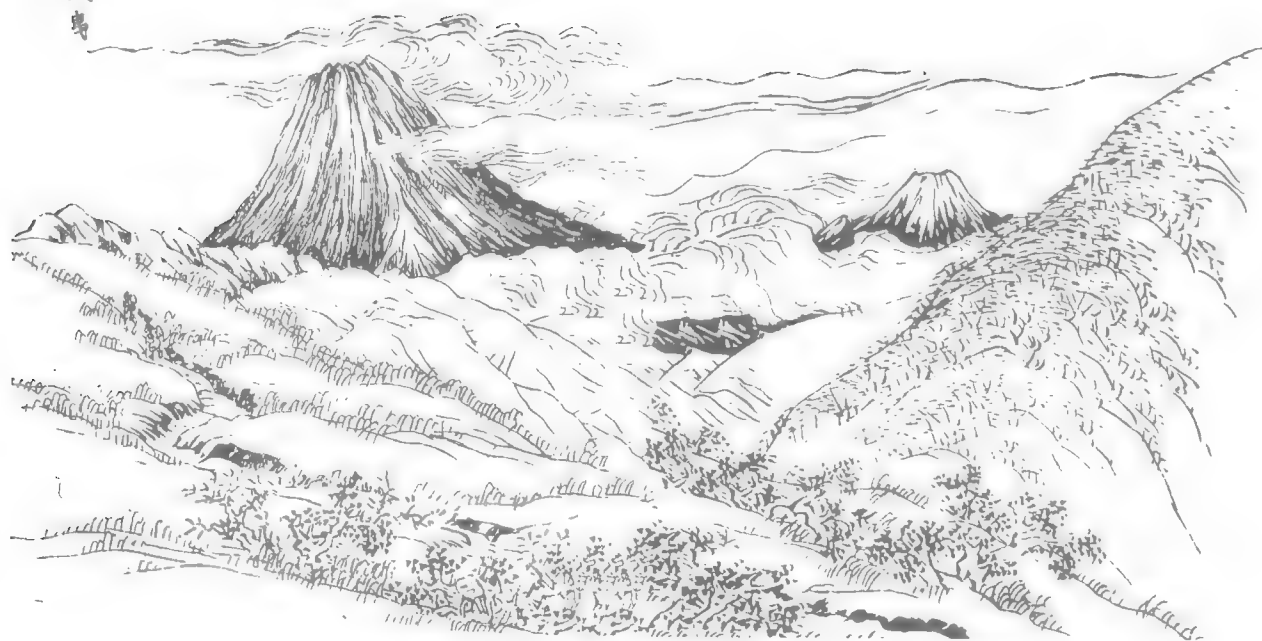
玳瑁涉

州在蝦夷



志利邊津山

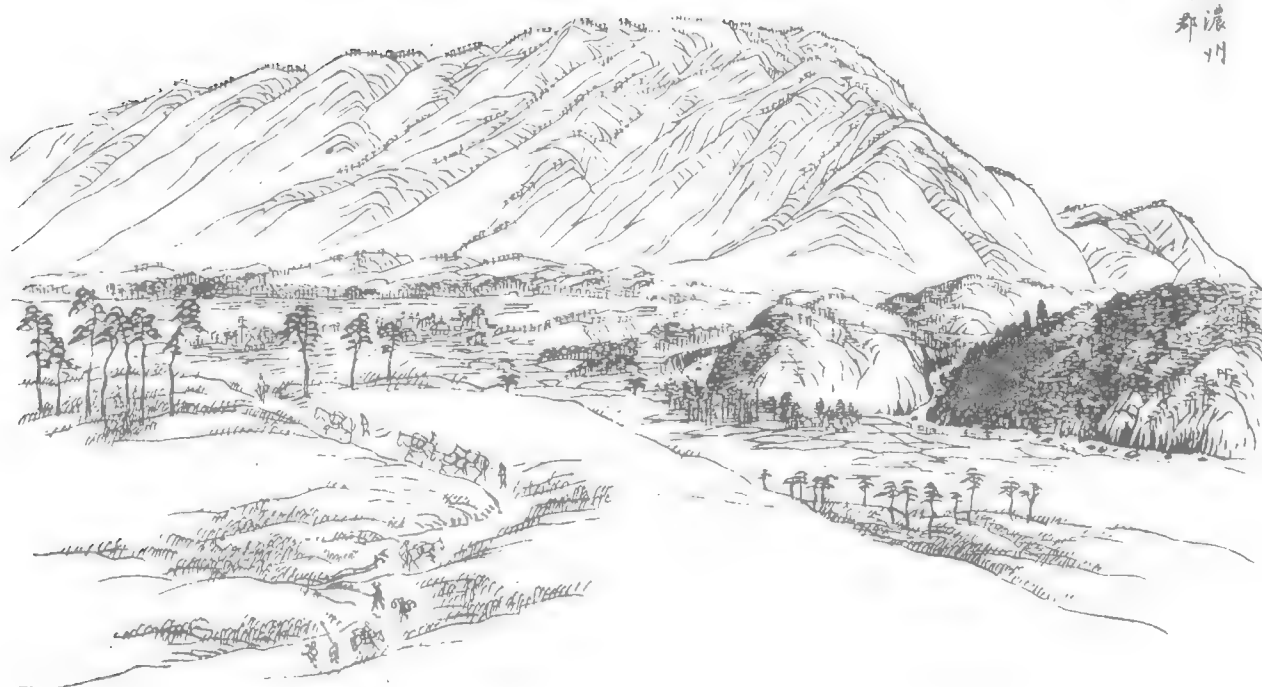
州在蝦夷



赤城山
在上野州
那邊郡



惠奈山
在美濃州
惠那郡



金華山 在陸奥州
北鹿郡



百丈岳

在伊勢州
員弁郡



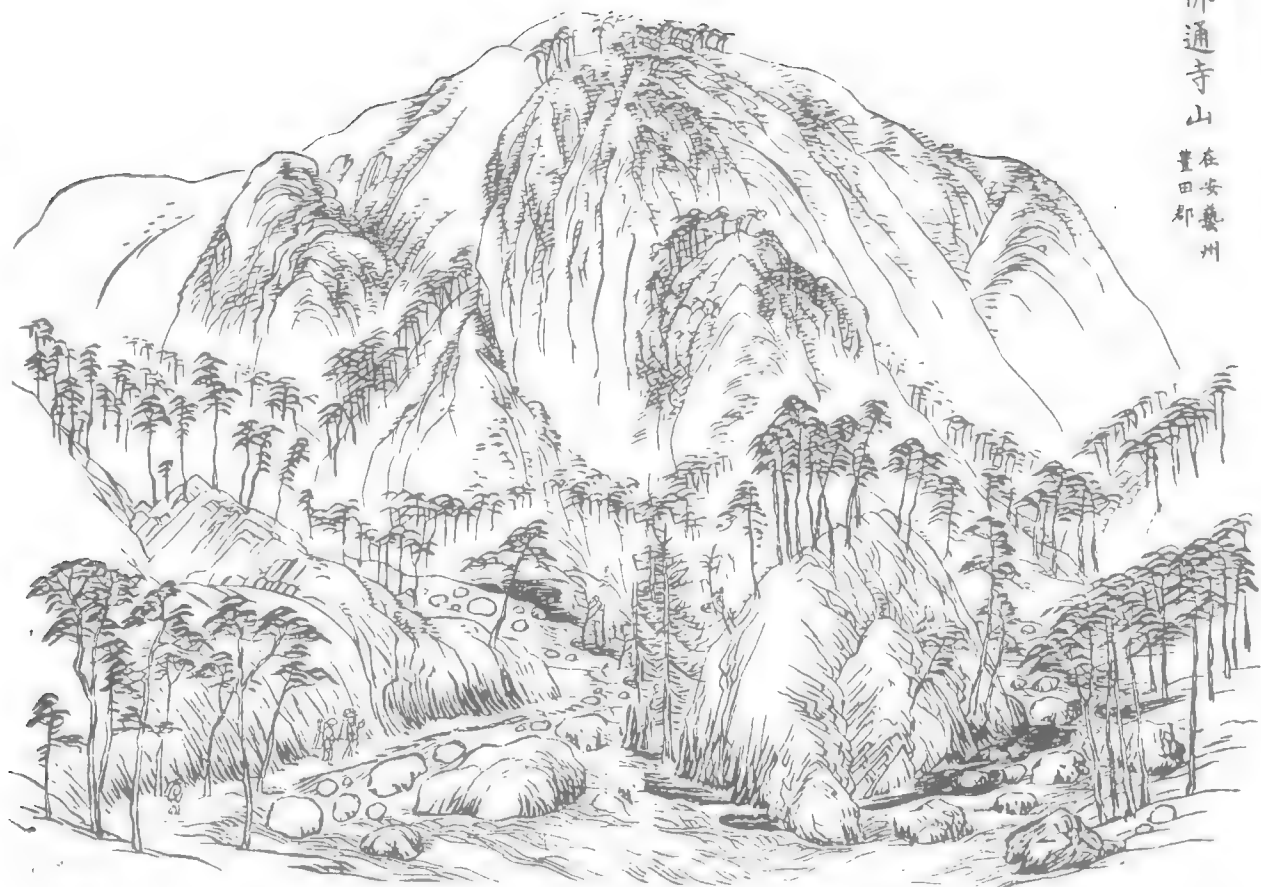
六甲山
在攝津州
武庫郡



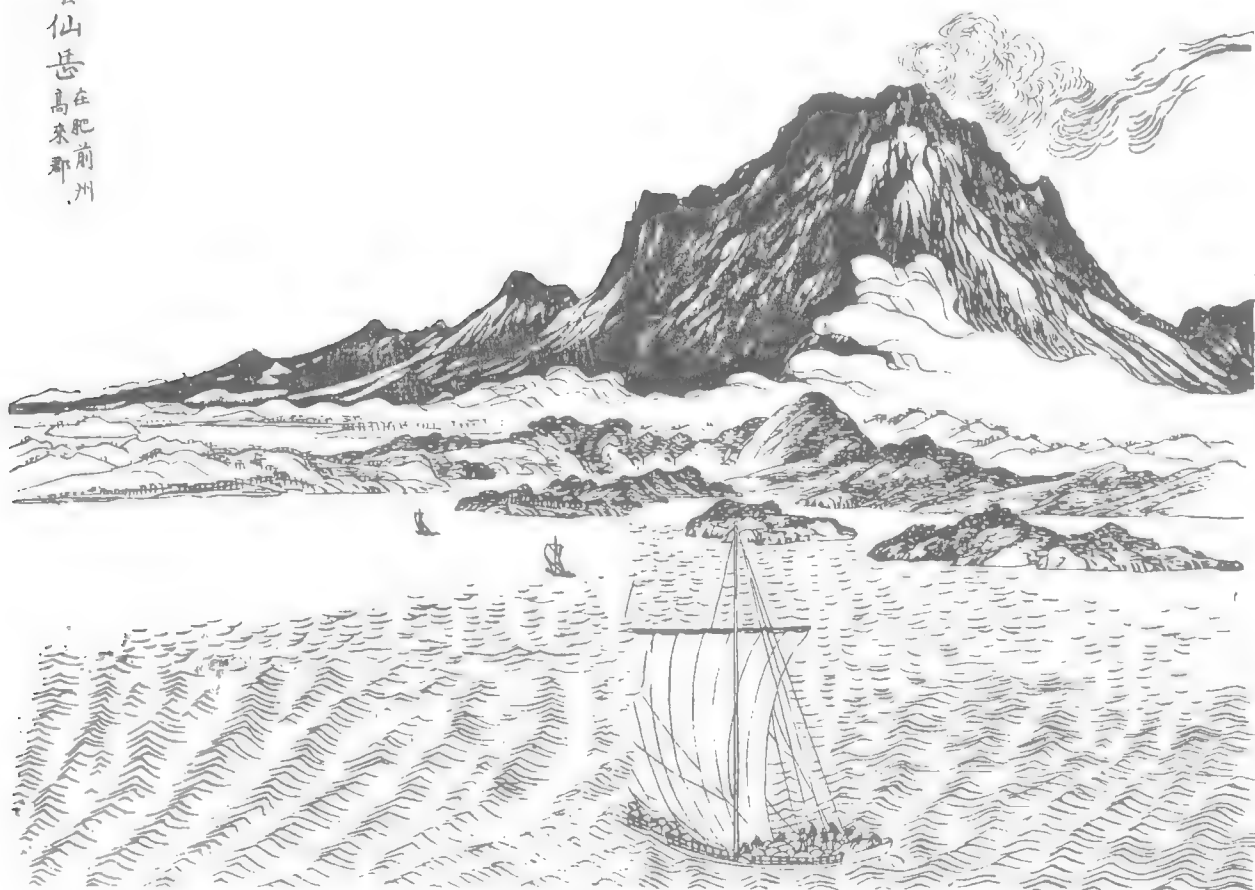
立山
在越中州
新川郡



佛通寺山 在安藝州
豐田郡



雲仙岳 在肥前州
高來郡



嚴木山 在陸奥州
津輕郡

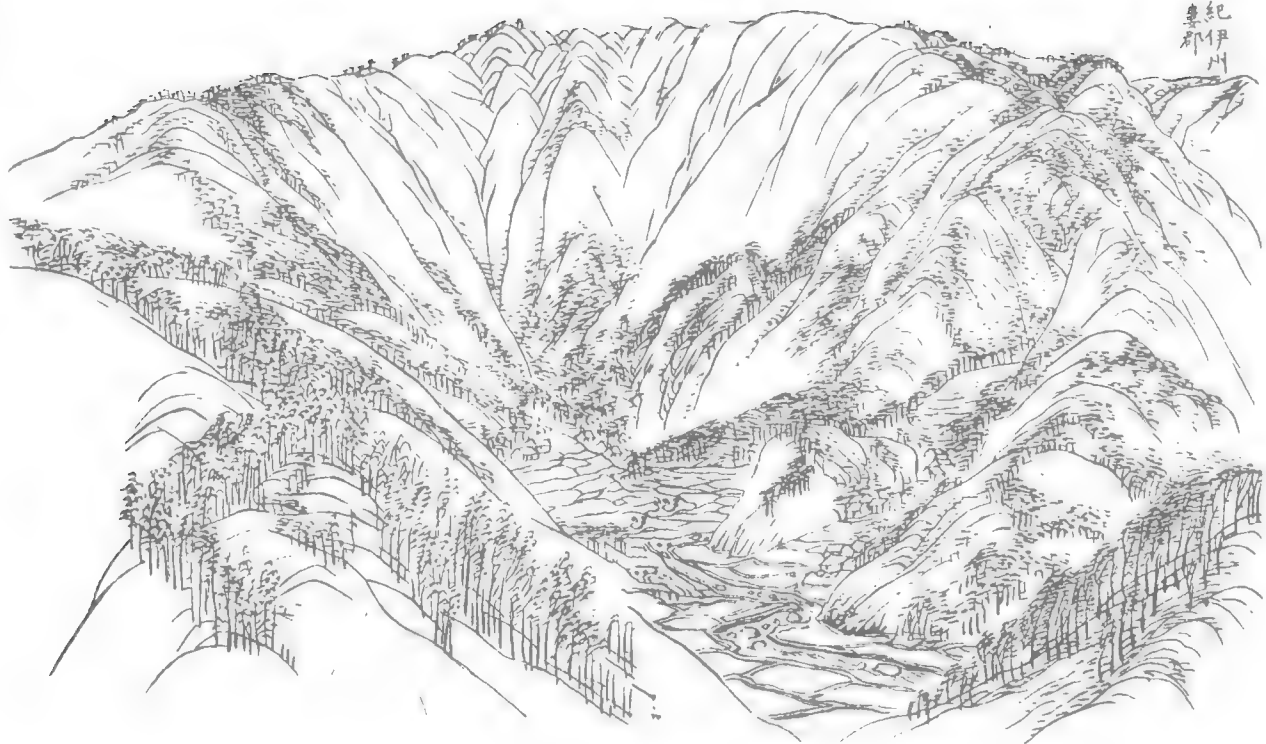


雲霧島山 在日向州
那珂郡

史跡鳴山



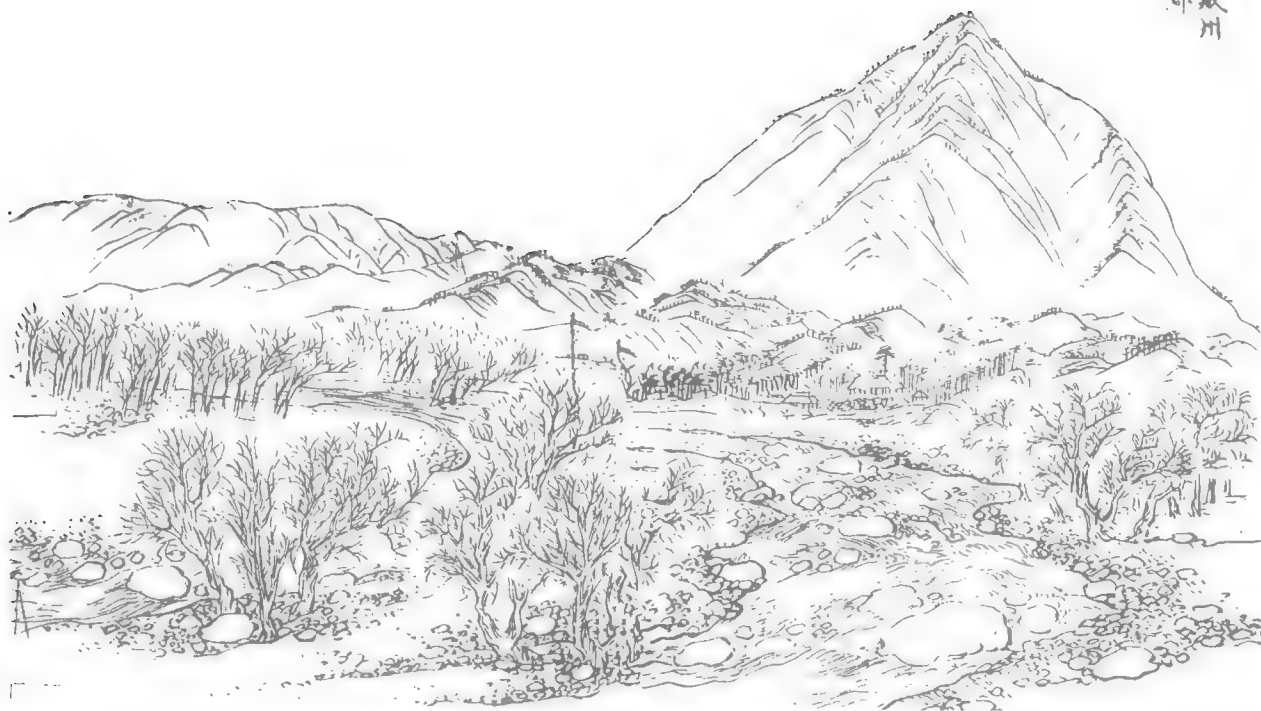
雲鳥嶺
在紀伊州
牟婁郡



坑波山
在常陸州
坑波郡



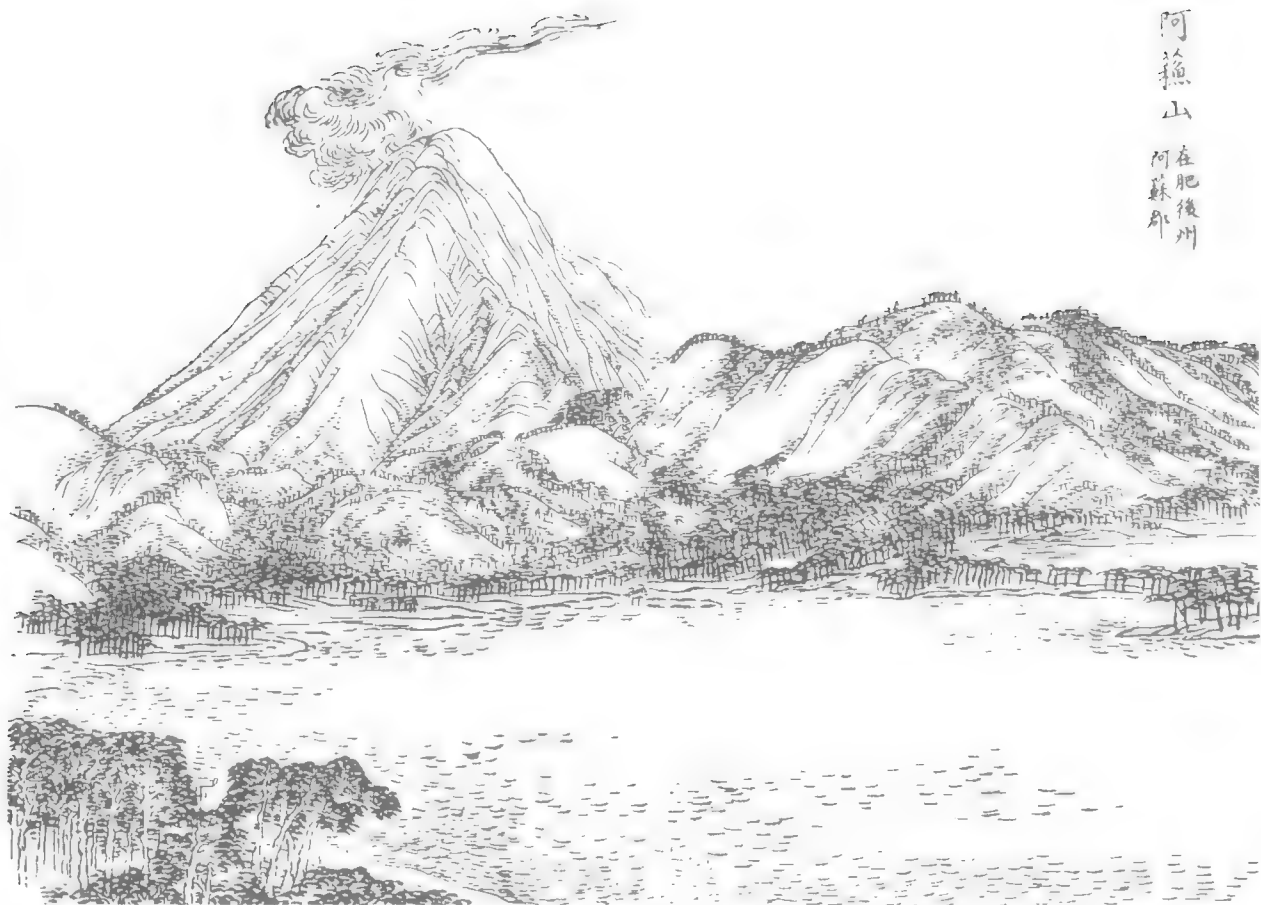
武光山
在武藏州
秩父郡



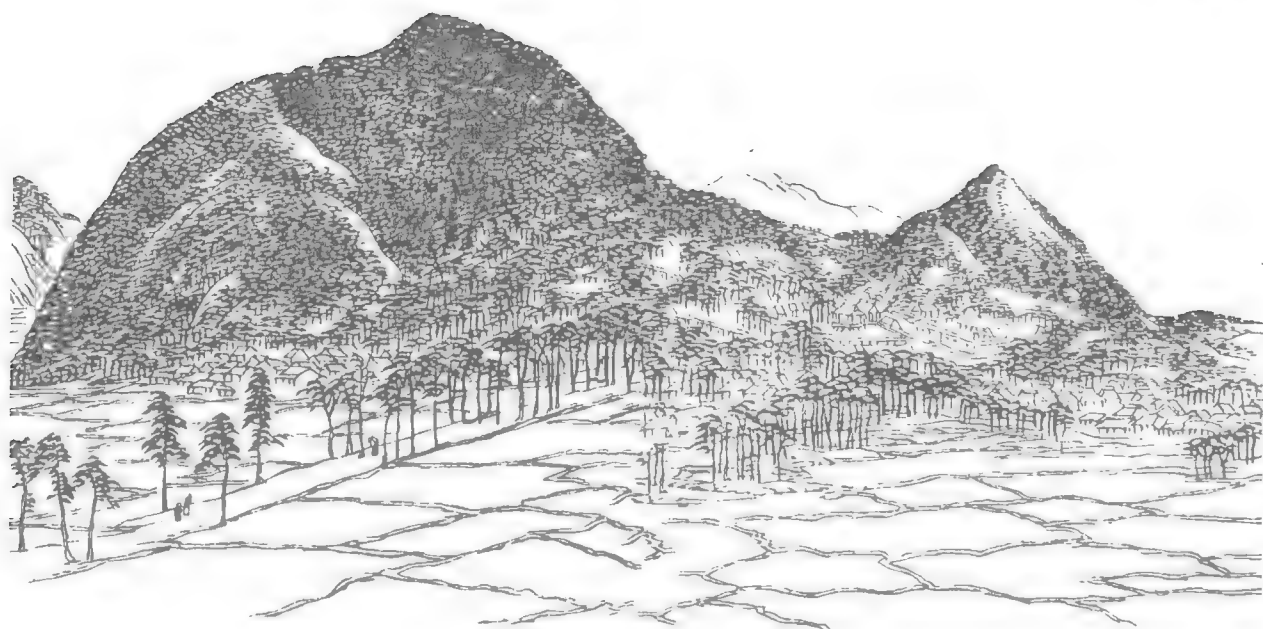
清水山
在丹波州
氷上郡



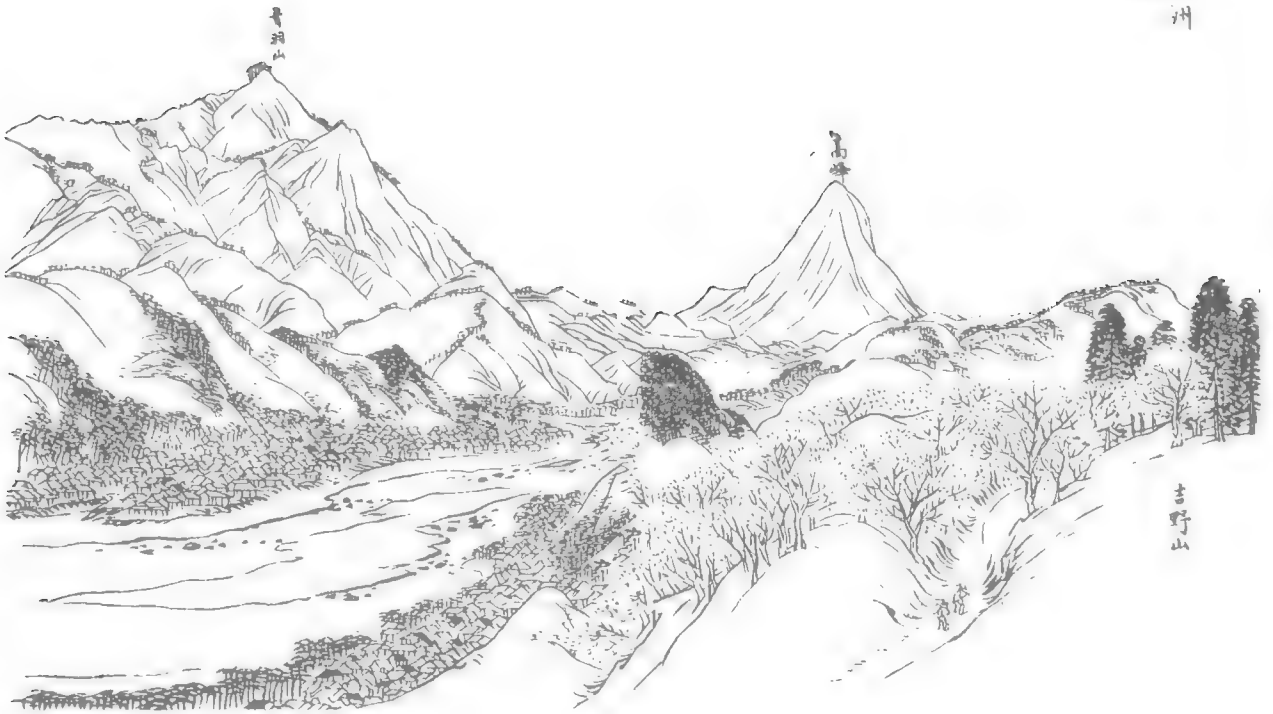
阿蘇山
在肥後州
阿蘇郡



備中山
在備中州
都宇郡



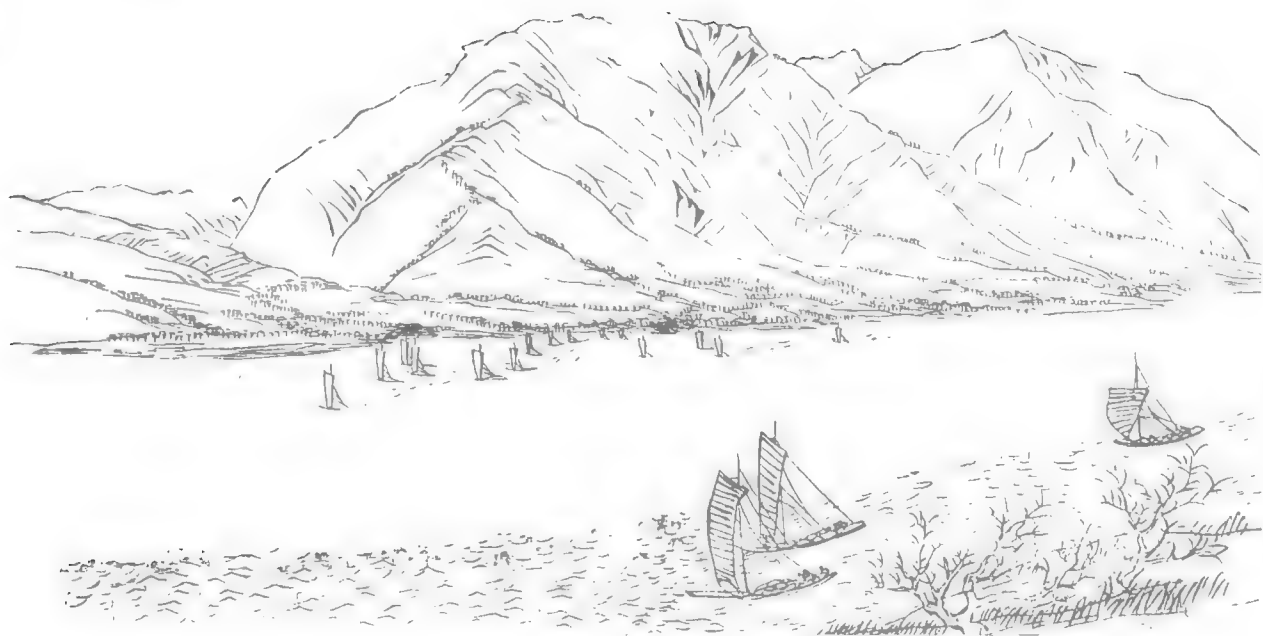
高峰
在伊勢州
飯高郡



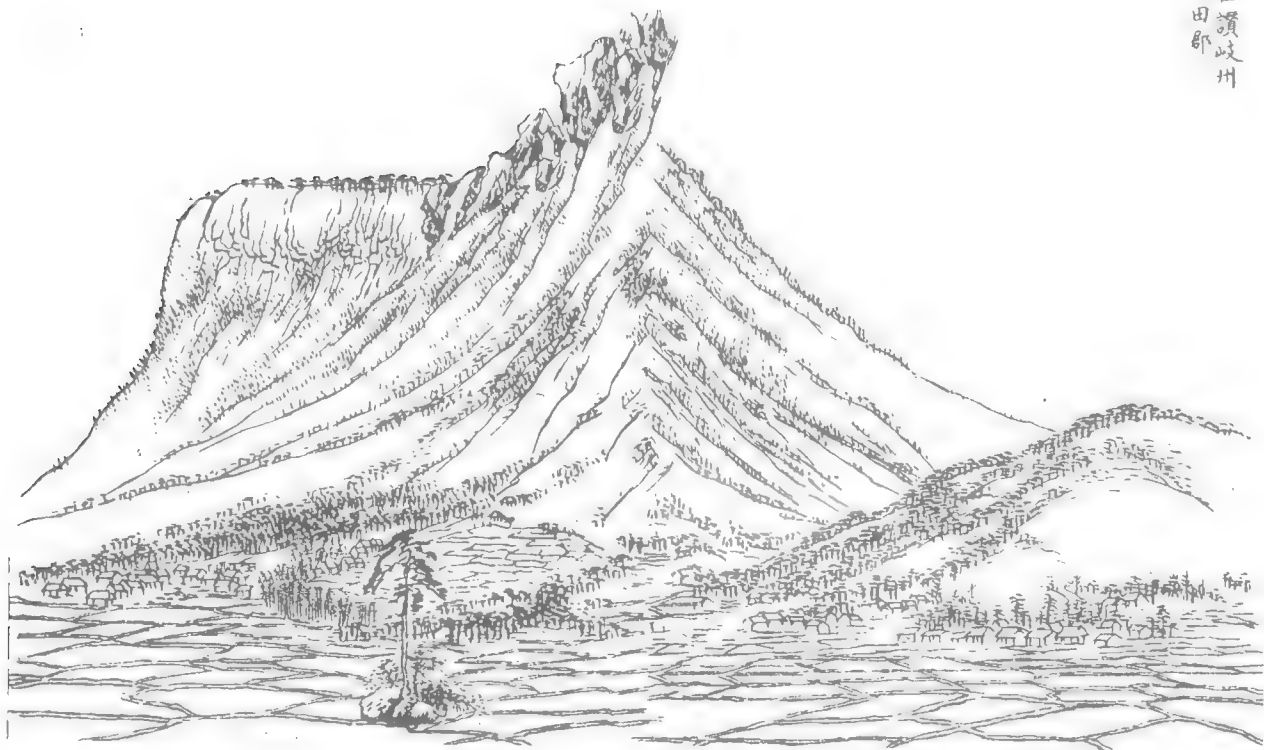
朝熊山
在伊勢州
度會郡



比良山
在近江州
志賀郡



屋嶋山
在讃岐州
山田郡



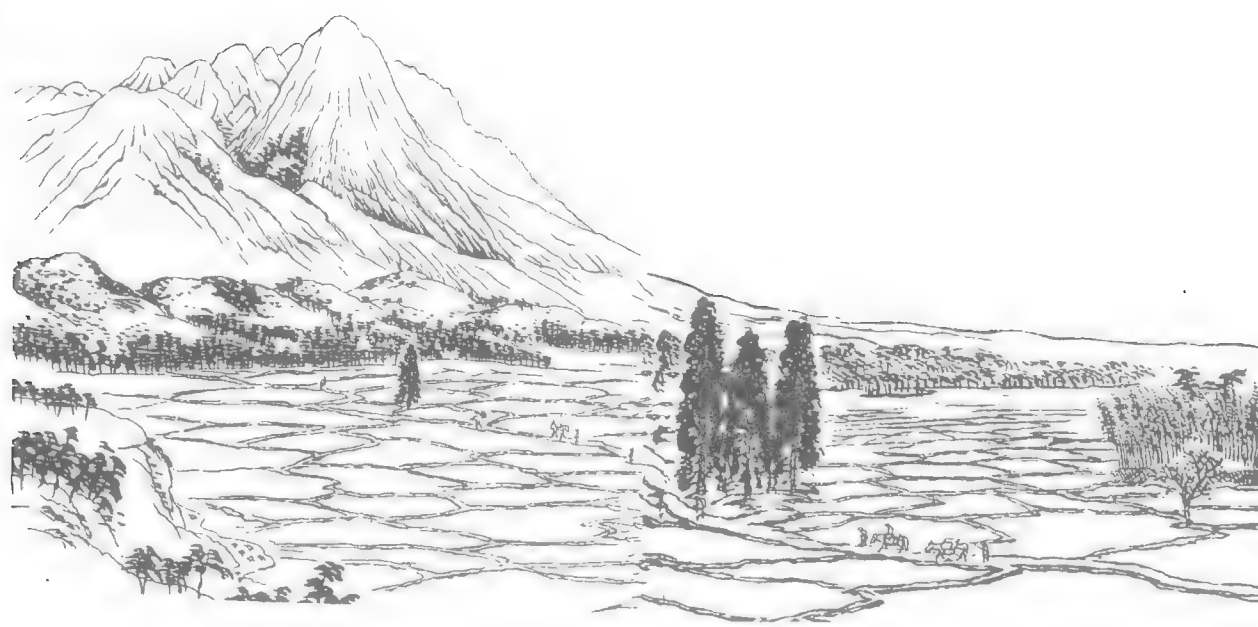
五
劍
山
在讚岐州
三木郡



朝
日
岳
在陸奥州
白川郡



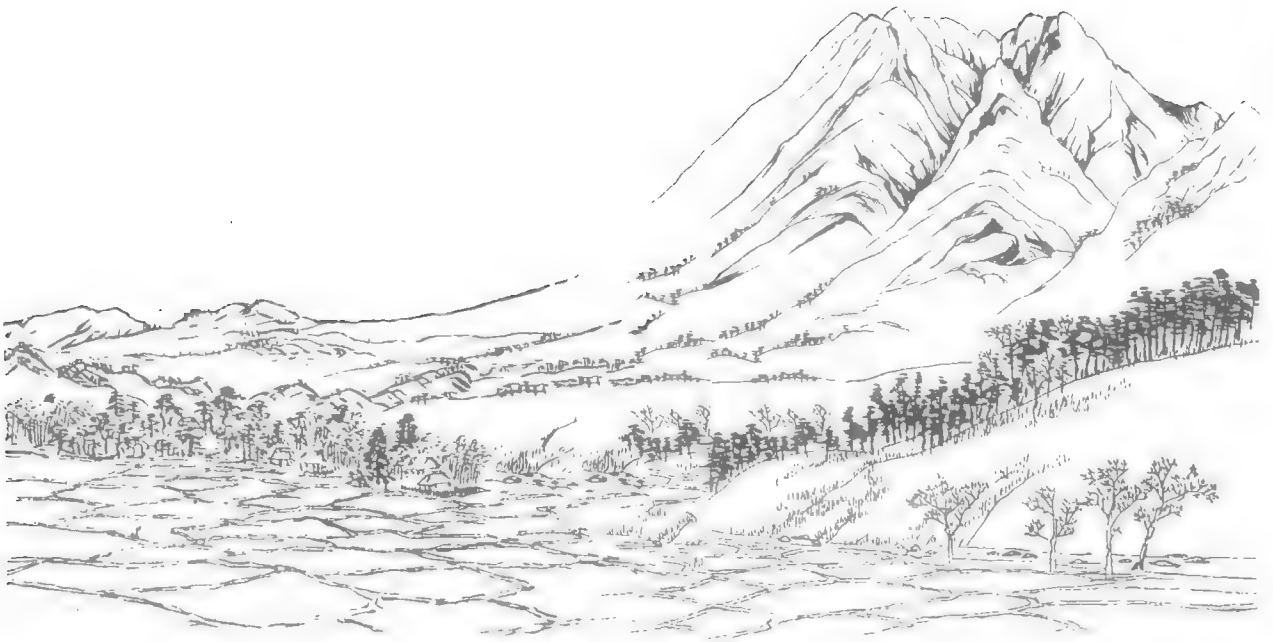
榛名山
在上野州
群馬郡



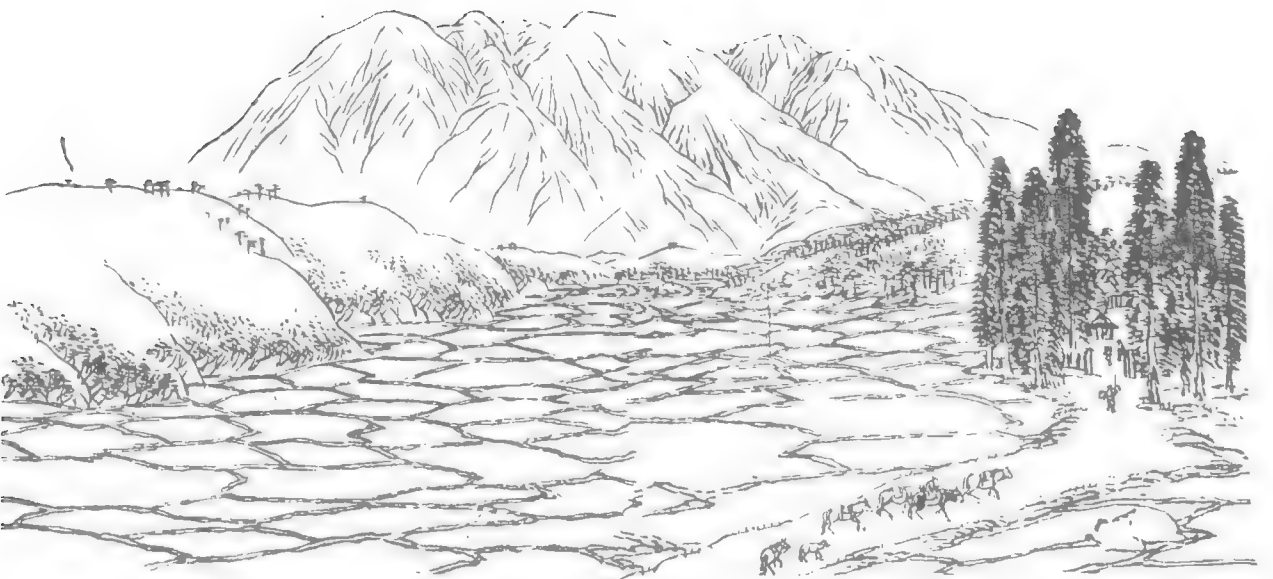
二股山
在陸奥州
志保郡



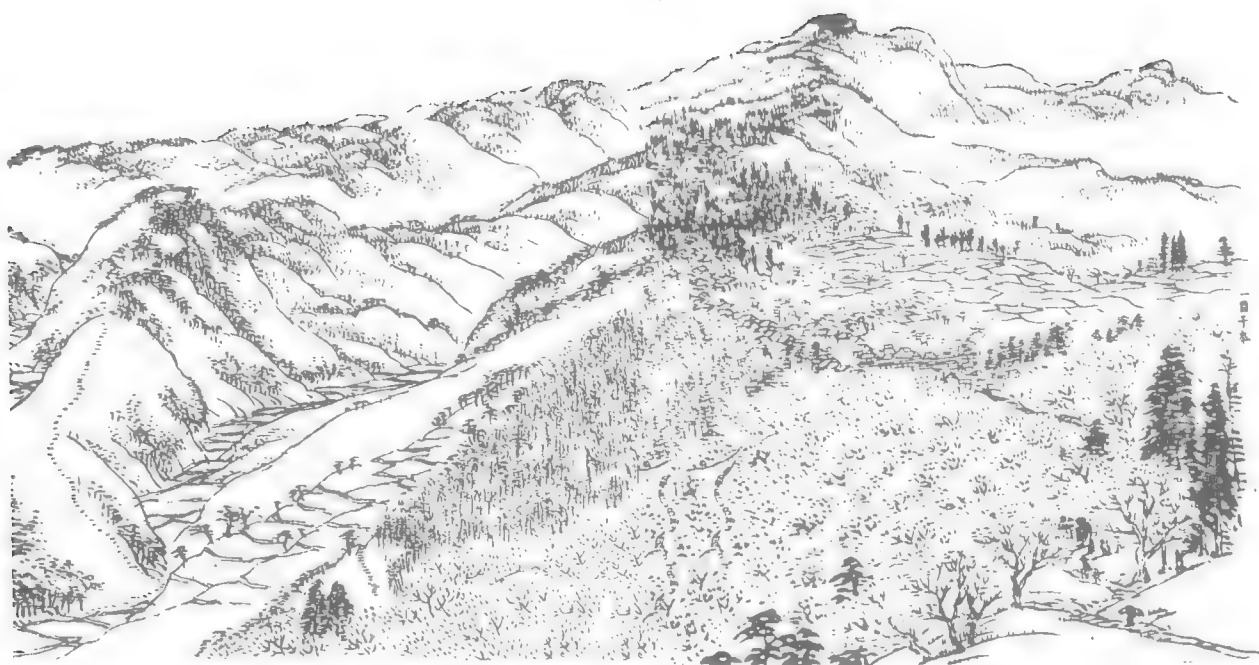
高原山
鹽谷郡 在下野州



鹽原山
鹽谷郡 在下野州



吉野山
在大和州
吉野郡



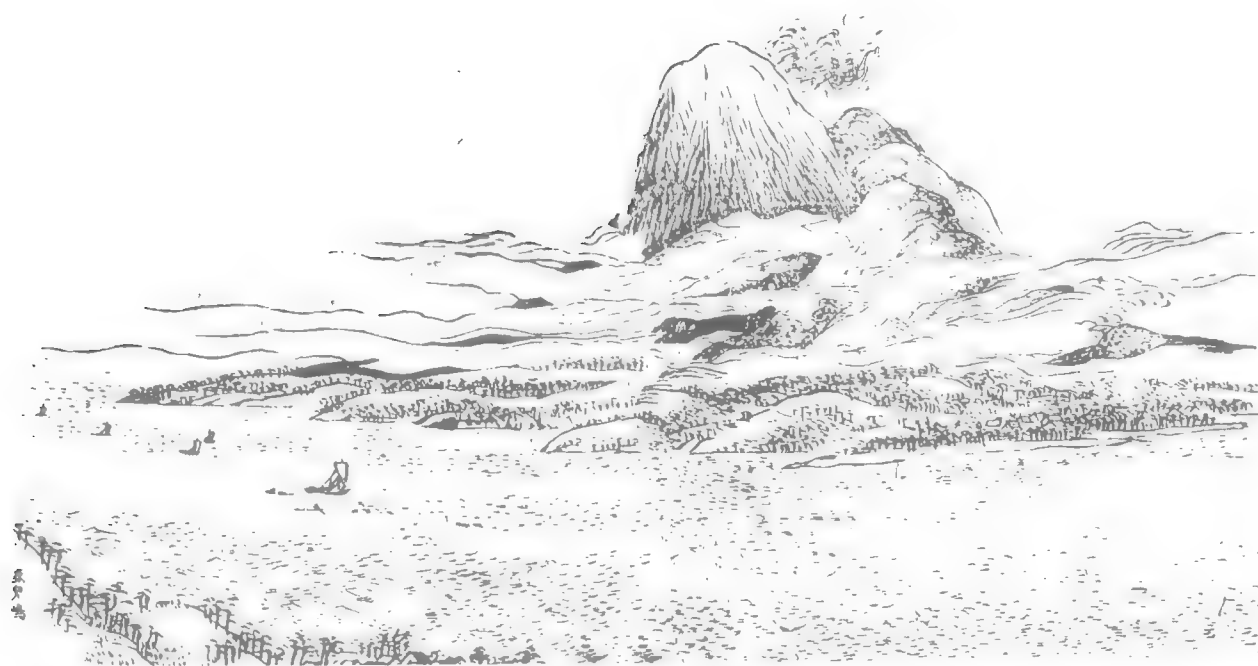
小野岳
在陸奥州
大沼郡



米山
在越後
頸城郡



御岳
在薩摩
島



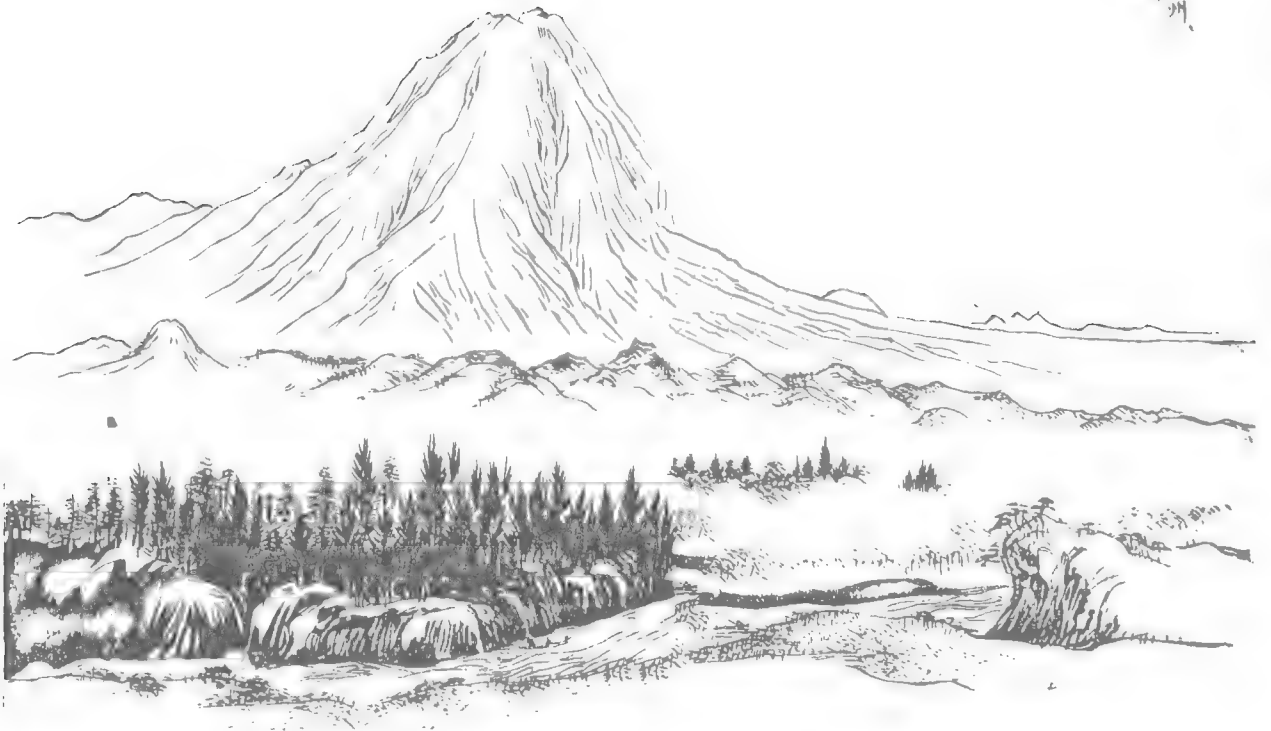
雄鹿山
在出羽州
 秋田郡



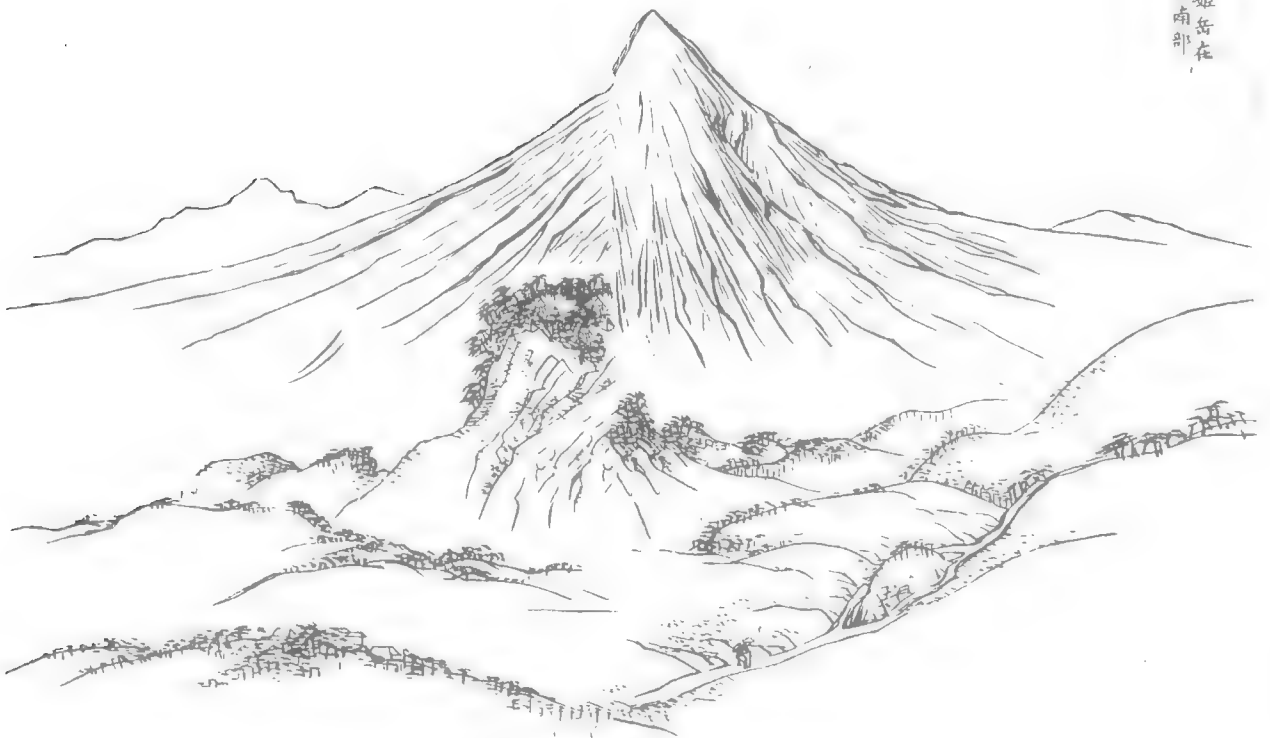
大山
在伯耆州
 久米郡



磐手山 在奥州南部



玉東山 一名姫岳 在奥州南部



向者家君之輯名山圖如南部盤手山乃谷文晁據其弟元旦東遊途中所圖而寫焉後余從家君遊南部從城下望之與所圖頗不類城下之人亦疑圖之非其真蓋元旦之所圖郡山驛而所望也然盤手者為一邦之鎮宜以城下所望為正及姬嶽亦南部名山而前圖逸之因又請文晁更為之圖以附卷末爾文化丁卯冬日 男 川村博謹識

皇漢洋今古書類自家積年發見セル者ト其集藏當ニ花棟載車ノ點キノミナラヌ品位精工上質程清庶以テ四方君子ノ愛顧ヲ待ツ

文榮堂藏版

東區南久寶寺町四丁目十九番屋敷

政府書林

前川善兵衛

菊池元習 著

三山記略

天保十四年（一八四三）思玄亭刻本

據天保十四年（一八四三）

思玄亭刻本影印

西皋集元羽博甫氏著

三山記略

附海陽縣志

思玄亭藏

三山記略序

和紀二州多佳山水而熊野金
峰最著昔余嘗學於京師也近
歲諸曠時或探搜若二物之曠
固顧一游然以其曠濶函深恐
廢日妨事未遑及焉而志不
屑於此其心曰他日幸得所業
成緒首還鄉之途則當迂迴其
程涉歷二州遵海至攝州買舟
而西直舳首一呖耳何料邁一
疾有人誤傳其劇於鄉以貽二
親感馳書暫歸甚急是以倉皇

序

治任而發不敢有所涉覽以淹
辱刻既悔而沈於職勢不得越
疆出遊其後得膺

幕辟非公事不得過六合川一
步拘束滋甚男二物之遊永絕
望矣菊池博甫頃游熊野其幽

序

巖峭壁泓溪浚壑凡神奇為異
之區領覽殆遍作記一卷山情
水態條分而縷析之標曰三山
紀略携而示余且徵序熊野與
金峯相距不遠山勢聯屬唯隔
一水而主峰以花海名熊野以

靈窟名其致雅異至超妙環詭
之觀名稱雖兄弟今讀斯卷覺
神秀之氣扶輿輪囷蓬勃逼人
可不出戶庭而盡其襟襟余於
三山若之在京師近而遠今之
在關左遠而近寓目斯卷亦足

序

以酬宿志安得使博甫更得請
數旬之告窮討金峯攝其藻思
為以見示則吾願畢矣姑著此
意贅諸首簡

文化六年小除古賀樸書

三山記畧序

畫家模山寫水遺其嶂巖之墨
樹石之蔚江海之縹卑者為喬
所覆遐者為途所障或向背莫
趣隨顯玉冰加之雲霞變幻陸
縈礪之能手常苦其艱象之難

序

矣文人記據錄遊精之繁冗可
就粗之脫漏可惜對一卷觀一
句心賞有餘頌語不遑亦且屬
事涉齟齬則比辭失雅馴美
譽過富賤則實景於虛飾強
英俊之才子時憂其難而之難

矣難哉、不能吾筆盡吾
意曷得令驚人目憚於人心
乎噫畫與文皆假也將假字
真因不足棄造化自然之妙
有也頃男元習以三山記畧
請教余曰是乃難之又難者也

序

夫態岳之據奇跋甲於寰宇
其遊也、誰不仰羨之佳語之
所謂今嶮競秀萬壑爭流八
字盡矣他腐語陳言重十百
徒污名山而已元習曰然則
廢之乎曰阮瞻其賤賤其奇

豈可然之而止乎苟吐華
茹實以拙代雅姑記其不可
後者存以自娛生何難之
有巨海之一瀉猶或可勝人
之渴想也試示之未遊者余
則既遊者也然余也以從

序

公駕故鞅掌役之不遑寢食
往返百餘里常得片詞隻句
爾後偷閒展紙命筆恍如
醉夢不能復集思徒貼臥山
川之靈豈謂之游可也乎今
讀此記俯仰之間如再入其

境瞭然吾心與吾目謀而神
了解於內也竟併彼能事
才子所痛與此文巧拙難易
而皆忘焉只喜爾愛日之餘
業資吾老懶卧遊耳為書
簡端

序

文化改元甲子秋日

衡嶽陳人識

桃華仙吏書

那智瀑布圖

天下語瀑布以熊野那智山為第一矣余嘗遊
其地觀瀑布實過所聞距今殆二十有餘年
每憶其奇觀宛在目睫偶應也敬所需援筆寫
其概千尋飛流固非尺幅寸毫之所盡焉觀者
窺其一斑而可也

天保十四年癸卯秋九月

八十翁鷺湖源維訖畫并識



九里峽圖

楚野山川之義甲于天下而九里峽爲最
曩者余與諸君遊茲土記其繡染者詳
矣谷文晁氏亦題焉云函其勝槩二子之
於九里峽也最爲得意云於是乎欲合
刻以貽同好屬序於余余因評之曰使斯
圖也不藉下峽之勢則其奔逸通達未必
能如此也使斯文也非遂流而上熟覽







寬政丙辰
秋七月
張氏書

察則其得寫圓備未必能如此也蓋畫
以逆勝文以密勝二子一上一下而遇既然
公心与境會而應手若固當如此也昔
王右丞能詩善畫如輞川圖古今傳以
梅後之美矣斯卷也各逞其所長而右
提右挈若若出一手公可不謂後身乎
後美而台刻山豆冰古之所語天生神

物終當合者耶

仁井田好古識

家君在日謀合刻其九里峽記與谷文晁畫請
序於仁井田南陽序成而刻未果而逝今斯卷
也收文晁氏畫則不能無感於昔日為同儕錄
舊序云

還城

三山記畧

紀藩 菊池元習博甫著

熊野以靈區聞也。舊矣。蓋紀之為州。今七郡。而牟婁最大。西北除大嶺。東南濱于海。本新二宮。與那智山。鼎峙于其東。碑曰熊野三山。三山去州府五十餘里。其道路往還。於經。奇勝頗多。而余在東都。弱冠已聞其勝。而未得往遊焉。甲寅秋。我公畧地遵海。南到熊野。遂有事于三山。因命有司。檢其耆老及力田孝悌者。賜以錢帛米帛等。家君適宦從以董其事。余遂聞其盛舉。手舞足蹈。恨不能奮飛。耳兩辰三月。余始入紀。欲遊熊野。事故未果。今茲壬戌之夏。家君復偕駕。到于紀。余亦從焉。會侍醫藤伯英。密英彦。無良友三子。將告暇。謁熊野神。兼觀瀑布于那智山。要余偕。於是余喜可知也。

斐州府至印南

四月二十八日黎明出邦門。至紀三井寺。三子尋至。杖屨飄然。遊興勃如。乃謝送徒而行。應黑江日方二

三山記畧

一

三山記畧

二

村。廬舍聯絡。農商頗富。過名高浦。路始崎嶇。藤白之山麓也。聞昔鈴木三郎重家產于此。其遠裔今尚在云。路岐左則藤白。右則冷水。有王子祠。是為熊野一之華表。三山險遠難到。古者以此祠為遙拜之處云。是日將詣慶德山。乃右一徑縈山。其頂臨冷水浦。人家呼欲摩。遠眺則紀泉衆壑環匝如假山。阿淡諸島皆為庭池中物。時維麥秋。黃雲斷續。頂刺煙霧蒼然。乍晴乍陰。下抵浦雨霏霏至。抵濱中得慶德山。龍騰席踞峰秀。苔深萬松鬱茂。瑞氣氤氳。佳城名藍不問而可知也。乃入門內。前瀝有寺曰長保。長保元年一條帝所。勅建自我龍公受封南州。遂為應世公兆所。在焉。始得望其廟貌。敬拜而退。將踰宮原山。至有田。蓋間道也。土人猶畏其難。加以驟雨。從僕皆痛。佐氣而上。仄徑無人跡。披榛莽。捫葛蘿。屢迷失路。僅至其頂。則雲霧如晦。不辨崖谷。山風方厲。下前溪。稍晴。路亦坦。樹皆橘柑。量以告云。綠葉素英。香氣襲衣。不問而知為有田也。抵道邨。日已夕。渡有四川。踰綠麻保津。病腸淺村。翌過廣邑。至川瀬邨。土麻脊

山古松夾徑。右瞰深溪。其徑紆回。六七十步為一盤。每盤益大。凡三十盤而窮焉。其巔樹密。不能遠眺。為之憮然。題詩而去。路漸下。過原谷。原谷以南。山多錯土。間有溪田茅舍。亭午至日高。渺然沃野。一望數里。麥隴黃熟。自茨木村東過田間。有蛇塚。如女舊事。人口所膾炙也。余笑謂同行曰。吾儕非秋梁公。豈避如女之祠乎。過小松原。詣道成寺。門扁曰天香山。古招提也。渡日高川。眺望頗佳。得鹽屋阪。西北小升。出海數里。東南野島。鮮浦等漁村。夕陽益佳。下海磯。過三山記畧

山徑至于印南山。耕海漁商賈亦雜居。

鉛山

鉛山之境。枕海被山。田疇闢焉。黎庶邑焉。往昔民以貢鉛為業。今以耕漁代之。俗稱湯崎。以地有溫泉也。遠近來浴者。四時不絕。六泉瀕海。曰館泉。曰濱泉。曰源泉。相去二三十步。西南依岸。而茅茨覆之者。曰磚泉。天然石槽。喁然如五石之觚。泉從槽罅涌溢。而無硫黃臭。瑩然如鑑。淡泉淺而濁。客或濯足耳。礪泉在東北巖下。潮撲漏室。余遊千疊巖。素聞其勝也。旅館

之南。得藥王堂。西越溪陟雲。下則海濱。多怪石。大者可坐數百人。就視之。全巖如一大赭石。風雨所撲。潮汐所鑿。狀類龍首。領下可避雨者。為龍口。巖雲故芝形者。為芝雲巖。尤為魁奇。其餘翔擊擎攬。呀然森立。未有名歸者。不可枚舉。會夕陽映射。風濤忽起。滄溟萬里。瞬息來去。如百千白馬。蹴雪而奔騰。餘勢盤礪。巖益奇。乃知木末盡海賦。其言之不虛。觀海之壯於此乎極矣。南崖石罅。為僻者十餘丈。鮮有坑。巖旁。六

三山記畧

四

土人懸繩下崖。乘暗承之。聞者心悸。次日遊難渡。自右岸下。步亂石間。尤嶺百武許。一巨巖屹立。中空如洞。右入松林。踰小鼻。廓然一境。對內灣。小嶼數四。出於其中。爭獻奇勝。白日已西。微風不搖。穀波自文。隔岸諸山。蒼翠倚疊。皆倒影于煙波。夕陽之間。東北見田邊城。於一帶松汀外。左循岸行。巨石為門。高五丈許。橫稱之。其左連丘。右礎沒海。既入門。數步又得一門。大如前。出則波上奇巖。名唐嶼。如垣如屏。有三牕。布帆過其外者。宛然窓櫺中物。其巨可知也。日已

下淹磁乃歸。路過七曠山下。白沙如雪。步步迷人。各
掘其沙。而還于旅寓。旅寓主人和佐氏名長。視南海
衿先生七境詩卷。詩奇拔。書亦道勁。余曰。鉛山七境
之目。自昔有之乎。意者先生創之也。丹牘其山錦繡
其林。文人之遊往往皆然。卷尾云。享保十八年孟夏
下浣。去今已五十有餘年。其樂則同。不可及者。文耳。
廼書所詩。詩二首與之。所謂七境者。銀砂步。金液泉。
芝雲石。龍口。巖平。草原。藥王林。乃宮址是也。相傳
齊明帝以下數帝。嘗浴於此。宮址尚存焉。蓋灘渡
三山記畧

五

以巧麗顯。十疊巖以奇雄勝。未能判優劣。此遊余等
得意甚。獨良夫持家書告故。令予而歸。風景亦為之
索然。初自印南浦。架舩達鉛山。其舟中景勝不少不
遑悉載焉。
踰富田山至安居邨

富田川有村曰九十洞。有寺曰草堂。屢渡澗流。足指
漸仰。是為富田山。土里餘至半嶺。東南連山重疊。西
顧則鉛山昨遊之諸勝。應歷可數。漸陟層巒。嶂無
復遠眺。降則山益深。樹益茂。綠霧四合。獼猴哀鳴。頓
動旅思。土人云。此山獼猴家多。或數百為群。能知雨
候。天陰必嘯。遂下溪底。水晶花滿徑。叢叢如雪。忽有
一泉。從右峯來。灑錯徑而流。左未右迴。或十步而揭
或二十步而砥。凡揭澗流者三十餘處。卒得石溪。溪
澗而固澗水至此。不復知其出之竟。其為伏流乎石
三山記畧

六

溪之側見茅茨。麥隴又多牧牛。近村皆以養犢為業。
云踰阪甚峻。下而得安居。各投笠木。生生名呂哲。三
世業鑿與藤。崗二子共誼家學。僮僕謹朴。款待可喜。
是夜雨。

安居谷

安居谷。向背皆山。斜帶一川。有邨曰安居。四寺山。曰
中島。安居為大。僅八十家。二村各四之一耳。里心鈴
木某來謁曰。邨在山麓。田固瘠薄。且乏水。特有一川
應東北山間而來。近匝村外。然地高水卑。不可激行。

上流雖高。小山連亘阻隔。山趾皆石壁。故不能得其灌漑也。他無泉脉。三村常苦旱。近與二三父老。請于官。欲鑿石壁引上流。以為旱歲之利。經營四年。于今工未告竣也。願往觀之。余從之。至川竹三百武許。得銀杏樹。扶疎隱然。翳之數十圍。自樹下右折。尚並川而行。稍入山間。左削山趾。作徑作溝。溝與徑曲折相隨。石角刺足。步步極難。如是者可五百武。得鑿口於左。壁下礪徒數人。據崖掩茅以居焉。里正曰。所謂上流為此石壁。阻故將通鑿。以注于溝。初計日用工

三小記畧

七

七人。三年可成。中間石骨甚堅。今此洞深八十餘步。奏功未可知。因令人執炬以照洞中。余雖未能審其地形。理或然。吁。民艱於稼穡。粒粒辛苦。有司必宜用心也。於是意倦。不欲復就來路。見小舟繫岸下。里正倩一樵夫棹之。石清水淺。紺碧澄瑩。兩岸山影可俯而拾。偶有子規啼聲如裂竹。甚可人意。稍忘疲倦。還至銀杏樹下。步歸安居邸。有寺曰太圓。又有孝子祠。日暮不能探而止。

自佛嶺至古座浦

自富田南至新宮一路。稱曰太邊地。右海左山。每逾一嶺。必有港有浦。浦極而又得嶺。嶺舒而闊。則為川澤。為岡昇。為田疇。為村落。漸入佳境。應接不暇。自安居言攀佛嶺。藤竹翳徑。少上忽復軒豁。東北隆然形如帽。曰三前山。云其麓有三鄉。三村仰山。無向背。南一峯頭尖而如負瘤。曰病瘤峰。數百步度連密岡。多松。近時所植。十年之利可謀也。既躡嶺里餘而下。其峽多巨石多。古松處處揭脚。流得周參見浦。一島中立無依倚。蒼蒼然。雁海門者曰。積嶺山土人云海口多暗礁。其大者為龜巖。若誤觸之。巨舩即破摧矣。踰一阜。道右有清人尤廷玉之墓。明和中福州商舩漂泊。高客十數名。延玉其一也。病死。有司命葬焉。碑陰文祇園養霞先生所書。又數里其間島曰離。曰蝦。曰魚鷹。曰汐吹。曰白砂。嶮為馬轉。為注子。為輪深。道逶往往見村婦束樵。簾戴之頭上。雖兒女亦然。忽見不辨男女。又吹煙不用管。卷木葉代之。僻落光景可想也。得長柄嶺。一徑如面壁。猿貫上三百武。流汗洽背。喘氣薄喉。又少紆餘。則及巖。鳥道排虛。清飈吹袂。冷

三小記畧

然有真人御風之想。南望大洋。空水相涵。其在海灣。而如迎我揖者。為沖島。為黑島。為夷島。為繪洲。其餘見老津。江住。江田。數浦。潮觀岬等。洲。齋。砂尾。短長出沒。連綿乎數十里。通者戴青松。帶白砂。遠者觀霞。掃雲。愈出愈奇。譬之巧造。金景者。將晶屑玉塊。布置羅列。瑠璃盤上也。又數百步。路漸下。得見老津。巨巖百尺。亭亭然。高峙為高閣者。夷島也。其下亂石為龜。為龍。為蛟。龍者。縱橫錯陳。乃跨其首。鞭其背。遂進升階。上有小祠。松蘿蔓翳。無他奇觀。不如遠望之為佳也。

三山記畧

九

又得江澄橋。橋頭望繪洲。乎蒼波之上。萬松連翠。丹崖如霞。最綺最麗。洲於諸島。如楊太真為三千之冠也。又下海巖間。晡時拔江住浦。日夕猶望繪洲。令人婉愛忘疲。明日戴星發。自里浦經和深和差。江田田并等數浦。踰一溪。取幽藹。多藥卉。往往見覆盆子。百合花。蜀樹之屬。時聞清香。余屢入谷。覓幽蘭。不得而止。午時抵在田浦。踰小山。下海所。奇石萬數。不可勝記。其稍西屹如禿毫者。曰華島。東行百步。一巨巖塞途。大數丈。其下缺為路。可通車馬。過之竦然。又歷二

阪。得一村。曰東雨。時微雨東來。偶副其名。得錦浦。浦西傍山。北行數百步。山裂川出。已涉。岨徑如綫。側身而涉。左肩摩壁。右趾臨淵。百步許。漸下東瀉。曰錦浦。與錦浦相對。其間數里。抱海如湖。連嶠林薄如段。如塘。邱落點綴乎其際。紫翠映波。雲錦散文。錦俗之名。真不虛矣。得串本鄉。上潮觀岬。過橋柱浦。抵古座浦而宿。

潮觀岬

自串本鄉逶遞而上。數百武。其村曰上野。上野以南。

三山記畧

十

地漸巖峻。而一丘巖然者。為潮觀岬。右有古神祠。過祠而少下。灌木夾徑。如馬鬣。碧崖千仞。潮汐所蕩。擊也。超上馬頭。則大洋茫乎不辨天地。其東南別有潮頭一道。奔迅而來。勢如河決。浪濤自卷。以避。似辟易者。余一覽。爽然。還爾自失。土人曰。是黑潮也。其潮時而上下。逆流向異位者。為下潮。反之為上潮。大率上潮則寡漁獲。下潮多漁獲。其上下或三四年。或八九年而一變焉。以年則上潮也。疇昔余遊于疊巖。以為極觀海之雄矣。今登此岬。非復尋常奇觀之可以所

謂海之靈變。委輸廣大。色括乾坤。神之所宅也。吾藩封極南之地。窮於此矣。自此至那智。至新宮。皆東行云。

橋柱浦

自串本至古座。其浦曰橋柱。南如巨龜負山。而逃任公之釣者。為大島。松樹蔚鬱。屋宇一簇。耕種佃漁。民各安業。島與浦相距里餘。其間奇巖三十許。直立並植。矗矗出水者。曰橋柱巖。浦亦以此名焉。其巖形皆雄拔秀傑。大者數十仞。小者數丈。望之如巨靈架長橋而未竣功。其枯槎朽柱。列峙以存者。其名實不誣矣。觀者莫不吐舌歎奇。噫。上古之時。海中一帶連山。為洪濤狂波。所衝擊。噉食。特存其骨者乎。將乘舟以遊。橋柱下。俄風伯動色。擢夫皆憚。乃循浦陸行。渡河而宿古座邑。是日重五。館人以蒲酒慰旅况。余問曰。聞古座川之上流有藍瀬邑。其地有大巖。貝原翁窮天下之奇勝。以此為海內第一之大巖云。距此幾里。館人曰。距此三里。其山原為一巨石。大不可知。蓋石山戴土者。故其上草樹蕃茂。唯嶮峭不可登耳。舟而

三山記畧

十一

傷石以迎。殆里許。其平巖壁立如削。縱七十仞。橫二百七十五步。無一縫罅。無一凸凹。其色灰黑。望之巖巖。如鐵壁。實奇觀也。川流難駛。小舟可以遡游也。乃約其游。翌有雨。遂不果而止。

泰地浦

六日衝雨發。將至泰地浦。適玉川生來投刺。其父瀨齊先生。隱于蟹。好書博涉。嘗著日本通鑑二百餘卷。予屬一部。獻我公。今年七十。老益健云。輿夫在門。不遑緩語。匆匆謝去。此行也。藤岡二子。年皆六旬餘。三山記畧

十二

大率日在輿。余幸有勝具。每遇佳勝。輒不自覺。山谷之險也。日從僮一名及導者。時先時後。或坐石哦詩。或班荆圖地形。甚適也。是日以雨故。余亦就籃輦。略稍東行。輦足低昂數里。其必過曰下田原。曰浦神。曰手浦。浦產玉卵。色玄。或大。有銜乎石中者。有墜乎砂上者。好事者。往往得而翫之云。至下里浦。捨輿。簑笠行。騰數百步。過八咫鏡野。渡太田河。途見野老。里婦提竹籃。或小苞者。其中皆鯨肉也。問之。則曰。噍。昔泰地浦。捕得二大鯨。喻二阪。下則泰地浦。其海面

乃捕鯨之慶云。其邑人煙稠富饒。為海鄉之最。俗不事耕織。短絛不袴。以便涉游。至船主漁長。有湯食之家云。邑著姓和田生出。同游未至。余先注觀浦。會漁人解鯨魚。已割肉。持餘頭顱。骨孔大甕。又傷在結茅。連巨竈。置大鍋。煎熬皮及骨。以取膏油。溝濤為殷。鮮腥成烟。所謂頭顱成。嶽流膏為。淵。吾始知其非溢也。泰地岬出海里所。壤頗寬衍。有神祠。有燈臺。故俗又謂之燈明埕。又有望鯨樓一。舉火臺二。導者云。守者日在樓上。而候海門。見橫海之突兀。則煽煙于

三山記畧

十三

此若鯨西。則小煽于東。大煽于西。其東也反之。於是漁者各于銘。以乘鵠。其疾如飛。箭猶軍艦爭先登也。或西刺。或東擲。或南張網於海面。一皆如約束。凡捕鯨始于十月。至春三月而終。岬之右為神耶埕。與此相伯仲。左仰則妙峰。那智。眾峯。岬。岬乎雲際。黛色千里。乍隱乍見。茫不可辨。時風烈。濤起。而師與海若。進退鬪激。奇壯不可言。還而後和田生館。館頗宏敞。酒饌亦具。和田氏之先。慶長中避亂于此。與其族謀。遂以漁起家。主人年尚少。其祖父松翁頗讀書有

雅韻。談稍熟。因出一石磐。以示曰。是昔年鯨肉中所得之物也。或云為挹婁女真之物乎。觀之其質青黑。長二寸有餘。形類我邦之鏃。蓋挹婁女真即古肅慎氏之國也。其俗至今猶用石磐乎。書以俟博雅。又示海鯨圖解曰。向所割之物。名曰末古。得此鯨。則必不待三日而雨。意或避大洋風雨而來海口乎。或鼓海氣以為雨乎。余觀其圖。讀其解。鯨形大同小異。黑肌白文。眼細。嘴長。合吻。類鴨。喙。頭顱半身。頭上皆有噴水之孔。其大者如丘。長大與圓闊相比。類止於六七

三山記畧

十四

品。其所用勿論皮肉牙齒。乃至骨。鰓。鱗。鬚。諸筋。腹之屬。一無所棄。可謂漁利之大者矣。其明日阻風雨。午稍晴。至向島。島距浦甚近。凡船工。鐵冶之技。皆居焉。乃就觀捕鯨之具。其船取輕捷。制與常模異。狹長尖底。外髹以黑漆。而丹青龍蛇花卉之屬。用八樽可載十餘人。其撻網一目六七尺。疎大恢恢。其所謂逆鬚。鎗頭者。凡八九。其小曰乙。曰早。曰角。曰中。又有如劍者。有如戟者。有如屠刀者。皆其秘白幹。長丈餘。而繫於繩。繩於柄端。繩之長短。幹之輕重。亦從父之小大。各

有制別有巨叉短柄重數十斤命曰萬漁者衆單舸
凌駭浪擲之以逞技其勇可知也嚮導者為語捕鯨
之始末疊疊可聽其言曰漁人各有必長其能投乙
叉者高翻於天倒刺于海或及於二三十步蓋捕鯨
之戶古座三輪二浦亦各為部而此地為冠若在兩
隅見之則先刺乙叉者為嚮是為其部獲矣其塘網
非所以罨之施之海塞其前面則鯨猶豫不敢觸焉
其用叉自乙次第至於萬叉止矣鯨固有強弱或有
用數叉獲者或有背數十叉逸者若觸鱗尾一機則

三山記畧

十五

船忽移齋漁人遭其危縣自投海復乘他舟以為常
也嗚呼漁人於海未始見水者乎觀已畢右登高巖
導者指示曰其簪而雄摯者為鷲巢孤松奔巖頭者
為千鳥松某為刀灘某為寺島相傳平維盛潛匿于
此竟隱熊野山中即今之小松某清水某實為其胤
皆藏平氏古兵器其遠者為宇久井稍邇而海為灣
者為勝浦島之觀亦窮矣又雨色歸館館東十步為
松翁居石門頗奇是其曩祖所鑿云導者名孫十次
和田氏同族也翌猶雨乃決策兩行主人知其不可

止令懼夫識渡云外浦未可渡也森浦則可耳復從
其言主人具輕捷舸二艘每舸各八榜破波駛快逸
興飛揚所觀綠嶼奇巖不可停瞬食頃達勝浦蓋去
森地浦四里而去森浦二里是以其奇勝僅得半也
大抵奇偉麗潤可擬難渡之諸嶼而雄快過之唯不
見其晴景為憾耳揭天滿河經河開井關等村落至
那智山麓

那智山

那智之山結根雄偉盤屈于東西膠葛乎南北前對

三山記畧

十六

妙法之巖凌據雲鳥之嶺其頂為帽子巖側有風穴
屏岩瓶石細洲等諸勝而北額劈為巨壑壑中大巖
壁立瀑布乃懸焉望之三四里之外如白虹之懸於
雲端初至其麓曰市野時而始歌雲霧逢淅山容未
了了既而度溪橋過華表滿山皆杉森森摩天濃翠
欲滴皆數百千年之物也漸上漸峻猛聲喧吼振山
谷聞問之曰瀑聲隨風而至也石磴萬級得山門門
扁曰本第一大靈驗所八字云是桓武帝所勅
賜二金剛像高瘦古拙僧雲慶所造入門上右崖數

百步有黃冠羽流家。乃投宿法如精舍。歛霧未晴。惟聽瀑聲益吼。雷轟震震。又如波濤之鴻洞。非嚮所聞之也。余意興橫生。便欲往觀瀑布。同道亦從北行。下岷。噴岷老杉。駢植夾徑。徑益下。樹益高。瀑聲益猛。而谷稍稍闊。有佛堂及小亭。上亭仰瀑布。雷氣漸散。削壁千仞。赭綠相交。如一片石。無有縫罅。同造一口。絕叫稱快。徐望若蜿蜒。字白龍下於雲間。定視則紛紜若亂綿。霏霏乎為龍玉。少選滂沛瀆薄。銀浪奔注。莫可名狀也。自余出州府。山行海宿。旬有餘日。峯

三山記畧

十七

巖之挺聳。鳥嶼之清麗。無不駭目。然未嘗得一懸泉也。既觀此瀑布。而益知造物者含畜變化。不可思議矣。吾十年之夢想。渙然冰釋。薄暮還精舍。尚與同遊。稱其奇壯不置也。翌日天晴。復往益極其奇。隔壁三十步許。植杖臨溪。瞻仰崖上。十仞之樹如箸。其高不可測。水霧沾衣。清冷徹骨。令人心神爽快。不知倦矣。朝昏已高。割愛而去。遂謁十二所神廟。廟在半嶺。連崕環焉。綽垣周焉。丹雘雖漫漶。盛飾尚可觀。側有大悲閣及鐘樓。莊嚴亦具。傳者曰。在昔仁德帝時。神

放異光於山東。帝初祀。立廟于此。因一瑤光峯。又花山法皇嘗駐蹕三年。其宮址尚存山上。故稱御山。白河帝亦有祭瀑布之事。實是仙區神阜。而帝王舊蹟矣。又聞嶺上猶有瀑布數仞數丈者。同遊憚險。余亦不敢強。何則。我輩於山水。深搜遠窮。或後所得不及前所得。興盡意倦而後敗者。往往有之。況乃一朝得遂十年之志願。吾不欲貪多於今日之遊也。蓋吾藩稱多名山水。而無如牟婁。舉牟婁之勝。那智山瀑布最為奇絕。凡山不帶水。則雖有勝。猶不漁人。水不

三山記畧

十八

據山。則滾滾長流耳。二者相待而後能擅其美也。夫那智之勝。若山若水。幽邃宏大。可謂備矣。

自妙法山至本本浦

從那智神廟後。上蹊百步。有二路。一北至雲鳥。其一西南迂上里餘。達妙法山。妙法與那智異稱。而其實一脈也。此遂以觀瀑布為主。既窮其奇。未能屬贅。心猶在背後。忽有先登踞石。呼快哉者。余知其語聲為英彦。喜躍就之。則那智峰巒盡為金碧。瀑布與日華相照。光彩爛然。如積雪映朝陽而崩頽。但見其狀不

聞其響。可知相隔之遠也。而其大依然。與爾所仰觀不異。余益嘆其壯大。既得阿彌陀寺。松蘿覆門。苔蘚埋徑。堂中安古佛。有僧守之。又有洪鐘。近時所鑄。無足記也。皆曰妙法無奇。寺門之南。漸下百武許。得一平崗。眼境豁然。年婁數十里。山河島嶼。靡迤重疊。綿絡環匝。悲現杖屨之下。如佛所謂在兜率天宮諦觀下界。余於是始知妙法果有奇矣。盤桓多時。製一幅圖。收之。東下峻阪。蹤不可止。左得銅山。多舊礦。鑛砂銅石。錯落于徑。上人云。是為長野之山。四十年前猶出

辛巳記事

十九

銅。工費相難。蘊含鱗次。今則窳窳二戶耳。又經諸林。宇久并依野。三輪崎數里。抵新宮。歎宮即水野大夫所邑也。過其野。入其市。望其城。亦紀南一都會也。是日伯英先擇逆旅。吾就休焉。翌日昧且泔。新宮祠將詣花窟。北行離邑。過河。行堤上里餘。又渡河者三。曰湊。曰市水。曰志原。得有馬村。忽見一山突。起於松林西。同門皆駭。即花窟巖也。其巖南面立。綠樹植于巖。斧劈斑斑。淺而不透。從三四十仞。衡亦稱爲一巖。北向對立。大居其半。窟不立神廟。唯建華表。令人自起

敬。二巖間。如行斷崖。如入巨窟。書記所載。華。伊樊冊尊之臺是也。故事祭神必以花。花窟之名。其因此乎。穿出東。則巖形愈大。其背北旋。漸為土山。望之亦猶漆城蕩蕩。不可登也。余見奇巖已夥。未有如斯偉傑者也。東北道于海濱。石數丈者。往往而在。濱盡得本本村。阡陌稍廣。市街相通。亦一富鄉也。里長來見。乃問以近縣之勝。曰。近而土人歌口者。為產田神祠。為有馬城壇。在海者。為魔島。為鬼城。凡熊野中稱古址廢墟者。其時世綿邈。多不可詳。稍遠為大馬嶺。其

三山記畧

二十

山有鸚鵡石。其傍諸山。產蘭及藥草。仙茅最多。又生一種臭艸。近時識者。目以為舊也。余忽憶家君愛蘭之事。蓋吾家所養數種。其青莖魚魮。金陵邊青。寒蘭者。皆此山中所產云。里長曰。山谷雖多蘭。至其佳種。非入穹谷深林。則難得。乃贈以一草。曰。比入馬嶺。所得者。為鷄尾蘭。其葉狀副名。細莖小白花。亦蘭之種類也。余僂齋歸。獻之。公所以充藥畝之種。其餘呈之家君。明日雨甚。一行就輿。取原路。還新宮。晚逆旅主人乞書。伯英書草行大字。余則筆小詩二三首。

併與之。邂逅金叔狀。叔狀名良顯。邑之老儒也。蓋其五世祖。自朝鮮歸化云。

熊野河

熊野河一稱九里峽。其源出大和七八里而入紀。浸巴潤無音。田二水亦會于此。奔湫漸壯。又四里而與北山河合。南走蛇淵。其勢益大。竟為新宮河。東注于海。十二日將溯峽。賃船二隻於新宮城下。其一我輩三人。提壺觴茶具。乘之。其一僕役行李。舟子各二人。挽百丈者。凡六人。昨雨河水洪。午始得上船。碧派

三山記畧

十一

湯湯涼颼吹面。兩岸松蘿。落影可拾。東辭先奇。引一簷迎之。至檜枝村。挽行者喚邨夫相代。蓋峽上村。村今界遙代為後云。忽見輕煙映山翠。云造炭處。杜宇一聲。飛過前峰。仰見之。已失雲際。我江都之居。盛夏厭此鳥之喧。客遊千里。偶聽之。始覺惹旅情。行不能三里。而泊大蟠蛇淵。奇巖出焉。又有白絲泉。纖纖可愛。峽西之村曰淺里。其境幽寂。岡壑四合。草樹際天。東坡所謂如大環者也。民可百家。居于環中。乃上岨投宿農家。亭憑夾壑。村中桑麻四圍。一覽無遺。隱此

夜風月清涼。峯巒愈高。瀑溪愈響。皆喜出於意外。賃明還上船。解纜中流。滌釜烹茗。清香爽然。未知與中冷水何如耳。忽驚左岨斷巖。昂然皆為異狀。船少轉。奔流自右匯注。得飛雪泉。飛瀑亂石。望之如柳絮翻。溪。群鷺集崖間。自是二里許。兩岸屈曲。壁立斗絕。潭淵湛碧。亦時為灘。其灘多暗石。川路屢如窺。而又通余謂李青蓮荆門刻中諸什。以賞其奇。舟子指右峰云。是為龍門。為仙人林。又稱飛鉢。昔者有泉岳上人者。隱此山中。天子嘉其道德。屢徵不出。今踰其地曰

三山記畧

十二

宣使返所。漸過其峯下。水霧俄合。遂窗朦朧。是時百丈過葦石間。唯聞簌簌汰舟聲。左崖望葵泉。霧猶隱半。頃刻散而為一帶白雲。上遮岨險。紫翠間日光少漏。霞彩霏霏。來撲眉睫。又得飛瀑者。左右各二。有走下岩罅者。有迸灑古松梢者。有吐為三級者。又為素練者。舟中拍掌稱快。水聲鏗然。四山皆鳴。不啻笙簧鼓節。耳目應酬不暇。既而兩岨稍開。踈躑花盛開。紅綠縫隙隙。左巖奇峻。又得小懸泉。不讓前所見。過和氣村。瞰日稍升。船漸北嚮。左山本熊城。日足等村落。

右楊枝郡。平遠為濱。竹樹葭葦。蒼翠彌望。至此萬頃。汪汪空闊。洶湧。即北山河所注合也。舡揚帆。尚用百丈。北匯遠望九十村。折而左。見廬舍于金楊之際。為川合村。挽行里餘。得一橫峰。名撞水山。崖下綠樹鬱蔥。一大奇石。突然橫出。形如纛軸。舡循左畔而避之。得數屋郡。皆松巒。前嶺際。見樵徑。見茅舍。皆有畫意。驢鞍左。石凌湍急。舟行太難。時見下峽之舟。如鳧鷖逐魚之狀。將及高山村。激水噴洲盡。挽夫綰百丈。上舡撒帆。回蕩。屋湖歷流。受石衝瀨。而始穩。復得挽路。

三山記

二十一

于左崖。過笠川郡。是為巴洞。少右轉。則本宮廟背岸也。上陸日已晡。夫峽中山暉川媚。鮮巖多趣。灑落有韻。譬之畫。即南北合派。妙處石峻法。樹點式。泉聲嶂峯之位置。亦無不悉具。益悟古人以造化為蕒本之意矣。若夫世俗之耽艷稱。浮屠達摩。洪鐘屠刀。肉著袒肝骨。等諸巖。余則無取焉。

二宮

詣新宮後五日。謁本宮。蓋二宮祭天七地五諸神也。其廟皆立之山下。華表一。樓門三。禮殿一。宮祠十二。

雜舍數十周。以丹垣。其正殿共向巽位。棟楹之刻畫。梁桶之輪奐。庭壇之高廣。亦皆相如。大率延袤三百餘步。前是明和庚寅之冬。本宮災。爾後假廟以安神。比年經營成復舊觀。恤如方成。奕奕日新。今茲秋九月。將有遷宮之禮。藩士熊澤友之。以司農屬官。來幹土木之事故。得聞其詳焉。考記。崇神帝五十五年。戊子。創本宮。景行帝五十八年。戊辰。建新宮。那。山有廟。則少。後為。而地城市郡落。被以二宮之名。若曰本宮。是。新宮。是也。余登神倉山。觀飛鳥河。寶徐。

三山記

二十四

禰福。皆詩以記之。蓋徐福入海求蓬萊。遂留熊野。口碑。傳舊矣。不但我邦稱之也。歐陽公有句曰。徐福行時書未焚。逸書百篇今尚存。又僧絕海曾入明太。祖問徐福之事。答以詩。亦可以證矣。

湯峰

湯峯在無音里西。有寺曰東光。其傍客舍皆矮陋。盧于凹凹間。有二溫泉。其一出自精舍園中。一則湧於西塔下窪處。晨昏外煙若發蒸甑。岨畔為二室。高者注之。低者激之。以灌其室。湯極熱。野菜豆麥。浸之皆

可歸也。故浴者和水始得入。麻痺脚弱尤有驗云。留宿二夜。步月浴泉。旅懷為暢。

還州府

朝鮮湯峯還本宮村。北行可二百步。而左折。雲氣出岫。暗澹如霧。細路一條迴山腰。路轉而攀峻坂。下深谷者二。踰三越嶺。得湯川邪。循川行。仄路益陘陘。林樾益茂。密溪多七葉樹。大者殆百圍。又上一嶺。喬木千尋。蟠鬱凌雲。茅茨一字。是為崑神。蓋山中多神宇。一村一祠。凡稱王子祠者。九十有九。是亦其一云。余

三山記畧

二十五

時德乃其無下。援筆題曰。茅茨不伐。土階三尺。惟神祇棲真。冥赫赫。書罷而下谷。又直上自前面。遂踰頂。歷熊瀨。小廣二山。宿近露村。夜雨寒如冬。明發度溪流。登相坂。行度山脊。宿雲滿目。宛如晚雪新晴。余奇之。植杖凝矚。山日漸升。一二峯巒隱顯。乎英英之中。須臾遂然消散。則亂峰百千如濤頭。尊者指示西北嶺云。某位為龍神。某位為高野。為無果芝川。而鐵川路皆下。數里上沙。見嶺。蓋自新宮歷本宮。至田邊山行數日程。是稱中邊地。歸者至此。而始望海。行者

過以不復觀海。故沙見之勝最顯云。又歷三柘萬呂等里落。達達田邊。四邊者土腴民饒。安藤大夫所邑也。邑多木工。其製器材咸用七葉樹。素質可愛。他川所少也。又有古屋谷。谷中產奇石。大小皆具峯巒之狀。可為盆瓶或硯山。但其拔俗者。難多得。又有甕磯貝者。奇品百餘種。皆海濱所產云。其明白南部過千里浦。浦國風所詠也。又徑岩白切目等邪落。至印南浦。復故路。宿原谷。亞歸府與藤岡二子謁官長。各送金。余則伴家君時。眾客滿座。琴酒相歡。留宿三日。告

三山記畧

二十六

暇東歸。以五月二十四日。遂拜別家君於官舍。蓋以家君之歸在明春。公駕述職之時也。此行也。還京攝歷江濃。入信踊水曾。出上毛。六月九日。得還家。有人曾說天下之嶮。曰信之本曾猶易。紀之熊野則實嶮焉。余今而知其言不誣也。蓋余進至本本浦而止。聞其東北猶二十里。以達於勢。其鄉大者曰尾鷲。曰長島。其嶮曰八木山。曰大杉山。曰大臺山。以翰屏於紀西北。環云。吾友呂隆年以官事屢抵熊野。嘗語余曰。遊者多自州府。越中邊地。至于本宮。而新宮而那

智歷太遠地而還。夫下峽舟疾易失其奇。且海濱背
兩。則諸勝咸屬左顧。不如反之而逆行順還也。余乃
從其言。故得盡其奇勝。記以告後遊者焉。
享和二年壬戌秋九月記

男 遷編次

孫 純校字

三山記畧

三十七

先考此記請里古賀翁序之。衡藏祖考亦有題辭。遷嘗欣擇之
不果。已而先考捐館。余遷襲家。居剏職。今已四十餘年矣。而亦
嘗不取之于懷也。客歲壬寅春從公駕至紀。二子與余從
焉。故解後素因欲使退先考游蹤。寓其勝聚。有事不果時
老公在西濱別館。一日拜謁焉。老公談次及三山之事。退
而述覽此記。老公惜其委于蠹魚。辱賜剏之資。
恩命優渥。感喜交集。乃如校警將授剏氏。但欲未能寫真。以
合刻。是為遺憾耳。藩士鷺湖翁嘗遊三山。寫其真。以細篋中國
乞其圖中。那智瀑布。泉者得刻之。嗚呼。老公恩眷之懇。遷不
肖。得以得之。先考而有知。亦應拜賜於九原翁先考從弟善西
年已八十。健筆不衰云。

天保癸卯蒲月

男 遷謹識

孫 兼史敬書

淵上旭江 著

山水奇觀前編

舊刊本

據舊刊本影印

山
奇
陽
勝

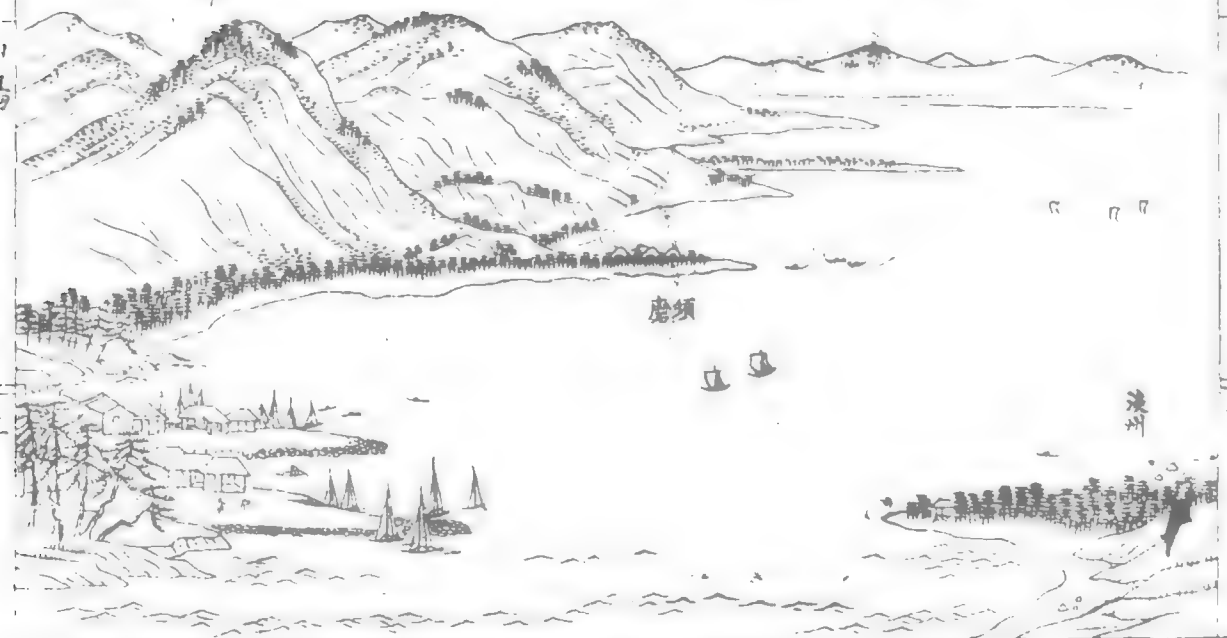
播磨明石浦

帆影蔽山
古蹟危曉
露沈浦人
帶歷眼在
就價千金

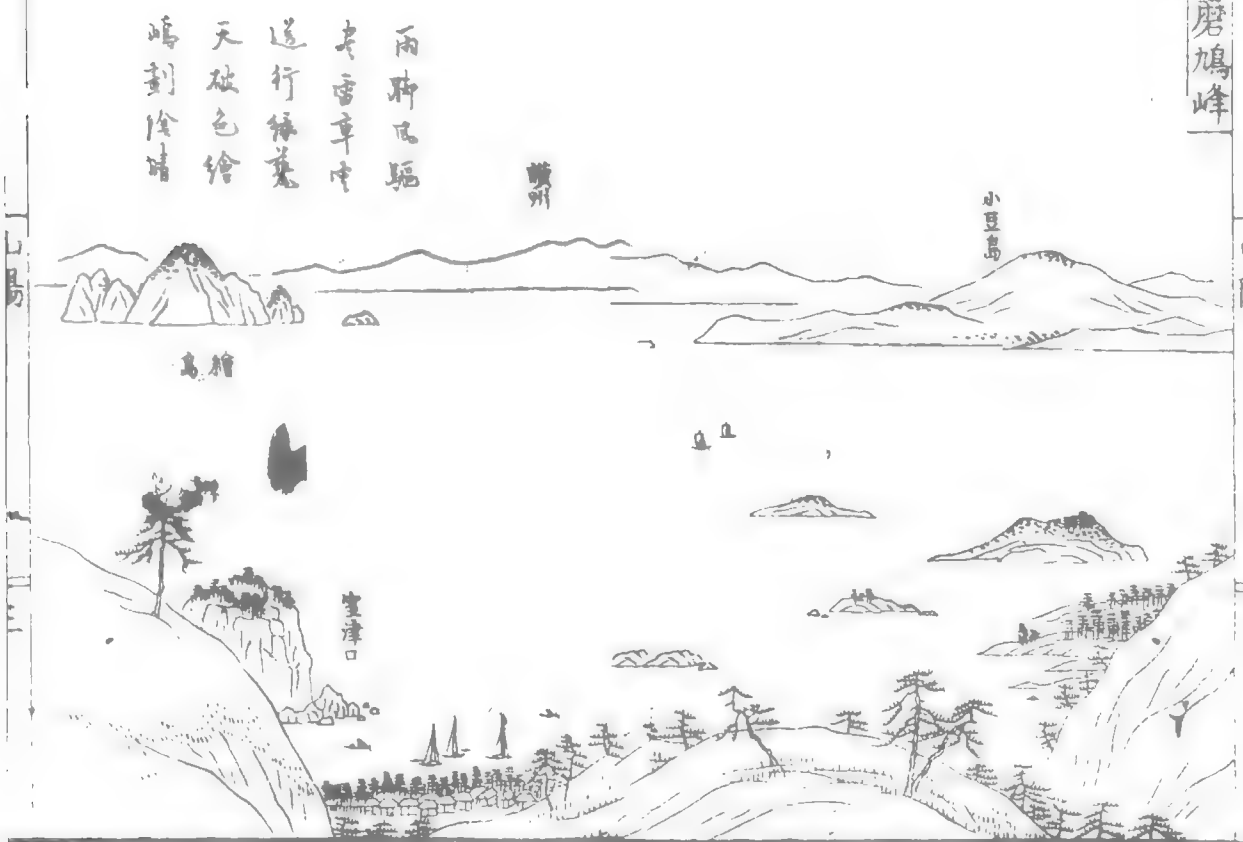
鐵揚草

磨須

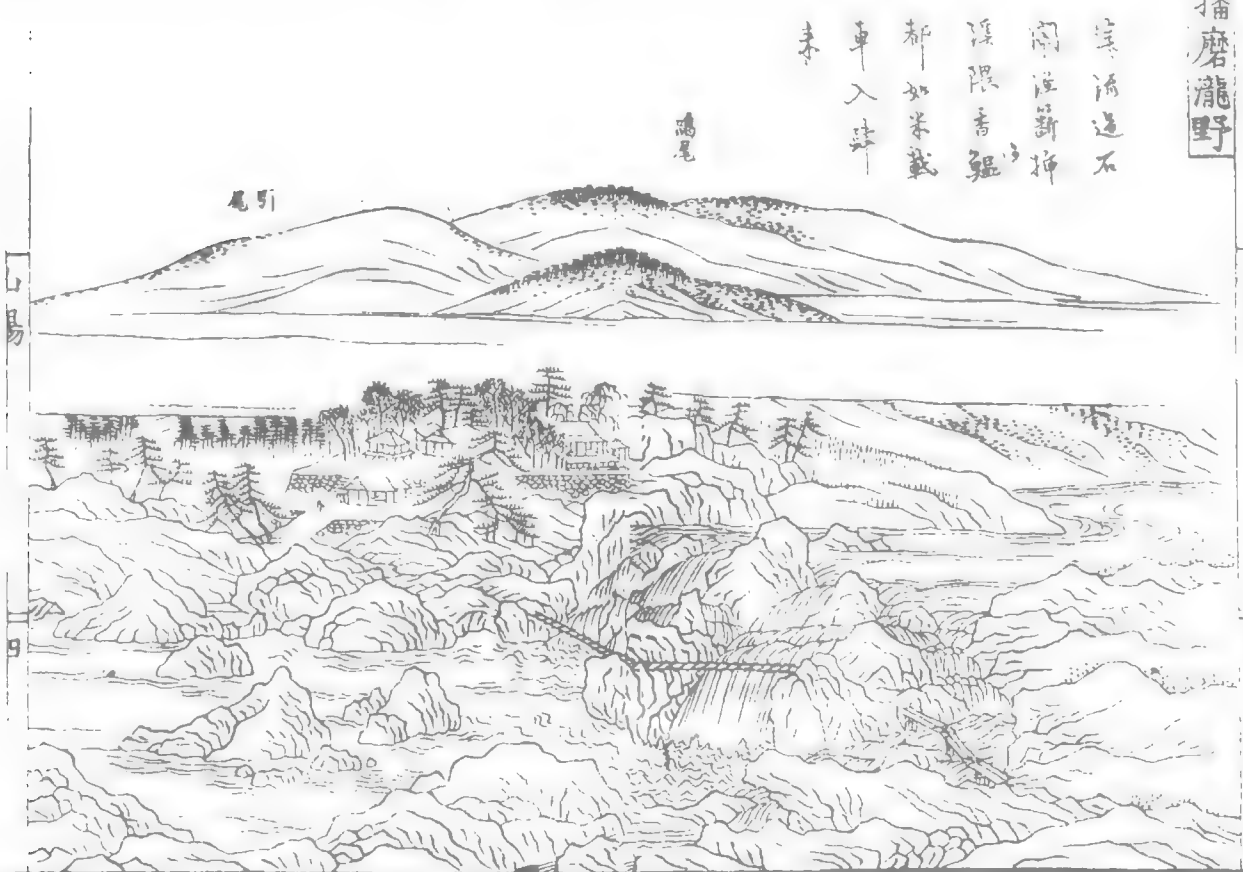
淡州



播磨鳩峰



播磨龍野



播磨滝野其二

溪山人結
利好庵着
護高沽池
侵燈火烟
各屏去局

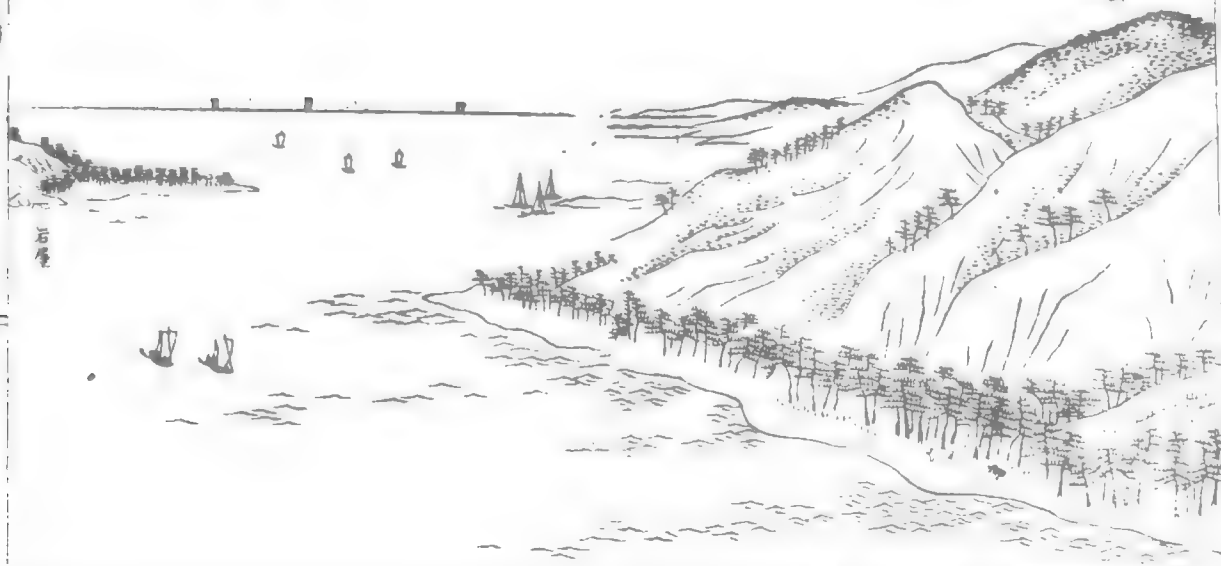
五峯山



播磨舞妓濱

城垣多佳
景松抄夕
霞照仙姬
應舞散衣
柳挂指錫

舞妓山

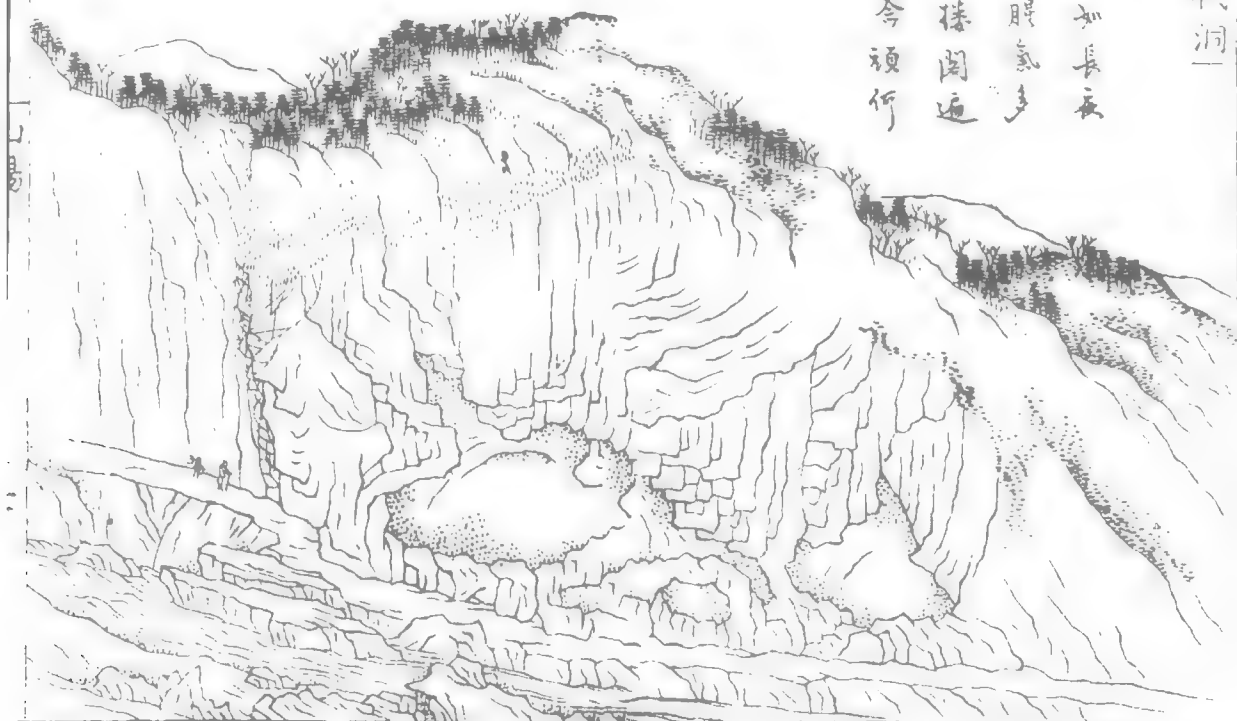


美作神代洞

官渺如長夜
蛇行眼氣多
人間殊闊迥
空洞夸頑何

山陽

二六



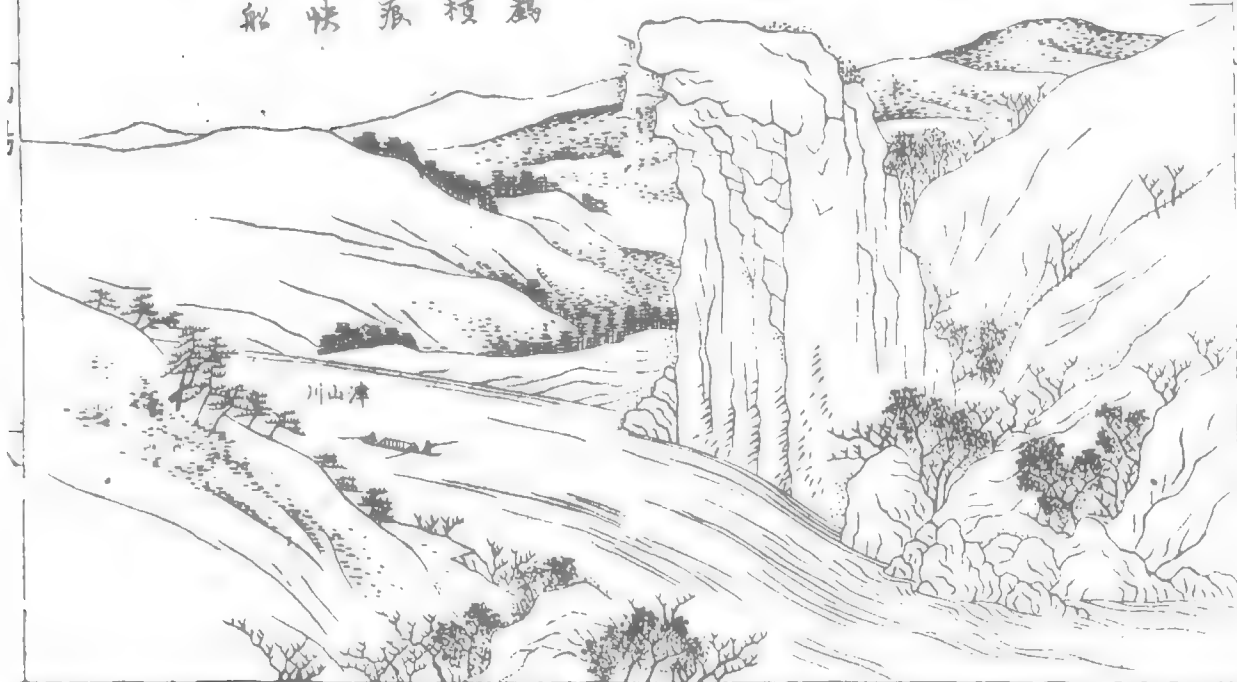
美作山伏谷

地藏巖

夏木黃鸝
歌隨、積
雨天溪痕
三尺深快
著一篙船

山陽

二七



備前龍口山

山陽

鳥啼山色曉
 雞村溪流
 茅屋猶酣
 有人已挽舟

古城壘

大壩

武佐川



備前龍口山二

山陽

日出芳
 風細雨
 餘行露
 消溪上
 景堪畫
 此中人
 不饒

大壩山

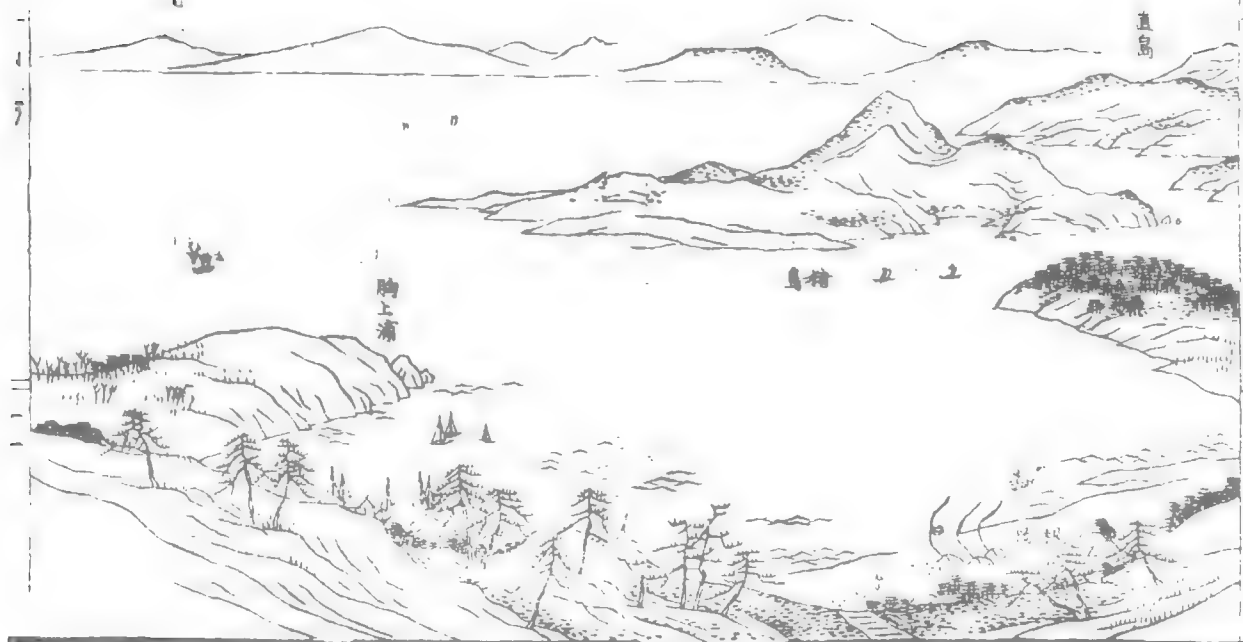
龍口

中原



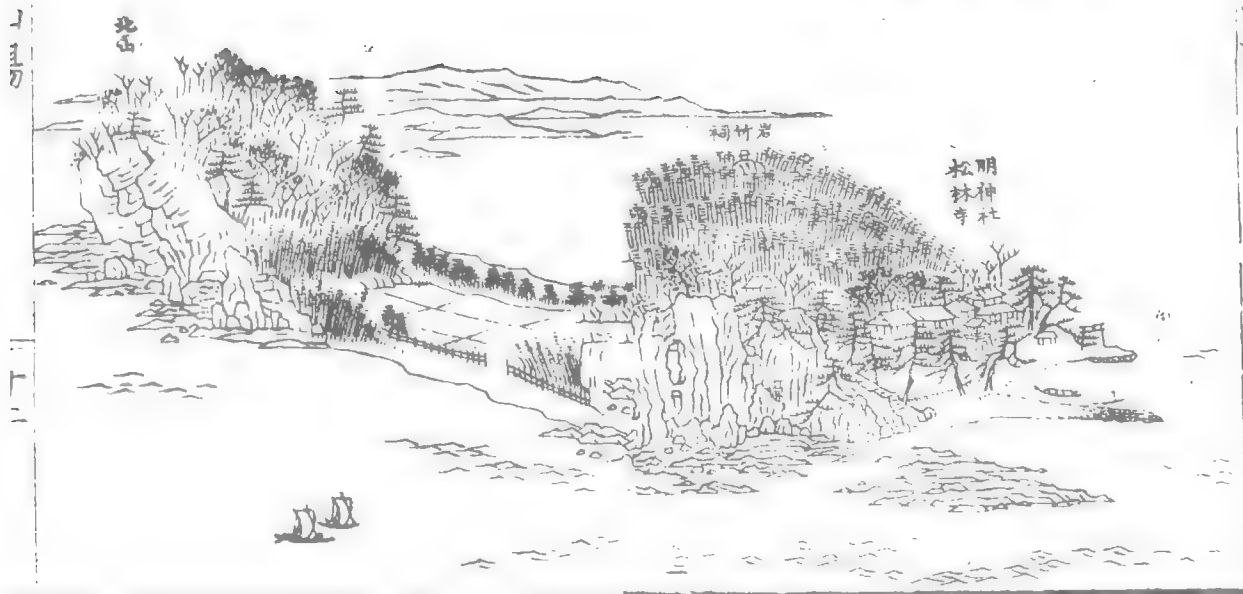
備前兒島山坂

遠山 舊知只 年多得 同臨眺 日受帆 舍小殘 煙塩



備前高島

孤映竹如 東中開寺 荷出殘僧 宜鞋洗曾 野武皇舟

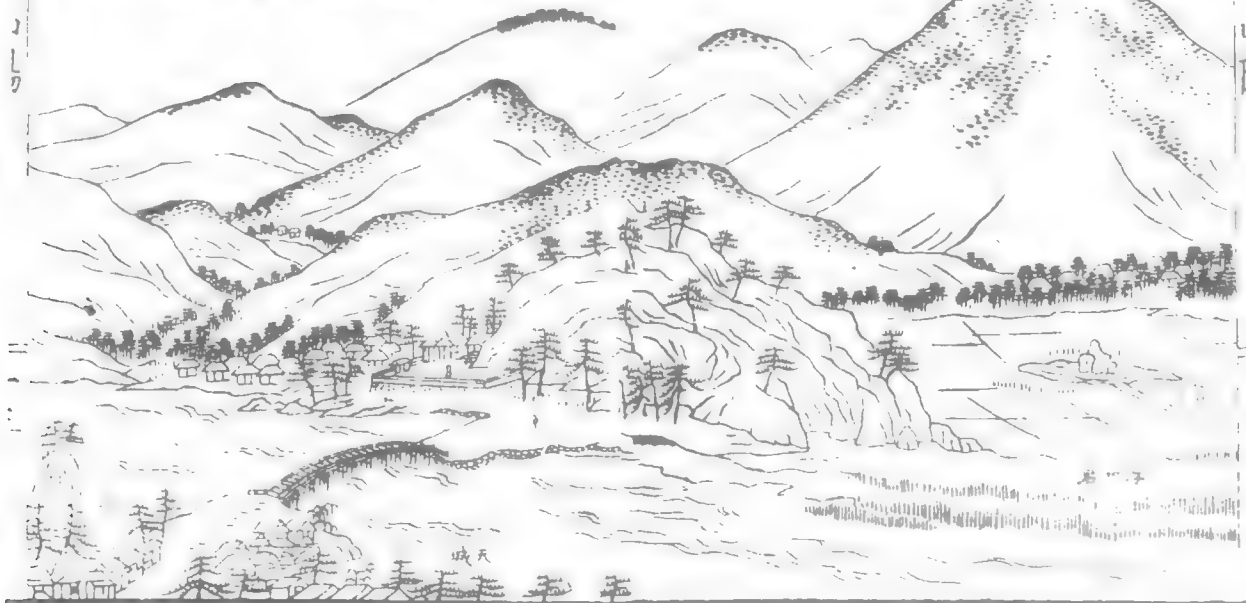


備前蘇戶渡

贈得一溪翁
公終渡西雄
曲鈎成底昂
只解釣人功

粒江山

山南楊



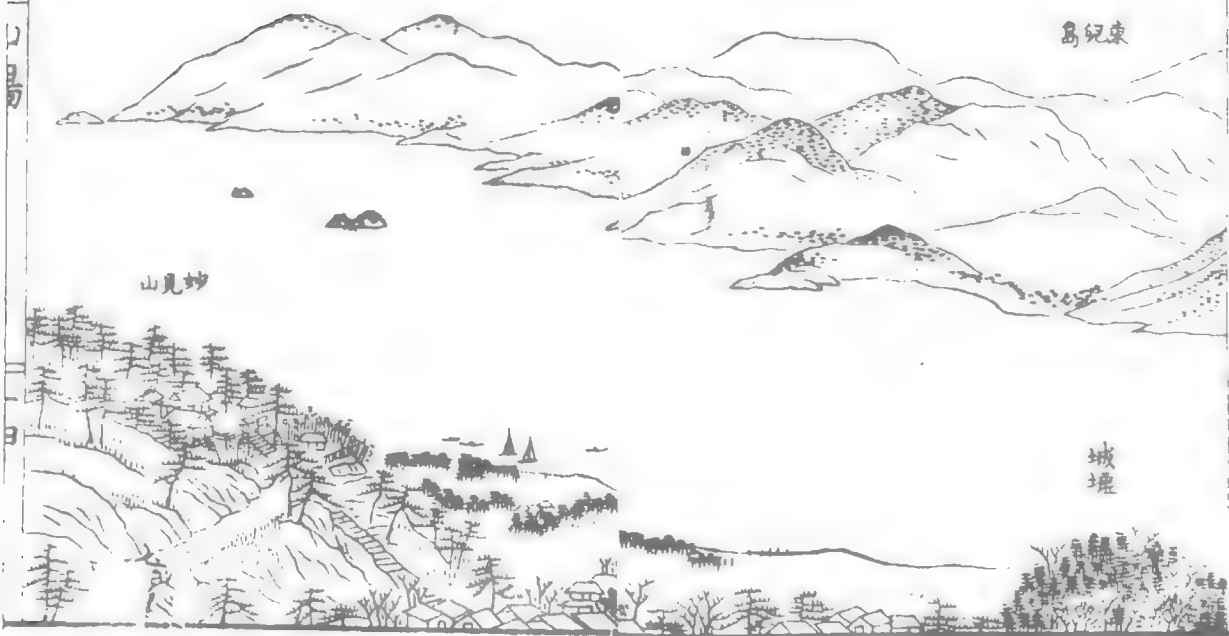
備中倉敷

寒潮追
景落哀
原領蒼
咽暗處
燈火
初知有
泊船

島紀東

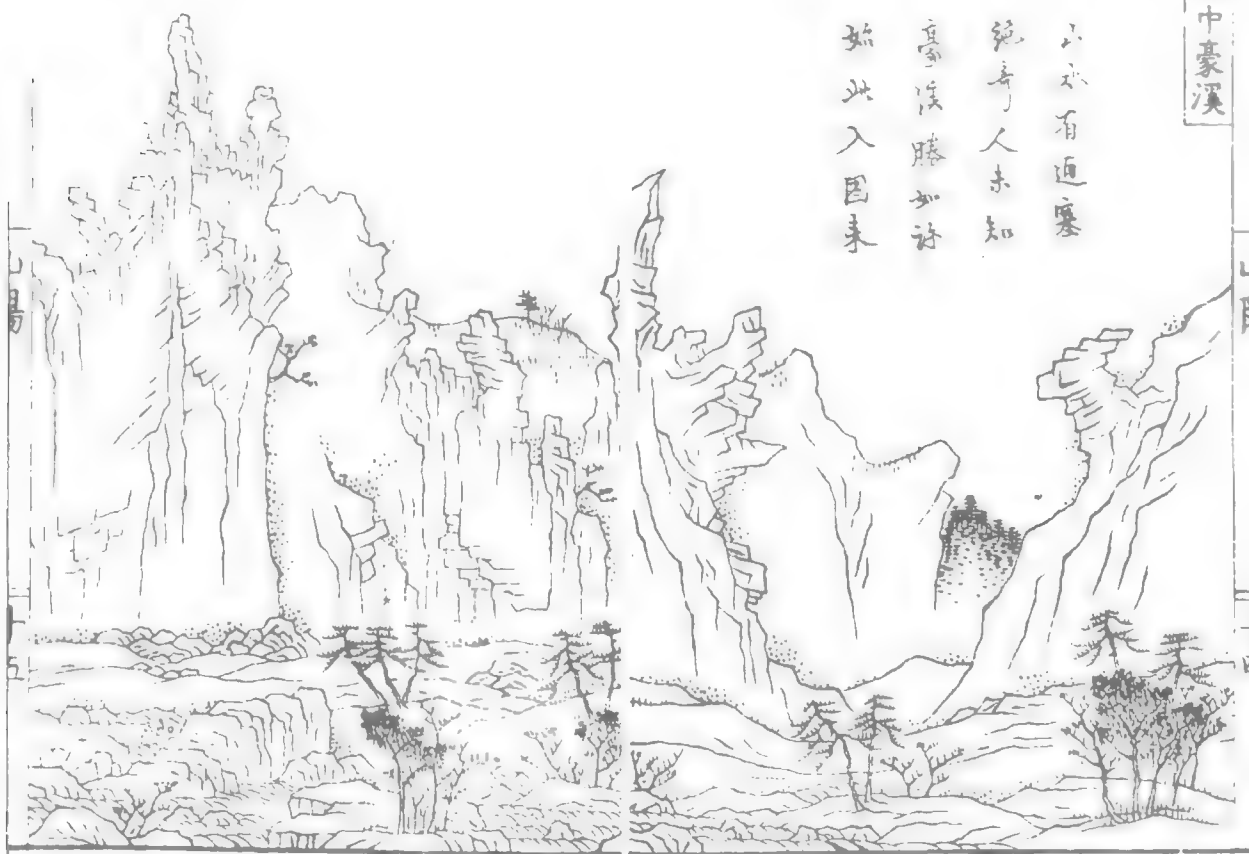
山見妙

城墻



備中豪溪

山亦有通塞
絕奇人未知
高溪勝如許
始此入國來



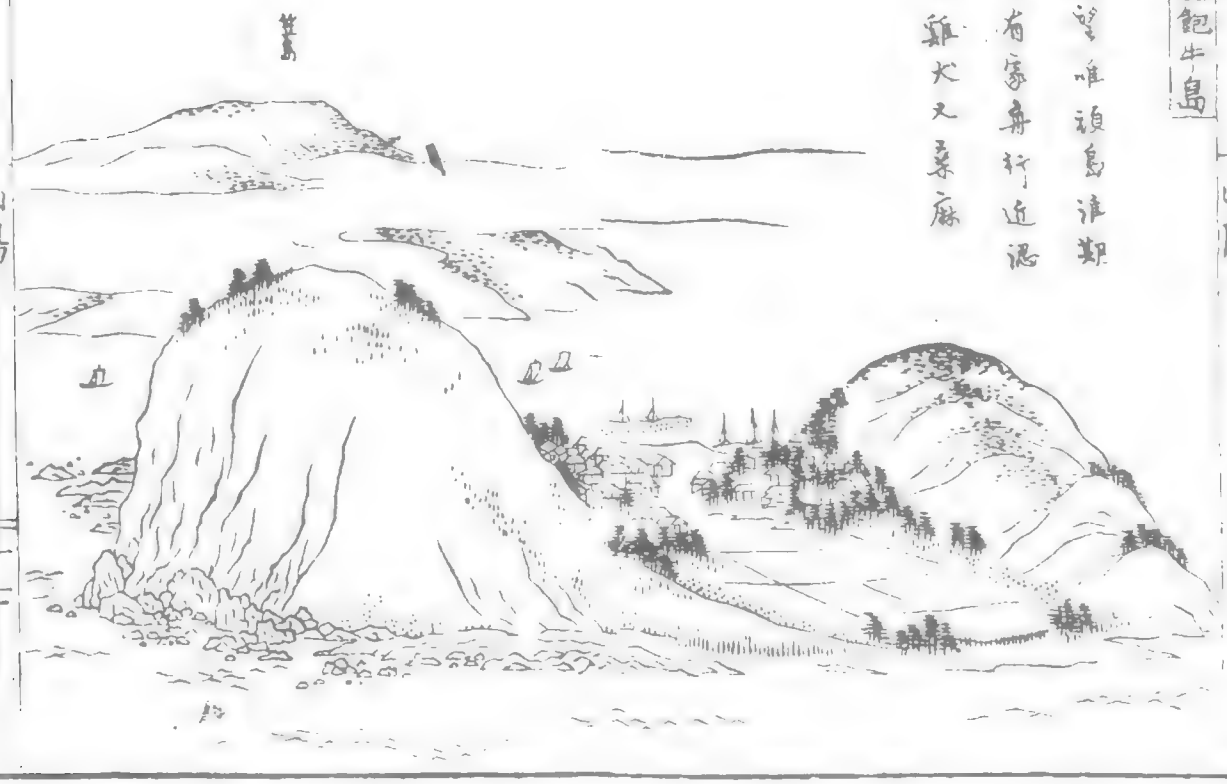
備中豪溪

石勢太威稜
澗僻自唐自
間誰又作碑
不肯容人語



備中鹽飽牛島

遠望唯願島津期
 中有家舟行近港
 得難犬又桑麻



備中酒津川

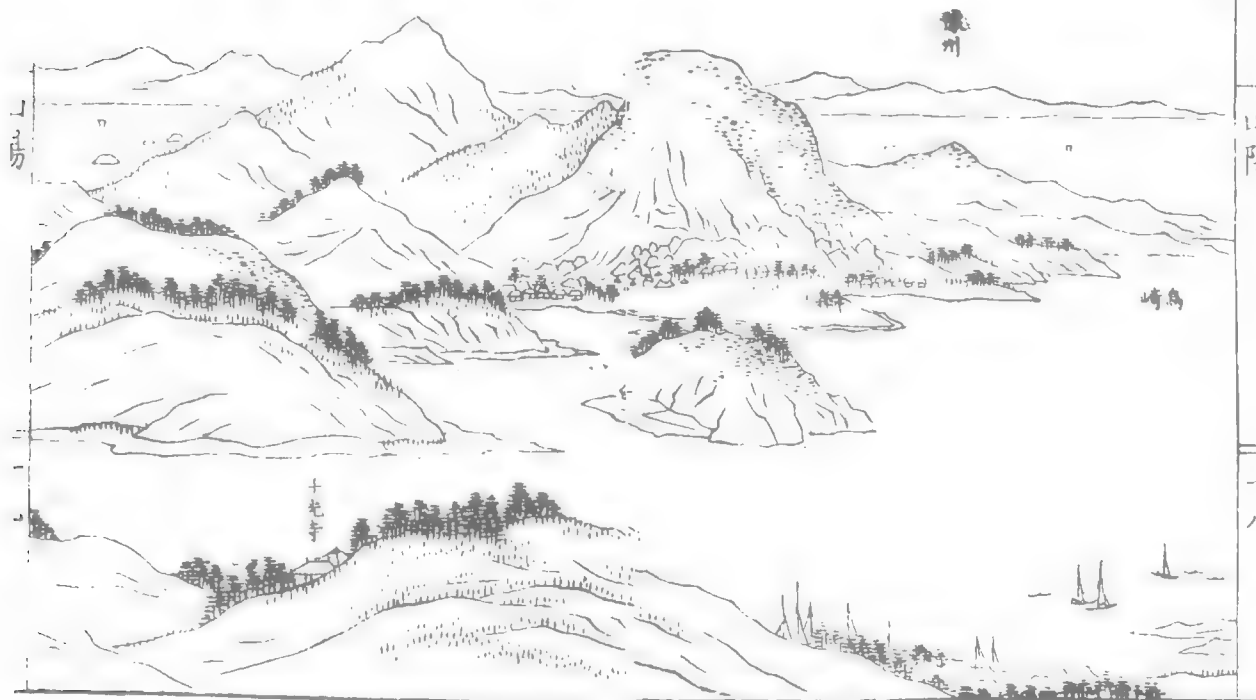
山窓朝夕
 慣見見鹿
 尋鹿不知
 更何好野
 枕立夕陽

小富士



備後尾道

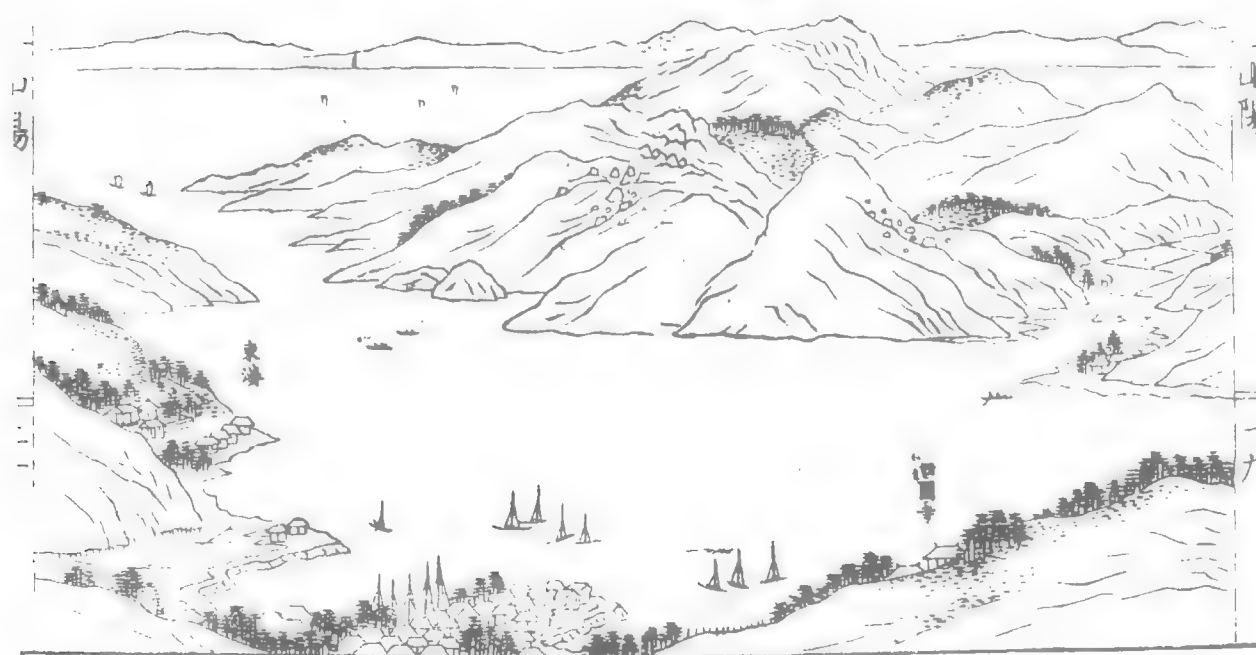
浦口環
山轉泊
舟近暮
鴉不知
風浪惡
一夜心
歸家



備後尾道二

滿天明
月白岸
上族嬌
樓半夜
猶頻吹
誰知有
定愁

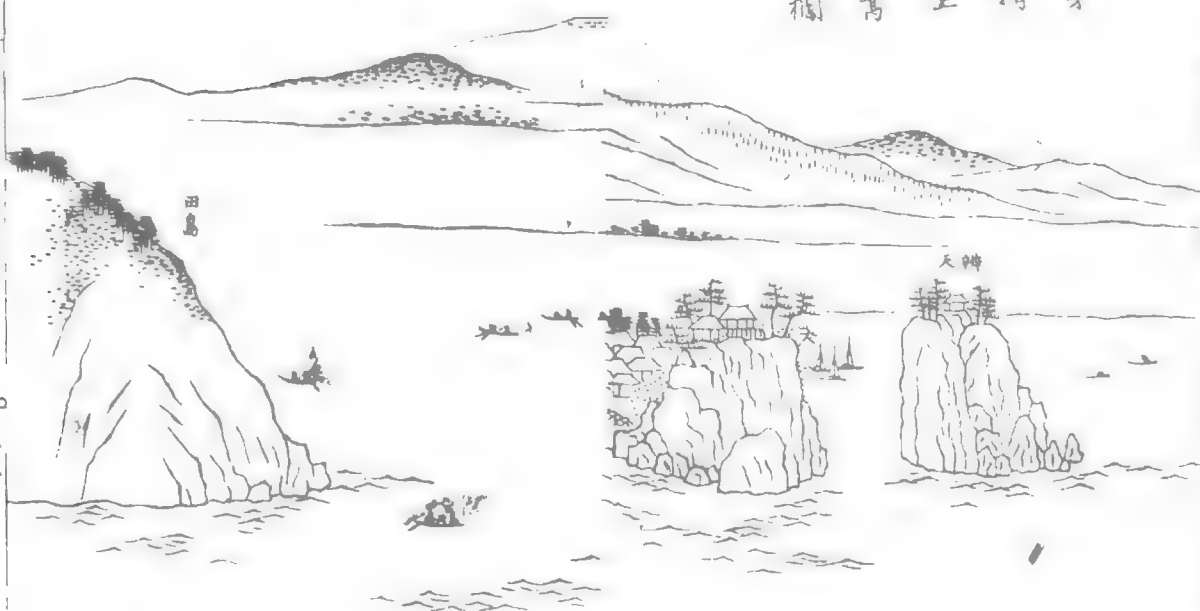
向島



備後鞆津

海東拉茅
一奴眼精
神子月工
清聲壯馬
佳人倚欄

西舟初
順風東
舟訴逆
風大悲
迷下手
或也久
圓通



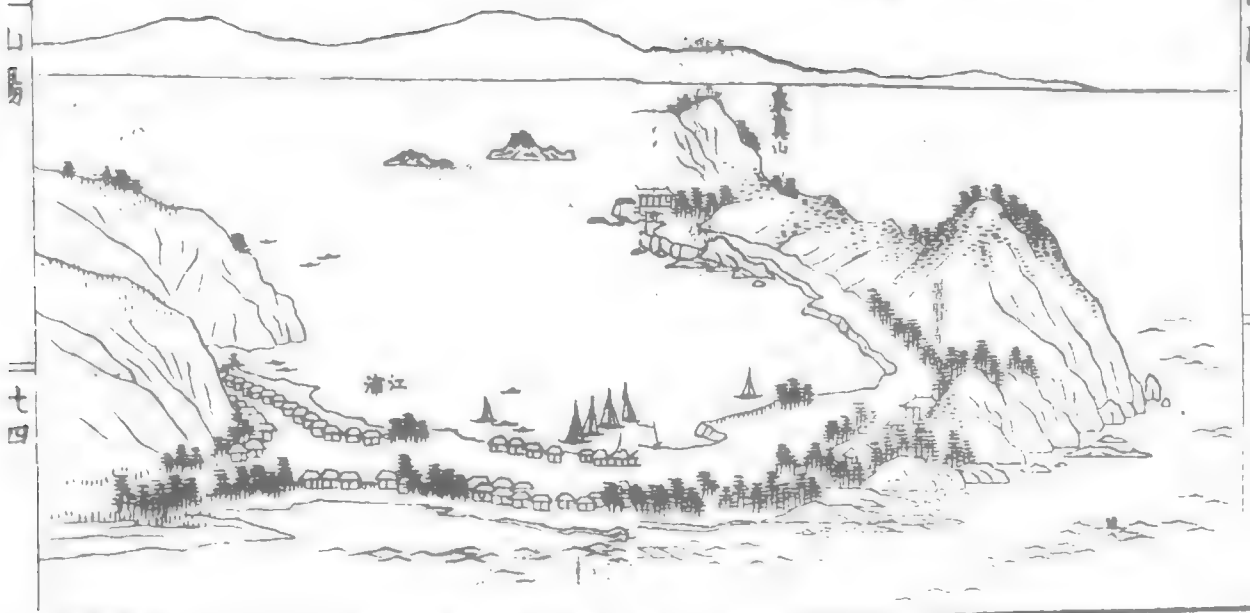
安藝音戸

水利聲山
通削山似
鬼工局未
人破膽左
賊真英雄



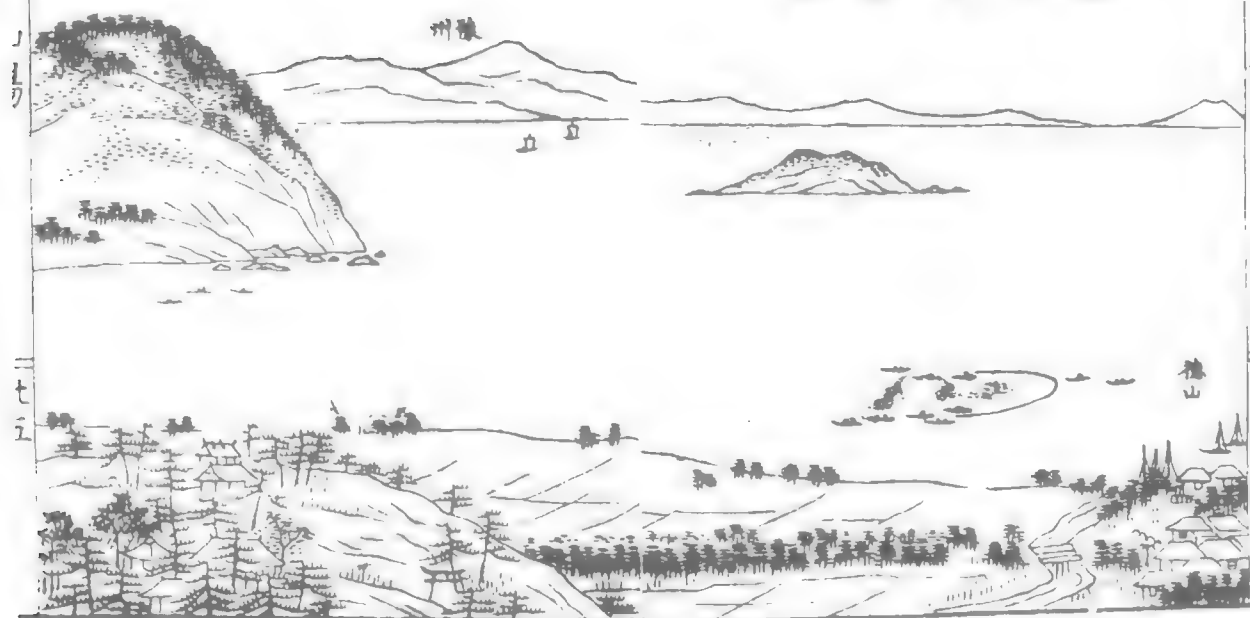
周防室積

三千煩惱河
小妓亦知非
受戒一宵未
可憐時來陽



周防祇園山

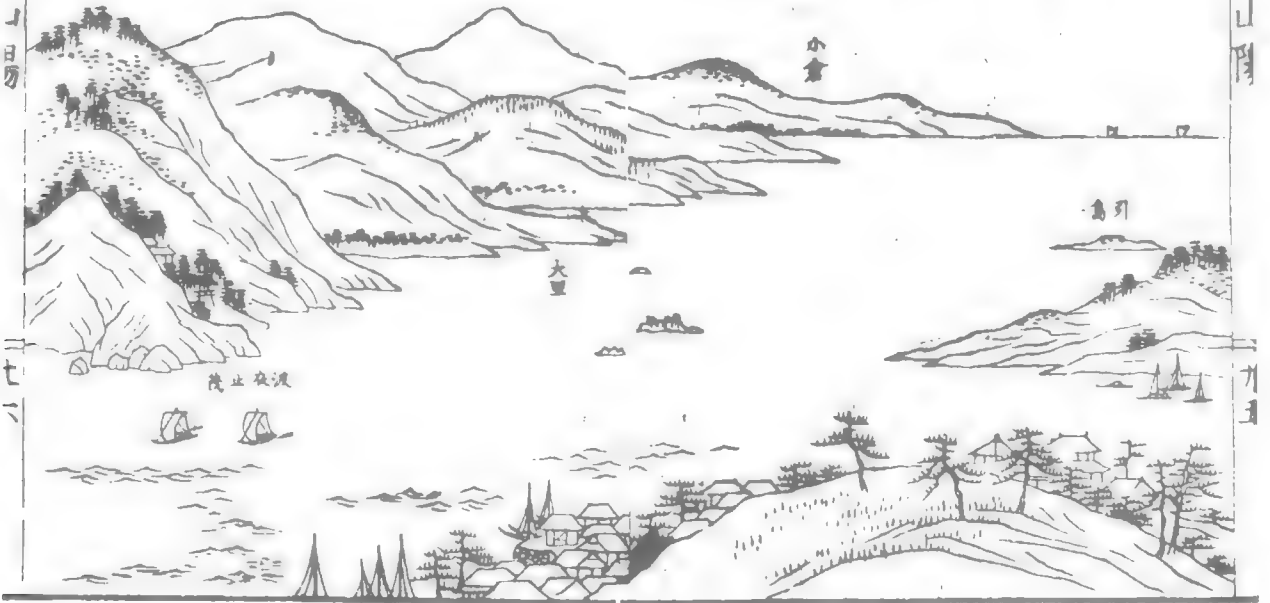
斤中無過
兩志却載
甚佳只為
金魚多滿
身不道濕



長門赤間關

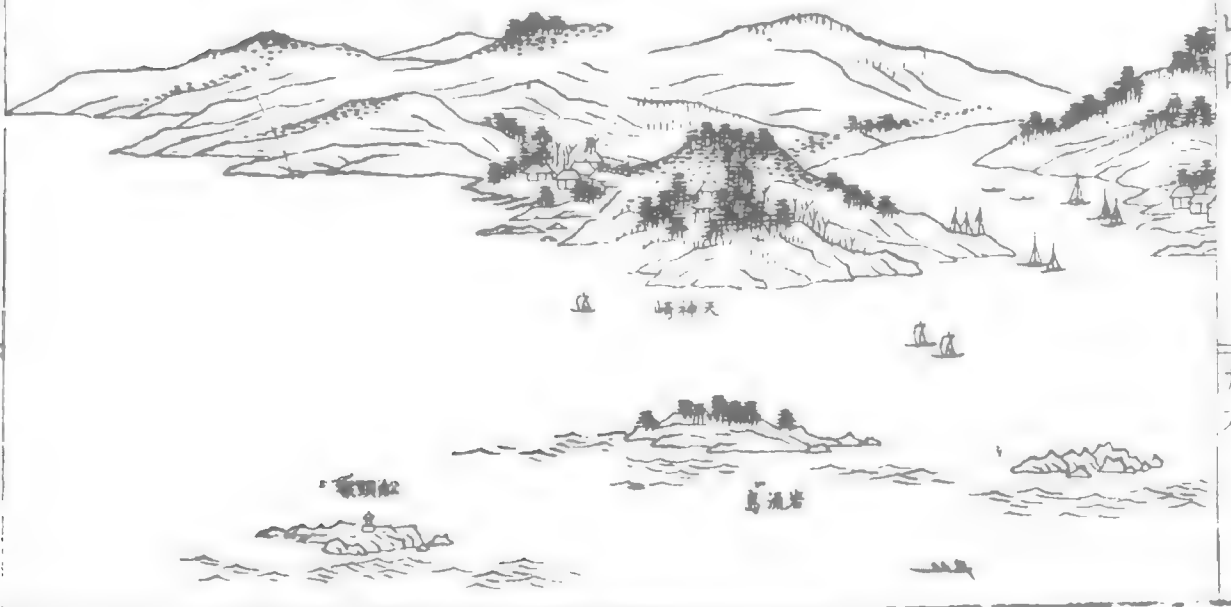
一阪傷心
 暮寒潮落
 日中舟人
 莫惜難天
 子在函宮

小倉



長門赤間關其

刺息名多
 顯舟中指
 點系終
 此刺客高
 挑不曾聞



南海奇勝

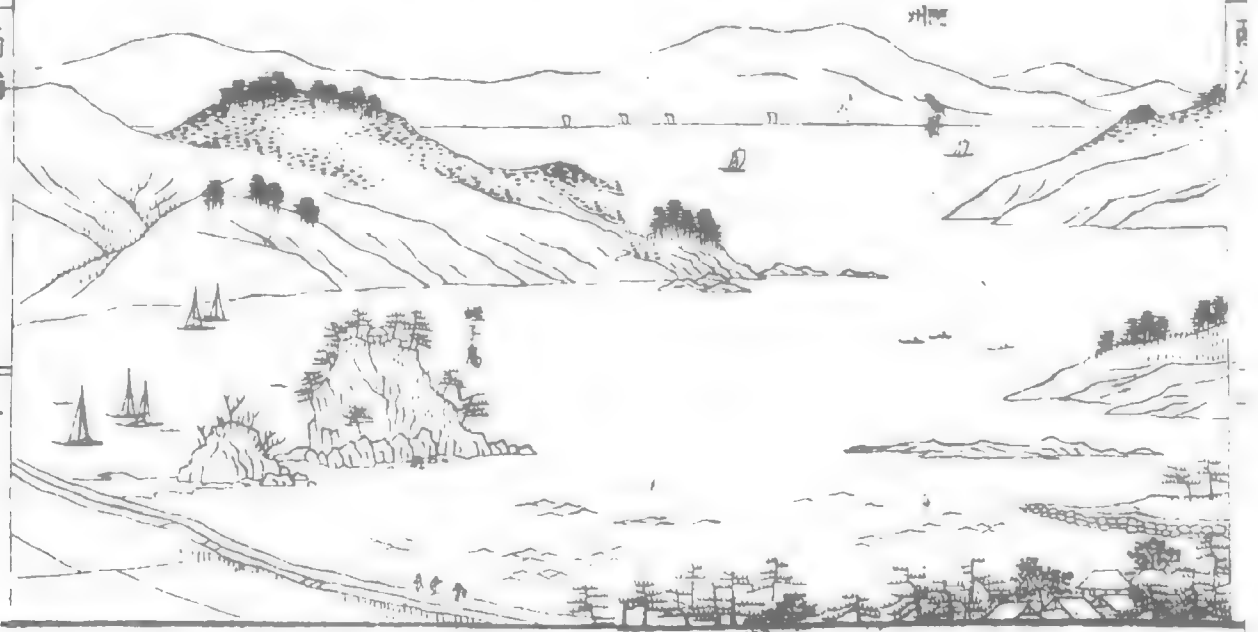
紀伊和歌浦

浦頭潮水
滿鶴去北亭
遠氣北景
鄉能道似
吟小杜詩



紀伊下津浦

殘照寒
鴉肉暮
帆盡不
真何看
運生伴
物色同
暮人



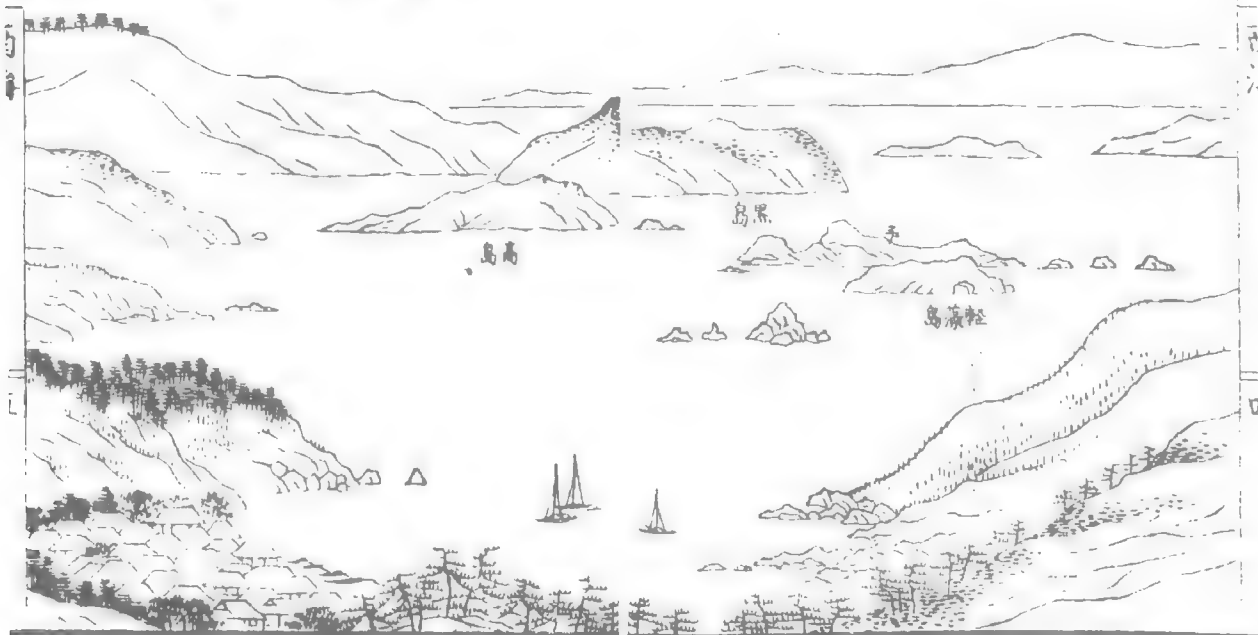
紀伊宮崎

城蹟臨
蒼海風
烟眼平
開晴平
波浪靜
閑靜
好



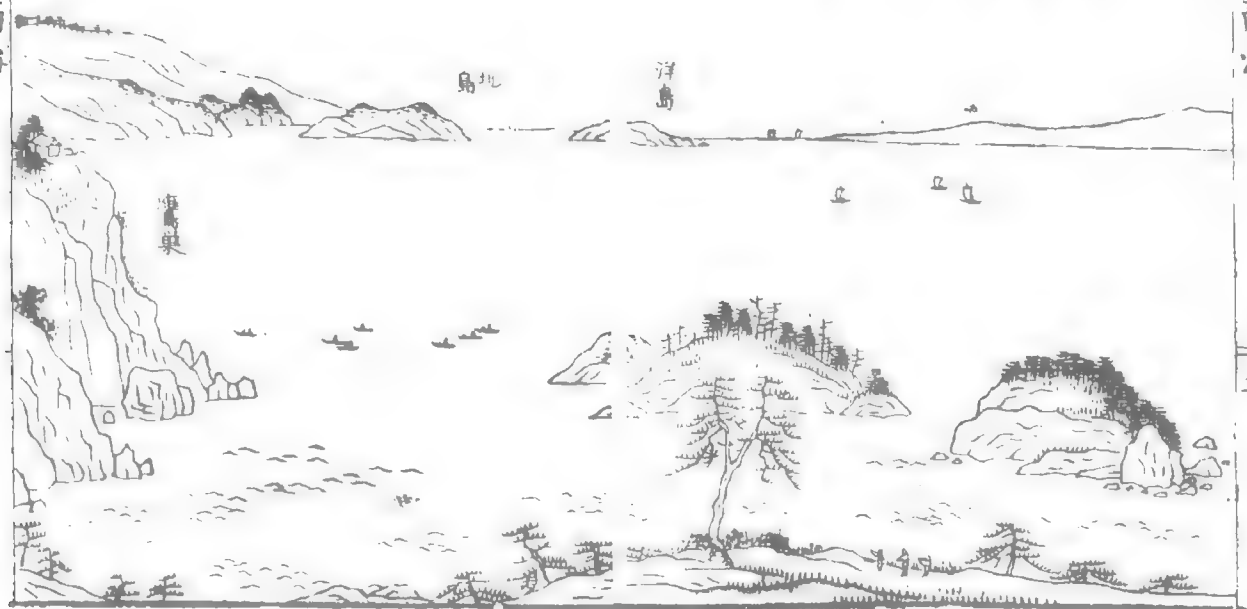
紀伊須原

春樹陰；
晴晚潮帶；
雨生居人；
仙主居難；
犬寂多寂。



紀伊雜賀

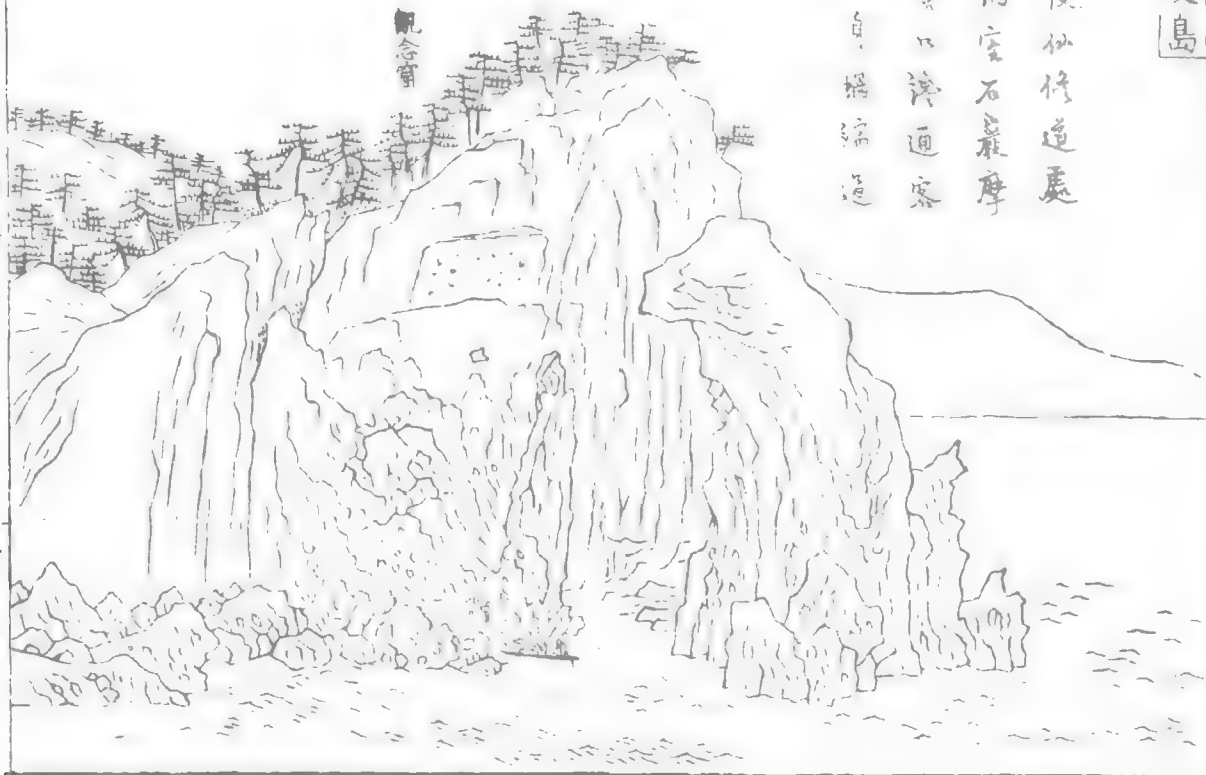
山水不知
名似追春
夢行村人
為念洗便
晴得圓經



紀伊友島

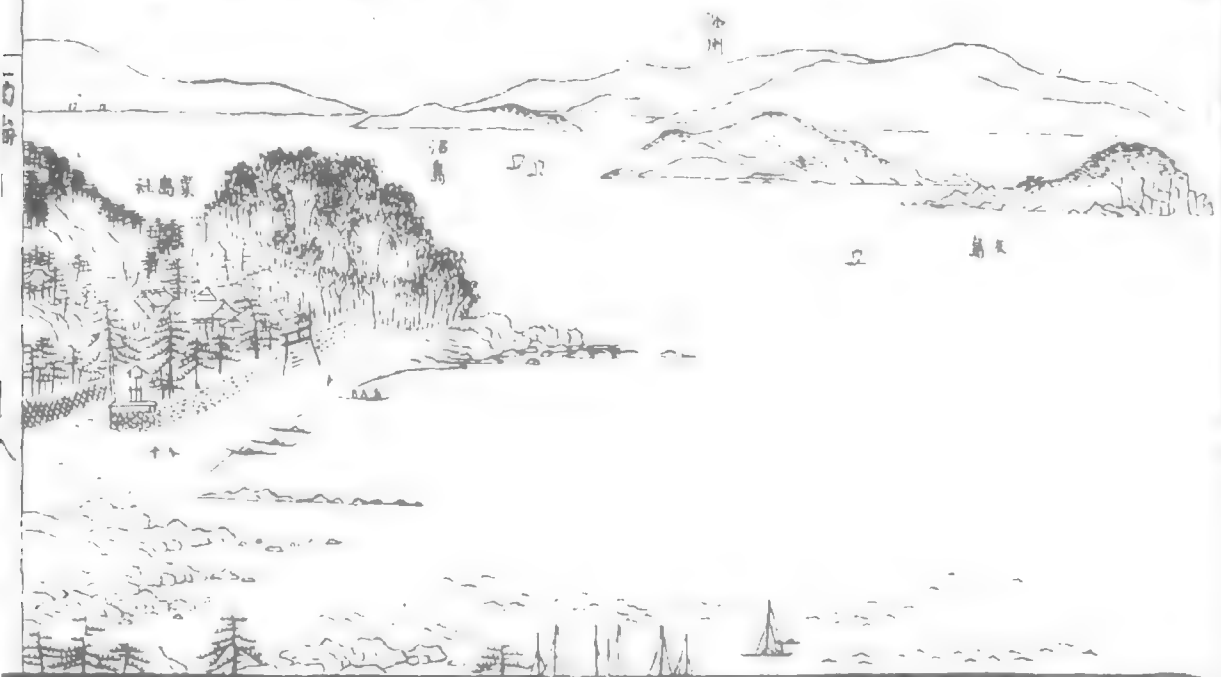
役似修造處
洞室石巖摩
雲以溪通客
一自橋編道

觀念窟



紀伊加太浦

女兒桐
結伴表
寒便還
視不鼓
分明語
鳳釵柳
得回



淡路五色濱

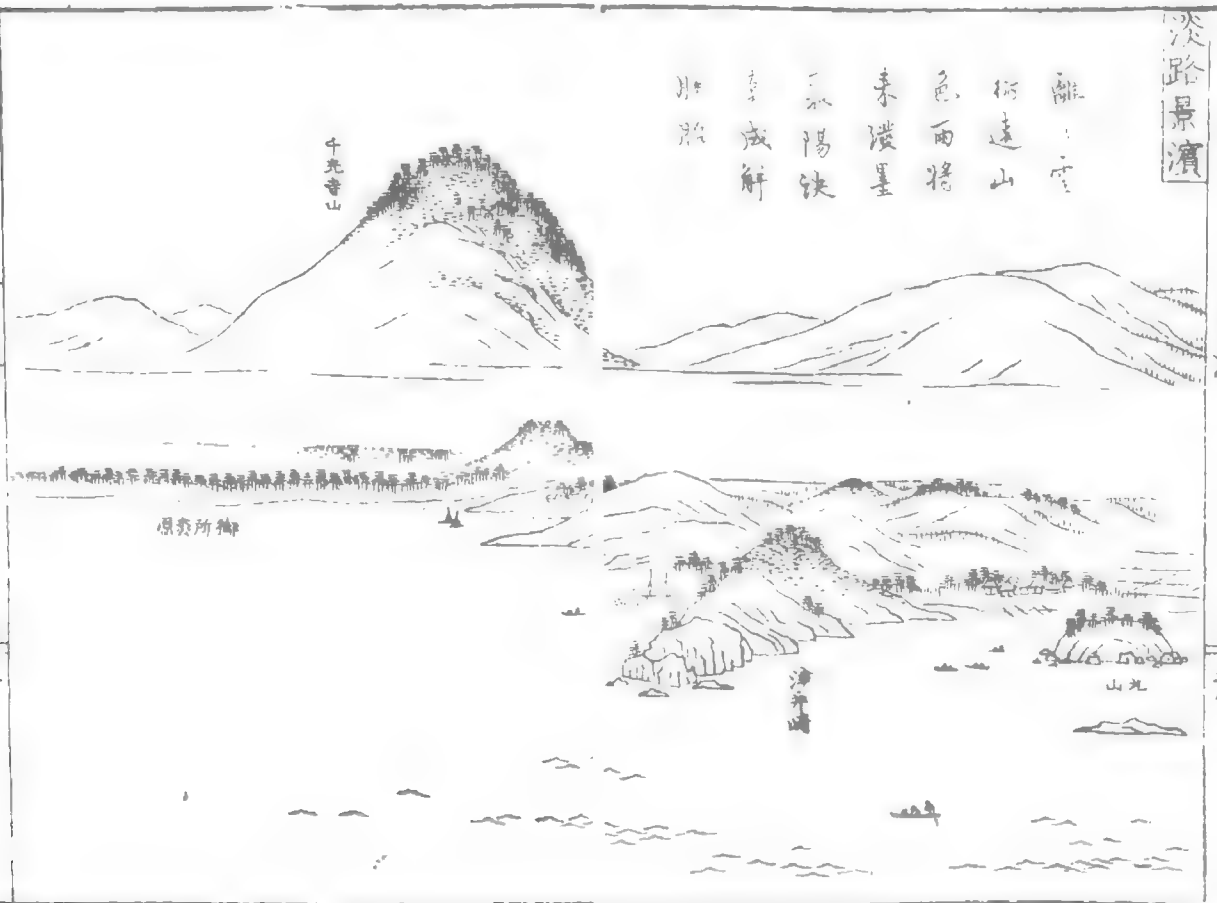
燦爛多燭石
五雲襯海涯
如何地名傳
蒼目大漁家



淡路景濱

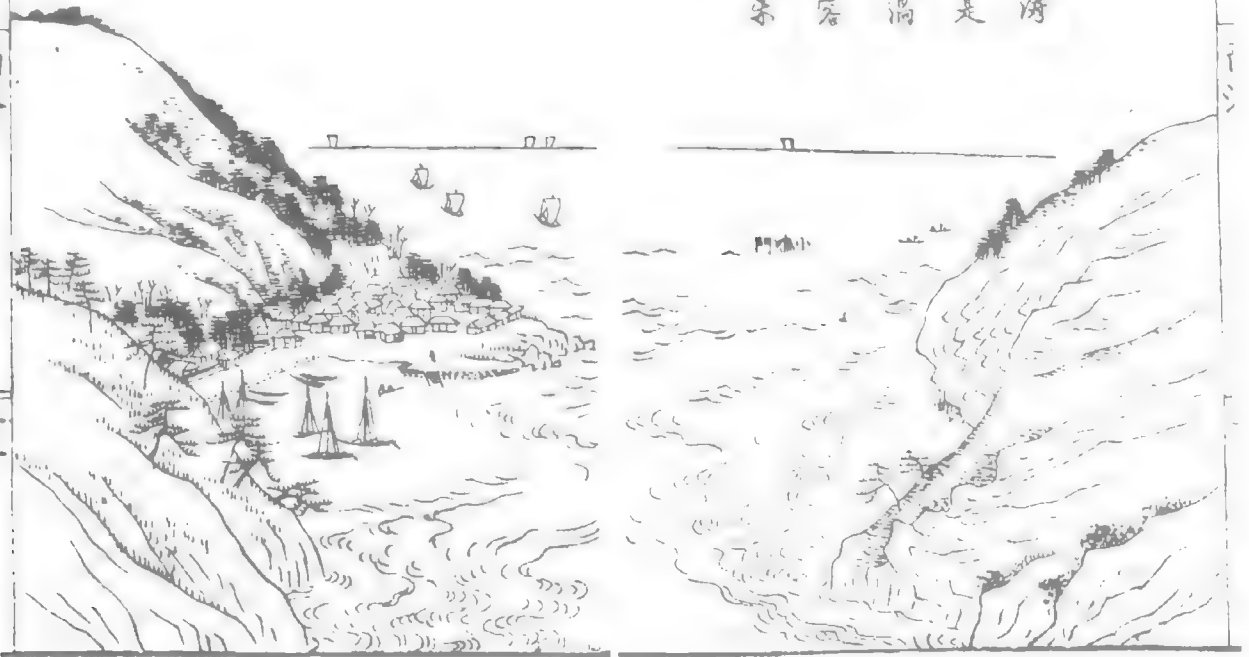
離雲
何遠山
色雨將
未濃墨
三陽缺
事成解
壯胎

千光寺山



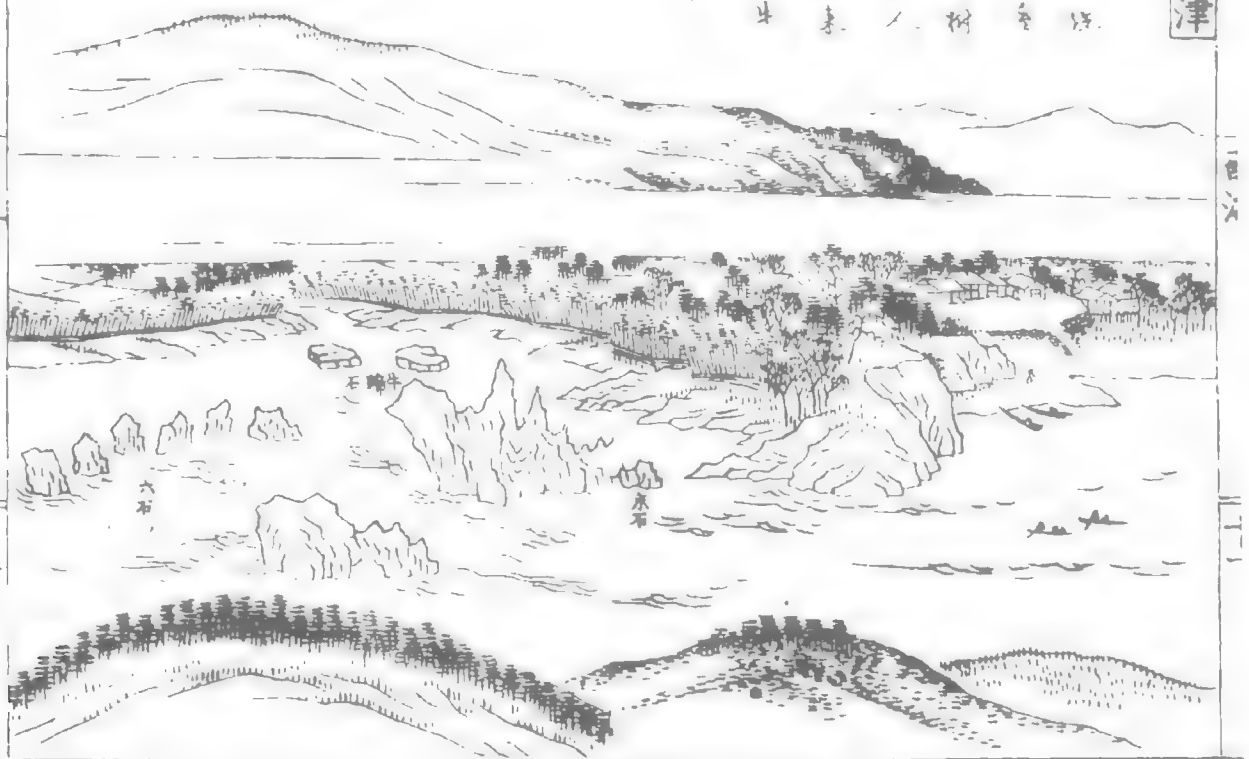
阿波北泊

峽東雲湧
 湧景奇是
 機師盤渦
 船欲沒容
 易聯然來



阿波岩津

沿西溪
 烟埃重
 頭竹村
 碧竹人
 撐艇來
 水漲生
 跡石



阿波鳴門

一、面沙
水、風、色、
懷、海、邊、
雲、山、馬、
多、數、夕、
陽、山、



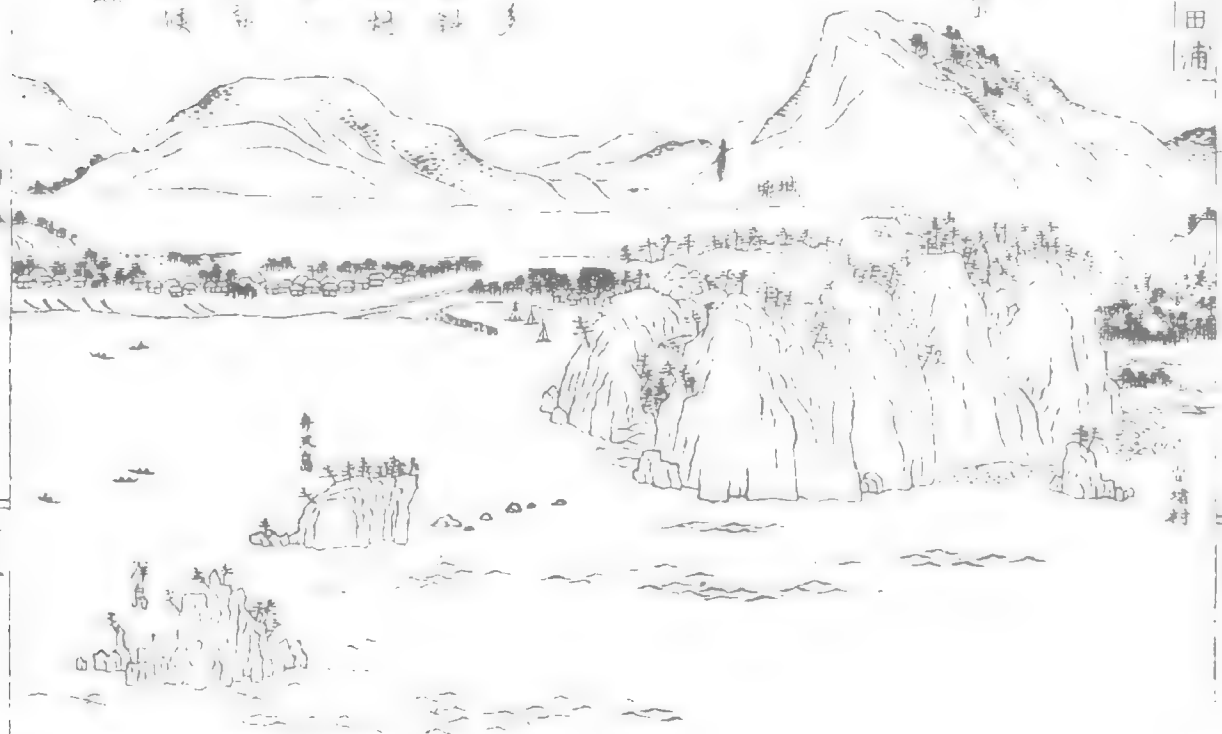
阿波鳴門二

冒、利、何、
為、官、歟、
有、不、自、
建、為、河、
依、東、隅、
能、有、折、
魚、船、



讀岐引田浦

此山多
源全社
日浦社
烟和
晚心
妻于候
海



山崎村

讀岐名古嶋

海畔寺巖秀望
未遠極多艱難
仍舊容故向側
邊道



鶴川南

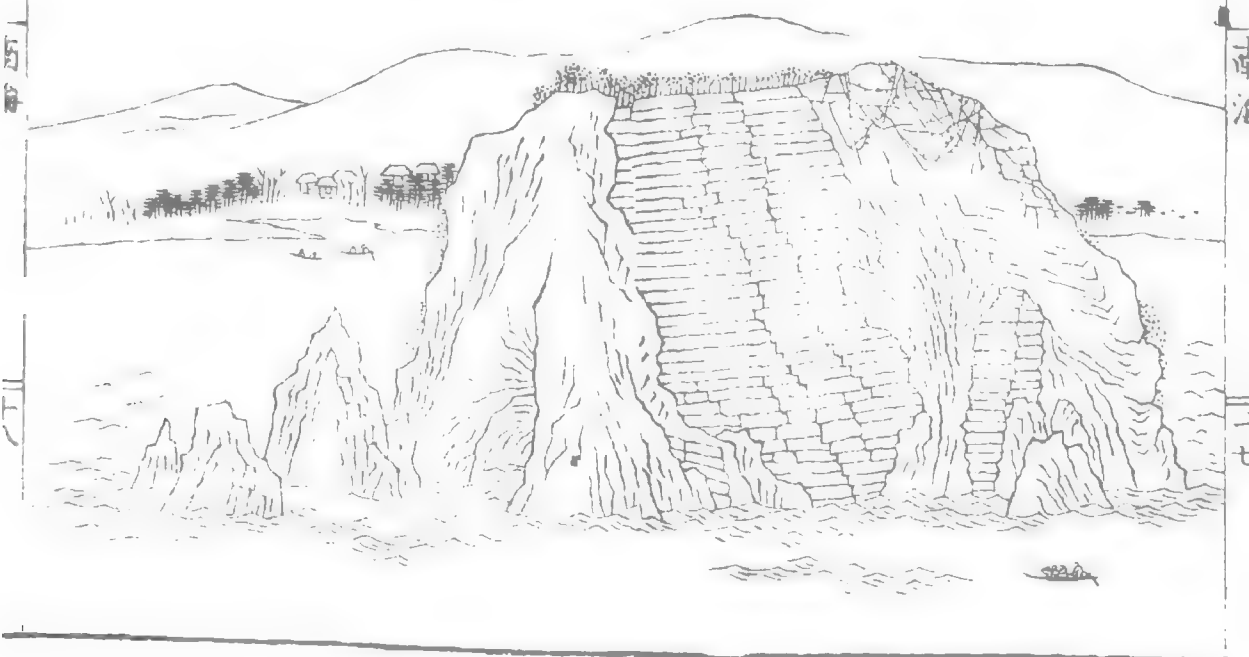
讚岐津田浦

浦遠紅
仙洗翠
除達帆
閑應有
暮晴裡
沙萬壑
一杯



讚岐綯嶋

佳景迎人
媚江山暮
色稠重
僧教卷何
若黃燐



讃岐姫濱

歌沙壇家
歩足石路
猫跡臥傳
新訴病先
提量鉾家

一南

二八

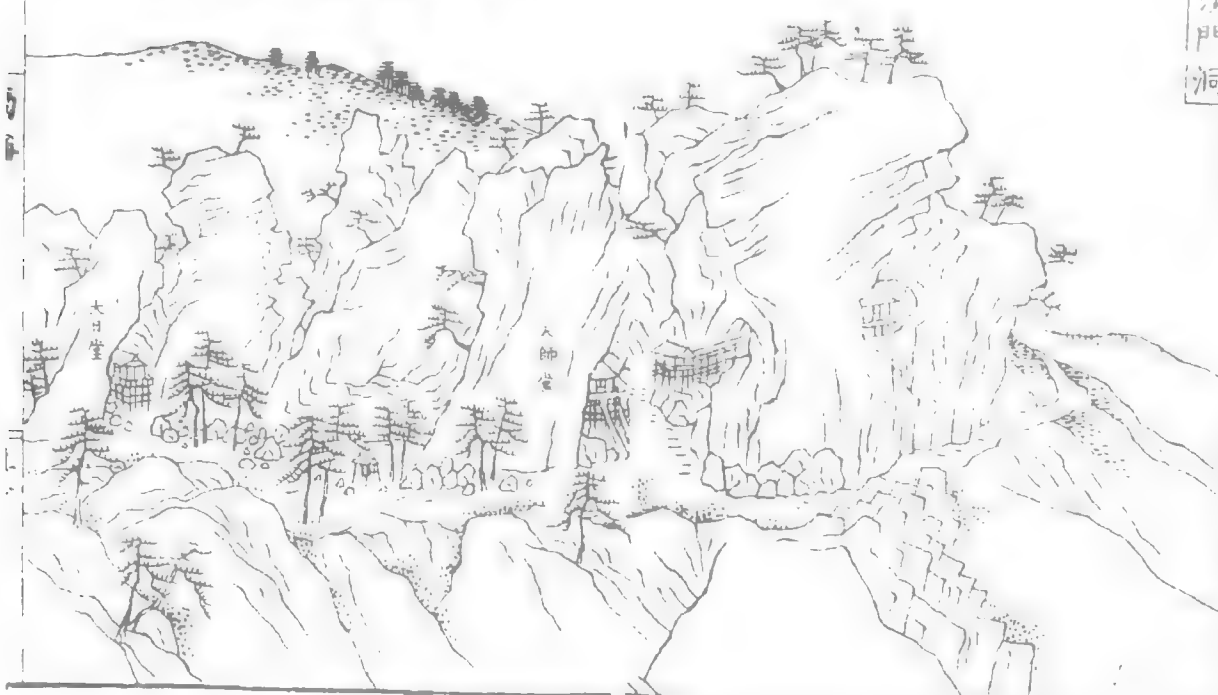


小豆島毘沙門洞

一南

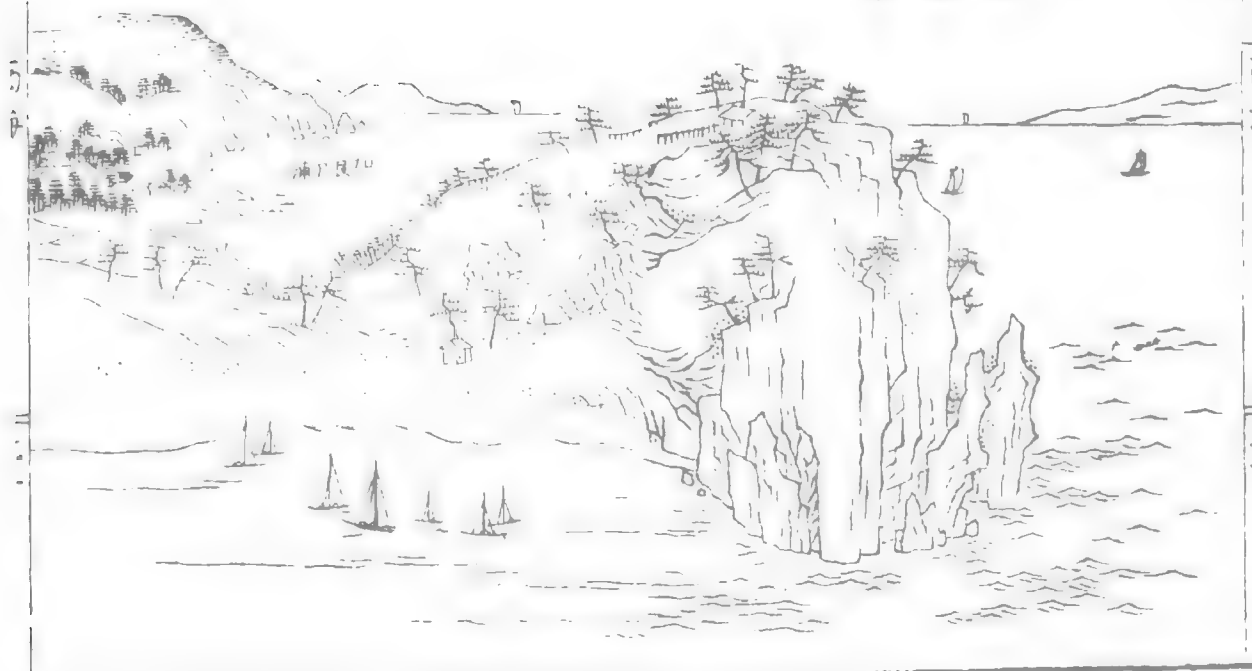
二十九

柱杭
成嶋岡
廣詩山
寺蓮石
折頭
故人
石乃



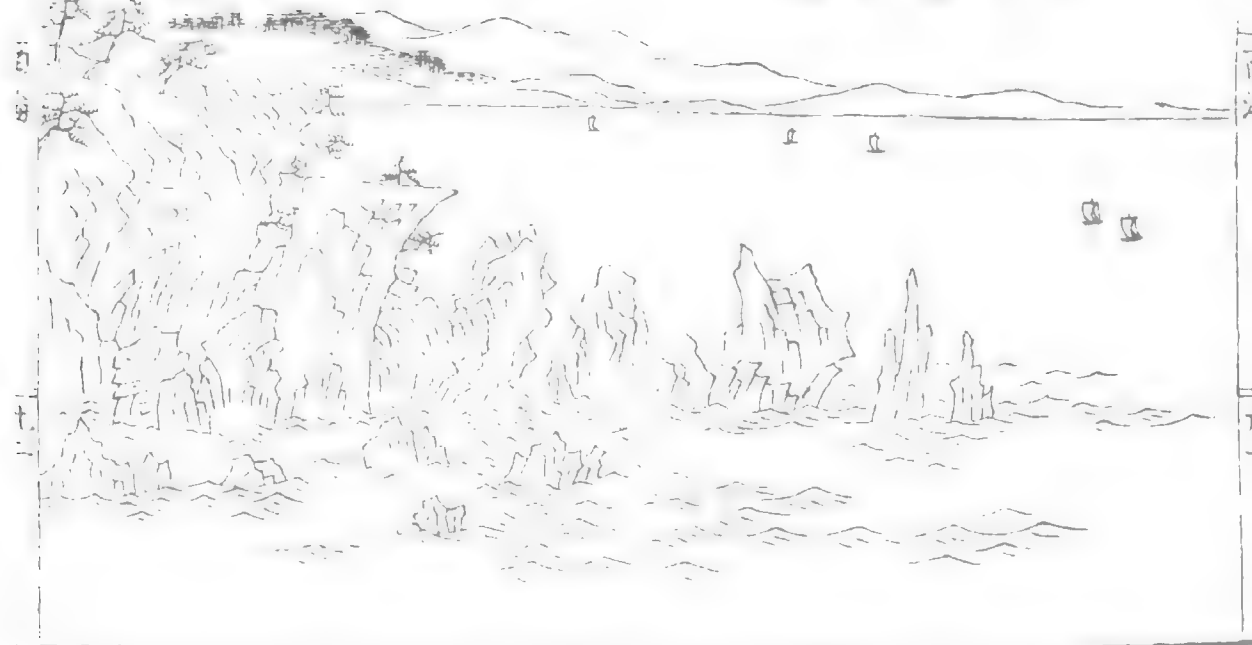
豐島宮狹門

風死帆在
力無以形
引尾俱舟
白鵝外寫
待春朝風



伊豫御所

只說鳴門
險誰知此
處新築宮
富少好味
石到多搜



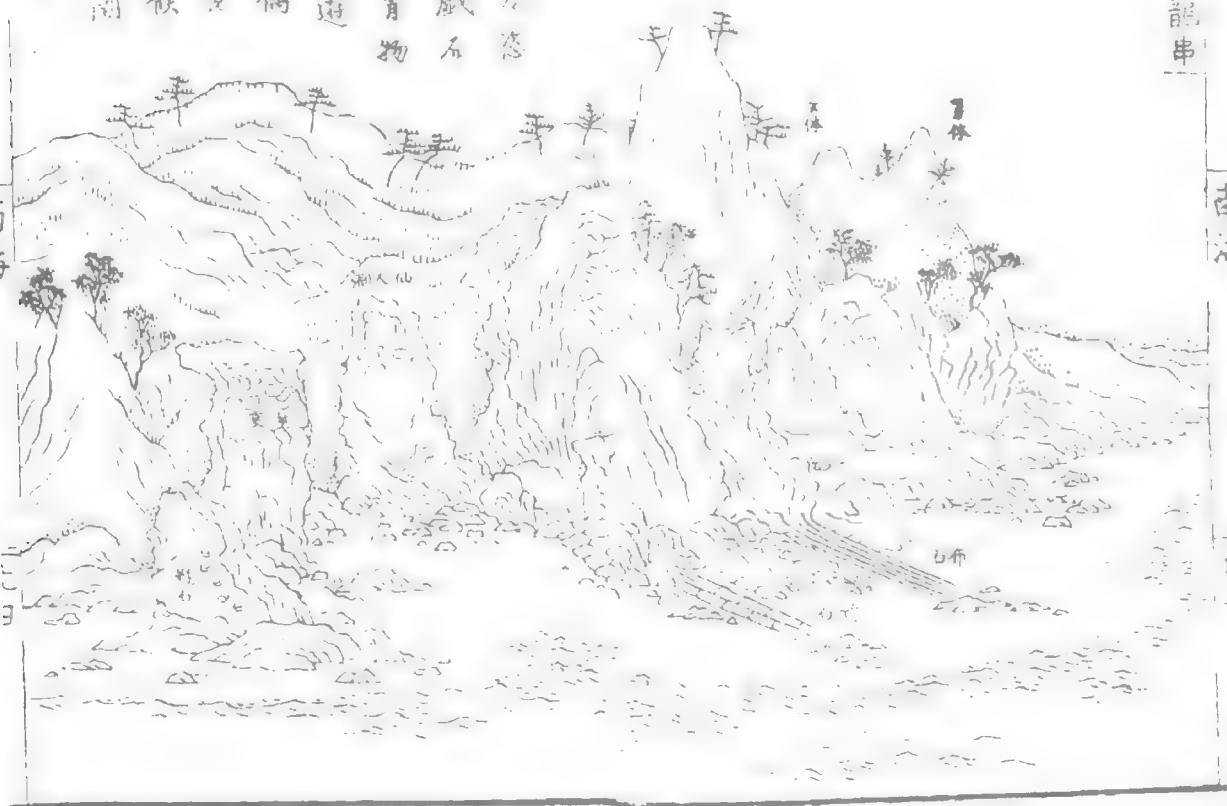
伊 隆 西 條

人 歸 燈
下 託 昨
上 石 旋
山 正 是
武 編 節
市 縣 猶
覺 怪



上 佐 龍 串

化 家 恣
遊 戲 石
形 肖 物
奇 遊
人 偶
未 見
多 候
見 湖
時



西海奇蹟

旭江先生景繪圖

日本勝地 山水奇觀 全部十二冊

前編 山陰山陽 南海西海 四冊 出来

續編 五畿東海 東山北陸 四冊 嗣出

拾遺 五畿七道 合輯 四冊 近刻

筑前生松原

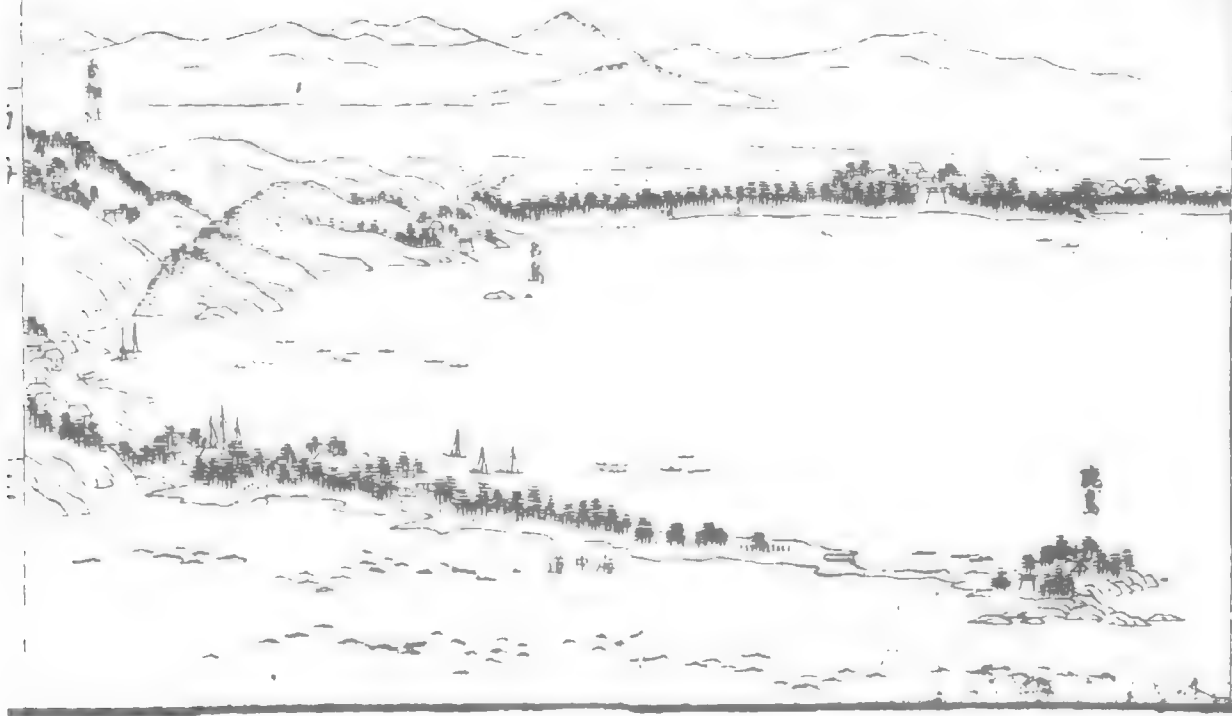
蒼然松嶺
蒼然松嶺
蒼然松嶺
蒼然松嶺
蒼然松嶺



筑前宮崎

幾少
松好
橋足
保高
呂崎
又被
國松

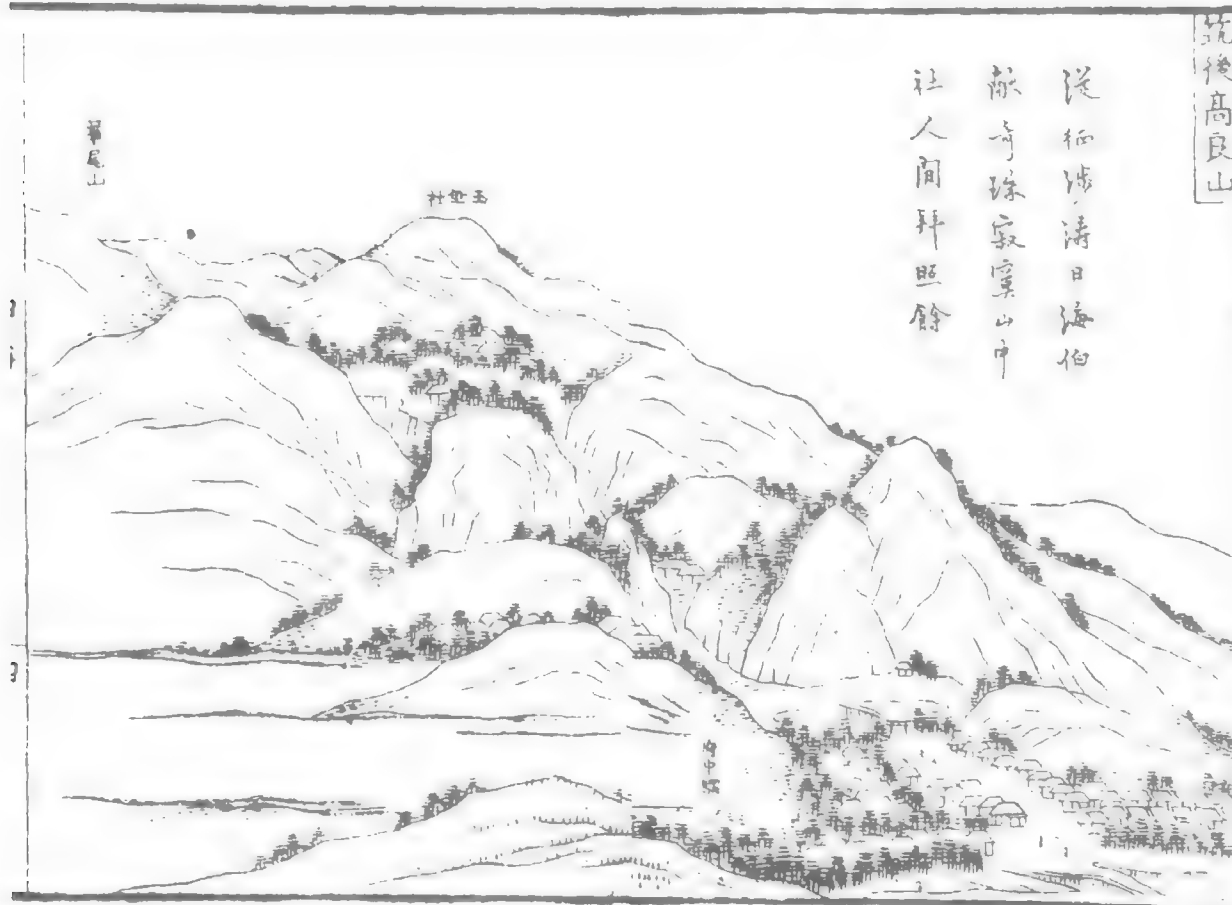
西



筑後高良山

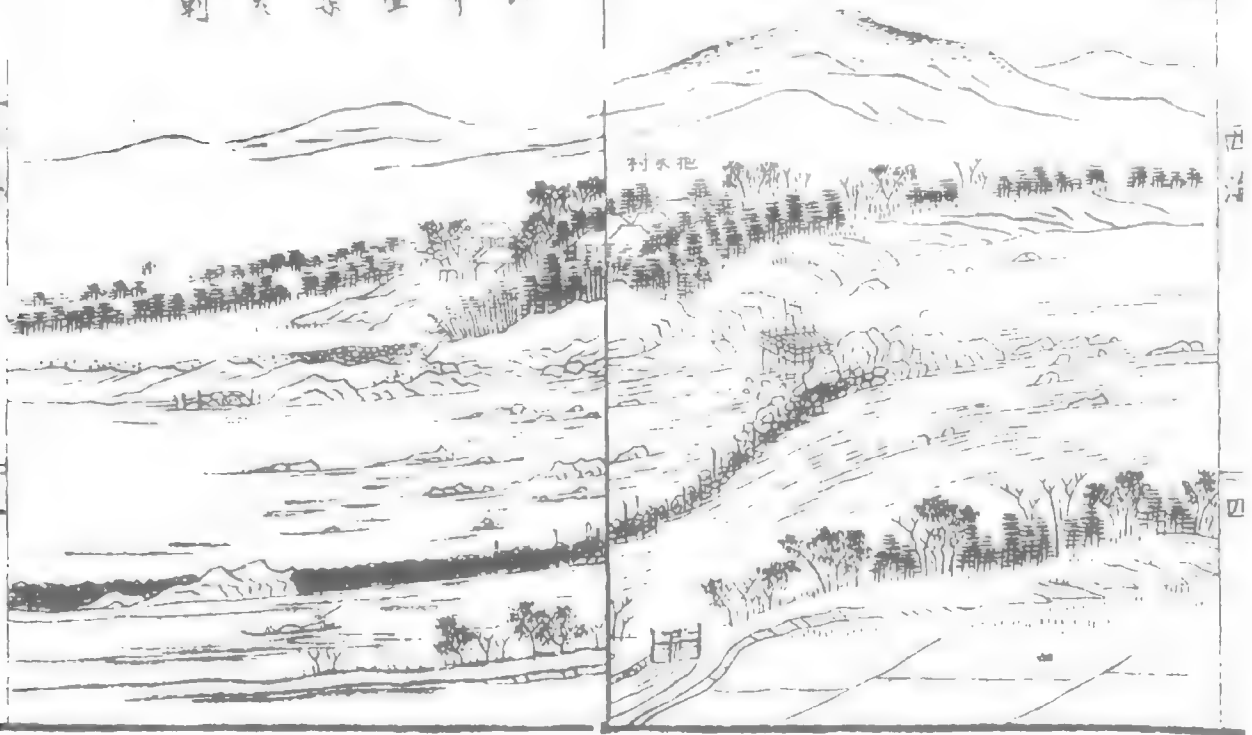
從征涉清日海伯
獻奇跡寂冥山中
社人間拜昭餘

西



杭州後集賴

一勝長
流碧翠
分不盡
新漁梁
六不夫
半讓刺
舟人



豐前羅漢寺

洞二如太
大如一
橋橫水白
石羅漢
人皆送迎



豐前羅漢寺二基

田

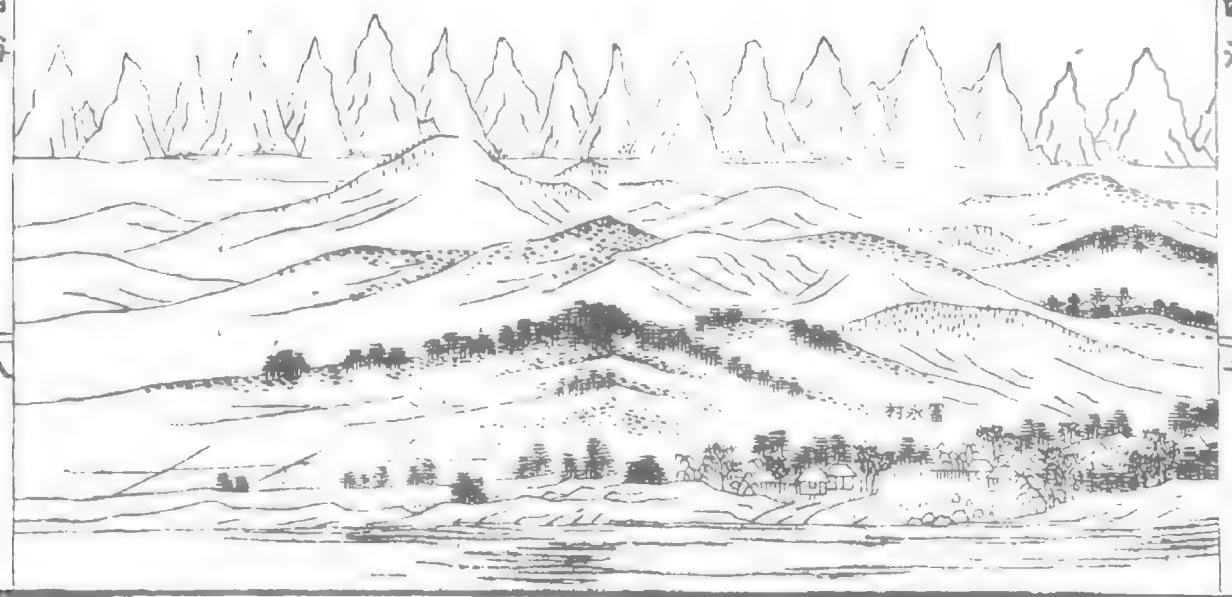
江川中通
路跡輪不
礎未何人
景主事
豐前羅漢寺
昭田



豐前田原鋸山

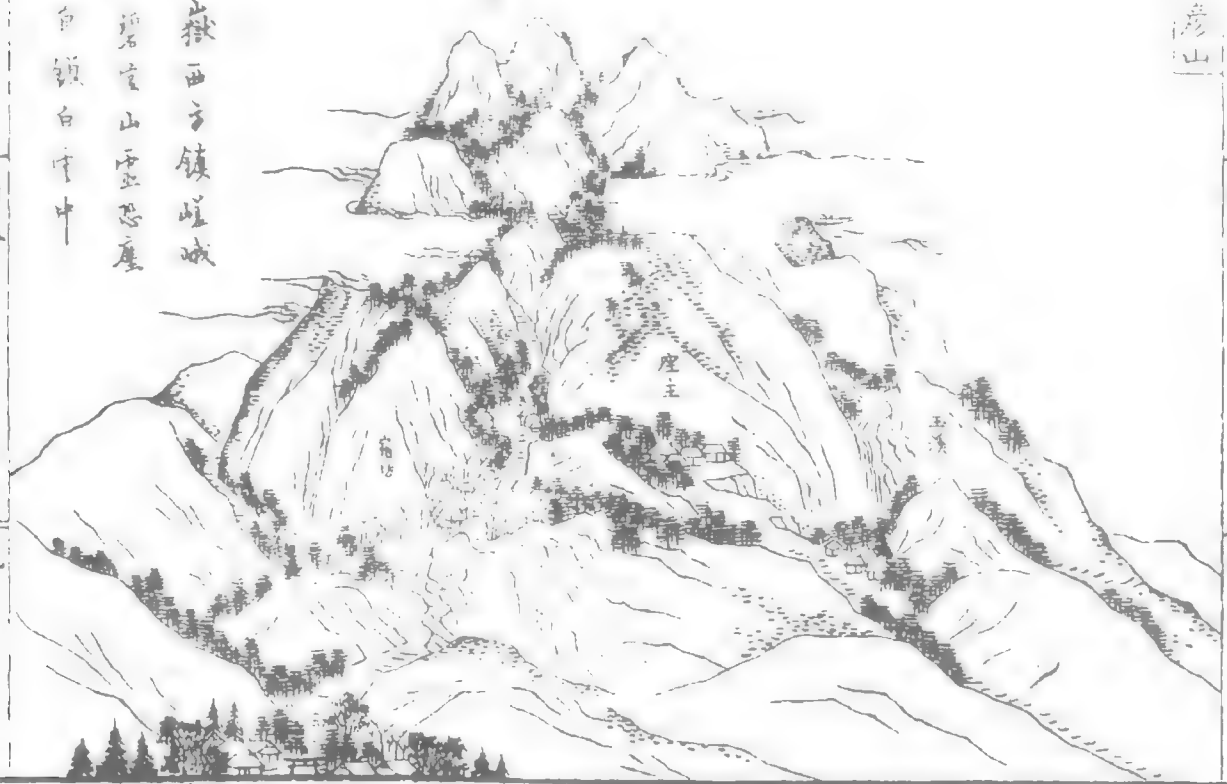
田

不遠山
如銀
未幾斤
雪如疑
飛馬
村落雪
紙



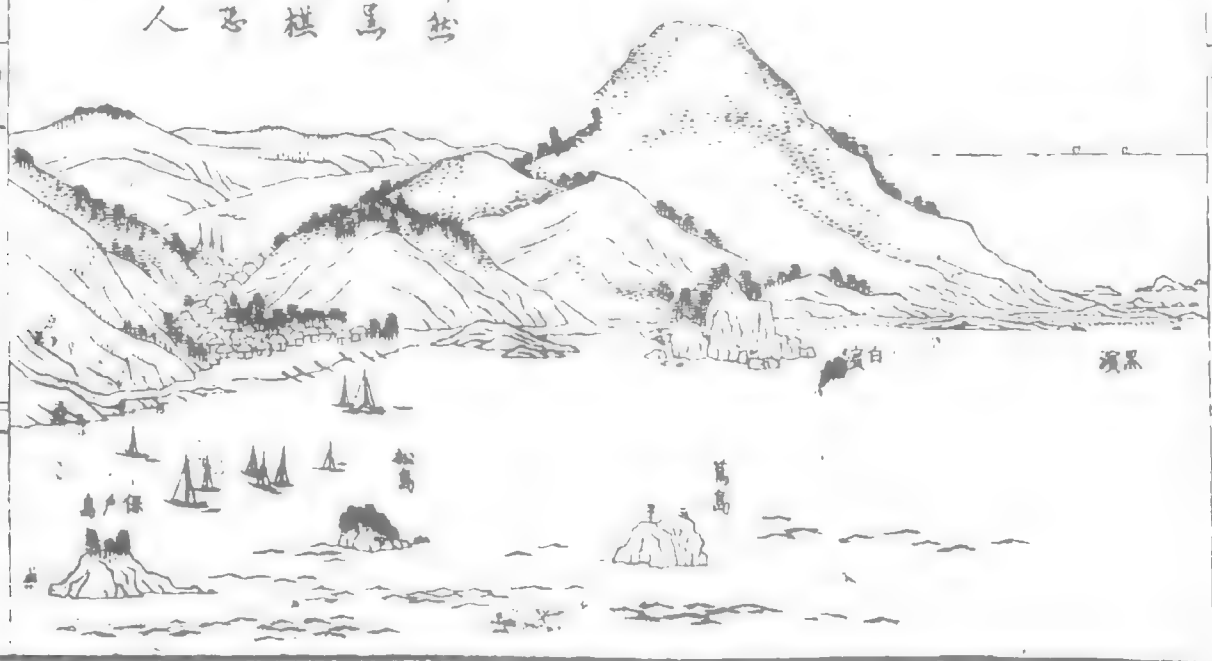
豐前英彦山

誰識西方鎮岷峨
 精頂宜山雨正
 流白領白雲中



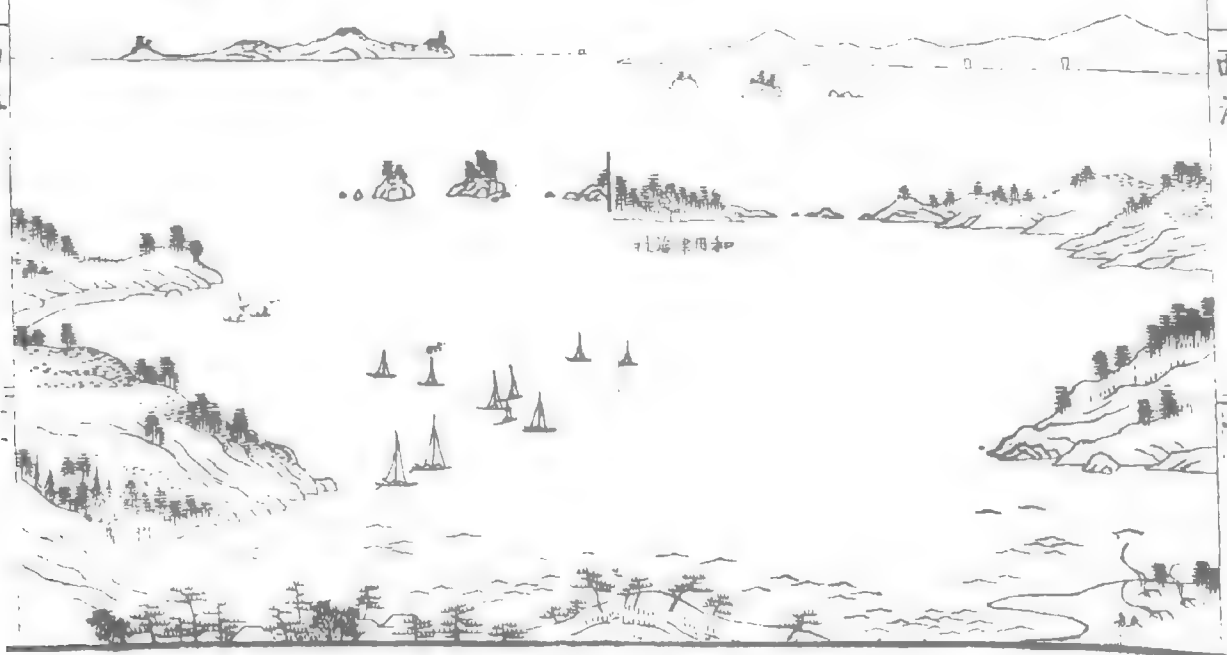
曹仙姑賀關

妙造渾然
 石梁分馬
 白濱圍棋
 大解否否
 助未擬人



豐後臼杵下江

遠烟薄
龍浦南
搖集晚
置小舟
忽挑去
乞水向
人家



豐後築崎

夜泊那
郭口潮
聲落月
遲如何
家幾處
不直半
炊時



巖階泉
通雲霄
頭山、渴
飲流、不
得幾度
轉回過



夜醉故人
酒、寒晨
上船春風
四十里河
處不堪談

心根神苗

建天萬

玉屑

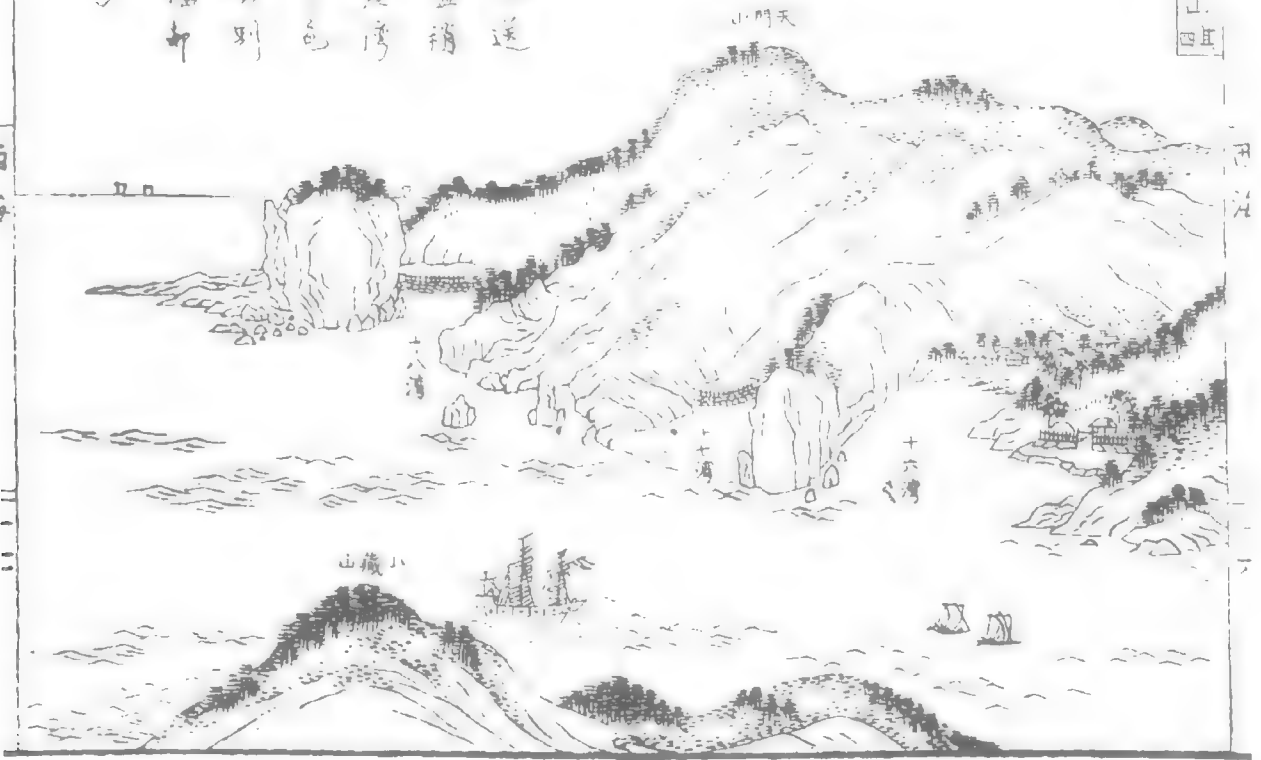


上浦



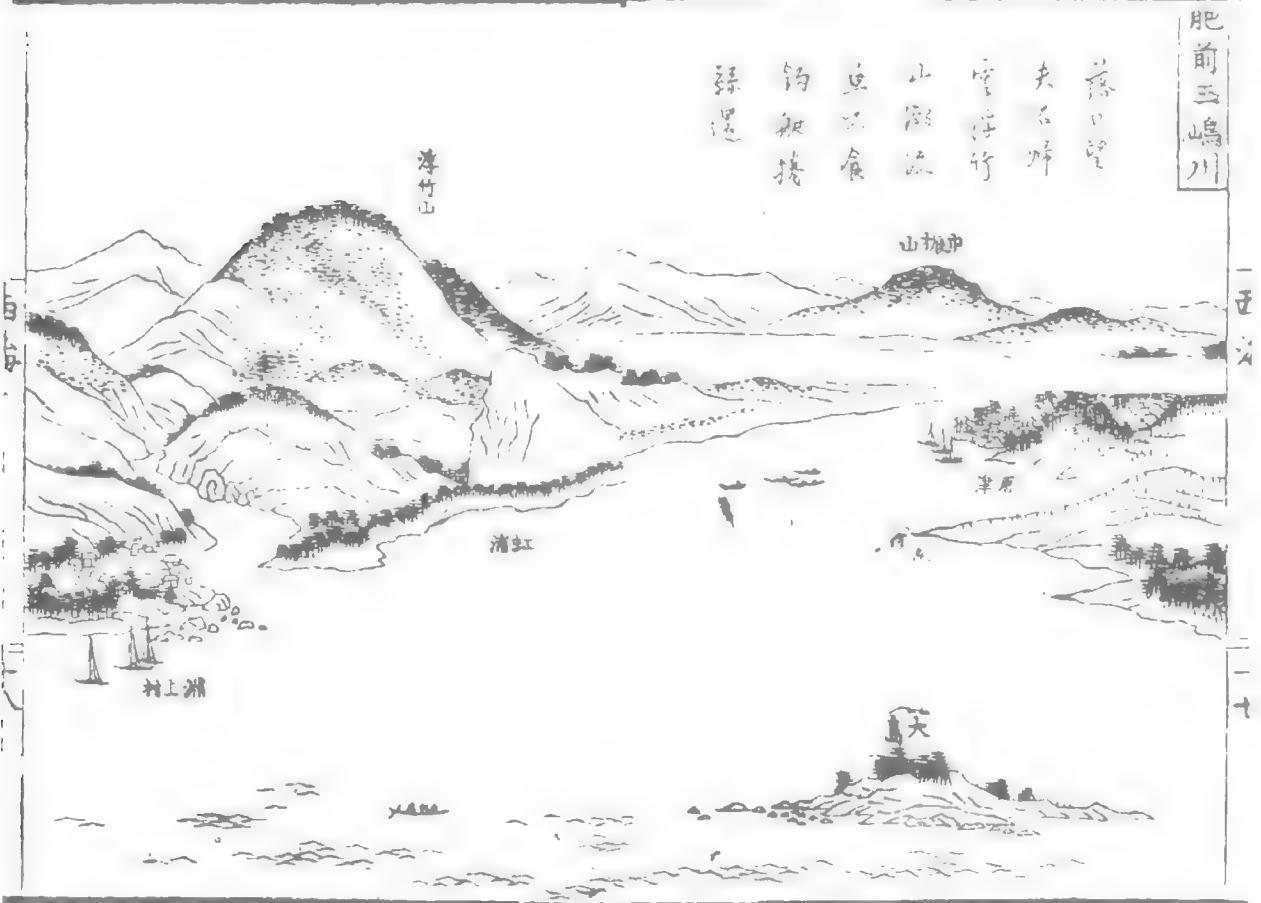
肥前佐山
四里

望多
不揚
溪別
道山
到屋
像直
清送

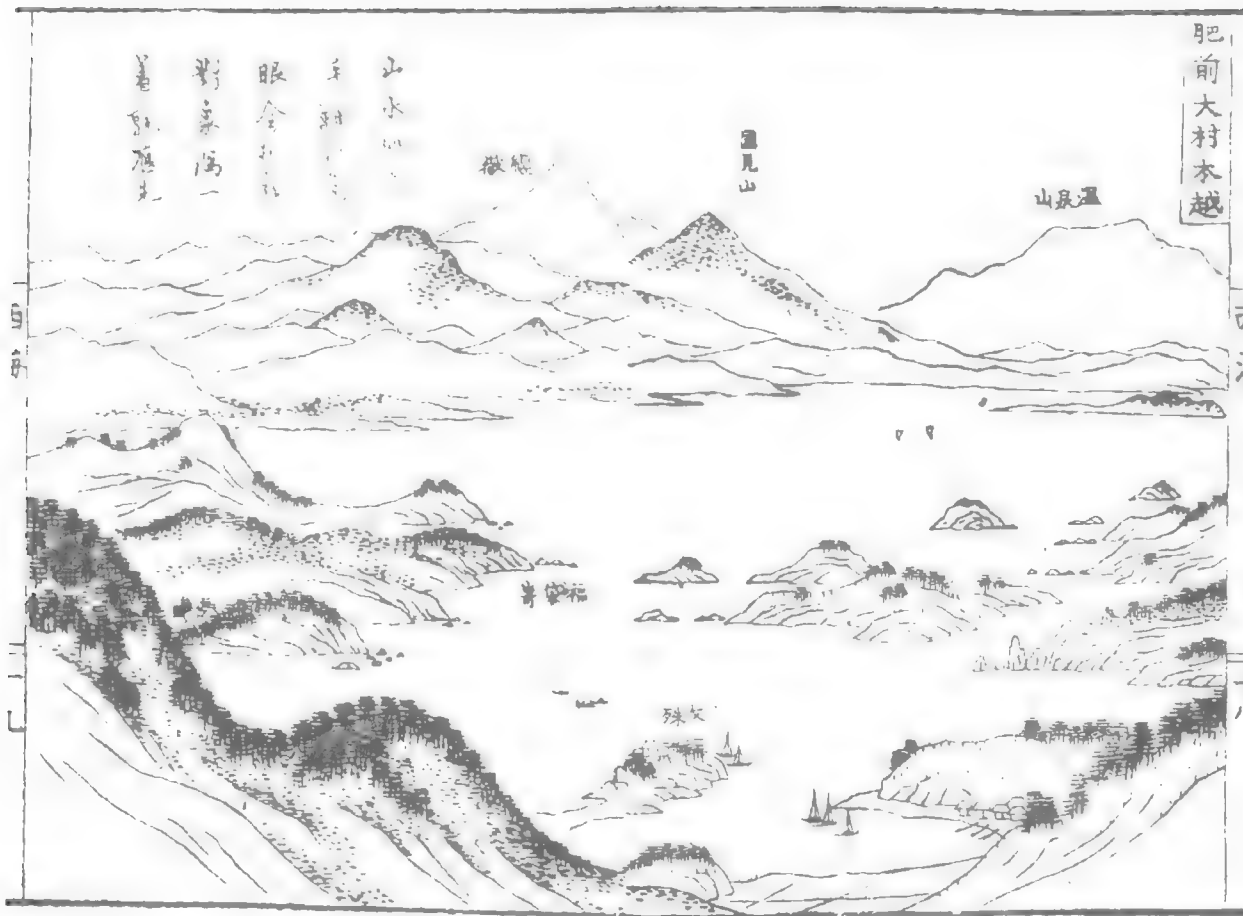


肥前五嶋川

藤口望
夫名峰
望浮竹
山瀨流
魚不食
釣被提
緑還

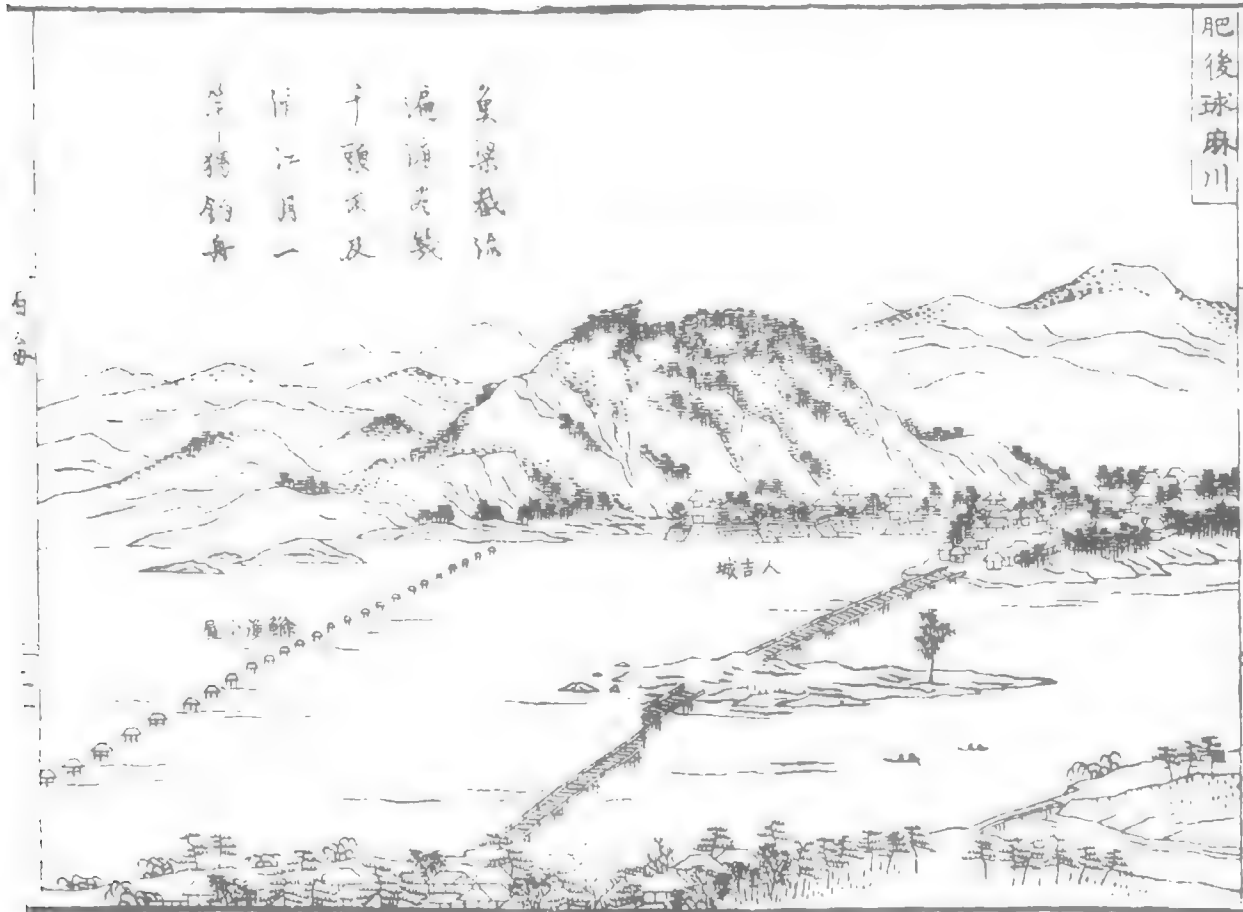


肥前大村本越



山水
年
眼
影
善

肥後球麻川



魚梁截流
漏洩其數
千頭不及
江月一
竿獨釣舟

肥後阿蘇山

一者應無錯好
峰字得山何人
神舌見烟篆不
曾聞

正

二

三

四

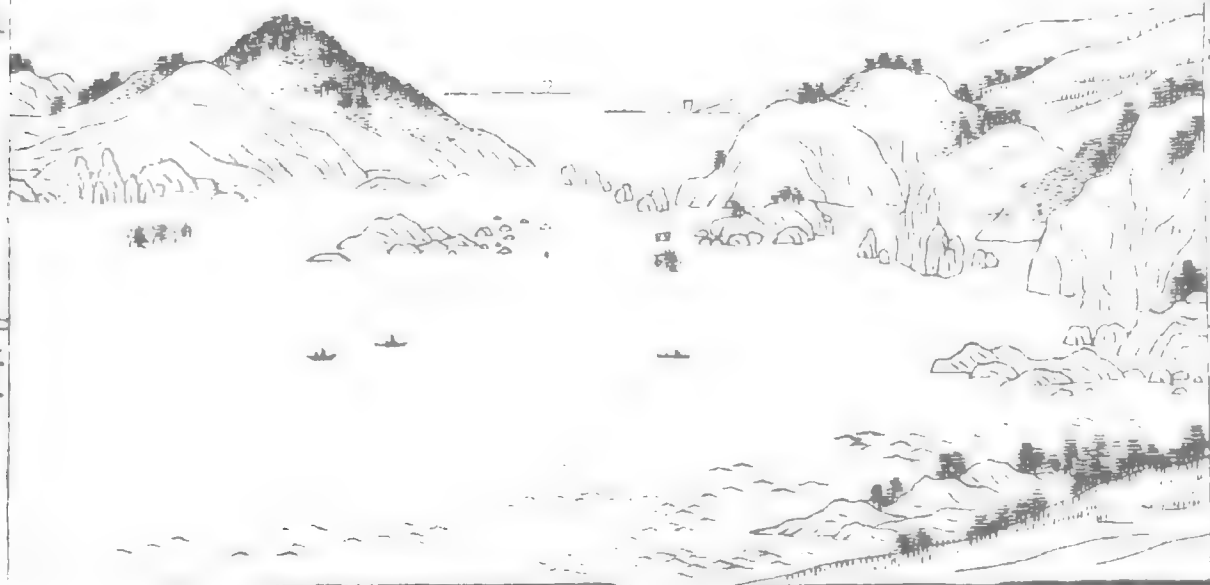


日向能肥大島

傾山雪浪
白風峭嶺
帆難好浦
如急母入
憶分外安

五

六



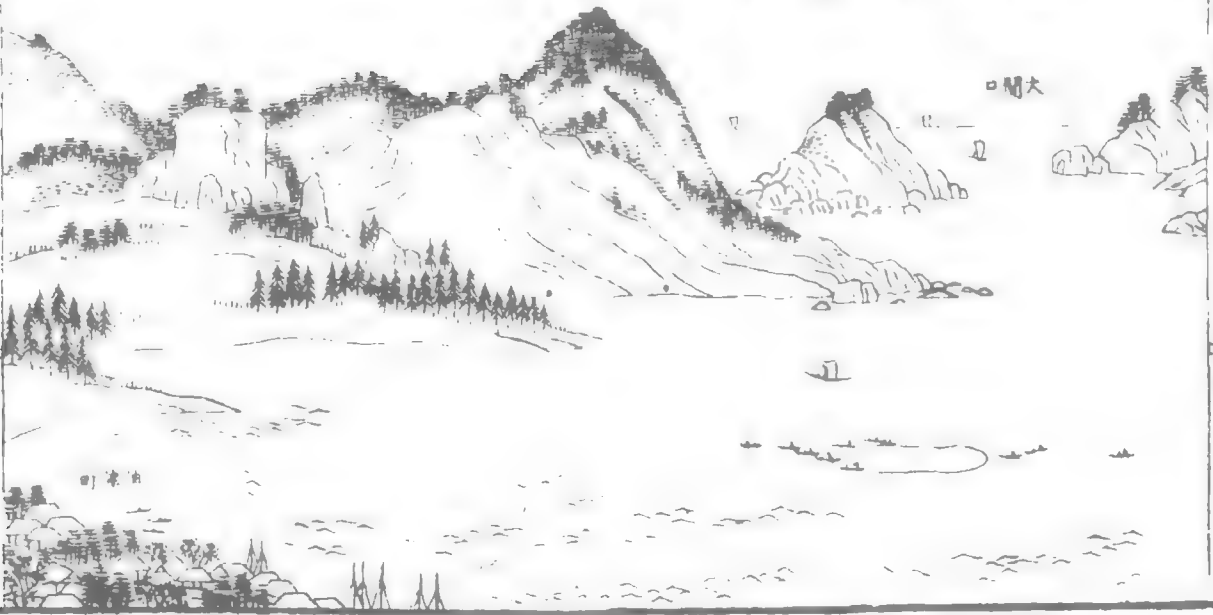
日向飲肥大島其

二四六

正是晚炊
點推蓬喚
釣船罾新
魚尚活得
長不論錢

大伏山

大間



大隅櫻島

二四六

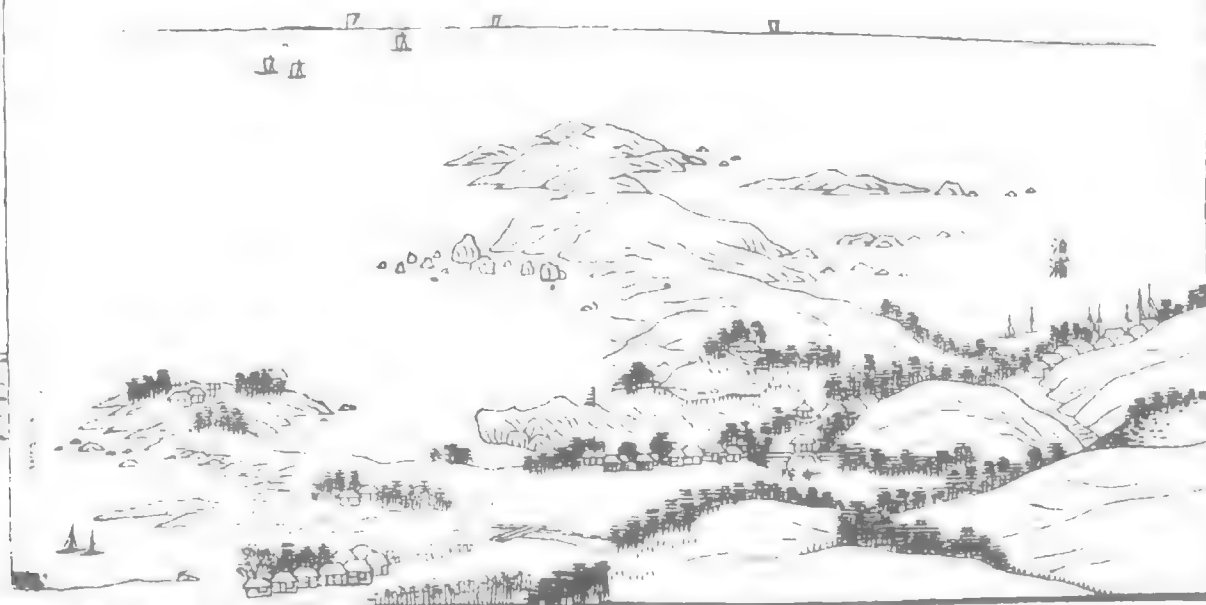
池隈中山近
人乘島遊來
落帆傳浦口
看去鷗如夢

吉澤山

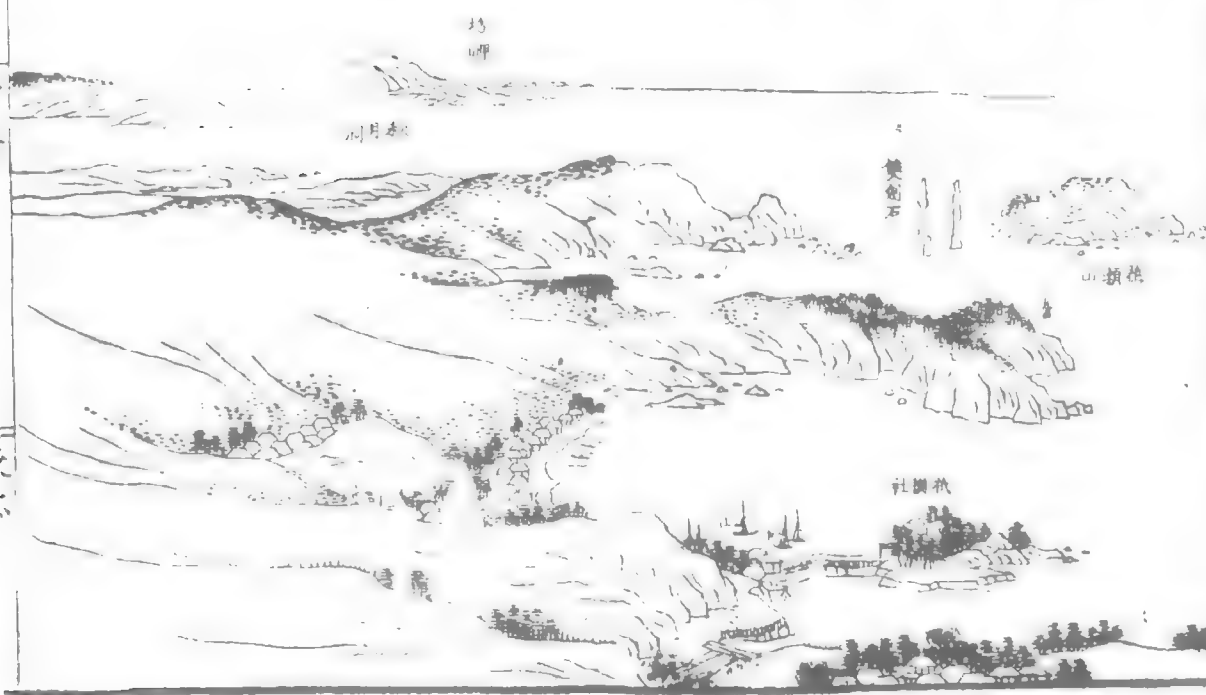
松光洲



龍頭之殿
 石象等
 畔望來
 寺畫袖
 多世星
 為臨此
 山王



子如
 秋月海
 又為始
 宜為和
 直身通
 以形向
 蟻

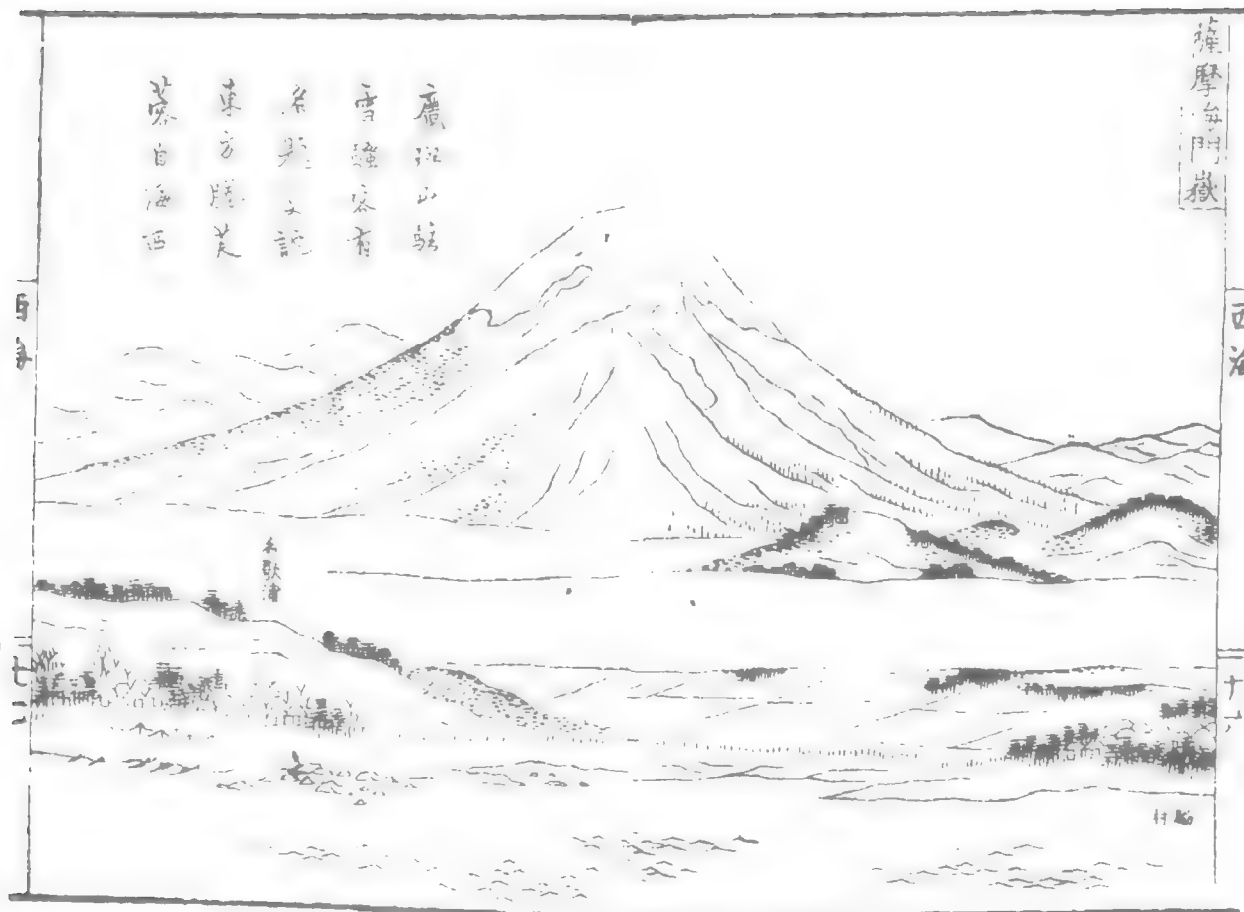


權摩海門嶽

西

十一

廣山嶽
雪嶽
名義文記
東方勝美
北原自海西



關口隆正 著

日本形勝叢談

明治三十六年（一九〇三）京都鉛排本

據明治三十六年（一九〇三）

京都鉛排本影印

明治天皇御覽

霞山近衛篤磨

張

古

日本形勝叢談序

國之有體猶家有其風歟蓋士家有士之風農家自有農之風商家
自有商之風巫祝道僧自有巫祝道僧之風故巫祝道僧之風不可以
施於工商之家工商之風不可以行於士農之家士農之風不可以移
於工商巫祝道僧萬國皆有所建之體所習之俗以成一大聚域故其
言語不同好惡自異猶農商百家各殊其風是皆自然之勢而不可疆
焉耳我皇國獨立東海之表建國之體優絕萬國風俗之美夙稱海外
古先王猶不自足也嘗取諸韓取諸隋唐以潤飾文物典章而建國之
體愈登風俗之美益著明治中興百度維新更取法於泰西以資昭明
之治於是乎唱漢學者喜西籍者各從其所好浮慕冥信至於欲舉國
體風俗而摹倣彼是徒見人之財而欲用之見人之田而欲耕之而不

而還之

知我之田之財更有愈於彼者也是關口士瑤之所以有此著乎今讀
其書先述國體國號國疆等事以至各地名勝且徵諸和漢典籍照諸
士僧遺蹟以擴充其義國體之所開風俗之所存悉發揮而闡開之反
覆丁寧如手提之而口授之其嘉惠後進裨益東亞者可知矣頃者介
吾友八田君允卿請序余嘗一與士瑤相見于鴨川之上乃嘉其志叙
明治卅五年十一月

正三位勳貳等子爵長岡護美撰

叙

頃者無改子來示其著日本形勝叢談請予題言以不文辭弗聽曰不肖嚮獻山田長政傳誤蒙稱贊乃今不能然乎因語之曰予家世居駿府長政嘗贈暹羅盆於我高祖以傳子孫予幼時父老每指之云我邦民臣而爲海外國王者獨有斯人耳汝能記之旣長涉獵內外書史頗識偉績奇功然或以爲伊勢人或尾張人予未之能信矣及讀吾子之傳詳敘其產于駿河之事迹且聞當時文部省以及脩吏局並稱其博引傍搜精確可證自時厥後凡傳長政者大抵皆無不據于此予也以同其鄉心竊喜之故稱贊焉耳抑予蒞任斯都已閱一年山川風物盡收在於吾心目間矣是此叢談亦使予得喜且贊焉夫猶長政傳之取

信於天下乎奈何無改子翌然而起曰吁是一語而可願錄以弁卷首乃書與之無改子名隆正字士璠關口氏以友默齋君義子京都府知事從三位勳二等大森鍾一識

序

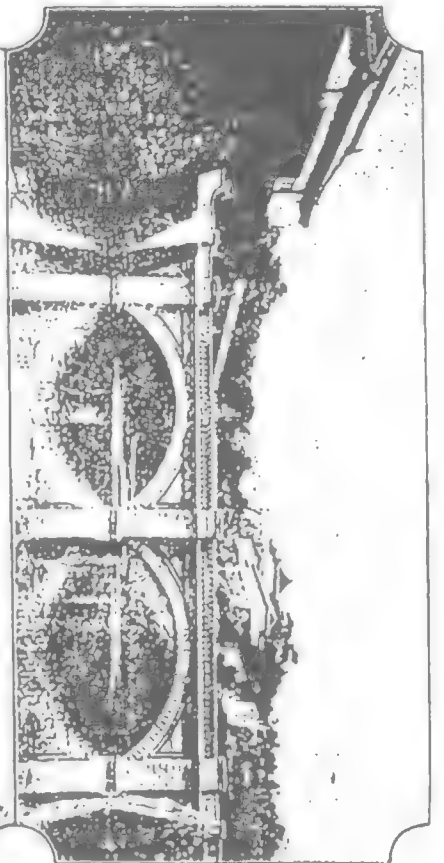
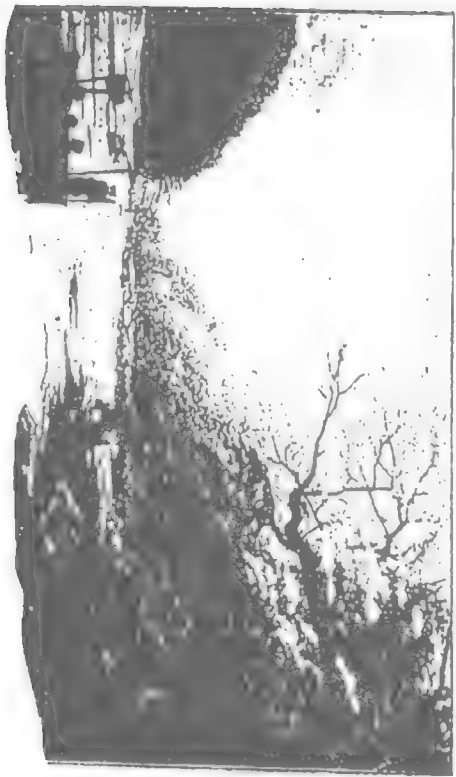
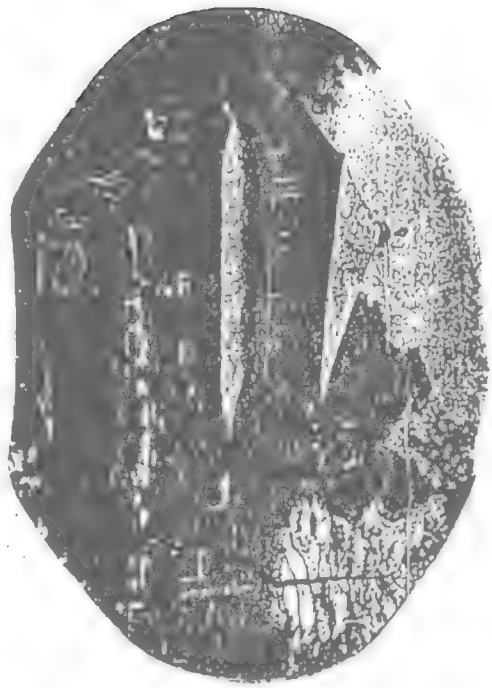
泰西諸國形勝之地必有風土記類具載其地方沿革人口多寡疆土肥瘠物產優劣工藝精粗等項以供四方遊客之便故未入其境也先通險夷梗概而後親過山川耳目所觸心會意得感慨於是乎益起矣幽興於是乎益深矣我京都府自有史乘而還山河之形冠於全國矣名區遺蹟無不存焉況於工業之精技藝之美亦莫盛于今日耶近取譬之秦省乎遠望岐山又渡渭水而不知殷周之所以廢興與秦漢之所以存亡則阿房未央之跡於我何感之有甯橋褒城之趾於我何慨之有若夫延安之火油興安之銅擴張中之密蠟鹿茸乳香等物產拾而不問瞻焉無知輒曰我遊觀秦漢古都矣人孰信其言哉蓋泰西人來游京都歲不下數千人通歐語者能爲東道又著指南之書以計其

便宜然余未聞漢譯以頒於同文同種之人常以爲憾矣關口士璠頃著日本形勝叢談來請余序余雖未通讀之然信其非尋常地誌之比必爲彼風土記類也乃爲之序時

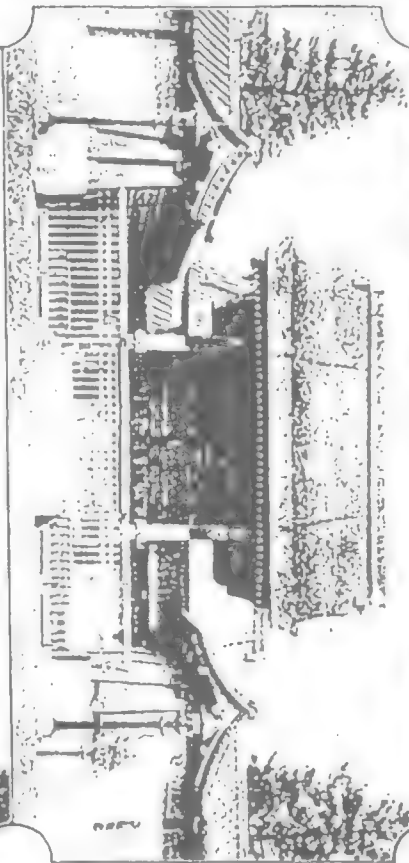
明治三十五年

天長節前一日

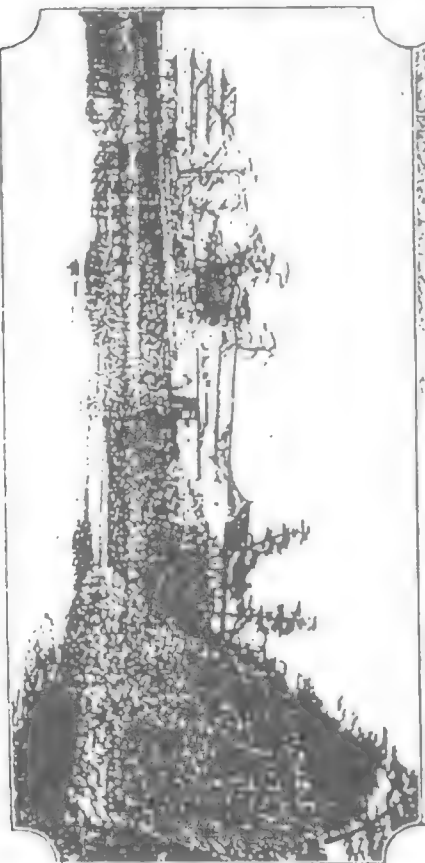
京都帝國大學總長正四位勳三等法學博士木下廣次撰



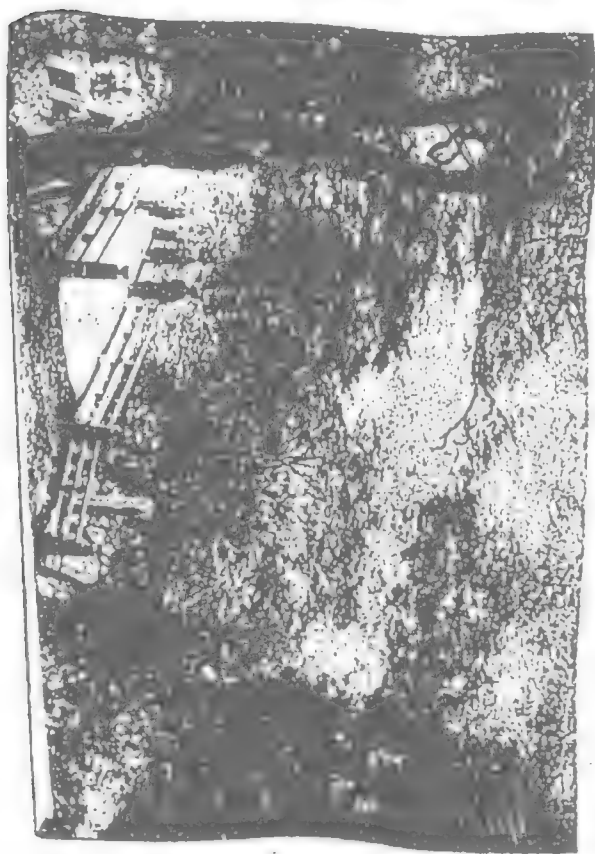
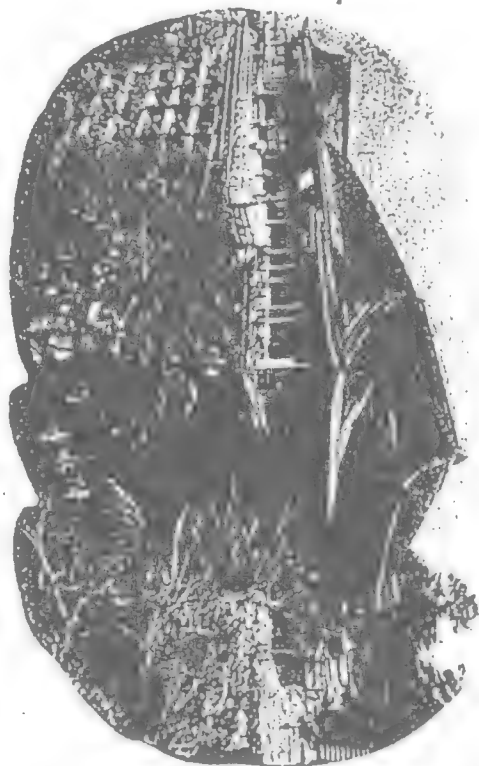
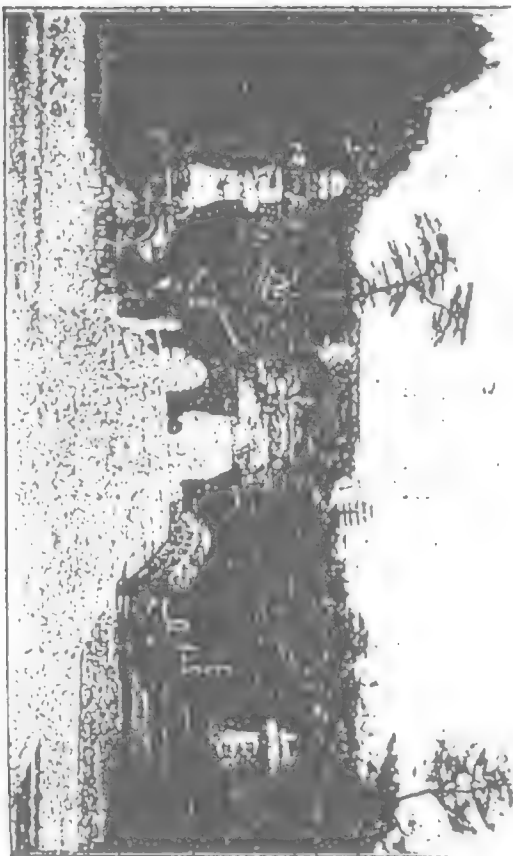
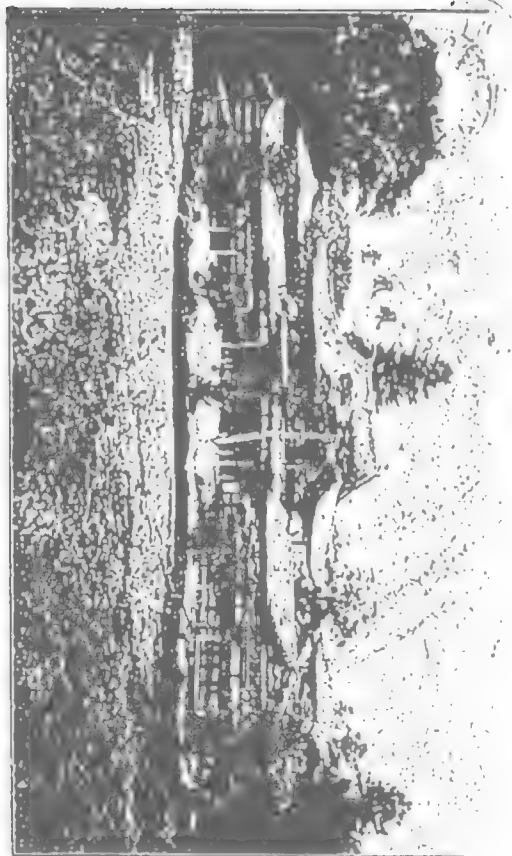
東京二重橋

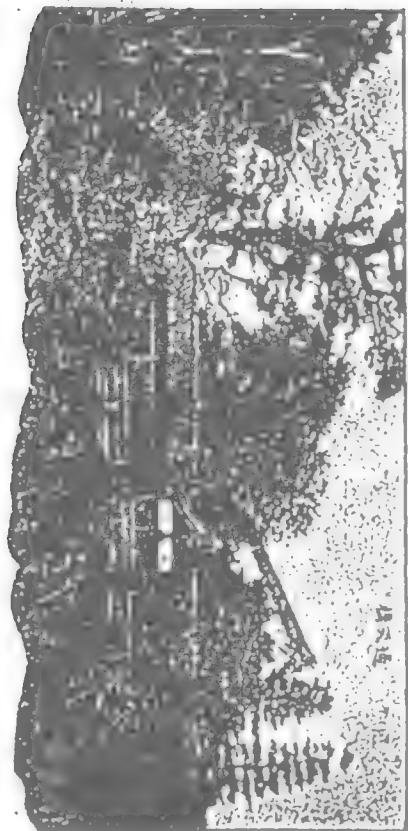


京都御所

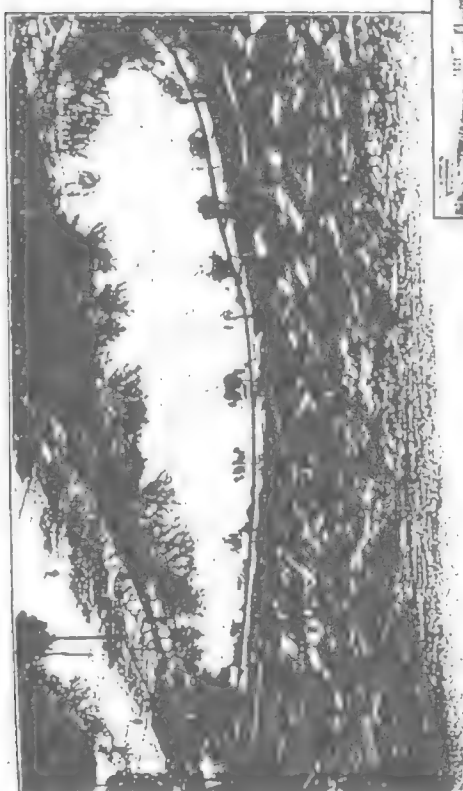
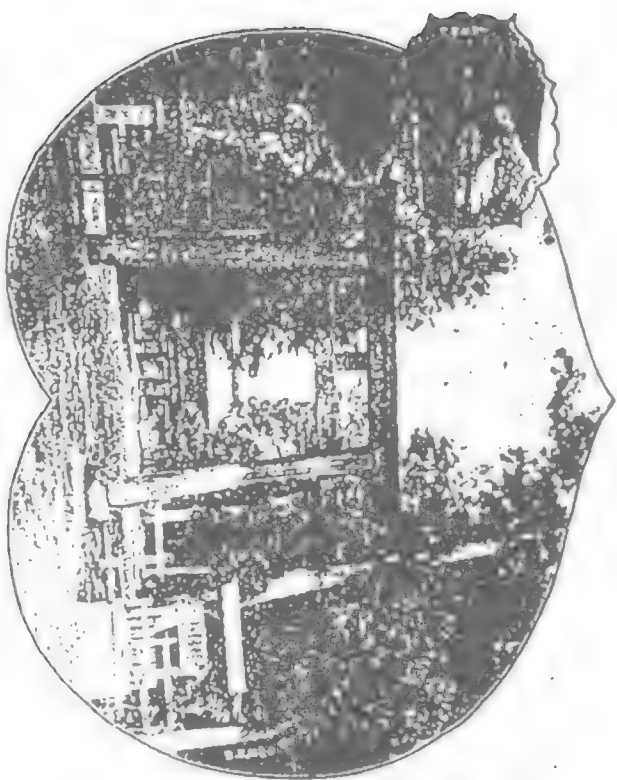
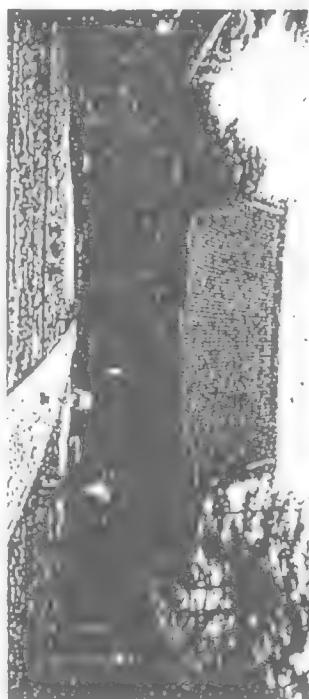


大阪城



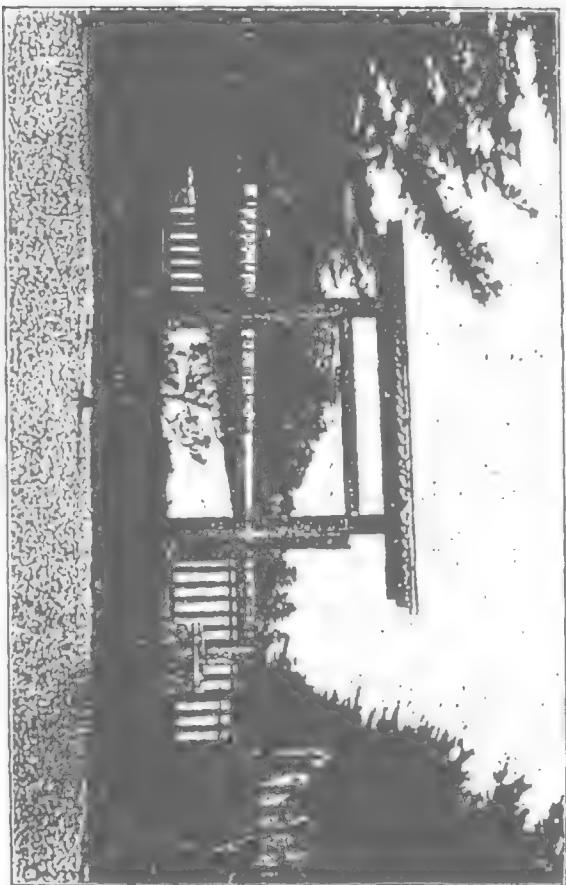


堂 如 此

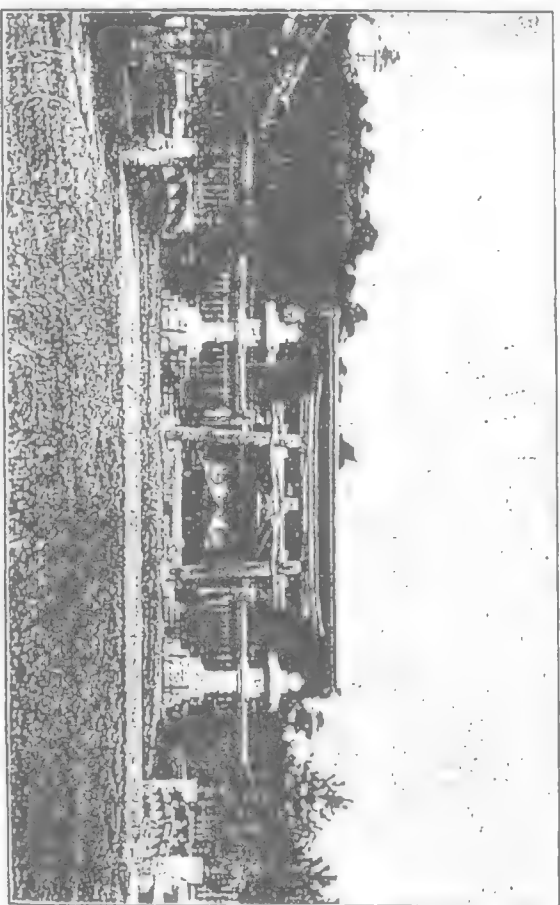


池 澤 林

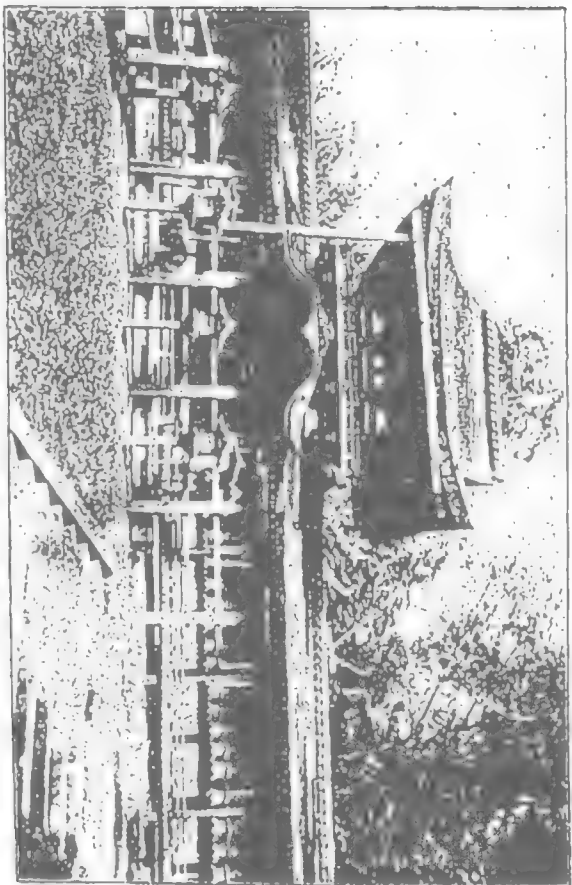
武藏縣日光山



德原神社



春日神社

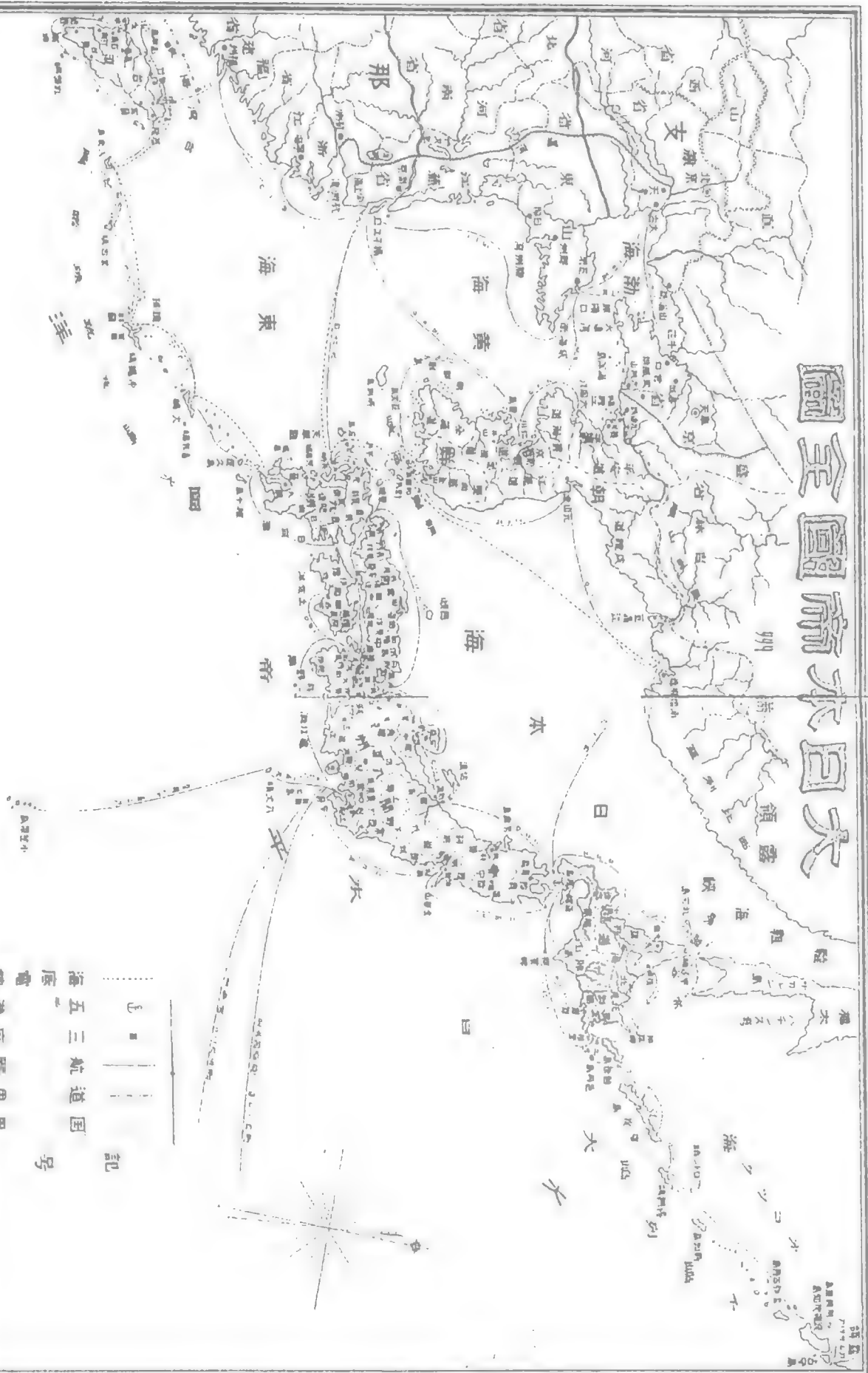


法隆寺



記
 海五三航道国
 港電
 界

大日本帝國全圖



凡例

- 一 本編題曰叢談唯從吾意之所趣走筆叙去詳畧不一且憾家乏書史不能博引傍搜將俟他日有所集成編末附載滄海一粟集古十種漢譯舊稿亦以爲叢談之一助
- 一 本編各條專要意達事通文章乃古今相雜字句乃雅俗相半文體亦不一定招大方之嗤笑必矣然至徵引考證都係平生手錄不獨形勝一事讀者當自知之
- 一 各條註脚采入漢土詩文自唐宋至元明清初蓋取不多傳於世者今世黃某日本雜事詩類旣行坊間何須余收錄而後知焉哉
- 一 本編不敢敬避廟諱又無擡字闕畫等事是等義例我邦亦嘗行之而至今代主實禮廢虛儀大抵文書未必拘泥故莫視印行體

- 一 裁爲不知臣子之禮也然事關皇家苟不下筆自謂敬之至也
 - 一 東亞帝系對照表要俾覽者明我皇統以及三韓帝系其下附載西洋各國則欲見世界趨勢之概要耳如他各表皆宜與本編兩相參照事理自明白矣
 - 一 本編素係今夏公暇起稿初無上梓之意友人八田君允卿夙爲東亞同文會京都支部幹事見之大喜捐貲力任其事余亦限期脫稿隨即附諸活版未出三旬前編告成君之功實居多若夫疎漏杜撰之譏余受而弗辭敢請博雅君子指教
- 壬寅仲冬於京都高瀨西岸寓居 隆正 識

日本形勝叢談前篇

目次

總論 國體 國號 文學 宗教 疆域

始通漢土

東亞帝系表 國疆畧表

京都府 京都沿革

御苑 內明朱諫及崇粟山詩祐井

同志社

護王神社 繁川星健詩

鴨川 隆詩 後藤松

大極殿

平安神宮

聖護院

金戒光明寺

三條大橋

疏水運河

帝國大學

革堂

飯田忠彥

本能寺

上御靈社

廬山寺 明惟卷詩序

梨木神社

相國寺

明朱諫文祝 允明詩序

藤原惺窩

山城國

京都府 廣福旭莊

明朱諫詩

文教畧表

文學

宗教

國號

疆域

山崎闇齋

西雲院

大元官

神樂岡

月待山 皆川淇園詩

銀閣寺 朝辭國書

南岩倉山

梁川星巖

狩野元信

盲啞院

聚樂

金閣寺 明太祖登鎮國山碑文

智恩院

青蓮院

賴山陽

溫泉

歌舞練場 成島柳北詩

祇園町

六波羅密寺

靈山招魂場 伊藤春政侯詩

八坂塔

清水寺

清閑寺

雙林寺

高臺寺

正法寺

建仁寺 宋梭織及威僧懷敏明朱諫詩文

將軍塚

八阪神社

圓山公園

長樂寺

二條城 中井竹山詩

神泉苑 明文

西陣 明朱應星語

北野神社 宋師範元微天祐明洪起詩

栗田口町

京都府廳

南禪寺 賴山陽詩 明王陽明及僧宗滿文

八神殿

第三高等學校

眞如堂

大興寺

鳥部山

豐國神社明主封冊

京都博物館

蓮華王院

神宮教會所

四條橋

六角堂

御影堂

京都停車場

本願寺

西本願寺

滴翠園

菅大臣神社

王生寺

加茂別雷神社

八瀬里

詩仙堂額春風詩

圓光寺額春本

教王護國寺唐馬綽胡伯崇朱千乘朱少端胡漸姬王詩文

耳塚

泉涌寺朱僧瑞律寶及法照元粹詩

稻荷神社松崎謙壁文

高瀬川

長講堂

東本願寺

本國寺

島原遊廓

下加茂御祖神社

修學院

大原女

方廣寺

靈明殿

五條橋

新京極

電燈會社

涉成園

空也堂

六孫王神社

知恩寺

御蔭神社

無音瀑

三千院

比叡山

建勳神社

小野篁足利學校考畧

鞍馬山

鞍馬寺唐高鶴林詩厚

高山寺

西明寺

妙光寺朱僧無門詩序

仁和寺賴山陽詩

佐久間象山

兼好法師

廣澤池

大澤池

新田左中將

華臺寺

天龍寺明朱源文

大井川

溫泉

臨川寺明世宗及朱祐李恒程詢韓紆楊燕等詩

車拆神社

鹿王院

松尾神社

地藏院明朱源文

法輪寺

嵐山官茶山齋藤地堂詩

大悲閣石川丈山郡波活所詩

欽忠碑

清涼寺朱史日本傳

廣隆寺

妙心寺

等持院明朱源文

神護國祚寺右鑑銘及明一菴詩

三尾秋光凱足萬里岡松麴谷詩

棧敷嶽

金降寺

大德寺

正傳寺

延曆寺唐院淳鄭華則僧道遂孟孔毛煥依懷林墨行滿許闌幻夢及稷白沈瀧等詩文

桂離宮	瀧紙場	長福寺	乙訓郡衙
勝持寺	長岡都址	金藏寺	天王山
天王神社	寶積寺 <small>宋王誅詩</small>	石降寺	藤森神社
瑞光寺 <small>明處士陳元俊</small>	紀伊郡衙	伏見町	桃山 <small>陽詩</small>
御香宮 <small>韓史</small>	巨椋池	大石良雄	萬福寺 <small>明僧</small>
池尾茶園	宇治郡衙	宇治町	宇治川
菟道稚郎子	宇治神社	平等院	寶林寺
惠心院	淀町	久世郡衙	淀城址
八幡町	男山八幡	達摩堂 <small>明宋源文</small>	高倉宮廟
粕之里	相樂郡衙	水津町	水津川
三瓶原	笠置山	京都土產	

奈良縣	奈良沿革	縣廳	三笠山 <small>阿部仲廣呂歌</small>	戒壇院	正倉院	五重塔	磐若寺 <small>護良親王</small>	白毫寺	郡山町	西大寺	龍田川
停車場	春日山	東大寺 <small>大佛殿</small>	戒壇院	正倉院	五重塔	磐若寺 <small>護良親王</small>	白毫寺	郡山町	西大寺	龍田川	龍田神社
春日山	春日神社	嫩草山	三月堂	帝室博物館	南圓堂	漢國神社	大安寺	郡山城址 <small>柳澤神社</small>	秋篠寺	龍田山	朝護孫子寺
奈良縣	奈良市 <small>大字春</small>	若宮	手向山 <small>菅公歌</small>	二月堂	興福寺	北圓堂	微澤池	法華寺	唐招提寺 <small>唐鄭谷詩</small>	法隆寺 <small>唐劉禹錫詩</small>	朝護孫子寺

下田驛

今井町

橘寺

櫻井町

長谷寺

高田町

賀名生宮址大窪寺
佛詩

榮山寺古龜銘

達摩寺

樞原神社

岡寺

談山神社

大神神社

吉野山

源親房墓

葛城山

當麻寺清僧榮
顯文

御畝傍山

南法華寺

韓人池

大和神社

吉野山吉野神社等事蹟。梁川星巖藤井
竹外河野鐵地岡松變谷等文詩

五條町

御所町

廣瀨神社

久米寺

世尊寺

文殊院

石上神社

金峰山

停車場

奈良土產

東亞帝系對照表

本邦	漢	土	朝鮮	印度	波斯	小亞細亞	亞比倫	巴比倫	亞	埃及
天地未開	位於亞細	位於亞細	位於亞細	位於亞細	位於亞細	位於亞細	位於亞細	位於亞細	位於亞細	位於亞細
割陰陽未	亞之東南	本漢土之	古史無徵	千有餘年	該隱嗣立	無道天降洪水	八裔蕩然	追挪亞嗣立	日漸	繁庶有子
分派池如	一大國也	間初無君	其地東通	繁庶有子	三人曰因	曰含曰雅	勿分王其地	為西洋諸國之祖		
賜子洪洋	三皇五帝	長有神人	漢土西至	亞西里亞	挪亞避水	洪水後開	上古大國	上古時歐	洪水初平	
而含芽秦	之後數千	降子攬水	波斯北至	與印度之	於阿米尼	之子但房	舊史無攷	羅巴實味	含之裔	
其淵陽者	年帝王之	下是為舜	回部南至	間皆古波	阿譯言高	西里亞阿	相傳挪亞	未開入歐	四來聲	
遐廢而為	擁泰邦國	君名王倫	印度洋中	斯之地漢	地在小亞	奴居亞西	之孫開倫	難處小亞	徙於阿非	
夫重濁者	之隆替相	國號朝鮮	以印度河	時稱為安	細東境今	里亞其地	始造開倫	細亞人跡	利加之北	
淹滯而為	繼不絕傳	後周武王	為佛敎所	息今波斯	土耳其之	北為阿米	城徙居于	海峽而西	境始建地	
地精妙之	其革命版	封箕子謂	自始漢時	偏隅而已	東也地高	尼阿東為	此漢之據	始知有希	維司城又	
台榭為重	國愈擴其	之箕子朝	身毒天竺	相傳因之	氣煥滋生	亞西里亞	築即其地	利尼之廣	名挪阿門	
濁之凝罔	表而之大	鮮又有衛	即其地也	裔金希德	日衆析居	南為阿刺	也今為土	土厥後昏	是時又有	
難故天先	居于亞細	滿者代立		始居于此	西土漸開	伯西為西	耳其之猶	據漸啓疆	徙於西亞	
成而地定	亞洲三分	謂之衛滿								
然後神聖	之一世界	朝無既分								

生其中焉 中同其廣 為三韓也 故曰開闢 者獨有魯 細亞耳 之初州城 浮漂磐猶 遊魚之聲 水上也於 是有國常 立埠又稱 天御中主 神是謂神 代又有天 神七代地 神五代之 神天御中 主神孫十 五世曰神 武天皇

帆足萬里曰五大洲中風氣之閉止有二處 尤早其一波斯以西如德亞尼日度陸國致

漢土

東周

平王

所稱退米	阿譯言而	江中一名	倍打乃耶	譯言高平	原在大格	里司江由	弗拉的江	之間近大	格里司江	者爲亞西	里亞近由	弗拉的江	者爲巴比	倫今皆東	土耳其地				
名希臘卽	及之始舊	西土耳其	稱爲厄日	之地今希	多卽今之	臘乃西南	土耳其之	海濱一隅	麥西	而已西曆	紀元前一	千四百年	間有發頓	曜拉地唯	久與恩百	里夕古里	爭戰至是	遷於昔西	恩云

代第二					代第一				
第三安寧天皇(御陵大和) (畝火山)					神武天皇(御陵大和) (熊都大和)				
第二綏靖天皇(御陵大和) (桃島田山)					桓 王				
余嗚呼余豈好辯哉					莊 王				
朕今所以特製此表者其意在於述衡三國 并著消導通論東洋年表後俾災火掃跡堪 上之策耳非以古侮我以今輕彼之日也余 惡以與西洋各國聯絡揚鞭馳騁於全球 國際方今之時固當泐究唇齒車互相擁 復謂是等語徒害彼此心慈而無益於友交 編所載亦不外於此或有少制虫蠶乎然余 國等事以我爲附庸彼論之則我亦駁之本 然余每怪漢士學者豈引古書論述世界建 四國撥一國造云云議論精當故採擇焉雖 遺業經營中國東征遂平定天下於百四十 營中國神武帝幼時聞其地之美欲繼皇祖					惠 王				
定 王					簡 王				
靈 王					景 王				
魯襄公二十二年庚戌十一月庚子孔子生 於魯昌平鄉陬邑即懿王二十二年也					二年戊午年釋迦牟尼佛卒或曰五年辛酉釋 迦牟尼佛生于印度				
始雅國					深及法				
亞細亞					老尼谷				

神武天皇 <small>(京都大和 御陵大和歌山)</small>	星可以徵天亦其大較耳闕筌籍以斯載書 史之作美惡最古美惡之前亦有一二書史 其所載怪誕不可據信美惡當毀湯時在二 典後四百年本邦建國古無文史年紀莫可 推考然在殷周間可知天照大神都于日向 其弟素盞彥尊暴戾放之於北方乃將其子 五十萬命濟海往朝鮮以其地枯瘠還到出 雲娶稻田姬其子大己貴與少彥名謀更經	頃	王
	二與卑陶限瑪實是夏史所紀舉四時昏中 靈稍後於漢土伏羲始作書契古書不傳書 散各成一國聖當夏禹時則西洋風氣之闕 萬國生民之祖者諸厄靈高邈民苦久役迷 亦然其荒唐之言無識耳然西人所推以爲 乃滅不能復飛是爲生民之祖西人論開闢 始闢有光言天人降居地上因食地賦身光 國所宗亦得東方發生之氣也佛經載天地 法文物皆由創作無所踰與斯倫之教爲萬 亞東邊與西洋諸國相去絕遠自爲一區教 法文物多相依倣其一漢土也漢土在亞細	桓	王
	王	王	
	王	王	
	王	王	
惠	信	莊	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王	王	王
王	王		

代第四 懿德天皇

代第五 孝昭天皇 (御陵大和博多山)

代第六 孝安天皇 (御陵大和手岡)

敬王

魯哀公十六年壬戌四月己丑孔子卒年七十三即敬王四十一年也

元王 貞定王 考烈王 威烈王 安王 烈王 顯王 慎觀王 赧王

代第七 孝靈天皇 (御陵大和片岡島坂)

秦人徐邈來朝歸化

代第八 孝元天皇 (御陵大和劍池)

代第九 開化天皇 (御陵大和率川)

周東 惠公

秦 始皇帝

二世皇帝

子嬰

漢 高祖

惠帝

高后

文帝

景帝

約猶繼太歲立

布歷亡

<p>第四十代 仲哀天皇 (御陵河内惠賀) 都子大和後賜于長門 行宮 神功皇后 新羅主波沙羅錦惶遽 不知所爲而糧來降瘡 日設令太陽出自西隅 綵江逆流無闕朝貢不 乾舟楫獻馬糧馬鞍於 天旣之祿後世子孫若 瀛此盟天神地祇共殛 爵云云高麗百濟亦與 新羅隣皆望風降曰永 稱西藩不絕朝貢</p>		西 武 帝	昭 烈 帝	<p>奈解王 伐休之孫 助貴王 伐休之孫 沾解王 真王之弟 味鄒王 金氏仇道之子 關智出於金機 故姓金氏</p>
<p>山上王 名延倭國川弟</p>		<p>東川王 名娶位居移都 平坂</p>	<p>中川王 名然弗</p>	<p>仇首王 我史作實須</p>
<p>紀第三世</p>				

<p>第三十代 成務天皇 (御陵大和盾列池) 移都近江滋賀 定諸州郡境</p>			
和	順	順	獻
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝
帝	帝	帝	帝

第十代 聖王		第十代 履仲天皇		第十代 反正天皇		第十代 反正天皇	
閔智裔孫		都于大和				移都河內	
安		安		安		安	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝		帝		帝	
帝		帝					

<p>第十代 允恭天皇 都于大和 遣使新羅獻壽獻者</p>		<p>第廿代 安康天皇 (御陵大和宮原伏見)</p>		<p>第廿一代 雄略天皇 (御陵大和丹北高藏原) 吳使來聘 吉備田狹爲任那國司 高麗與新羅戰新羅乞 援於日本府乃派兵大 破高麗軍</p>		<p>第廿二代 消磐天皇 (御陵河內坂門原)</p>		<p>第廿三代 顯宗天皇</p>		<p>第廿四代 仁賢天皇 (御陵大和磐坂岡)</p>		<p>第廿五代 武烈天皇</p>		<p>第廿六代 繼體天皇 (御陵攝建二島露野) 梁使司馬達來</p>	
<p>齊高帝 昭智王</p>		<p>武帝</p>		<p>明帝</p>		<p>和帝</p>		<p>梁武帝 法興王 名源宗 稱王 定國號新羅始 王曾孫 名智大路奈勿</p>		<p>安藏王</p>		<p>東城王 名牟大</p>		<p>武寧王 名斯摩又名餘</p>	
<p>紀第六世</p>		<p>年百九</p>		<p>日耳曼</p>		<p>與法蘭</p>									

<p>長壽王 移都平壤</p>		<p>訥祗王 號魔立子後用 此號者多</p>		<p>慈悲王</p>		<p>後廢帝 明帝 前廢帝</p>		<p>孝武帝 文帝 少帝 宋武帝</p>		<p>第廿代 安康天皇 (御陵大和宮原伏見)</p>		<p>第廿一代 雄略天皇 (御陵大和丹北高藏原) 吳使來聘 吉備田狹爲任那國司 高麗與新羅戰新羅乞 援於日本府乃派兵大 破高麗軍</p>	
<p>久爾辛王</p>		<p>毗有王</p>		<p>蓋鹵王</p>		<p>文周王 移都熊津</p>		<p>三沂王</p>		<p>國自立爲西班牙</p>		<p>國自立爲西班牙</p>	
<p>法蘭西</p>		<p>凡大利</p>		<p>班人自西</p>		<p>班地中海</p>		<p>非利加亞</p>		<p>白里登</p>		<p>建國于</p>	
<p>國興西</p>		<p>利英吉</p>		<p>號英吉</p>		<p>利英吉</p>		<p>號英吉</p>		<p>號英吉</p>		<p>號英吉</p>	

宣 帝		第十代敏達天皇 (御陵河內磯屋原) 新羅人貢獻佛像百濟 王子日羅來朝 第三十代用明天皇 百濟僧惠慈奉惠聰來貢 第二十一代崇峻天皇 (御陵大和橿原坂) 第三十一代推古天皇 (御陵河內磯屋山田) 始遣使于隋 吳僧智藏歸化 百濟僧曇首道深等來朝
真智王		真智王 子金輪其興 真平王 名伯淨與智之孫
嬰陽王		
惠王	子名孝明威德二	
法王	名直	
聖王		聖王 名明禮移都泗水國學扶餘 羅馬屬 東西剖分 馬東奴來 洲亞細亞 人始至其

一六
一五

簡 元 帝 帝 帝		第七代安閑天皇 (御陵河內古市高屋) 第八代宣化天皇 (御陵大和百島坂岡) 第九代欽明天皇 (御陵大和橿原坂) 吳人智聰來貢 百濟人遷到佐渡肅慎 唐曰鉢鷄宋曰女真 百濟來獻佛像經論 百濟僧量惠及道深來朝
文 帝		真興王 名多婆法興王之姪
敬 帝		陽原王
武 帝		平原王
聖王		威德王 名昌
聖王		聖王 名明禮移都泗水國學扶餘 羅馬屬 東西剖分 馬東奴來 洲亞細亞 人始至其

尼
始遣傳正僧都校校僧

煬
恭
帝
高祖
宗
太

第卅四代舒明天皇
(御陵大和押坂)
始遣使于唐、後二十
代、往來不絕
第卅五代皇極天皇
(御陵筑前廣庭岡)

第卅六代孝德天皇
(御陵河內
磯長大坂)
移都攝津
僧道黑如眉

善
德
王
名德曼真平王
之良女

榮
留
王

寶
藏
王
降于唐

眞
德
王
名勝曼真平王弟國飯
之女
武烈王

義
慈
王
名義慈降于新
羅

羅
馬
國
大亂
所以法蘭西
所爲都

波斯王
求援支
明

武
王
紀第七世
名璋

第卅七代齊明天皇
(御陵大和
越岡)
都于大和
新羅伐高麗高麗乞援遣兵大興
唐兵敗于高麗
耽羅國始來貢

第卅八代天智天皇
(御陵山城
宇治山科)
移都近江
唐使郭務宗至對馬

第卅九代弘文天皇
(御陵近江
長良山)
第卅十代天武天皇
(御陵大和
橿原安古)

第卅一代持統天皇
唐人參照朕
御獻獻唐民二十口處之遠江
都于大和

名春秋眞智孫滅百濟
文武王
名法敏滅高句麗

神
文
王
名敏明

孝
照
王
名理洪

羅
馬
王
馬子
西羅
親伐
利

英
吉利
薩生王
始信耶

第卅一代 淳仁天皇（御陵淡路三原） 母崇孔子用文宣王諡		第卅八代 稱德天皇（御陵山城高野） 阿部仲麻呂子唐		第卅九代 光仁天皇（御陵大和田原） 唐袁寶卿歸化賜姓隋村叙從五位任大學頭兼安房守		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗		宗		代	
第卅二代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		第十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 詔學士習唐音		遺隱原葛野唐等子唐僧最澄空海義興等從之		大春日清足在唐娶李氏携歸島帝奴禦至奈河始植綽種		最澄建延曆寺		順宗</					

一九二〇

第卅一代 文武天皇 始行釋典 琉球諸島交來朝貢粟田真人爲 遣唐使		第卅三代 元明天皇（御陵大和奈保山）		第卅四代 元正天皇 吉備與備阿部仲麻呂等爲留學 生如唐遣使採柘國後稱勃海國		第卅五代 聖武天皇 移都山城又都于大和 大野東人始鑄多賀城令諸生習 漢語勸海入貢		第卅六代 孝謙天皇 遣唐使大伴古麻呂爭禮於唐胡冠	
立睿宗		立睿宗		立睿宗		立睿宗		立睿宗	
聖德王 名隆基後改與光孝昭之弟		孝成王 名承慶		景德王 名憲英孝成之弟		西授注闕		西授注闕	
紀第八世 蘇敏於 從此效 多者		母爲王丹麥高		東羅馬 恭祿經馬 三万客		貢太利 攻羅馬 致王謂		西授注闕	

第五代 文德天皇 (御陵山城) 田邑	僞圓珍如唐商賈踵從之	第六代 清和天皇 (御陵山城) 水尾岡	僞圓珍還自唐	第七代 陽成天皇	嵯峨廣太子高岳薨于西城	勅海使來貢	第八代 光孝天皇	菅原道與上奏請罷遣唐使	第九代 宇多天皇	春海貞言卒本唐舞師也
昭	信	懿	宗	宗	定康王	名最	眞聖王	名曼定康之女弟	孝恭王	名較德康庶子
憲安王	名龍濟神武之弟	景文王	名齊康僖喜之孫	憲康王	名最	定康王	眞聖王	名曼定康之女弟	孝恭王	名較德康庶子
天主教	始分東	西利一	日司	教	融丁	俄羅	人	以	羅	二
馬	伐	船	二	船	伐	馬	羅	百	羅	二
英	造	編	兵	英	造	編	兵	英	造	編
省	民	分	重	省	民	分	重	省	民	分
修	政	令	重	修	政	令	重	修	政	令
又	始	建	又	始	建	又	始	建	又	始
博	物	建	博	物	建	博	物	建	博	物
院	又	以	院	又	以	院	又	以	院	又
五	等	以	五	等	以	五	等	以	五	等
封	勳	威	封	勳	威	封	勳	威	封	勳
刊	行	律	刊	行	律	刊	行	律	刊	行
例	行	律	例	行	律	例	行	律	例	行

第壹	一代平城天皇	（御陵大和梅）
第貳	嵯峨天皇	（御陵山城嵯峨）
第參	淳和天皇	（御陵山城原）
第肆	仁明天皇	（御陵山城深草）
藤原常嗣爲遣唐使小野賀嗣之 太宰大貳藤原爲上表請新羅人 不許入境內 僞圓仁歸自唐		
憲	帝	
穆	帝	
敬	帝	
文	宗	
宣	宗	
武	帝	
宣	帝	
憲	德王	名義昇昭聖之弟
憲	德王	興德王 名孝宗後改景微憲德母弟
信	康王	名悛隆元聖曾孫
神	武王	名新微元聖曾孫
文	聖王	名慶曆
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯
阿	刺伯	建書院伯</

第 二 代 村上天皇	皇親王錢弘假遣將姦獻尊右大臣藤原實賴勸實賴賜答書及砂金貳萬兩我邦將相與外國人主使命往復蓋始于此	第 三 代 冷泉天皇	第 四 代 圓融天皇	僧裔然如朱
出 帝	〔漢〕高祖	隱 帝	〔周〕太祖	世 宗
恭 帝	恭 帝	太 宗	景 宗	景 宗
惠 宗	名武	定 宗	名義太祖子	光 宗
光 宗	名昭太祖子	景 宗	景 宗	景 宗
荷 蘭 所 織 毛 布 多 返 沽	阿 剌 伯 絨 綢 織 造	阿 剌 伯 絨 綢 織 造	法 蘭 西 王 與 日 耳 曼 王 休 休 林	法 蘭 西 王 與 日 耳 曼 王 休 休 林

<p>第十代 醍醐天皇</p> <p>勃海使豐璽來朝</p> <p>交易唐物使常廣有葉獻孔雀</p> <p>新羅全州曾甄宣遣使請歸化却</p> <p>之</p>	<p>〔梁後〕 太祖</p> <p>未 帝</p>	<p>神德王</p> <p>景明王</p> <p>名昇英</p> <p>朴氏名景順阿達羅王遠孫</p>	<p>〔再後〕 莊宗</p>	<p>明宗</p>	<p>景哀王</p> <p>名魏膺景明之母</p> <p>弟</p>	<p>敬順王</p> <p>名碑金氏文聖後</p> <p>孫降於高麗</p>	<p>姓王氏名建金城</p> <p>太守隆之子泰封</p> <p>王弓裔據松嶽政</p> <p>亂將士推戴爲王</p> <p>都松嶽今開城府</p> <p>王氏三十六世共</p> <p>曆四百七十五年</p>	<p>第一代 朱雀天皇</p> <p>吳越人來聘獻羊</p>	<p>〔晉〕高祖</p> <p>廢 帝</p> <p>帝</p>	<p>英國始</p> <p>作鏡</p>	<p>紀第十世</p> <p>西班牙</p> <p>回教人</p> <p>大興學</p> <p>匹來學</p>
--	---------------------------	---	----------------	-----------	------------------------------------	--	--	--------------------------------	----------------------------------	----------------------	---

第 九 代	後 米 雀 天 皇	第 十 代	後 冷 泉 天 皇	宋 張 守 隆 來 僭 成 真 如 朱 流 瀛 前 清 原 守 武 子 佐 渡 以 其 私 如 朱 也 張 守 隆 歸 化 命 居 但 馬	第 一 代	後 二 條 天 皇	僭 成 真 如 朱	第 二 代	白 河 天 皇	新 羅 遣 使 求 良 醫 却 之 宋 商 孫 惠 來 僭 成 章 在 朱 以 朱 主 命 獻 金 字 法 華 經 等 後 成 發 寂 于 朱
靖 宗	名 亨 顯 宗 二 子	文 宗	名 徹 顯 宗 三 子	崇 宗	崇 宗	順 宗	順 宗	宣 宗	名 運 文 宗 二 子	

<p>五代 第孝 花山天皇</p> <p>六代 第孝 一條天皇</p> <p>七代 第孝 二條天皇</p> <p>八代 第孝 後一條天皇</p> <p>女眞賊船五十餘艘來寇對馬遂至筑前大宰帥藤原隆家等拒戰賊之賊遂逃遁南蠻人寇薩摩人鑿却之</p>	<p>眞 宗</p> <p>仁 宗</p>	<p>成 宗</p> <p>名治太祖之孫</p> <p>顯 宗</p> <p>名詢太祖之孫</p> <p>德 宗</p> <p>名欽</p>
--	-----------------------	--

第^二代 後鳥羽天皇 (御陵山城)
鎌倉兩府 源賴朝

第^三代 土御門天皇
源賴家 源實朝

僧俊仍如朱

第^四代 順德天皇
藤原賴經

朱陳和卿歸化

第^五代 仲恭天皇

北條氏執權

寧 光

宗 宗

神 宗

熙 宗

康 宗

高 宗

名改後改睦仁宗三子

名實又名親

名敏初名暎又改睦

阿 阿 刺 伯
學的天 聖 書 六十種 佚今多散

第^{十三}世紀

元 太 祖
自蒙古 征伐俄國

第^六代 後堀河天皇

第^七代 四條天皇
僧圓爾如朱

第^八代 後嵯峨天皇
藤原賴嗣

第^九代 後深草天皇
宗尊親王

朱僧道隆來

第^十代 龜山天皇
惟懷親王

朱僧元庵來朝

元兵大舉來寇我兵屢破元兵生還者僅三人

理 宗

度 宗

太 宗

宗 宗

宗 宗

宗 宗

世 宗

元 宗

名種初名儀

波斯降子蒙古
蒙古又伐印度
波斯攻阿刺伯
克沙闐生之國

英國始造馬口

英國詔毀猶太

住國修巴梨斯會

英國始製四式錢

英國始定不

注國人嫁娶

一英始禁娼

第卅一代後宇多天皇 朱僧祖元歸化爲圓覺寺主		第卅一代伏見天皇(御陵山城) 深草(草)	久明親王	第卅二代後伏見天皇	元僧一山體元主誓北條貞時怒 清一山子伊豆後宥之爲圓覺寺主	第卅三代後二條天皇(御陵山城) 北白川	第卅四代花園天皇(御陵山城) 十樂院	守邦親王 足利氏遣使于明 北條氏亡	第卅五代後醍醐天皇(御陵大和野)	暨良親王 成良親王	北朝	光祿天皇(御陵丹波) 常照寺	室町明府 足利氏	光明天皇(御陵攝津) 勝尾寺	第卅七代後村上天皇(御陵河内) 檜尾	足利義詮 懷良親王遣使于明	崇光天皇(御陵山城) 伏見
恭宗	宗	成宗	武仁	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	順宗	順宗
忠烈王 名臣初名謙元		忠宣王 名臣初名謙		忠肅王 名謙重王第子		忠惠王 名禎		忠肅王 復位		忠惠王 火祲與法國戰始用 丹麥人始用大火砲 英國始作自鳴鐘		忠惠王 復位		忠穆王 名昕惠王長子		忠定王 名眠惠王庶子	

三三

第卅一代後宇多天皇 朱僧祖元歸化爲圓覺寺主		第卅一代伏見天皇(御陵山城) 深草(草)	久明親王	第卅二代後伏見天皇	元僧一山體元主誓北條貞時怒 清一山子伊豆後宥之爲圓覺寺主	第卅三代後二條天皇(御陵山城) 北白川	第卅四代花園天皇(御陵山城) 十樂院	守邦親王 足利氏遣使于明 北條氏亡	第卅五代後醍醐天皇(御陵大和野)	暨良親王 成良親王	北朝	光祿天皇(御陵丹波) 常照寺	室町明府 足利氏	光明天皇(御陵攝津) 勝尾寺	第卅七代後村上天皇(御陵河内) 檜尾	足利義詮 懷良親王遣使于明	崇光天皇(御陵山城) 伏見
恭宗	宗	成宗	武仁	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	順宗	順宗
忠烈王 名臣初名謙元		忠宣王 名臣初名謙		忠肅王 名謙重王第子		忠惠王 名禎		忠肅王 復位		忠惠王 火祲與法國戰始用 丹麥人始用大火砲 英國始作自鳴鐘		忠惠王 復位		忠穆王 名昕惠王長子		忠定王 名眠惠王庶子	

第十四世紀

意大利
鏡始用限

代第百
稱光天皇
足利義量
朝鮮戰艦千三百艘來寇對馬擊却之
明使呂淵來義持大論其父讓國
體使倭西堂却之

宣仁宗
太惠宗
宗宗

代第四
莊愍王
諱楠字元正
始開經筵征討馬島立笑
子唐設集賢館築都城行
義老宴築三綱行實制頒
祿法禁俗平惡說
禁議檢書
君作號牌鋼鹿孽通期
錢子所設四學禮外戚封
隨高麗忠臣散申門徒設
諱芳遠字元正
代第三
定聖王
羅兵
諱敬字先遠
村苞作乱日本琉球來聘
代第二
恭靖王
至殘祿大夫
蘇經濟六興築都城征討
馬 鄭道傳作亂

英國始
作火藥
本始建都牙
立都士
世紀第十五

第百九
後小松天皇
足利義持
足利道義遣僧祖阿等子明受其
封冊
朝鮮遣使來聘請修降好
八代
後龜山天皇
僧如琮與胡惟席謀事覺被刑
明亦使僧仲獻無來聘
後圓融天皇
足利義滿
善詮遣僧中津妙佐子明
後光嚴天皇
足利義滿

明太祖
遣使日本伐安南討
交趾
廢塔山東浙江等地

恭愍王
名顯王太子
恭讓王
辛禔之子
辛禔之子
辛昌禔之子
名壽○朴彭年成三問李壇
柳成源河幹池會應乎六人
死節國人爲撰六臣傳
朝鮮李氏定都漢陽
代第一
康獻王
諱具字松軒父諱子春仕高麗

法國始作大自
鳴鐘于公隣
歐洲始用鐵守
城

<p>第四百 後奈良天皇</p> <p>足利義輝</p> <p>琉球來貢</p> <p>大內義隆與朝鮮曹判斐顯又遣使于明</p> <p>葡萄牙人來多嶺島始仰島統</p>		<p>第五百 正親町天皇</p> <p>足利義昭</p> <p>足利氏亡</p> <p>織田信長</p> <p>南蠻來信長建南蠻寺又築安土城</p> <p>大友義鎮遣其臣植田玄佐于明玄佐在明病卒</p>	
<p>神 穆</p> <p>宗 宗</p> <p>毀天下書院</p> <p>倭陷平海陸却之</p>		<p>第十 崇禎王</p> <p>論嶋</p> <p>第三十 崇禎王</p> <p>論嶋</p> <p>英 國 始 分 天 主 邪 蘇 而 教 始 興 印 度 通 商 葡 人 丙 安 往 日 本 葡 王 與 日 本 立 通 商 之 約 始 自 支 那 携 回 滿 洲</p>	
<p>第十 昭 敬 王</p> <p>論嶋</p> <p>第五十 昭 敬 王</p> <p>論嶋</p> <p>尼子滿介寇邊竹島倭寇通信日本倭人平秀吉等率二十五万衆入寇</p>		<p>第十七世紀</p>	

<p>第六百 後陽成天皇</p> <p>豐臣秀吉</p> <p>豐臣秀賴</p> <p>豐臣氏亡</p> <p>德川家康</p> <p>德川秀忠</p> <p>英 蘭 兩 國 船 舶 來 泊 界 浦</p> <p>允許京都角倉茶屋諸氏駿河太田瀨諸氏及大阪堺諸貿易海</p> <p>外</p> <p>秀吉陷朝鮮</p> <p>禁邪教</p> <p>山田長政經臺灣入暹羅</p> <p>秀吉遣使高山國即暹羅</p>		<p>第七百 後水尾天皇</p> <p>德川家光</p> <p>嚴禁邪教</p> <p>安南呂宋交泰寶</p> <p>仙臺支倉往羅馬國</p> <p>長崎爲互市場</p>	
<p>熹 光</p> <p>繼 祖 人 寇</p> <p>宗 宗</p> <p>愛親覺羅氏諱</p> <p>睿 爾 哈</p> <p>清太祖</p>		<p>第十 光海君</p> <p>倭 入 朝 鮮</p> <p>英 人 始 由 印 度 至 日 本</p> <p>英 人 水 師 始 來 駐 防 印 度</p> <p>荷 蘭 英 法 三 國 始 通 商 支</p> <p>那</p> <p>日 本 遣 使 于 印 度 教 會 營</p> <p>日 本 通 使 子 羅 馬 教 王</p> <p>法 國 始 分 遣 使 臣 駐 友 國</p> <p>之 京</p> <p>俄 國 與 法 國 通 商</p>	
<p>第十 悲 良 王</p> <p>論 瑠 昭</p>		<p>第七十 悲 良 王</p> <p>論 瑠 昭</p>	

第百十代 靈元天皇 明鄭成功名援兵 明備來之瑜歸化 德川綱吉 濟人親九官等四人歸化 僧與歸化即心越禪師 第百十六代 東山天皇 德川家宣 第百十七代 中御門天皇 德川家繼 德川吉宗 朝鮮使來新井君美爲之接待 滅蘭清商船之致 琉球入貢 交趾獻象 幕府命清商及荷蘭商舶定出入 歲額		第百四代 聖祖 諡文德 第五世 諡胤禩 宗		第百廿一代 德文王 諡响字璣璠王后金氏 第百廿二代 至行王 諡胎號光叔王后金氏	
荷蘭始作水龍 皮管 英國始建觀象 啓于倫敦 俄國始作行海 兵艦 英國始置刀 於火槍之上 第十八世紀					

三九
四〇

第百八代 明正天皇 島原亂起 第百九代 後光明天皇 琉球來朝 德川家綱 琉球入貢 第百十代 後西院天皇 明僧性瑠歸化後爲茂福寺主		思 福 唐 永明王 宗 王 王 王 代第二世 諡福臨 宗 祖 第百十代 憲文王 諡景獻松壺 興清國和 第百十一代 宣文王 諡誤號竹梧 第百十二代 昭休王 諡樞字景直王后張氏		法國始作馬車 荷蘭始設洋行 于廣興	
---	--	---	--	-------------------------	--

●國疆畧表

●國疆畧表									
行政區域	五畿八道及 臺灣總督府	府縣市町	京都府 京都	奈良縣 奈良	大阪府 大阪	東海道 津	三重縣 志摩伊賀 伊勢伊賀 紀伊二郡	愛知縣 名古屋	尾張 三河
陸軍	拾貳師團	第二師團	第四師團	第三師團	海軍	五鎮守府 二重要府港	舞鶴四鎮海軍府區	宮津	大坂 四日市 武豐

四三
四四

靜岡縣	靜岡	山梨縣	甲府	甲斐	伊豆河江	遠江
神奈川縣	橫濱	武相模	武藏	三郡	小笠原島	伊豆七島
東京府	東京	埼玉縣	浦和	下武藏	總一七郡	下上安房
千葉縣	千葉	茨城縣	水戸	常陸	總六郡	下陸
東山道	東山	東山	東山	東山	東山	東山
滋賀縣	大津	大津	大津	大津	大津	大津
近江	近江	近江	近江	近江	近江	近江
第近壹師團						
橫須賀鎮守府						
清	橫	滋	水	水	水	水

秋田縣 秋田		陸羽 中後 八郡	南 海 道		和歌山縣 和歌山 紀伊 八郡		德島縣 德島 阿波		香川縣 高松 讚岐		愛媛縣 松山 伊豫		高知縣 高知 土佐		山陰 山陽 道道		兵庫縣 神戶 但馬 攝津 丹波 六郡 淡路 二郡	
第十師團																		
第十一師團																		
神戶																		

岐阜縣	飛騨 三郡	長野縣	長野	群馬縣	高崎	栃木縣	宇都宮 下野	宮城縣	仙臺 陸奥 十三郡	福島縣	若松 磐城 十二郡	巖手縣	盛岡 陸奥 中 陸奥 前 十七郡	青森縣	弘前 陸奥 八郡	山形縣	山形 羽前 十二郡
<div> <div>第八師團</div> <div>第二師團</div> </div>																	

新瀉縣 新潟		西海道		福岡縣 福岡		大分縣		佐賀縣 佐賀		熊本縣 熊本		長崎縣 長崎		宮崎縣 宮崎		鹿児島縣 鹿児島	
佐越後				豐筑前後前六郡		豐前後前二郡		肥前十郡		肥後		肥前六郡		日向九郡		薩大日向一郡	
第六師團																	
第十二師團																	
竹佐第三世三波保海軍守區 港府區																	
新瀉		門博		唐口之津津		三須		殿佐鹿長		原奈見崎		角		角		須	

四七
四八

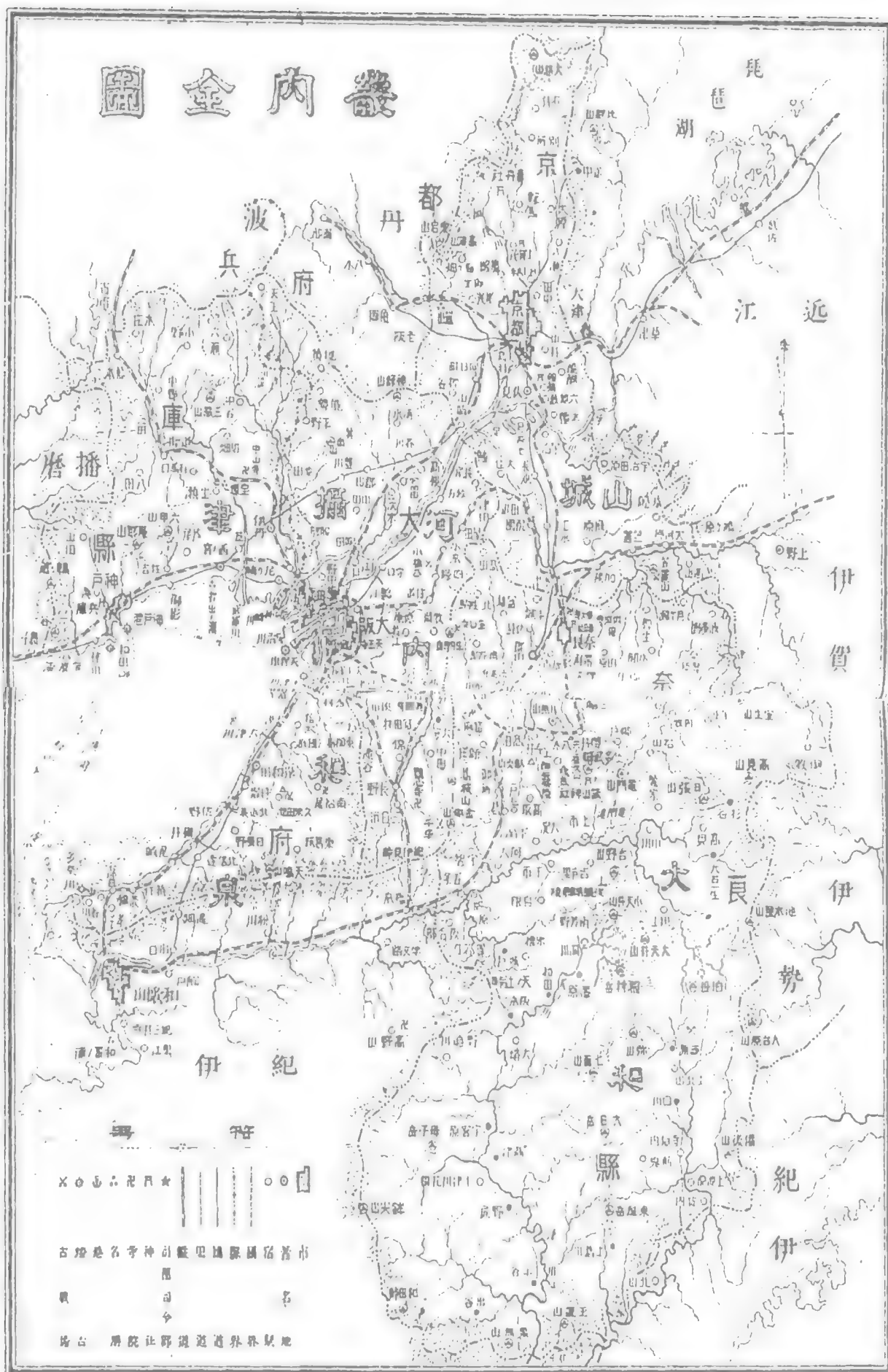
岡山縣 岡山	廣島縣 廣島	山口縣 山口	鳥取縣 鳥取	島根縣 松江	北陸道		福井縣 福井	石川縣 金澤	富山縣 富山		
備前 中前作	安藝後	長門防	伯耆幅	總石出 岐見雲			越前狹	能登賀	越中		
第五師團							第九師團				
吳第一鎮守軍府區											
宇絲		下之關		濱坂		致賀		七尾		伏木	

四九
五〇

二五九

華族女學校	陸軍省直轄	大學校 東京青山	大 學 校	戸山學校	士官學校	軍醫學校	砲工學校	砲兵工科學校	騎兵實施學校	野戰砲兵射擊學校	要塞砲兵射擊學校
郵便電信學校	臺灣總督府直轄	海軍省直轄	大學校 東京築地	兵學校 廣島縣 江田島	機關學校 神奈川縣 橫須賀	軍醫學校	砲術練習所	小學	師範學校	醫學校	國語學校

農學校	高等商業學校	高等學校	醫學專門學校	高等工業學校	外國語學校	美術學校	音樂學校	盲啞學校	宮內省直轄	學習院
二五	六四	三〇	一四	五	一〇四	三二	二二	七	遞信省直轄	商船學校
七三	一八五	三	三	三	二六五	三二五	一四六	高等學校	內務省直轄	警察監獄學校
商業學校	中學	醫學	工業學校	尋常小學校	尋常高等學校	高等學校	尋常高等學校	尋常小學校	遞信省直轄	商船學校



日本形勝叢談

靜岡關口隆正著

客之時。男子生焉。二十四方。坐火車踰大山。駕輪船渡重洋。環行地球。揣摩天體。豈不壯觀。大哉事哉。雖然。徒見山岳聳空。蒼海無涯。都邑繁華。樓閣櫛比之狀。而不知其所以然也。地理險夷。物產多寡之概也。既歸鄉國。漠然茫乎。無一所得。輒誇傍人曰。予也。西自英法諸國。以至南北兩米。遂東過日本矣。因問其山海形勢。國家推遷。乃曰。吾不知也。嗚呼。昔者。司馬長卿之跋涉名山大川也。豈夫如此而已矣哉。蓋我邦之於漢土。書同其文。人同其種。往來交通。非竟始于今日。然漢土建國尤尙矣。疆域亦曠矣。自古。上下尊大成風。自稱中國。又曰中華。凡成國於亞細亞洲中者。皆盡稱屬國屬島。而呼我曰東夷。東夷之史。不足讀也。東夷之文。不足誦也。

經之悔之。比至近世。通商各國。遂縮照於我。我邦土庶。固知漢土國勢。又能通其史書。故我之賦游禹域者。則必徵諸典籍。俯仰低徊。無往而不自得焉。歸朝家居。小之則可以養吾文氣。而補史乘之闕也。大之。則可以鑒彼國風。而改教化之弊也。頃者。清韓志士。亦有所深覺悟於世界大勢。乃知唇齒輔車之不可一日忽諸。王公大人。碩儒書生。接踵而至。載筆而來。或視我軍國政事。或察我殖產興業。或留學焉。或諷詠焉。皆是之時。我邦賢士大夫。推誠致禮。厚待優遇。無所不至。賦詩屬文。以通其情。重譯交臂。以表其意。可謂無復遺憾焉耳。雖然。余竊謂世界各國。星羅密布。一國自有一國之體。一邑自有一邑之誌。而況我邦皇統一系。萬古不易。自異於彼革命成國者耶。古史舊物。亘三千年之久。山河之固。原野之饒。一勺之水。一竿之石。無盡不存。典故來由焉。若夫寺觀祠廟。尤關係於漢韓兩國。亦云夥矣。譯官不能具語之。詩章不能詳述之。歐米人。夙稱我邦。曰世界之大公園。遠來遊者。日加一日。善歐文者。略

譯我邦地勢風俗名勝舊跡。裝成冊子。以便觀覽。然余未聞以淡文行之。有供於潛
 韓阿國遊客者。常以爲憾。乃不自揣。論著此書。題曰形勝叢談。余嘗聞之。願寧人者
 潛國名儒也。追長卿之跡。載書漫游。車轍遍於禹域。其著書等身。盡皆裨益於教化
 政治經濟地理之學。且遠及海外。異聞奇話。亦無不具載焉。然則。方今之世。倘有崑
 山若其人乎。或將有所採擇於此書也。其論國體國號等名篇。間援漢韓書史。彼此參
 照者。蓋有微意在焉。

國體

粵稽我邦開闢之初。有神。曰天之御中主尊。勅伊弉諾伊弉册二尊。曰。有豐葦原千
 五百秋瑞穗國。汝往治之。後更稱大八洲。至大日靈尊。天下大治。是爲天照大神。伊勢
 大廟。所奉祀。當是之時。天命既明。斯道既備。而無教之名。有載之之器。曰八咫鏡。曰
 八握劍。即此神也。稱曰三種神器。宮中所奉祀也。天祖授之皇孫曰。視之。猶視吾也。寶祚之

隆。當與天壤無窮矣。辛酉之歲。神武天皇。卽位于大和國橿原宮。開惠王十七年。唐寶有主明樂美御德之稱。卽
 釋天皇。一。是爲人皇第一代。元年爲紀元第一年。至今代。推世一百三十二代。算歲則一千五百六十二年。自時厥後。聖
 子神孫。世世相受。至第十六代應神天皇。卽位十六年。乙巳漢土西晉武帝。太康六年。三韓則新羅第十四世儒禮王元年。高句麗第十三世西川王
二十一年。後百濟第韓人來貢魯論十卷。史云。百濟王遣阿直岐來朝。阿直岐通曉經典。皇子稚郎子
八世實稱王二十年。帝曰。果有是哉。據神器。設名教。曰。聖之渾然如天者。仁也。劍之斷物制宜者。義也。
 鏡之正邪自明者。信也。比及通好隋唐。尊崇儒術。釋奠先聖。益施其教。愈弘其道。遂
 以仁義。爲脩身治國之大本。而尙視百工技藝之不足以扶翼政教。博搜海外各國。取
 長補短。文物具備。寢賡乎進。未嘗休也。至今代。軫念臣民。逐末忘本。乃敕大小學校。
 曰。朕惟我皇祖皇宗。肇國宏遠。樹德深厚。我臣民克孝克忠。億兆一心。世濟厥美。是
 我國體精華。而教育淵源。亦實存于此。伏惟道者。一而已矣。何有東西相異之理。譬
 猶日月之麗於天。有人于斯。指日月曰。是我有也。孰不笑其愚哉。夫我邦之於漢土。

人同其種。書同其文。而唯異其國體。與文學耳。今試舉其一端。帝王則曰唐虞。曰三代。詩書則有火於秦。有黃老於漢。每遇革命。斯道漸衰。其學乃變。或喜詩章。或究性理。或專修考據之學。徒誦其言。不行其道。我則不然。皇統連綿萬世一系。君義臣忠。父慈子孝。學主躬行實踐。故雖縱非無學術變遷。亦如漢土之迹。然二千年之久。未嘗有間鼎輕重等之徒也。或嘗問我國體。與國教。余乃對之曰。我邦上古。所以稱祥瑞者。以其夙有稻也。伊勢大阿、今當藏、神代聖勳諸書、今近取譬之。漢土有八寶飯。夫飯本也。松仁香蕈。笋尖。薺。薺瓜。蠶之類。末也。本末相須。搯梅變理。而後。初成其味之美也。苟捨其本。蕈。笋。尖。薺。薺。瓜。蠶之類。末也。本末相須。搯梅變理。而後。初成其味之美也。苟捨其本。而取其末。則失其本體。豈可謂之飯哉。我邦列聖。或崇儒術。或奉釋教。又尚遍求西洋學藝。猶飯之於松仁香蕈。笋尖。等八寶也。宋應星曰。五穀川麻。菽麥稷黍。獨遺稻者。以著書聖賢。起自西北也。余謂不然。非遺之也。漢土西北一帶地方。固無稻也。其有稻者。自南方始矣。而其輸種仔於彼者。卽我也。然則。我之輸於彼者。不啻稻種。聖

五
六

矣。

國號

我邦初稱瑞穗國。又稱大八洲。及皇祖卽位于大和。總稱全國曰大和。邦讀呀媽托。猶漢土天子。起於周。天下則曰周。起於漢。則曰漢也。而傳漢字之後。用日本二字。充之。又讀呀媽托。其加大字。尊之也。蓋我邦建國東方。居於震位。實陽氣之所發也。故致書於隣。曰。日出處天子。致書日沒處天子。無恙。日出處天子。卽謂日本天子也。尙書云。宅嵎夷。曰暘谷。暘明也。日出於谷。而天下明。亦日所出之謂。抑日本之稱。基於此云。後儒不察。妄爲之說曰。樂浪中有倭人。分百餘國。前漢書地理志曰日本國者。倭之別種也。唐書曰日本乃小國。爲倭所併。故冒其號。又曰。嵎夷。史記作郁夷。古郁與倭通。如周道倭遲。韓詩作郁夷。卽倭國也。水戶儒眞青山延子曰。東夷傳云。中元二年。

我垂仁天皇八十七年、倭奴國奉貢朝賀。使人自稱大夫、國之極南界也。又魏志倭人傳。

有伊都國。日本紀所謂伊都國。即今筑前怡土郡。是也。伊都倭奴。國音相通。據此。則

是時遣使者。伊都國造國造、後世所謂國守也。明矣。近世筑前人。有得古印者。文

曰委奴國王之印。蓋漢時之所授也。委倭古字通用。後世以倭爲音和。爲日本總稱。

誤也。余亦嘗謂凡曰倭者。盡係漢儒之所用。而非我之所稱也。且自阿漢。至隋唐。雖

交通稍開。然彼土人士。未有通我國地理者。只知有我九州。而不知有四國中國及

本洲也。明人常以九州一國等。爲日本天子。又稱我邊氓之侵彼疆者。曰倭寇。所謂倭

寇者。九州連逃之徒。尤居其多。故彼視九州。以爲日本全國。亦不足怪。明史云。平

秀吉。薩摩魚買子也。豐太閤、足張人、詳載本編卷國神社條下。嗚呼。何其妄哉。朱明之世。尙且爲然。況於隋

唐耶。又況於阿漢耶。然彼之稱曰倭者。亦非無故。讀書云。倭。烏禾切。女王國名。我

邦。固稱神國。太古曰天神之世。次曰地神之世。地神首。爲天照大神。即女神也。至人

皇之世。遣使于魏者。神后皇后之時也。神后攝政。二十八年、戊午、魏明帝、景初二年、魏致書志云。倭女王、卑彌呼、遣大夫詣京都貢獻。是也。

于隋者。推古天皇也。推古帝、八年、庚申、隋文帝、開皇二十年。是皆女帝也。於是。漢人或以謂日本世爲女王。

故用倭字乎。日本書紀纂疏云。舊說。吾邦之人。初入漢。漢人問謂汝國名如何。答曰。

謂吾國耶。漢人即取吾字之國訓。命之曰倭。要之。世俗以倭字。爲同於大和。尤非也。

青山氏說。先獲我心者。今不復發焉。

國疆

我大日本帝國。在於亞細亞洲域。東南控太平洋。西北隔海。接於韓。潛俄二國境。周

圍七千零二十九里。面積。二萬四千七百九十四方里。我一里。六倍於舊程一里。故七千里。

許。莊子曰。蜀之達南冥也。水陸三千里。搏扶搖而上。而其國土成於五大島。以及群小島嶼。五

大島者。本洲也。四國也。中國也。九州也。北海道也。千島也。群小島嶼者。謂佐渡。隱

岐。壹岐。對馬。淡路。伊豆。七島。小笠原。五島。平戶。天草。大嶋。種子島。屋久島。琉球。

臺灣澎湖等也。今近臺灣歷由歐、略叙其沿革、且隨琉球臺灣、往古爲我屬島、現行于世

降。中最隆。東北亞之。西南最纖。王化與西南。而漸東北。至成務天皇即位元年、乙亥、後漢順帝陽嘉四年、隔山河而分國縣。隨汗陌以定邑里。凡爲國。壹百四十四。文武天皇即位元年、丁酉、唐中宗嗣聖十四年

又因山海形勢。分爲六十六國。宋文博士日本國書、孰分彼土此土、相去幾咫尺爾。饒餘六十六州、砂渺三千餘里云、明生錄請六十六州王二姓、千年猶效滅寇

曰山城。大和。河內。和泉。菟津。凡五州。稱畿內。神武天皇即位大和以還。列世天子。大抵奠都于此。畿內之南得國八。曰播磨。美作。備前。備中。備後。安藝。周防。長門。稱

山陽道。其北得國八。曰丹波。丹後。但馬。因幡。伯耆。出雲。石見。隱岐。稱山陰道。大和之南。得國一。曰紀伊。紀伊之西北海。得國一。曰淡路。其西南得國四。即四國也。曰

阿波。讚岐。土佐。伊豫。合稱南海道。南海之西。得國九。即九州也。曰豐前。豐後。筑前。筑後。肥前。肥後。日向。大隅。薩摩。稱西海道。及桓武天皇。定都山城。即位元年、甲戌、貞觀元年、

山城之背。緣北海而東北上。得國七。曰若狹。越前。加賀。能登。越中。越後。佐渡。稱北

陸道。自大和。緣南海而東上。得國十五。曰伊賀。伊勢。志摩。尾張。參河。遠江。駿河。甲斐。伊豆。相模。武藏。上總。下總。安房。常陸。稱東海道。自其北東上。定國八。曰近江。美濃。飛騨。信濃。上野。下野。陸奥。出羽。稱東山道。明治元年。清梅宗治七年戊辰分陸奥爲五國。

曰磐城。岩代。陸前。陸中。陸奥。又分出羽爲二。曰羽前。羽後。二年。置北海道。分蝦夷地。爲十國。曰渡島。後志。石狩。天塩。北見。膽振。日高。十勝。釧路。根室。於是。一畿八

道。爲國八十五。爲郡六百七拾貳。封建制廢。郡縣治興。所謂行政區劃者。則三府。一廳。四十三縣也。府縣置知事。廳乃長官。並皆統轄國郡政治。隸於內務省。二十八年。

臺灣一島。復歸我版圖。特置總督府。自與三府。異矣。二十九年。置縣三。曰臺北。臺中。臺南。置支廳十又二。曰淡水。基隆。宜蘭。新竹。苗栗。鹿港。捕里社。嘉義。雲林。恒春。臺東。澎湖。縣隸於府。支廳屬於縣。二十年。除宜蘭。臺東。澎湖外。盡廢支廳。增設

新竹。嘉義。鳳山。三縣。更置辦務署七十八。自是厥後。王化漸治。政令益行。再改地方

新竹。嘉義。鳳山。三縣。更置辦務署七十八。自是厥後。王化漸治。政令益行。再改地方

官制。二十四年。廢縣置廳凡二十。曰臺北。基隆。新竹。深坑。桃仔園。苗栗。臺中。南投。彰化。斗六。嘉義。臺南。鳳山。蕃薯寮。鹽水港。阿猴。恒春。宜蘭。臺東。澎湖。直隸於總督府。燕欲使臺灣。如北海道應也。是爲國疆之大要。餘當與地圖略表對照矣。

始通漢土

往古邈矣。載籍不備。我之通漢土。未能詳知其始於何時也。然孔子既知東海。有君子國。故曰。君子居之。何陋之有。又曰。道不行矣。乘桴浮海。解者。援吳越春秋。言是孔子游于吳。東望日本之時也。故漢人稱我邦。曰君子國。尙矣。唐玄宗曰。禮義之國也。曲江集所載國書。或曰。是文。張九齡奏詔所作云。王維曰。海東諸國。日本爲大。服聖人之訓。有君子之風。正朔本乎夏時。衣裳同乎漢制。宋太宗曰。古之道存焉。雖然。而交通之散見史書。實始於秦云。神皇正統記云。秦始皇好仙。遣使求長生不死之藥。因贈五帝三王書。是爲第七代孝靈天皇七十二年事。秦始皇二十八年癸未歐陽修作日本刀歌云。傳聞其國居大島。土壤

二二

沃饒風俗好。其先徐福詐秦民。採藥淹留卽童老。百工五種與之居。至今器玩皆精巧。前朝朝貢屢往來。士人往往工詞藻。徐福往時書未焚。逸書百篇今猶存。文獻公全集元鄭思肖歌云。東方九夷倭一爾。海水截界自區宇。地形廣長數千里。風俗好佛頗富庶。土產甚夥并產馬。舶來中國通商旅。徐福廟前秦月寒。猶怨舊時嬴政苦。明太祖亦召我僭中津於莒武機。中津夢也。國師弟子詳載本編。問徐福事。中津賦詩以答。曰。熊野峯前徐福祠。滿山藥草雨餘肥。只今海上波濤穩。萬里好風須早歸。太祖喜。賡其韻曰。熊野峯前血食祠。松根琥珀亦應肥。昔時徐福求仙藥。直到如今竟不歸。宋濂爲跋其詩文。又豐存叔作謙齋記曰。徐市避秦航海。携詩書以去。實出坑焚之前。歐陽公所謂令嚴不許傳中國者。是也。近世有陳資齋者。曰。日本人皆覆姓。單姓者。徐福配合之童男女也。徐福所居之地名徐家村。其塚在熊指山下。嶺要之。謎家徐福之來。固無可疑。而其來也。猶孔子乘桴浮海乎。蓋徐福豫知秦之不可永保天下。藉口仙藥。以謀飛遁也。

至其曰詐秦民。及單姓者。徐福配合之童男女也。未讀我書者之言。不足深咎。我邦。

有姓氏錄者。甄別姓氏。分爲三。一曰神別。天神之後也。二曰皇別。出自皇族者也。三

曰蕃別。謂漢韓歸化人等後也。姓秦者。卽其一也。又古語拾遺云。秦公祖弓月。率百

廿縣民歸化。秦酒公娶秦氏。掌機織事。故秦讀曰哈打。謂機也。詳載本篇太秦廣隆寺條

卽者。刊行春秋左傳校本。故單姓者。豈止徐福後也哉。熊指。卽熊野誤。而徐福墓。在紀伊國。東牟婁

郡新宮東。詳載本篇高野山條下。又無徐家村名陳氏之言。盡出謠傳。然德川氏之初。明末

盛儒者心醉漢學。爭做其俗。惡我單姓。改爲單姓。秋生徂徠。字曰茂卿。乃省物部姓。

曰物茂卿。至於其甚。則不敢娶我國體。以我國祖。爲吳泰伯後裔。林氏所著本朝通鑑猶今代

汨沒西學者。動輒說歐米文化。而不復以我道。介於其懷也。是古今學士之通弊也。

嗚呼。博覽東西之群籍。深察世界之大勢。辨內外。量輕重。明大義。正名分。真能講究

聖賢正道者。方今天下。果有幾人乎。

始通三韓

朝鮮之於我。僅隔一葦帶水耳。故其所關係。自古尤密矣。史云。崇神天皇。六十五年。

戊子。漢元帝竟寧元年任那國始入貢。然朝鮮史籍。無任那國。獨有加倭國。屬今慶尚道。余嘗

作任那辨。按查古今地勢。論斷彼所謂伽倭國。卽爲我所謂任那國。及後讀高句麗古

碑。果有追至任那加羅句。音友中村伯賢著高句麗古碑攷。曰高句麗廣開土王碑者。在鴨綠水北

有文字。大字深刻。字體奇古。類漢隸。而南方者。凡十有一行。西者十行。北者十有三行。東者九行。總爲

存片形者十有二字。近者。清國旅京鎮將。遣工打場。明歲未就。會有我陸軍員弁。巡遊遼瀋。披金搜之。歸而納於秘閣。瑤幅在博物館。好古之士。因得觀之。云云。又古碑百濟作百殘。於是。益信

我史之正。而喜余見之不差也。蓋自任那國一入貢後。新羅百濟高麗。無歲不來朝。

至仲哀天皇。後漢書。徵帝征服三韓。當是之時。三韓實爲我國國。後漢書云。韓有三種。曰馬韓。辰

北與樂浪。南與浞婁。然我所謂三韓。謂新羅百濟高麗也。我不獨載之史冊。古碑云。倭以辛卯年。來渡海。破百殘新羅。

以爲臣民。天下郡國利病書亦云。日本國有五十餘國。如新羅百濟。皆屬焉。又與

地勝覽云。濟州本耽羅國。耽羅國記云。厥初有三神人從地滾出。曰夏乙那。高乙那。夫乙那。日遊獵荒僻。皮衣肉食。一日。見紅帶紫衣人。載青衣處女三。及駒犢五。種。航海而至。曰。我日本國使也。吾王生三女。知西海中。降神子三人。將開國。而無匹。故送此三女。二那以歲次。分娶之。播五穀。收駒犢。日就繁庶。高乙那十二代孫高厚。高消。昆弟二人。造舟渡海。泊於耽津。時新羅國稱極盛焉。太史奏客星見南方。異國人來之象也。及厚等至。王嘉之。稱厚曰星主。以其動星象也。令消出袴下。愛如己子。稱曰王子。又號其季。曰都內。國號耽羅。今濟州收鎮山北麓。有毛興穴。即三乙那湧出處也。徵諸我史。往古。有素盞尊渡韓等事迹。然則。當時我邦之於三韓。豈止屬國云哉。明儒或曰。日本被箕子之化。或曰。予惟日域。本箕子之遺。嗟夫妄誕之言。今不辯焉。而自明矣。後世李氏朝鮮第十世主。曰康靖王。我文明三年辛卯。即明成化七年。宰相申叔舟將死。王問其所欲言。對曰。請勿與日本失和矣。叔舟之言。呼亦偉矣。東國記。叔舟著。今距其

二五
二天

文學宗教

國也。豈獨一葦帶水之邦也哉。留心當世者。蓋少鑑叔舟之言焉。轍曰。輔車相依。文曰。同文同種。而其心苟存猜疑。不推誠締交。則世界各國。盡其敵國間。惴惴焉。唯不奉事夫之道。是懼。抑以接其壤。親之乎。又以隔其海。疎之乎。開口死。既逾四百餘年。其間。失和則其國危焉。不失和則其國安焉。夫朝鮮介在二大強我邦固以武與矣。而大義存焉。故又稱尚義尚武之國也。夫既曰國則有道。有道則有文。文者。載道之具。世界各國。孰謂有無道無文之國哉。我道初稱神道。文則有神代文字。假名文字之類。然我邦之以文學教化。潤色政法者。始於得經秦韓。終於通好隋唐。而集大成之者。乃有儒教與佛法也。以是。後世總稱神儒佛三道。寶字記云。日本初經。後頗重儒事。有好學館文者。尤信佛法。有五經書。及佛蓋百濟初貢魯論。皇子稚郎子好學。白居易集。此記頗得真。然曰無文字者。亦未通我國情也。百濟又獻金銅博通墳典。大興儒教。後閱二百六十八年。欽明帝之時。即位十二年壬申。梁元帝永聖元年。

佛像及幡蓋經論。上表。讚述其功德無量。詔下群臣。議之。皆奏。不宜禮也。獨大臣

蘇我稻日尊崇之。厩戶皇子。亦喜讀法華勝蔓二經。有所得焉。藉以定憲法。設制度。

又創建寺觀於諸郡國。號國分寺。厩戶皇子。世所謂聖德太子也。後又開五十六年。

推古帝。始遣使于隋。既而隋亡唐興。更置遣唐使。當是之時。留學生。及僧侶。游學于

唐者。大抵無虛歲。其行也。解纜浪華。即今取途三韓。越渤海。今所謂遼。過登萊。今遼東

二府。遂至長安。今陝西。其歸朝也。交說漢士文物之美。今引隋書。彼此對照以供參考。曰。文林

國。以爲吳州。疑不能明也。又經十餘國。即今波斯國。又東至秦王府。又東至秦王國。謂今周防國。其人同於華

夏。爲吳州。疑不能明也。又經十餘國。即中國也。達海岸。即大阪也。自竹斯以東。皆同於倭。前

篇論之詳矣。世漸將至。王遣小德阿留登。從數百人。設義仗。鳥鼓角來迎。迎世漸于難波者。爲中臣

宮地麻呂。大河內藤手二人。然以其字音考之。余知阿留登爲阿部島也。而以飾船二十艘迎之新館。又進

大禮數多具。從二百餘騎郊勞。歌多屋即額田部比羅夫也。率飾騎七十五頭。迎於海石櫛市。既至。成都。

隋。隋使裴世清報之。世清將歸。復以妹子。爲大使。湖波雄成爲小使。學生高向玄理學問使南淵請安及

僧旻等八人從之。是也。又曰。唐貞觀五年。舒明帝三年辛卯。遣新州刺史高仁表。持節撫之。浮海數月。

方至。仁表無救遠之才。與其王爭禮。不宣朝命而還。仁表我史作表仁。朝廷貴其無禮。非此時也。又

曰。武后長安二年。遣其大臣朝臣真人。即栗田真人也。是爲我文武天皇大寶二年壬寅之歲。實方物。

真人猶中國地官俗書也。頗讀經史。解屬文。冠進德。其頂百花。分而四散。身服袈裟。以帛爲腰帶。容止

溫雅。朝廷異之。拜爲司膳員外郎。又曰。開元初。又遣使來朝。因請儒生授經。詔四門助教趙元獻。就講

經。手教之。乃遣元獻開府。以爲東脩之禮。題云白龜元年所得。錫賚諸市文籍。泛海而還。其偏使朝臣

仲滿察中國之風。因留不去。又曰。天寶末。衛尉少卿朝衡。即其國人。今按。朝臣仲滿。衛尉少卿朝衡本

是一人。即阿部仲滿呂也。仲滿仲滿呂之客。滿毓國音相通。仲滿呂爲留學生。至唐時年十六。我元正帝。

靈應二年。丙辰之秋。即唐玄宗開元四年也。後五十四年。至光仁帝。寶龜元年庚戌。即唐代宗太曆五年。

病卒。初族原遣前。使于唐。仲滿呂欲假歸。王維儲光義包信遺驛。皆賦詩贈之。既發。海上遇風。與弟河

船相失。漂泊安南。或傳。胡衡沒于海。李白廬詩哭之。久之。仲滿呂復歸長安云。胡又作娘。臨卒。代宗贈

使來真。我史亦曰唐使來朝。互相圖國視之。是皇家常例。不復足怪於是。自政法律令。至宮室

衣冠。盡倣唐制。官分文武。初有文臣武士之別。菅原清原大江諸氏。世掌學政。拜文

章明經諸博士。而後世儒家。講經世學者。鮮矣。屬文賦詩。應酬唱和。互相誇耀。翔翔

朝廷之上。無復以天下爲已任也。而奉佛法者。或奉天台。或唱真言。切說福田利益。

奔走於朝野間。拓山架水。興業殖產。天子尊奉之。爲建伽藍。士民歸依之。喜捨淨財。

佛法漸盛。儒教稍衰。而武士者。武斷鄉曲。除暴平亂。當是之時。天子擁虛器。公卿耽

詩歌。舉朝流於文弱。軍國政事。專委武門。於是。封建制。成。朝廷遣使漢韓等典。絕矣。

源賴朝開府於鎌倉。三世而亡。北條氏九世居執權職。自宋孝宗淳熙十三年、至元順宗元統元年、凡百四十八年足利氏十三世拜將軍職。自元順宗至元四年、至明神宗萬曆元年、凡二百三十六年此間。禪宗尤盛行于世矣。僧侶參預機務。論議政事。此時、親鸞日蓮二僧、前後相繼而起、不喜渡海、遠求佛蹟、特創日本宗旨、詳載本編各條故北條足利二氏之遣使漢土。每用此輩。儒教亦歸其手。足利學校、金澤文庫之類。實建於此時云。北條時宗之防禦元寇、以及足利學校等、詳本編各條中抑又儒教不獨爲爾。先是。僧徒唱本地垂迹說。以我國神。爲諸佛出現。曰八幡大菩薩。曰稻荷大明神。曰熊野大權現。是類。不勝枚舉。則曰。其本則三世諸如來。土地大隨隱也。於是。神道云者。萎靡不振。縱藉祝史之口。以傳其一端耳。足利氏衰。群雄割據諸國。稱戰國之世。周防大內氏、出雲尼子氏、遣使朝鮮、而九州悍猛之民、遠征漢土、彼所謂倭王倭寇是也織田豐臣二氏。相繼而起。大亂初平。自明神宗萬曆貳年甲戌、至三十年壬寅凡、貳十九年。時天主教。亦入自西洋。然我邦益得講究築城放債。天文水利之術者。未必不由於此徒之力也。我邦城機、稱天主教、始於織田氏築城安土云、九州諸侯。多奉其教者。或將圖不軌也。觀光日本云、阿母連國王、即大村氏、阿打母國、即大友氏、斐蘭采、即平戶松浦氏、阿拉瑪王、即有馬氏、亞瑪故撤島主

(即天章氏)撤瑪瑪國人(即薩摩國也)是等諸氏、皆九州攸伯也、而遠各撤瑪木一機子、忽幣大寶、立爲總王天主教、初不禁止、後即下令、廢禁奉教、定以十字之刑、橫福撒瑪及登王位、後發慮不堪、國滅聖教、凡奉教者、不歸親疏、不分貴賤、強之背教、不背者、問罪珍贖、別中倘有教友、者即查明、以便拘拿究辦、時查得十六大臣云、其日逐各撒瑪者、即大開機、而謂我豐臣秀吉也、我邦有開白機、關白致仕、乃稱大開、機字亦俗稱、擅言閣下閣下、機福即大夫乎、然據伐高麗等事、則知其與遠各同人也、今道覽其書、如混說羅豐德三氏時代者、蓋侯伯之奉教者、欲藉以舉兵、期天下也、高山長房、稱右近、歷事織豐二氏、見禁令而駭、乃遁逃海外、避其嫌、不知所終、若夫天章之亂、當在本編詳說

及我德川氏起、東照公以賢明之資。考既往察將來。遠謀深慮。尤重儒術。召聘藤原惺窩林羅山等。講經讀史。刻書行世。儒教亦大興矣。然於佛教。不肯度外視之。如僧天海。常參帷幕。旣嚴海禁。獨允准漢士荷蘭二國商船。往來貿易於長崎港。而令西洋人無復至我國界。只恐布其教也。旣公老子駿河。屢召蘭人。親問海外各國之狀勢。以供政教之資。蓋近世洋學之行。實胚胎于此。第二世台德公襲職。更禁天主教。驅逐其徒。第三世大猷公之時。教徒作亂于嶋原。公大怒。遣兵討滅之。令無遺孽。第五世常憲公。右文之主也。創建聖廟。又設學校。養材於此。取士於此。諸侯伯亦爭倣之。天下翕然。四方嚮學。中江藤樹野中兼山伊東

仁齋。新井白石。熊澤蕃山。荻生徂徠。柴野栗山。鴻儒碩學。彬彬輩出。二百六十四年

于茲。或曰。不敢讓於彼康熙乾隆之盛也。蓋非誣言。明治中興。王政復古。百度維新。廢封建爲郡縣。詔不使神佛混淆焉。學制亦屢變矣。乃分學校。爲大中小。以謀教育。之治於天下。而宗教則任於各自信仰。於是。萬機整然。全歸畫一。是爲我文學宗教。

變遷推移之大要。雖然。我邦亘千萬世。終始貫通。未嘗泯滅者。獨有東方一大正氣焉耳。卽是義也。何關於儒釋與天主教哉。(元丁復扶桑行)扶桑之國人。寧殺不受辱。豈不謂死亦何短。生亦何長。身在獲所耻。身死獲不忘。

江戸處士清水永城。名正德。字修藏。赤城其號。又泖菴。隱居講道。終生不仕。四男一女。伯曰正巡。繼家。仲曰正則。善槍劍法。其子正煥。事德川氏。叔曰正順。冒大橋氏。明治廿

四年。爵從四位。季曰正春。亦事德川氏。女適村田氏。淡菴漫錄云。遭遇明主。輔弼廟謨。用其道。以康濟天下。此學問之極功。學者之宿志。斯爲遂矣。然是古今希有之爭。于載奇遇。不可必得也。其次則讀先王之書。行聖人之教。以天下之善人爲友。聞天下之善言爲樂。取詩姬文。以爲胸懷。此人生一大快事。吾亦得與焉。況風月召我以煙景。山水假我以消音。行無所擇。止無所抗。以此終吾生。不知榮枯得失爲何等物也。總可附之一笑。又曰。大丈夫志乎學者。雖無其位。固當以天下事。爲己任也。如此。則其學不安乎小成矣。然亦不可有奇激釣譽響之行也。古語云。士大夫當有憂國之心。不富有憂國之語。元丁參云。士無求用於世。惟求無風於世。余居常思此二語。以自勵。可謂至言矣。以儒爲業。又善兵法。每誡子弟曰。儒者濡也。濡萬物也。

故退則獨善其身。進則兼濟天下。然凡亂國家者。亦儒生也。無他。空論其文。不實行

其道也。若彼趙宋。尤爲其顯著矣。嗚呼。方今之時。豈止趙宋哉。清韓志士。亦不可不深察焉。夫儒生之固守舊株者。不喜脩新智者。脩新智者銳進。守舊株者姑息。故方

其去舊就新。取長捨短。擬議政法。討論學術之時。枘鑿不相納。意思相背馳。守舊者在朝。則脩新者不被用。必降在野。在野則不平之氣。鬱勃四方。凝結生不平之徒也。

於是乎。朋黨起。朋黨起則軋轢生。軋轢生則人人唯知有其黨。不知有其國。爭權競勢。上下離亂。內訌之不能禁。外侮之不能禦。而後國家危焉。余又嘗聞之西儒。曰。俄國不喜其國人之游學海外。通觀世勢。歸朝之後。黨與結托也。然而志士出游四方者。歲不下數百人。嗚呼。閉鎖港口。不敢交通各國。獨守其國。則止。苟不然。將有大成

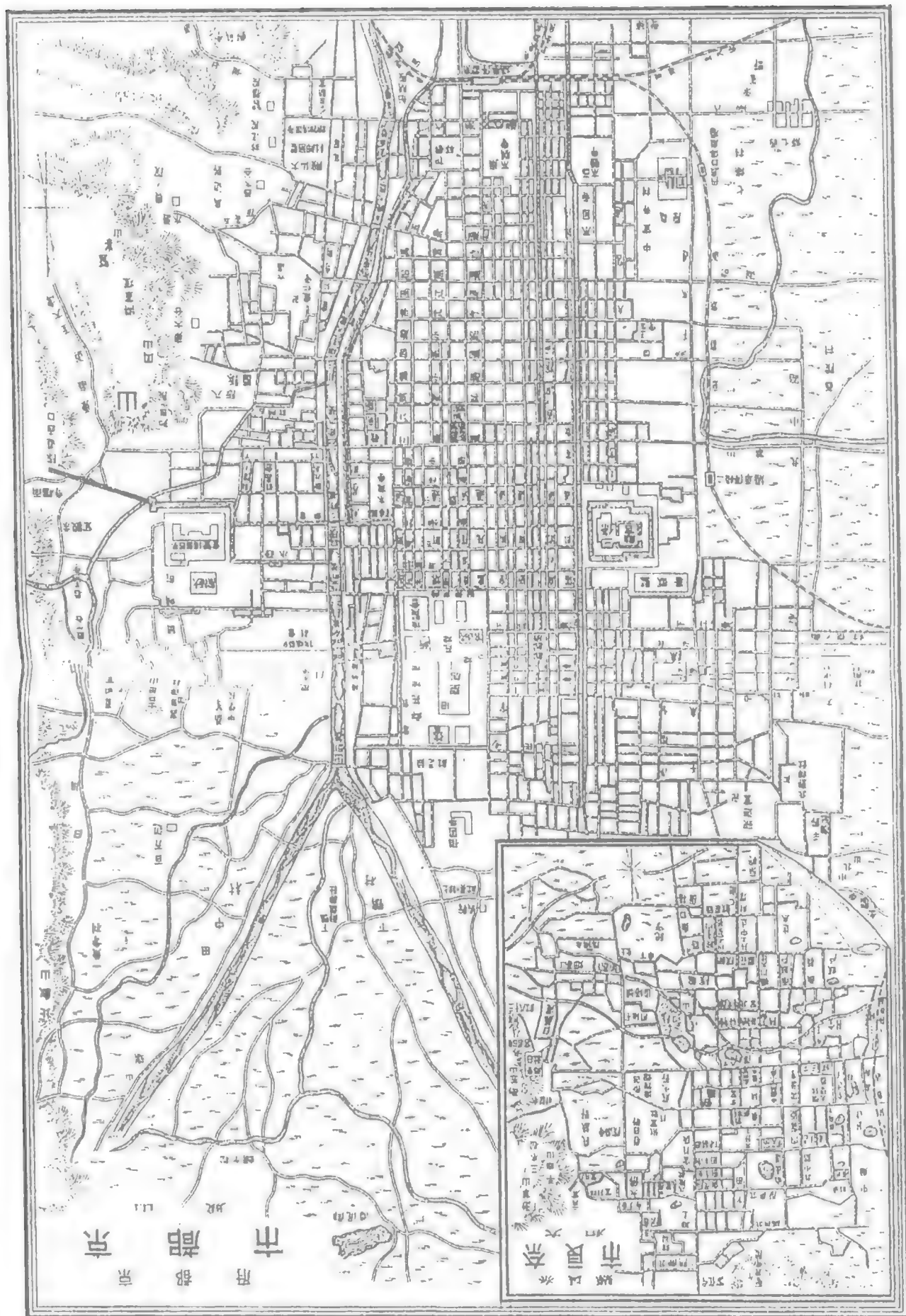
之國。豈得如此。況於崇尊孔子之國耶。我邦。明治之初。守舊者退。脩新者進。頃之。新舊交用。遂成今日文明之昭代。雖固出於國體之異乎各國。與列聖德澤。入人之深

京都府

夫三府者。謂東京府。京都府。大阪府也。世有爲說者。曰。東京。政治之地也。京都。歷史之地也。大阪。商工之地也。而東京現爲首都。宜先起筆於此耳。然本編今特所以京都爲先。大阪爲次。東京亦次之。事據五畿八道之舊例。而不遵照行政區域者。無他。京都。歷代都邑之遺蹟。多存。大阪則設第五回萬國博覽會之處所。且消遣游客。自西晉東。探勝沿途。準據舊例。尤爲便宜。故有斯變通耳。讀者諒諸。

粵警。人皇第五十代。桓武天皇。延曆二年。貞德宗興元元年甲子遷都山背。經營官城。於長岡上。而土地狹隘。不足以表萬乘之尊也。和氣清麻呂奏請更相葛野地方。十二年。貞元九年癸酉正月十五日。勅大納言藤原小黒麻呂。左大辨紀古佐美。及沙門賢琛。前往踏查。旣置造官職。庶民子來。宮殿漸成。十二年。貞元十年甲戌十月廿二日。自長岡。遷新都。十二月八日。詔曰。此國形勢。山河襟帶。自然成城。宜改山背爲山城也。子來之民。謳歌之徒。

也。然亦焉知無不由於宿儒諸生。夙奉名教。明大義正名分者之多也哉。孔子者。大聖人也。而問禮於老子。又曰。乘殷駟。服周冕。樂則韶舞。又曰。殷因於夏禮。所損益。可知也。周因於殷禮。所損益。可知也。然則。能觀世變。與之推移者。是之謂聖人乎。宋儒喜講性理學。曰。變化氣質。其所謂變化者。豈獨人生自脩之法哉。國家亦爲然矣。唯要不失其本性也。泰山不讓土壤。故大。河海不擇細流。故深。方今學者。不可無此氣概也。夫是古非今。實學者之通弊也。可不戒焉哉。余故曰。不以其人。而廢其言。可矣。



華。踰鴨川而東漸。於是京白河之稱。起矣。藤原氏衰。源平二氏迭興。兵亂交起。平氏奏請遷都攝津福原之後。延曆舊規。亦云壞廢。旣而平僣源起。有承久之役。北條氏置探題于河六波羅。探題、官名、有六波羅探題、九州探題等有南北朝之戰。足利氏置幕府于室町。應仁亂後。海內分裂。群雄角逐。龍戰虎鬪。爭鹿中原。京師每爲其要衝。第宅寺觀。大抵皆摧兵燹。遂失昔日平安之觀。壹百年于茲。織田豐臣二氏。屢脩理皇城等。大興土工。整草坊市。王公之宮。諸侯之邸。擁其四邊。商賈輻輳。而德川氏。開府江戸。尤致力於京師。宮殿寺閣。益加宏壯。更置京都所司代。所司代、官名、市尹之類施安民勸業之政。天明八年。三月戊申。正月。京師大火。延燒皇城。光格天皇。詔德川第十一世將軍。事倣古制。再造宮殿。老中職松平定信。董役。儒員柴彥輔亦與焉。二年而成。天皇大喜。賜御製詩。曰。遙慕周文囿。不羨漢武臺。蒼章一是幸。新築本非催。百工忽告竣。整駕自東回。拭目向城池。城池亦善哉。兩殿應規矩。四門綸崔嵬。燕雀繞檐集。櫻橘挾階栽。豈其爲

異口同辭。稱平安京。今當從之。明年。大極殿成。十五年。寶元二年西子正月朔旦。天皇御太極殿。百官朝賀。今潮查都城疆域。北自一條。南至九條。東自京極。西至西京極。南北壹千七百五十三丈。東西壹千五百零四丈。正南設門。曰羅城門。四方築雉牆。開濠渠繞之。城中有堀川。大宮川。洞院川等。道路則東西大路。分爲九條。小路二十又六。南北一貫。以朱雀大路。劃爲中央道。廣二十八丈。其東曰左京。其西曰右京。而京亦各分大路四條。小路十一。其坊三。曰北邊。桃花。銅駝。而京無復不異。其他。教業。永昌。宣風。淳風。安衆。崇仁。陶化。七坊。屬於左京。豐財。永寧。宣義。光德。毓助。延壽。開建。七坊。屬於右京。方四十丈爲町。四町爲保。四坊爲條。條有坊令。坊有坊長。專掌坊間庶務。東西有市司。司商賈事。又置左右京職。辦理都下一切事宜。防囑河使。掌治水工事。而命盜逃姦。欺竊雜犯。盡歸彈正臺。及檢非違使。稽察處斷。凡三百年。平安之都。最極其盛。至藤原氏。以外戚擅政權。排造第宅。建立寺觀。平安之繁

逸豫。講禮共徘徊。委佩群僚會。將幣九州來。素心既已足。起臥感鹽梅。欣然歌思動。

乙夜薄言載。後閱六十二年。宮中失火。安政三年。南文宗咸豐六年丙辰幕府奉旨。復再經營之。

遂致中興大業。德川第十五世將軍納旌鉞。天子躬親政。明治元年。明治同治七年戊辰八月廿

七日。今上天皇。行即位禮。今紫宸殿。是也。於職懸哉。於職盛哉。明年。遷都江戶。改

名東京。蓋自延曆甲戌。建平安京。至於明治己巳。實爲壹千零七十六年矣。餘詳本

編各條。

山城讀曰呀媽所羅 往昔作山代。又山背。後改今字。東南接近江伊賀大和。西北界河內攝

津丹波。二面皆山。蜿蜒逶迤。繞東西北西。唯缺南方一面。土地平坦而膏腴也。全國

十八郡。戶數。拾壹萬零九百又奇。人口四拾九萬七千貳百餘名。

京都市讀曰氣約屋托 市役所。在寺町通御池北。今世。施行市町村制。蓋大於村者。謂之

町。大於町者。謂之市。而京都市委廣。東西城里。或町。南北壹里又半。分爲二區。

三條通北通者。謂通 日上京區。戶數貳萬七千七百又奇。人口拾壹萬九千三百餘

名。其南曰下京區。戶數二萬六千八百又奇。人口拾四萬壹千七百餘名。是其大

略也。後倣此（阮鵬坦莊詩）莫都千秋又萬秋。西人莫說夏商周。叙山北峙皇基固。鴨水南通王化

流。瀟地伽羅多古跡。一天煙雨入新愁。佛威更助昇平觀。輻輳扶桑六十州。（明宋

懷詩）伊水西流曲似環。宮闕映龍

山。六十六州王一姓。千年猶效漢衣冠。

御苑內 舊稱御樂地內。築堤劃地之謂。往時。諸王大臣第宅建焉。明治遷都之後。更

爲遊園。栽培樹木。總稱御苑內。東西六町。南北拾壹町。而積貳拾五萬坪許。地積六

日拜。我六尺即滅。苑南。池沼橋梁。別爲一佳境者。卽九條公之第趾。（明宋陳詩）藤橋源中

度三十六尺餘也。苑南。池沼橋梁。別爲一佳境者。卽九條公之第趾。（明宋陳詩）藤橋源中

內裏 又曰禁裏。謂皇居也。在御苑中央。週圍女牆門五。南曰建禮。文稱南門。正門也。東曰建

春。又曰之西曰宣秋。又曰卿門曰談天。俗稱登北曰朝平。紫宸殿。在建禮門內。更繞女牆門

三。曰承明。曰日華。曰月華。從此三門。以至階下。清涼殿。常御殿。小御所。御學問

所。准后御殿等。在焉。今不能詳記之。(樂栗山詩)上苑西風送佳春、承明門外月如霜、何人今夜長生殿、一曲霓裳夢御欄。大宮御所。皇太后宮殿。在內裏東南。仙洞御所。往時。上皇宮殿。在大宮御所南。安政元年。成慶四年罹災。池沼園林。幽邃閑雅。今尚存。

祐井 在朔平門東北。舊屬公卿中山氏邸。今上降誕處所。清泉湧出。號曰祐井。蓋據皇儲時稱祐官。前京都府知事橫村正直君建碑。詳記其事。以傳不朽。

相國寺 號萬年山。又稱相國奉天禪寺。在今出川御門北。臨濟派之本山而爲京都五山第二。至德元年。明太祖洪武十七年甲子。足利義滿所創建也。慈濟寺。金命僧妙葩爲其開祖。妙葩固辭。追請其師夢想國師。爲開山第一世。而自居第二世。妙葩號春屋禪師。後小松天皇崇信甚厚。賜號曰智覺普明國師。任諸山僧錄司。僧錄司之職。始於此。嘉慶二年。八月十三日寂。年八十二。明洪武廿一年戊辰寺屢罹災。然其什寶。存至今。亦不少。陸信忠筆十六羅漢。米南宮墨蹟。奉加帳壹卷。異國通船印鑑十三通。是其

尤也。明宋疎有日本夢念正宗普濟國師碑銘。今摘其要。以供參考。曰。日本有高行僧夢想禪師。諱智隆。姓源氏。勢州人。字多天皇九世孫。父某。母某氏。無嗣。默禱觀音大士。夢吞金色光而孕。歷十又三月始生。九歲出家。十八爲大僧。禮慈觀律師。受具足戒。尋學嚴密二教。既夢遊中國。採山石頭刻。一彫肩侍達摩像授之。曰。爾善事之。既聚。拈髭嘆曰。洞明吾本心者。其唯爾觀乎。遂更名陳石。字夢想。賜無礙幢公於建仁寺。云云。其嗣法土音。天龍曰志玄。曰妙葩。建長曰慈永。南

餘載各寺條下。又明使僧道學。和中建詩序云。建文壬午。秋。余使日本。一見萬年山中。沐以舊游爲懷。數相詢。云云。此所謂萬年山中者。即相國禪寺也。又(祝尤明詩序)答日本使姓橋名省佐。相國寺僧。曰。日遠來處幾何時。聞說占申復到寅。遙仰北辰趨常座。卻經南劍駐行塵。詩名愧動難林客。國歸欣養嶺師。回首山川運渺漭。只看明月懸相思。

惺窩先生墓 墓在塔頭林光院。先生名肅。字欽夫。惺窩其號也。細野氏。下冷泉爲純卿之子。幼好學。長不倦。戰國之末。天下無復說道者。先生首唱宋儒性理學。樹羅山。其高足弟子也。世稱儒家中興祖。惺窩文集刊行于世。元和五年。明神宗萬曆四十九年十二月卒。年五十九。明治廿六年。贈正四位。

同志社 在相國寺門前。新島襄所創設也。襄。雅馬縣人。夙游米國。奉耶穌教。多歷年所。既歸本朝。與內外同志謀。私立普通神學。政法等各學校。因稱同志社。社者。

文社學社之義也。

上御靈神社 在鞍馬口。神社者。祠廟也。御靈者。謂往昔諸王大臣。冤枉就死。爲祟

之神靈也。有上下二社。下御靈社。在寺町通丸太町南。其所奉祀之神。曰早良親

王。曰伊豫親王。曰藤原吉子。曰文屋宮田麻呂。曰橘逸勢。曰藤原廣嗣。曰吉備真

備。曰菅原道真。朱雀天皇。天慶二年。晉高祖天福勸請建立云。逸勢善書。與備博學。皆留

學之神。事詳載北野神社條下。

廬山寺 在寺町廣小路南。初在安居院大宮。今廬山寺町。是也。開祖曰元三大師。

兼學台密淨律四宗。稱與願金剛院。中興住持。曰住心。時有一僧來。曰我唐僧惠

遠也。乃書廬山二字。示之。因更稱廬山天台講寺。有巨勢金剛筆普賢像。張思恭

筆觀音像等什寶。(唯實詩)拾得自身無價寶、視々降雨不須求、世間聚見都難並、倒用拈拈得

道經靈山、以字見歸、予字之曰大用、明處吾宗之佛法人也、就書偈

以褒進、是爲永樂二年、正月十二日、咄賀、號惟菴、時居竺住山云、

梨木神社 奉祀贈右大臣從一位藤原實萬公之處。公三條氏。夙懷尊王太志。竊謀

抑壓幕府。連罹奇禍。未嘗屈撓。遂爲明治中興之礎。嗣曰實美公。克繼父志。柿化

鷗業。世稱明治第一勳臣。明治十八年。建祠于梨木町。三條氏邸址。因稱梨木神

社。

護王神社 在烏丸通下長者町。奉祀贈正一位和氣清麻呂。及贈太政大臣藤原百

川兩公之處。嘉永四年。元年辛亥。賜號護王大明神。初在高雄山神祇寺。明治七

年。清穆宗同治十三年甲戌。十二月。勅列別格官幣社。遷座於此。二公誠忠大節。赫耀青史。今不

復贅。(梁川星巖詩)敬公天日不能中、公乃當朝第一功、千歲君臣存遺義、優渥詔下表誠忠、

革堂 在寺町通竹屋町。寺號行願。屬延曆寺。開祖曰行圓上人。九州人。遊京師。每

戴寶冠。服革衣。世呼革上人。其堂曰革堂。安置十一面觀音像。長八尺許。初在

一條通新町西。今革堂町是也。

飯田忠彥墓 在河原町二條北。專修寺里坊。忠彥字子邦。周防人。少通經史。兼修武藝。仕有栖川王府。擢爲侍臣。著日本野史貳百九十餘卷。以繼水戸大日本史萬延初。咸豐年爲額府所嫌忌。被囚。既放。又連坐梅田雲濱事。忠彥憤慨屢腹而死。時文久元年。咸豐五月二十七日也。年六十三。明治二十四年四月。附正四位。

本能寺 在寺町通押小路南。日蓮宗。勝劣派之本山。開祖曰日隆。又號慶林坊。初妙顯寺僧日齊。始興勝劣派。至日隆。更建一寺。爲勝劣派本山。日蓮宗又稱法華宗。日蓮上人之所首唱也。與真宗、盛行于天下、詳載本國寺條下。往昔。寺在六角南池小路東。今本能寺町。是也。織田右府之遇弒也。天正十年壬午六月、一明萬曆十年。織田信長次本能寺。其臣明智光秀襲之。詳載建國神社條下。即是處也。寺什有張瑞圖七絕等。

關川 又作加茂川。其源有三。一發百井嶺。過大原入瀬高野。一發小鹽山。過鞍馬貴船。一發丹波國境。東流至中津川。會貴船川。更至加茂。相合高野川。因稱河合。或曰糾川。又自二條三條至大和橋西。復合白川。自四條五條七條。至栲川。更相

三三

三四

漚會。流至淀橋下流。合宇治川。遂經大阪入海。厥水消冷。自古有名。又每年盛夏炎熱。設涼棚於四條橋下。稱曰四條納涼。（後修松陰詩）熱鬧笙歌夾岸聲。紅燈倒棚。夜三更。可據鴨子川頭月。開却涼篷幾夜明。三條大橋 長五十六間。幅四間又半。六尺曰一間。渡三丈六尺。天正十八年。明萬曆十八年庚寅。豐太閣命增田長盛等。架之。橋欄柱頭。有所謂擬寶珠者。銘云磐石之礎。入地五尋。鑄造之。往時。此地爲往來交通之要衝。故建一大標木。揭示至於傍近諸國之里程。分京都於上下兩區。亦是爲經界。而客舍之多。蓋莫過於此地。

疏水運河 明治十八年。光緒十四年甲申一月。起工。二十五年。竣工。凡閱八年。又新開運河。至二十七年。全成。是爲京都一大事業。實係前京都府知事北垣國道君之所唱導。經畫。今摘記其要。曰。疏水運河云者。導引近江琵琶湖水。於京都市內也。山城近江。相距數里。大津市東北。有二保崎。穿山鑿巖。堀濠開隧。循三井寺山麓。至逢坂山。其長一千三百四十餘間。是爲第一隧。道。其西口。卽滋賀郡藤尾村也。自

藤尾村繞山。達山城曰岡山。是爲第二隧道。其長或千貳百七十二間餘。既過其隧而至南禪寺南。分爲二路。曰幹線。曰支線。幹線過寺前。西折過白河。自丸太町橋。南會鴨川。新運河。支線則循山北進。過若王子鹿谷淨土寺。至白川村。西過高野加茂川底。過京都市北。遂入堀川上流小川頭。隧道凡六。第一二三。屬幹線路。第四五六。屬支線路。幹線路。自二保崎。至鴨川東岸。長六千壹百零七間。支線路。自第四隧道北口。至小川頭。長四千零二十八間有奇。而其計利於今日。流澤於萬世者。舉其尤大者。六。曰。藉水力。用機器也。水力電氣。曰。便水利。行舟楫也。曰。偏僻郡邑。灌溉甚便也。字治紀伊愛宕葛野四郡地方是也。曰。設水碓於各處也。曰。市街引水。一則補井。一則供防火之用也。曰。掃除溝渠。常期清淨。不使濁氣浮動。以講衛生之道也。頃者。市民相謀。建議北垣君銅像。於此地方。以表其偉功。不亦宜哉。

帝國大學 在吉田町北。又稱京都帝國大學校。直隸文部省。係明治三十二年開設。

其各專門科學。不異於東京大學也。病院則在聖護院町。

大極殿 自桓武天皇延曆十三年。遷都平安。至明治廿八年。實爲壹千壹百年。於是。京都市民捐貲相謀。擬古大極殿。建之。有蒼龍樓。白虎樓。龍尾壇。應天門等。又稱紀念殿。欲永使後世不忘其遺澤流風焉耳。

平安神宮 在大極殿北。奉祀桓武天皇之處也。勅賜號平安神宮。列於官幣大社。按史。皇祖都于大和而還。列聖皆居奈良。世謂南都。至於天皇。始遷都於山城。稱長岡宮。今葛野郡上羽村。有長岡之宮。趾俗呼曰御所屋殿。時延曆二年也。唐貞元十三年。唐貞元十三年甲子。更大經始宮殿於其東方。十八年。落成。唐貞元十五年己卯。乃稱平安宮。勅賜神號。恭據此云。

聖護院 在聖護院町。初稱常光院。後改聖護院。天台宗。開祖曰智證大師。仁壽中。仁壽元年辛未。唐宣帝大中七年。唐宣帝大中七年。遊于唐。旣歸。建止觀堂。以繼其師最澄之志。又爲本院開祖寺條下。僧正增譽。住持此院。爲熊野三山別當職之後。法親王世襲住職。東堂天台修驗。

法。今乃廢矣。

金戒光明寺。在岡崎町。號紫雲山。淨土宗與西派之本山。開祖曰源空上人。美作人。父名時國。爲久米押領使。年甫九歲。爲僧。號法然房。年十八。登比叡山。從西塔黑谷慈眼房綴空。兼脩諸宗。有所自得。更名源空。承安五年。宋孝宗淳熙二年甲午三月。創唱淨土宗。時年四十二。時有紫色雲。起自石上。因爲山號。又初居西塔黑谷。後移於此。因稱新黑谷云。當是之時。天皇延見內殿。受一乘圓戒。由是。淨土念佛。大行於世。建曆貳年。宋寧宗嘉定五年壬申正月二十五日寂。年八十。後閱三百九十八年。元祿十年。正月。清聖祖康熙三十六年丁丑東山天皇。勅賜圓光大師。自時厥後。賜東漸豐成弘寬慈教等諡屢矣。寺中有鑿池鑿松。皆蓮生房之舊跡。蓮生房。俗姓熊谷。名直實。事源賴朝。有軍功。後削髮。爲源空弟子。又有昭堂。淺野長晟夫人德川氏之廟。夫人即東照公女。

西雲院 開祖曰宗嚴。朝鮮人也。文祿征韓之役。被虜。來于京師。爲僧。修淨土宗學。創建此寺。

山崎闇齋塾 名嘉。字敬義。又號垂加。京師人。初奉程朱之學。後又學神道於卜部氏。後世稱山崎派。門人甚多。沒見綱齋。佐藤直方。其高足弟子也。天和二年。清聖祖康熙廿一年壬戌九月十六日卒。年六十八。

真如堂 又稱鈴聲山。真正極樂寺。天台宗。屬延曆寺。開祖曰戒算上人。永觀二年。宋太宗雍熙元年甲申奏請白河離宮。更創寺觀。安置慈覺大師所作阿彌陀像。天喜元年。宋仁宗嘉祐五年正月廿七日。寂。年九十一。後屢移轉。又罹兵燹。寺什有張思恭筆普賢像。

大興寺 號靈芝山。俗曰芝藥師。藥師像。係運慶作。坐像長二尺五寸。十二神將。則立像。長三尺許。又有關羽像。世傳。足利尊氏。遣僧于元求百戰百勝之軍神。元乃贈此像云。

神樂岡 俗稱吉田山。南北四丁。文明十六年。明憲宗成化二十年甲辰卜部兼俱。初移齋場所於此。卜部氏世掌神祇之事。世稱神道家。齋場所者。即齋戒沐浴之處。

大元宮 茅茨蓋屋。擬上古式。扁額之大者。題曰。日高日宮。嵯峨天皇宸筆。其小者。曰大元宮。後土御門天皇宸筆。

八神殿 古者。所奉祀於神祇官之神。曰高皇產靈神。曰神皇產靈神。曰玉積產靈神。曰生產靈神。曰足產靈神。曰大宮寶神。曰大倉津神。曰事代主神。外宮崇。在八神殿西。內宮源。在其東。二宮扁額。係足利義政夫人藤原氏筆。名富日本國中總攝社。自山城國至對馬國。共計三千壹百三十貳社也。

第三高等學校 直隸文部省。明治廿二年。落成。時稱第三高等中學。二十七年。七月。更稱第二高等學校。教授專門學科。

銀閣寺 在淨土寺町。舊稱慈照寺。禪宗。屬相國寺。文明貳年。明憲宗成化六年庚寅。足利義政。

設別墅于此池。開池庭。與樓閣。閣二層。閣中用銀塗之。與其祖義滿所建之金閣。東西相對也。十一年。十一月。成化十五年。謫職其子義尚。而老。削髮爲僧。廣集書畫器玩于海外諸國。既薨。釋謚曰慈照院殿。以遺命。廢墅爲寺。追諡夢想國師。爲開祖。寺號乃取於其謚。義政者。足利氏第八世將軍也。歷致書朝鮮國王。又遣僧永富全密惠光等。求喜捨淨財。以及經典。後又遣使于明。僧妙茂爲正使。慶瑜副之。時文明七年。乙未。八月廿八日。即明成化十一年也。朝鮮國王李瑄奏登日本國殿下。與倭邦。雖阻沿海。世講隣好。自茲入即位。亟遣信使。益致殷勤。禮宣報聘。肆於年前冬。格月。遣命知中樞院事宋處俊。大護軍李宗賢。齋大藏經一部。法華經疏部云云。李瑄。即李氏。朝鮮第七世主。惠莊王也。義政又喜茶事。後世所謂抹茶式也。式亦始於禪僧。東求堂東有一室。爲義政茶宴之處。書畫庭園。及僧顯帶之慈照禪寺記等。今不載於此。宜就該寺。親見親聞焉耳。月待山 月待者。待月出之義。俗稱大文字山。以山面畫大字也。昔者。僧空海創造

靈封。開寺評。高閣相畫大字。林園一帶。自。時問遺靈極神妙。獨有消才勝祖宗。

之至中世絕。義政命相國寺僧橫川再造之。每年舊曆七月十六日。里人負薪登山。點火其上。燦然忽現大字。亦奇觀也。(昔川洪國詩)何人巧思蓋山成、村炬秋蟾一夕明、巨經飛丹光的歷、積巖焚翠勢嵒嶮、烟含遠影淨施水、雲伴昏黑隊風城、清霞由來片時散、空條孤月照三更、

南禪寺 在粟田口北。號瑞龍山。又稱太平興國南禪寺。臨濟派五山之第一。開祖

曰大明國師。名普門。號無闕。弘安年中。元世祖至元年間龜山上皇建離宮于此。怪物出沒。

詔陰陽頭卜之。曰。僧正道智。嘗住斯地。故爲祟耳。於是。明東福寺僧無闕禪之。

無闕率祖圓等二十八。禪坐宮中。凡九十日。怪則息矣。上皇嘆稱不措。遂廢離宮。

爲寺。無闕與祖圓并爲寺主。時永仁元年也。元至元十年癸巳後經六百年。有應仁之亂。罹

兵燹。不復存舊制也。而至近年。亦災。現有重修再建之事。其什資不鈔。李龍眠

筆文珠像。徽宗帝聖詔山水。趙子固墨竹。萬國禪睡鵬圖。圖立本筆觀音像。而

本邦古蹟。多在壁間。最勝光院。卽祀道智之處。道智。太政大臣藤原良經公子。

爲三井寺長吏。世稱駒僧正。是也。(賴山陽詩)第一橋頭雨後泥、村園門巷路東西、遇人休問南禪寺、一帶青松路不迷、今按南禪寺僧遊于

明考多矣、(王陽明)送日東正使于庵和尚歸國序)今有日本正使堆雲柱梧字子樵者、年踰十壽、不從爲學、領彼國王之命、來貢珍於大明、舟抵鄒江之濱、寓館於曉、子樵過焉、見其法茶潔佈、律行堅

整(中略)、皇明正德八年、歲在癸酉、五月既望、餘姚王守仁、桂楫縵佛日、住南禪寺、後退居大慈院、院在東福寺、永正中、爲足利氏人叻、又(來復龍山大定菴記)日本爲國、居大海之東、其俗崇佛

敬僧、精舍伽藍、棋布城內、隆致之美、往往取法中夏、而其禪居皆違百丈舊制、(中略)龍山大定菴者、乃南禪住山、在禪師退休地、南禪爲海東首刹、非有道者不得與其選、在菴者爲亞相大夫派公

緒滿所知云云、又有宗泐爲菴堂禪師作空華室飲一簋、書其末云、洪武九年、菴龍在丙辰春二月九日、己丑、於龍洞傳法正宗室之東華嚴、全室見宗泐、今按、菴堂名周信、住南禪寺、荆溪菴室、室與

大定菴、今已燬矣、天授菴。楚開祖大明國師之處也。夢想國師、亦應禪法子此、故在天龍寺條下、

梁川星巖墓 在天授菴後。名緯字真逸。星巖其號。美濃人。以儒爲業。最善詩。成一

家。夙有勳王之志。安政五年。九月二日卒。清咸豐九年戊午年七十。明治廿四年。四月。贈正

四位。配紅蘭亦善詩書。名藉當世。

東岩倉山 在粟田口北。昔者。穿岩於王城四方。藏大乘經。以鎮護焉。倉藏國訓相

通。是其一也。山上安大日。世呼大日山。眺望尤佳。龜山後嵒峨二上皇。皆幸于此

云。

栗田口町 往時。自近江入京都之官道也。道傍有藥陶器者。歐士出於大日山。堅牢無比。稱栗田燒其業至今不衰。近世良工曰木米。姓青木。名八十八。性喜儒雅。與賴山陽等交遊。篠崎小竹銘其墓。

京都府 在下立賣新町破內町。明治中興。初置于二條城。後十七年。十一月。移此。現有新築之議。

市立育嘔院 在釜座通榎木町南。明治十一年。創建之。我邦設育嘔院。始于此。狩野元信墓 在妙覺寺中。元信叙法眼。世稱古法眼。狩野氏。世以善畫事德川氏。承其統者。曰狩野派。與土佐派。並稱天下。斯地多其墳墓。

西陣 自堀川西。至一條北。總稱西陣。蓋應仁之亂。明成化年。初。細川勝元在京師東。曰東陣。山名持豐在西。曰西陣。今尙存其名。而西陣一帶地方。自古多業花機者。綾羅

錦綉繡緞絹綢類。至於今。代益極其精。稱西陣織。遠輸海外。投資營業者。四十餘家。其工女。俗稱織子。無慮千百人。世諺云。西陣盛衰。係于京都盛衰。朱應星曰。東夷。漳泉瘠壤。效法爲之。絲質來自川蜀。云云。或傳。此業自天文年間始。余知尙在庚其前代也。

北野神社 在北野右近馬場。奉祀贈太政大臣正一位菅原道真公之隨。公是善卿

第三子。母大伴氏。幼好學。善和歌。年甫十一。父命賦詩。課月下觀梅。題公卽吟曰。月燿隔如雪。梅花照似星。可憐金鏡轉。庭上玉房璽。是善驚嘆。後從都良香游。夏香。主計頭貞雄之子。初桑原氏。後改姓都良香。博聞強記。又善屬文。朝冠入學。是時。士習矜伐。妍媸不分。乃著辨藻藏論。其文傳至今。貞觀中。貞觀中。道年間。舉文

章生。對策及第。元慶六年。唐僖宗中和二年壬寅。十一月。渤海使裴頤來。公時權行治部大輔事。與島田忠臣接伴。宇多天皇。最信任之。寬平六年。唐昭宗懿宗二年乙卯。五月。唐使來聘。八月。公爲遣唐大使。右少辨紀長谷雄爲副使。將報之。公時上書。論遣唐使。往往辱國體。及學生僧徒。誤內外輕重也。會唐有李克用之亂。遂廢遣唐使。天皇讓位醍

明天皇。公爲藤原氏所忌嫌。被謫。貶爲太宰權帥。時延喜元年。正月也。唐天復元

公歷事五朝。隨事獻替。多所匡救。其在太宰府。閉門不出。文詩自遺。忠愛之心。未

嘗忘也。嘗遇重陽。賦詩曰。去年今夜待清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。

捧持每日拜餘香。三年二月。遂薨。年五十九。天曆元年三月。五代晉高祖開

皇。勅建祠於此。世稱天滿天神。爾後郡國無地而不建之祠。宋師範天神詩一首天下梅

法眼。靈門答道普。管君本不假凡胎。直自靈山會上來。五百年間無識者。扶桑佛法一枝梅又元慶天

錫天滿宮詩無常說法鬼神道。千里飛梅一夜松。萬草夢醒雲吐月。觀音寺理一燈繼明洪恕詩日本春

開北野君。愛梅酒又館文。謫居西府三千里。將名淳茂。克繼父業。延喜八年。後醍醐天皇

頤之子。嘗與公唱和。至是。淳茂亦與瑯和。互語先人之事。飲泣不能言云。天德三

年。周太祖顯德二年。右大臣藤原師輔。益壯神毅。四時致祭。至今不衰。官祭。八月四

日。私祭。十月四日。神寶中有畫卷。題曰北野緣起。藤原信實等。世稱逸品。信實卽

土佐派祖

金閣寺 在衣笠山下。舊稱鹿苑寺。禪宗。屬相國寺。應永四年。明太祖洪武

設別墅于此地。而老。庭園之景。池沼之幽。盡善盡美。有三層閣。上曰究竟頂。中曰

潮音洞。下曰法水院。閣中以金塗之。旣薨。釋謚曰鹿苑院殿。遣命爲寺。追請夢想

國師。爲開祖。寺號亦取於其謚。義滿義詮子。足利氏第二世將軍。嘗起第于室町。

稱花御所。造四足門。僭擬乘輿。後改名道義。受明朝冊。蓋我邦人私受外國封冊。

獨有此八耳。其子義持。恐辱國體。遣書於明。拒絕之。亦宜矣。明太祖屢遣使者。

建大明號。而太宰府不放聞朝。使者不得入京師而歸。太祖聞我邦君臣皆信佛法。密命天竺寺僧阿仲

訥。瓦官寺勸無逸。來論道好。我不應之地。應永初。筑紫買人肥富。自明歸。陳兩國通信之利。於是

義滿便以肥富爲使者。始通信。嘗曰。日本國開闢以來。無不通聘問於上邦。某幸東國釣。海內無虞。

特遠往古之親法。而使肥富。相副訓阿。通好蘇方物云云。其獲書云。朕自嗣大位。四夷君長朝獻者。

以千百計。苟非展於大義。皆思以禮撫柔之。茲爾日本國王源道義。必存王室。懷愛君之誠。險越波

瀝。遣使來朝。云云。是爲建文四年。二月六日。賀。卽我應永九年也。明成祖設安嶺國山碑云。日本王

之有源道義。又自古以來。未之有也。朕雅懷遠虞之治。舉封山之典。特命日本之鎮山。號爲安嶺國

之山。賜以銘詩。勅之良石。榮示於千萬世。蓋義滿之致仕。在應永元年。卽義滿遣使于明。既將卸職

之後也、而甘受國王之稱、其不臣孰莫甚焉、後漢持論明使者、曰、夫與鄰國通好、商賈往來、安得利民、非所欲乎、然而、余之所以不肯接明朝使臣者、其亦有說、先君之得病也、卜之云、諸神爲祟、蓋我國自古、不向外邦稱臣、比者、獲前聖王之爲、受辱受印、而不却之、是乃所以招病也、於是先君大懼、易策之際、以冊書、誓諸神、永絕外國之通問、又無受外國使命、因垂誡子孫、固守邦陲云云、是爲應永廿六年、七月事、明太宗、永樂十七年、己亥也、爲之通譯者、僧岡澄也、嗚呼、義滿臨死而悔、抑亦晚矣、自應永九年受其冊、至十五年義滿薨、僅僅七年、然汚我史乘、亘千古世、未能銷滅也、始滿之罪、可謂大矣、古人第二世曰西笑和尚、名承兌、豐太閤尤尊信之、慶長中、大泥國使者、來呈國書、豐公命承兌草覆牒、文祿之役、專掌文件、朝鮮使至、乃命筆談、又築耳塚、爲之導師、而譯讀明氏冊封、毅然不肯從小西氏囑一事、載豐國神社條中。

聚樂 西至千本通、東至大宮、北起一條、南接二條、總稱聚樂、天正十二年、明神宗

乙酉豐太閤城於此地、曰聚樂城、後陽成天皇嘗行幸焉、後至秀次爲壘、今乃存其

名耳。

二條城 在二條堀川西、永祿十二年、明穆宗隆慶三年己巳、織田信長始築於此、明智光秀之壘

本能寺也、信長子信忠固守此城、光秀攻陷之、城墮、慶長七年、明萬曆三

築之、置城代、城代官名、凡國有城、諸侯爲其城主、二條則不然、稱府按年遺更守之、謂之城代、後曰城代、倣此、明治中興、權爲大政官、後

爲京都府廳、今屬宮內省、世稱二條離宮、是也、(中井竹山詩)皇畿勢何若、縱目二條城、樹色東西樹、人煙左右京、與廢離宮王、

感愴一番生、天地秋將盡、陰風意更寒、

神泉苑 往古境域尤廣、延曆十九年、唐德宗貞元十六年庚辰八月、桓武天皇臨幸之後、爲歷世天

子御遊之地、泛舟於池、奏樂賦詩、後漸荒廢、元和中、明武

脩補其一端、建寺、曰神泉苑、護國寺、屬東寺、眞言宗也、今爲公園、(日本瑞龍山重遊轉法橋殿觀寺記)

忽神降於一比丘曰、我神泉苑善如觀王也、云云、

青蓮院 在栗田口町植髮堂南、舊稱栗田宮、天台宗、開祖曰傾教大師、(傳教大師即

歷寺中興祖曰行立大僧正、愚快法親王、自一爲院主而還、世勅法親王、爲山門座

主、有青圓親王者、以善書名、清人翻刻其寶蹟、以載之某法帖、今忘其署名、明治廿六年、九月、宮殿罹火、現

將再建之。

智恩院 在真葛原北。曰華頂山大谷寺。淨土宗。鎮西派之本山。開祖曰圓光大師。

卽源空上人也。上人詳建久二年。朱紹熙二謫于讚岐。承元二年。朱嘉定元年戊辰。赦還。閑

居東山大谷。卽是地也。後相原天皇詔云。宜脩法然上人之御忌。於是。每歲祥忌。

稱御忌。寢其筵者甚衆。山門華頂山福額。係遠元天皇宸筆。本堂大谷寺三字。卽

後奈良天皇宸筆。勢至堂。智恩教院四字。卽後柏原天皇宸筆。巨鐘。成於寬永年

中。明末高壹丈八尺。徑九尺。厚九寸五分。方丈各室。盡皆狩野氏畫。什寶亦多。

吳道子淨土經說相圖。李龍眠彌陀二尊。張思恭彌陀二尊。各香幅。錢舜舉呂紀

徐熙等。今一一不能記焉也。

圓山公園 斯地。昔稱眞葛原。至今代。設公園。公對私之意。不獨私之言。官紳庶民。

相共遊觀之園囿。孟子所謂古之人與民偕樂。是也。園中。有一大老楓。已經壹千

有所說。

年餘。其枝垂下。因稱枝垂櫻。春日張宴其下。以至夜分。尤極雜沓。櫻花事。當別

長樂寺 在圓山南。初天台宗。開祖亦佛教大師。安置千手八臂十一面觀音立像。長

壹尺二寸許。世傳。最澄自唐歸朝。海上有龍首載此像。浮出。過最澄衣袖而去。故

最澄自刻蟠龍於其像下。置之。以摸當時之狀云。安德天皇崩于長門。詳載馬關條下其母

后建禮門院。歸洛。請寺僧印誓。受戒削髮。爲尼。時以天皇御衣。布施。印誓乃製帷

幃十六旒。今尙存。

溫泉 在長樂寺內。明治六年。市民獻金。建設三層樓滿都風物。收在一眸。樓下有

浴堂。亦極清潔。

賴山陽墓 名璣字子成。山陽其號。賴氏。本姓近藤。其先事小早川氏。後移安藝。村名賴兼。因以賴爲氏。父曰惟實。號春水。

安藝儒官。山陽幼有大志。遨遊四方。善文賦詩。未嘗就仕途。僑居京師。以儒爲業。

日本外史。日本政記等書。風行天下。近世中國人士之起勸王志者。多基於此書

云。天保二年。三年壬辰九月廿二日卒。年五十二。明治廿四年。十二月。贈正四位。

三子。長曰協。號聿菴。次曰復。號支峰。次曰三樹。號三樹。皆以文學志士。有名於

世。三樹。刑死於江戸。大橋訥菴。請屍葬之。後改葬於此。支峰。明治初。爲大學中博

士。墓在高臺寺中。支峰有女。養龍三爲嗣。現住京都。

將軍塚 延曆遷都之初。相地東山嶺。瘞土偶。長八尺。環甲冑。把弓箭。西而立。以

爲鎮護皇城之神。自圓山登。乃七八町。可展其塚。

八坂神社 正門在下河原町。西門在祇園町。古稱八坂郷。官幣中社。奉祀素戔嗚尊。

稻田妃。八王子。八王子。謂田心姬。湍津姬。市杵島姬。及天忍穗耳尊。天穗日尊。

天津彥根尊。活津彥根尊。熊野尊曰尊。世傳。孝謙天皇天平勝寶五年。唐睿宗天寶

遣唐使吉備真備。自唐歸朝。時抵播磨國廣峰。知其垂跡。乃奉崇之。後有神託常

住寺僧圓如。貞觀十一年。唐太宗貞觀遷居此地。爲守護皇城之神。十八年。唐僖宗

申年丙疾疫大行。卜部曰夏麻呂。卜六月七日。及十四日。奉京中男女。送疫神于神泉

苑。明年。疫亦行。庶民昇神興。詣神泉苑。疫乃息。後爲恒例。是曰祇園會。昭宣公

藤原基經。尤尊崇之。新建神殿。其形擬紫宸殿。今則每年七月十七日。及廿四日。

行祇園會。有俗稱山鉾者。成列巡市。居京都觀美之一。

祇園町 自四條大和大路。至八坂神社樓門下。放櫻娼館。夾道縮比。又有祇園新

地。謂末吉。富永。元吉。清本。橋本。林下等六町也。李娟張態。蜂蝶隨香。絃聲珊

珊。日夜不絕。

歌舞絃場 在祇園町南。花見小路。謂練習歌舞之處。俗呼都踊。踊卽舞之義。京都。

自古稱笑人多。西眉南臉。愁姿曉態。亦隨日加多。而風流太守。竊恐斯地漸失高

調之妙技也。乃設習練之處。春花開落之日。群芳競妍。寫朱學月。鶯歌燕舞。以供

內外豪客之觀覽。方今美人。燕有之矣。余未見其多也。或曰。美人亦東遷矣。

〔成島柳北詩〕俄然相遇忽相覩、一也茲欣一枕香、濃醴傳來脂粉色、不知也有鏡夫人、

建仁寺 在大和_{大路}南門前曰建仁寺町。禪宗。臨濟派之本山。居於五山第三。開

祖曰千光國師。卽榮西上人。姓賀陽。字明菴。一字榮上。備中國吉備津人。仁安三

年。宋孝宗乾道四年戊子入宋。從僧虛庵參禪。既歸。文治末。紹興初再往于宋。建久二年。

紹興二年_{宋孝宗乾道四年戊子}。歸朝。創建壽福寺于鎌倉。錄倉。源賴朝開攝府之地。_{詳載錄倉條下}建仁三年。宋寧

嘉三年。土御門天皇。勅建寺于京都。賴朝子賴家。獻其土地。既成。號東山建仁寺。

建保三年。宋寧嘉三年_{甲辰}。七月五日。寂。年七十五。廟塔曰興禪護國院。其東附有菩提

樹。自宋携回于今繁茂。寺門三。南曰矢立門。以有箭鏃之痕也。世傳。斯門係往

昔平族。宰相教盛館門。有鐘樓。鐘亦係往昔河原院之物。河原院者。左大臣源融

所建之別業。別業已廢。鐘亦沈沒鴨川。榮西諸官舉之。重而不動。榮西乃命衆曳

繩時。一齊發聲。連呼榮西榮西。鐘遂登岸。後世。引重者。必呼野撒。野撒榮西。

國音相通。_{〔天白名山千佛閣記〕}淳熙五年。孝宗皇帝。親遊震巖。大書太白名山。以賜天童山景

福禪寺。_{中興十六年。虛菴懷敞。自天台萬年來主是刹。百廢具舉。追跡二老。中興先}

是。日本國僧千光師榮西者。情發夙心。欲徃西域。求教外別傳之宗。若有生以天台萬年。爲可依者。

航海而來。以師爲歸。及還天童。西亦隨至。居歲餘。聞師有改作之意。請曰。思報攝受之恩。願盡所

不憚。況下此者乎。吾忝國主近屬。他日歸國。當致良材以爲助。師曰唯。未幾。遂歸。越二年。果致百

工度材。雲委山楹。列楹四十。多日本所致。餘則取於境內之山。始建於紹熙四年。季秋之甲申。才

三載告畢。云云。慶元四年。_{〔我建久九年〕}清明日。顯隱閣直學士大中大夫提舉江州太平興國宮奉化

縣開國男食邑三百戶楊綱撰。又。_{〔日本國千光法師祠堂記〕}太白名山申天下。而千佛閣尤爲第一。後

世欲過之。其材無及焉。蓋杜植係日本國僧千光法師所致也。詳見大孝樓公閣記。宜爲儒像以祠。師

諱榮西。備州人。孝宗賀正。六十二世孫。母夢明星感孕。生年十一。出家。延曆寺薙髮染衣。初學俱

舍。要踐跡。十二受大戒。習天台教觀。掩關八年。以爲未至。將徃西域求道。二十八。航海達四明。遊

台山萬年寺。禮石梁羅漢。論茶瓊花。又見二青龍。俄頃。尊者現全身。益堅志。遂居之。會虛庵做

公。移主天童。因與偕行。及建閣卽東還。願有以助之。越二載。大木果至。而閣成。師之力也。師自

幼敏悟。晚遊唐朝外典。持律終身。過午不食。本國仰號僧正。屢修佛事。茲不具書。臨終預期。而

手結印。安坐而化。壽七十五。臘六十二。後十年。其徒明全。復來山中。捐捨勞千緡。寄諸鹿巖島。

爲七月五日忌。毀瘡取宋。本孝也。全生伊州。蘇姓。師之道。教戒亦精。入山三年。示寂於了然窟。火

後得堅固子無敗付遺元。祔歸故國。併刻于祠。大宋寶慶元年八月九日修職郎監鹽安府都稅務虞榜

記。今按。明全號了然窟建仁寺僧。千光法師。嘉祿元年。_{〔宋寶慶元年〕}入宋。又附法千光法師書曰本

國千光院大法師四。宿有發骨。頓捨世間。深重恩愛。從佛剃髮。著僧伽梨。持此法。不遠萬里。航

海而入我焚朱、探顯宗旨、乾道戊子年、遊天台、云云、是文係其師懷麓菴撰、又（日本建長禪寺古先源禪師道行碑）千光院有大善知識、曰采臣和上、以黃龍九世嫡孫、提佛祖正印、唱最上一乘、鷗馳然、逢者隨落、達摩氏之道、藉是以中興、其示教之時、且曰、吾人滅後五十餘年、禪宗當大興云云、是文係明季亂撰、（懷麓與衆西詩）不厭錄敘意已彰、掛眉早證識僧鄉、著衣喫飯自成規、打瓦鑽鑿空落忙、若信師始元女子、無疑日本即南唐、一天月色澄江上、底意分明不覆藏、安國寺惠瓊塔、在寺東偏稱惠瓊長老、名瑤甫、東福寺僧、後爲毛利氏所聘、移安藝國、爲安國寺住持、豐公征韓之役、往來

韓海、與小西行長等謀、矯命講和、事露、公怒將斬之、爲人所救、開原之役、詳載闕

韓海、與小西行長等謀、矯命講和、事露、公怒將斬之、爲人所救、開原之役、詳載闕

社、奉祀事代主尊之處、千光國師、建設建仁寺、時勸請之、摩利支天堂、開基曰

大鑑禪師、名清拙、唐僧也、清拙自唐來、撝斯像、面貌白色、眼五彩眼、坐乘猪背、

猪凡七頭、皆以金泥塗之、

六波羅密寺 在建仁寺町東南、又號普陀落山、真言宗、屬智積院、開祖曰空也上

人、詳載空也、堂條下、安置十一面觀音像、昔稱六波羅地藏堂、地藏像、白河法皇親刻之、

藥師則傳教大師作、又有平清盛像、長二尺八寸、保元元年、南末高宗紹興、平氏興用

第于六波羅、謂此地方、承久四年、朱寧宗嘉定、十五年壬午、北條氏遣部將于六波羅南北、留鎮

京畿、號兩六波羅、是也、平清盛等、寺什、董其昌筆桃源圖、陳書公題辭、有名於世、

雙林寺 在南駱野町、與圓山接、號金玉山、初天台宗、後改時宗、林泉幽邃、歌人

多晦跡於此、堂前有西行法師、平康賴、頃阿法師古石塔、皆以善國歌、名垂後世、

又有西行庵西行機等遺蹟、西行、名憲清、佐藤氏、材兼文武、叙從五位、任左兵

衛尉、後翻然而悟、爲僧、改名圓意、漫遊天下、見富貴如浮雲、口吟和歌、以終其

身、建久九年、朱寧宗慶元、四年戊午、二月十六日、寂、年七十三、芭蕉堂、安置芭蕉翁像、翁名

桃青、門人半化房蘭更建此堂、有碑詳記之、蓋我邦有稱俳諧歌者、翁實爲其中

興祖、大雅堂舊居、秋野氏、名無名、字貸成、大雅堂、其號也、又有寶樵九霞三岳

諸號、善書畫喜風流、最多奇行、安永五年、滿乾隆四十一年丙申、四月十日卒、年五十四、

高臺寺 在櫻林寺南。號慈峰山。禪宗。臨濟派。屬建仁寺。開祖曰紹益。號三江。慶長

中。明初曆豐太閤夫人淺野氏。創建。祈豐公冥福之處。開山堂。及靈廟。或用夫人車

蓋。或用征韓船材。廟中安置豐太閤及夫人像。謚曰高臺院殿。從一位湖月禪定尼。

寬永元年。明森宗天啓四年甲子九月六日薨。史云。豐公微時。與淺野長勝友善。長勝養杉原

某二女。長女即夫人也。豐公家貧。成婚之夕。夫妻布裘于簀而坐。以瓦甌收盞相

酬。長女固知其非常人也。事之甚謹。及豐公得志。雖有所嬖。皆置之別宮。獨與

夫人同居。夫人助公定天下。多所裨益。常戒之曰。願良人勿忘簞席瓦甌時也。夫

人無子。秀賴庶出也。然視之猶其自出。公薨則削髮居京師。秀賴乃與生母淀君。

居大坂。世稱夫人。曰北塵云。我邦稱呼。媽媽托哥羅。

正法寺 在高臺寺東。號靈鷲山。靈鷲山扁額。係弘法大師筆。開祖亦傳教大師。後

漸衰。國阿上人。自爲中興祖。改爲時宗。國阿姓著崎。名國明。爲播磨國著崎領主。

事足利氏。文和四年。元順宗至正十五年乙未致仕爲僧。時年四十二。應永十二年。九月。寂。

明太宗永樂二年乙酉。此地。昔稱鴛尾山。後聚鷲山。今乃靈山。畧言之也。(國於靈谷詩)小閣登高

消。媚媚斜漢低蟠樹。斑斑長流貫斷橋。獨影浮空爭路。月笛隨水激迴駘。都人豪侈僥清興。幾處開筵醉翠翹。

靈山招魂場 明治十二年六月。建設銅碑。題曰靈山表忠之碑。山中有藤本鐵石。

梅田雲淵。坂本龍馬。浮田一薰諸名士。以及殉難義人忠僕等墓碑。而做在其蹟

者。爲故內閣顧問木戸孝允公蓬。世稱公及故大久保內務卿。西鄉南洲先生。曰

明治三大勳臣。(奉政伊藤相公詩)無端歲月易消磨。相公下馬。吊碑過。應知往事追懷感。偏向靈山墓畔多。

八坂塔 在高臺寺東南。其曰八坂。北自眞搦原。南至清水坂之稱。坂八。曰祇園。曰

長樂寺。曰河原。曰法觀寺。曰靈山。曰山井。曰清水。曰三年。又稱八坂寺。即靈

應山法觀寺也。崇峻之朝。隋開皇聖德太子。創造五重大塔。埋藏佛舍利二於其塔

下。我邦建塔。實始於此。後屢罹災。今存者。係永享十二年重建。明英宗正統五年庚申

清水寺 在清水坂東。號音羽山。兼行法相真言二宗。屬奈良興福寺。安置十一面

千手觀音立像。長八尺。左右又置地藏菩薩。毘沙門天像。開祖曰延鎮僧都。檀越

即征東將軍阪上田村麻呂也。世傳。寶龜九年。夏。唐代宗大曆十三年戊午。延鎮泛舟。湖木津川。

望見白衣老翁。端坐草庵。延鎮知其非常人。上岸往謁。老翁曰。吾行緇居士也。遲

汝來久矣。我有靈木。將刻觀音像也。今欲東行。汝代作之。延鎮乃留居此。已閱

六年。田村麻呂欲田獵山中。發奈良。沿木津川。遂過延鎮廬。怪問其故。延鎮具語

其志。田村麻呂大喜。益勵獎之。桓武天皇遷都平安。田村麻呂亦從之。以八阪鄉

與延鎮廬相距不遠也。乃移居此。因請其像。安置邸中。今田村堂之所在。是也。延

曆二十年。唐德宗貞元十八年壬午。蝦夷叛。今北海。田村將軍。奉詔討之。既平。時有觀音地藏毘沙

門諸佛之冥助云。故今尙稱勝軍地藏。勝敵毘沙門。又天皇不豫。詔延鎮禱之。已

瘥。任延鎮十禪師。二十四年。唐順宗永貞元年乙酉。田村將軍奏請大政官符宣。建設堂塔。大

同一年。唐憲宗元和二年丁亥。平城天皇詔賜紫宸殿。今清水寺。即是也。寺門下。多甃陶甃。

曰清水燒。尤極精巧。有名內外。三重塔。安置大日像。隨求堂。隨求菩薩。釋迦堂。

釋迦牟尼佛。成就院。有忍向信海等碑。忍向。清水寺僧。稱月照上人。長門人。與

西鄉隆盛。投薩摩洋死者。信海其徒弟也。並以勘王事。功名蓋世。(履月照詩) 漢海月沈千古。

子今皎影分明。丹心報國。地主神社。奉祀大已貴尊等四神。亦田村將軍。所勸請也。

音羽瀨。在與院下。飛泉三條。清冷可掬。凡此地方。春花秋葉。景色可人。溪流繁

迴。林樹鬱葱。實一仙境也。

清閑寺 號歌中山。真言宗。屬因幡堂。安置千手觀音像。係管公作。開祖曰紹繼法

師。延曆廿一年。創建。世傳。昔者。寺僧真燕。藉岩倚門。有一少女來過。艶而美。

真燕目送心動。欲交語。故問清水寺在那邊。女乃歌曰。逢人忽動心。爭得淨消道。

真燕頓悟。因稱歌之中山云。

鳥部山 又鳥部野。自古爲埋葬之地。路傍墳墓。累累數百千基。悉數難終。藤原良經碑。在要法寺。淺見綱彌墓。在通妙寺。他石田勘平。手島堵庵。柴田鳩翁諸儒。今一二不能悉載。

豐國神社 奉祀前關白太政大臣從一位豐臣秀吉公之處也。明治十年。光緒二十六年丁丑。創建大佛殿。正門原係伏見桃山城門。門上揭豐國大明神扁額。後陽成天皇宸翰。有社殿。有拜殿。社後山曰豐國山。舊稱阿彌陀峯。往昔僧行基創建寶皇寺。安置阿彌陀佛像。元弘建武之際。寺墟矣。其顛實葬公棺之地。高數千仞。石磴三百五十級。分爲五層。每層六十二級。其基以石爲柵。繞之。凡古者。在關曰戰而老。稱太閤。於是。世人尊稱豐公。曰豐太閤。山頂平坦之處。俗呼太閤平。公起身微賤。位極人臣。偉績大業。耀海內外。近世西儒。并奉始皇帝。法國拿破倫。曰世界三傑。蓋非謬言矣。今略叙公姓字。其餘分載各條。公幼字日吉。長稱藤吉。後改

今名。尾張國愛智郡中村人。父曰彌助。無子。與其妻。祈之於天。妻夢日輪入其懷。已而有身。天文五年。明世宗嘉靖十五年丙申正月朔。生一男兒。因名曰日吉。年二十餘。事織田信長。神謀鬼策。功拔諸將。足利氏亡。信長拜內大臣。統一天下。旣爲其臣。明智光秀所弑。公時攻毛利氏。講和旋軍。與光秀戰于山崎。克之。遂任關白。賜姓豐臣。時天正十二年也。明神宗萬曆十三年乙酉當是之時。天下大治。遣使海外各國。連促朝貢。初公之在山陽道也。請信長攻韓及明。不果。後常思成其志。十九年。讓職其弟秀次。文祿元年。萬曆二十一年壬辰。遂興征韓之師。公親督軍于肥前那謏屋。連戰連捷。輸請援于明。又大破明軍。沈惟敬者。越人。營點瘡侯。與大司馬石星善。說以和議。星薦惟敬。爲遊擊。多資金帛。往說我軍。投書平壤守將小西行長。卑辭乞和。行長屢却之。終爲其所惑。四年。二月。三年乙未。伏見城成。公徙居。慶長元年。八月。明萬曆二十四年丙申。明正使楊方亨。副使沈惟敬。檄使黃慎。朴弘長從之。共至界浦。二

十九日。遣伏見。公責之。曰。吾收兵。而汝國未獻三道。今又不使王子來謝再造之恩。乃遣微者辱我。我不許汝入見。二使因行長謝。弗聽。九月二日。使毛利氏列兵仗。延使者入城。公開帷而出。二使偃伏。莫敢仰視。捧金印覓服。膝行而進。行長助之。畢禮。二日。遣使者。既罷。公減笈。被緋衣。使德川公以下諸將。各被其章服。召僧承兌讀冊書。承兌者金閣寺僧行長私嘲之曰。冊文與惟故說。所或有齟齬者。子且諱之。承兌不敢聽。乃入。讀冊於公之傍。至曰。封爾爲日本國王。公變色。立脫冕服。拋之。取冊書批裂之。罵曰。吾掌握日本。欲王則王。何須贅虜之封哉。且吾而王。如皇室何。乃召行長。請讓曰。汝敢欺罔我。以爲我邦之辱。吾將併汝與明使者。皆誅殺之。行長出書讀數通爲證。承兌亦解救之。公怒未釋。卽夜。命加藤消正等。逐明韓使者。賜資糧。遣歸。曰。若亟去。告而君。我將再遣兵屠而國也。遂下令西南諸道。明年。正月。明使者至明。伴報秀吉受封拜舞。和議全成。因私賈

海外珍寶。號爲日本幣物。已而吳越將吏。上變。報曰。秀吉先鋒加藤清正已據二百艘。上機張矣。明主大恐。因詰方亨得實。乃諄惟故。惟敬慚謝。於是戰復大起。我軍亦未嘗敗績也。三年。三月。明萬曆二十六年戊戌公携秀賴及夫人以下。觀花醒湖。張盛宴。五月。公有疾。七月。漸篤。十三日。將瞑。已而張目。曰。勿使我十萬兵。爲海外鬼。言畢而薨。年六十二。德川公以遺命。召還在韓諸將。明史紀事本末。隱憂野史別錄。等書并載其事。尤多疏寔。今

不追對照辦明也。故不抄錄焉。唯有明主誓冊。傳於今者。一爲萬曆二十三年。正月二十一日。一爲二十五年。五月十六日。翌後僞員鍾井道誠。名魯。久藏明主封冊。後獻之平戶。靜山公。今華族松浦伯祖。公後贈之兼府僱員佐藤指城。名坦。字大道。號一廬。其文云。因勅原差遊擊沈惟故。前去釜山。宣諭爾衆。盡數歸國。特遣後軍都督府食事李宗城爲正使。五軍營右副將左軍都督府景祐授官。用渾恩資云云。是爲當時副本。明使還乘之。流傳龜井氏者。印有廣運之寶四字。又熊本縣上益城郡總領高本氏。本姓李。其祖曰熙朝。韓人也。再征韓之時。留于壘前。明使欲介熙明以致之京師。遂託是書而去。其文首敘欽差經理朝鮮軍務都察院右僉都御史楊。咨爾平秀吉。云云。又曰爾已六十餘歲。壽命幾何。子未十齡。孤弱何恃。聞各島之酋。俱覬爾之際。爲復讐報怨之舉。爾不消兵。極矣。安受人情云云。前者。倣倣無慮。公之批裂。固當然耳。後者。陰動公心。以謀止出師。是惟微輩授之。宋明朝廷。無其人。果如此。余又查別錄所載豐公復朝韓書。有言曰。將一超直入大明國。

耳塚 在豐國神社前。蓋古所謂京觀之類。征韓之役。獲首千萬。不能致之內地。乃平。遠邦小島在海中。後進覽者。不可作詳察也。余入大邱國之日。將士卒望軍聲。則彌可修羅盟也云。

切其耳。或劍之。具記其數。收諸桶中。鹽浸之。以交解。於是築塚埋之。因稱耳塚。以慰其靈。

方廣寺 在豐國神社北隣。俗稱大佛殿。天台宗。國延曆寺。天正十四年。明應曆十

豐太閤創建。鑄造盧舍那佛巨像。長六丈三尺。慶長元年。六月。地大震。豐公時

居伏見。入朝京師。還過寺前。見大佛倒裂。罵曰。我爲若不憚勞費。將使若濟度

衆生。今已身且不能保。何負我也。因呼弓射之。後十五年。子秀賴重修之。屢罹災

釁。今纔存木像者。係天保十五年。諸道光二十三年癸卯。名古屋志士。撰作云。又有巨鐘。高壹

丈四尺。重十萬六千貳百五十斤。秀賴命東福寺僧消燬。撰銘。有國家安康四字。

東照公。名曰家康。以爲出於咒咀。遂滋事端。於是有大阪之役。豐臣氏亡。詳載大

京都博物館 在大佛殿舊域中。明治廿七年。宮內省創設。與東京奈良二館。允許

士民縱觀。其裨益于考據學者。蓋不鮮少矣。

蓮華王院 在博物館南。又稱三十三間堂。天台宗。國延曆寺。長承元年。宋高宗紹興

鳥羽天皇。創建三十三間堂宇。安置觀音像千軀。號得長壽院。後至長寬元年。

宋孝宗隆興元年癸未。後白河上皇。亦建三十三間堂。安置千體觀音。號蓮華王院。後罹災。乃

合而院。爲壹堂。稱蓮華王院。今存者。係于文永二年。宋度宗咸淳元年丙寅。再建。南北六十

六間。每貳間樹壹柱。所以稱三十三間堂也。世傳。昔者。有新熊野觀音寺僧梅坊

者。善射。嘗試射於堂廡下。飛箭直前。不觸梁柱。後世習射者。倣其例。曰通矢。又

曰數矢。矢數多寡。記載扁額。揭之楣間。今尙存其跡。

泉涌寺 在伏見街道第一橋東。稱東山。初僧空海。建寺于此。號仙遊寺。及後。左大

臣藤原緒繼再建。清泉涌出焉。仙遊泉涌。國音相通。因改今號。開祖曰正法國師。

名俊祈。字我禪。號不可棄。肥後人。兼修天台真言禪律四宗。初從天台宗池邊寺

僧珍曉。削髮爲僧。受具足戒。于太宰府觀音寺。年三十三。入宋。嗣法北峰。傳受律

宗。建曆元年。宋寧宗嘉定四年辛未歸朝。時年四十六。修法有驗。士庶崇尊。大和刺吏中原信

房。爲寄其采地。貞應中。宋嘉祐二年賜官符。爲勅願寺。嘉祿二年。宋理宗寶慶二年丁亥閏二月八

日寂。年六十二。後小松天皇賜諡大興正法國師。降至享保。清世宗雍正年間又賜大圓覺

心國師。宋仲璩律師後號寶、稱首天人大導師、家住海東太宰府、秋中片月爲兩肝、雪後

佛殿。安置釋迦彌勒彌陀二尊。舍利殿。二層金塔中。安置佛牙舍利。傳云。唐僧

道宣律師。因佛滅後壹千六百年。受之章駄天。道宣秘藏白蓮寺。國師徒弟湛海。

字間陽亦入宋。詣白蓮寺。竊請拜受之。弗聽。湛海歸朝。更載木材。再入宋。脩理

白蓮寺。而請求之。寺僧大感其志。與之云。宋僧法照送海法師還日本詩海東國主尊台

日出映硯啟其亭云。澄祐四年。九月望日。誓于南湖方丈。後十二年。當賢者之卯。再來上天竺。因

見猿鵲。相視感歎。余七十一矣。水而游吳。宜爲然門保重。鳴岩社照。宋僧元智佛牙蹟氣衝牛斗

豐城劍。光透波心含浦珠。爭似聖人真舍利。亘際應勿照管備。佛牙觀音堂。世仰唐玄宗。自

今在泉涌寺云云。日工集。以注照詩爲唐陸渾溪僧題之作。恐非。

寫楊貴妃之面貌。以刻觀音木像。祈其冥福。因稱楊貴妃觀音。亦湛海法師。自宋

携回者。宋蘇詩玉樹妖肌污寶中。豈有靈祠祀鬼雄。是莫仙山竄縹緲。雪南花節主珠宮。註云。國有楊貴妃祠。或謬傳此觀音堂乎。戒光寺。安置釋迦牟

尼佛像。長一丈六尺。其頭與面。係宋人刻。其餘。運慶初之開祖曰曇照禪師。建

保二年。宋寧宗嘉定七年甲戌入宋。受具足戒於中峰鎖翁二師。理宗帝召見。奏對稱旨。帝大

悅。賜號忍律法師。安貞元年。宋理宗寶慶三年丁亥歸朝。正元元年。開慶元年己未二月廿二日。寂。

年七十三。寺什有大涅槃像。沙門古嗣筆。長五丈。幅二丈。比之東福寺藏本。更

大矣。又章駄天像。畫。筆者未詳。然係六百年前物。蓋佛牙舍利。以其受章駄天。

當時邦人。善畫者。寫之乎。

靈明殿 奉安歷朝天子皇后御牌之處也。世稱月輪御陵者。在泉涌寺後。或曰。月

輪山莊。在我禪坊。山莊則昔者九條關白藤原兼實公別業之名。我禪坊。卽泉涌

寺也。故與御陵地。自別。御陵今不記載焉。

東福寺 在伏見街道第一橋南。號惠日山。禪宗臨濟派本山。居於五山第四。開祖曰

聖一國師。名辨圓。號圓爾。駿河人。年甫十八。初入近江三井寺。削髮爲僧。更諱曰

大和東大寺。受戒於戒壇。又從下野長樂寺僧榮朝學禪。嘉禎元年。朱理宗瑞平入

宋。師事徑山寺僧無準。居六年。仁治二年。年辛丑。歸朝。關曰九條道家公。爲建此

寺。其曰東福者。合奈良之東大興福二寺號。各取其一字云。弘安三年。元世祖至元

十月十六日。赦。年七十九。宋僧師範附法圓爾上人。遊無南北。弘此在人。果能弘道。則一切

處。總是受用處。不動本際。而廣遍南方。不涉別求。而普參智識。如

是則非特此國彼國。不隔結案。至於及盡無邊香水海。那邊更那邊。猶指諸掌耳。此吾心之常分。非

假於他術。如此信得及。見得徹。則逾海越漠。陟嶺登山。初不惡矣。圓爾上人。做善財。遊歷百城。參

尋智識。決明已躬大事。其志不淺。姓香求語。故書此以示之。丁酉歲十月。住大宋徑山無準老僧書。

師範即無準名。丁酉。即我嘉禎三年。宋嘉熙元年也。又僧道潛送圓爾上人歸日本詩。興盡心空轉

海東。定應赤手展家風。報言日本皇天子。且喜楊枝正脈通。又僧紹遠送日本爾師者詩。徑山無法

與人傳。幾度親遭剪而拳。今日大唐回首去。鼻頭元在口皮邊。世傳。此時諸友作頌送者。二十餘人。

今不辭碑于世。可惜哉。先是。有宋人朝國明者。歸化我邦。居筑前博多津。圓爾歸朝之後。聞徑山

寺釋災。乃勸圓。寄贈木板千枚。師範復書謝之。其文曰。師範和南手白。日本承天堂頭長老。權

時隆聖。綱維道相安穩。去秋。初詣上人來收書。且知住持有況。老懷慰藉。又荷遠念。山門興復重

大。特化千板。爲助。良感道義。不謂。巨舟之來。爲風濤所載。其同宗者多有所失。此舟幸得泊華

亭。又以朝廷爲內地。不詳抽解維。持一方得遂意。今到華亭。已領五百三十片。共三百三十片。尙
在慶元。未得入手。除一百四十片。別船未到。且留館上人。在此少住。後見數目分曉。却津渡。其歸
方得作傳。致謝網使。謝丈大轉越也。嘗聞日本教律近盛。而禪宗未振。今長老旣能堅立此宗。常一依
從上佛祖所行。無有不殊勝矣。便中略此布復。未及詳具。約宜爲大法。多多珍愛。是祝。後經十四
年。朱僧了惠。寄書。其文云。了惠頓首再拜。上敬東福堂上兩師法兄大和尚侍者。即日奉事告闕。恭惟
尊候有相前薦。了惠擬寄以道福住山。王臣贊慶。謬稱奕奕。遠被中夏。乃知先師左券全歸老手矣。
欽羨歛羨。切乞爲師門。益加深護。以永良風。不宣。天宋寶祐乙卯。二月二十五日。天童初祖比丘
了惠頓首再拜。了惠者師範法嗣。是賢。師範寂後。了惠復國師也。又隔當年。東福山雙名額雲。入
宋。嘗見斷橋翁。問祖師西來之教。翁指壁間墨梅。額壁立呈一偈。翁笑曰。和闍梨得得意。若掛者。
宋僧也。與吾懸壁。有言曰。若得每思勝集時。即明吟壁間佳偈。如對蒼眉玉色。然蓬瀛際天。可望
而不可即。此心又當如何。聞師宿隱。任道之器。俾如。弘法之量。溫如。雖隻字不能詞候。時於鄉人中。
粗知出處大概。適足以慰依慕云云。今適寄此等應酬文詩。其納交求法。互相推讓。謙遜也。唯見不如
後儒。繪辯華異。分別內外之甚焉。耳。然則當時僧徒。却勝於儒者乎。創建而還。未嘗罹災。世稱一大舊伽藍。降至今代。
佛殿法堂方丈庫裡選佛場等。盡歸烏有。僅存山門開山塔通天橋等耳。遠近莫不
愛惜。山門號妙雲閣。扁額係足利義持筆。義持。新滿。子在前編。閣上安置釋迹及十六羅漢
等像。開山塔。號傳衣閣。聖一國師影堂也。通天橋。架洗玉潤。扁額。係普明國師
筆。國師。即承慶師。詳載相國寺條下。他有偃月橋。臥雲橋等名勝。此地。每秋霜葉如錦。名通天楓。

都人士遊覽者尤夥。（賴山陽通天橋詩橋底停車酒半酣、仰看霜樹亂紛紛、客來却下玉龍骨、踏過一溪紅錦雲、寺什亦甚多矣。大涅槃

像長三丈九尺。幅二丈六尺。兆殿司筆。逸品之名。藉甚於世。五百羅漢像五十幅。佛祖像七十幅。亦其筆也。兆殿司者。東福寺僧。不知何許人。名明兆。字吉山。

性喜圖畫。朝揮暮灑。師僧大道戒之。不從。自號破草鞋子。將西遊兜紫。以作佛

涅槃像。塗逢異人。手授畫卷。有所自得。技愈進志益堅。而家素貧窶。不能得顏

料。乃就山後溪澗。碎石淘沙。磨爲五彩。於是涅槃像遂成云。後世稱其處曰

繪具谷。繪具者。卽顏料也。明兆終身。爲殿司役。因世稱兆殿司。及至近代。兆殿

司之名。遠聞于西洋各國。其畫神妙。亦可知焉。寺什又多藏漢土畫詩。晉顧愷

之筆維摩像。唐禪月筆十六羅漢像。宋閻立本筆釋迦二尊。吳道子筆釋迦文殊

普賢像。楊衒之畫墨梅。陳季昭黃鶴樓圖。趙子昂書陶淵明仰等。不遑枚舉。

（岡松栞谷贈東福寺觀上人詩。間遊過祇苑、勝泉與隱寶、樹色連溪動、苔紋隨地斑、飛聲落霄外、浮拱簇雲間、鳥下時求食、僧歸又掩關、風輪欣白社、返迹負青山、偶觀泥床食、忘情未肯還、

稻荷神社 在伏見街道第三橋南。奉祀五座。曰倉稻魂神。曰素戔嗚尊。曰大市姬

命。第四座卽地主神。第五座。謂五十猛命。大屋津比賣命。柵津比賣命。大歲神。

四神皆素戔嗚尊之子。元明天皇和銅四年。（唐睿宗景雲二年辛亥）二月。創設。延喜八年。後梁大

二年戊辰。左大臣藤原時平公。重修。稻荷山。在神社後。相距數町。稻荷。或作飯成。或

伊奈利。以國音相通也。（公崎藤堂稻荷社記）於菟鳴尊所生。曰宇迦之御魂神。是能播殖百穀。

神代卷。前神後神。以其功德等。故受其名。亦同也。神至和銅年間。

以二月上午。降於王鏡伊奈利之山。乃皇國社稷之一守。故延喜式。定著爲名神大。而上下延祀。遍

於天下。耶國。其祭也報而不祈禱。是正祀也。其以泥狐從祀者。昔神之降於伊奈利山也。山有白狐。窟

宅社旁。沾其殘芳。腥漚。奔走先後。鉗齧稷顆貌。故名曰使蒼云爾。中世以來。仍牽引雲典所云。託

足天。以冒宇迦之御魂。直指白狐。爲稻荷神。而黃髮赤髯。儼踞神社。斯民之所而求福者。無地無

之。此謂媚竊而忘天。仍奴而爲主。所謂淫祀之甚者也。余山中多狐窟。世俗所謂稻荷神使

者。三峯等舊跡。在焉。

五條橋 幅四間二尺。長四十八間三尺。昔者。架於今松原通路。豐臣氏之時。始移

於此。此地。舊屬六條坊門通路。世傳。源義經。與僧辨慶。初相見之處。

神宮教會所 在寺町通。綾小路東。明治之初。創設。隸伊勢神宮教院爲遙拜伊勢大廟之處

四條橋 幅四間。長五十四間。康治元年。高宗親興十二年壬戌是爲架橋鴨川之始云。四條綽涼。語詳鴨川條下。

高瀬川 鴨川分派。自二條橋下。凡一町許。西折而南流。過竹田。伏見街道。遂入淀川。慶長十六年。明神宗萬曆十九年辛亥德川氏。將大修理皇宮也。甚難挪搬巨石大木。角

倉了以。奉命。開鑿此河云。(高瀬難吹) 數條繩曳幾艘舟、野許聲聲樹急流、利瀨于今深似水、後人尙憶角瀨否、

新京極 此地舊屬寺院地域。明治之初。劃成一區。北自三條通。南至四條通。名

新京極。酒樓飯舖開焉。雜劇遊技設焉。甲歌乙舞。彼呼此叫。老幼婦女。連袂而

步。遠近行客。曳筇而行。晝夜喧囂。四時雜沓。世人。因併大阪千日寺前。東京淺

草寺中。稱三府三熱鬧地。

電燈會社 在高瀬川西。明治廿年。創設。資金拾萬圓。擦製電光。俾致各地之隱。會社者。猶言公司。餘倣此。

六角堂 在六角通烏丸東。稱頂法寺。兼修天台真言二宗。緣聖護院。開祖即聖德

太子也。本堂安置如意輪觀音黃金像。長一寸八分。其堂形六角。故稱六角堂。

御影堂 在五條通寺町西。稱新善光寺。時宗。天長年中。唐敬宗文宗間檀林皇后。詔僧

空海。建之。檀林皇后者。謂嵯峨天皇皇后橘氏。尤奉佛法。又稱光明皇后。中興

祖曰應阿上人。本尊像。摸信州善光寺阿彌陀佛像。故稱御影堂。後居坊中者。以

製賜子爲業。我俗呼屬子。曰御影堂。蓋基於此云。

長講堂 在下寺町五條南。昔者。後白河法皇所建。稱六條御所之別殿。法皇屢幸

此堂。親展亡靈名帳。念佛講經。以祈其冥福矣。因稱長講堂云。法皇以後。天子

親王。奉行其例。亦不少也。

京都停車場 即鐵路車站也。在七條通南。場西接京都鐵道停車場。轉乘則當經島原二條花園嵯峨。前赴丹波地方也。其東接奈良鐵道停車場。轉乘則當經伏見桃山水幡宇治柏里水津等。前赴大和地方也。

本願寺 淨土真宗。又稱一向宗。開祖曰親鸞上人。初名善信。本姓藤原。父名有範。曰野氏。歷仕二條高倉兩朝。爲皇太后大進。母源氏。幼失怙恃。爲伯父範綱所養。年甫九歲。師事青蓮院主茲圓。削髮爲僧。改名範兼。既長。遂極天台宗義。兼修他宗。自謂佛法之要。在於濟度衆生。拘泥宗旨。不察世變。何得道俗解脫之便法也哉。更從源空。脩淨土宗。改名綽空。時年二十九。實建仁元年也。朱寧嘉泰元年辛酉開白藤原兼實。夙奉源空之教。亦欲講凡夫往生之道。乃謀得源空弟子。娶以其女。源空輒舉綽空應之。旣而源空之謫也。綽空亦流越後。居五年。遇赦歸京。於是更名親鸞。歷游諸國。二十餘年。元仁元年。朱寧嘉泰十七年中留錫常陸。時著教行信證

七五

七六

六卷。始開淨土真宗一門。曰王法爲本。曰他力本願。門徒漸進。寺院遍於郡國。其稱真宗。畧言之也。弘長二年。宋理宗淳二年壬戌十一月廿八日寂。年九十。荼毘于東山。藏骨於大谷。後十年。季女覺信尼。孫如信。相謀建寺于墳墓上。龜山天皇賜號久遠實成阿彌陀本願寺。明治九年。十一月。賜諡見真大師。五世孫曰蓮如上人。當是之時。王室式微。足利氏政衰矣。群雄割據諸國。後柏原天皇踐祚。蓮如奉獻黃金。初得行即位禮。乃勸許稱御門跡。門跡者。謂照遵奉待法皇之禮也。於是門徒愈多。真宗益盛。然戰國之世。移寺京都大阪間。屢矣。第十世曰顯如上人。名光佐。大興織田氏戰。旣和。致大阪。移京師。豐臣氏之伐島津氏也。誘其門徒。通薩摩之道。以功。建寺于六條西。是爲本願寺本山。顯如有三子。長曰光壽。即教如上人。季曰光昭。即蓮如上人。顯如寂。光壽嗣。居三年。豐太閤命光壽。讓弟光昭。光壽遊于四方。關原之役。二人皆通款德川氏。東照公入京師。光壽迎之。

大津。賀大捷。公曰。光壽本當嗣也。乃爲建寺于六條東。令天下門徒。分屬東西。故光壽卽東本願寺祖。而光昭卽西本願寺祖也。若他佛光寺派。高田派。水邊派。興正寺派。出雲寺派。山元派。誠照寺派等類。其源一也。今不載焉。或將於各條下說之。

東本願寺 在烏丸通七條北。慶長七年。明萬曆三十一年壬寅。德川氏賜地四方六町。以建寺焉。本堂安置親鸞上人像。係上野廣橋妙安寺舊藏云。元治元年。漸同治四年甲子七月十九日。罹兵燹。至今代。大興土木。以復舊觀。又置別院于海外各國。以謀布教。

涉成園 俗稱枳殼殿。爲東本願寺別第。在上珠數屋町。寬永年中。明崇禎十二年。德川將軍所賜。此地。往古。左大臣源融。建河原院之遺址。而挪搬桃山古城木材。構造亭館。植枳殼。遶外牆。因稱枳殼御殿。庭園幽邃。有滴翠軒。傍花開。印月池。臥龍堂。五松塙。侵雪橋。縮遠亭。紫藤岸。偶仙樓。雙梅簷。漱枕石。回棹廊。丹楓溪。

西本願寺 在堀川通七條北。本堂安置親鸞上人坐像。世似。上人嘗親刻其像。長二尺五寸許。授之女爵信尾。上人寂後。璽信粉碎遺骨。和漆塗之。俗稱骨肉御影。是也。寺中。經藏。節堂。鼓樓。唐門。白書院。黑書院。關雎殿。綺春殿。永安館。集會所等。輪奐之美。不能詳記。大教授。在臺所門前。扁曰眞宗學序。明治十一年。創建。

滴翠園 在集會所東。有閣二層。稱飛雲閣。昔者。豐公所建聚樂亭之物。閣中壁畫。狩野元信筆。庭園則有滄浪池。龍背橋。踏花塙。蝴蝶亭。夜光石。黃鶴臺。青蓮榭。嘯月坡。澆花亭。醒眠泉等諸勝。八景及二十勝文詩。亦不載于此。

本國寺 在堀川通。松原南。號大光山。日蓮宗一教派之本山。初在相州鎌倉松葉谷。稱法華堂。開祖曰日蓮上人。貞和元年。元順宗至正五年乙酉。光明天皇。賜地於此。東西

二町。南北六町。六條判官源爲義邸址。本堂置法華經。立像堂。安釋迦像。方丈
曰妙法華院。扁額。水戸義公筆。畫則狩野永徳也。上人。幼字藥王麻呂。本姓藤原。
父名重忠。稱實名次郎。母清原氏。生子安房國小湊浦。年甫十二。學真言密乘於
清澄寺道善房。延應元年。宋理宗嘉熙三年己亥削髮爲僧。稱是性房蓮長。後改今名。周游四
方。屢訪賢哲。研究諸宗奧義。遂創一宗。專據妙法蓮華經。因稱曰蓮法華宗。時
建長五年。宋理宗寶祐元年癸丑四月也。歲三十一。既抵鎌倉。居松葉谷。著立正安國論。見
執權職北條時賴。大論佛法正邪。弗聽。謫伊豆國。居三年。遇赦。文永五年。宋度
淳四年元世祖至元五年戊辰蒙古使來。益唱立正安國論。屢諫內憂外患之可恐懼警戒也。有搆讒
者。處斬。時賴子時宗。城死一等。流于佐渡。凡五年。遇赦。知不可復有成於天下
也。隱居甲州身延山中。弘安五年。元至元十九年壬午十月十二日。寂于武藏國荏原
鄉。池上宗仲家。年六十一。後醍醐天皇勅賜大菩薩之號。由是信徒皆稱曰蓮大

十九

八〇

菩薩。一致派之外。有勝劣派。又分爲五。曰興門派。曰本成寺。曰妙滿寺。曰八品
派。曰本隆派。而一致派亦別開不受不施派。今不敷焉。寺什。有稱爲慈受陀羅者。
日蓮筆也。而其黃裝。則用楊貴妃袍衣云。

空也堂 又稱紫雲山極樂院。在蛸藥師通。油小路西。時宗。天曆三年。五代漢隱帝乾
創建。開祖曰空也上人。名光勝。醍醐天皇皇子。幼有方外志。詣尾張國分寺。削
髮爲僧。後登叡山。從慈惠學。居常愛鹿。平定處夜獵殺之。既悔。爲有髮僧。刺其
皮爲裘。插其角於杖頭。口誦空也所作和讃。或鳴鐘或鼓瓢。勸化都鄙。稱踊念佛。
今世所謂鉢叩者。其遺風也。

菅大臣神社 在西洞院通。高辻北。注者國字。謂十字街也。此地。古爲參議菅原是善卿第。是善。
即菅公父。公實生於此。社南有誕生水。又世所謂飛梅。在其西南隅。飛梅詩載在北
王生寺 又號寶幢三昧寺地藏院。在緩小路通西端。王生村。具言戒律二宗。屬南

都招提寺開祖曰快賢。藤原氏。關白道兼公族。從智證大師。極天台奧義。正曆二年。宋太寧元年。命工定朝。刻地藏佛像。千日。乃成。長三尺餘。建堂置之。號小二井寺。永承六年。宋仁宗嘉祐二年。十一月十六日。寂至建保中。大和人平宗平。更建堂宇。崇德十四年。自魚棚室町。始移於此。會有肥前島原之亂。於是遊客醉人相戲而言。勇往奮進。當攻島原。以挑戰耳。連呼島原島原。遂以爲名云。嗚呼。行儀之地。忽爲非禮之地。可笑之語。輒遺事云。長安。有平康坊。妓女所居之地。北里志云。平康里。入北門。東回三曲。卽諸妓所居之聚也。我所謂遊廓。卽遊里也。割其經界。不使他肆。廓。居于此之義。東京之芳原。大阪之松島。皆無不然。寬永十八年。明崇德十四年。宗德六年。辛巳。自魚棚室町。始移於此。會有肥前島原之亂。於是遊客醉人相戲而言。勇往奮進。當攻島原。以挑戰耳。連呼島原島原。遂以爲名云。嗚呼。行儀之地。忽爲非禮之地。可笑之語。輒

成不朽之名。名實不相稱。清濁易相混。世事人爲。千變萬化。豈獨此一地方也哉。六孫王神社。在八條西櫛司。奉祀鎮守府將軍源經基公之處。公貞純親長王子。清和天皇第六之孫。世因稱六孫王。始賜姓源。實爲清和源氏鼻祖。此地卽其邸址也。又有貞純親王。及多田滿仲祠。承久年間。宋寧宗嘉泰元年。創建。今列鄉社。經基後有賴朝。始開廟。府于鎌倉。與清經有隙。清經逐逐吳羽。既過輕井澤。渡海入滿洲。世傳清經後裔大興。以其爲清和源氏後。國號曰清。乾隆帝嘗作序文。略述其事。誤之圖書集成中。國人忌而刪去之。故今不傳。近世又著義經再興記。傳此。吳關。余未之見。教王護國寺。在九條大宮西。俗稱東寺。真言宗。開祖曰弘法大師。名空海。讚岐多度郡屏風浦人。佐伯氏。父名善通。母阿刀氏。夢僧入懷。有身。寶龜五年。唐代宗大曆九年甲寅。六月十五日生。適丁唐不空三藏入寂之日。於是。世人以空海。爲不空之後身云。年甫十三。從舅氏。讀書屬文。十八。出游京師。著三教指歸。以表其志。既請石淵寺觀操爲僧。更受戒東大寺。時年二十二。一夜夢知大和久米道場。藏大毘盧遮那經。乃往得之。遂起入唐求法之志。延曆廿三年。唐憲宗貞元二十年甲申。從遣唐使。至于長

安。親受眞言密法於青龍寺慧果和尚。時年二十一。居二年。歸朝。奉旨弘教。弘仁四年。唐懿宗元和八年癸巳。創建寺于京師。原屬鴻臚館。蓋倣漢土賜鴻臚館於不空三藏。以爲精舍之例。今乃分其館爲二。賜右館於空海。號東寺。賜左館於守敏。號西寺。

七年。唐貞元十一年丙申。更賜地紀州高野山。建金剛峯寺。平城嵯峨淳和仁明四帝。及嵯峨皇太后。淳和天皇。皆受其灌。真如親王。如意尼等。則爲法弟。承和二年。唐文宗大和九年乙卯。

三月廿一日寂。年六十二。後歷八十餘年。醍醐天皇賜諡弘法大師。（唐馬總詩）何乃菟里來。可

非衡其才。增學助玄機。士人如子稀。蓋空海嘗作離合詩。與僧羅上。會元馬總讀之歎曰。有國云。（胡伯榮詩）說法四句演星尼。凡夫聽者羅歸依。天假吾師多技術。就中草聖最狂逸。（朱千乘詩序）

送日本國三藏空海上人。明宗我唐。兼資方物。而歸海東詩并序。滄海無垠。極不可究。海外細回。明宗我唐。即日本三藏空海上人也。能梵書工八體。精俱含積三乘。去秋而來。今春而往。區宇雲水。

扶桑夢中。何方異人。故國難渡。擬乎凡聖。不可以測識。亦不可以智知。勾踐相遇。對江同程。耶堪此情。離思增遠。願珍重願珍重。元和元年。春。姑洗之月。卿厚當時少留云。古貌宛休公。說真說吉空。應倣六祖後。雄化妙契中。去歲辭秦關。今春赴海東。感懷易舊德。文字冠儒宗。留學蘭微

旨。玄關發法崇。波波無際礎。振錫路何窮。水宿鳴金塔。臺行待玉童。承恩見明主。偏求僧家風。（朱少端詩）禪客福州來。中華謁帝回。臨空猶振錫。過海素浮杯。佛法達人授。天書到國開。歸佳二萬里。後會信悠哉。（沙門曼姑詩）異國桑門客。乘槎望斗星。來叨出天子。歸禮竺乾經。萬里洪濛白。

三乘孤鶴寄。到宮方奏對。圖像到王庭。（沙門鴻漸詩）祈居一海隅。鄉路祖州東。到國宣周禮。朝天得俯風。山冥魚鳬遠。日正鰲機空。人至非徐福。何由寄信通。（鄭王詩）承化來中國。朝天是外民。異才維作侶。孤嶼自爲隣。雁塔歸珠域。鯨波涉巨津。他年綴僧史。更載一賢人。又有開成四年。正月廿二日。青龍寺僧雅賢。其文云。青龍寺東塔院傳法灌頂承襲弟子義通等十八。上信物道具經法等。五鉢鈴一。三鉢杵一。銅鉢杵一。已上三事。故大德西果先師受持道具。充空海阿闍梨形前供養。云云。開成四年。即我承和六年。己未。距空海死。僅四年也。蓋爲其三年忌辰供養者歟。

大師之在世也。舉國無所不至。布教之餘。穿山填谷。建置廟宇。開拓繁華。繁殖物產。又尤善書札。史云。嵯峨天皇。亦善書。每與空海。競其優劣。一日。天皇手

出法帖。曰。是唐人墨跡。朕甚愛之。只恨未知何人筆也。空海曰。是臣在唐時所寫者。天皇以其體異。不信。空海乃裂軸奏覽。卷末書某年某月沙門空海書于青

龍寺。天皇始嘆服。又嘗詔改殿閣諸門號。弘仁九年。四月。即唐元和十三年。戊戌。皆題榜之。東西二

門。親染宸翰。南門則空海。爲應天門三字。北門則楠逸勢。逸勢。奈良麻呂孫。入

居之子。與空海。共遊于唐。唐人呼曰楠秀才。（僧傳）據小序云。奉送日本國使空海上人。法嗣有眞濟。眞雅。眞惠。道雄。圓明。眞如果。隣。泰範。智泉。忠延。十八。世比之釋迦十大

弟子。而其後分爲六派。又分爲十二派。遂致七十餘流之多。今大別之。曰古義真言。曰新義真言。東寺屬古義真言。門四。南曰南大門。置金剛力士。西曰華蓮東。曰慶賀。北曰八足。金堂則安置藥師佛。豐臣秀賴再建。秀賴、豐太閤、長子、見前條倣東山大佛殿。講堂安大日如來。食堂安千手觀音。左右堂中。置夜叉神。係空海作。五重塔。正保元年。明崇德十七年。順治元年甲申。再建。高二十八間六尺。西院。空海影堂也。有大日不動。四天王。般若菩薩。大黑天等像。皆空海所刻云。又安置桓武天皇御牌。三鉢松。在西院前。世傳。空海在唐。投三鉢杵。卜本朝當建寺院之地。得三處。曰山城。曰紀伊。曰土佐。室生山。是地。此松則其杵之所止也。灌頂院。密法傳授之處。寺什。山水屏風一隻。唐憲宗帝所賜之物。尤稱奇品。其餘。不空絹索觀音等古畫佛像。皆盡係壹千年前作云。

下加茂御祖神社 在愛宕郡下鴨村。官幣大社。奉祀二神。曰玉依日賣尊。曰建角身

八五

尊。白鳳五年。唐高宗儀鳳元年。元年丙子。創建。歷朝崇敬。以至今代。每年。五月十五日。勅地方官致祭。世稱葵祭。始於欽明天皇之時云。懸葵於冠。載花於傘。牛車馬鞍。衣服器仗。盡倣古樣。未曾變易。御手洗川。在神社東。古木鬱蔥。曰糾森。三伏不遇其暑。唯有清氣襲人。肅然身支生粟之概而已。

智恩寺 在田中村。號長德山。俗稱百萬遍。淨土宗。鎮西派之本寺。初係天台慈覺大師創建。爲加茂上下二社之神宮寺。後至圓光大師。改淨土宗。元弘元年。元英宗至順二年。辛未。天下大疫。後醍醐天皇。勅第八世住持善阿。禪之。善阿期七日念佛號。凡百萬回。既而疫熄。天皇大喜。賜號百萬遍。寺什。有古硯。銘松蔭。宋孝宗帝。贈平相國。相國名清盛。平氏。安德天皇外祖。爲太政大臣。清盛事詳後條又十體阿彌陀像佛。僧惠心筆。蝦蟆鐵拐壽。顏輝筆。

詩仙堂 在一乘寺村。石川丈山遺蹟。堂宇今尙存焉。丈山。名。重之。又號六山人。

八六

姓源。參河人。事東照公。爲旗下士。大阪之役。建先登第一之殊功。然以其犯軍律。致仕。隱居京洛。詩書自樂。我邦中古。藤原定家公。嘗居于京西小倉山莊。選古今善和歌者三十六人。稱三十六歌仙。丈山乃倣此例。自選漢土善詩者三十六人。請其友狩野尚信。畫其像於四壁。而自綴其詩。在左壁者曰蘇武。謝靈運。杜審言。李白。王維。高適。儲光義。韋應物。韓愈。劉禹錫。李賀。杜牧。寒山。林通。梅堯臣。歐陽修。黃庭堅。陳與義。十又八人。在右壁者曰陶潛。鮑照。陳子昂。杜甫。孟浩然。岑參。王昌齡。劉長卿。柳宗元。白居易。盧同。李商隱。靈徹。孫雍。蘇舜欽。蘇軾。陳師道。魯幾。十又八人。於是稱詩仙堂。與林羅山諸儒交遊。而賦和歌。以述不事王侯高尚其事之志。後光明天皇聞丈山善隸。詔徵其書。京都所司代板倉重宗。重禮師事之。所司代官名。而尹之類。朝鮮權式。稱丈山曰日東李杜。物徂徠亦曰。東方詩傑。寬文十二年。消聖祖康熙十年辛亥。五月廿三日。卒。年九十。遺稿有

八七

寶曆集。所藏書多係明版朝鮮板。近代有好事者。刻詩仙堂誌。圖錄書畫琴几等物。以行于世。和春風詩。自爲墓誌。置孤邸。夙定青山埋骨謀。封侯不換林泉寶。方禪當年第一流。余存謂當時三河武士。而有文事者。幾希。獨有石川琢石衙門耳。而今、托名於犯軍律、不宣其功、却邀致仕、固非無謂也、蓋大阪而役、豐氏君臣、陣亡殆盡、否者則降、雖如天下無可復愛、然京畿地方、一旦事起、不保無擁戴天子、號令四方、因以謀德川氏之徒也、於是、東照公錫振石川、隱居京師、陰視世勢、以備不虞、故無事則止、苟有事則丈山豈可詩畫以終其身者哉、公之善用人亦可以見焉、乃賦一詩、云、休言遐世伍漁樵、試看朝聞槍管條、藉口詩仙樂風月、移居洛北、隱天朝、圓光寺 在一乘寺村。號瑞岩山。禪宗。緣南禪寺。安置千手觀音坐像。係運慶刻。中興祖曰二要和尙。嘗奉東照公命。移足利學校於此寺中。且賜朝鮮板書二百部。及木刻活字十萬字。我邦活字。實始於此。寺什。趙子昂書七言絕句。八首八幅。尤稱珍品。寺後有東照公廟。僧二要所勸請云。源庵漫錄。余少好學。家貧無書。友人越智君。家富藏書。每朝夕於其家。乞借讀之。君以遺其先君某者也。故其藏。竊本居年。而往往世間未嘗有者。在焉。寔希世珍。按甲乙綱言云。所取殆乎十年。以故。其學稍得進矣。不亦幸哉。君家藏本。相傳。昔豐太閤征韓時。其將浮田黃門。所取劉玄子徒明鮮還。言彼中發集。多中國所無者。且其刻本精良。無一字不做趙文敏。惜爲倭奴殘毀。至國還之間。往往以費幅抵穢。亦與籍一大厄會也。由是觀之。我兵入其國。勇悍士卒。蹂躪八道。或

八八

當不免有是等凶狀、若夫浮田氏、雖固非加蘇肥州喜草、航海中讀魯論之比、然尙且觀典藉於此厄會、擲回遺人、亦可不謂好學之良將也哉、劉言所說、刻本精良、尋末之見、其遺迹倣趙文敏、則信有之、越智君名正隆、字子樹、
江戶縣宮曲直瀬養安院君男、

修學院 往昔亦國僧房。後廢絕矣。僅存村名。後水尾天皇。明末^{初滿}愛其地勢。特建離宮。俗稱御茶屋。嗣後。歷世天子。屢幸臨焉。分苑爲二。曰上苑。曰下苑。下苑有瞻月觀。藏六庵等亭榭。上苑有隣雲亭。止止齋。窮遠軒等。苑中八勝。曰隣雲夜雨。曰茅檐秋月。曰村路晴嵐。曰修學晚鏡。曰遠岫歸樵。曰松崎夕照。曰紬峯暮雪。曰平田落雁。而今以其爲離宮。不准閑人進門。

御蔭神社 在高野川東。又稱御生山。屬加茂神社。上古御祖大神降臨之地。因奉祀高產靈尊。天照大神二神云。

加茂別雷神社 在上加茂村。官幣大社。奉祀加茂別雷神之處。世傳玉依日寶尊。遊于石河瀬見小川上云。卽今鴨川。本社創建。與御祖神社同時。而勅使致祭。

亦同其例。曰上加茂。曰下加茂。以神社之在河流上下。有此稱耳。神林之幽。別社之多。有勝于下加茂者。

八瀬里 在高野村北。壹里許。綴山西麓。八瀬或作矢背。以國音相通也。世傳。天武天皇。^{唐高宗咸亨三年壬申}與皇姪大友戰。不利。矢中其背。既瘡。故名其地。

大原女 自八瀬北壹里。至大原鄉。爲若狹街道。此地方婦女風俗。與都人迥別。服黑衣。裝其裳。手脚皆着白衣。束髮垂頸。亦以白手巾包其額。而頭上藏物以行。晉京貿易。茶筐魚籃。梯櫓薪柴等屬。未嘗肩荷背負也。京人呼稱八瀬女。又大原女。自古至今。不改其俗。亦一奇觀。

無音瀑 在大原村。來迎院東。瀑高六丈。幅二間五尺。傍崖徐下。漱石無聲。因號無音。流爲二派。注南曰呂川。北曰律川。蓋倣淡土魚山之稱云。

三千院 在呂川北。天台宗。往古。法親王爲座主。或稱櫻井宮。或稱梨本宮。又稱

圓融院御門跡。是也。寬和元年。唐太宗顯慶二年乙酉花山天皇。勅惠心僧都。創建此寺。其結構自異於他寺院。本堂安置丈六彌陀。左右觀音勢至。皆坐像也。而如意輪坐像。實壹千貳百年前物云。至今代。廢御門跡等稱。只曰三千院。寺什屏風。畫比叡山全圖。御繪所法橋了琢筆。亦足以觀元龜兵燹以前。宏壯觀美之狀。

比叡山 往古。作並枝山。曰枝山。曰吉山等。以國音皆通也。屹在山城近江國界。其最高處。曰四明嶽。世傳平將門。嘗與藤原純友。同登比叡山。俯瞰皇城。曰。壯哉。大丈夫不當宅此耶。將門事蹟。載後條下。即爲此嶽。矗立千九百尺。京都宮殿市坊。縮聚於一望中。今猶古也。山上有二塔。曰東塔。號止觀院。在無動寺北。曰西塔。號寶幢院。在東塔北。曰橫川。號楞嚴院。在西塔北。昔者源義經。僕辨慶。居此。因稱西塔武藏坊。義經等事。載後條下。山谷峻隘。僧徒強暴。自保元平治之亂。至南北兩朝之戰。無垢淨土。每爲修羅塲。屢矣。後逢織田氏火攻。寺宇遂墟。而登高放眸。未嘗改觀。琵琶

刹延曆寺。在焉。

延曆寺 又稱一乘止觀院。天台宗之本寺。延曆七年。唐德宗貞元四年戊辰桓武天皇。勅建此

寺。開祖曰傳教大師。名最澄。姓三津氏。近江滋賀人。年甫十二。從大安寺僧行表。削髮爲僧。十八得度。二十受具足戒。結廬於此山中。坐荊棘臥雨露。詎起信論華嚴經等。後至南都。得立義文句止觀二大部。晝夜研究。遂通天台奧義。誓弘此法。歸山。創建根本中堂。即一乘止觀院。又號比叡山寺。十二年。唐貞元十一年甲戌大修供養會。天皇行幸。文武百官。從之。既賜號延曆寺。又分近江正稅。以充寺資。年三十八。奏請與僧空海。從遣唐使。至長安。後登天台山。受菩薩戒於國清寺道邃。法要經書於佛隴寺行滿。真言三部等於越之龍興寺惟象。北宗一派於唐興縣脩然禪師。無往而不自得焉。明年。歸朝。獻經卷貳百二十部等。天皇大喜。詔益弘

其法新唱天台法華宗。弘仁十三年。唐穆帝長慶二年壬寅。六月四日。寂。年五十六。後歷四

十五年。清和天皇賜諡傳教大師。大師之號。始此。(最澄傳記)最澄因梨、形雖異、

域性質同源、特稟生知、觸類應解、

遠求天台妙旨、又遇龍泉遂公、總焉行於一心、丁未途於三觀、親承秘密、理絕名言、體慮他方學徒

不能信受、所謂當州印記、安可不任爲憑、大唐貞元廿一年、二月廿日、朝議大夫持節台州諸軍事守

台州刺史上柱國陸淳給、又曰、孔夫子云、吾聞西方有聖人焉、其教以漸、非無爲爲本、不樂不著爲

妙、其化人也、具足功德、乃爲圓明、最澄懷梨、性稟生知之才、來自禮義之國、萬里求法、視險若

夷、不憚艱勞、神力保護、南登天台之嶺、西泛銀湖之水、娑智者之注門、可謂法門祖象、哥連出池、

將此大乘、徃傳本國、求茲印信、執以爲憑、昨者、陸台州、已與顯記、故具所親、爰申直筆、大唐貞

元廿一年、五月十五日、銅鑄耶使持節明州諸軍事守明州刺史上柱國陸陽鄭雅則(附注最澄三藏誓)

比丘僧道遂、稽首頂禮天台大師、竊以法王出世、一言預說、機感不同、所開蓋異、故權贊之教、孩

於諸部、大小之文、終然殊殊、要其所歸、無越一旨、云云、古德相傳曰、昔、智者大師、隋開皇十七

年、仲冬二十四日、平旦、告諸弟子曰、吾渡後三百餘歲、生於東國、興隆佛法、若有感應、先早萌發、

則一法鑄授空、倏忽而入空、學衆雖慕瞻、終不知所屆、而今聖體有徵矣、遇最澄三藏、不是如來使、

豈有堪難幸、然則開宗示奧、以法傳心、化隔近海、相見杳然、共持佛慧、同會韻華、大唐貞元二十

一年、歲次乙酉、二月朔、癸丑、十五日、丁卯、天台妙門道遂(送最澄上人還日本國并序)過去諸佛、

爲求法故、或碎身如塵、或捐軀殫虎、嘗聞其說、今觀其人、日本沙門最澄、宿植善根、早知幻影、處

世界而不著、等虛空而不凝、於有爲而證無爲、在煩惱而得解脫、聞中國故大師智顗、仰如來心印於

天台山、遂發黃金沙亘海、不憚滔天之駭浪、不怖映日之驚龍、外其身而身存、思其法而法傳、大哉、

其求法也、以貞元二十年、九月二十六日、臻於海郡、謁太守陸公、獻金十五兩、就衆發佛二百挺、宛

聚並二簪、銀灰墨四挺、刀子一、加斑組二、火鐵二、加灰石八、楠木九、水精珠一貫、陸公精孔門之

奧旨、繼經國之法才、潛比水鏡、明逾日月、以紙等九物、達於庶使、返金於師、師譯言請、貨金買

紙、用置天台止觀、陸公從之、乃命大師門人之蕭哲、曰道遂、集工役之、逾月而畢、遂公亦開宗指

畫焉、區澄忻然、瞻仰作禮而去、三月初吉、璽方景鑒、酌新茗以饗行、對春風以送遠、上人還國滿

矣、知我唐聖君之御宇也、其詩云、重譯越滄溟、來求觀行經、問卿朝指日、尋路夜看星、得法心愈

喜、乘槎機自寧、扶桑一念到、風水豈勞形、貞元二十一年、己日、台州司馬吳彌(台州錄事參軍孟

孔詩)往歲來求請、新年受法歸、焚香隨貝葉、一雨灑禪衣、案牘經翻浪、征帆暫落暉、通知到本國、

相見道流稀、(台州臨縣令毛泮詩)萬里求文教、王春館別離、未傳不住相、歸集祖行詩、舉筆論番

意、披香問漢儀、莫言滄海潤、杯度自應知、(緬貢進士崔諒詩)一葉來自東、路在滄溪中、遠思日遠

國、却逐波上風、問法言語異、傳經文字同、何當至本處、定作玄門宗、(廣文館進士全濟詩)時家與

扶桑近、煙波望不窮、來求貝葉偈、遙過海龍宮、流水隨歸處、征帆遠向東、相思渺無畔、應使夢魂

通、(前國子監明經林垵詩)求獲真乘妙、言歸倍有情、玄關心地得、鄉思日遯生、作愁愁雲布、浮杯

漲海情、看看蓬彼岸、長老散花迎、(沙門行滿詩)異域鄉言別、觀心法性同、來時求半偈、去罷悟真

空、貝葉鹹經疏、隨程大海東、何當到本國、繼踵大師風、(天台歸真弟子許闡詩)遠寄心轉畔、盡重

意唯堅、不懼洪波濤、中華訪法緣、精勤同思可、廣學等彌天、歸致扶桑國、迎人擁海燒、(喬幻夢詩)

却返扶桑路、還乘舊葉船、上潮看落日、翻浪欲滔天、(求宿寧過日、雲行詎隔年、遠將乾竺法、歸去化生緣、)法嗣曰慈覺大師。名闡仁。姓王生氏。

下野人。年甫十五。師事傳教。既詣東大寺。受具足戒。年三十七。入唐。受梵學於

宗綽。灌頂於金雅。摩訶止觀於五臺山志遠。金剛界大疏於大興善寺元政。真言

印契於青蓮寺義真。承和十四年。唐宣帝大中元年丁卯。歸朝。傳教之遺業。至此大成云。齊

衡元年。唐大中八年甲戌。爲延曆寺座主。貞觀六年。正月。寂。年七十一。賜諡慈覺大師。

(唐僧懷白)送圓仁三藏歸日本國詩。家山臨曉日。海路信歸鴻。樹滅漳無岸。風生只在潮。歲窮程未盡。天末國仍遙。已入闍王夢。香花境外邊。又有智證大師。名圓珍。

姓殷。義真弟子。奉旨入唐。尤極合密二門。多所發明。旣而歸朝。更開一法門。爲

園城寺別當。於是。天台法華宗。分爲二。曰山門。屬比叡山。曰寺門。屬二井寺。即

園城寺。圓珍爲其開祖。事詳載三井寺條下。(單卿貢進士沈備。國清寺止觀堂記。稱者。我大中

七年。九月十日。有日本國大德僧。法號圓珍。俗姓殷。自扶桑而來。抵于巨唐。福建。旋遊五臺。復止天台國清。傳西域金人之教。我師幼能拔俗。剃度出家。云云。以十

年九月七日。建成矣。法師即住持此院。苦節修行。以無爲心。得無得法。遂擧瓶錫。告別東歸。即十

二年。六月八日矣。有趙郡李處芳名達。爰來告殷。與師有舊。東望雲外。空樹浩然。仰梵宇之寬。所

其功莫大。乃命子。贊錄其事。唯慙不文。咸通二年。五月十日記。按咸通二年。即我清和天皇貞觀三

年也。初貞元中。最澄明一院於國清寺。會昌之後。漸毀。圓珍捨財建止觀院。以報其師之志。令清胤

主之。衆稱其有後。潛稱即唐僧名。又(今昔物語云)仁壽三年。八月九日。唐旣良呼。將歸其國。圓珍

同乘其船。風順東駛。十三日。申刻。北風忽起。十四日。辰刻。漂到琉球國。琉球國喰入之地。旣而風

歇。船亦不搖。岸上有八數十成群。手執刀戈。良師恐危不措。圓珍乃祈不動尊。忽遇暴風。指乾位

行。送到福建。云云。是此琉球即隋書所謂大琉球。而今臺灣島也。

歷世天子。無不崇尊師依。醍醐天皇皇孫明教僧正。

爲座主後。非法親王。不得襲其職也。於是。青蓮妙法圓融三院門跡。交出爲座主

云。護良親王。亦嘗爲山門座主。稱大塔官。事詳末篇。元龜二年。明仁宗隆慶

寺院

盡罹兵燹。天正十二年。明隆慶十一年甲申。豐太閤再興。寬永年中。明末

大故公重修。今存

者是也。根本中堂。在東谷。安置藥師佛像。最澄作。一乘戒壇堂。堂下墀敷淡土

五臺山土。文珠樓。文珠像做五臺山刻法。前唐院。慈覺大師廟。淨土院。傳教大

師廟。相輪樣。相。視也。相輪者。瞻仰之義。樣。杜也。世傳。此山用樣。不建塔。

樣高四丈五尺。凡九層。上層徑八寸。下層徑壹尺六寸。弘仁十一年。唐元和十

月。建立。椽中藏法華經大日經等五十八卷。銘云。爲悅冥道。起斯輪椽。又云。亦

塔亦幢。延壽安身。惟經推咒。護國濟人。青龍寺在照谷。淨土宗祖源空嘗在於

此。因稱元照谷。慈惠大師堂。在中堂北。名良源。姓木津氏。近江淺井人。師事理

仙。受顯密秘奧。後補天台座主。又爲大僧正。永觀三年。興國八年癸未。正月二日。

寂。世因稱元三大師。安樂院。惠心僧都。嘗居於此。著往生要集。贈之宋四明僧

知禮。智禮以菩提樹意株。報之。其樹今尙存焉。

建勳神社 在船岡山麓。奉祀正二位右大臣織田信長公之隨也。公幼字吉法師。其

先出於平重盛。重盛、平相國朝盛子、事詳後篇條下織田氏。世爲尾張名族。父名信秀。其第二子也。

信秀自居古渡城。別城那古野。即各名古屋市置吉法師。令林通勝。平手政秀等傳之。甫十

三。加首服。名信長。稱三郎。當是之時。足利氏政衰矣。天下諸侯。互相吞滅。信長

西征東伐。所向無敵。遂朝京師。視宮闕頽廢。且先修理之。正親町天皇。嘉賞不

措。時永祿十二年也。明穆宗隆慶三年己巳足利義昭爲其第十五世將軍。攻信長不克。於是

足利氏亡。天子欲授將軍職。信長固辭。叙正二位。拜右大臣。信長尤憎細徒兒

暴。動輒戡亂天下也。攻比叡山。縱火燒之。又與一向僧。大戰于大坂。互有勝

敗。前後五年。初降。既遣其將羽柴秀吉。往攻毛利氏。及聞戰將有利。急令明智

光秀援之。留于信忠等。守二條城。而出安土。入京師。館于本能寺。天正十年。

明神曆十五年五月十五日。光秀謀反。昧爽。圍本能寺。森蘭丸以下百餘人拒戰不克。信

長自焚而死。時年四十九。信忠聞變。將赴援之。半途而還。娶二條城。亦自殺。諡曰

總見院殿。世因稱總見公。明治二年。詔建神社於此地。賜號建勳。

小野篁墓 在紫野雲林院東。壹町許田畝中。史云篁姓小野氏。參議岑守之子。少

喜馳馬。不事學業。嵯峨天皇聞而惜之。曰。斯人之子。而爲弓馬之士。何哉。篁慚

悔。折節讀書。弘仁中。及第。後累遷彈正右大弼。承和初。藤原常嗣爲遣唐大使。篁

爲副使。常嗣怒。第一船。篁爲第二船。既發。迴風回棹。常嗣以第二船堅牢。奏易已

船。篁忿志。遂稱病獨留。作西道謠。刺之。頗犯忌諱。遂流太宰府。途上文賦謫

行吟七十韻。人咸低誦。既與唐僧沈道固親善。屢相唱和。道固稱其富饒。後遇赦

歸。復爲參議左大辨。世稱野相公。嘗侍河陽館。天皇示詩一聯。曰。閉閣唯聞朝

暮鼓。香樓遙望往來船。篁奏曰。御製甚佳。改遙作空。更妙。天皇驚曰。此白居易

句也。遂本作空。聊試卿爾。卿詩情乃與居易同耶。時白氏文集始至。獨藏秘府。

世未有睹者也。第事母至孝。家素消貧。俸入皆施舊故。文章冠絕當時。又善草

隸。然爲人不羈。尤好直言。不爲當世所容。人呼野狂云。仁壽二年。唐高宗大中十

二月薨。年五十一。又傳。第嘗讀書于下野足利鄉。後人建賢舍於此地。所謂足

利學校。是也。(淡菴漫錄) 寬政癸丑、秋、余負笈、遊于下毛足利學校、詣寺僧、謁聖像、搜書庫、

創立也、然余檢國史諸書、其事不少概見、其說爲可疑矣、竊謂是必足利氏之所建也、然亦無舊記

可徵焉、則以其爲臆說、不敢語人、有年于茲、近聞平維禪東海談、引分類年代記云、足利滿兼、嘗

初學校於足利、收帳百漢士將來、先聖十哲畫像、祭器饗筵等、此推曰足利學校、義策、義康子、娶

北條晴政女、生義氏、後經百餘年、罹災、建武中興、足利穆氏謀叛、出奔西海、與朝池氏、限于多

多良濱、時狀師孔朗、遂得勝矣、於是、再造聖廟、以崇奉之、世世不絕祭祀、永無墜祖先之遺業也、

然則其創在足利氏之時、果如余所臆料、然分類年代記、余未審何人作、唯辨並博覽、定有所見、姑

錄俟博雅、又云、書庫所收、極二百七十二部、大抵百年以來、縉紳諸家所納、惟其中有上杉憲實父

子所納、尙載毛詩左傳配周易疏、及北條氏康父子所納、禮記文選、皆宋板也、其冊幅員甚大、與

今世始來書不同、文字亦多異矣、人或疑其非宋板、然書中證仁宗諱、尙字皆缺諱、又陳眉公泥古錄

云、元美公有宋刻前漢書、皆大、官板長尺五寸許、足利本、與此說符、則其爲宋板明矣、近世濠洲徒

所刊行、七經考文、是其所由出也、每冊卷末、記其姓名及奉納歲月、細楷可愛、恐係竊實氏康等手

寫、又別有古寫本論語義疏、亦三四百年前物、每卷印記藏文庫三字、未詳其何人所藏、或有校行

于世者、是其原本也、云云、余亦作記聖廟、門庭圯塌、利慈衆途、問其曠昔之所在、里人曰、在村

後塢、相繼散佚、往訪村吏、遂不得見之、後數年、有好事者、著足利學校事畧、刊行于世、記其

役塢、和

大德寺 在紫竹大門村。號龍寶山。禪宗。臨濟派之本寺。正中元年。元英宗泰定後醒

嗣天皇。勅僧妙超。建之。妙超字宗峯。姓紀氏。播磨人。年甫十一。寄書爲山。從

僧戒信。受戒。後詣鎌倉建長寺。師事南浦。參禪。既歸京師。住雲居寺。赤松園心

父子。爲建一寺于紫野。時有叡山玄惠法師。率其徒九人。奏排滅禪宗。於是辯

難論駁。無遺餘力。而不能挫妙超之禪機也。遂執弟子禮。別建方丈。使其徒宗印

歸禪。花園天皇。聞之。召見妙超。親問法要。賜號興禪大猷國師。至後醍醐天

皇。益加寵榮。染宸翰。寫高照正燈國師字。賜之。且以大德寺。爲第一祈願之處。稱

本朝無雙禪苑。延元二年。元順宗至元三年丁丑十一月廿二日。寂。年五十六。諸堂盡係應

仁亂後築造。山門經藏鐘樓等。無不具備。連歌師清長。茶伯千利休。及金森宗

和。小堀遠州等遺蹟尤多。而異珠庵。卽一休禪師之所居。一休禪師宗長利休等事詳載後篇條下。寺什。

沿革、國其器物、亦
可以供考古之材也、

後醍醐天皇筆。和漢朗咏集。牧溪筆。龍虎二幅。吳道子筆釋迦像。是其尤者也。

正覺寺 在西幡村。號吉祥山。禪宗。屬南禪寺。開祖曰宏覺禪師。名惠安。號東岩。

播磨人。從悟空禪師。修禪。弘長二年。朱興宗景定三年。元世祖至元十四年丁丑。宋僧兀庵來朝。乃往見之。

遂建此寺。建治三年。元世祖至元十四年丁丑。一月三日。宸賜諡宏覺禪師。

鞍馬山 屬愛宕郡。在京都北二里。遙對叡山。老杉蔽山。怪巖橫途。風景亦佳。昔

者。天武天皇。與皇姪大友戰。敗績。繫鞍馬於山下。故有此稱云。

鞍馬寺 號松尾山。天台宗。隸青蓮院。始兼戒律異言。開祖曰唐僧鑑真和尚。天

平寶字八年。唐代宗廣德二年甲辰。鑑真自唐來。既歸化。奉勅擬戒壇於南都東大寺。寶龜中。

移居于此。寶龜十年。冬。唐使高麗林。與新羅貢調使金闍等入朝。鑑真欲見鑑真。既返。乃作詩并序曰。因使日本。願與密和尙。既渡度。不覲每頓。嗟而遽懷。上方師佛教。名僧

號鑑真。懷誠通隣國。具如轉付民。早燃居五濁。寂滅離然。照禪院從今古。青松遶塔新。法留千載住。名記萬年春。後開百四十年。大中大夫藤原伊

勢人。亦得毘沙門木像。於北山叢林中。乃建堂安置之。更建觀音堂於其西。會

峯延法師。見紫雲起。自東寺來。乃請爲寺主。峯延。東寺十禪寺之一也。距寺西

北四町。有僧正谷。世傳。源義經。幼字牛若丸。年甫二歲。居鞍馬寺。稍遮那王。

未剃髮也。年十一。嘗見諸家系譜。自知其先世。出自清和天皇。其父祖皆爲武將

也。悵恨久之。於是。晝讀書。夜學劍術。僧正名喜演。愛其志。密授兵法於此溪谷

間。因有僧正谷之稱。義經已長。助其兄賴賴。開頭府子鎌倉。語詳各編。

金峯寺 在出谷村。屬葛野郡。號岩屋山。距京都凡五里。真言宗。開祖曰役小角。

極婆塞也。白雉元年。唐高宗永徽元年庚戌。鑿險鑿山。以建一宇。小角。世稱役行者。詳載大和吉野條下。

天長六年。唐文宗太和三年己酉。僧空海。重修。自刻不動佛。安置之。有香水窟。坐禪石。文字

嵐。設摩洞。飛龍瀑等勝區。分山爲三。中央曰金光。左曰蟾塔。右曰靈洞。春花秋

葉。風物可人。

棧敷嶽 在岩屋山北壹里。棧敷者。讀曰薩西氣。設棚觀物之稱。世傳。昔者。親王

惟喬。築樓於此。以便眺望。故有此名。隸勝葛野。愛宕二郡。接丹波國。登嶺一望。攝河諸山。呼乃將答。

高山寺 在柵尾。號柵尾山。華嚴宗。慧仁和寺。本堂。安置盧舍那佛像。係運慶刻。開祖曰尊意阿闍梨。二井寺主。中興祖。曰明惠上人。名高辨。紀伊人。從高尾文魁上人得度。又受密乘於尊實。與然二師。而學禪於榮西。榮西嘗往于宋。携茶種歸。建仁寺條下、明惠請植此地。遂及宇治一帶地方。我邦產茶之業。實始于柵尾云。寺什。印度製古銅佛。唐制茶甕。銘小柿。篆隸萬象名義六帖。未記永文二年。六月。敦文王書。寫畢。是爲二十帖中之六。外此。鳥羽僧正畫卷。土佐信實筆華嚴草紙等。皆希有珍。

西明寺 在柵尾南。號樞尾山。又稱平等心王院。開祖曰智泉法師。空海徒弟。本堂。安置釋迦佛。明惠所刻。觀音則係聖德太子作。原爲神護寺別院。後大廢墮。中興

祖曰明忍律師。字俊正。慶長中。挺經朝鮮。至於明國。遍訪律宗高僧。往至對馬。會嚴禁往來海外。令出。十五年。明神宗萬曆三十八年度戊六月七日。寂於對馬寶滿山。

神護國祚寺 在臨瀧西北。號高尾山。高尾又作高雄。真言宗。寶龜五年。唐代宗大曆九年甲寅

和氣清願呂。清願呂事、有所別載、創建。初號神願寺。天長六年。唐文宗太和三年己酉和氣真綱。仲世等。與之僧空海。空海更稱神護國祚真言寺。金堂。安置藥師如來。講堂。大日如來。皆係空海刻。有古鐘。皆原是善官公撰銘。銘云。碑音在器。龜果惟因。爾祖初業。厥孫遠。宿昔三尺。今日千斤。體有寬窄。功無積新。山歷萬歲。全憑由旬。闍直覺夢。叩即歸真。橘廣相撰序。序云。愛當之山。神護之寺。二寶既歸。終周世界。感及非人。彫琢靈趣。家豈當仁。橘廣相撰序。六度無虧。唯所有梵鐘。形小音宏。故師林寺少僧。猶真紹和尚。始廢弘願。有心改鑄。鑄範未成。衣祿早化。禮越少僧言徒五位上。和氣朝臣皇範。悼和尚之遺志。尋先祖之舊蹤。以貞觀十七年。八月廿三日。歷治工志我部海繼。以銅一千五百斤。令鑄成焉。悉年代久遠。廣相幼有文名。九歲聽昇殿。及長博學。補文章生。對策及第。歷仕陽成光孝宇多三朝。近侍左右。涉獵群籍。橫看讀過。嘗覽一切藏經。七日而畢。渤海使者來朝。賜宴賦詩。廣相與焉。使者嘆稱其詞華富瞻。連典貼切。

一〇三
一〇四

寬平二年。唐昭宗大順元年戊戌五月卒。以特諡。勅贈中納言從二位。而書其序銘者。爲藤

原敏行。世稱之二絕筆。鎮樓亦係京都所司代。板倉勝重重脩。又藏紺紙金泥一

切經八十櫃。後白河法皇所納。今尙存其四十五櫃。設色釋迦佛像。亦壹千年前

物。(明天倫一耕遊高知山詩)偶遊神護寺、見白銀網屏、山色錦屏、溪流玉帶回、溪林聽鳥語、幽谷看雲飛、並欲忘塵世、榮華傍翠微、

二尾秋景 高尾橫尾柳尾。俗稱二尾。皆臨清瀧川。水繞山圍。楓樹千萬。補綴其

間。三秋霜葉。織錦成鋪。自古有名。(帆足萬里詩)洛外秋風溪有餘、見楓處處枝支腰、晚

討秋山際、輕裝趁霞風、經城過樵路、遙識吳禪宮、溪漲幾翻碧、風飄萬樹紅、徒誰試一醉、野店石

橋東、一路過溪轉、繁樹散涼亭、白雲當碧澗、紅葉界青林、架梁侵房簷、刻戲佛龕深、喜來消淨域、

暫得施煩襟、皇家崇祀典、千載仰明威、踰礎振金葉、壁陰拜玉笋、寒禽立蒼木、老樹遶雲岑、遙遞

下修坂、喬柯墜夕霏、村家秋饌海、露得未成醅、蔞飲凌冷月、風高豈御雲、河聲隨山轉、峯影接天

牙、磴壁巖高頂、靈宮豁紫氣、

妙光寺 在鴨瀧村。號天長山。禪宗。謙建仁寺。建長中。宋尊和內大臣藤原師繼創

建。開祖曰圓明國師。名慧心。字心地。往宋。參禪無門。嗣法。既師朝。師繼厚禮

迎之。爲寺主。有山門本堂。及印金堂。印金堂者。貼付印金於堂內四方也。永仁

六年。元成宗大德二年戊戌十月十二日。寂。伏見天皇。賜諡法燈圓明國師。(宋僧無門詩并序)日本覺心禪人、遠

來炷香、請欲求語、述筆隨之、心卽是師佛卽心、心佛元同亘古今、覺悟古今心是佛、不須向外別追

尋、御前設國禪寺開山選德殿賜對佛眼意開贊、贊開無門名、又曰、人至收書、知得心應元安樂、蒙惠

數珠水晶者、金重十二錢、一收訖、山僧奉贈、百八摩尼顆顆圓、迷天鼻孔一齊穿、

恒河砂數佛菩薩、每日呼來跪一圈、覺心實爲犯伊與國寺開祖、今特揭於此、

仁和寺 在御室門前。原稱小松鄉。仁和年中。唐僖宗光啓年間。光孝天皇。創建於小松鄉。

稱仁和寺。號大內山。既崩。寬平九年。唐昭宗乾寧四年丁巳。宇多天皇。卽位皇太子。繼先皇

志。大建七堂伽藍。昌泰二年。唐光化二年己未。十月十四日。移居於此。世稱寬平法皇。改

小松鄉。名御室。以如法皇別宮也。自是厥後。法親王。世住此寺。有總法務宮之

職。而御門跡之稱。亦實始於此云。金堂。安置彌陀觀音勢至三佛像。祖師堂則

弘法大師。及法皇宸影。有山門鐘樓經藏五重塔等。櫻樹萬株。在於其間。花時

遊客。隨集如雲。俗謠云。嵯峨御室花正開。游人何不曳筇來。寺什亦甚多。聖德

太子像。係巨勢金岡筆。孔雀及明王像。張思恭筆。五字文珠像。吳道子筆。不助像。興教筆。他不遺枚舉。(和山碑詩)晚歷當年意正深、仁和仰經舊花林、白樹爛熳不成子、珍負東風培植心、

等持院 在衣笠山麓。距金閣寺僅數町。號萬年山。禪宗。鎌天龍寺。開祖曰夢想國師。國師事、詳載天龍寺條下、北朝。曆應四年。元順宗至正元年辛巳足利第一世將軍尊氏公創建。延文三年。

八年戊戌四月廿九日。尊氏薨。年五十四。葬衣笠山下。諡等持院。因爲寺號。等持寺。初在京師室町。後合於此院。(可朱藏)日本建長禪寺古先禪師碑古山源公、讓菰城州等持教寺、爲禪、物論非禪師、無以厭伏衆心、竟迎師主之云云、

置足利氏歷世將軍木像。當時。朝廷幕府。共照五山之例。厚禮待之。堂宇亦極宏壯。然屢罹災。今纔存本堂及清澗亭耳。德川氏之末。諸國劾王士起。或援尊氏義詮。義滿木首。梟之三條橋上。曰勅德川氏。而滅舞天下土氣也。明治中興。命毀其廟及書院等。蓋建武初。後醍醐天皇。詔新田足利二氏。攻滅北條氏。遂成中興大業。旣而尊氏謀叛。別擁光明天皇。不肯相下。後醍醐天皇。居吉野行宮。遣兵

攻之。互有勝敗。是爲我南北朝之戰。然異於漢土異姓爭國。稱南北朝者。均是皇祖裔孫也。況至後小松天皇。南北歸一。不復論既往。可也。余詣金銀兩閣。每苦其遊觀者多。而謂等持院者僻矣。爲地僻乎。抑爲無可觀者乎。寺什未必爲無之。庭園未必不幽邃。故特論著之。

妙心寺 在木辻村。號正法山。禪宗。臨濟派之本寺。桓武天皇。遷都平安。時此地

方。百花競妍。清香滿園。因號花園。初置離宮。花園上皇。尤喜禪學。建武四年。元順宗至元三年丁丑拾官爲寺。詔圓成國師。爲其開祖。更建堂於其東。曰玉鳳院。自居焉。

山門佛殿法堂方丈經藏鐘樓等。今猶古也。國師名惠玄。號開山。信濃人。幼遊鎌倉。從巖殿和尚。得度。後入京師。問法大燈國師。頓悟雲門關字。大燈曰。汝是雲門大師再生也。命號開山。後醍醐天皇。召大燈。乃使開山代之。奏對稱旨。花園上皇。將建一寺。問法嗣第一。爲何人乎。曰慧玄藏主。卽其人也。延文五年。

元祐至正二十年庚子寂。年八十四。賜諡圖成大師。寺什亦甚衆矣。歷世宸翰。和漢寶器。唐宋元明諸家書畫。另具目錄。可就見焉。

佐久間象山墓 在大法院。象山名啓。姓平。信濃松代人。事真田氏。學兼和漢。旁脩西學。夙唱開港通商之說。爲時人所不喜。嘗從其君。朝京師。有人要擊之於途。遂死。時文久元年。清文宗咸豐十一年辛酉七月十一日也。後經二十餘年。贈正四位。現有象山會。志士相謀香花不絕。

兼好法師遺跡 在妙心寺西。雙雨之東。兼好。本姓藤原。右京大夫。卜部兼名孫。而兼顯子也。爲院北面武士。善射。嘗奉旨射殺怪鳥。武名頓揚。又喜文學。後宇多天皇崩。有厭世之志。吟曰。觀世霜山楓葉色。願身秋露草中風。削髮爲雲水僧。後棲洛東吉田。世稱吉田兼好法師。康永二年。元至正三年癸未移居雙雨。既遊伊賀。觀應元年。元至正十一年庚寅二月十五日寂。年六十一。侍童葬分骨于此。所著徒然草二卷。後

世學者。以爲國文之模範。

葛野郡役所 在太秦村。管下戶數五千八百四十五。人口五萬壹千七百八十五人。廣隆寺 在太秦村。兼三論宗。真言宗。是爲京都第一舊刹。推古天皇。十二年。隋文帝仁壽四年甲子八月朔。聖德太子。召秦河勝。曰。曠夕我夢。自是北方十里。有一淨土。

諸佛群集。無非汝采地乎。河勝曰。或然。願一行啓。親視其處。即日命駕。既至。林中有一大桂樹。異香芬郁。又有奇蜂。千萬成群。其聲如念經。太子曰。是也。乃建離宮。今所謂桂宮院。是也。既而還奏。天皇勅河勝。更建寺。曰峰岡寺。安置新羅百濟諸國所獻之佛像。後改今號。即河勝之名也。而秦氏即歸化人子孫。古語拾遺云。秦公祖弓月。率百廿縣民歸化。漢直祖阿知使主。率十七縣民來朝。秦漢及百濟內附之民。各以萬計。降至長谷朝倉朝。秦民分散。寄隸他族。秦酒公。進仕蒙寵。詔娶秦氏。賜酒公。仍率領百八十種勝部。蠶織貢調。充積庭中。因賜姓字。

豆麻佐。今讀大秦。曰屋子媽撒。以是也。或曰。取太子之太與秦河勝之秦。以冠

其寺號。曰大秦廣隆寺云。河勝六世孫。曰道昌。讚岐人。從僧空海。修真言學。貞

觀六年。唐懿宗咸通五年甲申。清和天皇不豫。勅道昌禪之。卽瘞。是爲中興開祖。金堂。安置

金銅救世觀音像。推古天皇。十一年。隋文帝仁壽三年癸亥。百濟國所獻。彌勒佛。則廿四年。

隋煬帝大業十二年丙子。新羅國所獻。而藥師如來像。長四尺五寸。自古。稱有靈驗。係日向明

神神刻。今世鑑識家曰。其刻酷肖於波斯國大古物。又如意輪坐像。爲乾漆製。

謂以布及漆製之。乾干也。日光佛。月光佛。彫版佛像等。皆盡千年以上古佛。太子堂。安置聖德

太子御製木像。歷朝限期。奉寄御衣。大秦殿。祀秦河勝。及漢女吳女。二女。傾刺

緋織錦等法者。秦讀曰哈打。以國音通機也。頭岡、大阪府、北河內郡、豐野村、字秦、亦有太秦山河勝寺等遺蹟、府吏廳查其地云、

桂宮院。在太子堂西壹町許。堂形八角。聖德太子創建。安置金色彌陀像。長四尺

餘。隋煬帝贈推古天皇之物。一拜觀之。可知其當時風韻耳。又有太子幼時之像。

亦足以想見天平以前之服裝矣。要之。寺院之舊。佛像之古。莫大秦之若。(空花集) 古寺記

感發緣、現僧尚說昔年功、三韓大士來傳法、百濟與人去御風、白雲烟葉金佛像、黃昏風上經燈籠、祇陀太子千秋後、捨樹憑誰起廢宮、

廣澤池 周圍四町。寬朝大僧正穿堀。以便灌漑。建寺池中央。曰遍照寺山。今廢。縱

存趾於其南。稱廣澤山遍照寺。寬朝。宇多天皇孫。(嵯峨實鏡譜)對月滿逢三五時、蕭然古寺感方生、最明素釋今宵色、遍照

地名、
彌知此

大澤池 昔者。嵯峨天皇。建離宮於此。稱庭湖。植櫻楓。春秋景色。使人不厭。築二

島嶼。大曰天神島。小曰菊之島。有奇蹤。曰庭湖石。

大覺寺 在大澤池西。真言宗。昔者。稱嵯峨御所。世傳。弘仁二年。唐懿宗元和三年。幸卯三月。

嵯峨天皇。創建堂宇。勅僧空海。修行五大明王秘法。祈造福於國。施惠於民之事。

空海乃一刀三禮。以刻其像。嵯峨五大堂。是也。九年。唐元和十年戊戌春。天下大疫。天皇

親寫般若心經。所謂紺紙金泥經卷也。已成。詔空海。誦讀之。疫瘴。更建心經殿。貞

觀十八年。貞觀元年。嵯峨皇后橘氏。捨離宮。爲寺院。淳和天皇。詔第二皇子恒貞

親王。爲之開祖。初親王甫九歲。爲皇太子。承和九年。唐文宗會昌二年壬戌。伴健岑。橘逆勢。

謀反。乃辭儲位。至是。改名恒寂。賜法親王。號大鸕寺。仁和元年。唐光啓元年乙巳。九月

十日。結跏趺坐而薨。年六十。嗣後。法親王。世爲寺主。稱御門跡。至近代。二十

一世。又宇多法皇。受河部灌頂後。後嵯峨。龜山。後宇多。後醍醐。皆無不幸臨。而

講法議政焉。南北朝之時。後龜山天皇。奉三種神器。自大和行宮。遷幸于此。授

神器於後小松天皇。而朝歸一。其事蹟關皇室。未有如此寺者。本堂。安置五大尊。

寺什。五祖像。唐土古講。聖德太子手持香爐。侍重捧寶蓋之圖。亦係八百年前物。

光孝宇多二帝。恒寂親王御影。其筆與五大尊像。同其時云。

清涼寺。在大鸕寺西三町。號五臺山。方丈。淨土宗。塔頭。真言宗。號大鸕寺。安置

釋迦佛。長五尺二寸。稱赤梅檀像。印度毘首羯摩刻。秦時。自印度入漢土。天元

五年。宋太宗太平興國七年壬午。叡山僧裔然如宋。汴都西花門外。有啓聖禪院。裔然拜此靈像

得之。或曰。命佛工張燦。模刻之。永延元年。宋雍熙四年丁亥。二月。携摺本一切經論。及十

大弟子畫像。歸明。裔然奏請選擇愛宕山地。擬五臺山。創建一大伽藍。安置之。長

和五年。宋真宗大中祥符九年丙辰。寂。法嗣盛算。欲繼其志。奏請不止。三條天皇。勅許建堂於

樓霞觀中。賜號清涼寺。樓霞觀者。貞觀中。河原左大臣。捨其別墅爲寺者。今有

阿彌陀堂之處。宋史日本傳。裔然於雍熙元年。浮海而至。裔然注孝經。我史云。永觀二年。日

太平興國寺。蓋是時也。或曰。咸平中。有日本僧裔然。以知玄註孝經來獻之。咸平。真宗年號。

我長保年間。裔然如宋。即咸平六年也。或以裔照。誤爲裔然。又古文孝經。自本朝。傳漢土。洵遠

矣。詳載於其厚跋。彌陀坐像。長五尺二寸。鳥佛師刻。毘沙門立像。長六尺。弘法

大師刻。皆係千貳百年前物。

新田左中將碑。在清涼寺西。小倉山麓。新田氏。出於源義家。義家子義國居上野。

生三子。長曰義重。食新田郡。次曰義康。食足利郡。義康爲足利氏祖。小野篁傳註及

等持院條下、同前足利氏事、當相參看義重爲新田氏祖。六世孫曰義貞。與足利尊氏共奉後醍醐天皇詔。攻北條高時。滅之。是謂建武中興。既而尊氏反。天皇屢令義貞攻之。戰終不利。延元三年。元順宗至元四年戊寅七月。大戰于越前藤島。中矢而死。傳首京師。尊氏梟之。

義貞夫人。曰勾當内侍。乃請其首。葬往生院。制髮爲尼。祈其冥福。事詳碑文。今不復贅焉。又越前藤島神社。即奉祀公之處。

華臺寺 在小倉山。號小倉山。兼天台真言戒律淨土四宗。安置釋迦彌陀二尊。因又號二尊院。嵯峨天皇。嘗幸芹河野。親卜此地。創建此寺。後至元久中。朱蒙宗開禪元年法然上人住焉。小倉山福續。係後柏原天皇宸翰。一尊教院。則後奈良天皇宸翰。寺什亦不少矣。

伊藤仁齋墓 在寺後山麓。名維楨。字原佐。號仁齋。京師人。初奉程朱。後唱古學。號古義堂。爲一代儒宗。垂帷堀河。教授生徒。四十餘年。諸州士人。無國不至。唯

飛彈佐渡壹岐二國。不及門云。大學定本。語孟字義。刊行於世。後仰海外。寶永二年。消聖祖乾隆十七年壬申三月十二日。歿。年七十九。私諡古學先生。有子五人。幼字皆用

藏字。曰原藏。曰重藏。曰延藏。曰平藏。曰才藏。各以儒成家。世稱伊藤五藏。長子原藏。名長胤。號東涯。克繼箕裘。有萃碣銘。詳記其事。內大臣藤原常雅撰文。華山權中納言藤原俊將篆額。坊城氏右中將藤原英朝書。八條氏世以榮之。季子才藏。名長堅。號蘭岬。仕紀伊侯。二人最顯於世。故亦稱伊藤首尾藏。後世所謂堀川學派者是也。

欽忠碑 在天龍寺前。寶篋院即。塞小楠公首之處。南朝第一忠臣。曰楠正成。世稱楠公。詳哉雄川神社條下其子曰正行。即小楠公。又詳載四條院神祇條下。正行與寶篋院僧默菴禪師。舊相識。正平四年。元順宗至正九年己丑正月。正行陣于河內四條畷。默菴往訪其營。正行大喜。且參禪。曰。白雲立降。默庵曰。雷電斷雲。正行笑曰。吾志決矣。吾而死。願葬吾晉

於貴寺。默庵曰。諾。明日。大與足利軍戰。舉族皆死。默庵繯以衣袂包其首。擄回葬之。足利義詮爲其第二世將軍。亦尊信默庵。一日。默庵談及正行事。義詮愜然改容。曰。楠氏實我仇敵也。然南朝忠臣。莫之過矣。我死後。宜葬其墓側也。貞治六年。元正十二年十二月七日薨。默庵如其言云。碑文亦詳載其事。

天龍寺 在下嵯峨。號靈龜山。禪宗。臨濟派之本寺。五山第一也。曆應末。元正元年。足利尊氏。創建。曰曆應寺。以祈後醍醐天皇之冥福。既尊氏夢金龍浮大堰河。乃改稱天龍資聖禪寺。謂夢想國師。爲開山。初名智隨。後改陳石。號夢想。伊勢人。後醍醐天皇。崇敬之。勅賜號夢想國師。觀應二年。元正十年九月三十日薨。年七十

七。北胡天子。世賜國師號。凡七。俗呼七朝國師。本編相國寺條下註。載明宋碩夢想國師碑銘。今又抄關本寺者。曰正中二年。師春秋五十一。國主後醍醐天王。命宮使起師。鎮南禪願寺。入見王。賜坐。師自言志在隨處。出世非所願。王曰。吾心非有他。欲朝夕問道耳。師不得已。應命。王時幸臨之。相與談玄。竟日乃去。師及明。王遜位。師又引退云云。元弘元年。達官貴人。又有以建長請師者。師復辭。一年。瑞光寺接善應故事。求師爲第一代。三年。王既復辟。召師入見。以分于都督親王之師。更爲靈龜山臨川

禪院。命師爲其長。賜以國師之號。建武元年。秋。王妃薨。王留師宮中。二七日。罷政而務法。因詣師宣說大戒。執弟子之禮。願護。及還。引師再入南禪。王親率群臣。至山見。羣臣入禪定。秩然有厚次第。行食靜而不濫。王悅。師升坐提唱。言發渴朗。辭意警策。王愜賢。給腹田若干畝。以假僧。先是。近臣有毀斥禪宗者。王發問師。師以性三寶何必強生分別。爲對。王已信之。至是。益知國學爲貴。誘言無自而入。忽畏戒率內院。而建仁禪寺。又欲逼起之。師笑不答。歷應二年。攝州守某。並西芳教寺爲禪。允言非師。無以厭衆望。師振錫而往。翠楊遠巖氏之道。聽者改容。爲建無難閣。以水晶燈塔。安置舍利塔影其中。他若奇勝之地。多冠以亭榭。以憩四方游士。規制燦然可觀。師夢王作沙門。相乘寶車。往靈龜山。已而卽世。征男大將軍源公某。遣天龍資聖禪寺。以助冥福。賜師住持。遂與前夢協阿州守源公某。新立禪陀院。師亦俯徇其意。爲之說法。即還天龍。康永元年。春。太倉天王。親往受戒。願爲弟子。二年。建八幡菩薩靈廟於寺側。貞和元年。王復帥群臣。來臨法。致宣之際。有二星降於庭。光如白日。賜以金襴袈裟。二年。春。令弟子志玄利其處。退處舊居庵。冬。召師入宮。加以正覺之號。觀應元年。春。兩宮國母。請師於仙洞。受五戒。一年。春。師臥左右曰。天龍宮裏。幸皆就緒。唯僧堂猶闕。蓄力爲之。豈可容七百人。廷議重師名德。復強師入天龍。師行。百丈清規。淨攝胡野。王遣使復加心空普濟之號。且遺以手書。其畧有曰。道振三朝。名飛四海。主天龍席。再轉法輪。乘佛祖權。數擢騰躋。國中以爲榮。師以年高。又復引退。徙奉內院。九月。朔。召門弟子曰。吾世壽七十七。又七。僧臘亦六十矣。且分將西歸。凡有所疑。可頻叩焉。於是集座下者如雲。師隨機開示。皆充然有得而去。越七日。示以微疾。兩宮游臨間起居。師爲陳嘆。心正。因精神不少衰。至二十九日。遺誠授門人作偈。別大將軍源公。囑令外護。復書辭世頌一首。三十日。鳴鼓集衆告別。愴然而逝。顏色不變。時有白氣一道。橫貫師之寢室。黑白一萬餘人皆哀慟不能勝。以其年月日。葬全身塔于內院之後。分存日所切爪髮。瘞于靈屋。鑿中靈生舍利云。(下略)今按。都督親王。謂世良親王。秋。王妃薨。王妃謂藤原氏。征夷大將軍源公某。謂尊氏。太倉天王。謂北朝光明天皇。宋應斯文。固據國師弟子住持善應寺間信狀。蓋國師事蹟。大抵無遺。而不傳於我。却存於彼文者。亦在焉。故今略本文。

以詳其註亦是本編之一例也。世傳國師詩云。曹源不涸直臻今。一滴流通廣且深。曲岸回塘休眷
眠。夜闌有月落波心。又門前一路稱萬松洞。有詩云。萬株松下一乾坤。翠靄氛
氳鎖洞門。仙境由來屬仙客。莫言此地匪桃源。

大井川 又作大堰河。發源丹波國北保津川。匯會水尾清瀨二流。循鳳山麓。過梅
津桂二村。東注淀河。有長橋名渡月。又曰御幸橋。昌泰元年。唐昭宗光化元年戊午九月。醍
醐天皇幸臨觀楓。因有此名。時有紀貫之者。最善文章。乃作之記。世稱大堰河
幸記。橋畔有酒樓。曰三軒家。詩云。一船誰領詩歌管。二店皆宜雪月花。是也。
(大井川詩)幾棹扁舟泛晚寒。滿山綵錦水生紋。何溪龍笛風聲起。吹落崖花聲亦寒。

鳳山 山脈一帶。臨大堰河。在昔以霜葉。與三尾。齊其名聲。龜山天皇最愛其山
容水色。溫如瓊珠也。更又移植櫻樹。即吉野櫻。於是。山岳吐香含色。截雲斷霧。
秋情冬骨。如笑如睡。四時游客。未嘗絕蹤。而海外人士。凡晉京者。定必無不停車

繫馬。以賞其景。鳳山之名。遂遍於海內外矣。(食茶山詩)萬樹櫻桃雜碧深。花間無處不
芳陰。風來岸岸齊簫管。失却中流上下船。
(清曉掛堂詩)殘月斜明楓樹暖。胡無聲動苑
王宮。山紅猶碧二十里。人在昌黎詩句中。

大悲閣 登山數町。即金峯寺。屬萬福寺。安置千手觀音像。角倉了以。所創建也。
了以。名光好。幼字與七。本姓源氏。近江人。五代祖德春。初居嵯峨。世事足利
氏。父曰宗桂。嘗學醫術。後爲僧。從天龍寺僧策彥。踰渤海至于明。明人稱宗桂。
曰意庵。歸朝。其業益進。了以生。喜工役。長事德川氏。常謂凡有水則可以行
舟也。何論其寬窄險難哉。乃請湖開大井河流。以至丹波保津川。慶長十一年。
明神宗萬曆三十四年三月起工。八月告竣。民尤便之。了以乃卜居河濱。子玄之嗣。明年春。
又奉幕命。疏通駿河富士川。以便舟楫往來。後復開天龍川。十六年。明萬曆三十
鑿成高瀬川。事載高瀬川條下十九年。明萬曆四十七年甲寅七月十二日。歿。年六十一。是歲。建大悲
閣。閣前有碑。林羅山撰文。詳記事蹟。又有了以手把鐮石斧。踞坐岩頭之像。子

孫今尚存。現設了以會。以謀使其遺澤。永傳萬世之事云。(石川大山詩)西嶽峻峭儲地
將網羅瀾江、百丈峯舟傍岸行、氣象岩中秋水漲、雲迴山上蒼雲橫、翠微聲磬大悲閣、威音鳴鐘三四
聲、(那波浩所詩)此處知何處、初灘忘復還、碧霞蟠大井、絲綸對龜山、嶺岳儒屏列、平安礎層間、
登高心更別、因念一訂頑、
 溫泉 在大悲閣西北山下。慶應年間。舊釋宗向。鐵泉涌出。至今世。蒸為溫泉。築室

起樓。名鳳峽館。供雅人驪客遊憩之處。

臨川寺 在大井川北岸。屬天龍寺。亦號靈龜山。初為世良親王別宮。親王。後醍

醐天皇第二皇子。薨後。以遺命。廢宮為寺。詔夢想國師。兼管理之。安置彌勒佛。

號三會院。東有親王廟。西有國師塔。塔銘。係元僧東陵永瓊撰。碑銘。即明儒

宋濂也。僧策彥亦為住持。天文中。明世宗嘉。與僧周良等如明。世宗賜宴於上

林苑。朝臣賦詩。伶人奏樂。策彥周良亦賦詩呈。世宗和之。謂。(策彥詩)今日天恩與

心、回頭群弄花樹花、始見青春歸禁林、(世宗詩)奇哉才業與淵深、佳作一泓波瀾心、霞嶽可堪存色
永、柳林花發又詩林、(雨良詩)巡路津中船艇輕、天書早召敬吾誠、禁池再浴恩波水、弊垢袪殘影傍

二三

漸、(世宗詩)氏姓聲名俱不輕、日跡日集盡其誠、前來錫杖今杯渡、戒律再三如水清、(世宗送日本
 使策彥詩)東國有禮信真經、遠越潮溟明國勢、入貢從今應待以、歸來勿忘朕政機、(朝林來朝詩)仁
 義相并日本僧、乘榜來慕孔丘曾、上林苑內發華宴、美譽芳名高九層、(相國李恒詩)見使華知其國
 光、接人氣宇太煌煌、天朝恩賜租井楫、錦帆同象臨故鄉、(前翰林程詢詩)碧眼胡僧到帝城、靜心遠
 體一如瓊、險難遙歷正其使、師便柳榆齒痛榮、(大統禪好詩)正人胸字有襟胸、言語吹香日不孤、鄉國
 每談何陋有、御衣片屑紹隆端、(金殿光祿楊養詩)釋而儒又返而墨、三教相移斯上人、天子宣旨頒
 御宴、九夷九國絕比倫、(陽臨川策彥受正使副老大人歸國詩)使星掛極聲榮忠、貢罷非歸海日東、
 萬里檣燈搖夜月、千山帆影度晴風、授來符節酬賓禮、賜去袈裟助道明、還抵蓬萊僊子地、莫忘承瑞聖
 恩、大明嘉瑞庚戌夏日、四明七十四翁趙月川拜賀、又有都祭院右都御史葉寅齊等、隨專使談賢
 老親師歸日域國厚、談賢即周良、今畧其片、以抄其詩云、談賢老師人中孫、銓底銓選齊晉陶、兩承
 王命貢中朝、蘇波西里奚辭勞、一封進上聖天子、詔光寵寬稍時還、隆恩不惜千金賜、曾陳賢使宜加
 褒、即今輟路不可留、崇有優別鄒江舉、十年再會歲月老、今宵誰欲須醪、今按、天文年間、國足利
 義晴之時、義晴為第十二世將軍、是時也、室町政衰、天下大亂、將軍之身、何且不能自保、何遑遣使
 于明也哉、而今曰奉使、曰正使、蓋策彥從、藉口使有、以便於其佈法、世宗不察謬、以為真使耳

法輪寺 在渡月橋南。號智福山。兼三論宗。真言宗。天平年中。唐玄宗開。創建。曰葛

井寺。貞觀六年。唐懿宗咸通道昌再興之。改今號。道昌事載大奏廣隆寺條中。

車拆神社 車拆。讀曰古魯媽撒氣。在下嵯峨材木町。奉祀大外記明經博士清原賴

業公之處。賴業。左大臣夏野公裔。音博士祐隆子。博學宏聞。尤通典故。遇有咨議。

援引古今。辨析精覈。多被嘉納。嘗爲侍讀。每讀禮記。至大學中庸二篇。乃嘆曰。有

之哉。別表出一篇。自爲之註。後閱百二十餘年。四書集註。初自宋傳。世咸驚嘆曰。

東西異域。而賢者所見。如合符節也。承安二年。宋孝宗乾道八年壬辰九月。宋明州刺史。上

書獻物。稱謂無禮。高倉天皇。下群臣議之。賴業曰。朱雀一條二帝之時。彼國牒

狀。稱呼無禮。卻而不受。承曆中。宋神宗元豐初國書亦有賜日本國字。受之。時論非之。

況今一州刺史所贈。而非彼國書邪。古昔。使聘相通。用敬國禮。今也不然。苟受

非禮之信。不獨辱國體也。天下後世。果謂之何哉。文治五年。宋徽宗宣和六年己酉四月卒。年

六十八。子孫建祠祀之。後有乘車不式。過祠前者。車軸挫折。後嵯峨天皇。因賜

號東拆大明神。

鹿王院 在材木町南。天龍寺塔頭。足利義滿創建。開祖曰普明國師。安置佛牙舍

利。世傳源實朝贈黃金若干于宋。得之。奉安鎌倉圓覺寺。實朝。賴朝二子。爲鎌倉

第三世將軍。外戚北條氏擅權。實朝唯擁虛器耳。時有宋佛工陳和卿者。來在大

和。實朝召見之。和卿自稱知實朝前生。即育玉山僧。而余爲其弟子也。實朝信之。

遂欲如宋拜育玉山。命造巨船。旣成。不可用。承久元年。宋寧嘉定十二年己卯正月。拜賀于

鶴岡祠。爲其姪公曉所弑。自賴朝開禪府。至此二世而絕。北條氏爲執權職。後光

嚴天皇。詔普明國師。諭足利氏。獻實朝所得者。移鹿王院云。

松尾神社 在葛野郡上山田村。奉祀二座。曰大山咋神。曰市杵島姬神。大寶元年。

唐中宗嗣聖十八年辛丑秦都理自分土山。遷於此云。又松尾山下。有七社。曰松尾。曰月讀。曰

櫛谷。曰二宮。曰宗像。曰衣手。曰四大神。世謂之松尾七社。

地藏院 在松尾西南三町。禪宗。屬天龍寺。細川賴之創建。開祖曰宗鏡禪師。名

碧潭。本堂。安置地藏尊。及賴之像。堂南又有其墓。賴之事足利義詮。爲管領職。

義詮臨終。撫義滿。謂賴之曰。子汝一子。又指賴之。謂義滿曰。子汝一父。賴之旣以

遺託輔幼主。內外望治。賴之作五箴。授將士曰。母偏愛憎。母修恩仇。母枉是非。母

僥倖。毋私匿。義滿漸長。頗忌賴之。罷職就國。賴之卽日上途。尋削髮號常久。賦

詩曰。人生五十愧無功。花木春過又已中。滿室蒼蠅掃難去。起尋禪榻臥清風。

(明宋蘇夢相國師碑銘)故管領源公賴之、母與人言曰、我從先人聽國師談佛法、頓達真乘、遂館死

生如一、臨事不憚、而先人竟死於患、吾亦知委身以事君者、皆國師化導之力、由是而觀、師之道、非

特究明心學、實足堪夫世教之重云、今按、賴之父曰賴春、正平七年、二月、楠氏北畠

氏、以兵數千人、圍京師、細川顯氏敗走、賴春死之、其曰先人竟死於患者、蓋謂斯事也、今世。

細川潤君。建碑記之。可就見焉。

桂離宮 在桂川西。方二町許。在昔。豐太閤命茶伯千利休。經營之。京第凡五。園池

寬濶。林樹幽邃。以爲智仁親王別宮。稱桂宮。後又有小堀遠江守者。與利休。同其

流。一拳之石。一勺之水。不苟撰擇。愈極精妙。凡欲新造庭園第宅者。必取則於此

云。明治十六年。屬宮內省管轄。

漣紙場 在梅津村。明治九年。創設。藉桂川水力。旋轉器械。以製紙之處。

長福寺 在東梅津村。禪宗。屬南禪寺。初天台宗。尼真理創建。曆應二年。元順宗至元四年辛巳

邑長梅津清景。請大幢國師。爲開山。國師名道皎。號月林。中納言久我具房子。

年甫十六。爲僧。遊于鎌倉。從高峯禪師學。元享元年。元仁宗至治元年辛酉如元。爲僧古林

法嗣。旣歸。花園天皇。崇尊九重。屢幸臨焉。觀應二年。元順宗至正十一年辛卯二月廿五日寂。

賜諡普光大幢國師。

乙訓郡役所 在向日町。戶數三千七百七十六。人口貳萬零百五十四人。

勝持寺 在乙訓郡向日町。號小搥山。兼天台律兩宗。俗曰花寺。開基卽役小角。安

置其自刻不動尊像。初號大原寺。有四十九院云。中興祖曰佛陀上人。藤原氏。關

白師實孫。本寺及日向神社額。係小野道風筆。西行法師。嘗植櫻樹。因有花寺

之稱。細川玄旨。水下長嘯子等歌人。多隱居者。史云。足利尊氏。與北條氏戰。張

宴于桂川西。指一佛舍。問其名。或答曰。勝持寺。尊氏哂曰。吾將勝而持之。卽

是寺也。

長岡都趾 在上羽村。俗曰御所屋敷。屋敷者。讀曰呀西氣。第宅之謂。桓武天皇。既去南都。將遷都於山城也。先居於此。凡十二年。後移今京都云。

金藏寺 在灰方西。登山數町。稱西岩翁。天台宗。屬延歷寺。岩翁事詳東山岩翁條。開祖曰隆賢禪師。名行善。薩摩人。參禪元興寺道昭等。後如唐。游于蘇州。從僧智藏。受三論。既歸朝。養老二年。唐玄宗開元六年戊午。自刻十一面觀音像。安置之。

天王山 在山崎北。城趾二。一則文明二年。明憲宗成化六年庚寅。山名是豐所築。一則天正十年。明神宗萬曆十年壬午。豐太閤所築。卽與明智光秀戰之處。元治元年。三年甲子。京師騷擾。毛利氏連臣等。事敗。退嬰此峯。真木和泉守以下屠腹而死。古稱京都大坂間之要害地。故得此險者。戰必勝矣。不得則敗也。

創建之在上古也。可知。

天王神社 在天王山。奉祀素戔鳴尊。及八王子之處。養老二年。唐睿宗開元六年戊午。再興。其創建。中興祖曰寂照。初名定基。大江氏。齊元子。少善詩文。果遷參河守。一日。削髮爲僧。世稱三河入道。長保五年。宋真宗咸平六年癸卯。八月。如宋。宋主延見問本朝事。寂照請紙筆以對。且獻佛像。宋主大悅。賜紫衣束帛。館於上寺。賜號圓通大師。三司使丁謂遇之甚遲。比智禮答釋成。將携回也。謂欲留之。盛說姑蘇山水之美。寂照遂留于吳門寺。使人轉送答釋於源信。謂乃分月俸給之。後言語稍通。戒律稍至。二吳道俗。多歸向者。嘗贈黑金水瓶於謂。且副詩曰。提携三五載。日用不曾離。曉井掛殘月。春爐釋夜澌。郡銀難免侈。菜石易成虧。此器堅還實。寄君應可知。

寂照又善書札。字體婉美。有二王之風。爲楊氏所賞云。（宋王珠贈日本國僧詩并序）祥符中、日本僧寂照、來朝後、求禮天台山、先中令守會稽、寂照經由來謁、寂照善書跡翌二王、而不留華言、但以筆札通意、時長兄爲天台守、中令以書導之、兼贈詩云、浹波泛瓶錫、幾月到天朝、鄉信日邊斷、歸程海而遙、秋泉吟種落、霜葉定中飄、爲愛華風好、扶桑夢自消、

右峰寺 在紀伊郡深草村。號百丈山。禪宗。黃檗派。開祖爲明國歸化僧千呆禪師。寺後山中。安置釋迦石像。而十六羅漢。五百羅漢。擁其左右。溪谷無處不石像也。又有僧若冲基。若冲善書。詳載碑文。今不復發焉。

瑞光寺 在深草村。日蓮宗。屬妙顯寺。開祖爲元政法師。明曆元年。（萬世宗順治十二年乙未）創建。

元政與明陳元贊友善。賦詩屬文。互相唱和。曰元唱和集。刊行于世。元贊字義都。號既白山人。明虎林人。避亂歸化。初爲毛利氏客卿。後被聘至尾張。能通國語。元政詩云。人無世事交常淡。客慣方言譚每諧。又云。君能言和語。鄉音舌尚存。在。久狎十知九。傍人猶未解。元政喜讀袁中郎集。蓋以有所聞於元贊也。我邦詩

人。奉中郎者。始於元政。

藤森神社 在深草村。奉祀舍人親王。早良親王。伊豫親王之處。往古。藤樹成林。因有此稱。殿東有一大櫟樹。世傳。神功皇后。征韓之後。瘞其旗幟。及軍器等。俗稱旗塚。

紀伊郡役所 在伏見町。戶數八千九百三十二。人口四萬三千五百四十九人。

伏見町 距京都三里許。有二道。東曰伏見街道。西曰東洞院通。東西十四町。南北一里。有第三十八聯隊本部。練兵場。裁判所。郵便電信局等衙門。

伏見城址 在伏見山。文祿二年。（明神宗萬曆十二年甲午）豐太閣所築。公薨後。東照公亦居焉。慶長五年。（明崇禎廿八年庚子）東歸江戸。令島居元忠留守。旣而關原之役起。石田氏兵。交來攻之。元忠拒守戰死。元忠。稱彥右衛門。德川世臣。墓在智惠寺中。

桃山 在伏見町東。以桃花與梅花。有名於世。豐太閣亦嘗築第於此。世稱桃山御

二元
一三〇

殿前控巨棕池。山水雙美。眺望尤佳。至今不改其觀。(和山陽詩) 萬樹桃花映碧流。皇家誰認舊金甌。春風舊返東征旆。遺恨無人放牧牛。

御香宮 在城山西。奉祀神功皇后之處。第十四代仲哀天皇。即位八年。滿敏帝建安四年己卯。幸筑紫。皇后勸天皇伐新羅。謀議未決。明年二月。天皇崩于行宮。皇后秘不發喪。令諸國造戰艦。練兵甲。皇后結兩髻。爲丈夫裝。親執斧鉞。遂率諸軍。發和珥津。今作鷗津。屬對馬國上縣郡。風順船迅。直抵新羅。新羅王波沙狹錦。惶遽不知所爲。而縛

來降。誓曰。設令太陽出自西。鴨綠江逆流。無闕朝貢。不乾舟楫。獻馬梳馬鞭於天廡之隸。後世子孫。若渝此盟。天神地祇。共殛罰。將士欲兵之。皇后曰。自悔降服。殺之不祥。乃解其縛。遂入其都。封府庫。收圖籍。以所杖矛。樹之國門。國人畏服。不敢撒之。傳至數十世云。(韓史) 箕子挾流傳已久。幾至朽折。後經偷竊。以錫附之。藏之木匣。得以傳於今。云云。今按。其所稱箕子挾耒耜。焉知無爲皇后之矛盾也。新羅王使其貴臣波干岐。微比已知爲質。獻金銀彩色。綵羅練絹八十

船。嗣後調貢。以八十艘爲定額。高麗百濟。亦與新羅隣。皆望風歸降。永祿西藩。不絕朝貢。於是二韓悉服。乃置官司。振旅而還。宜與國號篇。及對照年表參看。是爲神功皇后。其所以名御香者。上古清泉涌出。放香治病。故有此稱。

巨棕池 或作小倉池。以國讀相通也。介在紀伊久世西郡。東西二十四町。南北二十四町。周圍實四里十一町。東方堤曰巨棕堤。豐太閤所築。是爲大和街道。池中多菰藕。夏時泛舟。愛花者亦不少。

大石良雄舊宅 在宇治郡四宮村。又西野山村。岩屋寺不動佛像。係良雄所尊信。幸什。多良雄等遺物。良雄稱丙藏之助。世事赤穗城主淺野長矩。長矩嘗怨吉良義英。斬之。不克。幕府賜死。淺野氏國除。於是良雄等四十七人。遂襲殺義英于江戸本所之邸。以復其仇。時元祿十五年。新豐祖康德四十年壬午。十二月十四日也。世稱赤穗義士。語詳泉岳寺條下。

萬福寺 在宇治郡五箇庄村。號黃檗山。禪宗。黃檗派之本寺。開祖曰大光普照國

師。名隆琦。號隱元。清國福建省福清縣東林人。姓林。父名德龍。母龔氏。幼時愛

父。久客未歸。請母尋父。出遊四方。遂至普陀山。決歸佛之志。從黃檗鑑源禪師

學。得度剃落。時年二十九。當是之時。明室漸衰。清國將興。會長崎興福寺

逸然。招聘國師東渡。時年六十二。承應三年。明永曆八年。清世宗

至長崎。居五年。版有公延見之江戸城。是歲、明公、有鄭成功請援兵、及朱之瑜諸儒歸化等事、既建伽藍于此。時

萬治元年也。明永曆十一年。清後水尾法皇。宣詔問法。奏答稱旨。特賜佛舍利及御

香黃金等。於是。朝臣幕吏。多歸依者。延寶元年。清聖祖康熙十二年癸丑四月二日。寂。年八十

二。法嗣二十三。第二世曰本菴。第三世曰慧林。第四世曰獨湛。獨湛以下。大抵

皆自淡士來住。爲例。總門。二門。天王殿。大雄寶殿。法堂。東西方丈。威德殿。祠

堂。祖師堂。禪堂。鐘樓。鼓樓等。丹碧輝煌。燦然禪林。亦有勝於他者。而一入其

門。扁額對聯。可觀可誦。眞空塔題額。係靈元天皇宸翰。塔銘。卽清國中極殿大

學士杜立德撰。一切藏經版。六萬張。爲卷七千餘。藏在寶藏院。世傳。本菴弟子

鐵眼。嘗曰。吾邦。自古建伽藍。刻佛像。不乏其人而未嘗有刊行一切經者也。於

是。自期成此大業。延寶六年。清康熙十年。七年戊午秋。竣功。上表獻之。後水尾法皇敕感不啻。

稱其功曰。法門功臣。遺福天下後世。孰莫京焉。天和二年。清康熙廿一年。壬戌。鄭成

其盛圖之。三月。寂。年五十三。寺什。張瑞圖詩畫共八幅。王振傍筆五百羅漢壹卷。

陳賢筆觀音像。陳璜畫山水拾叢幅。皆爲明末清初之人。寺中又有十二景。隱元

賦詩題之。今不具載。世刊黃檗記。宜就見焉。

池尾茶園 在池尾村。凡拾貳町間。在昔。明惠上人。初植茶樹之處。上人事詳高雄

山寺條下。自是至宇治一帶地方。製茶家多。世諺云。宇治者。製茶處矣。

宇治郡役所 在醍醐村。戶數貳千五百六拾壹。人口壹萬四千六百六拾九人。

宇治町 在宇治橋西。東西十五町。南北貳町餘。負山控水。風色可人。以茶有名。姓上林者尤多。皆政重子孫也。春日賞花。夏時觀螢。遊客屬集。不敢讓他勝區矣。

宇治川 發源近江琵琶湖。經勢田石山。合太平川。兩岸稍迫。河心甚窄。西流抵田原川。爲近江山城國界。怪巖奇石。凸凹其間。急湍激濤。泡沫飛濺。有紅葉淵。屏風岩等勝。至於宇治漸大。遂過伏見。入淀河。昔者源賴政之於平氏。義經之於義仲。承久延元兩役。凡有事於京師之日。必據此河而戰。每爲東西兩軍對峙之地。宇治一作菟道。

菟道稚郎子墓 世稱宇治墓。在朝日山。應神天皇立稚郎子。爲皇太子。天皇崩。太子欲讓位其兄大鷦鷯尊。弗聽。乃避之菟道。相讓二年。民不知所歸。太子知不可奪其志。遂自殺。稚郎子事。詳國體論。及文學宗教篇中。大鷦鷯尊即位。是

爲仁德天皇

宇治神社 在橋寺南。二町許。有上下二社。下社在宇治川畔。上社卽是奉祀應神天皇。及神功皇后之處。延喜元年。唐昭宗天復元年辛酉創建。此地昔爲稚郎子桐原日柘宮殿。故稱離宮八幡。下社奉祀稚郎子之處。仁德天皇即位元年。晉隱帝建興元年癸酉創建。神官長者氏。世爲視史。至今不絕。

宇治橋 大化二年。唐太宗貞觀二十年丙午南都元興寺僧道昭奉勅架橋。架橋碑銘。傳至于今。世以爲珍。橋北有橋寺。稱常光寺。又放生院。律宗。安置地藏佛像。開祖卽道昭也。中興曰興聖菩薩。弘安九年。元世祖至元十三年丙戌再架。自是厥後。每有洪水。屢失屢架。往古唐銅甌寶珠一基。現存中村氏云。

平等院 在宇治橋南。二町許。號鳳凰山。兼天台淨土二宗。此地初爲河原左大

臣融公別業。陽成天皇詔樂行宮。稱宇治院。經宇多朱雀二朝。至長德四年。宋真宗咸

壬寅年 關白藤原道長公。請爲山莊。其子賴通公。捨莊爲寺。時永承六年。朱仁宗

卯年三月也。佛殿擬鳳凰象。以左右高樓廻廊。爲阿翼形。後廊爲尾。而左右屋上

置紫銅鳳凰雌雄。高各三尺許。順風旋轉。回頭搖翼。如將翔翽者狀。殿中。安置

阿彌陀坐像。長六尺許。佛工定朝刻。承慶處。描寫二十五菩薩。四壁及三方障。

則淨土九品相。皆係繪師長者爲成筆。天井。每格貼紙。寫觀經文。中納言俊房

筆。天蓋瓊絡等。彫鏤皆七寶法。其裝飾美麗。有古鐘。係印度鑄造。稱日本三古

鐘。今不能詳記也。開祖曰行尊大僧正。中興祖曰心覺上人。初屬三井寺。又有

最勝院。天台宗。安置不動尊。堂前源賴政葬在焉。賴政。世稱源二位。常惠平氏

專橫。奉高倉王詳散高倉宮願條下唱義舉兵。討之不利。退守宇治。遂自殺。後人稱其處。

曰扇芝。扇芝遺跡詩三尺古碑萬恨長。晚鴉飛盡斷人腸。莫言埋木無花發。絕命詞華千載香。賴政臨死願和歌。言埋木無花云云。轉結故及。是爲治承之役。

宋孝宗乾道後開五年。源賴朝。滅平氏。遂開幕府于鎌倉。論者。比賴政於陳涉吳興。

一三元

而以賴朝比漢高云。上林政重墓。亦在院中。政重號竹庵。有碑詳記慶長五年。與

鳥居元忠。固守伏見。戰死之事。

寶林寺。在惠心院南。號佛德山。禪宗。曹洞派。開祖曰道元禪師。名希元。安貞元

年。宋理宗紹定如宋。爲如淨禪師法嗣。既歸朝。建長五年。宋理宗寶祐八月廿八日寂。

惠心院。在離宮八幡南。號朝日山。兼台密淨律四宗。開祖曰惠心僧都。名源信。清

原氏。大和人。登比叡山。從慈惠學。著一乘要訣。往生要集等。寬仁元年。宋真宗天禧

六月十日。寂。年七十六。

淀町。淀一作瀨。屬久世郡。謂小橋以南街市。小橋介在久世紀伊郡界。此地。淀川

桂川巨標池等諸流滙會。故稱淀云。

久世郡役所。在淀町下津。郡丙戶數貳千五百六拾壹。人口。壹萬四千六百六十

九人。

一三元

淀城跡 天正中。明神宗萬曆年間。岩成左通。始築城。與織田氏戰。後豐太閤側室淺井氏。居此。因稱淀君。元和中。清太祖天皇命年間。德川氏。移伏見城于此。封松平定綱。爲城主。享保八年。清世祖雍正元年癸卯。封稻葉正知。世稱淀稻葉。以迄明治中興。城遂墟矣。

八幡町 在男山麓。屬綴喜郡。南北二十二町。東西三町餘。西方有橋本驛。

男山八幡 在男山上。舊稱石清水八幡宮。官幣大社。奉祀應神天皇。神功皇后。

玉依姬之處 世傳。武內宿禰後裔。曰紀某。爲南都大安寺僧。名行教。貞觀二年。

貞觀宗威遜往筑紫。詣宇佐八幡宮。誦讀咒經。凡三個月。卽有神託。歸京以聞。朝

廷勅行教建之。神殿拜殿。盡倣宇佐宮制經營。彫鏤彩料。尤極精麗。以黃金造承

甍。長十三間。別有若宮。奉祀仁德天皇。水若宮則祀稚郎子。歷朝崇尊。以至今

代。武內宿禰者。歷事仲哀天皇。應神天皇。而神功皇后征服三韓之時。參預謀

議。偉功尤多。(短支那詩)老木生雲氣。風霜侵古祠。碧甍連澗谷。紫壁翳蛟螭。七道靈畝日。三韓初實時。恩波流不息。長憶太平基。

達摩堂 在幣原。禪宗。屬妙心寺。天明二年。清聖祖乾隆四十八年癸卯。創建。爲禪家專門道場。安

置達摩大師像。實聖德太子刻也。此像初在大和國片岡達摩寺。後轉傳此寺云。

世傳。太子嘗過片岡。有飢人臥道傍。太子知其爲達摩也。後親刻其像。卽是。

(明宋陳繼令懷藏主序)日本在東海。同爲震旦之國。又可分疆界之內外邪。此所以同慕真乘。而至

人變化者。亦未嘗遺之地。達摩氏自身藉西來。既至中夏。復示幻化。并復履西歸。後八十六年。當

推古女主之世。達摩復示化至其國。世子豐聰。遜和之片岡。達摩身爲役者。因臥道左。世子察其異。

解衣衣之。已而大寂。遂藏焉。及啓棺。無所有。唯賜衣存。事與茲履西歸絕類。所異者。當時無人嗣

其神宗廟。自時厥後。緣妃遺尊尊致金精泛海。來詣齊安國師。卒令義空比丘入東。其首仰神宗之

碑。信不誣。至覺阿之嗣佛海遠。道元之承天童淨。達摩之宗。嚴嚴向盛。原大法之萌芽。實發見於世

子之時歟。嗚呼亦可謂遠近已老云云。

高倉宮廟 在相樂郡綺田村。奉祀高倉宮之處。後白河天皇第二子。曰以仁王。源

賴政率王。舉義兵。戰敗。治承四年。五月廿三日。王走南都。過光明山。中流矢

薨。平氏軍。載其屍。歸葬京師。而墜胄于途上。村人恐其爲祟。建廟納之。以祀

其靈。

木津町 距京都九里。距奈良二里。所謂大和街道之一驛也。
木津川 發源大河村。西流經八幡。入淀河。古名泉川。昔者聖武天皇將建大佛殿
于南都。徵木材於伊賀。命僧良辨良辨寺裁奈良興福寺條下。計舟楫之利。以便搬運。因改今名。
三瓶原 在木津東北。一里許。史云。天平十一年。唐玄宗開元。廿七年己卯。聖武天皇幸臨發原離宮。明年十二月。刺右大臣橘諸兄。經營皇城于恭仁鄉。恭仁鄉宮址。在瓶原西。
鹿脊山東。諸兄即樺氏祖。
笠置山 跨木津川。在南岸者。曰南笠置。北曰北笠置。南笠置比北笠置。山高水深。道險徑阻。石門十二丈。絕壁數百仞。在昔。天武天皇田獵此山。馬屈膝不肯進。天皇念佛。頃之。有鹿前導。因置笠於岩上。豫卜建寺之處。笠置之稱。起於此。後勅僧良辨。創建笠置寺。號鹿路山。刻彌勒佛於巨崖面。今猶存其影。有謗摩堂。正月堂。及大石鼓石。貝吹岩等名勝。中興祖曰解脫上人。名貞慶。藤原貞憲子。

狛之里 有上狛下狛。狛讀閑媽。上狛在木津川北。隔水十町。下狛在其西岸。往昔。百濟僧惠辨。惠宗二人歸化。惠辨居上狛。惠宗居下狛。又上狛里中。有高麗寺址。高麗亦讀曰閑媽。國音相通。凡我邦祠前。刻石成狗。呼高麗犬。蓋取於神功皇后。征三韓時。以才尖刻犬字於城門之故事。犬讀伊奴。故狛字。即閑媽伊奴之義。此地。自古種瓜有名。催馬樂謠云。山背狛渡頭。里人多種瓜。正保元年。漸聖祖康應五十年辛卯十一月。朝鮮使臣來聘江戶。新井君美。請廢散樂。以古樂代之。既賜燕樂。趙泰儔問曰。有祀享之樂耶。君美曰。祀享則有神樂。國風則有催馬樂。及薩陵王舞。又曰。奏此曲者。其先高麗人。因以狛爲姓。於其聲樂。當代第一。其假面亦數百年前之物也。貴邦猶有此舞邪。曰。勝國之音。今乃以矣。君美事。載白石先生蓬條下。
相樂郡役所 在木津町。戶數八千四百九十。人口四萬三千零四人。

入道信西孫。後鳥羽天皇。賜號解脫上人。建曆三年。宋寧宗嘉定六年癸酉二月二日。赦年五十九。史云。後醍醐天皇。將滅北條氏。謀洩。天皇御笠輿。逃南都。途過笠置。以寺爲行宮。北條氏遣兵來攻。天皇下詔四方赴難。莫復應者。天皇憂迫。適夢紫宸殿南。有大樹。樹下設虛位。二童子來。泣奏曰。天下無地容陛下。獨有此座而已。既覺。自念。於文。木從南卽楠。當有姓楠者。出扶朕以定禍難。因召山僧。問之曰。地方豪傑。豈有姓楠乎。對曰。金剛山之西。有楠正成者焉。正成父正玄。嘗愛無子。與其妻。祈於志貴山。而生。幼字多聞。長以材武名。嘗平土寇。以功爲兵衛尉。天皇曰。是也。卽使中納言藤原藤房。往召正成。正成詣行在。天皇使藤房言曰。討賊之事。朕一以託汝。因命坐問計。正成感激。對曰。天誅乘時。何賊不斃。東兵有勇無智。如較於勇。舉六十州兵。不足以當武藏相摸。較於智乎。則臣有策焉。雖然。勝敗常也。不可以少挫折變其志。陛下苟聞正成未死也。則毋復勞宸

一四三

慮。乃拜辭還。實弘元年。元文宗至順二年辛未八月也。笠置山之名。高於天下。童蒙婦女。能記之者。蓋以有此事蹟耳。

京都土產 西陣織。謂綾羅縐紗類。三國志云。綉錦。是也。又稱明霞錦。縫箔。謂刺繡也。匾額、對聯、屏風、繪簪、帶、花紅粉。稱京紅。謂純白木棉。鴨川染。鴨川之水。善於彰施。澤色不輿。鴨川染者。其一也。栗田燒。清水燒。陶磁器中。七寶燒者。描金施銀。彫嵌人物山錫器。京白粉。鴨川人。亦擅名海外。錫器。京都人形。伏見人形。有塑像木水。花卉鳥獸。鑲烟身人。亦擅名海外。錫器。京都人形。伏見人形。有塑像木葉。卽字治。蔬菜。酒。稱桑。煙草。

一四四

奈良縣

粵稽。皇祖即位于大和橿原宮而還。參照本編國體圖說二篇。列世莫都此國。唯屢異其地方。而
 成務天智二帝之於近江。仲哀帝之於長門。仁德孝德二帝之於攝津。反正帝之於
 河內。迺不與焉。第四十三代。元明天皇。即位于藤原宮。愛其地之狹隘。和銅三年。
 唐睿宗景雲二年。唐睿宗景雲二年。遷都平城。即今奈良也。溯查其舊城。東至大安寺。西至西大寺。北
 至東大寺。南至郡山町。自一條至九條。地名遺跡。往往亦存。而平城宮址。在於今添
 上郡二條村。俗稱窺地之內。窺地事載在京都御苑內條。是也。居八十餘年。桓武天皇。遷都山城。
 於是。稱平城曰南都。置國府。管轄之。降至南北朝。後醍醐天皇。以吉野爲行宮。五
 十六年。兩朝歸一。足利氏以畠山義深。爲大和守護職。足利氏末。各地豪傑群起。
 多武吉野山僧跋扈。紛紛亂擾。永祿天正之際。筒井順慶。松永久秀等。尤逞威福
 于此地方。豐臣氏起。蕩平鎮撫。封其弟秀長于郡山。後使增田長盛代之。德川氏

一四

一四

始置奈良奉行。而分國爲七。封水野勝重于郡山。植村家政于高取。片桐貞隆于小
 泉。永井直圓于橿羅。織田長益于芝村。織田尙長于柳本。柳生宗矩于柳生。明治中
 興。廢藩置縣。或屬堺縣。或屬堺縣。或隸大坂府。明治二十年。清光緒十六年。再置奈良縣。餘詳本編
 各條。

大和讀曰呀媽托呀 往古。作山跡。又大養德。古文或書大倭。皆係入唐經徒私稱。非正名也。詳載國號篇。後改今字。東界伊賀
 伊勢。西界河內。北界山城。南與紀伊山脈。犬牙相錯。東西十六里許。南北二十
 五里又半。山嶽四圍。岬嶺連綿。大河二流。自東注西。曰吉野川。曰大和川。奈良
 郡山都邑。在其北方。田野沃饒。村落相望。全國十郡。戶數八萬五千九百七十
 八。人口五十萬貳千四百四十餘名。添上郡在其北。

奈良市讀曰那拉 古作那羅。後改寧樂。在添上郡西北。表廣壹里許。戶數五千又奇。人
 口貳萬六千餘名。太聖春臺詩之南土注。汪古帝城。二條九陌。自縱橫。蕭出麥秀。農人度。馳道蓬生。賈客行。細柳低垂。常惹恨。閑花歷亂。意無情。千年碑蹟。臨閣若。日暮呦呦野鹿鳴。

奈良停車場 在下三條。自京都。至於此。曰奈良鐵道線路。而接連關西鐵道線路。

今擬前往大坂。即當經郡山。法隆寺。王寺等。到大坂湊町也。更擬東行。即當經

大佛。加茂。笠置等。過伊賀伊勢間。以至尾張名古屋也。更又南行。即當至櫻井

驛。（前山）山自京都至奈良詩。氣風吹面灑江隈。山北
山南去又來。殊覺春光今日好。桃花繁處葉花開。

奈良縣廳 在興福寺東。又有郡役所。而裁判所。師範學校。町役場。電燈會社等。

皆盡開設於其四邊。獨郵便電信局。乃在三條通橋本町。

春日神社 在三笠山麓。官幣大社。四殿四座。一曰武甕槌命。二曰經津主命。三曰

天兒屋根命。四曰比賣神。蓋天兒屋根命。實爲藤原氏鼻祖。故鎌足子不比等。創

建興福寺之時。特勸請之。爲守護神。後至神護景雲二年。唐代宗太曆十一月九日。

武甕槌神。自常陸國鹿島。經津主神。自下總國香取遷座。屋葺檜皮。事倣古式。

廟廊樓閣。盡用朱椽。而老杉古松。陰翳鬱鬱。秋冬未曾改其色。便與丹雘相映。

亦美觀也。有鹿數百成羣。倭伎其間。世傳。古者。白鹿追從武甕槌神來。蓋德至

鳥獸也。其後蕃息。以至於今。世稱神鹿。殺之者刑。又有燈籠。其數千百。用銅鐵

者。凡九百八十八。石製則一千七百八十九。世稱春日燈籠。好事者。摸其形以

醫之。自本殿西至大鳥居鳥居者。華表之類。稱春日野。眺望甚佳。第一鳥居北東曰飛火野。

和銅年間。設燈火之跡。故有此名。

春日若宮 在本宮南。奉祀天押雲命之處。天兒屋根命之子。長保五年。朱鳥宗威平三

月三日。祝史中臣連是忠創建。後開百三十餘年。中臣祐則。別起宮殿。稱若宮。

是也。若讀曰瓦岐。稱之義也。

春日山 山嶺三峰。一曰本宮嶽。又浮雲。一曰水谷嶺。又羽買。一曰高峯。又香山。

四時碧翠如滴。所以有春日山之名也。

三笠山 又作御蓋。讀曰米嘔撒。阿部仲麻呂即胡衡。詳載京都篇。嘗在漢士。不堪思鄉之情。

卽賦和歌。以遺其懷。於是。山名益顯于世。今譯其和歌曰。擡頭望蒼海。春日路悠悠。嗟是一輪月。想三笠山秋。

嫩草山 又作若草。接春日山東北。滿山皆草。如敷翠氈。與春日山。不同其形。亦奇觀也。山間有濕稱鶯之湖。高五丈四尺。幅貳丈許。山下卽千手院谷。往時。乃工宗近者居焉。尤稱良治。子孫今尙嚮小刀子類。日本刀之名、遠聞海外、是其一也、宋歐陽脩歟、抄載本編始通漢士篇中、他如明唐荆川等詩賦、當復有所別載、

手向山神社 在嫩草山東。手向者。報賽之義。天平勝寶二年。唐玄宗天寶九年庚寅九月奉祀。

有三殿。中爲應神天皇。北爲仲哀天皇。耐神功皇后。南爲玉依姬。別有若宮。爲仁德天皇。自古。斯地以楓葉名。來遊賦和歌者甚多。菅公載在本編京都北野神社條詣此。亦賦國歌。今漢譯之曰。斯行無捧幣。楓葉正新紅。祈恕倉皇罪。神明錦繡中。

東大寺 在手向山神社西。土名雜司。古者。兼脩八宗。今爲華嚴宗本山。神龜五

二四九

一五〇

年。唐玄宗開元十六年戊辰聖武天皇。勅僧正良辨創建。已成。乃賜扁額。題曰金光明四天王護國之寺。及後置國分寺于諸國。爲總國分寺。史云。聖武天皇。英邁之主也。內之

則蕩平東國。外之則交通漢土。而尤信釋教。嘗幸河內。詣智識寺。親拜盧舍那

佛。遂有建立大佛之志。良辨。近江國。滋賀人。年甫貳歲。從其母在桑田。列風

捲地。忽而巨潏來搜良辨。搏扶搖而上。不知所往。義淵僧正。時居平城。一日。詣

春日社。途見巨燄之弄小兒也。義淵大驚。將捕獲之。鳥飛冲天。人留委地。乃懷

其兒而歸。覆害三年。才德絕倫。六歲爲僧。旣極華嚴經奧。及長。爲天皇所歸依。

言無不聽。事無不行。世所謂行基菩薩。是也。天平勝寶元年。唐天寶八年己丑十月廿四

日。造佛。改鑄凡八。而告竣工。坐像高五丈三尺五寸。面長一丈六尺。廣九尺五

寸。其肩五尺四寸五分。自左肩至右肩。徑二丈八尺七寸。其目三尺九寸。其口

三尺七寸。其頤一尺六寸。其耳八尺五寸。其頸二尺六寸五分。其胸一丈九尺。其

腹一丈三尺。其臂一丈九尺。自肘至腕。一丈六尺。其掌五尺六寸。中指五尺。其
座高一丈。週圍二十三丈九尺。石座高八尺。週圍二十九丈五尺。脊後成放光
狀者。俗呼後光。八丈三尺。螺髮九百六十個。而其所鑄用。熟銅七十二萬九千
五百六十斤。白錫二萬二千六百二十八斤。練金一萬零四百三十六兩。鋼五萬
八千六百二十兩。木炭二萬六千三百五十六石。四年。唐天寶十一年壬辰二月十四日。陸奧
國獻黃金。乃貼塗其像上。四月九日。孝謙天皇。奉太上天皇即聖武天皇也率百官幸臨
焉。行開眼供養之儀。其函簿則照遵元日。最極盛觀云。銅柱。彫刻阿闍世王經。
施功德經。菩薩本業經。娑樂天女奔獸等圖樣。亦係天平年製。嗣後。宋人陳和
卿說在本編下爲脩補之。又置如意輪觀音。虛空藏菩薩。係享保九年製潛世宗雍正二年甲辰。固
非舊物也。本殿高二十二間許。東西二十八間六尺二寸。南北二十五間四尺三

寸。別有廊廡。連接本殿與南大門。長二百零八間。南大門。則東西十四間四尺。
南北五間文半。高十三尺許。係正治元年宋寧宗慶元五年己未明年。朱文公卒。再修。石狻犬。伯犬
涼都狻里條下稱妙工。東有密迹力士木像。湛慶刻。西有金剛力士。運慶刻。並皆鳴於世。
鐘樓。在本殿東。鐘高一丈三尺六寸。口徑九尺一寸三分。厚八寸。圍二丈七尺。
鑄用熟銅五萬二千六百八十斤。白錫二千三百斤。天平年間。亦鑄造之。東南院
在門內右方。是爲東大寺本坊。貞觀七年。唐太宗咸通六年乙酉聖寶僧正創建。世爲住持之
居。源賴朝管次于此。後醍醐天皇亦爲行宮。而至今代。屢駐玉璽之榮矣。雖然。
千年之久。不能無變。齊衡之靈。治承之亂。平重衡燒大佛殿永祿之變。松永秀久起兵大和爲其最也。
而時亂戰國。不遑顧慮。山田道安。奈夏人也。喜捨淨財。修補大佛頭頸。殿堂未
能再建。於是。大佛。櫛風沐雨。閱百三十餘年。公慶上人者。有志僧也。平群郡
高山鄉人。爲龍松院僧。院卽東大寺塔頭。一日決意。誓欲再建佛殿。往至江戸。

公慶素有機智。終以事見將軍。乃陳其志。將軍嘉納。躬爲大檀越。補公慶大勸進職。元祿六年。清聖福康三十二年癸酉起工。寶永二年。清聖福康四十四年乙酉落成。是歲。七月十二日。寂。年五十八。蓋奈良大佛殿之名。噪海內外。公慶之力。居多矣。

戒壇院 在大佛殿西。水門町北。併筑前觀音寺。下野藥師寺。稱日本三戒壇。天平勝寶六年。唐玄宗天寶十二年甲午、明年、安祿山反、創建。開祖爲唐僧鑑真。聖武天皇受戒于此壇。初在

二月堂。在手向山神社東。本名法華堂。又金鐘寺。俗稱二月堂。天平五年。唐肅元

年癸酉創建。開祖即良辨僧正。安置不空絹索觀音。良辨刻之。東置不動尊。及地藏菩薩。皆係光明皇后御製。而大黑天。弘法大師所作云。光明皇后者。聖武天皇之妃藤原氏。不比等女。天平元年。唐肅元十七年己巳八月。爲皇后。亦尤信佛。事載各條下。

二月堂 在三月堂北。號絹索院。天平勝寶四年。唐天寶十一年壬辰、是歲楊國忠爲右相、創建。開祖曰實忠

體常有溫氣。因稱肉身像。

四月堂 在三月堂西。曰三昧堂。安置阿彌陀佛等。治安元年。宋哲宗宣和二年庚子創建。此堂未嘗罹災火等。自戒壇院至此一帶地方。往昔。盡屬東大寺域內。亦可以見其廣大耳。

正倉院 在大佛殿西北三丁許。史云。天平勝寶八年。唐肅宗至德元年丙申、前年、鄧采卿殉難六月廿一

日。聖武天皇崩。皇女即位。是爲孝謙天皇。母藤原氏。所謂光明皇后。丁四十九日。佛忌。勅納先皇御物於東大寺。蓋登時收藏朝廷以及祠廟寶物之處。名曰正倉。而存於今者。獨有奈良正倉院耳。其倉。南北十丈八尺四寸。東西三丈六尺。床下八丈。橫積三角形柱。以作板壁。屋上葺瓦。設門扉三。故有三倉之稱。又曰御庫。御庫三倉。國音相通。讀曰迷古拉。庫內。分爲三層。臚列御物於下層及中

二層。盛夏日烈。可以避蒸騰也。霖雨濕氣。不能侵染。千年之寶器。萬種之御物。仰至今日。豈偶然哉。自古勅封。不許擅入。桓武天皇。嘗一曝之。源賴朝奏請脩理倉庫。足利義政。拜觀。且請削蘭奢待香。賜其一片。賜香將軍。始此。蘭奢待。又名黃熟。長五尺一寸。圍三尺九寸。重三貫三百五十目。別有大紅沈。重四貫六百目。手一摩之。隨即香氣。迭於四方。又有稱囀毛屏風者。繪畫花卉。聖武天皇。供養大佛之時。唐人來獻。其外祭器兵械。各色古物。今不能詳記之。現藏於宮內省。每秋。欽差宮臣。點檢曝晒。平時尙派警吏。莫准閑人進門。其東南。相距數町。有博物館。以許衆庶觀覽。

奈良帝室博物館 在戒壇院東。明治二十七年。十二月開設。蒐集大和地方。古祠舊刹。所有器物書畫。資考古者。悉數難終。世刻列品目錄。可就見焉。又有平城俱樂部。俱樂部。譯語。明治廿二年。開設。其建築構造式樣。亦足裨益於世云。

興福寺 在登大路。又號春日寺。法相宗。南都七大寺之一。世傳。藤原鎌足。初居

山城山階。建立一字。曰山階寺。白鳳元年。唐高宗咸亨三年壬申。移于大和飯坂。曰飯坂寺。

方遷都平城之時。不比等繼父志。乃移斯地。曰興福寺。取於興國家福之義。管

理春日神社。世世子孫。尊信不休。朝廷亦崇祀之。藤原氏衰。武門漸盛。天下大

亂。興福寺亦養兵。屢與延曆寺戰。後人稱僧徒強暴。曰奈良法師。一乘院。大乘

院。稱興福寺兩御門跡。僧徒食肉帶妻。法衣上佩大刀。寶藏院主。冠禪胤榮創

造十文字槍之額。其遺俗流風也。而院今皆壞廢。今裁判所。及飛鳥小學。校之所在。即其址也。

金堂 東金堂 古之東西食堂也。并置釋迦藥師等像。凡此諸佛像。皆係天平年

製。老松一株。稱花之松。高十四間。枝十八間。併稱唐崎松寺之松。曰日本三大

松。

五重塔 在東金堂南。安置藥師如來等像。天平六年。唐玄宗開元廿二年甲戌。光明皇后。勅創建之。

高十五丈一尺。後罹兵燹。應永廿六年。明太宗永樂再脩建立。

南圓堂 在金堂西南。成寶珠八角形。安置觀音像。弘法大師所刻。弘仁四年。唐憲宗元和八年。左大臣藤原冬嗣創建。以祈其父冥福。金銅燈籠。在堂前。六角形。高八尺七寸。銘文係橘逸勢筆。

北圓堂 在其北。安置彌勒菩薩等像。養老五年。唐玄宗開元九年辛酉八月。元正天皇。勅創建之。以下淡海公小祥也。淡海公謂藤原不比等。

菩提院 又稱大御堂。安置無量壽佛。開祖爲僧正玄昉。玄昉事孝謙天皇。叨曆龜山寺。在奈良町北。般若寺町。昔者。舒明天皇勅慧灌法師。築般若臺。後至聖武天皇。創建伽藍。親寫大般若經。世所謂紺紙金泥經卷。埋之地中。建石塔於其上。凡十三層。高五丈許。因號般若寺。陽泉言宗。罹兵燹等。屢矣。文明六年。

五年己巳。興正菩薩。重修再建。改爲律宗。寺什。有神功皇后征韓之役。御用弓矢。及護良親王潛匿經函。史云。護良親王。後醍醐天皇第三子也。天皇將有討

於鎌倉。親王常贊密謀。欲延山徒自援也。叙二品。任兵部卿。充比叡山座主。號尊雲。居大塔。世因稱大塔宮。謀泄。東兵來執天皇。天皇逃笠置山。親王走南都。

入般若寺。一乘院僧好專。聞之。將兵而至。親王弱楚將自殺。適見閣上有盛經三大函。其一去蓋。餘則不然。因跳身入去蓋函中。以經卷自覆。兵士至見去蓋

者。略不經意。發他二函。不獲乃去。親王恐其復至。更竄於他一函。有頃。兵士果至。傾其去蓋函。盡翻經卷。笑曰。不見大塔。獨見大唐三藏耳。遂皆散去。親王以不可久留於南都。從僧立尊。勝證。英實。豪雲。及赤松則祐。村上義光等九

人。爲道士裝。藏巾貧笈。南走至十津川。經函。今尚存焉。〔蝦山陽詩〕門題般若寺猶存。猶憶延秋避敗奔。貝葉迷因眼麗龍孫。故

二五

二五七

漢國神社 在奈夏町土名漢國。推古天皇元年。隋文帝開皇八年二月。奉祀大己貴命。

大物主命。少彥名命二神。養老元年。唐玄宗開元五年丁巳十一月。藤原不比等重修。治承

之亂。權兵衛。文治四年。宋孝宗淳熙十五年戊申四月。更建社殿。既而遷座。有東照公甲冑等

寶什。

猿澤池 據倭印度綱猴池。猿澤池月。爲奈夏八景之一。采女社。在其西畔。采女

者。女官名。世傳。莫都平城之時。采女投身斯池而死。元明天皇憫之。爲建其祠。

正曆寺 距奈夏町。東南一里又半。號菩提山龍華樹院。安置藥師佛。係龍樹菩薩

手刻。唐僧善無畏携來獻之。正曆年間。宋太宗淳化年間。創建。開祖曰兼俊僧正。至建保

中。宋寧宗嘉定年間。僧信因重修。

白毫寺 在東市村。高圓山腹。天智天皇勅創建之。本堂。安置阿彌陀佛。佛工春

日刻。間隱像。菅公手刻。地藏尊。則小野篁刻。皆有名於世。而高圓山。古者。設

離宮之處。萬葉集。有高圓離宮之稱。續日本紀。和銅元年。幸于春日離宮。是也。

大安寺趾 在大安寺村。南都七大寺之一。初曰熊凝精舍。後移百濟河畔。號百濟

大寺。百濟村。在北。唐城郡阿蘭。又移高市。改大官寺。和銅二年。宋睿宗景雲元年庚戌始移平城。天平元年。

唐玄宗開元沙門道慈。上唐土西明寺圖。聖武天皇。乃勅準照之。再建伽藍宏壯無

比。與東大寺西大寺齊名。因號南大寺。嗣後坍塌。纔存一字。昔日之觀。不能復

見。獨有菅公親寫緣記。尤稱奇品。般若寺海龍王寺。輪番護保。以至今日。

法華寺 在佐保村。律宗。世傳。聖武天皇。建東大寺。嚴禁婦女出入其內。於是。

光明皇后。更建此寺。亦禁男子出入云。海龍王寺。在其東北。光明皇后建立。又

有隅寺及隅院等稱。史云。天平十三年。唐開元廿九年辛巳。施與隅院食封壹百戶。是也。經

藏。秘號聖武天皇。及皇后宸筆經典。

月瀨梅花 月瀨村。在添上郡東北隅。接伊賀阿山郡。名張川。自東南。流西北。凡

貳里許。其間皆梅。寬政之末。清仁宗嘉慶年間田宮仲宣著書。唱道其勝。然以其地僻。探梅者鮮矣。嘉永年間。豐年初伊勢儒員。齋藤拙堂。名正謙。善文章。事藤堂氏。嘗與梁川星庵等。游于此地。刊行月瀨記勝。天下喧傳。比至今代。每歲春仲。坐乘火車。遨遊者多。月瀨之名。於是益顯。世比之賴山陽耶馬溪記。耶馬溪在豐後。載本爲九州條下。

郡山町 屬生駒郡。戶數二千二百七十三。人口一萬二千七百有奇。有縣立尋常中學校。警察署。區裁判所等。又設停車場。爲大和第一繁華之地。

郡山城 世傳永祿年間。明嘉靖小田切春次所築。春次者。簡井順慶部將。天正十三年。明神宗萬曆豐太閤討大和平之。封弟秀長。以爲大阪保障。子秀俊天。國除。使增田長盛代之。關原役後。大久保長安居之。長安死。簡井定慶兄弟代之。豐臣氏亡。德川氏興。元和元年。明神宗萬曆四十二年乙卯卦水野勝政。後至享保九年。清世宗雍正二年甲辰柳澤吉保。自甲斐來。爲郡山城主。子孫世襲。延至廢藩置縣之時。列華族。受伯爵。

爲幕中賓。廣澤建議修理歷世帝陵。徂徠乃論更正律令。吉保皆納其議。施之天下。常憲公之尊崇儒術。蓋非無故也。世或有譏吉保擅權者。然論近代文學旺盛。則必稱元祿享保。至今不衰。吁亦盛矣。柳澤神社。在北郡山。奉祀其靈之處。係明治十二年建設。

唐招提寺 在都跡村。土名五條。又號龍興寺。眞言宗。南都七大寺之一。孝謙天皇。嘗賜號建初律寺。後改今名。開祖曰鑑真和尚。唐揚州龍興寺僧。天平勝寶六年。唐玄宗天寶十二年。甲午。明年。安祿山反。四月。從我留學。僧樂毅來朝。獻佛舍利三千顆。以及經典。聖武天皇。勅築戒壇於東大寺。鑑真奏請創建此寺。實天平寶字三年。二年己亥。唐肅宗乾元八月也。本寺自古。無罹災火。歷世什寶。保存于今。獨有本寺與東大寺法隆寺耳。中興祖曰寬盛和尚。南大門址。在五條村南端。可見當時寺域廣大。〔郊谷附錄〕神師詩故

國無心渡海潮，老禪方丈倚中峰，夜深雨絕松聲靜，一鶚飛盤照寂寥，餘散京都駁馬寺條下，金堂。唐僧如寶所建，屋上兩端，置鸚尾瓦。

一係唐製。一稍脩之。堂內。安置廬舍那佛坐像。長壹丈八尺。爲乾漆製。後光上。刻佛千體。背後畫貳千體二千佛。其左置藥師如來像。長壹丈壹尺五寸。係唐僧思託律師刻。其右置千手觀音像。長八尺。傳云。天人造之。又有唐僧曇靜所刻大日如來。及唐匠軍法刀所刻梵天帝釋等佛像。講堂。在金堂北。天平寶字二年。賜朝集殿。建之。長九間。橫四間。屋上列瓦。都爲中古式樣。安置彌勒佛等像。皆係軍法刀刻。東室講堂。在金堂東。長三十間。而南北十二間。曰禮堂。北方十五間曰舍利殿。開山堂。在禮堂東。安置鑑真和尚坐像。像上貼紙。捺漆設色。長貳尺六寸。係思託律師造。尤稱妙工。經藏。寶庫。其形同於正倉院之庫。戒壇址。在講堂西。聖武孝謙二帝。受戒之處。寺什。十六羅漢等像畫。係顏輝筆。世稱逸品。本堂前後。孤山之松。醍醐之泉。皆爲鑑真遺蹟。

一六三

一六四

藥師寺 在唐招提寺南數丁。法相宗。南都七大寺之一。白鳳九年。唐高宗永隆元年庚辰。創建。

世傳。天武天皇。愛皇后罹眼疾。召集僧一百人。念佛供養。疾漸瘳。時訴連和尚。

獻伽藍圖。天皇大喜。勅建此寺。後至元正天皇。移于今地。金堂。安置金銅藥師

如來坐像。長九尺。須彌臺。亦用銅造之。高壹尺一寸。徑壹丈七尺。日光月光兩

菩薩。長各壹丈壹尺五寸。壇卽大理石。長五丈四尺。幅壹丈二尺。高壹尺八寸。

養老年間。百濟國所獻云。東院堂。安置觀音立像。長七尺。亦百濟國所獻。六重

塔。高十一丈五尺。方三丈。天平二年。勅建。其屋每一層。有大小。故又稱三層

塔。上有九輪銅柱。刻銘。係舍人親王筆。世傳。筆力結構。凌駕晉唐。史云。親王

博聞強記。嘗奉勅撰日本紀。上之。後十五年。薨於天平中。是爲我邦中古儒宗。

文珠堂。四方四間。天平年間。行基菩薩創建。文珠菩薩坐像。係其手刻。佛足石。石

盤上刻佛足形。長一尺五寸七分。幅五寸三分。建碑其傍。刻光明皇后御製和歌

二十一首。寺什。古文書多。魚養軍大般若經六百卷。其尤者也。

西大寺 在伏見村。距法華寺西八丁。又號高野寺。南都七大寺之一。天平神護元年。唐代宗、永泰元年、乙巳、明刺僧常騰創建。伽藍之大。不讓於東大寺。奈良二十

二町。中有四十九院。三百堂宇。寺領二十一萬石。後漸衰頽。嘉禎中宋理宗端平

觀音思園上人重修。上人。源義仲曾孫。文龜二年。明孝宗弘治十四年辛酉罹兵燹。今纔存其

蹟。本堂。又稱釋迦堂。釋迦立像。長五尺四寸。興正菩薩刻。傳云。佛像最古者。

愛染堂在其西。愛染明王坐像。長一丈許。元寇之役。明王所把之箭。一桿飛入

空中。既而我軍大克。觀音堂。又曰四王堂。安置十一面觀音像。用木設色。長一

丈六尺。四天王銅像。係天平神護元年鑄造。長各七尺許。寺什。古書甚多。不遑

枚舉。

秋篠寺 在秋篠村。古名秋篠里。號無本寺。眞言宗。光仁桓武二帝。初創建之。號

浮於水上。遂建堂封之。

山城小栗栖人。嘗入唐。已歸朝。詣藥師堂。將汲斯水。以供閑伽。忽見大元明王

元眞言院。開祖爲善珠僧正。有藥師堂。鐘樓等。又香水堂。世傳。常曉阿闍梨。

法隆寺 在法隆寺村。距法隆寺停車場八丁。古名斑鳩寺。法相宗之本山。兼修入

宗。又有七德寺。聖國寺。來立寺。鳥路寺。往生所寺。法隆學文所等稱。昔者。用

明天皇不獲。時與聖德太子。誓佛曰。朕造藥師如來像。將尊奉之。故願疾速祛。

既崩。不果。推古天皇。即位十五年。隋煬帝大業三年戊辰繼紹先皇之志。喜捨其斑鳩宮。創

建此寺。至今壹千貳百餘年。未嘗罹災震也。稱本邦第一舊刹靈場。歷世尊崇。寺

領。致十二萬三千石之多。王室式微。武臣專橫。爲其所侵掠。頤極衰廢。繼豐二

氏。更謀恢復。慶長九年。明神宗萬曆卅二年甲辰片桐且元董役。即其一例也。後至元祿享保

間。常憲公夫人桂昌院。大修理之。寺域貳萬二千四百拾貳坪。七堂伽藍。屹立

其中。而古式舊樣。宛然映目。噫。問。南大門在其正面。其次曰中門。樓上置百萬塔。爲孝謙天皇宸製。樓下左右。有金剛密迹之立像。鳥佛師刻。面目如生。廊廡。起自中門左右。紫廻鼓樓節樓。講堂金堂。金堂在中門內。屋上葺瓦。設閣二層。高五丈八尺五寸。東西十二間四尺八寸。南北十一間。牙堂爲二。稱內陣外陣。內陣辟讀。皆係高麗僧曇徵筆。中央安置釋迦銅像。長二尺八寸七分。藥王。藥上各二尺七寸。其東則藥師銅像。及日光。月光。是等諸佛像。皆係鳥佛師鑄造。釋迦藥師二像背後。刻銘。法興元卅一年。歲次辛巳云云。其書遒勁。類於晉唐。其西則阿彌陀佛。後世大佛師康勝補刻。五重塔。在金堂西。高十一丈五尺。方八間零九寸。又號現身往生塔。史云。皇極天皇。即位二年。唐太宗貞觀十七年。癸卯魏徵死之歲。大臣蘇我入鹿。遣兵襲大兄皇子於斑鳩宮。皇子自縊而薨。卽此處也。故有斯號。和銅年間重修。元祿二年。清聖祖康熙廿八年己巳桂昌夫人亦修理之。塔中。有須彌山。鳥佛師用本

二六七

二六八

邦及淡土天竺土塊。造之。又安置諸佛像於其中。講堂。在金堂後。高五丈一尺。東西二十二間二尺。南北十二間五尺二寸。鼓樓。在其西。又曰大藏經。有稱上之堂者。高四丈五尺。東西十五間。南北七間又半。舍人親王創建。西圓堂。在其西方。高四丈二尺。方九間四尺六寸。養老二年。唐玄宗開元六年戊午。橘氏創建。橘氏。光明皇后之生母。〔明末彌爾命〔懷藏主序〕百時厥後、嫡妃溫賢瑪、致金體泛海、來詣齊安國師、聖靈本令義空比丘入東、云云、今案、此文所謂橘妃者、蓋指光明皇后之母乎、院。高三丈六尺。東西八間五尺五寸。南北十六間五尺。保元二年。宋高宗紹興廿七年丁丑創建。安置聖德太子坐像。長二尺七寸五分。係其自刻。時年三十五。左右置山背大兄皇子。殖栗茨田皇子。惠慈法師坐像。而如意輪觀音像。則百濟聖明王所獻云。銅封倉。在其東。高三丈三尺。東西六間又半。南北十五間許。寺什皆盡蒐集。在於此中。上自用明天皇。下至近代。皇族諸侯。珍寶遺物。累積如山。凡用心考古者。不論內外。拜觀嘆賞。至有獻保護資金者。寺刻寶物目錄。可就見焉。

食堂。在其東北。高二丈一尺。東西十二間五尺。南北六間三尺。又有新堂。高一

丈零八寸。方四間一尺許。安置藥師如來像。亦百濟國所獻。謹按。聖德太子。用

明天皇皇子。母穴穗部間人女。生於敏達天皇。卽位二年。五代陳宣帝大

論語。尤重聖教。稍長。歸依佛法。高麗僧惠慈。百濟僧惠聰。來朝投化。太子師

事之。建寺于大和地方。不一而足。今特表章之。當照本編文學章敘及京都太太子

壽四十九。薨於推古天皇二十九年。唐高祖武德四年辛巳二月廿二日。以是。法隆寺每年丁

此忌辰。施行法會。四方膺集。最極雜沓。唐劉禹錫贈日本僧智藏詩。浮槎萬里過滄溪。福

青。身無彼我。懷土。心會真如。不證經。爲問中華學道者。幾人雄猛得蒙

成。一區。亦斑鳩宮趾。太子薨後。天平十一年。唐玄宗開元廿七年己卯。喜捨建寺。夢殿。又稱上

宮王院。太子入定之處。禮堂在其前。舍利殿。安置太子年甫二歲。及七歲之水

像。繪殿。列於其西。秦致真筆。尤稱神逸。現納秘府。致真攝津大波鄉人。延久

佛舊像。今不能詳記之。

三年。宋神宗熙寧四年。辛亥。鳳陽修死之歲。五月。畫於本殿紙障。傳法堂。又號講堂。在舍利殿北。古

龍田神社。在三鄉村。屬生駒郡。南距王子停車場二十丁。官幣大社。奉祀天御柱

神。國御柱神之處。崇神天皇。勅崇奉之。每歲四月四日。施行祭典。昔者。法隆寺

僧來對辨之。至今代廢。龍田新宮。在龍田村。聖德太子。別卜其地。故此曰本宮。

彼曰新宮。

龍田川。發源生駒山北。經龍田町。西流過神南村。注大和川。凡四里許。自古。以

楓樹名。架鐵橋于其西。曰龍田橋。龍田又作立田。國音相通。讀曰打子打。

龍田山。西界河內。史云。皇祖東征之時。勅兵。前赴龍田。山路險隘。不能駢行。更

東臨生駒山。是也。

朝護孫子寺。在志貴山。亦西接河內。距龍田町四十丁許。聖德太子創建。安置毘

一七〇

一六九

沙門天。延喜年中唐昭宗天復中醍醐天皇不豫。詔僧命蓮禱之。有驗。乃賜田園。更建坊舍。且飭祈禱安朝護國。子孫長久之事。因爲寺號。楠公父母亦祈志貴山。參看笠置山條下是也。寺什楠公鎧袖及古銅鏡。古書畫。

下田驛 屬北葛城郡。戶數三百七十八。人口二千四百八十九名。亦設大阪鐵道停車場。

達摩寺 在王子村。距王子停車場南八丁許。世傳。聖德太子嘗過片岡。途遇餓人。脫衣衣之。乃賦和歌。餓人唱和。既死。將葬之。其衣存而人不在。太子知達摩化身。親刻其像。建寺安置。因號達摩寺。朱藤文載京都達摩堂條下永祿中。罹兵燹。無復昔日之觀矣。寺中有松永久秀墓。文云天正五年十月十日。筒井順慶建之。

當麻寺 在當麻寺村。距下田停車場二十五丁。距高田停車場五十丁許。兼眞言淨土二宗。推古天皇二十一年。隋煬帝大業九年癸酉創建於河內交野郡。山田鄉。號萬法

藏院。禪林寺。白鳳二年。麻呂皇子唐高宗咸亨四年癸酉移於斯地。曰當麻寺。安置千手觀音佛像。中將姬者。藤原豐成女也。容貌端麗。才識絕世。一旦頓悟。薙髮爲僧。號法如尼。時以藕莖代絲。織成曼陀羅。長一丈二尺九寸三分。幅一丈三尺二寸。蓋天平寶字七年。唐代宗廣德元年癸卯六月也。今尚存於寶庫。而揭曼陀羅堂者。係土佐光茂撰寫。世稱文龜曼陀羅。戒壇。黑採螺鈿。極其精巧。源賴朝所建。與之院。在西方山上安置圓光大師坐像。長二尺二分。大師手刻云。寺什。圓光大師行狀畫卷四十八本。與藕絲曼陀羅。併稱于世。清康熙年間。刊行蓋碗圖記。題其緣起。曰日本大和州當麻寺化人織造藕絲四方壇緣起說。黃檗四代性

榮闍法選。東明嗣法門人道章悅家錄。而其圖則十一。曰長谷祈禱。曰將姬歸命。曰僧授佛經。曰觀女紡績。曰彌尼同事。曰懸掛指示。曰三聖九品。曰法尼修證。曰善神擁護。曰臨終生方。曰佛來接引。又其引云。如來教道回測。菩薩度生無方。然佛度有緣。心淨見佛。今於悅家禪師驗之矣。悅家諱道章。幼歲習禪浙杭。壯年遊化長崎。徧探名勝。上洛遇澁老人。針芥相授。遂傳宗焉。因詣當麻寺。頂禮藕絲西方境。夫當麻寺。亦是役小角行考家舍。當賴王子。命而爲寺。寺因得名。從公手植櫻樹于寺傍。記曰。佛法興櫻樹矣。是以日本佛法興來。自欽明帝。至今。一千一百五十餘年矣。王臣之歸敬。名山之廣布。名僧之衆多。詳載于國史傳記。並釋書中。茲不煩引。後有攝家藤公一女。來此修道。感得胸陀。鑿井築絲。觀音織出西方聖境。如是始末。彼記悉矣。悅公模寫圖後。乃書澁老人

所者緣起說、遙屬居士山王、付列傳疏、以廣雲棲律業法門、真盛事也、不我過棄、欲言於子、子惟披公身居異國、留念故鄉、以此大希有事、普使故國知聞、真無盡法喜、連沼一渡航也、康熙壬午、
浙杭東林黨雲濫頂行者檄法聚館、康熙壬午、即我元祿十五年也、

廣瀨神社 在河合村。屬北葛城郡。距法隆寺南十四丁。官幣大社。奉祀和加宇賀能靈命之處。白鳳四年。唐高宗上元二年乙亥鎮座。歷世天子。屢幸臨焉。與龍田本宮併稱。今井町 屬高市郡。戶數五百二十三。西接八木町。戶數五百四十二。業織帛布者多。與櫻井二輪。同其繁華。

橿原神社 謹案。我邦紀元第一年。辛酉之歲。正月朔旦。神武天皇。即位於大和橿原宮。是其趾也。啓祚發祥之地。創業垂統之蹟。聖聖相承。無不崇重。而至今代。大孝追遠。特詔建設宮殿。列於官幣大社。時明治二十二年也。於是。舉國臣民。亦稱喜得拜晚。致恭敬之誠。嗚呼。民德歸厚。國威揚外。亦未必不由于此也。今恭紀其梗概。正殿。東西十間。南北七間。原內侍所。內侍所者。皇宮奉安神器之

處。拜殿。東西八間。南北十二間。爲神嘉殿。二殿皆朝廷特賜其木材。自與他神社異矣。殿前植櫻橘樹。擬紫宸殿。尙有神庫。神饌所。社務所等。自第一鳥居至第二鳥居。左右遶牆。地域凡壹萬八千坪。御陵。在其北方。相距八丁。大日本史云。七十六年。開元壬子三月十一日。大陽曆四月三日天皇崩。葬畝火山東北陵。延喜式云。兆域。東西一丁。南北二丁。守戶五烟。仰見景命之照萬邦。俯察神謨之貫千載。蒼松蔽丘。鬱鬱葱葱。銀沙敷地。燦燦爛爛。足欲進而路阻。手欲拍而抵牾。凡我臣民。一詣於此。孰不惶懼。又孰不勝恐悚之至。御陵。神宮。共在白檀村。屬高市郡。距畝火停車場。南二十丁內外。

畝傍山 突兀聳於御陵神宮之間。高三百尺。上有山口神社。世傳。奉祀神功皇后耳無山。又天神山。高二百尺。在其北東。山中多桅樹。橿原古七郡西國御與口無通俗呼曰無山。又有天香久山。在其東方。高百七八十尺。形似富士山頂。富士山事載本又東海道條下天祖之時。

採真樹於此。漢士無稱字、讀徹氣、奉神之木名皇祖之時、取埴土於此。自古有名。二隸鼎峙。世稱

大和二山。

久米寺 在白檀村。距神宮僅貳町。推古天皇即位二年。隋文帝開皇十四年甲寅久米皇子患眼

疾。乃念佛。既癒。爲建此寺。安置丈六金銅藥師佛等。十九年。隋煬帝大業七年辛亥天皇幸

臨。久米皇子者。聖德太子皇弟。後僧義淵、勘操、空海等。皆居焉。多寶塔。俗呼

鍊塔。唐僧善無畏來朝。獻天竺鐵塔也。寬平七年。唐昭宗乾寧二年乙卯十月。宇多天皇亦

幸臨。後罹雷火。現存堂宇。係萬治年中明永曆三十二年再修。順治十六年

橘寺 距久米寺東南三十丁許。佛頂山。或安部島山。別號菩提寺。天台宗。屬延曆

寺。東西八町。南北六町。本殿。安置聖德太子二十五歲。及十六歲之坐像等。史

云。推古天皇。十四年。隋大業二年丙寅一七月。聖德太子奉勅諱勝蔓經。於橘京豐島宮。

後更爲寺。即此地也。

岡寺 距橘寺東七八丁。眞言宗新義派。聖德太子東寺屬長谷寺。安置如意輪觀音塑像。

長壹丈六尺。世傳。弘法大師。用和漢天竺三國土塊。造之。史云。舒明天皇二年。

唐太宗貞觀四年庚寅十月。遷都于飛鳥岡。稱岡本宮。此地。卽其址也。或曰。草壁皇子宮址。

宮門以及碑瓦。傳至於今。蓋距崇峻天皇元年。百濟國貢瓦博士麻奈父奴等四

人之歲。大約四十二年。是瓦博士之所造歟。齊明天皇。喜捨宮殿。賜僧義淵創

建寺院。孝謙天皇幸臨。更建如意輪堂。納小塔拾萬基。華山法皇亦蒞焉。金剛

力士像等。皆爲千年前物矣。

南法華寺 在高市村壱坂。俗稱壱坂寺。世傳。養老年中。唐玄宗開元年中元正天皇。勅僧

辨基建立。賜法華寺扁額。後至天平勝寶年中。唐天寶年中又建法華寺於添上郡。於

是。加南字別之。本堂成八角形。安置千手觀音坐像。辨基所刻。遠近皆謂有求

必應。寢詣太夥。

櫻井町 屬磯城郡。戶數六百五十六。人口二千九百七十八名。有警察分署。及物產會社。材木會社等。大坂鐵道。開設停車場。市廛日加多云。距奈良町。凡五里二十丁。距八木町。一里許。又有停車場。

談山神社 在多武峯村。距櫻井停車場。南二十丁許。初至其麓。由此五十丁許。當詣神社。昔號妙樂寺。又護國院。奉祀藤原氏祖。大織冠鎌足公之處。公幼字鎌子。中臣御食子公長子。天兒屋根命二十一世孫。生於大和。大原之第。皇極之朝。大臣蘇我入鹿。志懷非望。弑山背大兄皇子。載本編法隆寺條下樂岩畝傍山東。公大變之。密與中大兄皇子。謀討滅之。登倉橋山。即今多武峯。會議於藤樹下。後世因號談山。適三韓來朝。獻方物於大極殿。入鹿昇殿。公即斬之。更遣兵殺其父嬬夷。以功授大織冠。賜姓藤原。居十二年。中大兄皇子即位。是為天智天皇。八年。唐高宗總章二年十月十六日。薨。壽五十八。葬于攝津阿威山。長子定惠和尚。夙游已巳是歲李勣卒

于唐。白鳳七年。唐儀鳳二年戊寅歸朝。嘗登斯山。曰山容酷似五臺山。十一月。改葬于此。因建十二重塔。高四丈三尺。又植菴羅樹。皆自唐攜回者。大寶元年。唐中宗嗣聖十八年辛丑建設神殿。高十六尺九寸許。方二丈。屋上葺以檜皮。殿內白木。而外則朱髹。尤壯觀也。嗣後。每五六十一年。定期重修。延長四年。五代後唐明宗天成元年丙戌賜號談山權現。永享中。明宣德正統年間贈正一位。至德川氏。寺領三千石。坊舍五十二。明治中興。畝別神佛。列於官幣大社。斯地貧瘠。樹皆清溪。楓樹萬株。稍綴其間。稱紅葉洞。秋色可人。名聞遐邇。俗諺云。關西有談山。關東有晃山。日光山載本編日光條洞東北隅。有淡海公祠。即祀公嗣子不比等之處。樓門。透樓。神庫。總社。攝社。社務所等。皆在焉。韓人池 在柳村。又稱柳田池。史云。應神天皇。即位七年。西晉武帝咸寧二年丙申七月。高麗百濟任那新羅諸國民人來朝。大臣武內宿禰。命其國人。開鑿池沼於輕島上。以便灌溉。既成。因號韓人池。又廣瀨郡百濟村。有滿字池及淡字池。磯城郡多村。有

阿字池。俗併稱之。曰阿滿漢之池。

文珠院 在阿部村。號阿部山。崇敬寺。又智足院。距談山北二里。世傳。大化六年。唐高宗永徽元年庚戌孝德天皇。勅僧道昭。創建。中興祖曰羅覺上人。本堂安置文珠菩薩坐乘獅子之像。長九尺八寸。彫木設色。安阿彌刻。併奧州永井。及丹後切戸之文珠。稱日本三文珠。又有安部仲麻呂。阿倍晴明等遺蹟。

長谷寺 在初瀨町東初瀨山腹。初瀨。長谷。國訓相通。讀曰哈壁。號豐山神樂院。真言宗。新義派之本山。世傳。道明上人。奉旨。鏤刻金銅版釋迦佛像二千體。建寺於此。舊誌所謂。大和國釋迦堂。是也。天平元年。唐玄宗開元十七年己巳藤原房前奏請勅僧德道。建一大伽藍。德道者。道明法嗣。天平勝寶四年。唐玄宗天寶十一年壬辰聖武天皇幸臨。由是。朝廷益加崇重。而屢罹災。頗失舊觀。然覓山臨谷。景勝奇絕。亦以楓樹及牡丹花。稱於世。寺什。長谷寺緣記一卷。管公撰文并書。尤奇品也。宋徽宗

帝所贈虎皮屏風。及金剛。兆殿司等佛畫。多可觀者。

大神神社 在三輪山麓。距長谷寺西五十丁。官幣大社。所謂大和國一之宮。一之宮考。最古第一宮奉祀大已貴命之處。三輪山。或作三諸山。上古大已貴命居焉。故其建宮。在紀元前。本殿。勅使殿。神庫。社務所等。共二十又六宇。亦極美觀。而厥山維峻。厥林維鬱。應以摘取往古遺翠。

大和神社 在朝和村。屬山邊郡。距三輪北一里。官幣大社。崇神天皇。即位六年。漢武帝征和元年己丑奉祀大國魂命之處。

石上神社 在山邊村。距大和神社。東北二十五丁。官幣大社。崇神天皇即位五年。漢武帝大始四年戊子奉祀布留御魂大神之處。史云。皇祖自熊野。浮海而東。兵士皆病。熊野人高倉下來獻寶劍。名曰節彥。蓋節爲斷物聲。以劍利斷物。故有此名。皇祖獲之。大喜。病亦瘥矣。後建祠祀之。是也。

高田町 屬北葛城郡。市街繁華。冠於郡中。戶數八百八十。人口四千六百四十
又奇。有警察署。區裁判所等。客棧酒肆。亦不鮮少。又有大阪鐵道停車場。距
御所町。壹里二十二丁。

世尊寺 在大淀村。屬吉野郡。古名比蘇寺。又有現光寺吉野寺等號。世傳。用明
天皇卽位二年。隋文帝開皇七年丁未聖德太子奏請建寺於此。曰。四神相應之地。佛法定必
勃興。天皇聽之。乃與蘇我馬子謀建之。本堂安置放光樟像。欽明天皇嘗勅良工
刻者。後屢罹災。伽藍廢頽。僅存鎮樓等耳。

吉野山 我世諺云。人則武士。花則櫻樹。夫評櫻花。則說吉野。說吉野則必談南朝
忠義之事。故士之於櫻花。櫻花之於吉野。不可相須而離也。吉野又作芳野。讀曰
約西諾。史云。皇祖東征。踰葛城山。至于吉野。嗣後。應神。天武。持統。文武。聖武。
元正諸帝。無不幸臨焉。山在吉野郡北端。下有吉野川。發源郡東溪澗。西流過

紀伊而入海。六田村跨其南北兩岸。河水至此滙會。稱六田渡。老柳數株。臨水而
樹。因呼柳渡。溯流壹里。南曰下市町。北曰下淵驛。又稱櫻渡。登山不得不由斯二
渡二道也。然自六田而上。經上市而下。是爲便捷。過南六田數丁。有坂。曰一之
坂。旣見櫻樹夾道。十五六丁。吉野神社。官幣中社。奉祀後醍醐天皇之處。明治
廿二年。六月。詔設神殿。左右有瀧樓。禮正四位土居通增。禮正四位見島範長。禮正四位
增從二位藤原俊基。禮正四位得能通綱。船岡。見島高德。贈正五位櫻山慈後
御影。增從二位藤原資朝。增從二位藤原俊基。四社。皆祀勅王義士之靈。第一鳥居前。有繪馬堂。繪馬者謂
扁額。扁額。古者。我俗陣賽等時。或用馬匹。於是。後世納。扁額於祠廟。定必畫馬。繪馬堂之名起於此。二十五丁。長峰藥師寺址。路傍建
村上義光碑。義光稱彥四郎。護良親王從士。親王自般若寺。在般若寺。寺條下通至十津川。
旣而築柵于此。北條氏。遣二階堂道繼。率兵數萬。來攻。親王親戰不利。義光請
其甲冑。詐稱親王。拒戰而死。事詳于碑文。三十丁。有千本茶店。世所謂一百千
本者。是也。一目。一畧之義。本者。株也。千本。謂其數多也。七曲坂。以山路曲折。有此名。岐曰追分。又攻逆。

一八二
一八二

注字載本
編者條

元弘之役。東軍自此來攻云。一之橋。銅柱刻豐臣秀賴重修。過橋入門。

曰黑門。是爲吉野町。戶數四百又奇。多以客棧爲業。第一鳥居。用銅鑄造。高二

丈五尺。圍一丈二尺。揭扁額。題曰發心門。係弘法大師筆。藤尾坂。史云。文治之

初。宋孝宗乾道年間源義經與兄賴朝有隙。遁匿吉野。義經有妾名靜。磯禪師之女。居于

京師。追至藤尾坂。爲寺僧所執。卽是地也。仁王門。又名大門。康正年間明崇禎帝景泰年末

建立。密迹像。灌壓刻。金剛像。連壓刻。長各一丈六尺。有名于世。藏王堂。金峰山

寺之本堂。天平年間唐玄宗開元年間聖武天皇勅僧行基創建。安置金剛藏王權現木像。

長二丈六尺。行基親刻。元弘之亂。皆罹兵燹。後至天正十九年。明神宗萬曆十九年幸如重脩。

堂高十一丈二尺。方十八間。卽今存者。四本櫻。在其堂前。史云。護良親王。牙於

藏王堂。躬擐緋甲。戴彫龍鐵冑。擁眉尖刀。從壯士二十餘人。逆戰不克。乃退帳

於中庭。置酒訣飲。親王甲上集七矢。又受二創。臨宴。未及援矢。立喉三大斃。僧

勝鬪乃貫所獲首於刀鋒。起舞以侑之。有頃。義光至。甲亦受十六箭。血流至踵。

曰我兵力盡。外城又失守。臣請代君而戰死。我公乘間。避之他國。以謀再舉。四

本櫻者。卽張宴之蹟也。嗚呼。老櫻已朽。然遺香餘蘊。遠聞萬世。寶城寺。古名金

輪王寺。在藏王堂西。延元元年。元順聖元年丙子十二月。後醍醐天皇。潛幸吉野。初以

吉水院。爲行宮。後遷于此。曰金輪寺御所。又曰黑木御所。慶長中。明神宗萬曆中東照

公。命僧天海重修。因改今號。移金輪王寺於日光山。吉水神社。古稱吉水院。開祖

爲彼小角。白鳳年間。創建。史云。源義經之道吉野也。與僕辨慶等。密議於此。

又元弘中。院主曰宗信。嘗助護良親王。有功。後醍醐天皇。出京師。逃大和。遣

三條景繁往諭之。宗信先衆出迎。楠正行聞而大喜。更從弟和田正朝等。護駕入

吉水院。以爲行宮。明治八年。廢寺。更爲神社。今尙存御座。及密藏室。山口神

社。在其東北。古稱勝手明神。世傳。天武天皇。未登極也。嘗居芳野日雄寺。夜

夢櫻花。問之寺僧角乘。對曰。櫻者。我邦花王也。而勝手明神。卽木花開耶姬命。尤愛櫻花。故櫻花一名木花。蓋昇天位之兆也。後果如其言。天皇乃勅植櫻。且建一寺。賜僧角仁。卽角乘子。號櫻本坊。由是。遠近士庶。詣吉野者。爭獻櫻樹。以爲報賽。至於山岳谿谷。無往不櫻樹也。櫻。國訓左久良。讀曰薩古拉。傳漢字之後。以櫻字充之。我邦獨有此花。海外各國。未曾有之。故與漢土櫻桃之櫻。固不同也。神功皇后征韓之役。祈勝手明神。遂得大捷。義經妾靜。奏法樂舞。極妙入神。動聚僧心。義經君臣。因以出山。遁至陸奥。皆斯處也。村上義隆墓。距山口神社。五丁。義隆。義光子。稱藏人。其父將出戰。義隆從之。義光叱曰。汝往爲王扞難。力竭則死之。何與我俱死之爲。義隆追及親王。將至天河。敵兵來迫。義隆拔刀奮戰。擊斃數人。親王得走入高野山。義隆躬被十餘創。計王已遠。入竹叢中。伏劍而死。時年十八。今世建碑於墓前。如意輪寺。在山口神社東。號塔尾山。本堂。安置如意輪觀音像。開祖曰藏上人。初名道賢。三好氏。清行弟也。清行爲文章博士。與官公友善。延喜十六年。唐昭宗天祐十三年丙子二月。道賢登山。削髮爲僧。又建竹林院。園庭幽雅。世贊稱之。史云。正本之初。禪正行在金剛山。漸保聚義。故。時出兵攝津。遂進逼京師。足利尊氏大懼。乃發二十餘州兵。令高師直。統諸將帥。以拒南軍。正行與弟正時。率諸宗族。詣行宮。依藤原隆資。上言曰。先臣正成。嘗以微力挫強賊。敢安先帝宸愛。及天下再亂。逆賊四襲。遂致命於湊川。臣時年十一。命歸河內。囑以收拾餘衆。報復國讎。臣年已踰弱冠。而稟性羸弱。常念不及今力戰。以有待之身。罹無虞之疾。上爲不忠之臣。下爲不孝之子。而今賊渠帥。大舉來犯。是臣致命之秋也。非臣獲彼首。則授臣首於彼。臣生死決於今日。切希得一拜天顏而行。隆資入奏。後村上天皇。捲簾臨視將士。特前正行。觀勞之曰。變日而捷。大殺賊勢。甚慰朕心。朕深嘉汝世忠。今賊悉銳而來。眞安危

夢櫻花。問之寺僧角乘。對曰。櫻者。我邦花王也。而勝手明神。卽木花開耶姬命。尤愛櫻花。故櫻花一名木花。蓋昇天位之兆也。後果如其言。天皇乃勅植櫻。且建一寺。賜僧角仁。卽角乘子。號櫻本坊。由是。遠近士庶。詣吉野者。爭獻櫻樹。以爲報賽。至於山岳谿谷。無往不櫻樹也。櫻。國訓左久良。讀曰薩古拉。傳漢字之後。以櫻字充之。我邦獨有此花。海外各國。未曾有之。故與漢土櫻桃之櫻。固不同也。神功皇后征韓之役。祈勝手明神。遂得大捷。義經妾靜。奏法樂舞。極妙入神。動聚僧心。義經君臣。因以出山。遁至陸奥。皆斯處也。村上義隆墓。距山口神社。五丁。義隆。義光子。稱藏人。其父將出戰。義隆從之。義光叱曰。汝往爲王扞難。力竭則死之。何與我俱死之爲。義隆追及親王。將至天河。敵兵來迫。義隆拔刀奮戰。擊斃數人。親王得走入高野山。義隆躬被十餘創。計王已遠。入竹叢中。伏劍而死。時年十八。今世建碑於墓前。如意輪寺。在山口神社東。號塔尾

之決矣。雖然。兵之進退。貴於從宜。朕以汝爲股肱。汝其自愛。正行俯伏。垂淚而

出。辭訣後醒胡帝廟。題族黨百四十人姓名於廟壁。且賦和歌。用鐫刻於屏板斷

髻托之寺僧。然後上途。天皇使隆資援之。時正平二年。元順宗至正。十二月廿七日

也。明年。正月五日。戰死于四條畷。時年二十又三。其冢尙存庫中。警塚碑。

乃在古帝廟前。森田益撰文。益號節齋。山陽弟子。國松變谷曰。余嘗聞之友人細川十

女。宣房氏遊里小路。家安上田兵衛。養爲己子。以妻楠公。生正行。故嫁房於公。爲姻戚。藤原父

子。常參密謀。欲得一武士。援中興業。然當時有未可發露者。因爲常設謀。所謂常夢大樹南枝茂茂。

蓋假託之辭也。十洲隱之萬里小路氏子。後醍醐天皇御陵。在其山上。史云。延元四年。元順

宗至。古文舊籍。屢歷皆可以徵焉云。

元五年八月十六日。獲疾大漸。乃遺詔曰。朕憾不滅國賊平天下。雖埋骨於此。魂

瀕常望北闕。後人其體朕志。竭力討賊。不者。非我子孫也。非我臣屬也。按劔而

崩。凡遊于吉野。賦詩咏歌者。自古至今。不知其幾千萬。刊行芳雲餘情等書。尙不能盡錄。今獨抄

所謂吉野三絕者。梁川星巖詩。今來古往事茫茫。石馬嘶休扶土荒。奉入芳心萬花白。南朝天子

御魂香。綠井竹外詩。古陵松柏吼天驚。山寺尋春春寂寥。眉雪老僧時歇寂。落花深處說南

朝。河野鉞地詩。山禽叫斷夜寥寥。無限春風恨未消。隱臥延元陵下月。滿身花影夢南朝。又有世

香爐峯。蓋西行法師。武士之清者耶。

金峰山 在南吉野山頂。號大峯山。高六千二百二十三尺。上建一大伽藍。是爲山

上藏王堂。安置金剛藏王。及役行者像。行者。又稱修驗者。道士之類。名小角。役公氏。大和茅原

人。幼敏悟。博通經典。及長。出家入山。食果衣葛。夙起開拓金峰之志。師事櫻

本坊角乘角仁。苦行修法。禱神念佛。遂獲魘魅魍魎。建立堂宇。安置佛像。爲鎮

護國家。濟度萬民之靈地。小角又嘗往百濟國。負藥師石像。歸朝。置之金剛山。

因號石寺。文武天皇。惡其惑衆。遣吏捕之。小角坐乘草上。載母於陶盆中。浮海

不知所往。時大寶元年。唐中宗福聖十八年辛丑六月七日也。時年六十又八。昌泰年間。唐昭宗光化年間。醍醐寺僧聖寶。更奉旨重修之。坊舍計二十六。漸極旺盛。每歲。自四月八日。迄九月十三日。僧俗交詣。香花無絕。延至今世。未嘗衰也。

賀名生行宮址。賀名生又作穴生。舊族有氏。廼者。本姓藤原。世爲熊野別當。後醍醐天皇之南狩也。堀信增獻其第宅。以爲行宮。及後高師直大舉來犯吉野。後村上天皇亦幸臨焉。更建宮殿。號黑木御所。古跡舊物。存者太多。〔六經詩傳〕北畠當委塵埃。歛閭半屋懸壁下。曾作金城鐵壁來。〔國南天詩〕實似珊瑚紅植植。高過二丈伴庭槐。至今無恙南天竹。曾受南朝天寵來。〔顯小楠公所藏洪鐘詩〕一箇洪鐘楠氏物。寂然無語掛崔嵬。不知當年發多塊。斷來。破得幾。賀名生。距五條僅二里。

北畠親房卿墓。在華藏院東。北畠氏。出於具平親王。本姓源氏。世爲名卿。及元弘時。親房顯家父子。並爲南朝柱石名臣。親房父曰師重。教有義方。親房幼讀書通大義。歷仕五朝。准二宮。聽聲車入宮。後醍醐天皇既崩。後村上天皇卽位。

親房時居常陸小田城。著神皇正統記六卷。及職原抄二卷。遣使獻之吉野行宮。一以明我國體皇統。一以便於官職陞除之儀。其盡心於戎馬倥傯之間。大率類此。正平九年。元順宗至正十四年甲午。明年。明太祖起兵四月十九日。號。

五條町。屬宇智郡。東西十二丁。南北四丁。肆塵櫛比。商賈殷富。戶數壹千四百又奇。人口六千七百餘名。有郡役所。警察署。中學校。區裁判所。監獄署等。世屈指於奈良縣之市町。奈良第一。郡山第二。而五條居其三。四方皆山。葛城金剛。聳於其北。十津川鄉。在其南方。吉野川乃橫流其間。德川氏世置代官所。近世史云。勘王志士結黨。稱天誅組。組者。倭代官所。殺鈴木源內。卽斯地也。伍之義。五條停車場。自此車站。至於紀伊和歌山市。通設鐵路。曰紀和線路。可以轉乘環遊于大阪京都奈良等地方也。

榮山寺。在宇智村。距五條西里許。號梅室院。養老三年。唐玄宗開元七年己未。元正天皇。勅

藤原武智麻呂。創建。開祖爲役小角。千年之久。堂宇頽廢。獨存金堂。八角堂。求

聞持堂。弘法大師脩練之處。古鐘之名。藉甚於世。小野道風書。初在京都深草道

澄寺。後移於此。其事載拾芥抄。扶桑略記。野府記等書云。今抄其文曰。道澄寺者。

衛大將。行皇太子師。藤原朝臣。參議左大將。從四位上。兼行勘解由長官。播磨權守。南朝臣。爲敏

四思濟六趣。合誠勸力。所建立也。貽本緣於萊代。期同志於他生也。藤原相安命島匠。乃鑄渦鈿。

且將會長夜昏迷。聞妙聲而知曉。苦海夕溺。驚梵剎而通津。延喜十七年。十一月三日銘之。其詞云。

堂宇比並。南北輪奐。尊像接座。前後跏趺。而相公。宿願香火之緣。生爲瓜瓞之族。非唯現世結契

闕之情。亦欲淨刹共安遊之樂。故各取其名首字。以爲此寺額題。所以僱師施治。菩提催緣。虛授必

應。經高自傳。從夕至曉。出定入禪。傍唱衆聖。遙贊大仙。法喜竭威。那夢驚眠。通阿鼻嶺。達有頂

天。劫數億萬。三界三千。一音利益。無限無邊。

武智麻呂墓。在山後。而前控吉野川。又名宇智川。或音無

川。春花秋葉。眺望並佳。香魚之時。泛舟而遊者。多矣。

葛城山。介在大和河內國境。古者。總稱葛上葛下忍海二郡西方。一帶連山。曰葛

城山。世傳。皇祖之入大和。有土賊稱蜘蛛者。皇軍以葛羅捕獲之。因有此名。其

最高處。爲金剛山。屬河內石川郡。楠公據千城等事。

載河內金剛山條下。

奈夏土產。檜杉梅樵。即柏。松茸。椎茸。木耳也。香蕈之一。椎讀曰。是也。猪鹿猴熊。索麴。葛粉。

比細粉。春日塗。漆器。奈夏人形。不用大小刀子。單用。鹿角細工。細工者。謂手工也。

精且白。春日塗。漆器。奈夏人形。不用大小刀子。單用。鹿角細工。細工者。謂手工也。

玩。紙墨。酒。餅。

器。玩。紙墨。酒。餅。

玩。紙墨。酒。餅。

玩。紙墨。酒。餅。

玩。紙墨。酒。餅。

玩。紙墨。酒。餅。

玩。紙墨。酒。餅。

滄海一粟小序

余將有浮槎之遊因著言志小錄一卷詩以爲綱文以爲目用述厥志且謂自今以後不復作詩也旣而解纜橫濱以至上海爲日九日水程五百六十六里所過名山大海率不乏偉景壯觀欲不作詩得乎於是吟哦自娛凡得詩十有餘首比在逆旅茫然已忘之矣蓋不以介于懷也雖然遊蹤千里此心悄然未嘗不在於故園當是時自非賦詩咏歌無以慰其情一夕就寢意甚無聊追思腹稿尙得十絕每首前記所歷事亦倣小錄之體嗚呼非謂海岳之美盡于此也題曰滄海一粟而可矣頃將聘師有所習脩又恐其久而忘也於是乎序以寄我師友亦冀師友勿咎余逐詞藻之末也

日本明治十七年五月二十八日於清國上海蘇州路客舍
外齋關口隆正識

明治十七年五月。余將遊于禹域。適聞三菱公司輪船廣島號者。踰海抵于上海。因約寄載焉。十四日。天大雨。午前。自家巷出。至新橋車站。來告別者。甕谷岡松先生以下三十餘人。至橫濱則家大人默齋先生。并諸父昆弟朋友。無慮二十餘人。開宴渡邊某樓。午後四時。將登舟。諸昆弟特賃小輪舶。送至巨船。時風益烈。雨益猛。嗚呼。上天欲壯我行乎。抑傷我衷情。而助之悲乎。三條相公亦有西京之行。同在一船。將人以相公故。不急鼓輪啓行。待風雨少歇。夜半拔錨。漁笛一聲。四望寥廓。

大鵬一舉復離群。鼓翼滄溟萬里雲。休怪征人多別淚。天風捲夜雨紛紛。

十五日晴。船仍簸蕩不已。余素不慣海行。身心懊惱。食不下咽。擁衾偃臥。忽有連呼遠州洋至者。乃起。推窓一望。富岳參天。翠色可攬。因憶月岡村居。黯然久

之月岡事載在言志小錄

七十里程波浪翻。船頭沒水幾嵯峨。窓間認得芙蓉雪。又臥匡牀思舊園。

十六日。午前十時。至神戶。乘小舸上岸。抵草崎氏。主人曰。縣吏方往迎相公。不

得受他客也。余告以名姓。且曰。吾不必主子家。將去。主人憐謝罪。更延至其莊。

室屋壯麗。款接甚至。飯罷備一小簋。彷徨街衢。拜楠公祠。又抵湊川。俯仰感慨。

詩以遺懷

祀典長崇世德馨。不須虛禮演威靈。犬羊當路今猶古。楠子墳前草木腥。

遂抵東站。將升汽車趨浪華。邂逅手塚生。聞生亦將遊于朝鮮也。與其休于茶寮。

談論片時。又與升車。同至浪華。訪荻生於警察署。荻驟然出迎。有空谷理音之

語。蒼黃辭去。拜營廟。又及豐岡祠。橋上遙望浪華城。想見豐公盛時。按史。豐公

嘗遊鎌倉。手拊賴朝塑像。笑曰。卿與我皆掌握天下者。然卿將門之貴。不及我起

微賤也。餘因賦一詩。以示手塚。手塚曰。噫。先生何大言至此。余曰。否。文武異途。

然吾何遽讓於豐公乎。相共啞然。過建野知事。曾不在家。又與手塚。升車還神戶。

方八時。脩家信附遞。與手塚別。手塚茨城人。我東京人。并從我兄弟遊者。十時

上船。

西濱鼓楫。駕長風。又過華城。拜閼宮。待我他年成業後。與君撫背定雌雄。

十七日。曉發神戶。天晴風恬。波平如鏡。右仰山陽連嶽。溪澗村落。歷歷可數。左則南海諸州。島嶼港汊。迤邐相屬。呼而欲騰。疑如圍池假山。托出盤上。然而風帆煙檣。颺揚往來於其間。景物甚佳。嗚呼。西人稱此處爲五大洲第一奇觀。蓋非誣也。自發橫濱至神戶。風濤洶湧。舳艫搖動。余目眩心悸。日親枕席。不能復有眺矚。今則遇斯好時日。見斯好山水。襟懷舒暢。喜不可言。豈海神知余有煙霞癖。故特揭一大畫幅於茫渺無涯之際乎。獨不能詳某山爲何山。某汀爲何州。又無詞

三

四

應以答山靈海若。是爲可恨耳。嗚呼。子長逝矣。摩詰遠矣。余於是乎。樂有斯勝。而悲無其人。叩舷太息。悵然久之。日暮天陰。入夜雨。

黃薇山紫似池塘。淡靄烟波匹練長。海不揚波天地靜。樓船也載畫圖行。

十八日雨。終夜不已。昧爽泊赤馬關。余欲上岸。舟師曰。船且發矣。不遑遊覽也。乃登舵樓四顧。東方將白。燈火漸滅。雲烟縹渺。但聞鷄鳴。近遠相屬。亦不能詳其曲折也。往歲。毛利侯砲擊西洋軍艦。世固傳其事。今不復贅。但丙子之亂。家君實承事於危急之際。舟中亦有談當時事者。因賦一詩。詩中強項令慈君。皆據舟客之言。

死生有命只忠勤。入撫流民出統軍。底事徒呼頭項令。舟中不復說慈君。

日將午。風雨益至。舟搖撼不已。蓋過立海洋也。余懼急入寢。午後四時。泊于平戶。三面負山。獨缺東面一峽。船從峽入。省讀元寇紀畧。註曰平戶或作平壺。起間

舟人。以地勢如何。皆曰。來泊于此者。今日爲始。未能知其詳也。余聞之。益知水略之險。爲之瞿然。元寇紀畧。叔父訥菴大橋先生所著也。

捲起狂瀾衝雨行。飄飄載夢到天明。半函鏡影沙灣靜。應識平壺是古名。

十九日。風濤又激。海上島嶼數十。隨見隨隱。船亦左右轉移。循島而行。眺矚極佳。年前入長崎。長崎古名玉浦。不過西海一小港耳。元龜中。葡萄牙人來詣互市。土族大村氏。爲拓荒蕪。開場與市。然世有治亂。時有隆替。未如今日之盛且大也。嗚呼。因世變知得失。俯仰古今。人才固難得哉。不覺三嘆。買小舟上岸。浴且飯。訪河野檢事。其弟某出接曰。家兄去月奉命。巡察沖繩縣。與談良久而去。凡港汊街衢并西客館榭之美。非倉卒所能盡。今皆不及也。夜半入船。

檣接舳舻聚中流。萬斜龍驟異城舟。燈影灕波光碎破。欣看浦上夜珠浮。

二十日。曉過五島。自是以西實離我境矣。蓋從橫濱至長崎。凡二百六十又一里。

由長崎西抵上海。凡二百五里。攀櫓四顧。浩渺無際。遠與天連。不復見寸碧。意戚戚不勝思鄉之感。夜雨。天明。風潮順利。舟行甚穩。先是。屢與船司武市等爲象碁戲。是日復戲。既而見海色黃濁。怪問之。武市曰。莫傷也。距上海七十里。海乃漸濁。吾曹之航于上海。常以是爲遠近記。故子之所以爲怪者。乃吾曹之所以爲喜也。

舟行二百里汪洋。無復山樹見翠光。遠客偏欣前路近。蒼蒼海色乍成黃。

二十二日。雨歇。遙瞻楊子江口。柳灣廻曲。翠煙被之。樓閣亭榭。丹青相映。舟軍依稀。行人如豆。余凝睇久之。以爲唐虞之遺風可問。吳越之山水。亦可採也。船益進。去岸益近。則屋宇頽墮。門牆毀破。殊覺荒索可歎。豈經兵燹後。尙未能復盛歟。余因慨然有問。曰。世有景物宜於遐觀。而不宜於近矚者。此類是矣。按大江自安慶。經金陵。東流入于海。而下岐分爲二。其沿岸流者。委爲吳淞江。其東即楊

萬國旌章翻九天。幾層樓閣鎖雲煙。千條百縷河邊柳。繫得東西南北船。

既還逐旅。燈火熒然。余素無八斗獨酌之量。而有半夜十年之感。即撰詩十首。朗吟遺懷。既而投筆。慨然嘆曰。嗚呼我之有橫濱。猶清之有上海也。昔則爲防侮之固關。而今則爲貿貨之要港。萬國通好。東西爲親。文明之化。且洽於六合。吾輩小民。亦得墜壤鼓腹。以終其生。蓋亦幸矣。雖然。天有風雨。人有疾病。凡禍患必生於謀慮之所不及。固自然之理也。然則國家亦安保無禍患之不至哉。且與疾痛而後延醫進藥。不如豫保蓄生命之爲愈也。與風雨而後葺屋完壁。不如早綢繆。歸戶之爲愈也。夫清疆土廣大。可侮也。不可侮也。俄英法米。財富兵強。可畏也。不可畏也。今以非廣大富強之邦。介立于其間。而上下恬熙。曾不知戒懼。一旦禍患交至。其終使臣民苦楚哀痛。死而後已耳。蓋世有徒裝飾門牆。而不知爲柱礎之

侵雨。初見吳碩君於領事館。松林諸子於本願寺別院。皆一面如舊。余喜可知也。

子江也。鄭谷贈別詩云。楊子江頭楊柳春。楊花愁殺渡江人。是其上流也。上海則在吳淞西黃浦河上。船艦隨潮。直泊于岸。岸與船平。可步履上岸。不復須走舸。尤爲便順。昔者。楚黃歇實拓此地。鑿此河。故又名春申浦。而滬城則孫權之所築云。或曰。築於明嘉靖年間。以防倭寇。未知孰是。往歲。英人與清戰。議和後。特設互市之場于此。即通商五口之一也。厥後四方賈人。陸續來集。臺館蟬連。街衢櫛比。然亦自有分界。大橋以北。爲米人租界。而我領事館在焉。橋以南至滬城。爲英法二國之租界。蓋納租借地之謂也。即我所謂居留地。道路平坦。柳灣沙渠。蒼翠蔚然。東西賈客。往來不已。車馬旁午于路。船舶相接於岸。喧呼譁議。天地爲震。實一大市集也。天下閩關之盛。可屈一指。若滬城中。則糞穢載途。洩溺橫流。余掩鼻而過。未能得其詳。至其城堞參差。樓閣宏壯。猶有唐宋之遺制焉。但未必如西人館舍之徒事潤飾也。要之。清國城關山水。可遠望也。而不可逼視也。是日。

固者。儼能知之。當使內外無缺。雖有狂風暴雨。且奈之何。今天下之衆。有若干產其人者。余將執鞭從之。然此余特爲天下萬姓憂而已。若夫我邦明良相遇。四方乂安。吾輩軼生。猶得帶尺一之符。彷徨乎殊域。豈非文明之餘澤也哉。初余之發家。父兄師友。所以懇懇誠我者。亦不過使余盡心乎報國之術耳。爰書以附滄海一粟之末。餘則載在海外雜著。

集古十種畧解緒言

一集古十種八十五卷。白河樂翁公著。公名定信。實田安宗武卿第七子。出冒松平氏。爲陸奥國白河城主。幼有才名。長通和漢書史。博覽強記。年尙少壯。著國本論。其說治國平天下之理。上下喧傳。稱其卓識。既而嗣家。曾歲飢。乃免國內田租。遂放家婢數十人。獨留一女。又令夫人衣不曳地。而身服澣衣。菜一盂飯一椀。率先御下。幕府諸老。望風驚愧。爭惡衣食。於是公之名益顯矣。天明七年。乾隆五十六年。天下復大飢。當是之時。太平日久。上下奢侈。政令弛廢。物情恹然。幕府奏請。以公爲執政官。任侍從。拜越中守。八月。公奉有德公之遺政。先令士家。專行節儉。嚴飭武備。勿得爲壯邸第。設飲燕服帛衣等事。紀綱漸張。令行禁止。時人爲之謠曰。京都聖帝居。關東賢宰出。風俗淳良。鼓腹不日。有德公。謂德川第八世將軍。世利德川中興祖。聖帝。謂孝格天皇。公又崇尊儒術。徵布衣士。柴彥輔。古賀樸。

〔笠印〕嘔吸〔付環〕足格〔高勝環〕各物吸〔約惡蛙〕皆謂胃後之環〔天空〕疎木〔谷物〕息出〔以已〕天穴〔疎木〕格足

之制。詳載菊池容齋所著前賢故實。須併視之。

便捷。鎧制頗變。要之。鎧。腹卷。胴丸三種。其制自別。按圖可知。又中古以前。甲冑

腹卷則自將軍至部將。皆得用之。所謂胴丸者。始于北條氏末。元初後群雄虎鬪。各主

曰鎧。約落以十種首載義經甲冑圖。是也。中古。唐高祖年初。以還。至於近代。將軍多用此物。

〔腹卷〕哈拉〔胴丸〕抹魯皆甲冑之屬。應永八年〔明建文二年〕僂祖阿爾方大凡。我邦將軍所環

兵器類。凡例部

集古十種

舍。外齋關口隆正識。

處。採摘下示。則當質古老。而後更詳報焉耳。諸子德諒諸。乙酉仲冬。於滬西密

矣。故先就此圖。詳記名目稱謂。後於十種各條下。漢譯註明。若遇有不明難通之

一余游杭蘇間。陳子德介紹蔣某。某談及我邦衣冠介冑之事。曰。子誠詩譯禮。每苦其衣服飲食器皿。存至今者尤鮮矣。而其名稱不明者多也。頃聞日本往古器物。足以供印證考據。若有是等書。幸指教之。余曰。我邦。自上古。至近代。介冑衣冠之屬。圖而傳者。悉數難終。然集古十種。前賢故實。或足應貴意乎。既別。子德先購集古十種。以余畧通甲冑沿革等事。囑以漢文。記其名物。會覆行李。即獲新田左中將默禱海神之圖。倣菊池容齋法。甲冑刀劍。盡有引據。自與坊間刻本。異

譜等書。可就見焉。

世。蓋公之功業偉績。豈止於此哉。今抄錄余所記應者。世有近世史。及樂翁公年

世因稱白河樂翁公。時延儒臣。講道著書。白河談。花月草紙等數十卷。刊行于

秘隆年未論文物亦曰文化。嘉慶年初然而行政於此間者。即公也。公老。自號樂翁。退居白河。

尾藤肇諸名士。皆被登庸。野無遺賢。朝多才能。故至今世。人說政法。輒稱寬政。

皆謂曹頭之圓孔。是等各種稱呼。邦人論辯甚多。未能持一說也。近世有伊勢貞丈者。論著貞丈雜記。安齋隨筆。軍用記等。其書致數千卷之多。尤可供考証。然皆用邦文。漢文譯之。殊覺不易。凡例文中。有近世稱故實者云云。蓋指伊勢氏以下諸賢歟。

卷之一

〔山城國〕今京都府。〔義經〕源義朝第八子。與兄賴朝。滅平氏。開朝鎌倉。事詳諸史。
〔曹〕漢伏年漢。〔曹〕漢。〔曹〕漢。
〔櫃〕足或謂唐櫃。我邦收藏祭政黑物之櫃。高卑大小。其制不一。今世祝司猶用之。
〔祇園〕地名。今京都府。〔楠正成〕舉義勤王。殉節湊川。元至元年間。近代水戸義公。建碑其地。文載末篇。明歸化人朱舜水撰銘。〔卿〕尊稱。或曰某公。或曰某朝臣。亦係尊稱。他攷此。

〔松浦〕肥前國主。今列華族。〔足利義教〕足利第五世將軍。明史所謂足利道義之子孫。
〔腹當〕今拉阿羅因腹笥制。稍爲變通者。腹卷。腹當。二物。皆爲衣衷甲。國史云。平家貞衷甲而從。蓋外服直垂。直垂衣名。內環腹卷。以備非常也。至于後世。更創腹當。
〔武田信玄〕永祿間明嘉靖間割據甲斐國。豪邁善用兵。後世談兵者。號甲州流。世有甲陽軍艦等書。〔前立物〕株葉蒼磯末磯末。曹上金屬角峙者。適在肩間。
卷之二

〔武藏國多摩郡〕今屬神奈川縣。〔赤威〕華吸阿吸惡謂綱縫甲胃鐵板之組。其色渥丹。故曰赤。威者。取於威服之義。凡甲胃有鐵造者。又有革製者。他鐵中小名。眉庇眉庇。媽迷媽迷。吹吹返夫返夫。氣氣。等類。不勝枚舉。相應就全圖併覽之。

〔山城國〕在前卷。〔平六年六月一日〕上缺一天字。聖武天皇。天平六年唐開元始用。

韋皮包甲。稱天平革。後世。推重不措。今尚有存者。又有正平革。後村上天皇。正平年間。元室所創製云。

卷之三

〔南都〕屬大和國。平城古都。今屬京都府。〔春日〕祠名。〔大塔宮〕後醍醐天皇皇子。親王。諡良。初削髮爲延曆寺座主。居于大塔。世稱大塔宮。宮者。尊稱親王之謂。常惡鎌倉執權北條高時。肆虐弗臣。蓄髮還俗。密與帝謀滅之。元室〔母衣〕羅謂甲背所負之布。或曰。防矢之具。或曰。旗章類也。近世戰時。奉將帥之命。騎馬巡視行間。審察敵情地形者。呼爲使番。當此任者。必負母衣。用五色彩。以爲記號。〔毛利〕姓。長門國主。今列華族。〔鎧直垂〕環甲時。服此服。即直垂。簪笏直垂之制。有數種。中古以降。平時皆服之。而戰時所用。稱鎧直垂。今世祭時。祇司猶用之。〔足利義輝〕足利第十二世將軍。明嘉靖間

〔京極氏信〕京極姓。氏信名。〔本談議屋〕未詳

〔出雲國〕今屬島根縣。〔日御崎〕祠名。〔喉輪〕蛙詳於全圖。〔義家〕源賴義子。武幹能戰。嘗從大江匡房。受孫子兵法。奉詔討平陸奧安倍貞任等。前後十二年。得於法兵。最多云。歷仕後冷泉後三條白河堀河四帝。朱仁宗英宗神宗之間

卷之四

〔橫瀨〕姓。德川將軍之世臣。〔新田義宗〕義貞子。克繼父志。勤王殉難。元室正間〔奈良〕即南都。〔興福寺〕古刹。今猶存古器古物。我邦考證學士。必往觀焉。〔觀修房〕僧房名。〔義經〕在前條。〔籠手〕各環腕甲也。

〔出羽國〕今屬山形縣。〔八幡〕祠名。凡稱八幡大神。或八幡大菩薩。皆祀應神天皇。天皇文德武勇。遍海內外。於是。國祀家祭。稱八幡神。勇將猛士。所用旗幟。多書八幡。降至近世。遠航海外。船舶亦用此號。遂有八幡船之稱。

〔加賀國〕今圖石川縣。〔實盛〕姓齋藤。名實盛。官別當。事平宗盛。後與源義仲戰。實盛年老髮白。即染鬢髮。以伍壯者。奮戰而死。〔冑袖鉞也。吸哭。〕〔脇當。〕〔阿磯。〕脚甲也。

〔伊豫國〕今屬愛媛縣。〔河野通信〕伊豫右族。世勤王事。元末

〔信濃國〕今屬山梨縣。〔鉞形〕詳于全圖。〔古代有八枚〕謂古昔清水寺藏鉞形八枚。而今僅存其一也。枚猶言片。〔大同〕平城天皇年號。唐元和年間

〔尾張國〕今屬愛知縣。〔馬嶋〕地名。〔明眼院〕寺名。〔景清〕世稱惡七兵衛。我俗呼惡源太之類。非善惡之惡。謂猛勇也。景清世事平氏。平氏滅。欲復其主讎。扶眼爲盲。變形潛入鎌倉府。欲刺將軍。不成被執。不屈而死。南宋中葉

卷之五

〔冑裏張〕〔吸伏參勿。〕用韋或布。以貼冑裏。〔跂走〕〔足魯哈。〕即謂胸板。取於彎弓發矢時。弦能滑走之義。宜參觀全圖。〔射向〕以木指左腋下。射時必左顧而向敵。故曰射向

卷之六

〔裾〕〔索即裔字。〕〔逆板〕〔微吸。〕以裔謂甲背也。〔總角〕〔阿格。〕抹已結組名。〔妻手〕〔微。〕古言。謂右手曰妻手。左手曰射手。又木礮以握弓也。

〔嗣丸〕其制與鐵異。按圖可知。蓋雖我邦人。能知其別者鮮矣。況且今世。制度大變。後進小子。何由知古制乎。頃者朝廷開設博物館。遊就館。蒐集古器。以供觀覽。其裨益於考古之學。實不鮮少。

〔信貴山〕一作志貴山。寺安置毘沙門天。桶正玄管變無子。祈志貴山。既生正成。即是地也。

〔半首〕〔哈足。〕木粒。謂額甲也。近世最多用之。

〔陸奥國〕今屬岩手縣。〔棚倉〕地名。〔都都古和氣〕福名。〔韓。〕〔汲。〕各或作鉞。〔草摺〕〔谷。〕〔微。〕即胴丸下垂片甲也。環甲而坐。則草必藉其下。因名。

卷之七

〔威毛〕惡格謂縫甲之組。毛。絲也。〔勾肥〕各勿按圖可知。〔綿囀〕蛙答謂掛兩肩。不使甲下落者。

〔由良〕姓。新田氏臣。〔義重〕義貞子。亦勸王殉難。〔三十六間筋〕謂三十六條。按圖可知。〔金滅金〕即鍍金也。〔啄木〕鶯谷組名。以五色等絲組之。〔菱縫〕奴以指本圖斜成十字。自爲菱形者。〔畦目〕謂最下楷縫之處。

〔安藝國〕今屬廣島縣。〔嚴島〕祠名。夙以勝區。擅名天下。〔新羅三郎〕義光。頑義三子。義家弟也。義光曾加冠於新羅明神前。因有此稱。精通武藝。又善吹笙。宋崇寧間

卷之八

〔備前國〕今屬岡山縣。〔豐原〕地名。〔佐佐木盛綱〕佐佐木姓。盛綱名。事源賴朝。屢有戰功。兄弟四人。皆以驍勇顯。近江源氏族。

卷之九

〔楠家〕謂楠正成後裔。

〔中村彌太夫〕未詳其人。

〔楯無〕答礫堅甲之名。蓋取於臨陣無楯。敢進肉薄。矢石不能穿壞之義。世稱武田氏楯無甲云。

卷之十

〔吉野山〕在大和國。以櫻花名。元弘建武之間。元寧屢爲南朝天子蒙塵之地。本編所載胃。褲。蓋係當時之物。

卷之十一

〔那須家〕其先事源賴朝。有那須宗高者。最善騎射。屬義經軍。屋島之役。平軍捕

屬於竿頭。宗高一發射落之。於是。其名益顯云。

〔小松內府〕平清盛長子。名重盛。累遷內大臣。居小松第。因稱小松內府。我邦人談忠孝事。必先推重盛。其事蹟。載在史冊。治承三年薨。宋淳熙三十年

〔小櫻威〕謂韋皮染出小櫻花樣。以縫甲冑者。按圖可知。

卷之十二

〔大內義隆〕姓大內。名義隆。世爲山陽豪族。屢遣使于明及朝鮮。至義隆。爲其臣陶晴賢所弒。時天文二十年也。明嘉靖三十年〔春田光信〕夏工姓名。未詳其人。〔大森三郎兵衛〕〔大森盛長〕並未詳其人。然視甲冑圖。係六七百年前之製。一佩盾。鑿以古所謂滕甲。後世稍變其制。以就捷便。

賣 捌 所

東京市日本橋區日本橋通一丁目
同 神田區茨神保町
同 日本橋區通三丁目
大阪市南區心齋橋筋一丁目
同 北久太郎町四丁目
神戶市元町五丁目
同 京都市東洞院三條上ル町
同 寺町通二條下ル町
濱國上海夾租界棋盤町

大 東 丸 柳 松 田 村 上 勘 兵 衛 衛 店
倉 京 善 株 式 會 社 堂 書
江 松 田 中 治 兵 衛 助 林
左 田 庄 書

安國清 著

淡海廿四勝圖記

明治二十五年（一八九二）京都刻本

據明治二十五年（一八九二）

京都刻本影印

明治壬辰清和月

淡海廿四勝圖記

金巢巖谷修題

淡海二十四勝序

筑紫佩石道人久游淡海觀勝數年
自若淡海廿四勝圖記微末序且謂
曰勝湖之山不知生草木而林七十
二峯焉湖之廣袤不知生幾百里
而稱三萬六千頃焉而謂其勝則

獨稱八景其說蓋出於中古好者
者要之以擬波洞庭瀟湘而得象
之寬矣吾嘗東渡西涉探幽攬奇
或圖或記遂得二十四景自謂湖之
勝概盡于此而湖山之靈亦將允
余贊之不謬耶子伯之人也留河

如余披覽一遍拍案稱快者數部余
生長湖上所謂二十四景僅識其五六
豈料百室外人盡持此錄以此戲
市僧

孝宣王皇五年一夕湖水昇焉
蒼海深之去雲霧四塞及

皇化漸東人不知見湖者于雲數
霧消之日耳今有佩石道人撰
此圖記以證前之非洞在蒲湖之北
而象湖面自融結一新亦從雲
散霧消消滄一碧驚人目也吁余
安得三代湖山而誦道人也哉於是

序

吉湖生為錢昌撰并書

叙

海內以湖稱者不可勝數而我
已湖冠于諸州不獨幅員之大以
其產蹟勝概可駭服也然世之
說湖中勝際者惟知有八景而不

知八景之外更有幾八景也每至松
蘿山時輒徧覽湖光以是湖之實
勝過湖或為客星所困或為風白
所阻每得一二景而歸以此為
足而不知其有未盡者也

出御道而東常以湖為快事何石
者師神童海世四勝圖記為余
序之於讀之已與我同其意久矣
以是所寄湖中傳如手之函而
百得而百其陰而不歸者函而

不擬余亦親歷之以此通覽得
記似人少涉其境山川有靈者為
多憾者抑造物既費力而恒鍾
固也子懷遠雖覺但為之形者為
若其蹟者其心必欲得之人於

予我後可也。而吾老師可
不謂造物之幸。然若夫海內
諸州皆有山水。其人者細
意披探。造其境。攬其勝。以為
之記。以此編著。——于世。為造

物。音與。陰。陽。有。行。多。顯。有
行。而。得。氣。則。余。重。陽。之。念。以。不
可。也。
壬辰歲。其。乙。巳。老。漁。欽。

浩海之通。稱近江。屬
滿。野。部。之。縣。其。為。地。以
湖。山。來。互。際。湖。山。擁。山
皆。湖。湖。南。北。二。千。里。東
西。十。里。南。北。一。環。水。其

其。地。以。其。水。似。稱。曰。環
吾。湖。繞。湖。之。山。七。十。乃
二。三。湖。之。川。百。有。八。湖
濱。之。浦。九。十。乃。九。其。名
不。可。勝。記。湖。中。有。三

四時之石曰升生急曰深
以曰竹嶋曰與島曰白
不湖有曰白而東至碧
多教有川東南歷注
山城東宇治川經大坂

入海國中其島則為狹
以山靈山以良山以膏山
綿白山之國島輝魚嶺
如江岳江岳之山則
有石之廢職其長等

山博岳安土山長壽山
鏡山其神山玉珠山
觀者有山逢阪山赤高
山行市山帳山櫻山
赤神山棕山哉尾山有

新山靈珠山旭山靈龜
山新松山阿新山其
作山市山阿為勢多
川那海川其山山妙
川其山其山其水山

石碓井之井跡其地
井之迹其地其地
瀑其迹其地其地
山瀑其迹其地其地
其地其地其地其地

其地其地其地其地
其地其地其地其地
其地其地其地其地
其地其地其地其地
其地其地其地其地

其地其地其地其地
其地其地其地其地
其地其地其地其地
其地其地其地其地
其地其地其地其地

其地其地其地其地
其地其地其地其地
其地其地其地其地
其地其地其地其地
其地其地其地其地

苗者種森那地王川
氏國中一不勝古語
不皇極舉一者乃不
京之選然所擇唯事
一海一勝耳而為憾

馬以兵乃能全國取
勝概以三十有六
又然其後更進為
四勝云
以石道人安國清

谷太湖云。舉全國形勢。瞭然一目。文格古。筆力勁。

江馬天江云。昔人嘗撰勝。借名瀟湘八景。強充其數耳。固不足盡湖中之勝。今所揭二十四勝。迥挾出。無一逃境。吁。人才薦引之於道。細意羅致。若佩石道人之於山川。則亦當無野有遺賢之歎也。

中邨確堂云。總括環湖名山大川名區。一網盡之。使覽者先領大形。於圖誌序殊得體面。

石津灌園云。先提挈全國形勝。次分叙山川勝蹟。至後總括之。而不遑枚舉。句遙與不可勝紀呼應。章法井々。擒縱自在。

谷云。古稱石山。秋月未盡。湖月之觀。是道人所以別開巨眼。

淡海廿四勝圖記卷上

石山夕照

三井曉烟

鉾嶺浮嵐

叡山積翠

大碕澄月

松岬清風

長等櫻花

越溪楓葉

百如夾籟

三上紅礫

鹿瀨八潭

松山重瀑

右十二勝係明治十一年所選

石山夕照

石山在滋賀郡寺邊村。距勢多橋數町。岨此孤立。蔚然臨勢多川。山中多奇石。狀形詭異。色澤瑩潤。迥與他石異。山所以得名也。有寺亦號石山寺。堂宇麗壯。天平勝寶元年。僧良辨所建。堂側有源氏室。即熱姬草源氏物語之處也。當時古研一枚尚存焉。有經庫。多藏古寫經。間有係唐人筆者。

石山夕照



石。具大觀也。

石云必注橋名。亦所以與源語相映。中云。筆補遺。火餘龍。炳々。

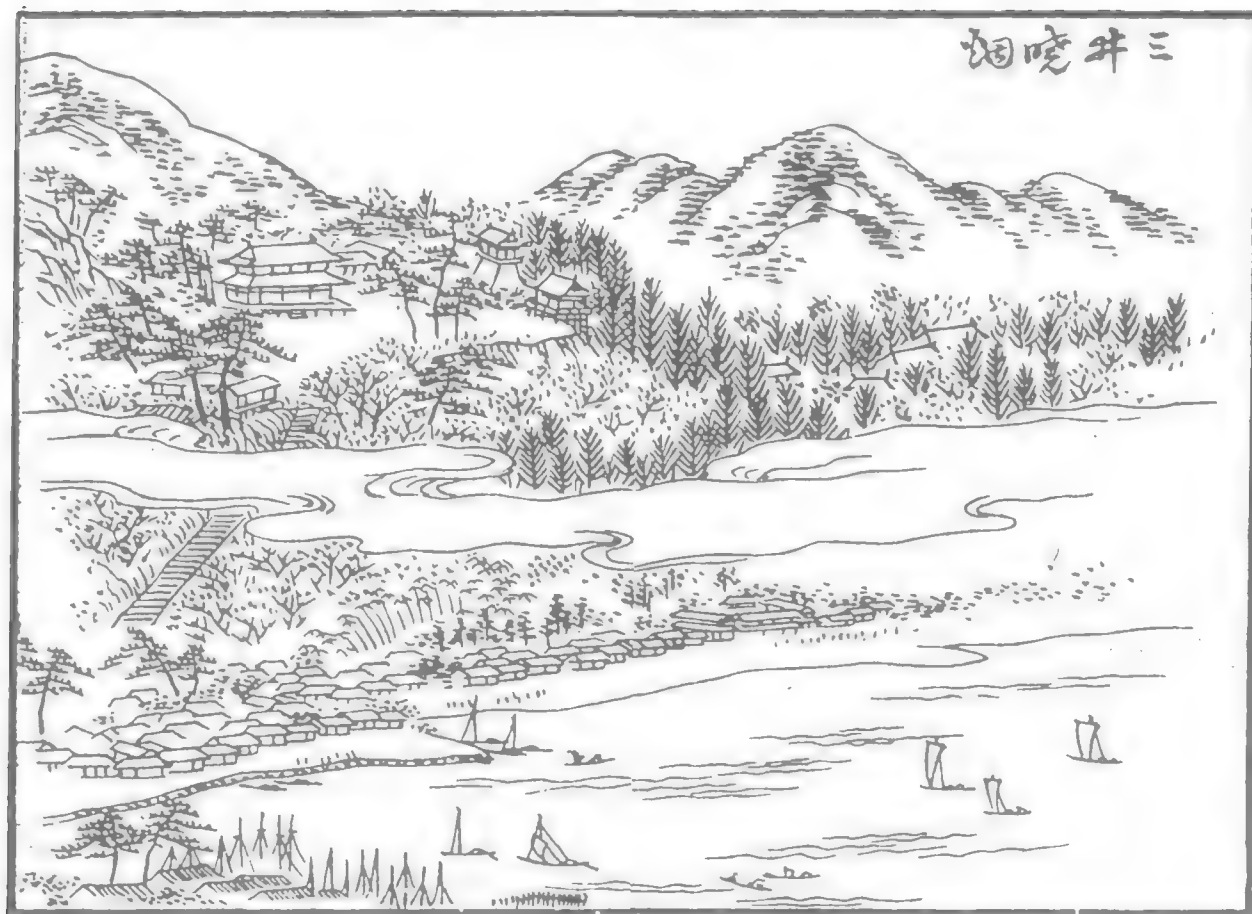
中云。世所傳近江八景。曰三井晚鏡。今日三井晚烟。蓋晚鏡因湖上所印云。晚烟者。在三井寺所觀也。是作者最所用者。讀者不可不知。

云。寶塔及諸廡。槩皆數百年前所造。未嘗遭祝融。真古刹也。山之西北角有亭。稱大觀。眺望廣闊。每夕陽懸。台岳良峰之際。反照湖面。潏灩流金。而勢多一橋中斷。雙架如兩霓。出沒晚靄中焉。山下列僧房數棟。櫻樹成行。樹外旗亭酒樓。臨水占景。稍西有小石橋。號夢浮橋。溪流溪浚。古木蓊鬱。溪多產螢。故石山螢火之觀。亦著于天下。

三井晚烟

三井寺。在滋賀郡大津西。天智天皇遷都於志賀。命皇太子建寺。稱崇福寺。後號園城寺。其稱三井寺者。以有天智天武持統三帝御井也。井今在金堂西側。清冽可漱。貞觀中。以寺賜僧智證。為一巨刹。與延曆寺相比。保元以來。屢罹兵火。今所存諸堂。多係慶長後之再造。有古鐘。係蕭梁

三井曉烟



石云忽而云
文亦隱離射人
目一結亦俊絕
可喜

谷云臺上望湖東所以宜晚

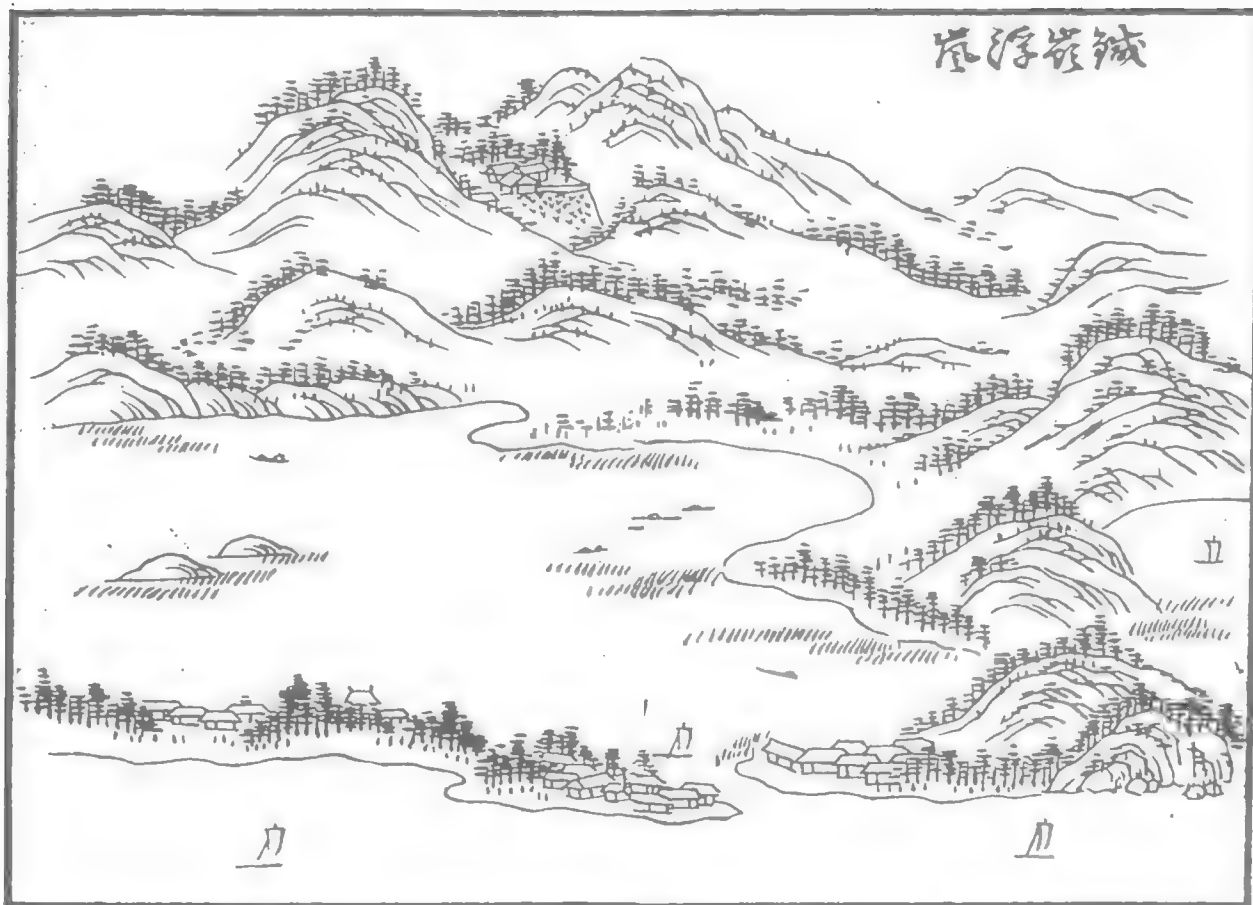
太平年間所鑄青龍寺什物智證歸朝時
所齎來又有唐人送別詩文數卷山之南
嘴有大悲閣香花不絕其側有臺架崖半
湖之景攢聚目睫曉望最佳淡烟罩湖如
紗遮物鐘韻微度糝糊中忽而旭光射水
萬峰皆露在正面上然者三上山也

鉞嶺浮嵐

唐鉞嶺在阪田郡鳥居本番場兩驛間屬
中山道驛路峻阪十町餘嶺上有亭踰望
湖堂正德年間韓人花庵所題往時朝鮮
琉球聘使之赴江戶必經由此故亭中多
截其題詞望湖之勝以此亭為最近則筑
摩湖如盆池漁舟水禽送迎于蘆荻間遠
則太湖如海洋一碧接天望島孤立波間

中云漢人詩說
岳陽樓示知典
此亭題勝石時
無范布文故其
名不傳可惜

城浮岩



石云。色即是空。
然終不似空此
文彩。

有洞庭君山之思焉。亭後巨嶺群峙。有時
山嵐與水烟相合。諸勝有無一色空濛。亦
成一幻境矣。

江云。近世行旅人。從冰原直抵醒井。無人過此嶺者。名區遂為
虛矣。可恨可惜。

叡山積翠

比叡山。一作日支山。又號天台峰。在滋賀
郡。北隣比良山。南接長等山。西屬城州。實
為平安城之鎮焉。從阪本村至頂五十町。
有寺。初稱比睿寺。後號延曆寺。延曆年間。
僧最澄所創焉。最頂曰妙喜峰。稍西稱四
明岳。四望洞豁。江勢濃越。若丹城。攝河和
十州之山。歷々可指。東眺太湖。如盆池。西

石云。有吳楚東
南。圻。乾坤日夜
浮之概。

睿山積翠



石云。韋蘇州
所謂落葉滿空
山何處尋行跡
時物雖異而幽
致則同。

望平安城。亦如掌。大山多古杉。老檜皆數
百年間物。大可五六圍。鬱然參天。積翠欲
滴。苔蘚敷地。不印人跡。溪聲與磬韻相和。
洒然洗心。真塵外淨境也。山中有東塔。西
塔。橫川之三區。東塔則藥師堂。戒壇院。明
王堂。西塔則釋迦堂。法華堂。相輪檜。椿堂。
橫川則觀音堂。龍華院也。堂宇各據峰架。
嵯。翬。飛。輪。奘。極。土。木。之。工。而。諸。堂。屢。罹。兵

火。今。所。在。多。係。天。正。後。再。造。云。寺。舊。多。古
物。今。不。盡。存。所。存。有。最。澄。求。法。將。來。目。錄。
附。唐。明。州。刺。史。鄭。審。則。跋。皆。筆。力。雄。勁。墨
氣。淋。漓。為。希。世。之。珍。

谷云。余嘗遊睿山。有二詩曰。絕巖峻嶒碧落間。自然天
險六仙寰。千秋遺憶延元事。龍駕匆匆下此山。怪杉老
檜聳雲中。幾處猶存古梵宮。想得織公鏖戰日。三千
房火燭天紅。是余山上所口占者。今讀此記。追憶當

日。因記以補遺事。

大崎澄月

大崎在高嶋郡。與竹生嶋相隔可二十町。距海津二里。怪石森立。如狻猊。群浴如牛。羊下飲。矮松屈盤。似驚攫龍盤。有寺號大崎寺。大寶二年。僧泰澄所創焉。崎下多巨鯉。夏月之際。千百成隊游泳。而漁人未曾能獲。蓋以多暗礁也。地為峰高山之南。嘴斗出湖中。太湖瀾漫。極目無際。當朗月。

大崎澄月



石云。結朴老。
此句却不可略。

中。天。上。下。澄。澈。天。水。無。間。使。人。有。廣。寒。宮。
之。思。焉。故。湖。上。觀。月。以。此。地。為。最。蓋。以。山。
角。向。正。南。也。

江云。余嘗游筌嶋。命舟子抵大崎。石奇松怪。實吾邦之黃山也。恨風濤驟起。急遽回棹。不能及夜而看月。今讀此篇。不堪神飛魂往也。

中云。石山觀月臺。規模稍小。不及大崎。々々向南。領太湖全景。此地之勝。須磨明石。當避三舍。

松岬清風

松岬者。長命山麓也。在蒲生郡奧嶋。距八幡二里。山上有寺。號長命寺。聖德太子所創焉。寺北一峰。稱仙行峰。俗云往昔仙客住焉。山之西南麓臨湖者。即松岬也。有古松數株。或欹或盤。水中有三巨石。宜垂釣。西與沖嶋隔一衣帶。可相呼應。南與水壁岡相對。其間約一里。清風度水。細波皺。

松岬清風



碧松。巖蕭瑟。天籟清耳。真靜修之淨境也。
石云。文有畫趣。

長等櫻花

長等山。在滋賀郡。北接比叡山。南隣逢阪山。東臨太湖。其頂稱如意岳。有巨石。特然隆起。高五丈餘。俗稱千斛岩。藤蔓絡其上。一松從其右腹旁生。高可二丈。山勢自北而南。迤邐綿亘。其嘴乃銜大津市街焉。有三寺。上號近松寺。下曰尾藏寺。稍西則為微妙寺。昂低相望。有山櫻數十章。皆數百

五十四

長等櫻花



谷云。千需京姚
年年往觀其
湖光相映照
最稱奇絕。

石云。好考證可
以備掌故。

中云。越溪之妙
在地幽而雅
樹老而多。是
所無也。

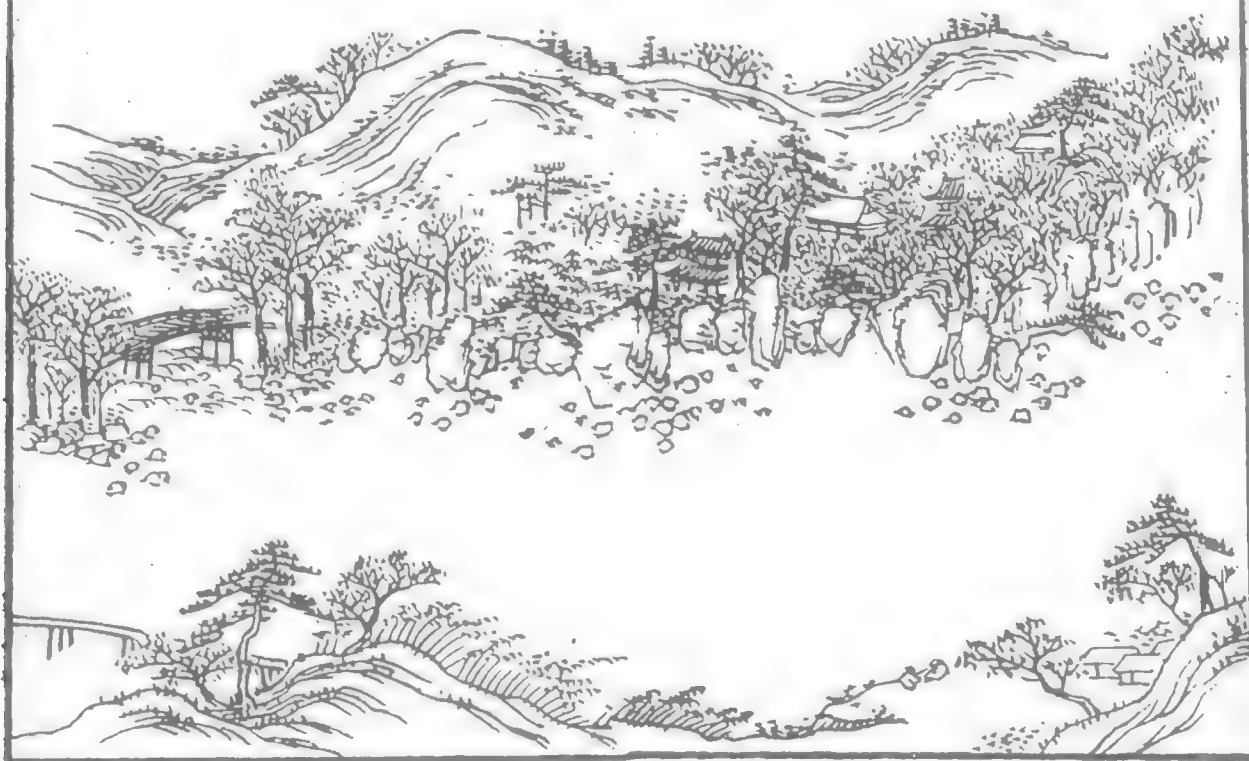
年之物。老幹數圍。蒼蘚斑點。當清明開花
之候。滿山如雪。與湖光相映照。較諸嵐山
各有佳趣。未易軒輊。按志。賀宮都之址。見
在錦織。見世兩邨間。距此不甚遠。乃所謂
志賀花園者。雖今不得而詳。然此山所存
之櫻樹。蓋或其遺種也。

中云。志賀朝文物之盛。歌咏其勝者必多。而今皆不傳。獨平薩州之咏。後世
傳唱。此篇他日與之共傳于世。花神必當感其知己。

越溪楓葉

越溪。南屬神崎郡。北屬愛知郡。南岸為山
上邨。北岬乃高野村。々東有一溪。橋。踰極
樂橋。石磴數百級。遙接寺門。寺即永源寺
也。元應年間。僧寂室所創。負峰臨水。境界
幽閒。唯聞鳥。殷。磬。韻。相應。和耳。水為愛知
川。淺灘深潭。縈紆而流。沙白水碧。瑩澈如
鏡。危岸斷壁。出入擁流。老楓與松柏。繡錯。

越溪楓葉



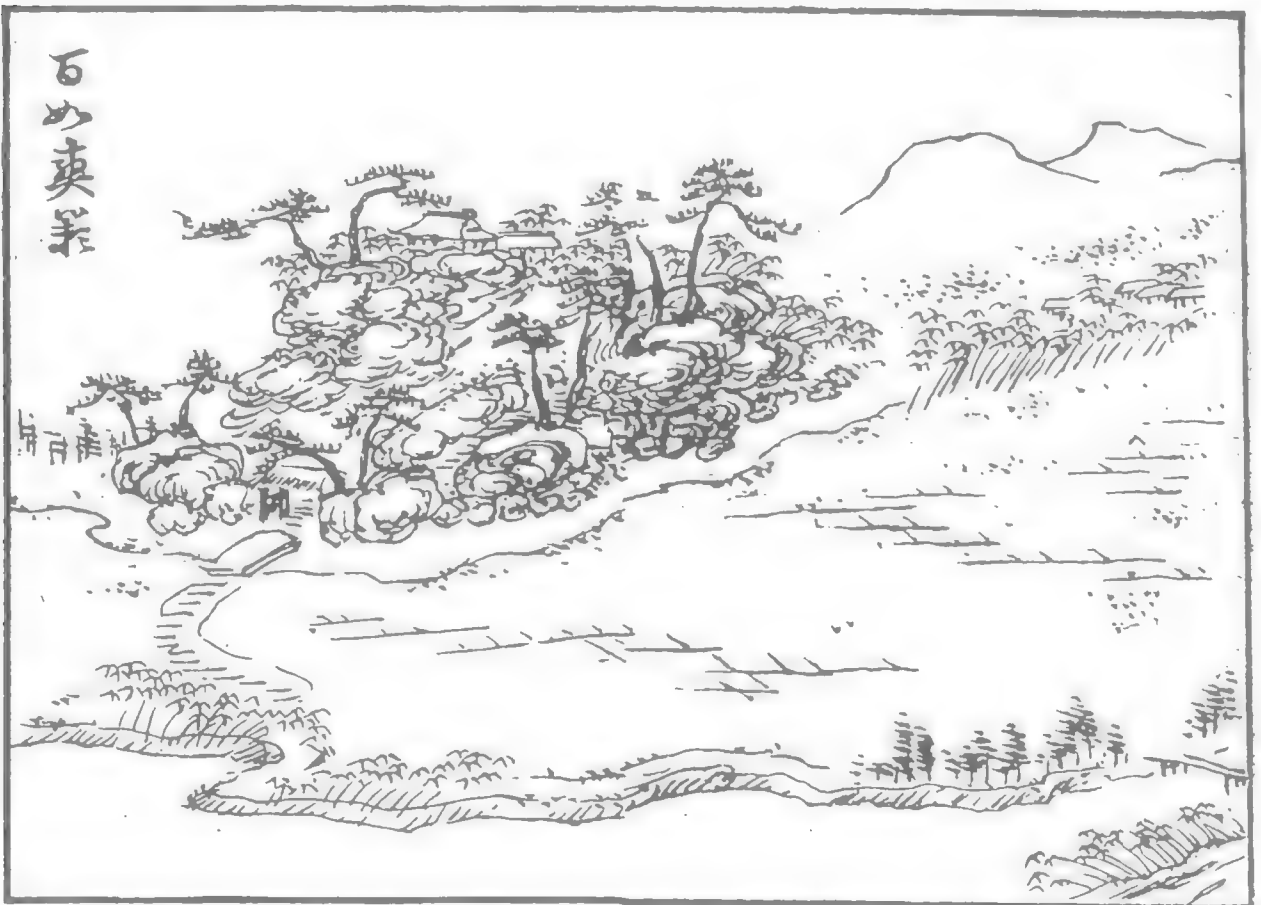
石云。越溪之幸。
實迴水之溪。

谷云。結語殷勤。
好遊者之南車
也。

高閣重樓。點綴其間。境幽景麗。使人在董
巨畫圖中焉。城之高雄。攝之箕面山。泉之
牛瀧山。皆以丹楓稱。予嘗歷觀其勝。佳則
佳矣。而未及越溪之最奇且妙。予有句曰。
高雄箕面秋光在。不歷越溪無說楓。蓋非
溢美也。此地勝槩。從南岨相谷邨口。望之
為窅。

百如爽籟

千界山百如庵。在阪田郡能登瀨村。距長
濱二里。一山皆石。孤立臨天川。高可半町。
周三町許。菴乃居其頂。寬政年間。僧百如
所創。因名焉。古松數株。點綴上下。蒼髯赤
鱗。或歌或盤。石皆雲頭皴。如卧牛。如奔馬。
如盤龍。如怒虎。小徑盤折。或上或下。宛如
觀黃鶴山樵。畫有小渠繞山。々前即天川。



百如爽籟

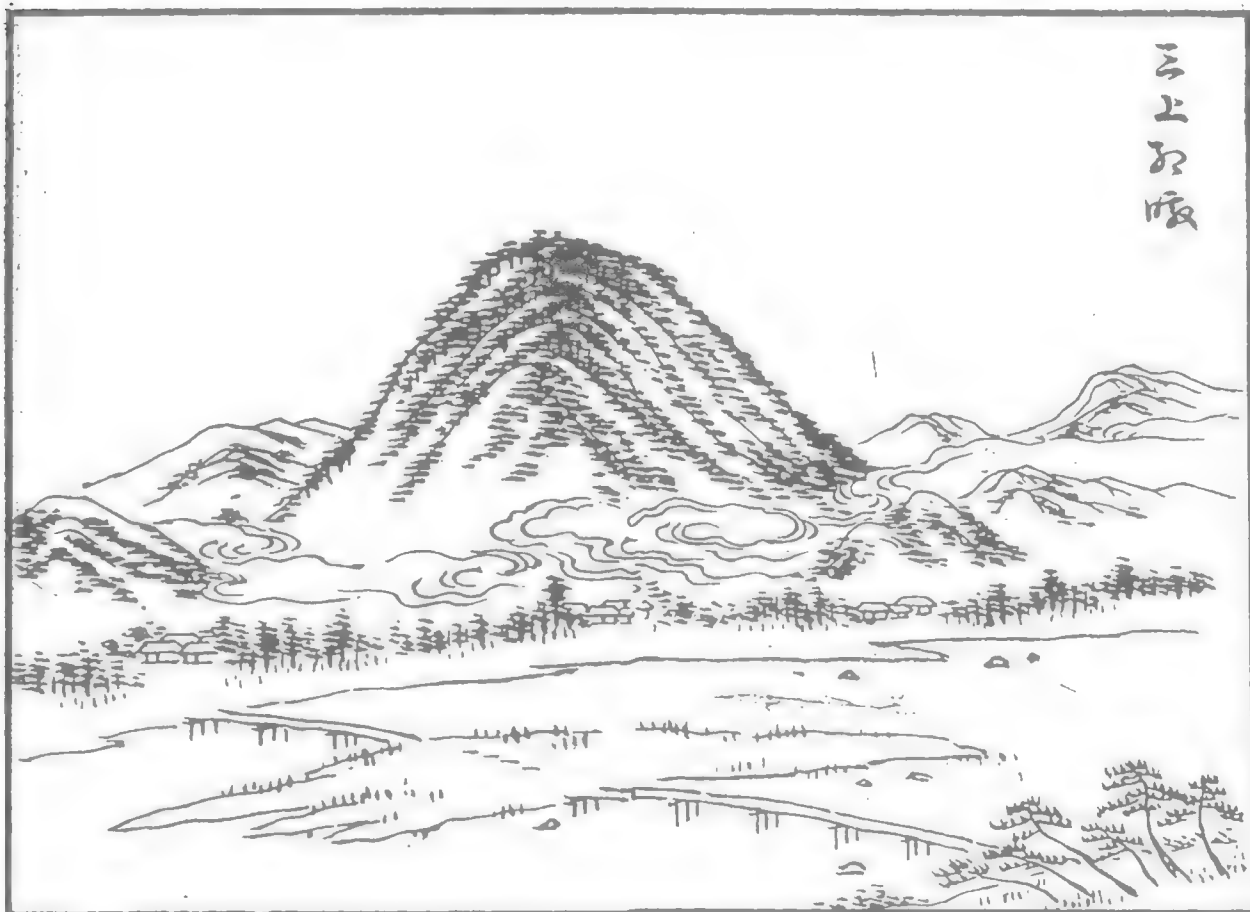
也。風起則松濤瑟瑟。與水聲相和。清爽絕塵。恍有箕顓之思焉。

石云。語亦冷然。

三上紅暎

三上山。或作御神山。俗稱蜈蚣山。在野洲郡。直徑約十八町。山容溫秀。肖富岳。因又稱近江富士。翠松蔚鬱。望之若堆藍凝黛。山不甚大。然以其秀峙湖東。所在可得而望焉。而自大津望之為最佳。方曉霧纔散。乃突然浮空。紅暎緣山而昇。光彩映波。陸離射目。何啻畫圖。

三上紅暎



若溪八潭

其一魚止

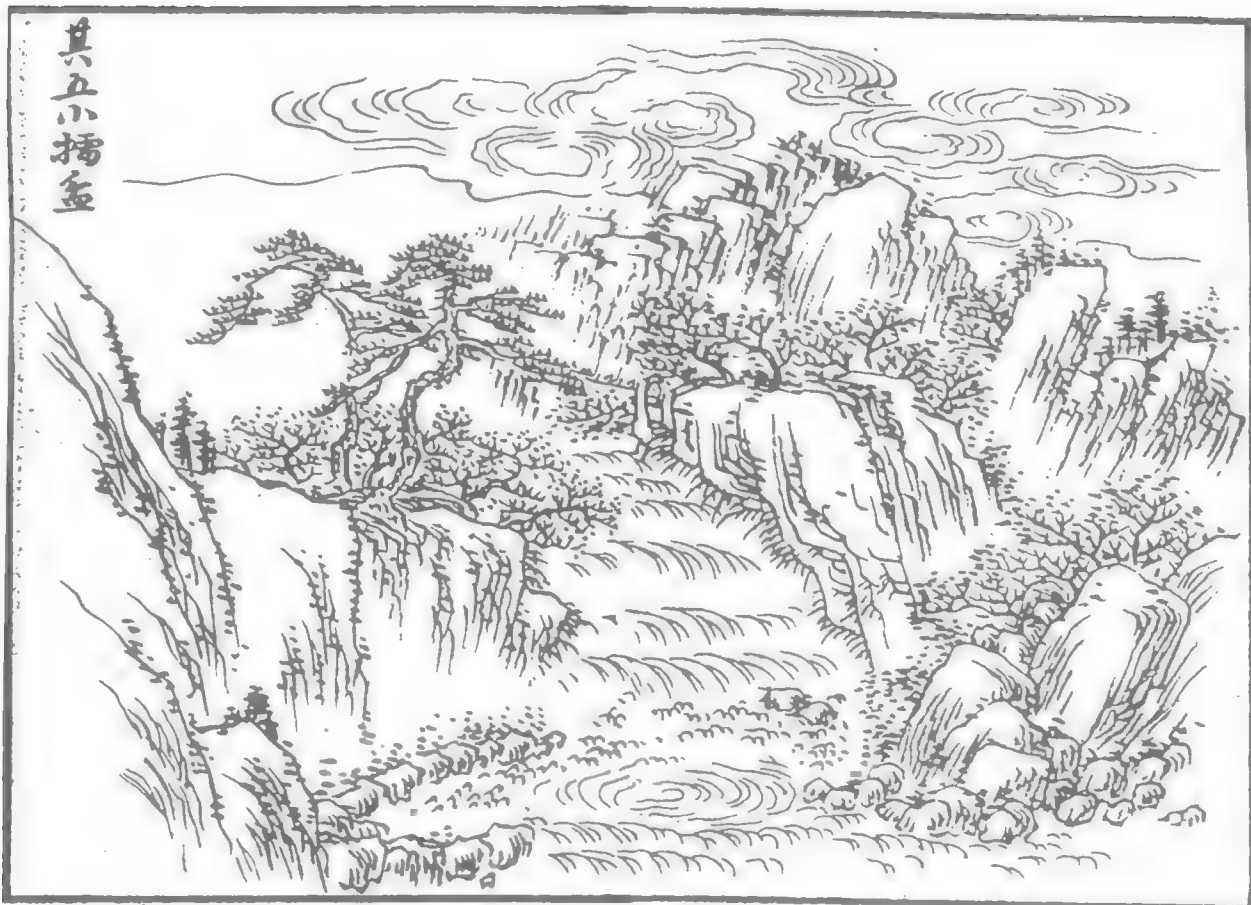


其二子

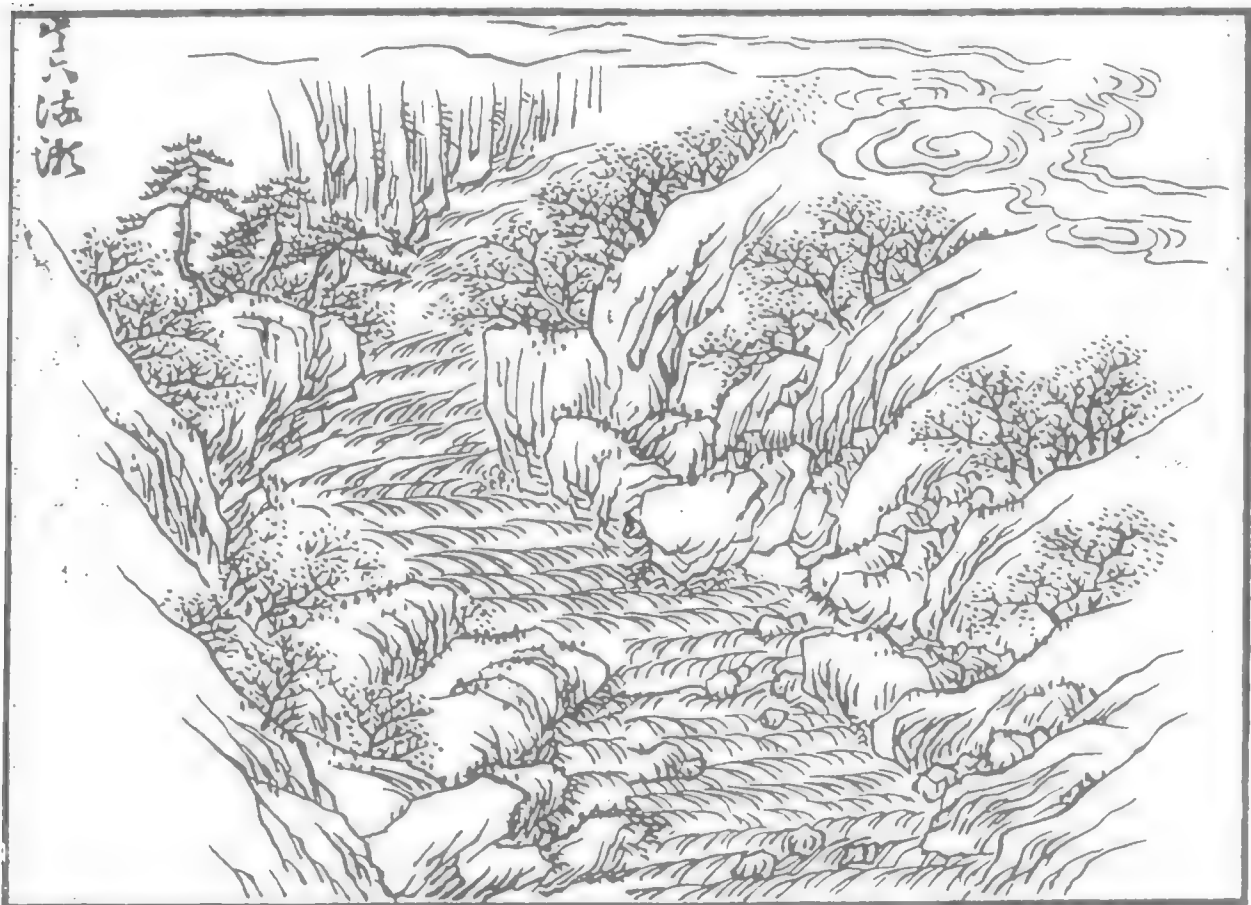


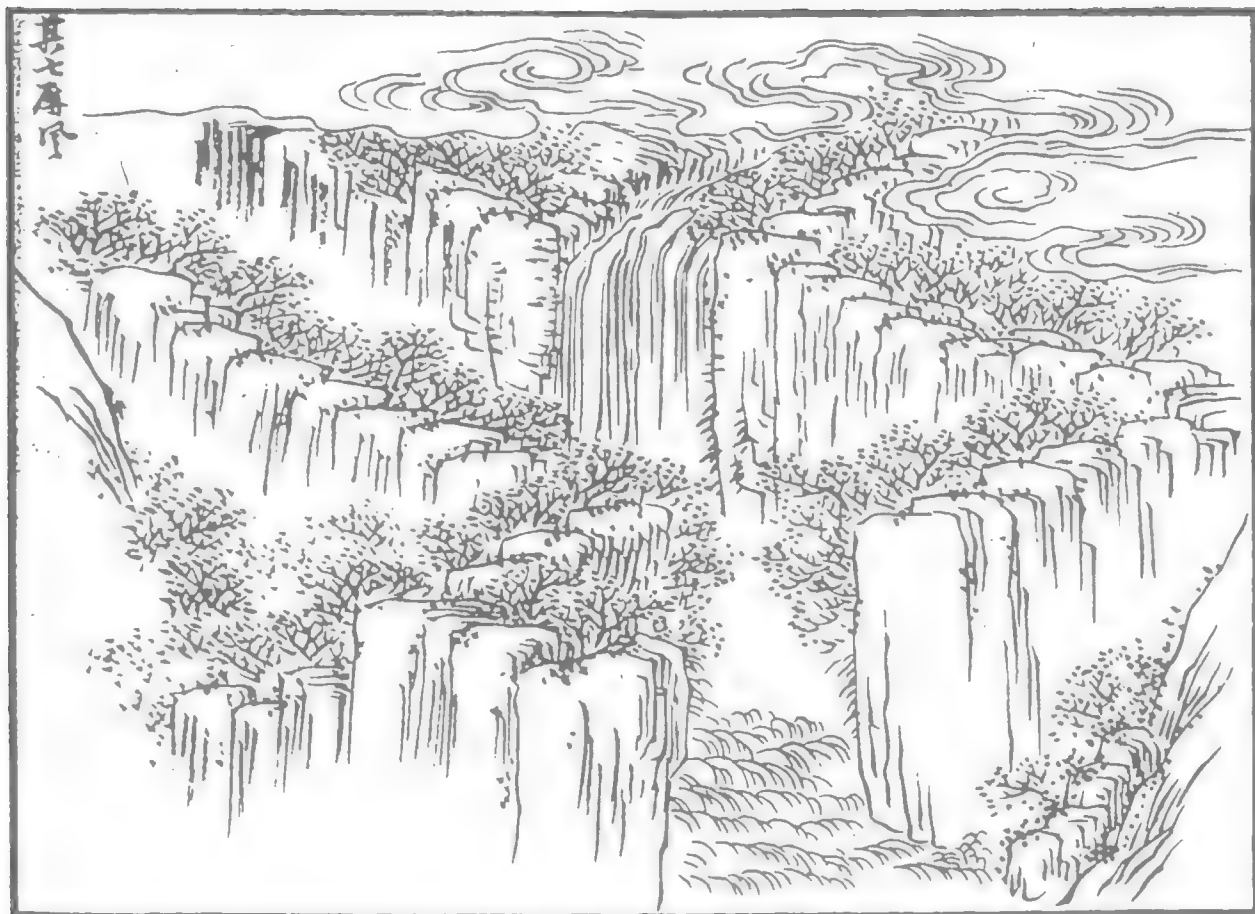


其五 插金



其六 插水





鹿瀨八潭

鹿瀨村在高嶋郡距大溝三里。邨西沿鴨川里許有溪々間有八潭。其名係俗稱呼爲。巨石挾水側立。如猛獸奇鬼。古樹蔚蔚。晝亦昏暗。水懸崑石。直瀉二丈許。下成一潭。曰魚止。蓋魚至此不能復溯。故名焉。兩岸壁立。屏翳如障。蒼樹蔽天。激水奔注。若雷兩驟至。然下又成一潭。曰障子。一條小

正神二

石云。兩層形容。水石處往々神似。坡前石鐘山記。苦心可想。

瀑懸右壁。有石跨之。成石梁之狀。激流從左奔注。相合成巨瀑。瀉入洞中。而又成一潭。曰空戶。亂石出沒水面。水石相搏。奔濤作盤渦。又成二潭。下大上小。曰大播盆。小播盆也。水擊石。則翻雪。潛凹則湛碧。潺々然淙々然。右曲左折。其深者至數仞。淺僅沒脛。支流分派。又成一潭。曰流瀨。削石峻峭。高可二十尋。曲折類屏風。石楠交絡。苔

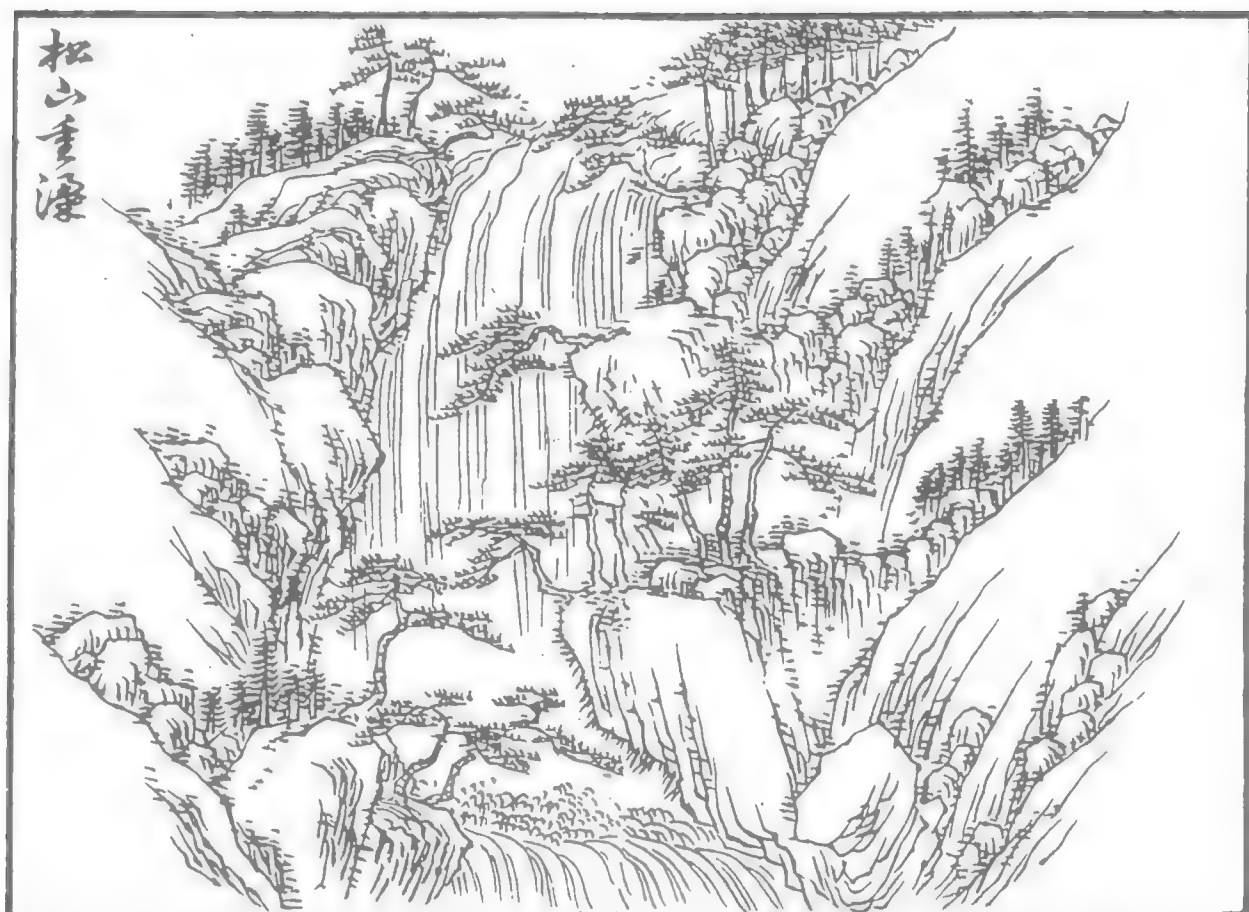
石云。其音貴爲八潭之冠矣。乃可謂作者之得虎子矣。可不謂豪傑之哉。

奇而往々不果至。間有至亦至屏風潭而止。其至七返回者蓋罕焉。而其奇實爲八潭中之冠矣。

谷云。八潭之勝。江人如予者。尚未脚到。而爲道人著鞭。中云。鹿瀨之勝。得佩石道人。而後其名著于世。可謂幸矣。因謂幽僻之地。或有隱德之士類焉。安得道人飛錫遍訪以著于世。不亦幸乎。

藪點綴。右隅懸瀑十丈許。如匹練懸屏障。下又成一潭。曰屏風。巨石重疊。茂樹暗黑。凝霧不散。地不受暑。風氣淒冽。雖盛夏粟生膚。巨瀑懸正面。勢如舞雪。響如奔雷。下成深潭。曰七返回。蓋試以物投潭中。七回不沈。因名焉。八潭至此而窮。而是潭絕壁危險。不可著脚。手攀樹枝。足踏樹根。蟬抱蟹行。纔得以至。故自古好奇之士。雖慕其

正神二



松山重瀑

松山重瀑

小松山。在滋賀郡北小松村西。有瀑號楊梅瀑。為近江第一大瀑。折成二級。上級為雄瀑。高可十丈。下級為雌瀑。長三丈許。斷崖牆立。矮松與古苔。彌縫竅隙。激水直瀉。響如百雷。鬩空。聲聞數里。潰沫如大霧。迸散及數町。遠望之。則如曳布帛。俗稱布曳瀑。

上杉

谷云。舟過湖上。往往望素練于蓬窓間。

淡海廿四勝圖記卷下

伊崎石壁 大洞水禽

橘殿啼鵲 雄松歸鷺

鵬吹早雪 安土餘霞

沖嶼微燈 鎧巖巨浪

唐碕松影 笙嶋波音

賤岳宿雲 勢多驟雨

右十二勝係明治十二年所選

下

伊崎石壁



伊崎石壁

伊崎山在蒲生郡奧嶋。距八幡三里。是地為近江中央。距州境南北各約十四里。東西可九里。山勢北向。三面臨湖。其西北角高崖絕壁。巔岫突兀。崇可三丈。至水底五十尋。巖頭有寺。號伊崎寺。役小角所創。危樓架壁。古松攫岫。嘴橫挿大木。長三丈許。離水亦可三丈。蓋小角練行場之地也。

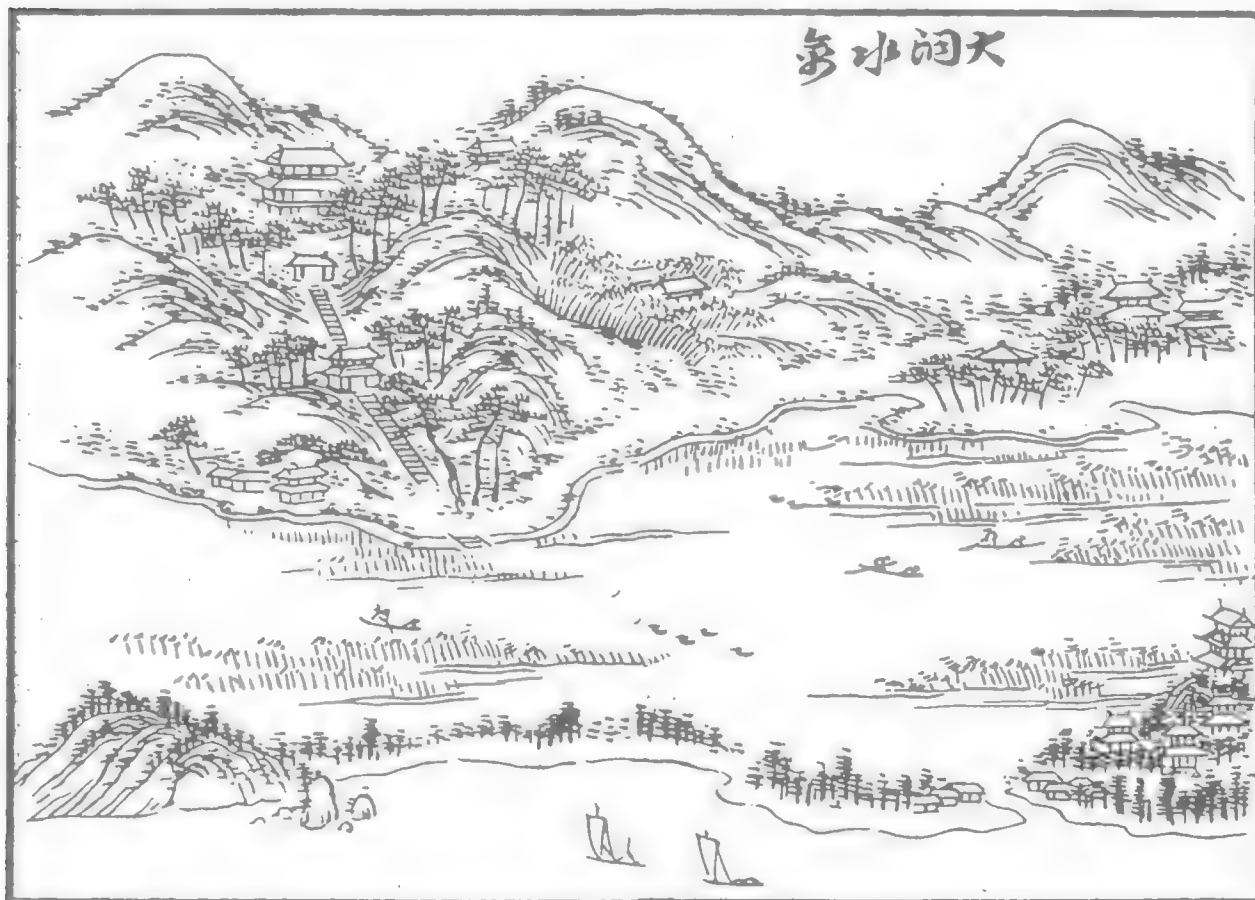
谷云。黃州赤壁。恐不如此奇。

石云。如諸荆楚。歲時記。

里中少年。以每歲六月一日。競走水上。躍入湖中。俗云掉飛。

中云。余舟過湖上。望伊崎寺。於古松間者數矣。欲一遊未能。今讀此記。不堪神往。

大洞水



石云。使柳州
觀之。不知更得
何等佳句。

大洞水禽

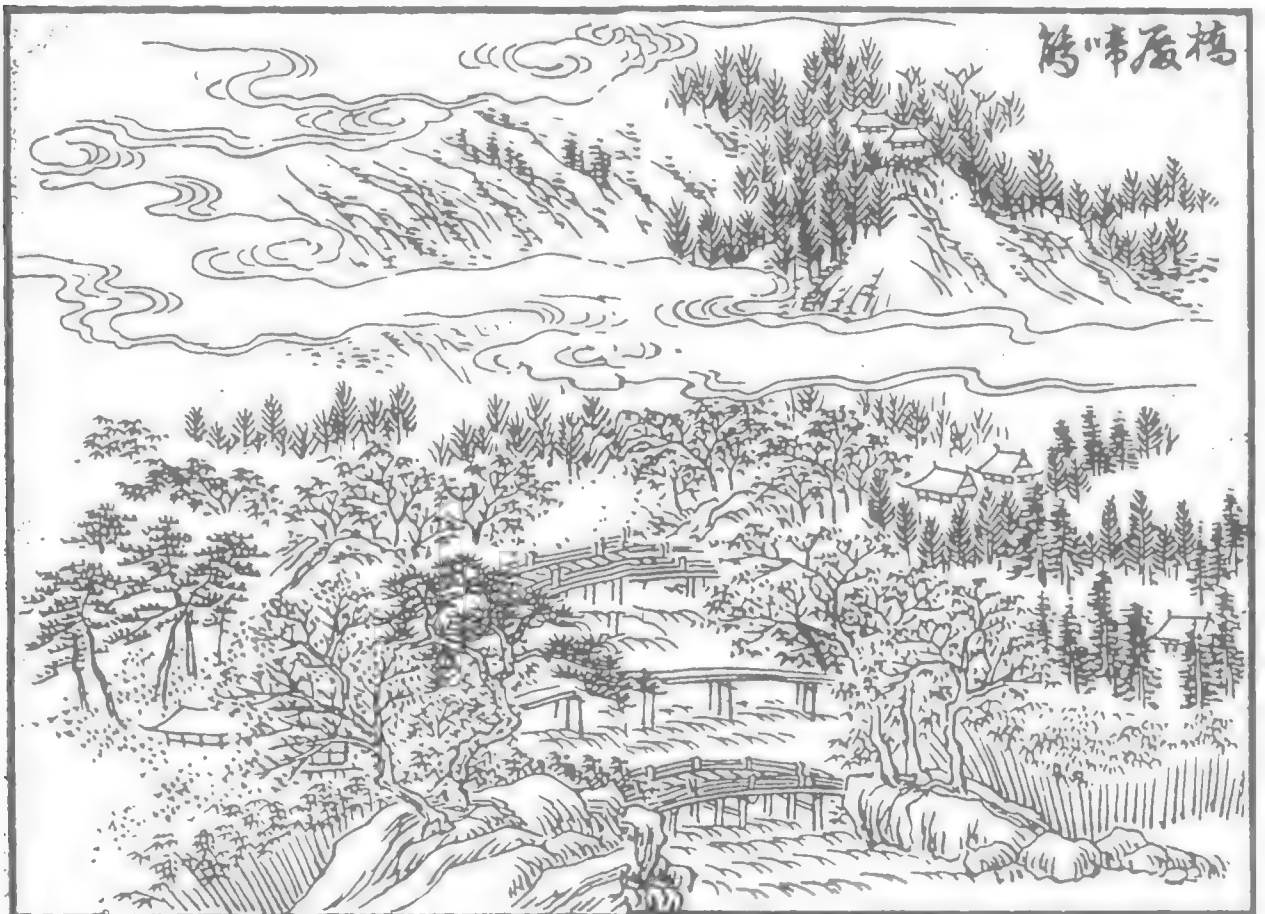
大洞在犬上阪田兩郡界。距彥根十町餘。臨裏湖。高數町。石磴數百級。有天女祠。畫簷朱棟。翬飛輪奐。與金龜城相映照。山下有龍潭。清涼二寺。堂宇巍然。寺前蘆荻連浦。水禽成群。與漁歌櫓聲呼應。于淡烟中。風致可畫也。

谷云。予彥根人也。居距大洞數町。每晨夕登眺。以領其勝。

下

後東徙西還。不到數十年矣。及讀此記。覺鷗鷺待我之久。江云。余亡兄梅泉喜此地。暇日則必腰一瓢以遊焉。余少時屢陪從。維舟蘆葦叢中。吹火溫酒。賦詩極歡。今讀此篇。追憶往事。慨然久之。

中云。余嘗記彥根近傍可游之地。以大洞為勝。京都東山。而畫簷朱棟。漸屬荒廢。實為可惜。



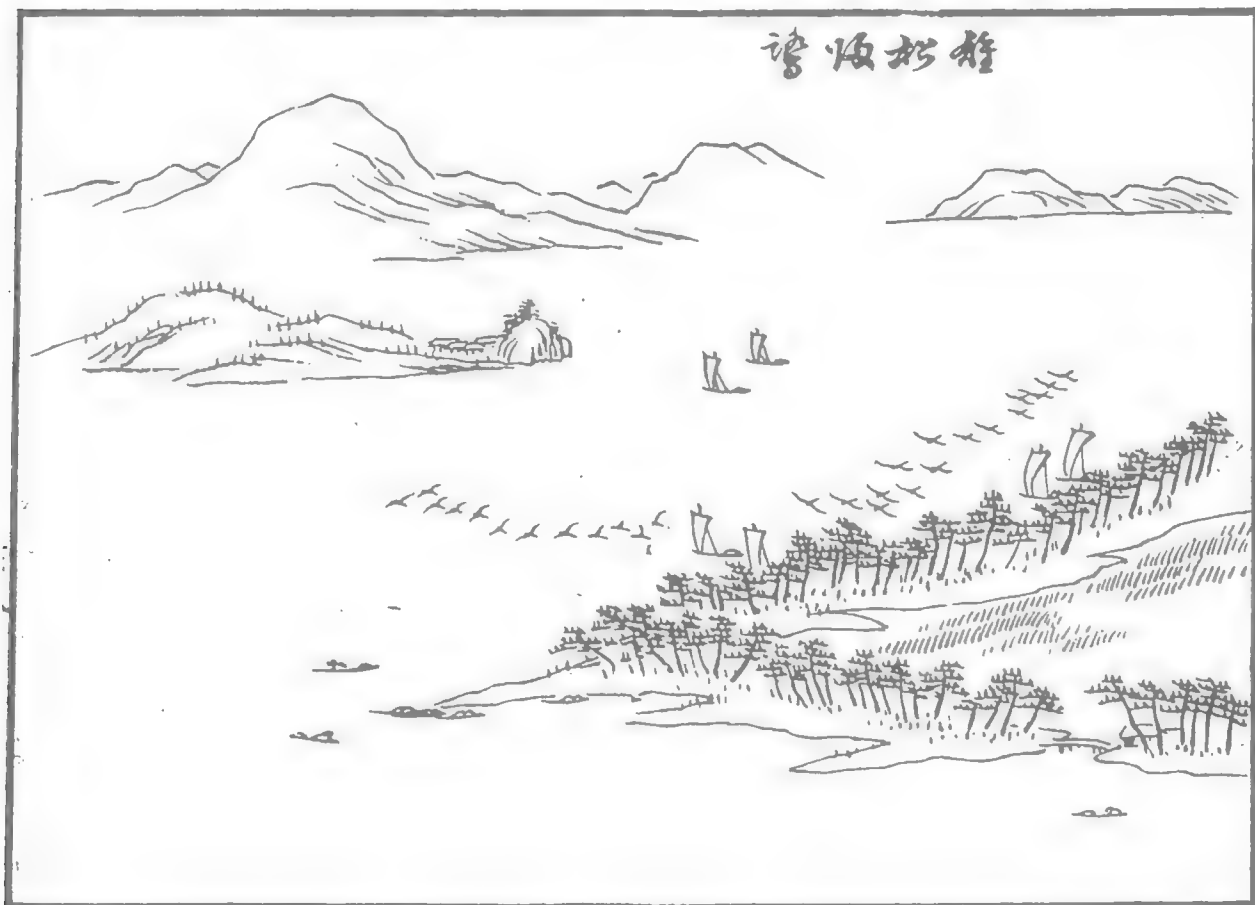
為時辰橋

橋殿啼鵲

橋殿在滋賀郡阪本邨。日吉祠傍。距大津西北二里也。老杉古檜。翳然蔽溪山。幽暗深奧。尤宜於聽鵲。遠近相喚。有千聲一飛之概。神祠佛宇。隱見樹間。溪流一帶。號大宮川。源發于比叡山。紆徐流注。潺潺然淙淙然。有三大石橋架焉。溪上多楓樹。霜後秋色亦可觀。

谷云。此地亦宜避暑。

靜如返謠



雄松歸鷺

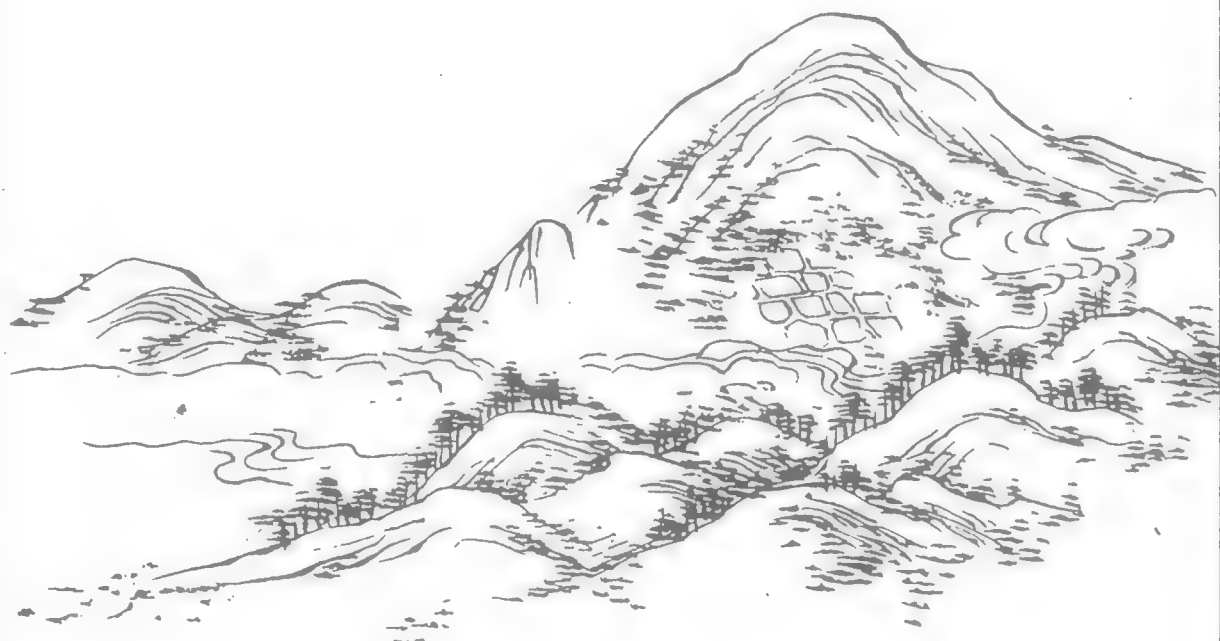
雄松崎。又稱赤松崎。屬滋賀郡南小松村。
 有小湖。東西約七町。南北十町許。周圍一
 里。產蓴。味極甘美。沙堤包之。以界斷太湖。
 砂白水綠。纖鱗可數。堤上多松。翠色如染。
 幹皆赤鱗。或屈蟠。或怒攢。或歌。或偃。沖嶼
 穩卧波上。仙行峰秀峙雲間。夕陽將沒。風
 波漸收。白鷺數千。南北群歸。如雪片舞。碧

下九

空。

中云。蓴美既食之。如其勝。未能目擊之。可恨。

騰吹早雪



谷云。予曾東秋
晴上絕巔。望富
峰於東北天際
其大如所謂白
扇倒懸。

膽吹早雪

膽吹山。或作伊吹山。在阪田郡。直徑二里
餘。峰頭望見駿之富士。信之御岳。加之白
山。越之立山等。往昔役優婆塞。三朱沙門。
行基等。練行之地云。山頂方四町許。有池
方可六丈。側有石室。安佛像。古有堂宇。今
不復存。有千仞巖。懸一條瀑。有自然泉。清
冽可掬。山腹號卜治原。蓬艸叢生。不雜他

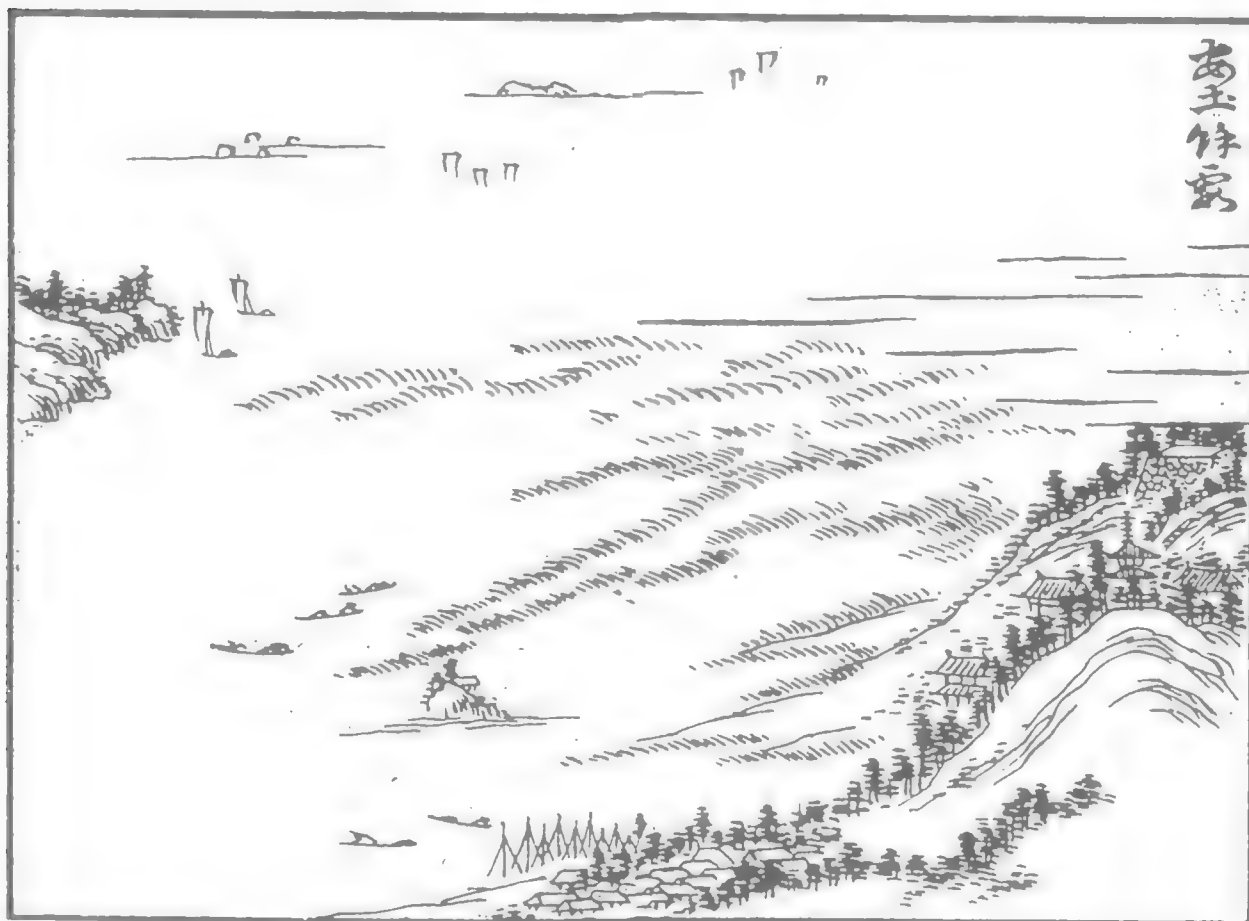
下

石云。可以揭簾
矣。
江云。伊吹山頂
降雪最早。三見
微白。而後始及
下方。余少時在
鄉里所目擊。

種。世所稱伊吹艾者。蓋採諸此也。此山居
本邦七高山之一。而為江州四高山之冠。
巋然秀出於七十二峰。秋際已戴雪一角。
衝天如玉。簪插碧霄。

中云。膽吹在七十二峰中最高。近江人物。誰與之比肩者。
吾不得不推蒲生氏鄉中江藤樹。而今則亡。

高玉作



安土餘霞

安土山。在蒲生郡。距八幡一里。山勢蟠屈。周約二里餘。東隣觀音山。西北臨湖。山即織田氏城址也。有寺號總見寺。天正中。城陷後。僧正仲者。所創焉。佛堂浮圖樓閣僧房。點綴林際。麗妍如畫。夕日已傾。光彩四射。山霞與水烟相接。群山欲浮。据頂眺望。幡山突拔。與嶋偃蹇。下多蘆洲。屈曲似盤。

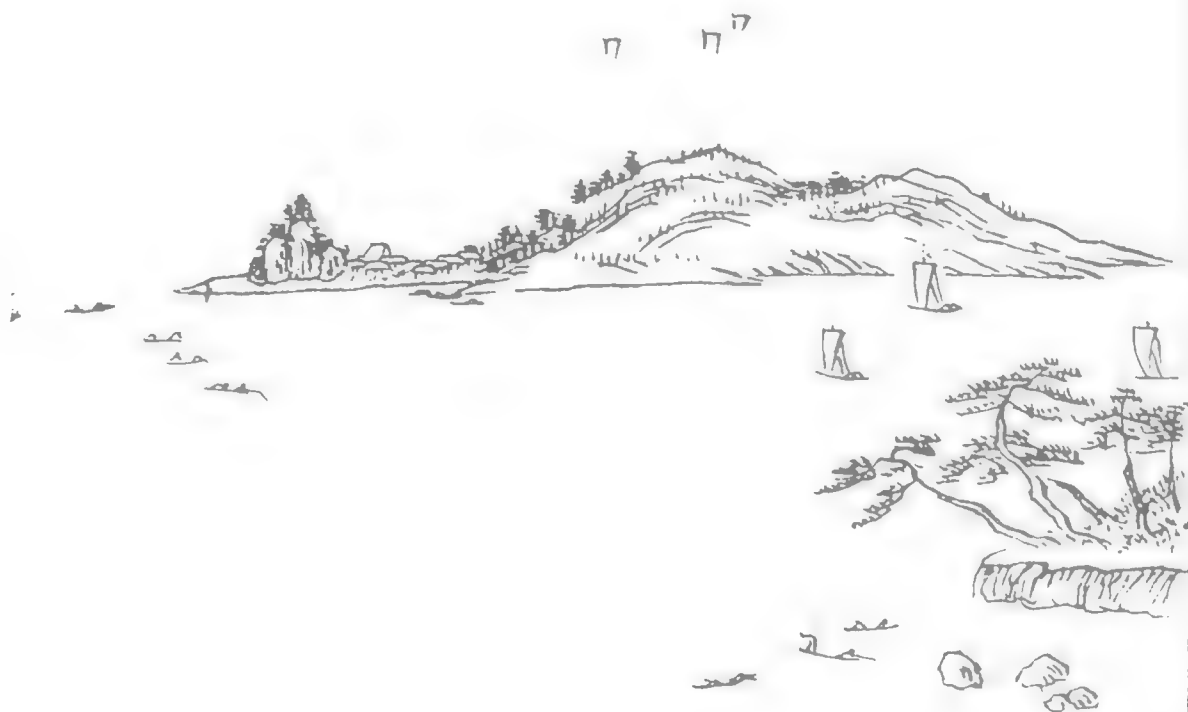
卷之三

石云。文則斷鐵。嶺數等。

龍洲。嘴與伊崎山相接。其間僅通一帆。往來洲內。成小湖。外則太湖瀰漫。竹嶼白石。隱見波間。舟木崎左連。瞻吹峰右聳。望湖之勝。亞於磨鐵嶺。

中云。織田右府。城此者。蓋在防上杉謙信之入京。然豐臣秀次。亦欲城八幡舞鶴山。然則此際形勝。自足霸于一方。而如其勝際。近畿不多有也。

沖水此微竹



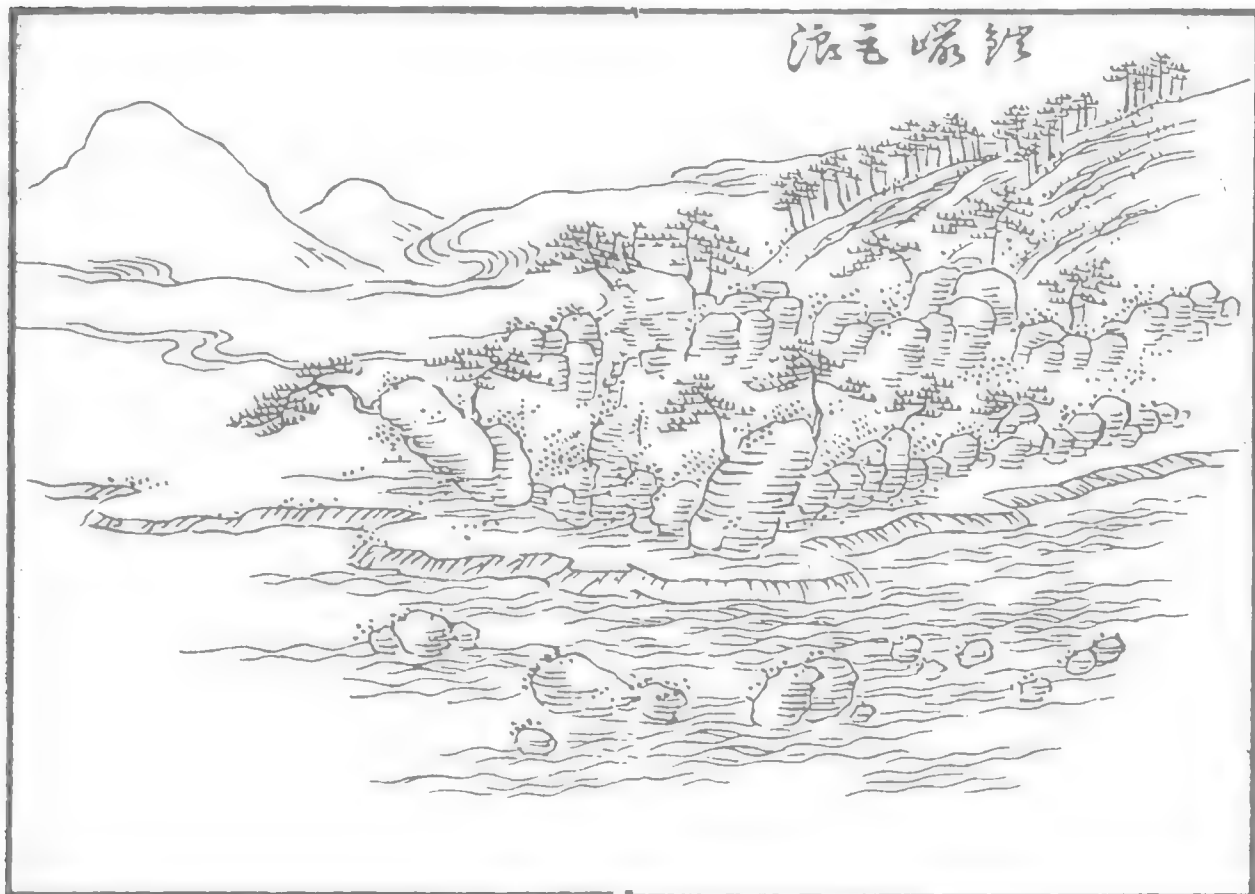
沖嶼微燈

沖嶼屬蒲生郡。為湖中一嶼。東西狹。南北廣。周圍二里餘。嶼成二山。北大南小。堆沙接其間。容如卧牛。西向雄松崎。南對水莖岡。東與長命山相隔一里許。亦湖中之一小蓬嶋也。舟帆之往來於大津長濱者。必取路於此間。嶋中民戶數十。皆業漁。每夜漁燈數點。浮細波。望之如小星在東。

沖嶼

中云。沖嶼二嶼有村落。而與較近陸地。如沖者。實可謂一蓬嶋也。

沖嶼微燈

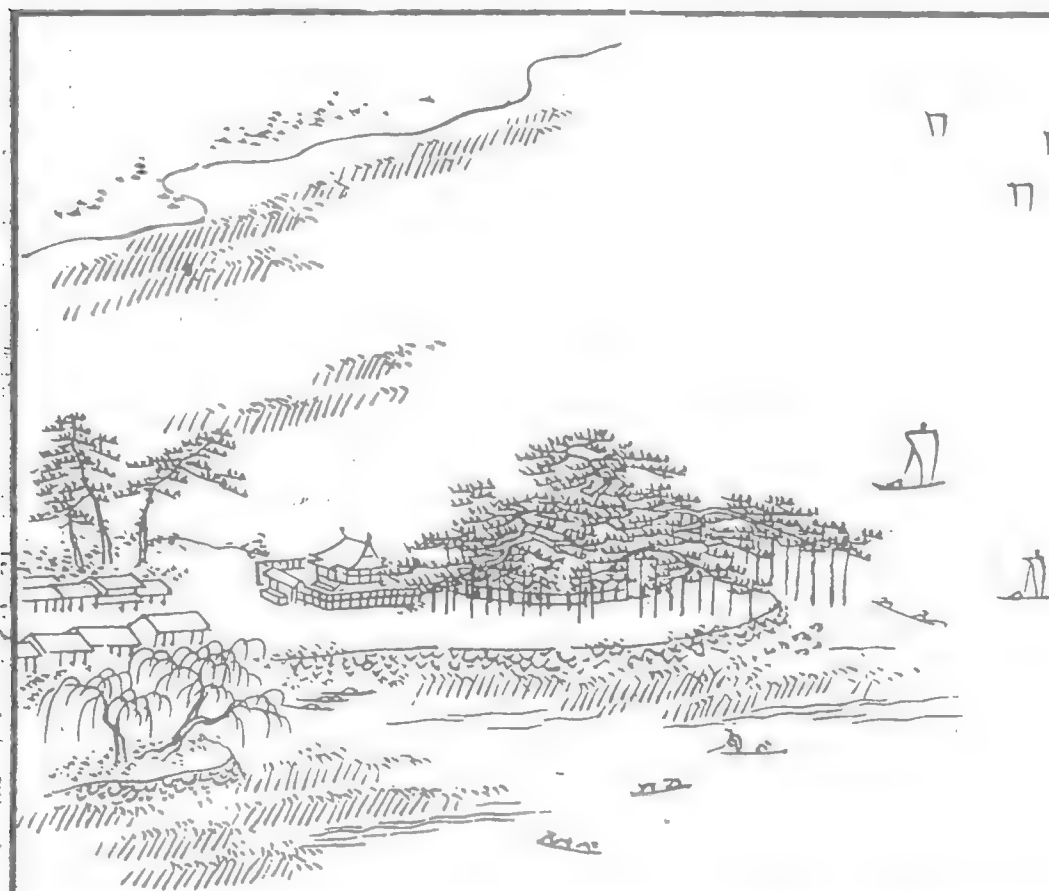


鎧巖巨浪

鎧巖在滋賀郡北小松鷄川兩邨間。巖石
 歌倚有欲崩壓者。有欲墜落者。有如橫裂
 者。有如直折者。其色淡赭。橫理成紋。巨浪
 拍岸。觸石吞吐。騰沫殆數丈。有路一綫。負
 崖沿湖。屈曲纔通。過者必奔。俗稱親不知
 子不知。蓋謂其危險也。
 谷云。風水之文。到此亦一改觀。

中云。一讀驚奇。再讀驚險。湖汀亦有此奇險處。

岸崎松影



唐崎松影

唐崎。或作韓崎。幸崎。地屬滋賀郡下阪本。邨距大津一里餘。磯上有一大松。志賀朝所植。而今所在者。天正年間再栽云。復成巨幹。々圍三丈餘。枝蔓葉茂。而樹不甚高。偃卧蓋水。東西三十步餘。南北可四十步。可庇數百人。崎磯斗出湖中。故宜賞月。宜聽雨。風帆送迎。松影中。波聲與松籟相和。

中云。風帆波聲。二句簡而盡。

下十九

殊有清曠之致。

谷云。予嘗遊崎。驟雨適至。即走避於松下。小半時。而衣袂不濕。可見其葉蔭之茂盛也。

石云。松得此品藻。殊增價格。五大夫之爵。何足歎美。

望遠波音



谷云有東坡不
如金山去清風
半帆耳之想

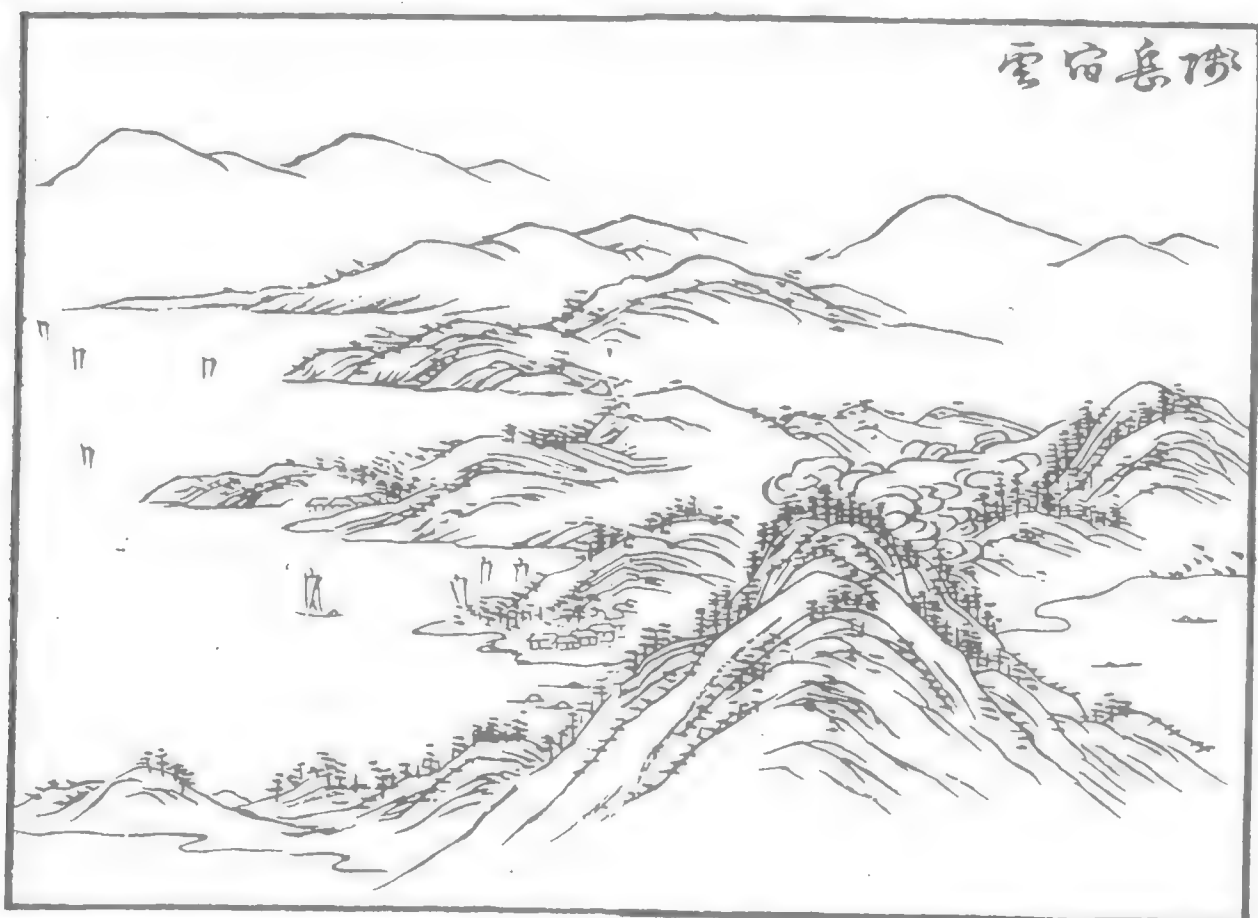
笙嶋波音

竹生嶋一作笙嶋。笙即竹生之併字也。屬
淺井郡。距早崎二里。海津今津谷三里。嶋
周回約二十町餘。四面削壁。無處泊舟。但
東南有一小灣。可容小舟。嶋中竹樹雜生。
鷺鷥群棲。繁如著花。有寺。瑞寶嚴寺。天平
三年。僧行基所創焉。有大悲閣。及天女祠。
寺中多藏古寫經等。有空海求法請來目

石云。鼓浪輕妙。

錄。楷法端正。墨光如漆。山頂富眺望。東南
則金龜城。雉白堊映日。竹嶋白石隱見波
間。沖嶋如卧牛。白髮如象鼻。舟木如長蛇。
北則大碕。旭山等。皆在眸中。嶋之沿岬。有
洞。可容二三人。月清風輕。細波拍岸。自然
之宮。商也。又有小嶋。距笙嶋五六十步。峭
拔突立。高可十丈。岬頭有小祠。俗稱維嶋。

所宿雲



賤岳宿雲

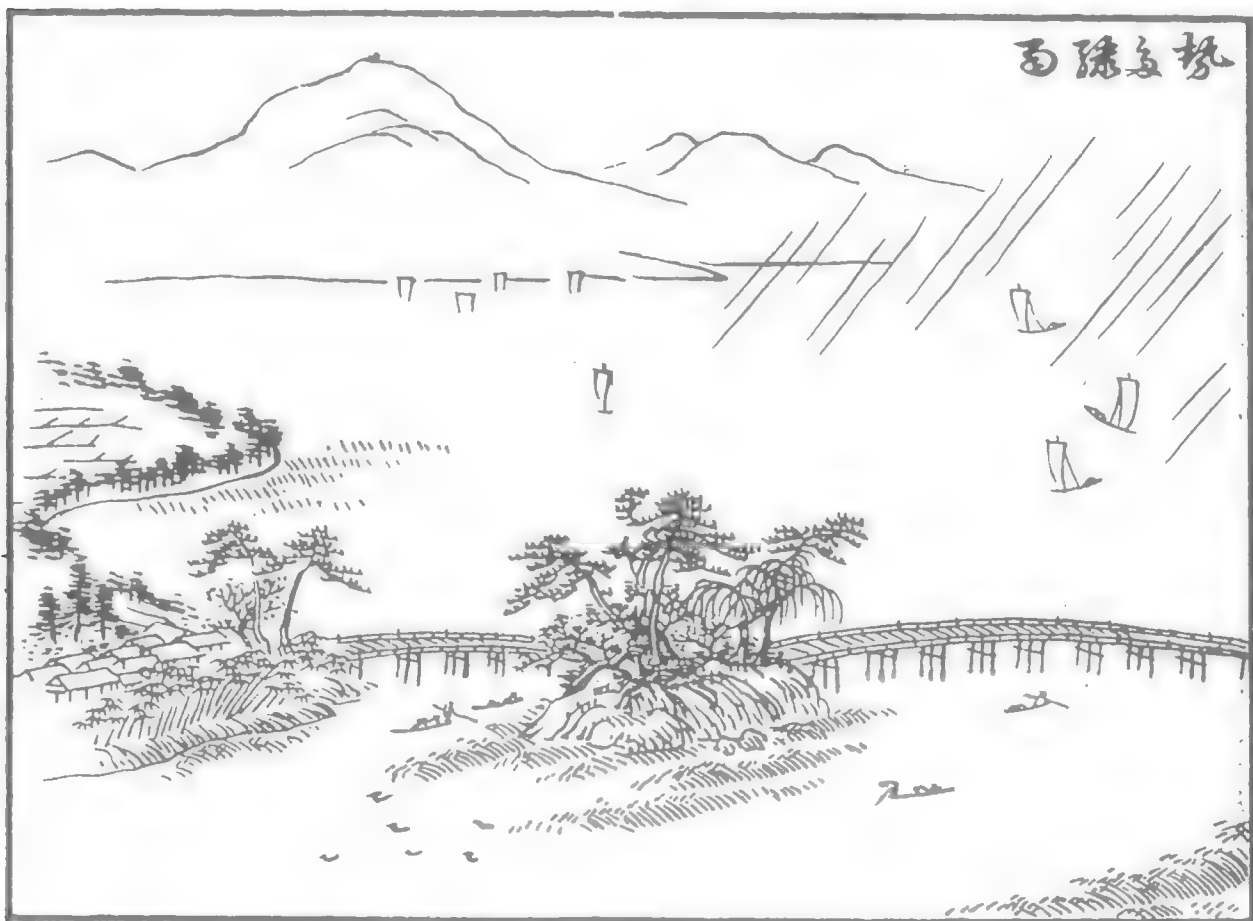
賤岳。在伊香郡。距飯浦一里。直徑十町許。即豐臣柴田之戰跡也。山不甚大而峻。當時苦戰可想焉。左右群山崢嶸。勢欲相擠。每有宿雲。夏時必興雷雨。觀之益可想見。當時爭雄之狀也。南則太湖浩渺。北則餘湖一泓如盆池。亦壯觀也。

中云。余亦嘗登覽。想豐公自上下擊勢如風雨之狀。佐久

下三

間。雖雄何能得支乎。其留陣于此者。可謂入死地不悟也。

賤岳多雲



勢多驟雨

石云。青觀定應
不讓望湖樓白
雨之時。誰居
坡仙醉書之
者。

勢多橋。中斷為二。以中嶼為界。北屬栗田
郡。南屬滋賀郡。為東海道驛次。北橋長南
橋短。太湖之水。至此為一川。東南流注水
勢雄壯。為江州一大川焉。橋上西望則夕
日懸台嶽。夕即倒影于湖面。東望則石山
蔚然。蒼翠欲滴。驟雨起于山後。直傾瀉湖
上。而兩橋隱見白雨中。真奇觀也。

谷云。二橋古英雄之所爭戰。今仍儼然。見形勢之雄。

余生于湖北。少年東遊。遂以東為家。故
於湖中勝槩。皆屬漠然。頃者西歸。適得
此卷。將以為指南。車覽觀諸勝。受賜多
矣。然咫尺而不辨。乞教于他邦之人。殊
為可愧耳。文之鎔鍊至矣。諸子評論亦
盡矣。耄老復何贅。

湖山小野愿

余好山水之游。必有記。故亦好讀人
遊記。况如此篇。記淡海山水者。余每夕
置酒。且讀且批。至快意之處。為傾數杯。
酒盡而止。則呼枕一睡。夢亦在湖光山
影中。古人以漢書為下物。漢書雖佳。未
若此篇之喜我心之多也。

確堂中郎鼎五

跋

猶龍氏之立言者不知
世之云今 何石道人之於
臨海二十四牒既歷矣而

妖樂之矣目擊其存恨口
以終廿四牒不一之而可
也雖然世未知而已猶云
服古者之教如衆未衆

而已獨樂此仁者之心也
若人生乎流連山水之仁
智之人也而不思其獨志而
默樂於是乎且廿四牒之

品題焉而猶然歎之曰能
生於其身而有國焉其緣
焉累以不人出出於其
不得正心者其惡何如也

也是故不為盡乎畫唯
其去不必文乎又唯其
宜夫唯其然自自然之
韻唯其然自有自然之妙

其自笑則為人所不自
知而世皆不知之矣夫不
可忘一多或少為人果
知其而不知之者乃於

為氏之言而後曰坡
其所以而云爾不然如
王千言語止世中篇之
文而必云云此亦知者

不言難云云其然而吾不
信焉

陸園居士石潭叢

明治廿五年四月二十日印刷
同年同月廿七日出版

著作者

福園縣平民

安國清

京都市下京區花屋町新町西入
東松屋町十二番地寄留

京都府平民

發行兼
印刷者

北邨四郎兵衛

京都市上京區柳馬場御池下
八幡町七番地

琢本廣告刻

鈴木鷺湖 畫 林信充 題詩

飛鳥山勝景

安政五年（一八五八）清音閣刻本

據安政五年（一八五八）

清音閣刻本

安政戊午鑄

飛鳥山猿景

清音閣藏梓

飛鳥山十二景詩并序

飛鳥山在武州豐島郡滝野川其為境也豁爾茫々乎氣象萬狀不可勝數也其東則遠之房總近之平冢其南則遠之東叡近之漆井西原其西則遠之富士秩父近之板橋練閑其北則遠之二荳筑波近之王子及臺

島川其餘則鵠臺中里隅田川瀧野川梶原村歷然在目下也是唯舉千之一二而已其左右則為

官家游豫之地尚矣六七年以前有命芟夷其荆棘削平丘阜莽更栽櫻木千株既而其木長茂鬱如雲今茲癸丑之春千株花木一時而開又

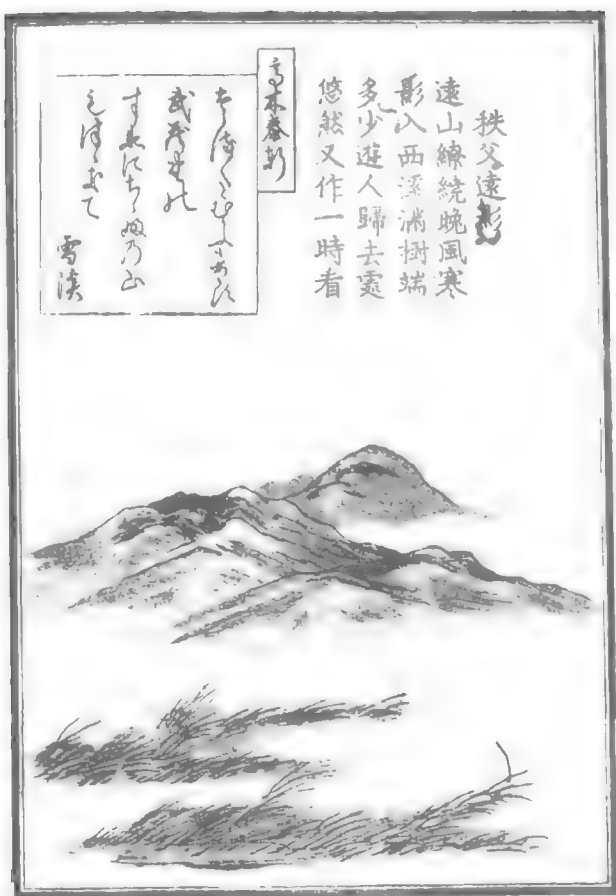
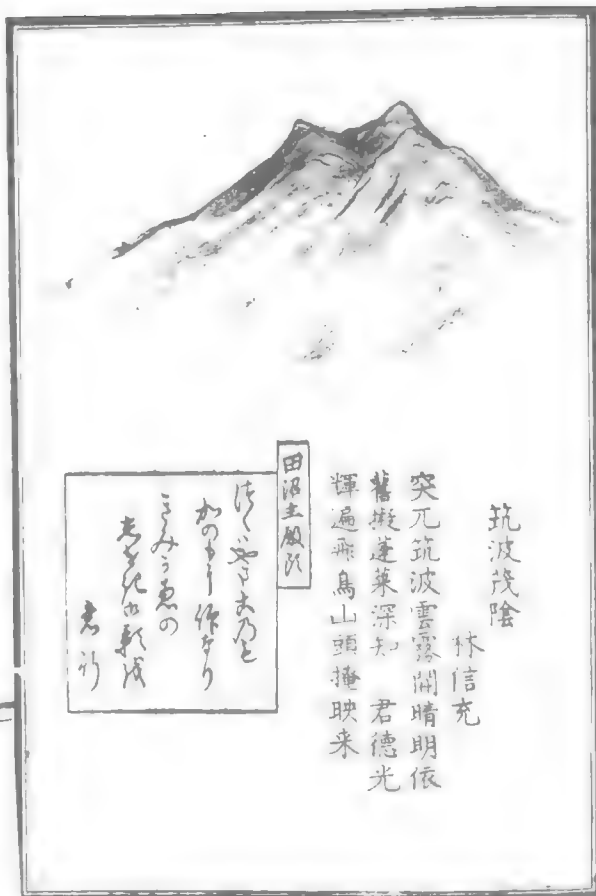
有

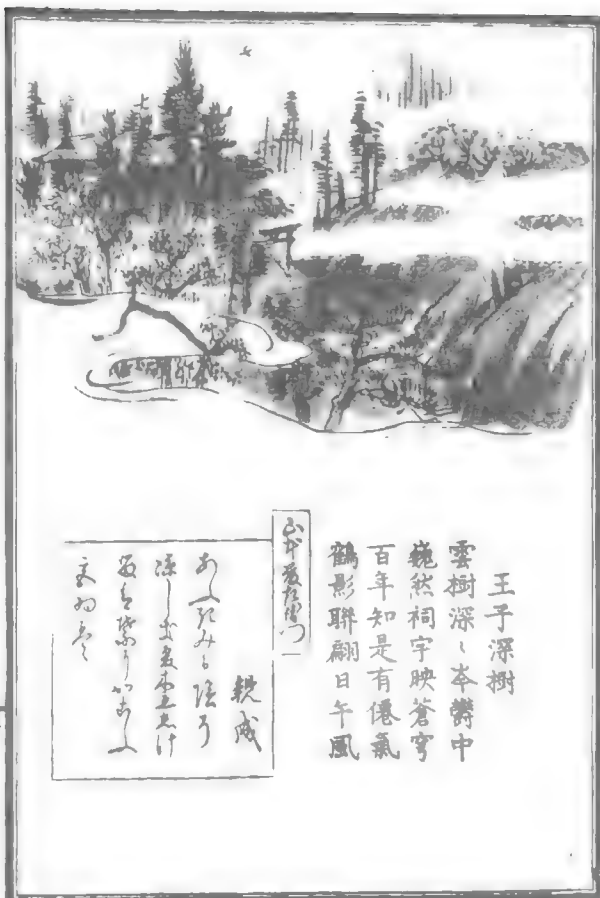
命凡百官僚日生而見之各莫不荷
恩而既醉也且夫庶人農工賈販之
徒亦相往來而樂也各莫不蒙周
父之澤也孟夏之月余與二三子偕
往而遊之則綠陰連雲平蕪似煙
景爲壯在一瞬之間於是取其可稱

述者十二景而賦詩不略而推之而
已恐未盡其善者也其詩如左

享保癸丑四月上澣日

國子祭酒朝散大夫林信充題





王子深樹
雲樹深、本鬱中
巍然祠宇映蒼宇
百年知是有倦氣
鶴影聯翩日午風

王子深樹

秋成

あけみしづう
源一ふまふまけ
あけみしづう
あけみしづう



平塚落雁
數行歸雁
浮雲遠影成
羣、望今平
塚邨邊細流
水旅人馬上
最先聞

平塚落雁

秋時

あけみしづう
あけみしづう
あけみしづう
あけみしづう



鵲臺秋月
遠天雲盡月光新風露涼生入白蘋
前路東連碧流影清輝千里送行人

鵲臺秋月

秋時

あけみしづう
あけみしづう
あけみしづう
あけみしづう

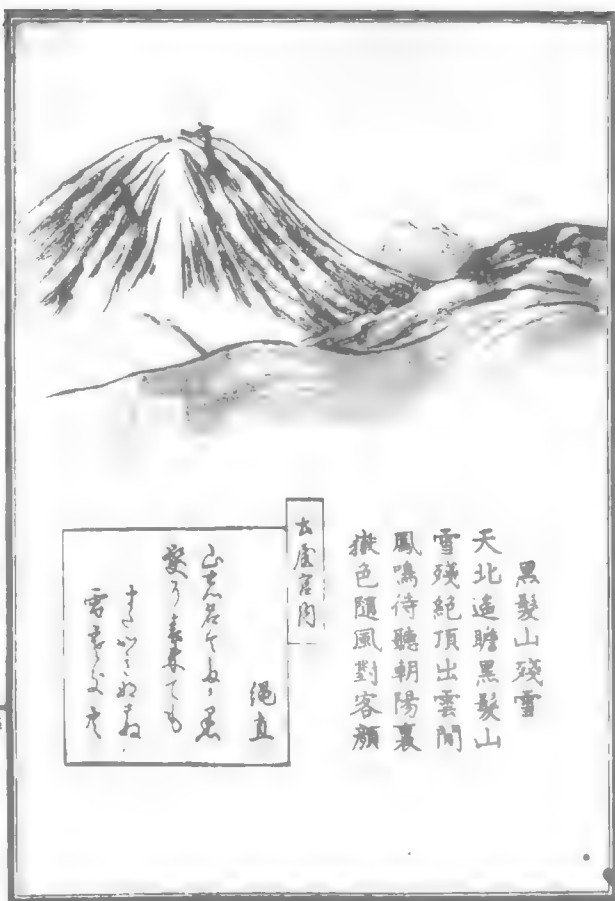


源井夜雨
平蕪斜陽大原
遠微雨夜來更
可憐明日遠窮
十里目農郊興
家作晴烟

源井夜雨

秋時

あけみしづう
あけみしづう
あけみしづう
あけみしづう



黒髪山殘雪
天北遙瞻黒髪山
雪殘絶頂出雲間
鳳鳴侍聽朝陽裏
嶽色隨風對客顏

本居宣長

絶直

ふらんをよみ
愛うまきても
すゝめぬ
雪ふりふり



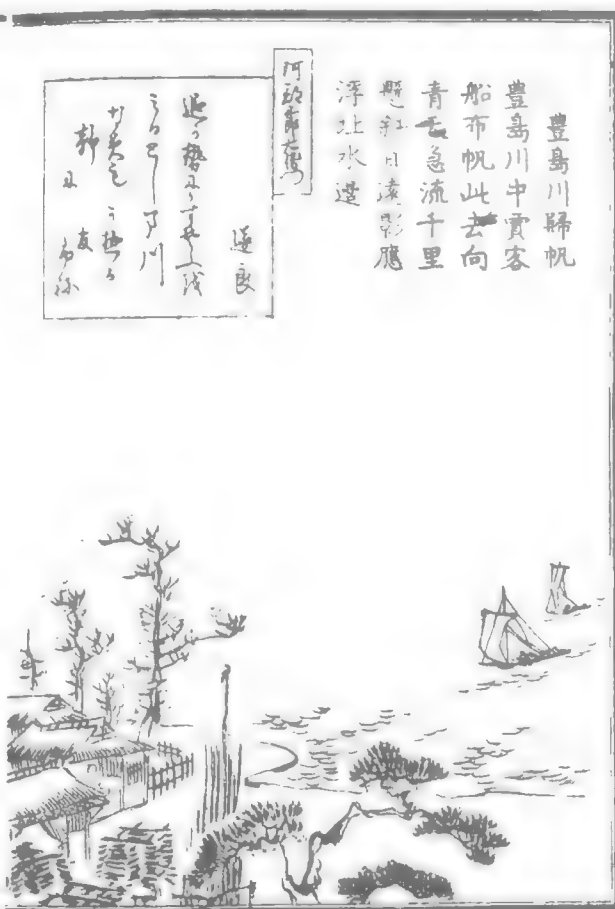
西原晴尚
達望山
晴嵐興家擁林來
可憐滿鳥更翔集
人亦垂鞭信馬回

諏訪岳

雲霞くもる
の夕日そよめ
ふいにあ
く

海嶺

主君の御幸
より
より



豊島川歸帆
豊島川中賣客
船布帆此去向
青雲急流千里
懸紅日遠影麗
浮北水邊

阿部正徳

通良

近き橋より
さうさう
わが
新



中里晚鐘
梵寺鐘鳴起晚雲郊原十
里各應聞更將牛背牧童
笛併入林風不可分

芥川

十

中里
本
中

飛鳥山十二景倭歌跋

飛鳥山。距東都郊行六七里。其爲地也。周回數百千步。登斯山也。則不啻一瞬千里。遠山長江。郊野田里。碁布星列。至若。春則櫻花燦爛。白雲埋山。夏則綠陰納涼。薰風透衣。秋則紅葉飄零。錦片滿地。冬則千樹枯瘦。松篁增色。可謂四美具矣。若夫雨奇晴好之佳興。四時風雲之變態。不知其幾千狀。寔武州之絕境也。來往東都者。

必無不遊觀斯勝者。騷人吟客。述志之所之。未曾有符口而歸也。白丁亦曰佳哉山矣。癸丑之夏。國子祭酒赤城林先生。取十二景作絕句。以稱述之。皆是一時之所見也。於乎。山上之景何止乎茲哉。況景中之風致哉。誰得而盡其美焉。元文二年。圖書府主事鳴鳳卿。撰飛鳥山碑。刻著于石。而後斯勝益彰。方今芥寸草遊于斯。惟以倭歌之無題咏。爲遺憾。遂使東都之善倭歌。

者大夫士庶。凡十二人。各倭歌一首咏之。亦請大中大夫捨遺補闕藤君資親。書其題於短冊。藏諸熊野祠。共垂于無窮。亦不啻乎嘗聞本朝遠古陽神陰神之唱和者。倭歌之權輿也。爾來詞花言葉。愈出愈茂。彼詞所謂二神是也。神如爲靈。必有感乎其志。屬余以記其事。讀林祭酒十二景詩序。鳴鳳卿飛鳥山碑。則業已盡。余何費詞。然後乃今可以觀。

國家承平文物之盛。而東都風月之有人也。美矣哉。是爲跋。

元文己未秋九月穀旦

魯庵龍常義友賢甫識

飛鳥山之勝略約得十二名享保中國子
祭酒杰城林公名有待藏之我寺元文中
父寸草者憾其有詩而無和歌也使都下
冠帶白衣之徒流之龍寄友賢為之跋
於是前任宥衛命畫工寫其景以副之而
令畫師某上梓以公諸世唯林公之詩則
不刺蓋以秘藏之不敢報示人也然歷年
久書肆烏有鏤版亦訛而佚矣先師宥欣
將併公之詩而改鑿之未果而崦嵫予欲

繼其志者有年矣頃日熊坂蘭齋乃能代
予任其勞且取其他題詠及吟鳥先生所
撰碑文校訂命工彫刻告竣丹青燦然文字
明了以諸舊本則光燄殆加幾丈矣予喜
先師之志有成也為記其由者如此

安政戊午蒲月

金輪寺第十二宥秘藏

高橋陸書

跋

飛鳥山自其為游宴眺望之地騷客韻士之輩吟咏
圖畫以賞之焉而如享保間祭酒林公十二景詩并
序文元文間鳴鳳卿先生之碑銘及諸彦國歌狩野
某圖最盛者也蓋山係于金輪寺管轄故當時任持
宥衛上人盡取秘藏之但碑立之山圖歌上之梓雖
然一秘不公一忽焉為烏有故世唯知碑而無知其

他矣及前任持宥欣上人慨然惜之遂欲復盡併刻
以公之問事於建然上人仙化不果今之宥秘上人
又命建欲以繼志嗚呼夜光遭相玉者而卒不暗者
於是乎有焉可不謂快事乎建嘗大蒙知於二上人
因有此命也刻成附事于末

安政四年初冬中浣

松前 蘭齋熊坂建謹識

附錄

飛鳥山碑帖序

飛鳥山碑立都下傳稱盛事其所
代撰鳴陽懷文名曰隆威為之貴而又
其篆拙筆格高古絕無後世輕俊之
跡陽懷亦不自去其所得已所自稱此
且有神助者也且碑體高大石理堅密
青紫光潤依傍成奇且聞之陽懷所立

采擇獲之

後苑云故都人士貴觀其側如仍為
層而不可得縱墨寫王子金輪寺僧都
宥公有志於遠傳之世乃一二身功之士
戮力相助為之打款十本且裝作帖善
苑以待其人者之需也其帖亦大作奇
觀之古墨本無異於是都公益相傳
稱焉蓋夫飛鳥山隸王子境宥公立

碑之舉固詳其文則世世流傳
宥公遭遇萬古不朽然石不可轉而
帖則將傳之萬國矣豈不亦善乎哉
竊惟今時人之所好典厚成俗雅貴
臨古固亦

昭代文德之化也乃此事雖可以推去
其大宥公使人原余序余乃辭節
宥公好尚文雅亦為陽懷喜之其事

如此

元文三年春王正月

南郭服元為

石齋縮臨

飛鳥山碑帖跋

此碑也天或假之筆耶其文煥然固矣何其書之古雅出歸德手指進乎歸德矣乃為一片石堪共語豈唯二三兄弟乎且也飛鳥山靈時邈矣孰識所由今其探墜緒明如觀火歸德自以為神助也然而無有乎爾則無有乎爾管子不云乎思之思之神其通之歸德有焉抑精氣之致盛云近

宥公繕寫為帖子遷併之序余亦不可默聊共頌盛事敢一言于其後
元爰戊午之春

江忠園

石齋縮臨

中島棕隱 著

鴨東四時雜詞

文化十三年（一八一六）序刊本

據文化十三年（一八一六）

序刊本影印

鴨東四時雜詞

鴨東四時雜詞序

秦淮風月。西湖煙水。彼土文人。以多少綺辭。抒其情景者。歷々可觀矣。我鴨東之勝。婉美於彼。繁華風流。亦足以誇盛世之樂境。然而無竹枝詞曲之可唱。無煙華錄杰之可傳。人亦廢然不問取闕。其故何也。稅近文士。拘々于毀譽之間。不能放膽以倣此等好事。雖有一二染指者。猶自守其套陳々腐々。竟非切于事情之警詞。豈不嫌子畫餅居士。鼻東襍咏一百廿首。其作出于少年慷慨之餘。若昭本在人之所不得言。乃奮而闢此香色界。取以字々奇峻。句句流麗。於行樂治遊之情態。毫末莫取不盡。而其巧緻亦在假彼土之事類而妝之。手段可謂高矣。甲戌歲刻其半。已行于世。夫々嘗一覽。不得不思全鼎。但以其撰係狹邪。人或病居士。居士卓犖。雖不介意。而同社每替為和。辭之泣。有某生。携其原稿于長崎。以示清客。清客一見大稱曰。茲詩不啻格調超逸。可親攬倭土都會之時樣。

者莫過焉。特憾殊俗事狀。吾儕推知其概。至詩中有寓意之秘妙。則不能不搔隔靴之痒矣。某生為寄書于居士。勸每詩自注之。居士感其言。再潤色之。注成達長崎之日。某生罹病。故于客寓。其事不遂而止。今茲栖原。凌洲生偶遊京師。訪居士。談及于此。大以為可惜。懇請其稿。更加考据若干條。繕修彈力。終能成此美本也。嗚呼居士奇筆。於是得見其全。我島東之勝。亦足以增光彩。獨奈此等撰筆。皆脂香粉氣。必知不免輕佻淫靡之誚。其取不免。即是取以為奇筆。與要取例於彼。以為一種板槁雜記。則居士亦固不取為今日之余澹心矣。

文政九年丙戌花朝峨眉山人題

鴨東四時雜詞序

人生幾何。魏帝當歌而慷慨。木尚如此。桓公撫柳而垂連。黃鵠翼成而腸斷。青衫淚下而魂消。雖彼實大度龍顏。隆準然所未免。况僕本恨人。蒲質柳容。何以能堪。庚子山憔悴而哀。江南潘安仁悲嗟而感。秋興北徵。瑤臺之女。青雀未通消息。南邀湘水之娥。水夷久絕微詞。明月難圓。彩雲易散。空約菖蒲花開之日。徒看華表鶴歸之時。伏惟帝畿之地。可謂天府之都。敷麓東環。鴨河南轉。雍容閒雅。挾琴之客。比肩香艷。羣嬌分帖之姬。接武何必峨眉之鍾秀。於長卿太白。不唯濯錦之清泥。於卓

鴨東四時雜詞

序

文薛濤。祇園廟頭。最知羅綺之叢。靈山寺畔。雅是神仙所宅。胭脂村從昔而存。響簾廊於今尚在。金鎖瓊鋪。珠簾繡箔。枇杷門畔。半扇微開。鸚鵡架前。低聲細語。綠錦蔽泥之馬。銅轅載菓之車。月殘風冷。嬌聲度曲。未終。鴛鴦眠。懨懨夢濕。衾猶暖。我始東游。君方北走。壇上盟孤。獻雉未修。相見。江頭楓落。聞名已識其才。點翠施紅。近接王昌之宅。怨媚羞容。久攀宋玉之牆。鳳梭折齒。謝混吟嘯何妨。綺席回頭。杜牧狂言忽發。競罪大觥剪秋水。於雙眸。爭持半臂。削春蔥於十指。於是壁魚箋。於珠璣之匣。揮象筆於珊瑚之架。詞皆窈窕。情悉綢繆。非罪咳

唯明於珠王。歷歷爲簪諧以宮商。窻左紅牆題字唱酬
可喜。梨園名部齊歌甲乙足誇。籠以碧紗。裝之寶軸。開
時薰蘭麝之香。讀者嗽薔薇之露。勿譏異正始之音。又
當續元和之什。水叩珠排。徐陵宮體自喪。艷濃綺麗。韓
偓香奩頓盡。嗟情之何癡。而性之甚惑。雲繞陽臺。雖醒
而猶夢之時。雨淋劍閣。縱死却如生之日。恍有惚無。飄
來飄去。爐上餘煙。淒涼自滅。帳中殘影。髣髴徐行。市頭
洗器。臨叩之游已倦矣。棹下發。謳汾水之感將生焉。今
也重繙。昨猶在目。阮氏夢春之句。通陳。釋門懺悔之文。
或似憲也。遠陬固陋之民。窮海魚蝦之旅。敬牛此情。某

鴨東四時雜詞

序

二

甲一畦。拖網拔簪。蘆花半渚。仰中州而路絕。望狂浪而
眼穿。爰投鱗素。以責蕪辭。固有同病相愛之誼。曾無殊
途按劍之猜。共立程門尺餘之雪。又分會派一瓣之香。
辭何敢固。技亦隨殘。漫叩兩端。叨敷數字。更想天涯淪
落之閒。久依地角荒涼之處。黃蘆苦竹。地同滄浦。芳草
落花。景似江南。寧無商婦之歌。定有龜年之遇。請期他
日以弘流傳。

文化十三年丙子春三月南豐竹田花竹幽窻主人撰

鴨東四時雜詞序

邦人賦竹枝體者。祇南海江南詞。爲其鼻祖。猶唐之有
劉夢得。近時狹夏池五山樹機。于江戶賦。漢川竹枝。其
名藉藉。關以東人以。當今楊鐵崖稱之。一時才子靡然。
嚮風賦。咏百出。有某竹枝某竹枝。其論吉原之花朝兩
國之夏晚。雖潮來鉤子。窮販悉裝飾其土風。以作我邦
虎邱秦淮矣。特京師山旣水明。花態柳情。別有一種。婉
柔諸境之俗。萬萬不可及者也。豈可無竹枝詞乎。吾友
畫餅居士。奇才子也。錦心繡腸。謂之京師文妓。其誰爲
不。然嘗賦鴨東詞若干首。與五山漢川竹枝同時。而成

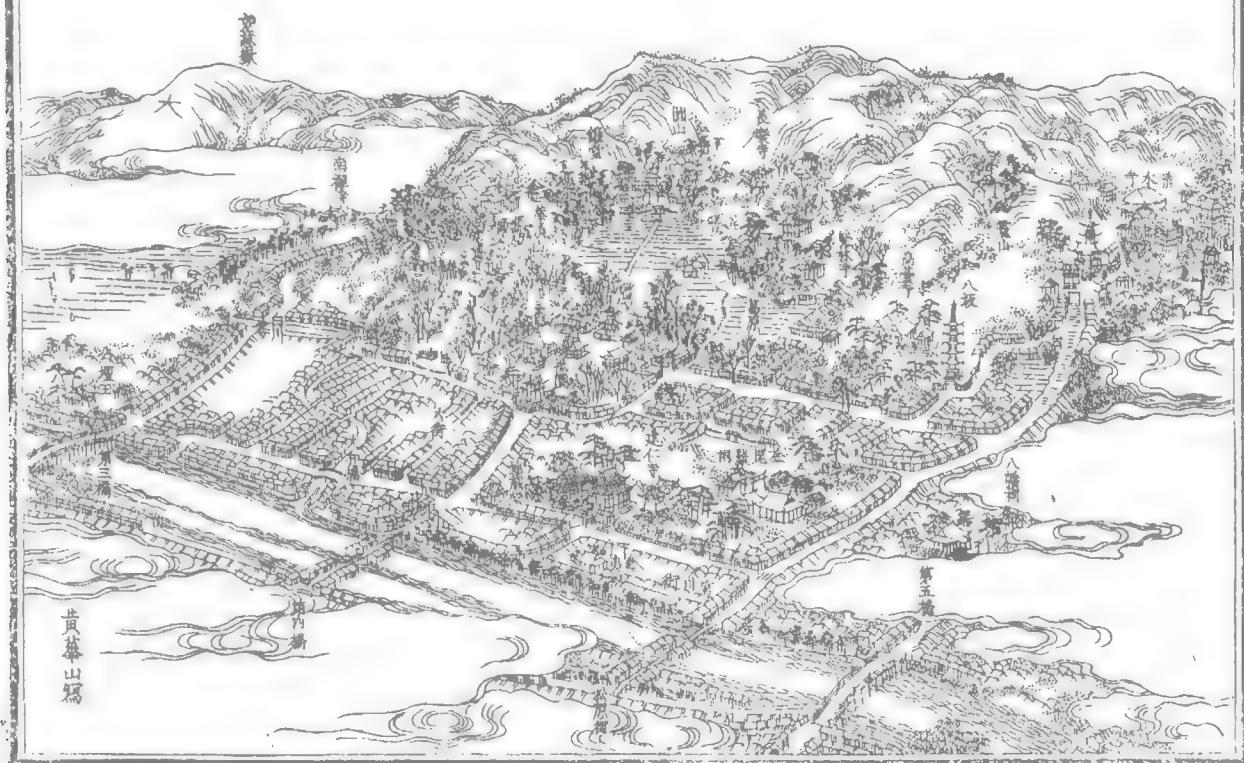
鴨東四時雜詞

舊序

三

當時已膾炙人口。五山編詩話。亦採其二三首。以爲話
資。世之所知也。頃日居士搜閱舊稿。參訂斟酌。綜爲六
十五首。以謂輕佻浮泛之語。不可入正集。因別作一冊
子。只將博同臭味之一笑。社弟癡規遂請上梓。徵序于
余。余細讀其語。悉皆寫出銷金鍋中之秘趣。可說不可
說之事。言外有意。意外有味。讀之者讀了。後掩卷。瞑目
而始會其妙矣。此編之出不曾希爲之貴。併增鴨東花
柳之聲價。寔不愧爲昇平風調也。吾願學五色綢箋。做
洛神賦。小楷錄之。裝以雲鸞縹帶。更挂之鴨子水樓。口
授絕代名姓。風清月白夜相歌。以警多少被底鴛鴦。蘭

鴨東諸勝略圖



薰透骨雲關雨密一頓一笑恍乎不知所歸底之湯神
亦一奇事矣蓋居士少年不拘名節假紅倚翠豪誕自
分近棲蓬林下日欲寡過而翰墨業障未除動則感想
譬昔幻夢發此微悔也凡人當其夢時誰知其為夢及
夢始覺方始悟是夢居士既悟夢之為夢名亦自此清
遠矣

文化十一年甲戌中秋前一夕古漁鷗史題於大和橋
北春夢樓

鴨東四時雜詞 舊序

四

我邦地名雅馴者十居一二是以近時操觚士動輒
命其私號強欲施之詞藻支離附會至不辨是為何
處可笑之甚畫餅居士詩精審不苟如此諸篇地名
一由古今相沿者華頂鷲嶺祇園葛原之類是也其
他不可直指道者運思婉辭無不中肯綮人讀其詩
便知為其地亦作家老手段也然鄙邊隔域未及觀
京華者播傳吟誦徒服其警拔而至勝概區別之不
可審則不能無所憾因另揭略圖一張為之指南我
輩區區婆心觀者不介其贅幸甚

綾州山人識

鴨東四時雜詞

畫餅居士著

綾洲山人增注

蘇堂野夫校閱

水明山媚夾名區，一帶煙嵐入畫圖。也是銷金鍋上景，不妨呼作小西湖。

自注云。鴨水本稱賀茂川。北出自雲烟。經水上村。通上下賀茂。其間有石川。蟬小川等名。而到糺林之南。與高野川合。直流過第二第三橋。當大和橋之西。與白川合。又經第四第五第七小枝等。諸橋與桂川合。

鴨東四時雜詞

歷殿橋出浪華入于海。○七修類藁云。吾杭西湖盛起於唐。至南宋建都。則游人士女。畫舫笙歌。日費萬錢。盛之至矣。時人目爲銷金鍋。相傳到今。然未見其出處也。昨見一竹枝詞。元人上饒熊進德所作。乃知果有此語。詞云。銷金鍋邊瑪瑙坡。爭似儂家春最多。蝴蝶滿園飛不去。好花紅到剪春羅。

不著荷花，不受舟樓樓住，在岸東頭。只應萬斛胭脂水，瀉作潺潺一道流。

鴨水古來不用舟楫，以深淺涸漲隨時月之雨暘。洲汆亦不定也。○徐哲西湖竹枝詞云。騰拚萬斛胭脂。

水瀉向銀河一帶秋。

板橋以北石橋，南箇箇簾櫳水影含。紅袖倚春殊有色，起樓何問背煙嵐。

第四橋九二中洲平廣。東西近岸處各有板橋。共稱四條橋。鴨水東隄古稱大和。大路到和州之道也。今稱繩手。而第三第四橋之間。白川自東北來入鴨水。街路中斷。架石橋。因亦稱大和橋。○李商隱雜纂救風景之一云。背山起樓。

平撫群巒，不藉瑯嶠光。一一撲眉濃。前人道破全都景，軟翠連東有卧容。

鴨東四時雜詞

鴨東諸山。陂陀列翠。絕無峻峭之狀。相傳云。其峯有三十六朵。望之于第四橋左右。鬱然撲眉。優美不可言。元祿年間淡州人服部嵐雪。以俳諧鳴于世。東山警詞。贈炙人口。

已過芳草碧波瀕。漸入六街妖麗春。不向茲間醉煙月，何稱都下韻流人。

鴨東煙華。祇園廟下通衢。爲最。卽是祇園街。其北有六街。次之。又板橋南北沿岸之諸樓各盛矣。○以上五首。賦鴨水第四橋景致。

華山雪盡萬松高。韶吹徐徐弄碧濤。名利例修開士忌。

上番春事屬方袍。

華頂山智恩院古屬延曆寺。元亨釋書云。釋源空承安四年出黑谷居洛東吉水。盛說專修念佛及圓頓菩薩大成。所謂吉水院即是。又稱大谷寺。爾後以源空爲開祖。每歲正月。自十九日至廿五日。僧徒大張法筵。修其忌辰。○杜甫詩云。會須上番看成竹。又元稹詩云。梅嶺上番驚。因依上番樓。皆從去聲。然楊萬里詩云。出城趁月上番涼。今從揚作平聲。釋法照詩云。避暑著方袍。注云。僧迦闍衣爲方袍。又揚岳六帖補云。高僧法肇師制四論。呈劉遺民。遺民歎曰。不

陽東四時雜詞

意方袍復有平叔。

寶璫高映半天霞。一孔華鯨度露餘。皂帽必芻紛作禮。忙於木末亂飛鴉。

本院有巨鐘。高一丈三尺。周圍二丈八尺。厚九寸六分。日常不撞打。唯於此法會七日間用之。○字彙云。海岸有獸名蒲牢。聲如鐘。而性畏鯨。鯨躍輒鳴。故鑄鐘作蒲牢形。其上爲鯨形。又班固東都賦。發鯨魚鏗華鐘。注云。謂刻作鯨魚形也。善覺要覽云。僧曰必芻。必芻草名。體性柔軟。引蔓旁布。馨香遠聞。不背日光。故以喻出家人。

香火爭來訂勝因。散投十地弄芳辰。鞭絲帽影春如錦。多是佛邊隨喜人。

都下士女相競觀此法會。袈服靚粧以闌其美。爲例習。○劉禹錫詩云。香火有因緣。汪陸法和云。與梁元帝於空王寺佛前訂香火因緣。決定經云。不舍初地。入于二地。乃至十地。今假作十方之義。王維詩云。竹徑從初地。此其例也。司空圖詩云。應是佛邊猶怕開。以上三首賦知恩院法會。

輕暖輕寒二月時。櫻花最早是垂絲。欲知春色繫情處。先問福庭纖艷枝。

陽東四時雜詞

知恩院中櫻花甚多。佛堂前垂枝櫻最早發花。○福庭猶福地。溫庭筠詩云。福庭回首莫相忘。

杏園挑塢自相隣。看遍軟紅嬌紫春。栩栩寧知在塵世。無非蝴蝶夢中身。

葛原菊澗之間。名園頗多。

芙蓉秀與碧雲伴。最好東山第一樓。扁榜各觀時彥筆。筆歌墨舞闌風流。

芙蓉樓碧雲樓東山第一樓。皆在圓山安養寺近時。文士龍草廬大江玄圃永田觀鸞輩書其扁額。

自將鐘磬換笙歌。精舍隨緣近綺羅。半夜人歸芳樹月。

衣香巾影拂，蹤多

圓山教院古昔皆屬延曆寺。中世紛亂別立宗門。昇平二百年竟化。成繁華行樂之域。都人每就其樓院。作行酒糾觴之遊者。晨夕不絕。住僧又貯妻孥。理酒肉。以譙客爲事業。香火經梵。蔑然如不曾知者。鴨曲。絲簧人競。魁故登山館。一場催飲。觀押尾名媛伎。須向關更後伴來。

鴨曲諸伎。每借東山諸樓館大肆歌舞。曰之歌會舞會。人爭聚觀焉。

山亞花梢。花亞山相躋。石陞不嫌艱。試者紫闕金城景。

鴨東四時雜詞

五

盡出香雲艷雪間。

長樂寺在圓山安養寺南。古亦屬延曆寺。開祖爲釋印誓。中興爲國阿彌。今纔有一佛堂。登上方處疊石。數十級都下。衆景皆具于一囑。○亞廣韻云。就也相依也。又都敬讀書通云。歷通作亞。杜甫詩云。花亞欲移竹。花亞亞枝紅。千朵萬朵亞枝低。包信詩云。多年亞石。松林逋詩云。粉竹亞梢。坐宿露。此類皆是。

西公陳跡足苔痕。行樂三春客。雁門滿院風。花香萬斛誰拈一瓣。吊清魂。

金玉山雙林寺在長樂寺南。又有教院與圓山同。古

昔僧西行住焉。其塔及所愛櫻樹猶存。○以上七首賦東山諸勝區。

一部揚彈錦。作裙追陪不厭涉。煙雲邀花延月無非便。錄事巷從山下分。

東山舞妓與六街樂部別種者。皆各住于葛原僧寺之前巷。諸酒樓每有遊客召之于其家。無有總司之監主。所以異六街之例也。○揚彈謂弄絃絲也。出教坊記。一老學庵筆記云。相藍之東有錄事巷。傳以爲朱梁時名妓崔小紅所居。又夢華錄云。寺東門大街即錄事巷妓館。

鴨東四時雜詞

六

謝安一去薜蘿閑。自分芳埃浣玉顏。學舞按歌尋故事。風流何敢出東山。

○假用謝安事。以下多此例。

香衫細馬競嬉春。門外林梢嫩草勻。笑揭青簾招不得。衆中奈箇意中人。

○白居易詩云。香衫細馬誰家郎。以上三首賦東山舞妓。

彩綺雕弧春興長。誰家小姐每開場。笑言柔手爭相及。狂失一籌輸客郎。

祇園葛原間有楊弓舖。近側女兒日出當其場。延客

勸射每乘矢收錢四孔不論貴賤蠅素相過弄之○
揚弓之制弓材用紫檀長二尺九寸二分離爲四靶
闊七分長三寸半彩絲綴之兩頭飾以銀或鍮銅上
下有孔含幹在靶上者以銀或鍮銅爲雌雄筍
相接長通一尺七寸七分在下者一長八寸淵上大
下小矢長九寸二分幹以木羽則白鷺朱鳥展風鵬
鵠其品亦不一象搭鐵尾平其尾而尾豐倍于搭的
徑三寸繫之之中央候道二十七弓射之者並坐定
輪贏進退亦有其儀

勝事近時誰者鞭花茶坊裡鬪嬋妍請看林下新風景

七

日暖金籠孔雀眠

近日有僂子於葛原西側開一大茶肆經營彈美屋
後園樹畜孔雀鸚鵡之類供客遊玩遞茶佐酒者莫
不絕色佳人一時翕然相傳稱孔雀茶屋○夢梁錄
云大街有三五家開茶肆樓上專安著妓女名曰花
茶坊
林間行竈細煙颺茶媼待人供短床另有青甌點香屑
一春花下解醒湯

東山諸祠刹之間往往有浮鋪撐竹柱懸蘆箔迎客
進茗飲者都謂之水茶店近側婦女當行竈而賣之

朝出夕去專接行樂人士以足營其生又祇園廟下
通衢有四五家鬻呼香煎者其製合研大唐米蕙苡
仁蜀椒之類作粉屑人喫湯時點少許於碗面奇芬
頗可喜所謂水茶店皆必進其香湯祇園香煎之名
所以藉于四方也○品字箋云物兩分曰另俗謂他
日異曰另日今按另音令非別字省文又與另字
異不可混用
傑閣南邊地小平菜花夾路夕陽明隔林也識多遊客
時聽隆隆調馬聲

祇園林莽中有調馬場所養奴每來待遊客借其鞍

八

馬地與華頂山閣相接○李賀詩云馬蹄隱隱聲隆
隆以上四首賦諸場舖之待遊客者

祇園香願六街人咫尺恒欽威福均將謂亦能憐曼聯
故爲今日白眉神

祇園廟本祀上古神聖素蓋烏尊中古浮屠氏與其
祭祀遂託言佛經以爲祀北天竺吉祥天國王牛頭
天皇燒季俗更訛稱午頭天王○瞿佑西湖竹枝詞
云南高峰頭有香願早買湖船出湧金宋玉招魂
云蛾眉曼睩謂容色曼澤也白眉神娼家所祭之
神出小說王翠翹傳

向夕下方化暖煙歌樓舞館想遊仙世間誰跨揚州鶴
這裡來拋十萬錢

○蘇軾詩云世間何有揚州鶴注云昔有客各言其
志或願爲揚州刺史或願貨財或願騎鶴上昇其一
人曰腰纏十萬貫騎鶴上揚州蓋第人之所欲也

以上二首賦祇園廟下通衢及六街諸樓之豪華
一刻千金真是真滿樓花影月如銀無爲兩兩難掬燭

照盡青樓綺席春

○春秋傳范武子曰無爲吾望爾也韓詩外傳云僕
夫則無爲死也猶飲食而遇毒按無爲猶無益古書

鴨東四時雜詞

九

聞有之王勃詩云無爲在歧路兒女淚沾巾亦同

東軒筆錄云宋子京晚年知成都府帶唐書于本任
刊修每宴罷盥漱畢開寢門垂簾懸二條燭膝委夾
侍和墨伸紙遠近觀者皆知尚書修唐書難古燭字

香袂當筵火色烘妃頭嬌態暖春風座間偶有東來客
指道京華一種紅

妃頭陪宴皆著紅綉綃蔽膝除京攝妓館外無有此

裝○李商隱詩云裙衩芙蓉小注釋名云婦人蔽膝

曰香袂又呂渭老詞云袂衣吟露品字選云妃頭

雙鬟之別名妃音杞

燭底先延三兩姬一盤綸布佐杯時輕抽蔥指情何急
結作合歡連理絲

諸樓偶然得客先問其所聘排燭進酒之初以細切
綸布爲下物蓋補填不能咄嗟辦有技之間隙而已

○綸布時珍曰按吳普本草綸布一名昆布則爾雅
所謂綸似綸東海有之者即昆布也綸音關青絲絞
也訛而爲昆布耳

院曲紛華想教坊詠師狎客趕歡場無端打座疎狂甚
痛飲先傾三大觥

鴨東四時雜詞

十

有兩箇肆挂其名籍客之召之無異娼妓但以不如

曼睩之寵故連日不售者亦不勘漫請諸樓懇客之
左右打座以前不虛其日○院曲煙華總稱也板橋
雜記云舊院人稱曲中又云曲中女即多親生之女

可以證也又品字箋以劇場中蒼頭爲院子輟耕錄
謂院本雜劇其實一也之類皆稱演劇家爲院今日

幫間之屬兩肆者雖非同等而扮戲舞曲專做劇家
諸伶之風樣居處亦不相遠所以有此語也南史

陳后主紀云江總孔範等十人預宴題曰狎客瑯
邪代醉編云宋時京師歌者不招而前謂之打座

鬪酒，奴奴甲當乙，豁拳參差趁聲出料，知躡鵲衡，我來急飲五峰，欲呼一。

諸樓宴飲之間，嬉戲不一，最多作豁指頭。○六研齋筆記云：俗飲以手指屈伸相博，謂之豁拳，又名豁指頭，蓋以目遙覘人為已，伸縮之數隱機，翻捷余甚厭之，以其俗，遂坐，吮號之漸也。然唐皇甫松手勢酒令五指皆有名：大指名躡鵲，食指名鉤戟，中指名玉柱，無名指名潛虬，小指名奇兵，其掌名虎膚，指節名私根，呼五指名五峰，則當時已有此戲。又丹鉛錄云：五代史弘肇與蘇逢吉飲酒，酒令作手勢，按唐人酒令曰云云，謂之招手令，其亦手勢之類歟。又板橋雜記云：豁拳各盡三四斗，而別可見古來宴席間多作此戲。

京洛少年多易狂，平生賣錦識紅粧，癡心誤被春雲引，好夢樓前未夕陽。

都下商家子弟，其主不許暮夜出門，所以覓歡買笑，皆在晝間。

戶幌風柔燕尾開，懷春吉士為誰來，笑延亭子先相問，可進鴛衾進玉盃。

鴨東煙華之定制，其間置幾箇大肆，統司家家之諸

鴨東四時雜詞

十一

娼妓，娼妓有親生之女，有外來典身于其家者，共懸

名籍于各大肆，稱為某肆某，客過遊諸樓，則主人請其所命，俾娼奴召之，各肆肆奴即趨報，而催粧求，遂勢送之，其樓詢遣席之早晚而去，或半晌多時，或全日竟夕，隨樓主所斟酌之定限，再來而促其歸，客留之，則仍前既遣之，則辭去而就他樓之所，請往來周旋，不一而足矣。而肆頭有一監奴，臨簿點檢，以香炷為刻限，每出娼妓一枚，挿炷盤香一條，飲酌枕席間奉承客意，能延晷刻者，續至數十條，席已散而諸姬歸其家者，即止移轉赴別樓之招者，奴趨歸告之，肆

鴨東四時雜詞

十二

監，又新炷香一條，大畧自午屆酉，自酉屆子之間，各定為香炷十二條，子後午前又有別限，是以名娃仙媛聲價踴一時者，至一月炷香千條，盛之極矣。而每月晦肆監募諸樓聘招之資，各分而輸送養娼妓之家，征利苛嚴，皆以炷香若干條算之，一炷原價銀一錢，客之所辦二錢餘，雖客不辦之而樓主不得不給之，若愆其期限，清算未全者，肆監不容爾後之聘招，客必先其期而措辦之而已。○杜甫詩云：可愛深紅，愛淺紅，又陸遊詩云：可愛南枝，愛北枝，以上七首賦諸樓燕席及遊客之清致。

輕拂羅裙，髻展忙朝雲暮雨去，無方不知多少巫山夢，殊使誰人比楚襄。

娼妓常著漆黑短齒，扇面或脩方，或椀圓，以五色天鵲絨為繩繫。

絃寂歌終，蠟炬微，隔簾嬉笑尚依依，纖蛾慢臉應相媚，不使泊然飄客歸。

○岑參詩云：慢臉嬌蛾纖又濃。類書纂要云：飄客言輕身于花柳之中，如物之飄流而無定也。

曲屏方枕，夜三更宴散，無端獨見迎，被底鴛鴦非有舊，同床各夢奈天明。

鳴東四時雜詞

十三

娼婦接客，如有所厭忌，則絕不作人情。○天寶遺事云：五月五日，明皇避暑，遊興慶池，與妃子晝寢於水殿中，宮嬪凭欄倚檻，爭看雌雄二鵝，鵝戲於水中，帝時擁貴妃於絹帳內，謂宮嬪曰：爾等愛水中鵝，鵝爭如我被底鴛鴦。

神娥日夜歷家，但縹渺妙姿，常有無督促空，煩海山使倦待，僊郎夢竟孤。

娼妓既在他樓，舊所相熟之客，強欲招之，怨其肆奴，竊寄書以待其辭，他樓奴雖允諾，通密意其來與不來，在娼妓之見時宜，如不喜相遇，則使奴以不得其

音容辭之益，謂自他樓更遊遠處也，或有其席定不可逃，稱將來見而不能來者。○歷家暗用蘇訓事，所以比神娥也。陶侃嘗得奴，不喜言，常默坐，侃一日出郊外，奴執鞭隨胡僧見，而驚禮，云：此海山使者也。侃異之，至夜失所在。

洞天縱小，聘瑤姬自有高燈，照八維，背影整衣，將伴睡，仙梯登已引希夷。

樓館最賤小狹隘者，入門則有廚竈，其甚者一室一廚，樓榜在其間，客多不須絃歌盃酒，只買枕席之歡，而已。凡諸樓館，廚中皆懸八方燈，其形垂繩于梁間。

鳴東四時雜詞

十四

繫小燈架，以八角絨罩如笠者，蓋之光輝射下，無所不及。俗謂之八方或八間。○陳搏字圖南，居華山，雲臺觀，每閉門獨臥，或旬旬不起，人或稱睡仙，宋太宗賜號希夷先生。

曉樓未足海棠，睡已是從奴催歸，至唯操彩約，供雪纖不學扶醉高力士。

娼妓之從奴送來邀去，事頗匆匆，縱立客前，非有故相認，則不致一語，固有所憚。○太真外傳云：明皇沈香亭召妃子時，卯酒未醒，鬢亂釵橫，上曰：真海棠花睡未足爾。從奴出于北魏，爾朱文略傳。約字景

云求於切音渠履頭繩履飾也吳澄詩云落花香撲青絲絢又楊萬里詩云萱草行間過履絢唐書李白傳云白嘗侍帝醉使高力士脫靴力士素貴耻之

以上六首賦娼婦接客之事狀

象撥梨槽川字絲輕挑低擺故遲遲上都無復王之渙憾使嬌喉仍舊詞

大抵酒妓上筵抱絃之初相詢而唱舊曲一二解

都下游冶徒最貴酒妓鴨東家家女兒纔有姿色則教之以三絃并歌舞趕座伏飲飽射其利擇富豪欲結情者而暱之其初常價之外另收定情聘金若干

鴨東四時雜詞

十五

兩奸黠最甚者至各樓同時帶十數箇情客客如要購取終身則其家莫論親生與養主非得幾百金不允妓亦自恃姿色不以青春歸良爲榮落籍僅半年或期年搆出其主生厭心之計放遣如意再趁煙華者曲中相尊爲有伎倆所以有名色藝皆屢出入狹邪竟能積多財然及姿色既衰門戶客少而不免爲失歸之妖物艱苦種種受惡報者亦復不鮮其他或嫁博徒惡漢或溺梨園少伶朝奔夕匿狂蕩誤身之類固不可枚舉焉畢竟酒妓雖徇不鬻情之舊例其實無與娼婦異只以歌揚佐酒情態灑落最可愛玩

鴨東四時雜詞

十六

故人每不關招聘其勢自出娼婦之右粧束之美亦難相比列錦繡綺羅玳瑁珊瑚之類相競逐時樣一件動直百金可謂甚矣此皆雖因昇平安逸之習而奢侈殆歎妃嬪豈可不歎哉○象撥梨槽川字絲謂三絃其製詳于下攏集韻云魯孔切擊上聲持也掠也白居易詩云輕擺慢撚抹復挑唐開元中王昌齡高適王之渙齊名時風塵未偶而游處略同一日天寒微雪三詩人共詣旗亭貰酒小飲忽有梨園伶官十數人登樓會讌三詩人因避席隈擁映爐火以觀焉俄有妙妓四輩尋續而至奢華艷曳都冶頗極旋則奏樂皆當時之名部也昌齡等私相約曰我輩各擅詩名每不自定其甲乙今者可以密觀諸伶所謳若詩入歌詞之多者則爲優矣俄而一伶拊節而唱乃曰寒雨連江夜入吳平明送客楚山孤洛陽親友如相問一片冰心在玉壺昌齡則引手畫壁曰一絕句尋又一伶謳之曰開篋淚沾臆見君前日書夜臺何寂寞猶是子雲居適則引手畫壁曰一絕句尋又一伶謳曰奉帚平明金殿開強將團扇共徘徊玉顏不及寒鴉色猶帶昭陽日影來昌齡則又引手畫壁曰二絕句之渙自以爲詩名已久因謂諸人曰

此輩皆潦倒樂官所唱皆已人下但之詞耳豈陽春白雪之曲俗物敢近哉因指諸妓之中最佳者曰侍此子所唱如非我詩吾即終身不敢與子爭衡矣脫是吾詩子等當須列拜牀下奉吾為師因歡笑而佚之須臾次至雙鬟發聲則曰黃河遠上白雲間一片孤城萬仞山羌笛何須怨楊柳春風不度玉門關之渙郎擲揄二子曰田舍奴我豈妄哉因大諧笑諸伶不喻其故皆起請曰不知諸郎君何此歡噱昌齡等因語其事諸伶競拜曰俗眼不知神仙乞降清重俯就筵席三子從之飲醉竟日事出集異記

鴨東四時雜詞

十七

銀釵玳筍影縱橫自是風流金盛名人道山東萬金客欲沽一笑未曾成

媿他雲雨送浮生流水落花非我情請看一張渾不似去來齋得自分明

酒妓最恥與娼婦相齒其所自託專在三絃之一器每以為口實○三絃之製以花梨鐵刀木紫檀楠樟之類為槽方六寸許兩面張以貓皮柄長二尺許其首所繫絃四寸許合三尺強或離為三段臨用而接之收時折之可納尺許方匣包以彩袂提携頗便曲中無不如此者棲肆往復之間肆奴挈之從其後人

見其有匣絃即知為酒妓矣渾不似三絃之古名席上腐談云王昭君琵琶壞使胡重造而其形小昭君笑曰渾不似今訛為胡撥四胡不思三絃之名始千元時即渾不似之遺製也

儘帶春風非太輕養嬌偏抱愛花情夜深繡匣收絃子觸枕金釵獨有聲

擇耦之酒妓如有中意之客則竊許仇儷多在子夜之後事頗不容易所以異娼婦也院曲舊稱以客賞優伎之物料為花蓋避謂錢物漢土所謂纏頭也其習混娼妓之常價又呼做花有賣花若干枝之目

鴨東四時雜詞

十八

凡娼妓應客招出門則肆監炷香一條次第相續因亦稱賣線香若干條曲中吉利總在花一字第二句暗指之○儘與縱任等字義同李攀龍詩云儘道強場懸節鉞猶能書札滿漁樵

一擲千金須盡情絃歌何必惜娉婷為知潛伴諸郎宿水性念奴尤得名

上注所謂同時各棲帶幾箇情客者名亦噪一時○娉婷美好貌杜甫詩云不嫁惜娉婷念奴唐天寶中名妓白居易詩云力士傳呼覓念奴念奴潛伴諸郎宿

酣飲何知。迫曉天粉香脂膩和衾眠。遊郎畢竟慢花蝶。拈得芳心非偶然。

俊俏少年多不聘娼婦。喜與諸酒妓飲。其欲結情者。煩樓主及女奴輩之媒舌。是常格也。必另出定情金。若干更預辦五日或十日之常價。又有自恃風流。不假媒妁。欲相得而結情者。多託言微明之飲。深夜與諸妓同被而眠。曲中稱之為雜卧。其妓所喜者。竊狎而不使他妓知。不相喜者。雖親擁之。決不許情事。或有再三而可之。或有引年時而猶未可。雜卧一夕。即竊得伉儷者。風流遊冶之所最諺耳。

鴨東四時雜詞

九

雛罷黃昏歡未來。偷閒暫佐別筵杯。囑人預謝相辭。送前約在他時有催。

客已為前約。本日未來之間。其妓赴他樓。則肆奴從送之初。具其由于樓主。前客不來則止。已來則肆奴促歸。妓乃相辭而去。了娼婦亦然。客不得留之。○郭茂倩樂府云。江南人謂情人為歡。

呼成姊妹不同家。上座全然並蒂花。笑道揶揄非昨樣。知教誰手縮顏顰。

雛妓懸名籍。于其肆之始。各就先輩有聲價者。請其指揮。相結為姊妹。娼婦亦然。大抵妓女之習費心。

彈意以雛梳為務。遊客招飲之間。苟非風流俊俏中。其意者。則侮慢不顧。與女伴嬉笑。啞啞相詰。并紋梳刷之可否而已。○王廷相詩云。旋綰顰顰。綠唇樓深夜靜。大絃鳴裂帛。走珠多少。聲劇部羞君。能顧曲嬌紅上面。不勝情。

酒妓一種專奏大絃子者。應好劇部詞曲之客。其風采不同。他妓以淡粧取介。為本色。蓋其初妓家。以非十分姿色。另教成劇部曲。挾其伎。以趕宴席者也。○三絃有兩種。常制者。度新舊歌詠。絃撥槽柄。差豐大者。為唱院本戲文之絃。音又重濁。吳書周瑜傳云。

鴨東四時雜詞

二十

瑜少精意於音樂。雖三爵之後。其有闕誤。瑜必知之。知之必顧。故時人謠曰。曲有誤。周郎顧。垂髫雛妓。已嬌雛慧舌。又能讀調腔。更結鄰家第三妹。樽前軟舞自成雙。

曲中逐利之急。有雛妓僅八九歲。而既侍歡宴者。皆能歌舞。其價半尋常酒妓。或結同輩。並前而進軟舞。以兩人當一人。故相喚作兩箇一兒。玉纖拍鼓。遞紛紛。妍月兩團圓。袖分新曲清。曉自關左。翻來亦過鴨千雲。

近來東都名部伎人多。來都下鴨千之妓。雖亦學其

風能追兩鼓節歌之曲其狀左手把一小鼓架右肩
上更以一鼓較大者挾左脇下肱頭與膝相撲不教
顛脫右手掌頓頰連拍而節歌謂之二打鼓廿年前
都下未聞有此伎今者盛行人爭召之風俗之奇
可以見矣○據言云張祐客淮南華中赴宴杜牧同
坐有所屬索骰子賭酒微吟曰骰子遠巡最手拈無
因得見玉纖纖祐曰但知報道金釵落琴瑟還應露
指尖元稹詩云微聲曉絕何清峭博物志云薛
譚學歌于秦青自謂盡之矣薛去秦錢於郊撫節悲
歌聲振林木響遏行雲譚乃謝終身不敢言歸以

鴨東四時雜詞

廿二

上十一首專賦酒妓之情狀

小娃一昨換童裝舞袖輕盈已不長況添瓠犀媚初足
千金春色上脣香

娼妓二八前後皆服長袂垂地之衣及添齒更粧而
不復服之更粧之慶其儀頗盛情容為之損貲措辦
焉○一昨猶謂昨日王逸少帖云一昨得安西六日
書又杜甫詩云一昨陪錫杖

碧玉分瓜最嫩芳上頭狂伴白頭郎警詩有例君知不
一朵梨花壓海棠

娼妓初薦寢席皆必擇老實過壯強者而屬之○分

爪與破爪同或云爪字年益將爪縱橫破之成二八
字作十六歲解也段成式詩云猶憐最小分爪日李
群玉詩云碧玉初分爪字年此其證矣輟耕錄云今
世女子之笄曰上頭而倡家處女初獲薦寢於人亦
曰上頭花藥夫人宮詞云年初十五最風流新賜雲
鬟使上頭又板橋雜記云初破爪者謂之梳攏已成
人者謂之上頭又隨園詩話引南史孝義傳華寶之
事云是上頭者男子之事今專稱女子心頗疑之讀
晉樂府云窈窕上頭歡那得及破爪則主女說亦可
堅瓠集云浙中有年六十三娶十六歲女為繼室

鴨東四時雜詞

廿二

者人嘲之曰二八佳人七九郎婚姻何故不相當紅
綃帳裏求歡處一朵梨花壓海棠

添成香飯似桃花方盒盛來饋幾家青春落籍多名部
遍謝舊情辭狹邪

娼妓遂情願從良善終者賒去而其家炊赤豆硬飯
遍贈曲中親故以張慶儀或副摺扇中帕等以所賑
最厚為榮其他女兒有添齒更裝入籍上頭等喜事
則亦皆相贈以赤豆硬飯此舊例也○杜甫詩云軟
炊香飯綠老翁

薄命可憐張少娘老將歌舞倚新粧啾飣亦醉渠應媿

還使五奴常守房

大抵娼妓之所相喜，多是輕薄無賴之徒。雖已為私耦，而窮窶不自勝，猶為之鬻色藝者，或年墜四十未得落籍，亦可恨矣。○教坊記云：蘇五奴妻張少娘，善歌舞，亦姿色有邀近者。五奴輒隨之前，人欲其速醉，多歡之酒。五奴曰：但多與我錢，雖喫鎚子亦醉，不煩酒。今呼鬻妻者為五奴，自蘇始。鎚字書云：都回切音堆，餌也。通作鉗，鉗鉗。

身填情海，任翻波縱，得脫離，無幾何昨日投簪，今再買鬻雲養，綠未鬻鬻。

陽東四時雜詞

世三

娼妓身上，勞碌種種不一，或失佳耦，于青春或厭舊匹，乎末路百折千磨，到難別成尼，然而習氣難除，數月期年之後再出，而售倚門之媚，以養髮猶短，戴水碧紗帽，為扶色之尼姑，汙穢固無論，但於其身有所不得已故耳。○山海經云：發鳩之山有鳥名精衛，炎帝女溺于東海，精衛常取西山木石以填海，錦妹繡妾自良家名紙傳言落狹邪多是車臺再栽柳青春定不嫩枝花。

娼妓之懸名于各肆也，其初肆奴為之持名紙，遍街家至而投之，請觀客而一近焉。凡娼婦有三品，稱二

陽東四時雜詞

世三

八前後未染齒，猶著修枝者，為新品。四五前後春色十分者，為中品。自五五五六前後淡粧削眉如已嫁人者，為本品。是以娼婦名紙，首大書其品，名字之旁加肆名。如有常家婦女，經世路艱難，誤墮狹邪者，則其名紙雖不顯，戴原家姓而亦併記出于良家婦女婢妾或孀尼之數字。又有舊生長娼家，飽讀風情，一旦被人贖出，輕蕩猶未定，無幾而解之，再倚花柳者，以青春稍過，再賣可耻，故改名更格，佯說根脚，稱近來始出于良家，客或據其名紙召接，則彼自不得不露風流老嫗之故態，蕩于遊漢之受欺侮，大抵此類矣。而酒妓名紙，則首書藝兒二字，本名旁加肆名，年紀固莫論，三絃外扶他伎胡琴，二打鼓輩者，亦必副記之。○釋貫休詩云：錦妹繡妾何紛紛，欲取端端為愛名，怪渠驚座亦能行，崔涯嘲薛某，難免鼻似煙窻耳似鐙。

娼妓或乏姿色而叨同花名，于一時絕艷者，容器聘之，莫不果然失望，定可一笑。○唐崔涯有詩名，每題詩倡肆，聲價為之增減。嘗嘲妓李端端曰：黃昏不語，不知行，鼻似煙窻耳似鐙，獨把象牙梳，掠髮崑崙山。上月初明，端端得詩，憂之，乃拜涯于道左，求之涯復

贈詩曰：覓得黃驢鞍，繡鞍善和坊裏取。端端揚州近，日渾成差一朶能行。白牡丹，于是豪富之士復臻其門。或戲之曰：李娘子纔出墨池，便登雪嶺，紅樓以為笑樂。漢陳遵字孟公，三為二千石，哀帝朝封嘉威侯。時列侯有與遵同姓字者，每至人門，坐中震動，既至而非因號其人曰陳驛座。

春風簾外賣花聲，惱損佳人睡。起情急袖金錢，却停佇，殘粧不奈出門行。

○奈猶堪，楊孟載詩云：晚來一陣東風雨，吹得梨花不奈看。

鴨東四時雜詞

廿五

容纈紅綃，壓翠鬟，霏霏沈麝欲薰顏。粧成裙帶猶慵換，姑步前汀春草間。

凡娼妓纏鬟髻，以彩纈繒半幅，或攢金錢一瓣，其他新裁奇飾，趕時屢變，不可悉述焉。○通鑑德宗紀：胡三省注云：繒，繒以線結之而染色，既染則解其結處，皆元色。餘則入染色矣。其色斑斕，謂之纈。

不妨往往試鈿脂，粧袋結將一瓣絲。寶隆應爭入時樣，細腰皆佩玉孩兒。

○鈿脂，出于梁簡文帝筆賦：寶隆懸鏤也。玉孩兒，出于五雜俎。

粉黛易消，紅易殘，每懷照子座間看。一揮眉掠含輕潤，彷彿芙蓉露未乾。

娼妓常勢，粧具一依酒席間侍客，猶屢理脂粉，公然不知羞避，曲中之賤習也。時俗所用眉掠，非畫眉之具，只依古稱而已。其製兔毛竹管，蒙茸如水墨筆，婦女施粉後，輕蘸水，掠掃滿面，其粉自瑩滑，不使粘滯為斑。其管長一寸許，圍二寸許，而勢齊在，故寒者皆用銀管，小大隨便。其他有脂盒脂筆，併謂之三具。皆純銀製之，雕鏤極美。○本草古鏡釋名：有照子，又聖惠方有銅照子。眉掠，抵子也。本草五倍子，條下

鴨東四時雜詞

廿六

烏鬚方云：以眉掠刷於鬚髮上。

蘭湯浴罷，午檐風當面，春山抹翠濃。眉黛低愁，被渠妬嵐光來在鏡光中。

諸樓在六街東邊者，不與山相遠。六街中有四箇混堂，娼妓日就而浴之。大館巨肆，置浴場者，非其例。南社燒香，趁晚烏紫，藤花上露方濡，拜歸小院，猶垂箔阿妹貪眠，不受呼。

祇園西南有金昆羅祠，娼妓多奉香火，以晝夕無暇故，發起而詣拜焉。祠頭有紫藤一架，花時頗美。

瑞龍新樹綠初肥，好伴情人踏落暉。衆醉猶尋林下路，

流螢故拂^ニ
茜裙^ヲ飛

瑞龍山南禪寺在華頂山北寺前酒店亦有聲價遊
客每勢娼妓嬉娛于其間。

一雙螭扇摺霜濃情意殷勤付此中盛夏何添班女淚
為君長寄合歡風

大暑大寒兩節諸樓主及妓婦輩貽舊願佳客以摺
團華扇及茶糕諸品問起居乞養願之意也○班婕
妤怨歌行云新製齊紈素皎潔如霜雪裁成合歡扇
團團似明月以上十五首賦娼妓身上榮枯進退
及雜事

鳴東四時辭

廿六

畫幕猩纈客塵攔，千家社會極娛歡。玲炎繁瑋无應異，今日渾成富貴看。

都下神會之盛莫祇國會。若焉六月七日迎神十四日送神儀衛最繁盛。先期四條坊及左右巷上設山棚山車陸船弄撒鼓吹喧闐。動毛旒。遍街燈燭。煌煌如晝。戶戶金屏猩纓軸簾。褰幕張飲盡。驩會日神輿及棚車過門之家。賓客蟻會。鱗革士女填街溢巷。袂雲汗雨不啻。○祇園廟下通衢即四條坊分鴨水東西異其名耳。神會之盛觀一道相接殆無分界。所以有此詩也。如山棚山車等皆在四條坊。非鴨東諸

街之所干焉。

更番扮戲。喚呼頻。品得妙年殊色。人後隊旋隨。前隊去。
幾雙團扇拂炎塵。

祇園神會。本日前後熱鬧亦甚矣。五月晦。及六月十八日。在鴨河四條橋東洗淨神輿。謂之御輿洗。是日也。鴨東茶坊娼戶。結夥贖錢。飲翠衣香演雜劇戲文故事。其人物則扮娼妓為淨旦諸裝。又纏結為棚押其首尾。樂則有三絃胡琴提鼓鉦鼓細腰鼓。每隊珠翠錦綺香紈白紵豔裝濃抹。觀者每噴噴。要不過勾引無賴子弟為奇貨耳。○扮正字通云。通惠切。班去。

鴨東四時雜詠

其

聲。今俗以裝飾為打扮。演劇者飾其面。謂之扮戲。
 品字還云妙精微也。又小年也。杜甫詩云。明公獨妙
 年。輟耕錄云。昇一珠色小鬟。至前。

越羅襪積銀麟蹙シ錦團窠紫鳳翔排束戲衣嬌困甚
香肌汗滴玉生煙ス

○杜甫麗人行。云。繡衣羅裳照暮春。盛金麒麟銀孔雀。陸游詩。云。閒將西蜀團窠錦。自背南唐落墨花。圓大。高燈一丈強。神輿行處燦飛光。兩宵汎洗人何闕。却起紅塵滿鴈塘。

御輿洗兩夕。都人各結籠燈，于竹竿頭，擎持而詣社。

下謂之獻燈某街一夥例獻圓大籠燈長一丈許最
輝耀矣

納涼時節併迎神赴宴名姬馳涉頻情急輕鞋何厭賤
煙華聲價貴於春

御輿洗之前後娼妓以歡譙侍客無虛日為其榮本
月前每對諸樓客約某日某夜預請侍宴席最甚者
到本日踐數十客之約帶奴奔走迎歷其忙不可言
所以皆踏輕草屨不用平生之彩約漆履樓客惜其
例不以速去為意○以上五首賦祗園社會及前後
熱鬧

鴨東四時雜詞

廿九

豪華萬種付潺湲即是我都銷夏灣恰恰連宵無一雨
綺執絡繹不知還

鴨水納涼之夜遊自六月七日至十四日為最盛矣
相繼至晦日夜夜四條橋南北涼棚茶店鱗次櫛比
兩岸一帶皆妓館分茶酒舖羹店雜錯其間小脚店
則有泥鰱團魚之羹紅鬚青鱗之鮓諸色海味諸色
素食下酒下飯零碎作料不托水引河洛合羹胡餅
餃子牢九包子糖糕糰子諸色糖果西瓜甜瓜林檎
杏桃楊梅諸色水果琉璃店則魚餅葫蘆鼓鑄鐵馬
燈碗各色盞碟雜貨則煙管煙袋各色摺扇團篋梳

篦髮朵釵朵香囊彩勝水上浮紙畫兒遠視畫凡兒
戲之物泥孩陶犬階千千額叫子之類名件甚夥不
可畢數伎藝則走索戴竿吞刀弄丸藏撇舢斗傀儡
角觥口伎影伎獼猴貓鼠之戲演史學鄉談說評話
種種無所不有竟夜火炬燭天絃歌鼓吹嘈嘈鼎沸
雕笑海湧遊者不覺達旦○范石湖集注云銷夏灣
吳王避暑處平湖脩山一灣雲水勝絕楊萬里上
元詩云恰恰連宵雨脚垂天風為我掃除之
一簇涼燈映碧山最看東岸百弓間任他蓮步弄清淺
結棚不容人往還

鴨東四時雜詞

三十

東岸諸樓前一路自板橋至石橋之間每歲六月結
竹棚于南北兩邊不使行人涉過各樓故設低棚于
門路及水上又各架略約一條遊客送迎專自河心
且樓後各有小弄通繩手街所以便出入也
短約歌棚觀碧流香圍色陣早涼浮夜絃有禁宮商少
月露徒為膝上秋

樓之在隄岸者夏月別構涼棚供客之夜游而此間
有私禁不許鳴絃子容坐妓圍轟飲酣歌而已若夫
門內樓中平日所延客之處不拘此禁○薛能詩
十指宮商膝上秋七條絃動雨修修

曲曲清波月近牀。紅羅白苧坐吹香。冰肌寧怕人間熱。
只為風流趁夜涼。

窈窕欒梁攢玉葉。俠豪佩具繁銀繩。陡爾相過覺些熱。
轉身一喚有衣襟。

涼遊喜弄響胡蘆。夜夜過橋私自沽。水管只須加玉拍。
臙脂口氣不勝麝。

女兒弄鼓。瑞之狀。指拍掉。其細管。豎橫錯合。雙掌。密
握中自使。含氣隨。緩緊之勢。以鳴之。如口銜之。吸嚥
成聲。差過強。則其底破裂。○日下舊聞引。倚晴閣雜

鈔云。琉璃廠原為燒廠。瓦之用。凡有黃碧二種。瓦之

鴨東四時雜詞

三十一

外所製曰魚瓶。曰琉璃片。曰胡蘆。曰響胡蘆。小兒口
銜。吸蘆成聲。俗名倒拔氣。顏山堂雜記云。為鼓。瑞先
得胡蘆。旋燒其底。而凹流之。以均其薄。欲平而不平。
使微抗焉。以隨氣之動。乃得鳴。鼓。瑞響胡蘆也。事

物紀原云。臙脂草出西方。葉似薊花。似土人以漆
粉。為婦人面色。故名臙脂。後人效之。以紅花。漆粉。為
之。非彼草漆者也。秦宮中悉紅粧。當是其物自秦始
也。

轟鼓繁絃微。五更戲臺擗比駐。人行相送。只道搜涼土。
滿耳何知有水聲。

納涼之時。河身洲。皆賤伎。構棚臺。爭獻百戲。其他龍
珍禽。摺怪獸。奇機異工之諸件。以延看人者甚多。

弄珠術。俠般般巧。踏索吞刀。一一奇。看客投錢。空噴噴
不憐艱險。不真欺。

○弄珠。戲事也。大藏一覽。宗鏡錄云。又如弄珠鈴者。
不任空中。不落地上。不在手裏。不在三處。亦不住一
處。又文獻通考有弄腕珠伎。文獻通考又云。漢世
卷草席。以矛。挿其中。伎兒以身投從。其中過之。張衡
所謂燕濯胸突。鋒鋌也。後世攢劍。為門伎者。裸體擲
度。往復不傷。亦衝挾之變歟。又云。短戲。或曰戲繩。

鴨東四時雜詞

三十二

今謂踏索。法苑珠林。北京錄云。玄始十四年七月。
西域貢吞刀嚼火。秘幻奇戲。

酣暢。龍記。未。挽。擊。鮮。烹。膩。遺。餘。豪。咄。嗟。辨。得。咄。嗟。喫。
水店。……快刀。

鴨片東西別。有數箇水店。各構菜棚。養鯽。鯉。鰻。鯪。之
類。待客來。飲。而斫其鮮。新膾炙羹。臙莫不極旨美。湯
客技。團餘興。相。就。馬。庖。丁。調。饌。之。妙。為。郡。下。第。一。
○蜀志云。賓有餘豪。可以至。醉。餘豪。備言。餘。劉。子
暉。詩云。村沽得微醉。猶足張餘豪。咄嗟。字彙云。易
度也。猶言。呼吸之間。世說云。石崇作豆粥。咄嗟而辦。

盤金鱗一盃清羹進嫩蓴，倘使張翰知此味。
秋風甘作異鄉人。

夏秋之交，人最遊水店，所饌莫非時新。○張翰字季鷹，翰為羽翰之義，嘗從平聲。然杜甫詩云：扁舟不獨如張翰，皂帽應兼以管寧。劉須溪評翰不音平，據之其他唐宋詩又皆從去聲。明楊基詩云：黃金何用鑄范蠡，紫萼本自足張翰。此獨作平聲，今從之。

驟雨夜來過大塘，沸騰人散納涼場。今朝試倚紅樓看新水上橋，三尺強。

鴨岸東西相距百弓許，平常細流橫斜劃沙磧。兩板橋中斷之處最平豁，納涼諸棚及酒舖戲堂瓜菜餅餌百遊玩之浮鋪皆張燈于其南北，光焰競空喧闐微明，盛觀不知可比焉。然夏秋之間多驟雨，急潦衝洲，則萬人爭避，收棚撤床鼎沸不啻一瞬之間，許多繁華倏變為冥漠之域。明日橋塌水高，雖對岸可相呼者而往復迂路于第三第五大橋而已。○以上十一首賦納涼夜遊之光景。

新瓜上市入清秋，剩暑殢人猶未收。盤中剖得蒼龍卵，幾片紅冰凝不流。

半彎新月小樓涼，稻籠鳴秋紡線娘。情約已成星夕近，

願絲挂得待兒郎。

今日良辰，娼妓必預請樓客約其歡宴。客一許之，阻事不得來游者亦猶償本日之定價。雖平日而前約者皆然。○袁宏道促織志云：一種似蜘蛛而身大，京師人謂之貼貼兒，亦捕養。南人謂之紡線娘，稻籠懸之，餌以瓜之穰。

酸漿秋熟，軟珠勻撚去，撚來看作皺，欲和紅衣別瓢子，嬌痴屢祝恥傍人。

女兒總愛酸漿實，口咒手撚候其軟，撚去瓢置之舌上，吸吮成聲。○酸漿草一名紅姑娘，見元徐一夔故

鴨東四時雜詞

五

官記。又有燈籠兒，挂金籠絳囊，諸名時珍云：按楊慎危言云：本草燈籠草，苦耽酸漿，皆一物也。修本草者非一時一人，故重複耳。燕京野菜名紅姑娘，外垂絳囊，囊中含赤子如珠，酸甘可食，盈盈遠砌與翠草同芳，亦自可愛。蓋姑壤乃瓜囊之訛，古者瓜姑同音，壤囊之音亦相近耳。此說得之。皺字書云：七人切音親，皮細起也。又云瓢瓜中，屢也。

別連樓子起涼臺，露坐終宵飛玉杯。只怕擔牙觸雲鬢，手速銀鈿上筵來。

六街諸樓與鴨水相遠者不便納涼，因更於樓外

起板棚一兩弓。供客夜飲。

士女蘭盆送鬼時相携。薄夜傍前涯。且觀如意峰頭火。大字劃雲收焰邊。

七月既望。都人士女來河上。送于蘭盆會之鬼。僧徒又各設水陸道場。此夜東北如意峰。村人舉火。峯面舊有坑穴。其數四百八十餘。相去各五尺許。縱橫連成。大字樣。每畫長百五十間。本日前山下。村夫積柴其坑。至期而點火。光焰赫烈。映帶翠微。相傳云。昔相國寺僧景三。以其筆意作之。蓋亦為招冥者也。

白川斜入鴨川。流夜雨殘燈南北樓。多少情人歸不得。

鴨東四時雜詞

三

翠巔紅夢枕邊秋。

白川經新橋。到大和橋之間。兩岸亦有一橋。橋壁欄格屬諸樓後面。

一曲清歌一曲秋。秋勝脂坡上水雲愁。最憐橋北兩株柳。漸卸驚黃露半樓。

大和橋北側第一樓。舊種柳二株。鉅鉅低水。

樓燈無影水聲繞。一片殘燈照寂寥。少女十三能慣客。不辭風露送過橋。

○以上八首。賦鴨曲秋景及雜事。

玉露金風情正濃。亦將清景惹遊蹤。青腰為織楓。錦

秋美東南四五峰。

○青腰青女也。王士熙詩云。青腰霜下蟾房冷。紺苑菲山苔磴幽。胡枝花折屬風流。糟情肉思寧嫌開。不爾尋常冷淡秋。

舊志云。高臺寺在雙林寺南。文慶年間。豐太閤正妃創建此寺。佛堂前多胡枝花。每秋遊人詣觀焉。○胡枝花俗名荻花。救荒本草云。胡枝花俗亦名。隨軍茶生。平澤中有二種。葉形有大小。大葉者類黑豆葉。小葉者莖類著草。葉似首蓿葉而長大。花色有紫白。結子如栗粒。

鴨東四時雜詞

三

鶯嶺秋寒結夕霏。登高勝事近來稀。唯懸一片藤蘿月。長照禪樓卧佛衣。

靈鷲山正法寺。通稱靈山。在高臺寺之南。舊屬天台宗。中世國阿彌住焉。為一遍上人之宗派。事跡同同山堂有卧佛一像。

繁柯中斷葛原西。林店深深相對齊。破卯醉人來最早。露猿猶傍葦簾啼。

祇園廟南兩箇飯酒店。舊有名。俗呼二軒茶屋。鴨東諸樓酣詠。暇明之客多娼妓投此店。喫卯酒。又店後林莽。最清亮。異他處。○黃庭堅詩云。破卯扶

頭把一盃又鮮于樞游高亭山記云時已破午

纖手鳴刀各慣忙店頭放乳照紅裳輕輕弗得按按整
三人泥爐炙雪香

兩店同賣豆腐弗女奴各著話布故膠有邀客連杯

盤者有當几所豆腐或炙之者割切方正手逐刀移

几板隨鳴如有擊節咄嗟辨出之捷皆成于女手而

店以之得名○類書纂要云淮南王名安始磨豆為

乳脂名之曰豆腐品字箋云俗以麻豆之經磨者名

腐敗爛之義事物異名云豆腐一名豆乳又名淮南

佳品表異錄亦名菽乳錦字箋云晉人以其名不雅

鴨東四時雜詞

三七

改曰菽乳類書纂要又有豆炙蓋今豆腐弗耳以

上五首賦秋景再及東山葛原之際

名院相鄰萬竹青笙歌每湧落禪局誰知夜夜真如月

竊妬鶯鶯上繡屏

祇園街南側諸樓後面與建仁寺相接寺內多竹叢

焉建仁年間榮西禪師創建本寺因有此名今為都

下五禪刹之一

霜老東山凍霧橫寒鐘半夜暗飛聲北風不管金閨淚

吹落者中催別情

建仁寺子夜撞梵鐘一百八聲振于鴨東諸街之間

大抵樓客夜游以聞此為限有已歸者有猶宿者皆
任其所決此本煩惱滅除之梵音此間相假為寵紅
壁翠之定準亦可笑

言是當年神禹祠何開風水已清夷六街六道今如此
恰換煙華能化師

祇園街之西與建仁寺街成十字處東南彎角有地

藏堂相傳云古昔鴨河屢洪水居人不勝其患因建

夏禹廟以禱風水靜和中世事換物變地勢非舊貴

浮屠之俗改飾其像遂稱為地藏堂後又有宗圓者

患目疾祈願得應人亦傳其靈異相徇曰目疾地藏

鴨東四時雜詞

三八

香火益盛莫知其始為神禹像者云○佛教稱地藏

尊為六道能化師

兩座勾欄十字街綺群翠勝不任排放場各各衝埃去

一日悲歡夢已皆

板橋東舊有三座劇場今廢一座○南宋市肆記云

如北瓦羊棚樓謂之遊棚又有勾欄甚多北瓦內勾

欄十三座甚盛蘇軾詩云苦熱誠知處處皆

急鼓鳴空拂曉寒諸伶登已列鶯鶯纏頭助采誰尤盛

紅幟題名擲峭竿

劇場南北相對三都名優常聚獻妙伎每歲十一月

最盛富戶豪子各以錦緞縐布米炭酒肉等諸物贈其所愛。壓門填街殆阻人行。或懸數丈紅幟揭題其名以取勾欄喧闐紛拏傾都競觀此則歲冬之一熱鬧也。凡劇場皆不用甍瓦以板竹葺之門檐上更構小棚格四面張布幕建兩小竿竿上各結一條截紙片團圓如疊雪此標望也。每晚開場之初一奴上棚格擊拍似小鼓雙撥修細繁點急節聲徹萬戶宛轉極工者作走珠鳴鑼之妙薄晚放場時又如此其節昏曉有小異云。○纏頭助米謂優伎之利物唐王元寶富而無學嘗會客明日人問必多佳興元寶曰但

陽東四時雜詞

三十九

費纏頭耳助米出于板橋雜記

欲觀新劇各相爭女伴嬌痴訴熱情客寓官人多豁達酒間火速買逸棚

娼妓輩喜觀演劇以不過開初兩三日為相勝謙席間每勸遊客請共觀焉

細弄爬樓通兩坊急行取便也何妨踏紅攝紫無朝暮自是佳人簪綠廊

北戲場西隣比屋之間有小弄入門而歷各樓下轉灣抹角遂出于大和大道人每取便相往還焉娼妓多以紫色縐絹為衣衣必一身有半行步每無尤

手撮攝衣之兩緣不使裾末拂地○祝枝山前聞云今人呼屋下小巷為弄南史肅詭接壽林玉出至延德殿西弄弑之已有此語蘇州圖經云吳王宮中有簪綠廊以板梯板藉其地西子行有聲因名南衙又看小煙華優子弗童交作家何物神仙偏愛護帽妙故剪紫雲遮

陽東四時雜詞

四十

第四橋南小街沿岸者為官川街又有許多樓肆煙華之品差屬下等演劇優伶帶色嬰童亦雜居其間與六街樓肆專屬娼妓者大同而小異云凡優童脂粉粧束皆類雜妓惟頭上戴紫色縐紗方幅四五

寸者為帽兒切而帶色長而為劇伶其通習也髡禿之徒最嬖之○衙字彙云通街也珠璣數云少年子弟習歌唱而漸至于演戲者謂之串童以上八首賦祇園街建仁寺街官川街及劇場左右之景致歡囂留連不夜城漫言街鼓未三更出門過水無人影寒犬迢迢吠月明

陽東諸街之更刻賤奴手把小鼓巡邏而打之一夜一次唯報三更耳與建仁寺鐘相後先○地理志云不夜縣古有日夜出于東萊萊子立此城以不夜為名古詩云千門不夜城

水西又宿野鶯。鶯燈影照眠宵已央。非是談家佳子弟。會知商戶好兒郎。

鴨西泊岸之家。亦貯娼妓。品價最卑。六街中幫間輩。以不能聘。同位諸姬。故每來買歡娛于此際。其他賤商牙僧輩。亦多來遊焉。

寶箏何許。送新詞。一面川霏欲雪時。擁映爐紅小牕容。試拈尺八。倚聲吹。

酒妓鼓箏及胡琴者最少。如用之。其名特著。解音之客喜徵之。○尺八之名李唐為始。出于毛晉。五色線及宋高僧傳。又共覺範謁顏魯公。祠堂詩云。尺八橫

鴨東四時雜詞

四十一

吹入醉鄉。國柄倚持。與人把。倚聲出于字典。與古所謂倚瑟。倚歌。倚曲。同。皆合詠也。

急脚急急夜。每過籠燈隨步影。婆娑沿街催喚。江南信幕得佳人。錦字多。

浪華者海陸之總會。米鹽之原府。而距皇京。不相遠。

各地往還。諸物運。幾日夜以萬數焉。所以都下鋪行。

有以遞書信物料為業者。人各出脚錢。而托之。彼輒

綜領而領送各處。俗謂之急遞鋪。鋪主檢之。奴丁致

之。通信之便莫捷焉。而鴨東繁華之域。以戶數日加。

附書信者最多。故鋪奴夜夜巡行諸街。連聲自喚。鋪

名。欲寄書信于江南者。召而屬之。○東軒筆記云。向

夕。忽有來使。俗謂急脚子者。呈狀。又宋文鑒名山藏。書叙指南等。有急足名。崔道融詩云。佳人持錦字。

青衣來去遞金桐。霜滑風乾。問口幽。知為誰人。貨春色。五更好夢入溫柔。

狹邪間有以貸。財。是為米者。賤小樓館。每有遊客。使了。鬻。借。余。稱。彼。輒。輸。送。幾。雙。夕。送。朝。收。纔。貸。一。宵。而巳。○青衣賤奴之稱。搜神記云。給青衣數十人。

女中。待詔好腰肢。青衫紅褲。訪。哀。姬。笑。問。宿。青。何。未。淨。先分義髻。刷多時。

鴨東四時雜詞

四十二

娼妓輩。不屑手角結頭髮。曲中有幾箇賤婦。隔日或

三四日。詣其家。梳掠。諸姬之鬢髮。此習已久矣。○待

詔謂。梳掠者。菽園雜記云。錫工稱待詔。磨工稱博

士。師巫稱太保。茶酒稱院使。皆然。此胡元名分不明

之習也。

月高燈暗。曉霜繁。行竈吹煙。猶過門。乃是嚴冬。熱河洛

欲向。擔頭沽。一盆。

曲中暮夜有賣河漏及湯餅者。置瓦竈器皿。於雙局

中。相擔。而叫過街上。擔頭懸小方燈。行人亦招就。而

哭之。○蕎麥麵。一名河漏。一名河洛。言銷云。山東以

蕎麥作麵食。曰河洛。即河漏也。池北偶談曰。盧氏雜說。明皇射鹿。取血煎醢。賜哥舒翰。及安祿山。謂之熟河洛。祿山帳下健兒名曳洛河。因字音相近。而傳會其說。今空魯開。以蕎麥作麵食名。河洛。但名亦有所本。以上七首賦。鴨曲雜事。女兒勞碌度芳年。自給朝昏脂粉錢。情實若非憑一箇風花爭了。幾條綠。歡去。悠悠頗可疑。比來莫是抱他思。了髮物色。私相報果。向橋南有所期。

鴨東四時雜詞

四三

○品字選云。小鬟雙鬟。了髮皆婢子之稱。以良人處

子頭止一鬟。而持草之鬟。雙鳥也。俗直謂之了髮。

情話。揀。揀。俄拂衣。湯郎難挽。淚空飛。與丁慣送。先相問。今夕緣何故。早歸。

街頭亦有幾箇小店。轎夫相聚。而待諸樓送客之令。給竹兜子。乍往乍還。無時而止。

別來消息太朦朧。潛出。尋過闌闌中。只怕帽兒遮不盡。羅襦猶露半船紅。

情客久不過遊。則娼妓或娼。肆奴竊出。問之于其近側。以多所憚避。故微服卸粧。或蒙紫帽。要同常家。人然而奢麗。艷曳之態。自不可掩。古今注云。閨市

門也。又云衣領曰衫。

風儂。雨倦。益情如破格。携歡。向別家各肆。原來頗苛令揭名。先禁。趕煙華。

娼妓如不跑。曲中定制。則揭名紙于各肆頭。相傳。而不許與諸樓通。凡客識娼妓於一樓。爾後如微之他家。則其從奴先趨。而報前樓主。此約最嚴。失蕩客或不辨。債連。稟舊就新。猶竊聘所。相昵。而其娼妓或有情實。共秘。不報知。則至事露。皆有此罰也。其他及樓主。幫間輩。苟失戒約之舊例者。皆然。

鴨東四時雜詞

四四

陽臺敢作再歸雲

凡娼妓之典。身年到五五。始除其券。去就可隨意。然而輕佻飄蕩。不必從定準。有券未滿。而見贖者。有待券滿。而歸所歡者。有雖見贖。而非其得意者。又有初昵。而後疎者。狡惡奸黠之徒。乘其隙。再誘。而墮苦海者。往往皆是。然百中二三。貞淑守信者。經多少辛苦。從良。而善其終焉。○蒙求云。孟光荆釵。孟光梁鴻妻也。然後漢書梁鴻傳云。為推髻著布衣。操作前。無有荆釵字。考事文類聚五車韻瑞等書。亦皆加此二字。蓋有所據。趙嘏詩云。寂寞堂前日。又曛陽臺去。作

不歸雲。以上六首賦娼妓有情實者。

屏上亂衣從手搭客稀。寥寥送殘臘。卸頭自笑。同傾情。睡貓分被坐火閣。

歲晚遊客不多。娼妓亦有暇。○搭字書云。附也。挂也。

白居易詩云。薰籠亂搭舊衣裳。韓偓詩云。夜深斜搭。

秋千索。卸頭解其首飾也。顧貞觀閨情詞云。卸頭。

燈影昏。火閣謂火籠。楊萬里詩云。火閣香消雪尚。

香。陰鑑詩云。火籠恒暖。暖脚。

俳兒打諢唱兒。然潑散彈。歡共欲。顯喧煥。通宵無藉在。

春風格是上。配額。

鴨東四時雜詞

四

諸樓歲晚。集飲俗謂之年忌。○俳兒出唐彦曾傳。

打諢出避暑錄。又珠璣藪云。取笑。揶揄。打諢。打諢。皆。

戲謔之言也。聊耶代醉編云。准人歲暮家人宴集。

曰潑散。又出韋應物詩。喧煥如云。暖熱。陸釗詩云。

所嗟二三子。慰我頗喧煥。無藉在。任放不拘忌之。

意。白居易詩云。白頭無藉在。醉倒亦何妨。陸游詩云。

詩酒本來無藉在。容齋隨筆云。格與隔之字義同。

格是猜言。已是。

衆除紅翠有餘資。阿主欣欣送歲時。多謝。離翁嘆囉去。

祝成富貴。不煩伊。

曲中幾箇肆主。皆無賴遊惰之徒。然射利于夜合之。

資。動輒成巨產。立春前一日。謂之節分。街上有驅。

疫者。兒女以紙色裹炒豆。如其歲數。及錢一文。與之。

則唱祝壽驅邪之辭。去謂之疫除。都下悉然。○何主。

出應諧錄。離翁出于秦中歲時記。元稹詩云。富。

貴祝來何所。遂聰明鞭得轉無機。注祝富貴。漸聰明。

皆正旦童穉俗法。

祇園廟畔送窮情。祈賽都人約。遠明似遣一年多少悶。

佯嘲佯罵鬪聲行。

除夜都人皆詣祇園就廟燈。而取新火。歸途各手引。

鴨東四時雜詞

四

火繩一條。俗例以之備歲朝之爰炊。此則鑽燧改火。

之意也。且雜還往還之間。彼是大聲壯語。極口嘲罵。

然泊然相過。不敢尤之。古俗至于今。不知何謂。

大道漸沈。衣帽塵祠燈燭。漫夜過實。請看背後攢峰際。

已抹紅霞一綫春。

戶戶迎新。新景催。草繩千尺絡檐。迴不消月令珠鑽燧。

領取社頭燈火來。

都下俗。歲首懸素索於門檐。索以稻秸為之。每寸出。

其端尺餘。下垂如條。臘末既為其設。至正月十四日。

而除之。○熙朝樂事云。正月朔日。挿芝麻梗於簪頭。

謂之錦錦高今俗用縈繩此類也 以上六首賦歲暮之事俗

一暑一寒觀俗情繁華逐日錦屏平采風今屬潛夫華莫道渾非幽雅聲

○總括一首 通計一百廿首

鴨東四時雜詞終

鴨東四時雜詞

四十六

松下見林 著 速水常成 補

前王廟陵記

安永七年（一七七八）京都刻本

據安永七年（一七七八）

京都刻本影印

松下見林先生著

增註 前王廟陵記

秋吉ハ見林先生の原著ハ増補ありて世に知られざる
近き頃山陵の事盛大なるに及なり又其考證精細なり故
今もこれに或人の考證より細註其概と註字の上
如四方の識者生石の跡やを給ふん事を欲す 四書堂主誌

前王廟陵記序

仁賢天皇聖敕曰。忍壞陵墓。誰人主以奉天之靈。藤原吉野諫言曰。山陵猶宗廟也。縱無宗廟。臣子何處仰誠哉斯訓也。是以謀毀山陵處八虐之一律。所不原。志兆域陵地。陵戸守戸。兆域內不得墓埋。臣庶及耕牧樵採令式之急務也。荷前所禱之禮。其追遠之心可貴。可法而已。如此善政。雖備盜賊發陵者不絕。況

及皇綱解紐諸陵寮廢職
至今人犁爲田園壑無完柩
余雖微賤每思之沾淚於艸
莽袖自壯歲參考舊記并自
訪其地或問於故老記錄之
其他懿后維城良相之九原
感遠存往不可不敬往往有
不知名字遠近古冢亦不可
不敬遵管義然事多不遑羅
縷今舉

前王之諸陵名前王廟陵記
庶幾令覽者尊本敬始云爾

元祿九年中元日

平安城松下見林序

前王廟陵記卷之上

平安城松下見林撰

日向埃山陵天津彦火瓊瓊杵尊在日向國無陵戸也存第推國高城郡才子於日向國日向埃山陵

日本書紀曰可愛之山陵可愛此

今按可愛今薩摩國頌姪郡陵戸見諸陵式

依陵有陵戸守戸有有陵戸而無守戸者有

有守戸而無陵戸者有無陵戸守戸者陵戸

其山陵百姓也守戸山陵守也有陵戸而無

前王廟陵記卷之上

守戸者陵戸兼守戸也有守戸而無陵戸者

守戸者陵戸也日本書紀顯宗天皇紀曰允

陵戸兼守山是也

日向國屋山上陵彦火大出見尊在日向國無

陵戸

今按薩摩國阿多郡大隅國肝屬郡俱有鷹

屋鄉高與鷹訓同益二鄉境相接恐此地之

山日向國阿多郡加世田高屋社北方山土

日向吾平山上陵彦波瀲武鸕草小背合

在日向國無陵戸同今大隅國肝屬郡始後鄉上在日向國中后玉依昆賣今陵相並

古事記曰高千穗山之西

今按今大隅國始羅郡之山

已上神代三陵於山城國葛野郡田邑陵南原

祭之其兆城東西一町南北一町同或云太春木鳴社之

今按古日向者今大隅薩摩日向是也帝都

漸遷東太西海遠故於山城國葛野郡祭之

先王報本之意至矣盡矣今田邑陵南原不

分明余訪其蹤粗得捷徑田邑陵事見下文

前王廟陵記卷之上

田邑陵南有岸岸南有平原川方一町今為

田邑凡四方有封疆南堅木原也此地亦屬

堅木原田地中東南有小墳又西北隅有小

社土人不知其始益此平原本祭神代三陵

之地小築三陵後世律為田存此等物崇其

義乎

日向國東北陵獻備權原宮御宇神武天皇在

大和國高市郡光城東西一町南北二町守戸

五畑同七十六年三月十一日崩年在山本村治田間

守仙陵其地之田

古事記曰畝火山之北方曰檮尾上

性靈集益田池碑銘序曰畝傍北峙

今按畝傍山今奈良西南六里久米寺北俗

云慈明寺山是也東北陵可百年以來壤為

糞田民呼其田字神武田暴汚之所為可痛

哭也餘數畝為一封農夫登之恬不為怪及

觀之寒心夫神武天皇繼神代草昧之蹤東

征平中州闢四門朝八方王道之興治教之

美實創於此我國君臣億兆當致尊信之廟

陵也澆季至於此噫哀哉

桃花鳥田丘上陵葛城高丘宮御宇綏靖天皇

在大和國高市郡兆域東西一町南北一町守

戶五烟同三十一年五月十日崩年八十四在位卅三年神武天皇

古事記曰衡田間

今按桃花鳥田衡田和訓同

桃花鳥田丘俗云鳥田丘在久米寺戌亥

畝傍山西南御蔭井上陵片鹽浮穴宮御宇安

寧天皇在大和國高市郡兆域東西三町南北

二町守戶五烟同三十八年十一月六日崩

古事記曰畝火山之美富登在吉田村西北寺山

今按日本紀御蔭作御陰和訓美富登或曰

久米寺西南

畝傍山南繼沙溪上陵輕曲峽宮御宇懿德天皇

皇在大和國高市郡兆域東西一町南北一町

守戶五烟同三十四年九月八日崩年七十七在池原村北字麻名子山

古事記曰畝火山之具名子谷上

今按繼沙溪具名子谷和訓近或曰久米寺

東南

掖上博多山上陵掖上池心宮御宇孝昭天皇

在大和國葛上郡兆域東西六町南北六町守

戶五烟同八十三年八月五日崩年百十四在位八十三

今按葛城山東諸山多掖上博多山不知何

山益御所邊或云三軍山

玉手丘上陵室秋津嶋宮御宇孝安天皇在大

和國葛上郡兆域東西六町南北六町守戶五

烟同百三十七年正月九日崩年百三十七在位百二年在玉手村字宮山

今按玉手丘玉手村是也在室村西北河東

片丘馬坂陵黑田廬戶宮御宇存靈天皇在

和國葛下郡兆域東西五町南北五町守戶五

烟同七十八年二月七十六年

古事記曰片岡馬坂上在王寺門前村之西馬坂之上字李地戶

或曰片丘馬坂今馬瀬坂是也片丘在奈良

西南五里餘

劍池嶋上陵輕境原宮御宇存元天皇在大和

國高市郡兆域東西二町南北一町守戶五烟

前王廟陵記卷上

五

同五十七年九月二日崩年百十六在位五十一

古事記曰劍池之中間上在石川村東劍池中

或曰劍池在高市郡難波池中有靈劍

春日率川坂上陵春日率川宮御宇開化天皇

在大和國添上郡兆域東西五段南北九段以

在京戶十烟每年差充令守同右在石川村東

或曰春日率川坂上陵今在奈良林小路韓

國社與念佛寺境內百十五年四月九日崩年

山邊道上陵磯城瑞籬宮御宇崇神天皇在

和國城上郡兆域東西二町南北二町守戶五

古事記曰山邊道勾之岡上

或曰今東山乎俗云宇和奈利山亦云玉身

墓

菅原伏見東陵纏向珠城宮御宇垂仁天皇在

大和國添下郡兆域東西二町南北二町陵戶

二烟守戶三烟同九十九年七月二日崩年

古事記曰菅原之御止野中

前王廟陵記卷上

六

今按菅原在奈良西一里餘今岡中有一小

堂畝丘堀殘處乎或云寺村在石川村東

山邊道上陵纏向日代宮御宇景行天皇在大

和國城上郡兆域東西二町南北二町陵戶

烟同四十年十一月七日崩年

或曰今在上總村俗云王墓山是歟

狹城看列池後陵志賀高穴穗宮御宇成務天

皇在大和國添下郡兆域東西三町

守戶五烟同百十八年六月十一日崩年

古事記曰沙紀之多他那美在是是寺解之許

今按狹城鄉名續日本紀作佐貴在奈良西

超昇寺戊亥盾列池今沒藥師寺其跡云

扶桑略記曰康平六年五月十三日發遣山

陵使是依太二月盜人發池後山陵掠奪寶

物也九月廿六日被定山陵寶物等如舊可

返納之狀紀傳明經等諸道勘文并犯人罪

名被勘法家十月十七日興福寺僧靜範坐

山陵事配流伊豆國緣坐者十六人僧俗共

前五廟陵記卷上

配流安房常陸佐渡隱岐上左等國此日興

福寺使參議左大辨藤原經家卿少納言源

師賢等為遠流寺家僧被告其由也

第為代惠我長野西陵穴戶豐浦宮御宇仲哀天皇在

河內國志紀郡兆域東西二町南北二町諱足仙陵戶

一烟守戶四烟同五十九年十二月廿九日

或曰西陵今在上原村在冷丹南郡岡村管內

古事記曰河內惠賀之長江今按江

今按播磨國明石郡亦有仲哀天皇陵此處

坂王忍熊王所興然二王子滅不能葬于此

神功皇后二年冬十一月葬於河內國長野

陵

日本紀曰神功皇后伐新羅之明年春二月

皇后領羣卿及百寮移于穴門豐浦宮即收

天皇之喪從海路以向京時麤坂王忍熊王

聞天皇崩亦皇后西征并皇子新生而密謀

之曰今皇后有子羣臣皆從焉必共議之立

幼主吾等何以兄從弟乎乃伴為天皇作陵

前五廟陵記卷上

詣播磨興山陵於赤石仍編船經于淡路嶋

運其嶋石而造之則每人令取兵而待皇后

狹城盾列池上陵磐余稚櫻宮御宇神功皇后

在大和國添下郡兆域東西二町南北二町諱息長足稚等守

戶五烟同乙丑年四月十七日崩

今按狹城見上盾列池上陵俗云御陵山在

超昇寺村西北山陵麓有鳥居半腹敷如小

壺物周廻如車輪此古所謂埴輪之類立陵

上者頂石棺露年代久土崩自露乎若戰國

賊發之乎。在山後村成勢陵面此

古事記曰。狹城楯列陵。

續日本後紀曰。承和十年四月己未朔。楯列陵守等言。本月十八日食時。山陵鳴。一度其聲如雷。即赤氣如飄風。指離飛公。申時亦鳴。其氣如初。指兒飛。且遣參議正躬王加檢察。伐陵木七十七株。至枯木等不可勝計。使即勘當。陵守長百濟春繼上矣矣。四月己卯。使參議從四位上藤原朝臣掃部頭從五位下

前王廟陵記卷二

九

坂上。大宿禰正野等奉謝。楯列北南二山陵。依本三月十八日有奇異。搜檢圖錄。有二楯列。山陵北則神功皇后之陵。倭名稱足南則成務天皇之陵。倭名稱足世人相傳以南陵為神功皇后之陵。偏依是口傳。每有神功皇后之祟。空謝成務天皇陵。先年緣神功皇后之祟。所作弓劒之類。誤進於成務天皇陵。今日改奉神功皇后陵。

今按。陵之在狹城者。三盾列池後盾列池上。

高野是也。今到此地見之。三陵儼然。讀續日本後紀。見陵之所在。今稱神功皇后之陵者。在南。如世人口傳。承和以後亦誤乎。又國史多三豕之訛。北南二字相易乎。書以傳疑。扶桑略記曰。六條天皇永保二年五月九日。庚子。奉幣石清水宮。告神功皇后。山陵樹木燒失之由也。

惠我藻伏山岡陵。輕嶋明宮御宇。應神天皇在河內國志紀郡。北域東西五町。南北五町。陵戶

前王廟陵記卷二

二烟守戶三烟。

同四十一一年二月十五日

譽田八幡宮。緣起曰。奉葬于古市。郡長野山藻伏山岡陵是也。欽明天皇二十年二月十五日。勅陵前立社。譽田八幡宮是也。

日本紀曰。雄略天皇九年秋七月壬辰。朔河內國言飛鳥戶。郡人田邊史伯孫女者古市郡人。書首加龍之妻也。伯孫聞女產兒。往賀。賀家而月夜還於蓬萊丘。譽田陵下。逢騎赤駿者。其馬時灌略而龍翥。歛聳摧而鴻驚。異

體峰生殊相逸發伯孫就視而心欲之乃鞭
所乘駿馬齊頭並轡爾乃赤駿超擡絕於塵
轍驅驚迅於滅沒於是駿馬後而急足不可
復追其乘駿者知伯孫所欲仍停換馬相辭
取別伯孫得駿甚歡驟而入廐解鞍秣馬眠
之其明日赤駿變為土馬伯孫心異之還覓
譽田陵乃見駿馬在於土馬之間取代而置
所換土馬

今按日本書紀所謂蓬萊丘譽田陵者藻伏

山岡陵乎按書紀前後文當在古市郡然則
譽田在古市郡與緣起之說同據延喜式則
藻伏山岡陵在志紀郡二說不同蓋古市郡
志紀郡相鄰陵接一郡界故為在志紀郡為
在古市郡而已

扶桑略記曰治曆二年四月廿五日石清水
宮司言上太三月廿八日戌刻河內國譽田
天皇山陵震動放光之異也

古事記曰川內惠賀之裳伏山岡百舌鳥陵也

今按藻伏與百舌鳥和訓近故後人註古事

記誤混歟然和泉國大鳥郡有御廟山毛受

八幡書以傳疑或云自毛受

百舌鳥耳原中陵難波高津宮御宇仁德天皇

在和泉國大鳥郡北城東西八町南北八町陵

戶五烟同百舌鳥耳原中陵

古事記曰毛受之耳原上

今按百舌鳥中陵俗云大山陵在泉界東南

天王寺舊記云四天王寺在難波荒陵村故

俗號荒陵寺寺西南有荒陵相傳仁德天皇

築之以為陵處其後以為此地不可更石津

原以定陵處大山陵是也此陵空荒故名荒

陵俗云茶臼山在袖之松村

百舌鳥耳原南陵磐余稚櫻宮御宇履中天皇

在和泉國大鳥郡北城東西五町南北五町陵

戶五烟同百舌鳥耳原南陵

古事記曰毛受

今按百舌鳥南陵今在上石津村北俗稱指鈴山

第十九代

舌島耳原北陵丹比宗廟宮御宇反正天皇

諱磯鴨高別尊

在和泉國大鳥郡兆域東西三町南北二町陵

戸五烟同六年正月廿三日崩

古事記曰毛受野

今按百舌鳥北陵今楠井池是也在中筋村字田出井

更我長野北陵遠飛鳥御宇允恭天皇在河內

國志紀郡兆域東西三町南北二町守戸一烟

守戸四烟同年八十二在位四十二年

或曰今在國府市野山中之家

菅原伏見西陵石上穴穗宮御宇安康天皇在

大和國添下郡兆域東西二町南北三町守戸

三烟同三年八月九日崩

今不詳其處或云寶來村在寶來村西城山之井字保天堂

丹比高鷲原陵泊瀬朝倉宮御宇雄略天皇在

河內國丹比郡兆域東西二町南北三町陵戸

四烟同二十三年八月七日崩

古事記曰河內之多治比高鷲

或曰丹比今丹比郡高鷲原陵俗云丸山在

鴻泉村

第二十代

河內坂門原陵磐余甕栗宮御宇清寧天皇在

河內國古市郡兆域東西二町南北二町陵戸

四烟同五年正月十六日崩

或曰坂門原陵今平野山中觀音堂上大松

樹之所生白髮山

傍丘磐杯丘南陵近飛鳥八鈎宮御宇顯宗天

皇在大和國葛下郡兆域東西二町南北三町

陵戸一烟守戸三烟同年三十八在位四十八年

古事記曰片岡之石坏岡上在池田村字一見山

今按傍丘片岡同磐杯岡今未詳或云平野村

埴生坂本陵石上廣高宮御宇仁賢天皇在河

內國丹比郡兆域東西二町南北三町守戸五

烟同十一年八月八日崩

今按埴生坂本陵今葛井寺南陵歟俗以葛

井寺南陵謂及正天皇陵者誤也又正天皇

陵在百舌野見上丹比今丹比郡

傍丘磐杯丘北陵泊瀬列城宮御宇武烈天皇

在大和國葛下郡兆域東西三町南北三町守

戸五烟同八十一月八日崩

古事記曰片岡之石坏岡右磐山村

今按磐野丘北陵未詳其地或云平野村

嶋藍野陵磐余玉穗宮御宇繼體天皇在攝

津國嶋上郡兆域東西三町南北三町守戸五

烟同二十五年二月七日崩

今按二嶋藍野陵今在嶋上郡嶋下郡界大

田村俗云池上亦祭曰山三嶋名

前主廟陵記卷上

古市高屋丘陵勾金橋宮御宇安閑天皇在河

內國古市郡兆域東西一町南北一町五段陵

戸一烟守戸二烟同二年十二月十七日崩

或曰今高屋村城山是也明

或曰近年土民發陵得古代器物等按高屋村

身狹桃花鳥坂上陵槍限高田武小廣田押角等

天皇在大和國高市郡兆域東西二町南北

町守戸五烟同四年二月十日崩

今按身狹地名或作牟佐或作武遮音訓通

身狹桃花鳥坂上陵今其處雖不明在益田

池西南可以性靈集辯或云鳥屋枕

益田池碑銘序曰武遮荒墾其地

槍限坂合陵磯城嶋金刺宮御宇欽明天皇在

大和國高市郡兆域東西四町南北四町陵戸

五烟同六十二年四月十五日崩

今按槍限地名益田池邊在平田村

益田池碑銘序曰水激槍限之下

聖德太子傳記曰槍限寺者欽明天皇廟也

前主廟陵記卷上

今按不知

河內磯長中尾陵譯語田宮御宇敏達天皇在

河內國石川郡兆域東西三町南北三町守戸

五烟同十四年八月十五日崩

古事記曰川內科長

或曰今在葉室村山在太子山

河內磯長原陵譯大兄槍限宮御宇用明天

皇在河內國石川郡兆域東西二町南北三町

守戸三烟同六十九年四月五日崩

古事記曰科長中陵

或曰今在春日村上太子御墓山辰巳五六

町可在春日村平林之中字園明王

倉梯岡陵倉梯宮御宇崇峻天皇在大和國上

市郡無陵地并陵戸同五年十一月二日崩年七十三在位五年

古事記曰倉梯岡上

今按陵地陵邊屬陵地也所謂兆域也

或曰今在多武峰東口

磯長山田陵小治田宮御宇推古天皇在河內

前王廟陵記卷上

國石川郡兆域東西二町南北二町陵戸一烟

守戸四烟同三十六年三月七日崩年七十五在位廿六年

古事記曰大野岡上陵後遷科長大陵

或曰今在南山田村字高塚

扶桑略記曰康平二年六月二日河內國司

言上盜人發推古天皇山陵之由

押坂內陵高市岡宮御宇舒明天皇在大和

國城上郡兆域東西九町南北六町陵戸三烟

今按押坂忍坂也或作恩坂內陵雖未詳其

此思金口長岳寺西千塚邊在忍坂村

大坂磯長陵難波長柄豐碯宮宇彥德天皇

在河內國石川郡兆域東西五町南北五町守

戸三烟同前五年甲寅十月十日在位十年

或曰今在山田村北山在山田村大道竹原越北方上之山

越智岡上陵飛鳥川原宮御宇皇極天皇在大

和國高市郡兆域東西五町南北五町陵戸五

烟同廿四年辛酉七月廿四日在位七年

或曰越智岡在宗我川上在鳥屋村越智

前王廟陵記卷上

山科陵近江大津宮御宇天智天皇在山城國

宇治郡兆域東西十四町南北十四町陵戸六

烟同白鳳廿二年辛未十二月三在位十年

萬葉集從山科御陵退散之時額田王作歌

曰

八隅知之和斯大王之恐也御陵奉仕流山

科乃鏡山夜者毛夜之盡盡者母日之盡

哭耳呼泣在而哉百磯城乃大官人者去

別南

江次第曰。在北山階。

今按。山階陵。今俗云御廟野。

在山科御廟野村
字御廟野中 陵

又按。山科陵。在鏡山麓。陵四面野名御廟野。陵狀有八角石壇。上有六角丘。皆以礪礪築之。壇周廻亦敷礪礪。樹木叢生。御廟野北方廣莫清淨。小松生。南方汙萊多。爲人馬往來路。或伐木。或耕墾之。遠方十四町。式條不知何代發石棺。南邊陵下。石棺蓋露。在野州間。前設小社。有鳥居。東南里名陵村。

前主廟野記卷上

〇十九

公事根源抄云。天智天皇御サキ山城國山階ニアリ。昔レ此御門。御馬メサレテ山科里ニ行幸アリテ。其下歸給ハサリキ。然ニ崩所ヲイツク共知人ナレタ。御沓ノ落留リタル所ニ御サギヲソ。タテケルイトフレギナル事ニテ侍リキ。

西峯云此說本
出本紀中卷

今以沓落處爲陵。以不詳讀日本紀輕信土民之說。筆之于書。日本紀曰。天智天皇十年九月。寢疾不豫。十二月乙丑崩于近江宮。此

三日

國史之明文也。可見崩所近江滋賀宮也。後世士民混雜。行睿居士事。爲天智天皇事元亨釋書曰。清水寺者。寶龜九年四月沙彌延鎮。或曰有夢事。沂淀河而行。見一支派。有金色流鎮窮水源。至瀧下。側有州菴。白衣老翁居焉。鎮問住此幾年。姓名爲誰。答曰。吾名行睿。隱約此地已二百歲。持千手千眼神咒。我待汝者久。今來也。我有東州之行。未果。汝暫替我持此。此地又好建練。若乃指庭前株枿。

前主廟野記卷上

曰。我以是擬大悲像材。吾若遲歸。汝先營之。言已向東而去。過期而不返。鎮出菴尋求。不能相見。一日到山科東峯。見翁履鎮取履而歸。思念恐此翁大悲之應現也。遺履者示其迹耳。此遺履地。山科音羽山法嚴寺也。法嚴寺者。天智天皇所建立。故混曰天智天皇於山科落履。小知所終。豈不大誤哉。

富士

檜隈大內陵。飛鳥淨御原宮。御宇天武天皇在

諱大海人。諡天智中原流真人。天皇

大和國高市郡北城東西五町。南北四町。陵戸

五烟同 十六年丙戌九月九日

或曰今在清見原料西在五條野村

同入内陵藤原宮御宇持統天皇合葬檜前大

内陵陵戸更不重充同前平十八在位十一年

續日本紀曰文武天皇二年十二月甲寅太

上天皇崩三年十一月癸酉火葬於飛鳥岡

壬午合葬於大内山陵

今按飛鳥岡行廻岡今岡寺天子火葬之始

起於持統天皇

前王廟陵記卷七

檜前安古岡上陵藤原宮御宇文武天皇在大

和國高市郡兆域東西三町南北三町陵戸五

烟同 十六年六月十一日

今按安古岡未詳或云在平田

續日本紀曰慶雲四年六月辛巳崩十一月

丙午火葬於飛鳥岡二十日奉葬於檜隈安

古山陵

奈保山東陵平城宮御宇元明天皇在大和國

添上郡兆域東西三町南北五町守戸五烟同

或曰今俗云大奈開七足狐邊有七直石

鍋狐養老五年十一月七日

續日本紀曰養老五年十二月己卯太上天

皇崩于平城宮中安殿乙酉太上天皇葬於

大和國添上郡椎山陵

今按據延喜式觀之則椎猶字之誤猶訓奈

保其後 同前平十八在位十一年

奈保山西陵平城宮御宇淨足天皇在大和

國添上郡兆域東西三町南北五町守戸四烟

前王廟陵記卷七

同 十六年九月九日

或曰楊梅陵北或云在法花寺村 在養老元年

佐保山南陵平城宮御宇勝寶感天皇

在大和國添上郡兆域東西四段西七町南北七

町守戸五烟同 天平勝寶八年五月二日

或曰今奈良北陵森眉間寺在奈良北陵

淡路陵廢帝在淡路國三原郡兆域東西六町

南北六町守戸一烟同 天平神護元年十月廿三

或曰神宅東二十町許在加集村大寺

高野陵平城宮御宇天皇在大和國添下郡兆

城東西五町南北三町守戸五烟同前

續日本紀曰神護景雲三年八月丙午華高

野天皇大和國添下郡佐貴鄉高野山陵

今按御陵山西北陵若是乎往年有人發此

陵奪陵中財之黨身腫苦死觀者恐還財上

本處云此陵山北古墳是也

出原東陵平城宮御宇天宗高紹天皇在大和

國添上郡兆城東西八町南北九町守戸五烟

同大應元年十二月廿二日崩年七十三在位十二年

或曰今鹿野園東二里可俗云王基是歟

續日本紀曰天應元年十二月丁未崩庚申

葬於廣岡山陵延曆元年八月己未遣台部

卿從四位上壹志濃王左中辨從四位下紀

朝臣古佐美治部大輔從五位上藤原朝臣

里麻呂主稅頭從五位下榮井病禰道形陰

陽頭從五位下紀朝臣本大外記外從五位

下朝原忌寸道永等六位已下解陰陽者合

一十三人於大和國行相山陵之地為改葬

天宗高紹天皇也五年十月甲申改葬太上

天皇於大和國田原陵在田原鄉日笠村字家之本

柏原陵平安宮御宇桓武天皇在山城國紀伊

郡兆城東八町西三町南五町北六町加丑寅

角二岑一谷守戸五烟同延曆廿五年十月十日崩年七十在位廿四年

今按柏原地名桓武天皇葬此故號相原帝

江次第曰稻荷山南野

山槐記曰伏見山松原中也

拾芥抄曰在伏見山從東邊一町許入在稻

荷南野按此山在源平遷移伏見也柏原之地廢校以後為山

今按江次第遠謂稻荷山南野者甚疎略也

惟山槐記指南得正傳直路今據此推之越

稻荷山南則深州極樂寺攝家代代墓所也

今變為寶塔寺寶塔寺南霞谷為仁明天皇

陵地在藤森東霞谷南伏見山也即是柏原

為桓武天皇陵地熟玩式條兆域山槐記所

在而察當時地圖則今伏見城山古御香大

龜谷總柏原陵地也。然則陵之所在，為城中
央思集城時陵壞必矣。後世以城山古御香
等名目滋興，終失柏原大名。（八丁金家松山處，似御在）
類聚國史曰：延曆二十五年三月辛巳，天皇
崩。癸未，以山城國葛野郡宇太野為山陵地。
西北兩山有火自焚，日赤無光。大井比叡小
野栗栖野等山共燒，烟灰四滿。京中晝昏，上
以為所定山陵地近賀茂神社，疑是神社致災
乎。即決卜筮，果有其祟。卜曰：初上山陵，筮從

前主廟陵記卷上

五

龜不從也。今災異頻來，可不慎歟。即自祈禱，
久災止滅。

今按始以宇太野為陵地，以災變終改定柏
原。宇太野今紫野以北野，近上賀茂處乎。
或曰：今鹿園寺西衣笠山北有寧多野，是歟。
仁部記曰：文永十一年十二月廿九日，諸陵
寮頭賀茂朝臣在為使，在大史小槻宿禰秀
氏覆奏文云：實檢言上柏原山陵被掘發事。
御在所巔東西一丈三、尺許，南北一丈六、尺

第五代

餘所掘發也。上似以石塞之，右依宜日實檢
言上如件抑件山陵登十許丈，壇廻八十餘
丈。但於陵中者不及實檢，仍雖在狀謹解。
楊梅陵平安宮御宇，日本根子推國彥尊天皇。
在大和國添上郡兆城東西二町南北四町，宇
戶五烟。（同）天長元年七月七日崩。
或曰：今法華寺西南有楊梅天神，其北有陵。
俗云宇和奈部是耶。（在起昇寺鄉之內常福寺村，宇和奈部是耶）
嵯峨天皇（諡神野）

前主廟陵記卷上

九六

續日本後紀曰：承和九年七月丁未，太上天
皇崩于嵯峨院。春秋五十七，遺詔曰：人有
亡天地之定數，物化之自然也。欲朝死夕葬，
夕死朝葬，作棺不厚覆之，以席約以黑葛，擇
山北幽僻不毛地，葬限不過三日夜刻。須向
葬地，從者不過九人。戊申，擇山北幽僻之地，
定山陵。以商布二千段、錢一千貫文奉充御
葬料。即日御葬畢。（美和九年七月十五日崩，年五十七，在位十四年）
皇年代私記曰：葬嵯峨院北山地。（在嵯峨院北山，寺北山）

山槐記曰元曆元年八月廿三日巳卯日
被立御卽位山陵使翼日於攝政亭左大帳
經房云向嵯峨不知其所相尋邑老之處大
覺寺內北方山云向件寺之間一町餘甬不
通忽騎馬向彼所拜了燒宜命歸亭

淳和天皇 諱大伴諡天高諡跡遠天皇

皇年代私記曰承和七年五月八日崩五十
七號西院帝依遺詔火葬散御骨於大原野
續日本後紀曰承和七年五月辛巳後太上天

人前主廟記卷上

七

天皇順命皇太子曰予素不尚華飭況
人物乎斂葬之具一切從薄朝例凶具
奉還葬畢釋絛莫煩國人作者藏也欲人不
觀送葬之辰宜用夜漏追福事同須儉約又
國忌者雖義在追遠而絳苦有司又歲近分
祿號曰荷前論之幽明有煩無益並須停狀
必達朝家夫人子之道遵教爲先奉以行之
不得違失重命曰予聞人沒精魂歸天而空
存冢墓鬼物憑焉終乃爲崇長貽後累今宜

碎骨爲粉散之山中於是中納言藤原朝臣
吉野奏言昔宇治稚彥皇子者我朝之賢明
也此皇子遭教自使散骨後世效之然其親
王之事而非帝王之迹我國自上古不起山
陵所未聞也山陵猶宗廟也縱無宗廟者臣
子何處仰於是更報命曰予氣力綿微不能
論決卿等奏聞嵯峨聖皇次蒙裁耳矣未後
太上天皇崩于淳和院春秋五十五戊子此
夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集

南王廟記卷上

七

村御骨碎粉奉散大原野西山嶺上

今按吉野奏言中宇治稚彥皇子使散骨事
舊事紀古事記日本紀無之且菟道稚郎皇
子墓在山城國宇治郡北城東西十二町南
北十二町守尸三烟式條烟焉也抑火葬天
竺之俗也皇子時佛法未入我國何散骨之
有道昭和尙創造宇治橋火葬從此僧而始
也詳見續日本紀是以混爲宇治皇子散骨
而已在位十年

在乙訓郡大原野勝持寺山酉成間安葬
火美所同郡物集村大字廟西金車家

深草陵平安宮御宇仁明天皇在山城國紀伊

郡兆城東西一町五段南七段北二町守戸五

烟延壽嘉祥三年三月廿一日崩

三代實錄曰貞觀三年六月十七日庚申詔

定仁明天皇深草山陵四履東西一町五段

南限紀子內親王家地北限今八年十月廿

二日癸巳敕改定深草山陵四至東至大基

南至紀子內親王家北垣西至貞觀寺東垣

北至谷

前王廟陵記卷上

古今和歌集哀傷歌深草帝ノ御國忌ノ日

ヨメル

文屋康秀

草深霞谷三影夕テル日暮今日ニアラヌ

江次第曰在嘉祥寺中在嘉祥寺中

中右記曰天仁元年二月廿二日癸卯御即

位之由敬告山陵使深草仁明中納言宗忠

所相具之次官爲綱也此外共人三四人用

網代車向嘉祥寺從西大門南行更頗東行

下居山陵前先再拜次讀宣命次再拜不不

共官命了歸路乘燭以前歸家

按嘉祥寺今消歇故不可知山陵在其今

深草安樂行院者古深草陵也云余詣此院

欲拜山陵平地有御骨堂此納後深草院以來

火葬先王御骨處別無山陵境內既隆而有

阿彌陀堂其地圓丘也半里東南號谷口段

谷之口也其地有蓋發陵之迹乎

田邑陵平安宮御宇文德天皇在山城國葛野

郡兆城東西四町南北四町守戸五烟同

前王廟陵記卷上

大德天皇實錄曰天安二年九月庚申人納

言安倍朝臣安仁率陰陽權助滋岳朝臣川

人助並朝臣名高等至山城國葛野郡田邑

郡具原岳年三十二定山陵在位八年

三代實錄曰天安二年八月廿七日乙卯文

德天皇崩於冷然院新成殿九月六日甲子

葬大德天皇於具原山陵送終之禮皆從論

約一如仁明天皇故事但變於前例只是作

方相而已十月廿三日庚戌遣外從五位下

行陰陽助兼權博士笠朝臣名高鎮_{ナカノ}眞原山陵十二月十日丁酉詔改眞原山陵爲田邑山陵十四日辛丑奉充田邑山陵陵戸四烟_●

在中野村北東御廟山上字茶臼山北址旧号眞原同中

今按田邑鄉眞原岳今廣野是也在葉室山南村名廣野村西皆山也山下有寺號地藏院東野有陵故廣野亦號陵村余訪沈迹至此以爲常見在大和河内和泉諸陵皆廣大今見此陵其覺狹小然檢國史文德天皇送

新正廣野記卷上

中

終之禮儉約自崩日八月廿七日至第六日九月二日定山陵之地第十日九月六日葬送則小日山陵成而奉葬以此觀之陵之小其必然也

清和天皇 諱惟仁 在位十八年

三代實錄曰元慶四年十二月四日癸未申二刻太上天皇崩於圓覺寺時春秋三十一自遜皇位御清和院歸念苦_ニ發心菩提朝夕之膳菜蔬在御_ニ妍狀豐姿不賜顏色嬖私寵引自斯而斷遂御山莊落飾入道是時僧

正宗叔侍焉山莊卽是圓覺寺也天皇寄事頭陀意切經行便欲歷覽_ニ名山佛壠於是始自山城國貞觀寺至于大和國東大寺香山神野比蘇龍門大瀧攝津國勝尾山諸有名之處經廻禮佛或處留住踰旬乃去自勝尾山歸於山城國海印寺俄而入丹波國水尾山定爲終焉之地自後不御酒酢鹽豉隔三日一進齋飯六時苦修焦毀如削斷除業累禪念逾劇恒厭此身欲不御膳而捨之至

前正廣野記卷下

下

夫沙門修練者之所難行緇徒精進者之爲高迹雖尊居極而盡蹈之矣寢疾大漸命近侍僧等誦金剛輪陀羅尼正向西方結跏趺座手作結定印而崩宸儀不動儼然若生念珠猶懸在於御手梓宮御棺其制與以聖躬坐崩遂不頽臥也詔火葬於中野不起山陵使百官及諸國不舉哀停素服亦勿任緣葬之諸司喪事所須惣從省約七日丙戌夜酉四刻奉葬太上天皇於山城國愛宕郡上栗

出山奉置御宮於水尾山上。村中在仁孝天皇御宇。

今按上粟田山今北白河勝軍地藏山邪白

河屬上粟田鄉。

第五十六
明成天皇
在位八年

扶桑略記曰天曆三年九月廿九日陽成天

皇崩于冷然院春秋八十一同夕奉終圓覺

寺十月三日壬申夜奉葬於神樂岡東也

今按神樂岡東地松原無知奉葬陽成院于

此者近年開爲寺。在陽成院東

前王廟陵記卷上

後田邑陵光孝天皇在山城國葛野郡田邑鄉

立屋里小松原陵戸四烟西至西至芸原岳峯

限大道東限清水寺東北限大岑延喜式

今按今失田邑立屋芸原等名清水寺亦滅

井東山清水寺小松原今稱松原地存其名

耶在平野西

三代實錄曰光孝天皇仁和三年八月廿六

日丁卯巳二刻天皇崩於仁壽殿春秋五十

八

扶桑略記曰九月二日壬申葬山城國葛野

郡後田邑陵。二云小松山陵

皇年代私記曰葬小松陵號小松帝

江次第曰後田邑仁和寺西大教院良

拾芥抄曰後田邑光孝天皇在仁和寺內大

教院丑寅

今按古仁和寺所在之地號本寺野其後在

尊西近年更造仁和寺于本寺野大教院

地不可知今仁和寺西行鳴瀧道上有小

前王廟陵記卷上

人謂之光孝天皇陵

江大府卿圓宗寺鐘銘序云擇地於仁和寺

勝形之在十處於古先帝山陵之前今按此山陵

指小松今仁和寺御門跡西福子村領田中一封上寺古文合

第五十六
宇多天皇
在位十五年

皇年代私記曰承平元年辛卯七月十九日

崩於仁和寺八月五日火葬大內山陵依遺

詔不置國忌山陵

山槐記曰元曆元年八月廿三日被立御即

位山陵使翼日於攝政亭經房云宇多人內
山於仁和寺雖相尋之無其所參御室尋申
處遺詔不置陵然則無才學之由被仰空歸
參。

編年集成曰仁和寺奧池尾山

在仁和寺北宇多野
土人稱天皇冢

前王廟陵記卷之上畢

前王廟陵記卷上

七

前王廟陵記卷之下

平安城松下見林樾

後山階醍醐天皇讀教仁

江次第曰在醍醐寺北曼陀羅寺丑寅裏書

云路或自北山階車或踰阿彌陀嶺乘馬曼

陀羅寺民角也十一月二日

今按醍醐阿彌陀嶺今滿谷也阿彌陀嶺北

拾芥採曼陀羅寺作曼陀羅堂真言傳曰仁

海僧建立曼茶羅寺于小野

前王廟陵記卷下

山樾記曰後山階治部卿顯信曰件所醍醐

也醍醐曼茶羅寺其寺前有堀仍不通於堀下

拜其共侍入堀內令燒宣命寺僧等前候

燒宣命于樹下者衣半踊亭中野護

扶桑略記曰延長八年十月十日庚子奉葬

大行皇帝於山城舊宇治郡山科陵醍醐寺

北笠取山西小野寺下依遺詔從儉約

醍醐寺舊記引李部王記云延長八年九月

廿九日丑時曉御病大漸右大臣承詔令

人於寺修御諷誦已時上令英明親王

奉六條院申受給三歸戒之由尊意法師即

奉進三歸戒及三聚淨戒尊意又奉剃御頭

髮奏進法名曰寶金剛左大臣進御所請遺

詔及還破陳上不許還陳乃命以不可上諡

號而首左脇登霞春秋四十有六十月十日

庚子御葬送亮孝子右大臣從御輿後皆在

行障內御前僧四十口在行障前天台西路

院上仁照奉仕御導師基繼都奉仕兜願

前王廟陵記卷下

十一日天漸明辰四刻到醍醐寺北山陵諸

寺八十六所大路設幕擊鐘心佛十二日山

作所於山陵止卒都波三基是日公家修御

二十七日諷誦如初七日

又貞信公記并淑光日記曰十月十日庚子

亥四刻奉葬於醍醐寺北笠取山西方四面

八十間穴深九尺方廣三丈穴倉高四尺三

寸縱橫各一丈一詔云十一日寅二刻令著

於山陵同日戌二刻奉入於御倉

古今著聞集哀傷部曰。延長八年。計九

日。延喜聖上崩御。十月十一日。醍醐山

陵。ワタレ奉リケルニ。御視御書三卷。黑漆芭

合琴。青眼。箏。和風。和琴。中宮弘徽。聖。賀三獻。

セラレケル。御笛ナド入ラレケリ。内藏助良岑義方

和琴ヲ調フ。樂所預丹治良名琴ヲ調ス。皆平調

ニシラヘケリ。和。スハ律ノ調ニシラヘタリケル。ハ

上ニコソ成待ラメアハレナル事ナリ。

今山陵爲平地。醍醐陵村。自公原可半町。

天皇。在位十六年。

醍醐寺舊記。李部王記云。天曆六年八月十

五日崩。廿日御葬送。御前僧廿八人。僧都禪

各咒願。律師鎮朝爲御導師。日部芳門路

東行。經東路。從七條路。渡鴨河浮橋。亥時陵

所。諸寺夾路設幕念佛院。殿上四五位人推

迎。大候外陣邊。御輿入南門。王卿退就幄。其

山作之司左中將藤原朝成。及僧二口奉茶

毗事。云其。上物并御輿等於內牆。火燒之云。

廿一日朝奉遷御舍利。醍醐寺東。左中將藤

原朝臣朝忠。椿持律師鎮朝。醍醐寺主。主定

助法師陰陽助平野宿禰茂樹相從。奉安。

又帝王系圖云。天曆六年二月十四日。朱雀

太上皇落飾入道。佛陀寺。八月十五日崩。時

年三十。葬山城國來定寺。北野陵。置御骨於

醍醐山陵。傳。在宇治郡後山階陵。

編年集成曰。葬法性寺。東中尾。南原陵。置御

骨于醍醐山陵。

或曰。今陵村埋性院。奴。地。竹林中。

村上天皇。日本紀異云。山城國葛野郡。宇

醍醐寺舊記。帝王系圖云。康保四年五月十

四日。天皇不豫。廿五日。天皇崩。清涼殿。年四

十二。六月四日。葬先皇於村上山陵。在位廿一年。

山槐記曰。村上在仁和寺長尾。

源氏物語弄花曰。岩陰松崎。奧也。天曆陵。

今按村上地名。歷代皇記曰。村上山陵。山城國葛

原郡。此則村上在葛野郡昭昭然。失村。

融寺西大門下御余似參給御堂似供公卿

亥刻花山法皇崩十一日壬寅休養

停素服舉哀又自今日廢朝十七日戊申今

夜奉葬花山法皇於紙屋上法音寺北

今按紙屋古製宿紙地紙屋院在馬見北野

南有紙屋川村。

在葛野郡大北山村人家
東紙屋川西字称赤田田
地東北間在冢上生菩提樹

後三代
一條院 諱懷仁
在位廿五年

皇年代私記曰寬弘八年六月二十二日崩

於一條院中殿年三十二七月八日葬石陰

暫安置九日奉渡御骨於園城寺今按此寺陰松崎與

前主廟殿記卷下

百練抄曰奉葬北長坂野安置御骨於園城

寺園城寺當作圓成寺左經記云寬仁四年

六月十六日丙申故一條院御骨焉避方

後三代
三條院 諱居貞
在位五年

編年集成曰寬仁元年五月九日崩三條院

年四十一十二日葬舟岡西邊奉納御骨於

北山小寺中西奉云北山小寺大原戶寺戶

後三代
一條院 諱敦成
在位廿年

皇年代私記曰長元九年四月十七日崩年

二十九五月廿九日火葬於神樂岡御骨暫
安置淨土寺神樂岡東西俗
稱淨土寺

百練抄曰長曆元年六月二日上東門院供

養養提樹院

後一條院御
舉所院

長久元年十一月

十日自淨土寺奉遷御骨於此院

後三代
後朱雀院 諱敦良
在位九年

皇年代私記曰寬德二年正月十八日崩於

東三條院年三十七二月廿一日入棺二月

廿一日葬高隆寺乾原御骨安置圓教寺

前主廟殿記卷下

今按圓教寺在仁和寺中真言傳曰僧正成

興仁海弟子也住仁和寺其有靈驗以住

坊救號圓教寺

今按此寺北門東宇多
皇往陵墓石碑蓋圓教寺

後三代
後冷泉院 諱親仁
在位廿三年

皇年代私記曰治曆四年四月十九日崩于

高陽院中殿年四十四五月五日葬船岡乾

原御骨安置仁和寺

西奉按一代要記云
安御骨於圓教寺

後三代
三條院 諱敦仁
在位四年

皇年代私記曰延久五年五月七日崩於但

馬守高房大炊御門宅年四十一十七日薨

神樂岡南原安置御骨於禪林寺在神樂岡南原

今按禪林寺東山水觀堂是也

扶桑略記曰葬於神樂岡東原

吉續記曰文永十年七月晦日今日依異國

事被發遣山陵使圓宗寺參議源朝臣雅言

散位源朝臣雅範

今按吉續記所謂圓宗寺陵後三条院耶雖

不聞陵在當寺當寺殊發敵慮所州創也故

前王廟院記卷下

御廟在當寺乎

今尊專院西封土乃圓宗寺陵邪

元亨釋書曰延久二年圓宗寺成在仁

南莊麗冠都下

寺云後世消歇其跡與圓寺林今在御尊專壽院東

白河院

諱貞仁在位十四年

皇年代私記曰大治四年七月七日崩三條

院第年七十七葬香隆寺乾野

吉記曰成菩提院白河院御陵在紀伊郡田島中

今按成菩提院在鳥羽山槐記曰安元元年

九月朔日院御幸鳥羽自明日依可被始行

成菩提院念佛也西界云成菩提院退轉今猶外田存其迹

堀河院

諱善仁在位廿一年

編年集成曰嘉承二年七月十九日崩于堀

河院廿四日葬香隆寺坤原安置御骨于同

寺在龜安寺東外葬日谷七

百練抄曰天仁元年三月廿二日先朝御骨

從香隆寺奉移圓融院

今按香隆寺堀河院殯歛之地中右記曰系

香隆寺低殿御所是也香隆寺太仁和寺

不遠今昔物語集云仁和寺東有香隆寺或

曰今蓮臺寺也圓融院之跡今松岡東南

鳥羽院諱宗仁在位十六年

紹運錄曰保元元年七月二日崩年五十四

即夜葬鳥羽安樂壽院新御塔

百練抄曰御塔擬山陵也

稱水御塔在古三層塔今遺跡臺下御石相並經出現存

今按安樂壽院在外田

崇德院

諱顯仁在位十八年

紹運錄曰長寬二年八月廿六日崩于讚岐

配所年四十六奉葬於白峯

今按白峯在讚岐國阿野郡亦號綾松山

清原入道常宗白峯緣起曰奏崩御之由於

京待報之間奉浸玉體於野澤井九月十八

日戊刻奉火葬于白峯寺西北石巖依遺詔

也遠江阿闍梨章實爲御苦提渡國府御所

于御廟側建立頓證寺按上建阿闍梨門置原爲我朝阿闍梨云

今按石巖下各兒谷斷岸千尺泊磯吉備子

洲在目中石巖上有御廟前有橘樹西行法

師所拜跪獻歌

吉記曰壽永二年四月十五日今日崇德院

宇治左大臣爲崇靈神建仁祠有遷宮以春

日河原爲其所保元合戰之時彼御所跡也

今按春日河原栗田宮應仁之亂滅

近衛院 諱體仁 在位十四年

編年集成曰久壽二年七月廿三日崩于近

衛皇居年十七八月朔日葬於圖山西野御

骨安置知足院

百練抄曰長寬元年十一月廿八日奉渡近

衛院御骨於鳥羽東殿美福門院御塔本安足院 在竹田村安樂壽院今二重塔下納御骨御石體現存

後白河院 諱雅仁 在位三年

紹運錄曰建久三年三月十三日崩年六十

六十五日葬蓮華王院東法華堂

百練抄曰十三日乙酉寅時法皇崩于六條

殿準仁明例可有亮陰之由被召仰了十五

日丁亥法皇凶禮也以御平生之儀奉渡蓮

華王院東法華堂依御遺誠不被憚重日

康富記曰文安元年三月十一日辛酉被立

山陵使者云後白河院山陵法住寺使四條

宰相隆遠卿次官右少將藤原成任

今按法住寺者後白河法皇舊院嘗爲木曾

義仲焦土其後遷居六條殿崩御後點法住

寺施建法華堂故法華堂亦號法住寺歟

一條院 諱守仁 在位七年

編年集成曰永萬元年七月二十八日崩于

一條院

編年集成曰永萬元年七月二十八日崩于

二條皇居年二十三八月七日葬香隆寺長

香隆寺即今寺持院小松原之地与千木野十二坊邊舊寺訓也世俗爲河寺非矣

百練抄曰嘉應二年五月十七日二條院御

骨自香隆寺本堂渡二昧堂作堂以一條皇

后崩御殿左大臣渡造之

或曰二條院御基在舟岡北麓所謂香隆寺

長野者是耶上有五重石塔近世嗜茶千利

休取九輪爲已塔直聚光院又塔穿處爲

手水鉢不幾利休逢禍

第七代
六條院 諱順仁
在位三年

編年集成曰仁安元年七月十七日崩年一

二并二日葬東山邊在哥中山清閑寺或云今稱高倉寺

明月記曰清閑寺小堂抑是六條院御基所

堂本按一代要記云安元二年七月十七日崩年十三童

第八代
高倉院 諱憲仁
在位十二年

平家物語曰治承五年正月十四日崩于六

波羅池殿年片一火葬東山麓清閑寺

明月記曰治承五年正月十四日未明恭說

云新院已崩御依庭訓小快日來不出仕今

聞此事心肝如摧文王已沒嗟呼悲矣情思

之世運之盡歟云今夜渡御邦綱卿清閑寺

小堂抑是六條院御基所堂云如何如何聞

及事不幾公私出交雜人見物落淚千萬行

內大臣通親并駕記曰がキリニナラセ給ヒテ後

ノ御事ナト仰ラレラクトテ邦綱ノ大納言筆ヲ執

テ日ノ憚ライハス三日カ中ニカクレマイラセフタカ

リモイハスダヨリアラシ所ニラサメタテツルヘキ仰

アリ其夕六波羅ヨリ清閑寺ニ移レタテツル

殿上ニテマツ後ノ御名ノ定アルニツケテモ高倉ヲ

カナル大路ニテ浮名ノ御カタミニ殘リ東山イダ

ル峯ニテ限ノ御スミカト定ラルント思フモカナレ

ク小夜モ良深ユキヲ御前傍ナト衆リ集リテア

ルヘキ御ヨソホヒトモパテニレカハ常ノ御車サレヨセ

テアヘナクダテマツリレホト近衛舍人トモタチモ

タテマツル杖モナク櫻躰ノ聲ハ別ラ忍啼ニカヘ朝夕

ナレツカウツリレハ八年來ノ宮仕ヲ今夜ニ限リツ

巴嶽ニ裳ヲ霑ス猿ノ叫ニカハラス鶴ノ林ニ新盡ル
烟ニトヒテ常ニニカハラスアリサモサスカニシカ

ソカチチノ道ヨリ行ノムルアトモホヘス峯ノ雪ヲ

ノ水ヲフミワケテニラサリシ山ノフモトニ空蟬ノ御

歌ヲサメタテツル僧ノ念佛唱アヒタルモ靈出

界ノ法ヲ説シニハ入學無學ノ羅漢ノアツマリシカト

覺ヘ鉦ノ音ノコカレニキユルモ祇園精舍ノ無常院ノ

心地ス光ヲカヤキシ玉ノ御車モ夜ノ烟トハカナクタ

ナノホル色ヲヨソヒレ錦ノ御席モ春ノ若ニ長ク埋レ

テカトキノナタテツラサリト盡モ思愛ノ思ハカキ

リナケレト生死ノ界ニカハリニケレハ妻子珍寶及王

位ニコトニ御身ニ從フ者モナクタラクリラク山ノ中

ニ御ワサノコトハテニシカハユクリナキニ昧僧ニアツケ

ヲキタテツリテ法華道場ヲチラサメ各ユキワカレニ

キ末ノ露本ノ雪ヲクレサキタツタニハレメストイヒ

ナカラヲモハサリキ山ノ麓陵原ヲ君ノ御アリカトラモヒ

北芒ノ露東仙ノ烟ヲ君ノ御カタミニナリムヘシトハ

百練抄曰建保二年五月卅五日於天台座

主吉水坊有如法經十種供養是奉爲高倉

院御菩提後鳥羽院上皇殊抽敵慮與僧正沙汰先院

御陵以下天台所々可被安置云

今法華堂退轉御廟上有大楓樹

安徳天皇壽一十在位五年

紹運錄曰文治元年三月廿四日於長門亦

間關源氏兵逼入海沒年八在長門國豐山郡赤間關

後鳥羽院壽一十在位五年

三日爲東夷之沙汰奉移隱岐國延應元年

二月廿二日崩于隱岐國年六十三

東鑑曰御年六十同廿六日奉葬

或曰隱岐國海部郡葛田山源福寺有御廟

四方喬木鬱然

百練抄曰延應元年二月廿二日隱岐法皇

崩御春秋去承久三年以後已及十九年天

下貴賤誰不傷哀哉五月十六日乙酉隱岐

法皇御骨左衛門尉能茂法師奉懸今日奉

渡大原。籠禪院云

今按禪院。勝林院也。勝林院。後鳥羽院御骨所也。事見後花園院下。

後鳥羽院御骨所也。事見後花園院下。

續古今和歌集哀傷哥

後鳥羽院カクレ給フテノヨ

順德院御哥

ホリニレ春ノ霞ヲレタフトテソム衣ノ色モハカナシ

大原ニシサメ奉ルヨレ聞ヘケレハ

イル月ノオホロ清水イカニレテツイスヘキ影ヲトムラン

春ノ夜ノミレカキ夢ト聞レカトナカキ思ヒサムルトモナシ

吉續記曰。文永十年七月晦日。今日依異國

事。彼發遣山陵使。大原參議藤原朝臣公孝

左近將監源賴基。

寛永年中。後水尾院命羣臣詠和歌。以隱岐

御舊迹。水無瀬中納言氏家卿爲敕使。

山城國山崎西南水無瀬殿者。御泊世時數

所遊幸也。

後上御門院就其地。尊奉神號。宣命曰。

天皇恐美恐。掛畏。後鳥羽院乃靈祠。

賜奏。久謬。氏以叢余身。氏寶祚久保。知於

澆末世。氏聖運益。出之。寤。毛寐。乾道。平祈

利。且。余。夕。余。廟恩。手仰。岐奉。余。抑王事。乃監

映古。有。留。又武政。乃善。岐。古。無。岐。近。曾。利。強

我起。氏黎民困。利。當歲。余。天曜變。氏志地祇動

利。水涸。氏旱甚。大。余。火熾。氏。災或興。留。愛

小元弘建武。利。以來。多。聖怨滿。世。氏亂國。之

給。上。有記文。余。依。氏。四海不艾。須。一朝不朴

留事者。偏。余。由期。此。今有所思。氏。以坐所號

氏水無瀬神。上。申。波。可宜。之。崇德院。乎崇

奉。利。栗田宮。止。勸請。世。例。毛。存。須。便。往。日

乃蹤跡。乎。逐。氏。當代。乃規模。余。資。何。乃難

良。何。曾。幸。余。加。良。所念。行。氏。余。故。是。以。吉

日良辰。乎。擇定。氏。正。二位。行權中納言兼兵

部卿藤原朝臣教國。左近衛權少將正五位

下藤原朝臣濟繼等。乎。差。使。氏。恐。美。恐。奏

賜者。久。奏。

明應三年八月廿三日

此宣命者新文章博士章長州之菅氏家說

上御門院譯為仁 在位十二年

紹運錄曰承久三年閏十月十日奉移土佐

國片四日改阿波國寬喜三年十一月十一

日崩年三十七。

今按訪御葬送地于阿波國人不知知者或

曰板野郡土佐泊里浦無養村有土御門院

陵平地積石相傳帝自土佐遷阿波宿此地

故前土佐泊

有云阿波美馬郡伊谷山土御門御葬迹也。

明月記曰天福元年十二月十一日辛巳承

明門院上御門院月來御經營金原御堂纔被終功供

養聖覺件所被奉安故院御骨被止此堂御

遺誠云

增鏡曰寬元元年十月十一日於金原御八

講土御門院御十三回忌也承明門院行啓

上達部殿上人叅集

吉續記曰文永十年七月晦日今日依異國

事被發遣山陵使金原宮內卿藤原重氏散位源則雅

或曰金原在山城國乙訓郡西郊向日明神

半里許西海印寺村南其十八町西有柳谷

觀音堂金原御堂者是耶非耶在阿波國

今金原村有州堂無御堂蓋此邊別有故

耶期宅日正之法華堂在山城國乙訓郡與海印寺村

順德院謝守成 在位十一年

紹運錄曰承久三年七月廿日奉移佐渡國

仁治二年九月十二日崩於佐渡國年四十八

或曰御廟在雜太郡真野山法華堂在山城國乙訓郡大原來迎院後山

百練抄曰寬元元年四月廿八日甲戌佐渡

院御骨康光法師奉懸畢渡御大原云

後堀河院譯茂仁 在位十一年

編年集成曰文曆元年八月二十六日崩年

二十四二十七日葬觀音寺在泉涌寺界內大迎院持山

皇年代私記云同片八日自持明院殿移月

輪殿葬之今按月輪殿在東九條

四條院 諱孝仁 在位十年

紹運錄曰仁治三年正月九日崩年十二

類聚大補任曰正月廿五日丙申四條院御

葬送月輪山莊我禪坊

九生塔石碑古物在月輪山莊
雲龍院南今謂其傳坊谷我禪
改築也

今按日輪山莊我禪坊東山泉涌寺也

增鏡曰葬四條院於東山泉涌寺爲御菩

寄附御莊時人夢俊苜告曰我起妄念受人

界生至帝位欲助我寺今果成我願

冰門良忠決疑抄裏書曰必其報子カハサレ

トモ其事ニ心深スレハ其ニ報ヲ受也不知憚ア

レトモ泉涌寺我禪上人ハ四條院ト生タト申ス

人アリ知ルニ有多故一六上人拜後堀河院御

位時行幸深ク感タリケリ一六四條院三歲御

時生月日時二東ニ向テ平坐ニ居レ前生ヲ問奉

ル宮我禪ト答給ヒタリケリ三六上人モ四條

院モ人根ヲ好食玉ヘリ依之崩御ノ後良平大臣

御計トシテ求圓坊ヲ名テ殊ニ存スル旨アリ御

墓ヲ泉涌寺ニ可立云

今按地神三代以來有山陵所以厚葬也嵯

峨天皇以來或無或有所以薄葬也其後

然葬於凡舍雖非古風以御墓在寺中不

守戸陵戸免日波之難然及禪宮消歇御墓

俱與滅爲可惜也幸寺全御墓長存如泉涌

寺者稀矣

後嵯峨院 諱邦仁 在位四年

編年集成曰文永九年二月十七日崩于嵯

峨壽量院年五十三十九日辰夜御葬送

增鏡曰十八日葬於藥草院

紹運錄曰崩於龜山殿別院藥草院

皇年代私記曰別號藥草院

今按增鏡曰龜山殿寢殿戌亥有藥草院東

有如來壽量院 在天童寺中田址考云方丈北雲原菴西之
或云勢仙骨千金原法華堂可考

後深草院 諱久仁 在位十三年

紹運錄曰嘉元二年七月十六日崩年六十

二 今安樂行院南寺墓等菴之地
月輪山在遺跡千地福寺中

增鏡曰七月十六日崩于二條富小路明夜

渡於深草殿御葬送于伏見殿

康富記曰文安元年三月十一日辛酉被

山陵使者云後深草院山陵源草法華堂

龜山院諱恒仁在位十五年

紹運錄曰嘉元三年九月十五日崩年五十

七法華堂在天龍寺中後醍醐帝同所遷仙場東方相並小土藏敷地是故

增鏡曰十七日火葬龜山殿上山建法華堂

安御骨又詳見五代帝王切語

後宇多院諱世仁在位十三年

○左

皇年代私記曰元亨四年六月二十六日崩

於大覺寺年五十八二十八日葬蓮華寺

傍山在蓮華寺中後醍醐帝同所遷仙場東方相並小土藏敷地是故

或曰今五智如來山頭安不動窟歟

伏見院諱世仁在位十一年

皇年代私記曰文保元年九月二日崩於持

明院殿年五十三四日火葬伏見

後伏見院諱胤仁在位三年

紹運錄曰延元元年四月六日崩於持明院

殿年四十九

今按御葬送之地不詳沙河西南八町許

見以北田有陵名而不知何帝陵疑後伏見

院御墓所乎大英所唯城野化野念仙寺近手山納唯城帝遺骨若此帝御墓地乎

後二條院諱邦治在位六年

皇年代私記曰德治三年八月廿五日崩壽

二十四葬北白河殿

今按北白河殿圓覺寺耶拾芥抄曰圓覺寺

北白河百萬遍知恩寺東方一五

花園院諱富仁在位十年

花園院諱富仁在位十年

園大曆曰慈嚴僧正記貞和四年十一月十

一日太上法皇於仁和寺菰原仙居晏駕仙

年五十二日來御脚氣御長病也同十三日

御葬禮先幸太子堂此內內御幸儀也御興

也雲客少少供奉於十樂院上山構山作所

奉養之御佛事等依御遺命於彼堂設修青蓮院御構於東南上坊篁中智恩院方丈境地等

仍於菰原殿者無御中陰儀上古松四株存

或曰太子堂速成就院也本在大谷十樂院

青蓮院別號也。十樂院上山者。今智恩院。
後醍醐天皇諱尊治在位二十一年。

太平記曰。延元三年八月十六日丑刻崩御。
奉葬吉野山麓藏王堂。良林奥。

延元二年。北朝曆應二年也。時御年五十。
今按。山陵在于如意輪寺後圓丘方十餘丈。

拱水叢生。寂寂傷心。

光嚴院諱量仁在位二年。

紹運錄曰。貞治三年七月七日崩於丹波國。

山國年五十二。

太平記曰。御出家。住伏見。興光嚴院以其近。

都去。栖隱山國。崩御後。光明院起并宮。自伏見往荷御棺奉葬於後山。

或曰。御墓在山國常勝寺。丹波國桑田郡山國庄并戶村。

皇年代私記曰。光嚴院御菴號也。

紹運錄曰。以此御菴號被擬追號。依遺教也。

光明院諱豐仁在位十二年。

紹運錄曰。康曆二年六月廿四日崩於勝尾。

寺御草菴。日來奉號。光明院殿。不以此號。不可及。別諱號。由御遺教。云春秋六十。

或曰。近大坂。則奉行興。方古屋新十郎見。紹

運錄。問御草菴跡。于勝尾寺僧。僧時不知之。

歸山。問一寺衆。皆默然。一比丘曰。我前年結

茅。時得古石塔銘。曰。光明院。以為凡卑之石

塔。撤之。乃我所居之地。石塔亦在我居傍。片

是。手於是驚取。彼石塔安本處云。在勝尾寺封境之內。

崇光院諱興仁在位三年。

紹運錄曰。應永五年正月十三日崩。年六十一。

三。在紀伊郡指月後山。林兒長老屋敷地。即大光明寺址。陵存于竹林中。

今按。御葬送之地不詳。或號伏見。法皇。今伏

見。近御香宮。民家。後圓鑄鳳鳥塔。恐是陵物。

後光嚴院諱弘仁在位二十年。

紹運錄曰。應安七年正月廿九日崩於柳原。

仙居。年三十七。在後名郡泉涌寺中。雲菴隱後山。

後圓融院諱緒仁在位十一年。

紹運錄曰。明德四年四月廿八日崩。年三十。

六、在前同所

薩戒記曰。泉涌寺。偏為公家御寺。後光嚴院

後圓融院兩代御陵在此。寺中又有御影。

後小松院 諱幹仁 在位卅年

紹運錄曰。永享五年十月廿日崩于洞院。仙

居。年五十七。

康富記曰。文安元年三月十一日被立山陵。

使者云後小松院山陵。泉涌寺使左大辨益

長卿次官左少將藤原季春。在前同所

今按泉涌寺別院雲龍院有後光嚴院後圓

融院後小松院三代御墓。南上西向御墓上

各載松

稱光院 諱實仁 在位十六年

紹運錄曰。正長元年七月廿日崩於土御門

皇居。黑戶。年卅八。

皇年代私記曰。同月九日巳卯。奉葬泉涌寺。

晦日御拾骨。中納言經成卿懸御骨。奉納深

草法華堂。在前同所

薩戒記曰。八月十七日丁酉。被行稱光院五

七日御法事。七僧法會也。其次可被供養結

緣經。御有施料。或利奉有人。或付廟。不同也。

參安樂光院。室町北行。自武者小路經

有橫小路而行。一町路北有御寺。西大路

又曰。此御堂前能登。宇藤原基賴草創。其子

大藏卿通基朝臣建立。于時鳥羽院御也。

始號持明院。改號安樂光院。其後有子細御

當院御管領于今公家進止也。御堂而九間

擬淨土九品。有四十八柱。擬四十八願也。凡

莊嚴微妙。然而破壞年尚尤可悲者也。

後花園院 諱彥仁 在位卅六年

紹運錄曰。文明二年十二月廿七日崩於室

町亭泉殿。年五十二。始奉號後大德院。後日

改爲後花園院。

山霞曰。廿七日夜ヤク五更ニヲヨヒ侍レハシ

テ。泉殿ヨリ聖壽寺ニ出レ奉ル。御沐浴ナドハ

テ。供奉ノ人々退出シ侍リ元日ハモトヨリ亂

世ノ始ヨリ節會以下ノツリコトモナケレト年ノ
始ハ公武メデタキ御祝事トモサテソノワタラセ給
フニ思ヒカケヌ御經營トモ禁中ニハ諒闇ノモヨシ
ナリ。室町殿ニモカギリアル儀式ノ御イハヒトモ坑
飯イレクモ略セラレケルトカヤニ日申ノ刻ニ悲田
院ニテ御葬送ノ儀アリ。明德ノ度後圓融院ノ
御時鹿園院殿供奉ミケル御例ニミカセテ
此度^{東山殿}准后御供奉アリ^{御山門}前内大臣^{直木}
以下ノ月卿雲客直衣也冠布衣等アヒシハレリ。

前王廟陵記卷下

五八

上下ノ北面常ノコトシ聖壽寺ヨリ御車ニテ御幸
アリ。前内大臣御簾ニ候セラル度々御幸各装
束ノキヨラフツクレテアリシヒキカヘタル御行粧
准后モ御ワラクツラメレテ御車ノ後ニ供奉シ給フ。
ウチシホレタル御道スカララ見タテマツル貴賤トニ
ノカスナラヌ下人ニテモ涙ヲナカレ侍レハヤ彼寺ニ
ヲクリツケマシケケリ。代代泉涌寺ニテ後ノ御ワ
ザアリシニ此度急劇ニ彼寺炎上レ侍ルニヤシカル
ベヤ老僧モ侍ヲストテ元應寺ノ長老接取院

惠忍 仰ヲウケタマハル。ミツ御車ヲムカヘタテマツリ
テ。僧百餘人堂前ニタチワタリテ陀羅尼ヲミテ
ラル又本堂ヨリ西ニムカヒテ御葬所へ御幸シ時錫
杖ヲハシゴノホド准后南ノ方ノ庭上ニ御蹲踞
リ。カル御キハニテ威儀ヲミダシ給ハヌ御作法
見タテマツルニモイマダ御存日ノヤウニテ百官カツハ
夢ノ心地シ侍レボドナク煙トナリタマヘル。右ノ詞ノ
曲有歌數首。今略之。

前王廟陵記卷下

〇九

或曰當時悲田院在于京北其後遷悲田院
于泉涌寺中今大應寺昔悲田院之地也竹
林中尚有封壙

親長記曰文明三年四月廿一日公入原御
墓^{法華堂前也}後在圓院御墓^{重石塔法華堂異十餘丈}

今按法華堂修明門院^{後鳥羽院所建也}
今在實光坊北^{法華堂在登樓}阿弥陀堂^{橋南}

増鏡曰大原法華堂者爲修明門院御沙汰
渡故院水無瀬殿故院臨終所持桐御數珠
尚在^{在丹波國東田郡井戸村光嚴帝御陵西傍}
^{大溪乃悲田院今上京西陣扇屋早大應寺}

余嘗於大原明法華堂三院御舊跡有法華堂有後鳥羽院御石塔無順德院後花園院御墓余亦問法華堂為何帝所建乎不詳後閱增鏡而後知法華堂奉為後鳥羽院所建乃御骨納於此堂別不可有御石塔蓋順德院御骨亦納于此堂矣今俗云後鳥羽院御石塔者親長卿所謂法華堂前後花園院御墓耶

後土御門院

高倉院
仁治元年

○幸

紹運錄曰明應九年九月廿八日崩於土御門皇居黑戶年五十九十一月十一日葬泉涌寺今日自內裏北御門東方築階奉出御車依無用脚四十餘日奉置內裏黑戶布代事也御中陰伏見般舟三昧院後柏原院賜後光嚴院宸翰三略秘抄於佑々木高賴其本大外記清原枝賢與書曰去明應第九仲秋下八日後土御門院崩御于時禁闕殊外依御不如意御送葬延引之處佐々木

管領源高賴朝臣奉調進其料依此勝仁親

王初冬下五日踐祚仲冬上旬奉葬先帝於

泉涌寺爰被感高賴至忠賜桐菊御紋并後

光嚴院宸筆之三略秘抄加之聽昇殿敕詔

曰今慶祐忠功條至永子孫不可混自餘之

諸臣

在泉涌寺後山御印
正親帝帝追四代御廟相並

菅原和長卿明應凶事記曰泉涌寺葬場殿

檜皮葺也北面有御車寄其在所出門跡西

南角也檜皮葺殿舍一間四面也棟實形也

入前正廟

以金彩玉其中有火爐

六角
白壁

四方有門白木

作鳥居也扉并脇壁皆檜牆也四方有額以

金彩字東門額發心南門修白西門善提北

方涅槃以涅槃門為入御之御門云十一日

辛酉今夜御葬禮也御車

以白絹裝之
葉也先例出納所

為隱也路次正親町西行

宇町南行近衛東行東洞院南行至七條河

原

懸海

東行柳原

法性寺

南行又東折鍋良小

路前東行

云

寺中之儀先於惣門外稅牛又

奉手引先經葬場殿北而東行至良南折指

寄御車於佛殿西面壇上先後乘僧

退下次御車寄大臣華山院左府與禁中司役參進

御簾先立廻御屏風於壇上有下御之儀

向又黑衣沙汰也奉昇御棺謂御於佛殿內

奉乘寶輿云此後僧衆行事奉昇寶輿出

殿至葬場殿即入北面涅槃門大爐三匝而

下炬念誦等終云寶輿居爐上之時僧衆皆

出葬場殿即閉涅槃門既發煙云自今日於

伏見般舟院御中陰法事被始行十二日壬

戌今朝即御收骨儀也上卿甘露寺中納

傳奏云今即有分散儀一分如例上卿持之

懸頭云今奉籠深草法華堂此法華堂者安

也於本院者久退轉此一堂相殘又一分雲

計也可定修行兼持法華堂云云

龍院又一分般舟院皆寺僧賜之又一分山

國常勝寺被籠之雖然寺僧不參之間無其

沙汰比丘尼御所云於火屋面面取給之雖

非先規不及制之云

後柏原院

譚勝仁在位廿六年

公武相交記曰大永六年四月七日辰終刻

許崩御甲子歲前夜自常御所奉移小御

所以相接內侍所奉移記錄所北首亦出侍

所為御跡方不可然

二水記曰七日卯刻遂以崩御也御年六十二

廷臣只惘然悲淚哭聲皆以消魂六片七日

今日御三七日也光陰如夢者歟御追號事

可為後柏原院之由有其沙汰今度依御各

被撰申訖九條前關白關白近衛殿左大臣

德大寺御追號後柏原院治定了柏武天皇

號柏原帝也五月三日天陰今夜可有喪禮

御幸也成刻已可有御出也仍前左府以下

雲客一列而立西面此時御車奉引出不懸

引先是諸卿蹲居了次第相隨於築垣北築

方一間許今日被外懸牛歟路次正親町西

攘之於此懸御牛云

行至町南行近衛東行東洞院南行從六條

河原經法性寺至御寺泉涌寺警固武上在

門內外內藤御車奉寄法塔之前則奉

終御龜歟隔入不隨見供奉衆各北方列立

委注頃之御幸僧衆前先是各躡居此時由

寺中納言移著端座令敷軾外訖參進有條儀云後聞遺詔謂云任葬司山陵國忌素

服舉哀被停止御度御印

後奈良院在位年

緒運錄曰弘治三年九月五日崩春秋三十

一葬泉涌寺御度御印

欲退之程各退散見聞貴賤如雲如霞前後

不分明太以狼藉也予不合期仍不及乘物

兩輩誘引令步行歸洛了于時卯半刻也

後聞爲御骨甘露寺民部卿傳奏勸修寺大

納言源宰相中將等相留四日已刻源宰相

中將乘輿懸御骨於肩奉收深草僧衆請

取收之仍不見其所云御中陰事舊例皆以

爲泉涌寺而明應度始於般舟院被修了今

度泉涌寺再三有訴訟雖然有仰了四日於

般舟三昧院自今日御中陰被始之午時

泉前中納言永宣少納言範久朝臣等赴城

南御中陰之間可祇候也八日今夜可有

御倚廬也先有陣儀通節奏并細

寺中納言移著端座令敷軾外訖參進有

條儀云後聞遺詔謂云任葬司山陵國忌素

服舉哀被停止御度御印

後奈良院在位年

緒運錄曰弘治三年九月五日崩春秋三十

一葬泉涌寺御度御印

正親町院在位九年

帝王略記曰文祿二年正月五日崩葬泉涌

寺御印

今按泉涌寺有後土御門院後柏原院後余

良院正親町院四代御墓相並南上西向御

墓上表以樹木

緒運錄曰元和三年八月二十六日崩七十四

同九月廿日葬泉涌寺

後水尾院 第百九代 諱政仁 在位十八年

紹運續錄曰延寶八年八月十九日崩御八

十五閏八月八日奉葬于泉涌寺

明正院 第百六代 諱興子 在位十四年

紹運續錄曰元祿九年十一月十日崩御七

十四奉葬于泉涌寺

後光明院 第百七代 諱紹仁 在位十一年

紹運續錄曰承應三年九月廿日崩御二十

二奉葬于泉涌寺

後西院 第百八代 諱良仁 在位八年

紹運續錄曰貞享二年二月二十二日崩御

四十九奉葬于泉涌寺

靈元院 第百九代 諱識仁 在位廿四年

紹運續錄曰享保十七年八月六日崩御七

十九奉葬于泉涌寺

東山院 第百十代 諱朝仁 在位廿三年

紹運續錄曰寶永六年十二月十七日崩御

三十五同七年正月十日奉葬于泉涌寺

中御門院 第百十一代 諱慶仁 在位廿六年

紹運續錄曰元文二年四月十一日崩御三

十七奉葬于泉涌寺

櫻町院 第百十二代 諱昭仁 在位十二年

紹運續錄曰寬延三年四月二十三日崩御

三十一奉葬于泉涌寺

桃園院 第百十三代 諱遐仁 在位十五年

紹運續錄曰寶曆十二年七月二十一日崩

御二十二奉葬于泉涌寺

後櫻町院 第百十四代 諱智子 在位八年

紹運續錄曰文化十年閏十一月三日崩御

七十四同年十二月十七日奉葬于泉涌寺

後桃園院 第百十五代 諱英仁 在位九年

紹運續錄曰安永八年十月廿九日崩御二十

二同年十二月十日奉葬于泉涌寺

光格天皇 第百十六代 諱兼仁 在位卅七年

紹運續錄曰天保十一年十一月十九日崩

御七十同年十二月廿日奉葬後月輪山陵

在泉涌
寺後山

仁孝天皇 諱惠仁
在位廿九年

紹運續錄曰弘化三年正月廿六日崩御四

十七奉葬于弘化廟 在泉涌
寺後山

八前王廟陵記卷下

九八

補闕

饒速日尊白庭邑基舊事本紀曰天照大神太子正哉吾勝勝速日天押穗耳尊高皇產靈尊女栲幡千千姬命為妃誕生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊天祖以天璽瑞寶十種授饒速日尊此尊稟天神御祖詔乘天磐船而天降於河內河上考峯遷坐於大倭國鳥見白庭山既神損去高見產靈尊以其神尸骸於天上取竟饒速日尊以夢教於妻御炊屋姬云汝子不吾形見物即授天璽瑞寶矣亦天羽羽弓天羽羽矢復有神衣帶手貫三物葬歛於登美白庭邑以此為墓者也

前王廟陵記卷下

補闕

今按饒速日尊雖非繼體之君據舊事紀觀之則瓊々杵尊兄也亦先瓊々杵尊天降日以自先代有盡如在之禮社而未聞祭其墓例可謂遺憾

飯豐天皇葛城埴日陵

日本紀曰清寧天皇五年正月白髮天皇崩是

月皇太子億計王與天皇讓位久而不處由是天皇姊飯豐清皇女於忍海角刺宮臨朝秉政自稱忍海飯豐青尊冬十一月飯豐青尊崩葬葛城埴日丘陵

紹運錄曰皇代曆云飯豐天皇不註諸王系圖依和銅奏聞入扶桑略記云此天皇不載諸王之系圖但和銅五年上奏日本紀載之甲子歲二月生年四十五歲

今按和銅五年上奏日本紀載之此日本紀

前王廟陵記卷下

者非今日本書紀今日本書紀者相後和銅

五年九年養老四年奏覽甲子當作丙子四

十五歲當作四十八歲

大友皇子後天智天皇帝諱伊賀白鳳二年壬申七月廿三日崩年二十五在位七ヶ月

今按自天智天皇十年十二月三日期日至

明年七月二十三日皇子令乎凡八箇月後

日本紀大智天皇臥病以崩之甚矣名天武

天皇授鴻業乃辭讓之曰臣之不幸天武天皇

病何能保社稷願陛下奉天下附皇后仍立

蒲生秀實 著

山陵志

修靜庵舊刊本

據修靜庵舊刊本影印

山陵志

九志
二

九志

神祇志 山陵志 姓族志 職官志 服章志
禮儀志 民志 刑志 兵志

有九志山陵以稿先成故刊之職官亦畢尔

修靜菴藏

山陵志 九志二

古之帝王其奉祖宗之祀而致仁孝之誠也郊以配乎天廟

以享乎祖配乎天則作之靈時至尊至嚴禮弗敢瀆

享乎祖則立之大官以置祝宰百世弗毀特報其有盛德公

烈者焉如伊勢及賀茂諸廟是也而其餘各就山陵以時將常典有事而

禱告於是諸陵察之職治部省掌喪祭之禮供幣之數及陵戶

名籍與其禁令而正其兆域脩其垣溝虔其所職其有儀則

諸陵式謂其世之親者曰近陵諸省曰遠陵其供幣之數亦從

以申省省中大政官然後領幣即日遣奉乃謂之特祭之祭且

陵墓之側其有原野者察仰守戶并移所在國司共加除之

使失人無相延燒又其兆域垣溝有損壞者令其修理而

專當官人更加檢校固不得葬埋臣庶及耕牧獵採也

前之荷讀為登登成也謂年報成熟蓋為新以其先成熟之時

故謂之荷讀也荷讀或讀為初穗也夫初穗之祭後世雖

矣謂之神稻荷其取成熟之義可以徵矣故曰山陵猶宗廟

也苟無有之則臣子何仰焉山陵中神言諸神皆不置

臣子惟仰乎此而祀焉則其禮隆矣律謀毀山陵謂之謀大逆

與居八虐之一焉則其刑重矣是王者之以孝治天下所由而

基也胡其可不畏敬哉上古大朴山陵之制未備瓊杵氏

炎見氏彥波瀲武氏邈矣三陵皆在日向國自大祖至于孝元

猶就丘隴而起墳焉自開化其後蓋寢有制及垂仁始備

下至于敏達凡二十有三陵制略同焉凡其營陵因山從其

前方後圓為壇三成且環以溝

延曆十一年以廢太子早良為

然也壇不必三成舉其半言之

夫其圓而高者如張蓋也頂

為一封即其所葬方而平者如置衡也其上隆起如梁輈也前

後相接其間稍卑而左右有圓丘倚其下壇如兩輪也及至後

世民睹之而莫識識焉猶謂曰車冢蓋亦以是也

其狀率皆圓則人臣墓制亦從可知然其家室中不為帝陵也

也何者其類間有之而其非史及諸陵之所安莫不為帝陵

物類是皇后呈于若重臣別初所許或帝一收葬其故陵南

也自 用明至于 文武凡十陵特變是制但圓造之穿治玄

室於其內而築之以聖覆之以巨石石棺在其內南面故其戶

南向而累石為之羨道其制嚴密既已如是是以不復環之以

溝也班鳩大子治壽藏于河內磯長即是制也當時大子自負

聰明有才藝居作者之聖於舊章多所變替乃若山陵蓋亦然

歟 漢書載大子廢長墓大子傳曆徒然州並言其志歲焉

異唐之制而所為然其制不惟限於帝陵下及乎諸有

位才用但視之帝陵必卑而小所以明等者中大化一年有

認高五尋上臣下其內皆準于上外城上臣方上外城方九

而下臣方五尋高二尋半大仁小仁其外城長九尺高廣四尺平

而所封馬大禮以下小智以上亦準大仁五尋是因大子之

所創而為之度也其工役王以上十人上日而返次半之五日

次四寸之棺五寸之梓又曰棺周於衣梓周於棺七周於梓喪

也而春秋戰國之間諸侯強僭日甚羨道周謂之隧隧者王家

之高壯堅密以務其修至秦始皇而極矣西京雜記廣川王去

手押梓滑液如新又幽王冢其高壯美門既開迄于南都更復

舊制惟其所仍正南面而已矣古之大喪厥紀無傳然觀乎山

陵道制及石棺暴露者則其牆妻衣衾珠襦玉匣與夫銘旌鼓

吹之儀祭奠明帝之數雖一無見文獻之可徵猶足以知其禮

物之有在焉而至如其用殉雖曰甚慘其所由起亦必有以矣

蓋國初佐命功臣與宗社同休戚其忠誠惻怛之心曷嘗不期

以死終始哉方臨大喪自刎陪葬以遂宿志者或有之而流風

慕尚因仍成俗卒至於使生平所愛必例從死焉乃以 垂仁

帝之齊聖仁恕也而為之惻然不忍其臨穴惴惴無罪而就死

地誠能發德音建明制代以土物置土師臣以司喪紀且石棺

之設 先朝既有而製造未有專職至是置石作連以治焉

垂仁帝 八年倭彥彥用近臣為殉生埋之其呻吟之聲旬

月不絕 帝聞之則然乃詔羣臣曰生之所愛死而為殉不亦

慘乎此雖古之遺制安可遵用自今鎮止之明年 皇極廟謚

曰殉死之俗前知不可今奉葬也為之如何野見宿禰奏請以

土物代之 帝嘉之立為永制以野見居其官乃因官賜姓土

師氏大權姓氏錄方此時武真利根獻石棺賜姓石作連然石

棺暴露 不昭陵以下惟觀之 其卜瑩兆程土物而與徒庸

則非始於此故曰 先朝已有

也必徵於天下諸國然民以其哀如喪考妣乃咸子來服役無

以為厲 當時 應神陵東北之隅管藥未定處 名曰製阪上人謂之

後 此也又 德陵上四處名尾張谷即尾張 孝德中興爰

役天不華其功者然也口碑所存實其屬哉 詳見及 中

制其度凡陵墓高卑之等其工役之課乃有常程 大和帝葬其

宗繼統慮其德之不如古深恤民隱止其役焉 母明帝十

越智以問人太后稱焉而曰我奉天聖太后之遺詔以聖恤民隱不敢與石梓之役冀永世以爲繼成按石梓謂宰故工役之費乃官給之不使徒勞夫惟恤民隱是以能止其

役焉故 齊朋及 天智陵是其治之也無乃從儉乎然而君

子不以天下儉其親而況王者乎且 後朝不敢安之即就其

陵更脩造是亦所以追思繼孝也持統帝元年皇太子幸公

女官大內山陵司見此後與其役焉文武帝元年冬十月修

夫古之俗其狎乎鬼神而瀆齋盟所以求福於冥冥之間固

民性蒙昧之爲而逮乎佛教之行據是攬衆志獲國權舉喪祭

之紀莫不咸爲之所亂而自 持統之喪始行火葬其爲弊也

世以甚矣列子楚之南有炎人之國其國或曰朽其肉而棄之

後埋其骨乃成爲孝子秦之西有儀狄之國其親戚

死聚柴積薪而焚之禮則煙上謂之登遐然後成爲孝子此上

以爲政下以爲俗而不足爲異也夫然則喪禮之喪固有如是

者而彼之所生身壽國或與儲謀同俗故亦行火葬也後世浮

屠之習不之識未以爲與章者乃不深思之過也持統帝之

時中台之僧道昭其死始行火葬矣然彼者及皇都莫于平

外之士固不足怪今至其用諸大喪不亦悲乎

安則其郊野之際負山帶川不甚博其丘阜之形蓋亦宜陵者

鮮矣是以其陵率皆平地之所築而遺詔依例以薄其葬最爾

坏土無復如舊况其火之不必於陵所也餘燼遺骸輒于毛髮

由是遷徙弗一而已既而塔擬山陵僧司喪祭不復奉謚遂停

尊號其自居儉雖如是也至乃鑄造佛像經營如藍務窮莊嚴

尤極奇麗大費國用曾莫之卹嗟夫廢 先聖之禮奉異端之

衛邪行橫作常犯其上動輒構兵不可復制以鴨河之暴沸爲

患京邑汜濫衍溢民弗安處猶得與之並稱反殊劇焉白可

言曰不從朕心惟雙陸邦國憔悴職是之由而自紀綱不振官

失其職諸陵寮廐奉幣使絕而後發陵盜藏無所畏憚戰國喪

亂之際其禍何逼所在仰監遇兵盡殘塔中所藏亦從而亡嗚

乎可勝慨哉幸而其所完以存惟泉涌寺諸陵及其餘二三也

已矣夫喪祭禮之大經也而天下離世多難至乃園陵廢春秋

闕如此之極命也謂之何既自臨大喪而火其葬黔靈車楮梓

宮堂堂禮典委灰燼幾何其不化爲夷蠻哉近世國恤纔止之

自 後光明始後光明帝追聖也如自光明始

於復古不幸相命春秋二十自

山陵志第

時則議依舊時火葬有一民鬻魚爲業者呼八兵衛常聽命八

兵出入官門聞之悲慟數日嗚呼聖天子行在天之靈

也可奈何何且人人非聖人之道也況今大行在天之靈

蓋有疾浮屠氏之虛誕乎異端最甚而其逆紀尚猶從事

所月則吾人爲目不暇不肖從朝議敢諫爭止之不能則身

之於於是奔走於仙洞及執政之門前至痛哭悲泣敢請

大葬以從大行之志也朝議雖爲之改而大葬止焉蓋廢八兵

衛也誠也境况夫有如何事不或上之人不爲則其可憫

以 百王之弊其所革先發乎此如其悉皆復諸禮天將有

待其時而然耶今竊因古圖參覽舊記周視陵地咨問藹藹尚

有可以考見作山陵志

大和山陵凡三十有一所按山陵謂帝王之墓也凡墓皆

以其築成曰都賀以其外歲曰芳賀而山陵以其所尊

奉曰美佐佐岐先稱以美尊之也佐佐岐奉也隨葬故

山陵志

卷一

五〇五

因陵地號之爾即如曰田山東北陵曰今錄之曰某

陵在某地而注其下云云則於文不獲辨陵以地故姑

改之以從謚焉夫謚者自神武至於文武凡四十

有二世是淡海文忠公奉勅所制甘露寺親長日記引

納言藤原通秀故其撰令也公式平出條有曰天皇謚

矣義解云謚者累生時之行跡為死後之稱號即經緯

天地為文據反正為武之類也今是大賢之初謚

式云爾則刊脩之日謚已建斷可識矣古事記成於其公

銅四年而其書未有謚然則其建之當在乎自五年至

養老三年凡八年間矣四十有二世獨不謚帝大友

而代之以神功后若蓋當時以承天武之統而有

所謂也書紀釋引私記云淡海三船奉勅定神武以

來謚然則其書謚其奉勅初在何朝建謚為幾世徒以

神武以來則其言謚其奉勅初在何朝建謚為幾世徒以

是也其所以先載之者有古也神武曰神武之平定中國也

以其功定神武曰神武之平定中國也神武曰神武之平定中國也

曰神武其後世之號曰天子者天下宗主也以其所宗

也安地名也如城彥手觀神武曰神武之平定中國也

名而神武曰神武之平定中國也神武曰神武之平定中國也

大鷦鷯此純乎神武曰神武之平定中國也神武曰神武之平定中國也

配之天而所追號神武曰神武之平定中國也神武曰神武之平定中國也

功長不雅此實乎文也自文忠制謚謚法章章而後不雅

兩且舊典神武之廟號大祖天智之廟號中

宗三善清行改元諱云建德大祖神武之遺蹟近襲

典多特以其有光烈盛德而所號歟元明帝臨崩有

遺詔俾母奉謚而追號直用其所居國都此蓋自謚不

敢當謚也元明陵誌石今暴露移在他所其銘曰

天皇之陵此蓋葬時所號然謚者所以稱君父之德而

臣子之情安敢忍乎以遺詔而終廢其典哉故謚曰

元明然其謚之也意當及乎謚元正而同奉為故其

謚皆以元冠之矣武也其初云太上大皇帝崩聖

佛故不奉謚據當時有此初而觀之若元女皇

雖乃遜位尚非出家非出家則其當奉謚且聖武之

追謚在天平寶字年中元正暨光仁桓武文

德光孝之謚其奉之各當在其後朝蓋皆是葬然

後謚惟仁明謚然後葬明皇帝于深草山陵餘皆不

然聖武其初以出家歸佛不敢奉謚也廢帝天平

寶字二年百官及僧綱上表尊上皇曰寶字稱德

孝謙皇帝尊皇太后藤原氏武后曰天平應真仁

正大后於是追謚先帝曰勝寶感神聖武皇帝

相繼上尊號曰勝寶感神聖武皇帝追號曰天聖國

言謚與下文所云孝謙之號遂為謚焉凡帝王謚號

蓋如此云爾厥後追號有二焉一取官名也一因陵地

也曰平城曰嵯峨此顯宮名也

固其側所之宮曰平城帝之謚曰

不復奉謚非終阼也

三條鳥羽二條九條

官名此凡人主遷位必遷御離宮稱之曰院

院是自宇多以降停謚而朱雀以降院代尊號不

曰天皇蓋原乎此矣後世其終阼者亦崩曰院後一條

為始其後如後朱雀後冷泉

號曰後某亦後一條為始是於一條為之子且承

之統也非即其所至乃其餘不必皆有謂焉

地也因陵地為稱古有之如

後世軍矣惟後曰白河有遺詔稱之然而非陵地

非所遷御官名也蓋嘗造浮屠大像構院安之于白河

無乃其故乎其餘不詳也

必謂臣不敢議君子不敢議父曰有所諱似矣以天子

之尊不曰天皇此果何意哉嗚乎闕大典損國體其大

焉源親房以為非臣子之道其言當矣後世奉謚曰

崇德曰安德曰順德屋屋是已

大祖為神武

在畝旁山東北隅

大祖之平定中國相畝旁東南以為土中營王宮曰橿原官

蓋以其官樹橿而所名畝古事記橿作白橿白橿即橿也又

稱陵所在曰白橿尾上不是移之以官樹則取官名也尾上

者山隅如尾者之上今畝旁山東北隅所呼曰御陵山墳然

而隆起此也

處也今安謚云爾若果神八井之墳其位已人

傳也之御陵乎今呼曰御陵是

可憐而矣夫大非如夫但其狀不甚高莊且不象官車乃以

上古大朴制未備也

家今開其地果有所謂神武田然

町許乃不合是上之名且所謂神武田然

神武田然神武田然又東北二町許有古墳在焉蓋指此也夫

民之無知惟貪地利至乃安望天子陵墓然殆及其石棺懷

懷畏怖不敢侵之遂餘其數畝為一村家

之真田其土乃若是也尚何更管

古名是當時所陪葬或神八井之類

俗其言神武祠神武田在神武田

法。行。以。旁。東。北。遇。老。人。顧。本。謂。口。為。朕。講。大。庚。
 年。三。月。十。一。日。縣。來。誦。法。華。故。貞。元。一。年。大。和。守。藤。原。國。元。
 為。創。堂。宇。謂。國。源。寺。云。夫。其。說。誕。妄。周。子。弟。氏。之。常。然。而。主。
 堂。宇。由。此。創。造。則。神。武。祠。廟。亦。當。周。子。弟。氏。之。常。然。而。主。
 曰。塔。坑。內。就。其。名。而。考。疑。是。當。時。建。以。廟。廟。因。稱。美。佐。武。氏。
 其。下。曰。洞。村。今。看。舊。志。縣。志。相。傳。神。武。陵。宇。一。
 人。也。以。故。其。守。戶。之。子。孫。皆。稱。美。佐。武。氏。不。當。稱。
 轉。美。佐。武。氏。者。稱。美。佐。武。氏。之。子。孫。也。

環是山而有 綏靖陵在西北 諸陵式 桃花島田丘上 陵按

今呼綏善山 綏善是 綏靖之訛也 又名鳥田丘 九丘陵
 之。以。習。便。宜。不。是。即。桃。花。島。田。丘。省。語。也。桃。花。島。史。一。
 敢。作。也。古。事。記。作。衛。田。並。讀。為。關。岐。同。
 地。也。然。此。名。本。非。繫。於。畝。旁。西。北。距。畝。旁。南。可。半。里。有。舟。附。

山陵志第一

十

村旁為鳥谷村 舟蓋後人所添 附亦讀為關岐 因知鳥谷即
 桃花島谷之省語 且 宣化陵有在焉 綏靖陵亦當在
 其近地 而今在畝旁西北 甚無謂 豈其改葬焉 而仍其舊稱
 歟 夫名不虛口 口碑所傳 今說則綏善 省為鳥田 可以為明
 證矣 凡改葬 雖史官失之 尚有其跡之可推考焉 孝昭 應神
 反正 諸 仍其舊號 亦然也 伏山陵是也 不惟是陵也 鳥田
 丘 是慈明寺村地

安寧陵在西南 諸陵式 畝旁山西南 桃花井上 按御蔭井上

陵是以井上為陵 所在然 井之得名 蓋因陵故 為御蔭 今此
 陵呼曰阿彌山 即 安寧所訛 其地古田村

懿德陵在南 諸陵式 畝旁山南 鐵沙溪上 按今呼鐵沙山 以

鐵沙布露溪間也 其地畝旁村 安寧及此陵並有祠 在陵

上 凡陵地建祠奉祀 往往有之 未審其昉於何世也

宣化陵在身狹桃荅鳥阪上 諸陵式 身狹桃荅鳥阪上 陵 桃花

鳥乃畝旁南地 按凡地謂之身 謂高地曰身 卑地曰界 身

身狹之地 因其今丘隴甚狹隘 而名之歟 乃今在南北 為

大身狹小身狹 欽明十七年 置百濟人 於大身 狹者此

之南 頗廣 所謂大身狹 此也 其地相接 桃花鳥阪 故號曰身

狹 桃花鳥阪上陵 凡兩地之卒 不可偏舉 必踰之以兩地

孝德陵 益田池 碑云 左龍寺 謂龍蓋寺也 右鳥陵

山陵志第一

十一

鳥陵即桃花鳥阪上陵 而省其語也 性靈集注 鳥陵為白鳥

引原蓋今原 陵地今為鳥谷村 自此東南 即益田池故地

故云 右之也 身狹之訛 為三瀬 三瀬村 乃在其東 又其東

川村有釵池焉

孝元陵在釵池之島 諸陵式 釵池島上 陵北 是身狹之東 按

應神帝十一年十月 作釵池 然則穿此池 後於築陵 而陵號

乃取於池 池名曰釵 未知其故也 古事記作釵池 中岡 今呼

其池曰釵淵 陵曰中山冢

天武 持統合葬矣 其陵在檜隈大內之丘 諸陵式 檜隈大內

檜隈是身狹東南所謂輕之舊都也 按輕古時益廣

墳此也。今謂其北丘曰阪中。即阪合所訛。推古帝二十八

矣。

居於池心宮。今池內村。即其趾。在噍間山西北。又博多山在

池內西北並蒙之以掖上掖上是此間總名可知矣博多山

今呼天皇山上有祠奉孝昭之祀其地三室村池內村西隣曰室村

室是孝安帝秋津島宮所在今有古墳焉石棺一片墓室於其上里老相傳此亦孝昭陵大孝昭之葬在孝安

之三十六年意不應稍延至此更據舊事記書元年八月葬之則孝安孝思之深蓋初近葬其所居室地朝夕觀望之

及晚年卜地改葬博多矣且其曰三室或仍陵舊號三本為御者尊之之稱

孝安陵在其東玉手丘諸陵式玉手丘上陵北按蓋此間亦

當隸掖上而諸陵式不冠之畧言爾今陵所在曰官山其上

有祠焉玉手丘東南有舊家諸陵式玉手丘上陵北按蓋此間亦

武以為孝安陵非也孝靈孝元二陵未象官車而

孝靈獨先得如是哉玉手丘為玉田是昔時玉田宿禰邑方

山陵志第一 十四

此觀之所謂雖子山蓋武內之丘墳而其孫宿禰之所匿處亦可以備考矣

乃越智西南之地自此其南可指芳野山

右二陵隸于葛上郡

後醍醐陵在芳野山藏王堂東北正統記應仁記年按今呼塔

尾陵昔時以陵前有如意輪塔名之也

右一陵隸于芳野郡

崇峻陵在倉梯岡諸陵式倉梯岡陵無陵地芳野東北多武峯其東北之麓

是為倉梯按崇峻為賊臣所虐即日葬之是不成葬也意

其陵不應比他而今檢之因其以石為玄室呼曰巖屋山名一

赤坂山一頗高壯蓋非一朝所治治壽藏當時已成俗乃若

聖德太子磯長墓蘇我蝦夷父子新漢大陵小陵是也崇

峻陵亦壽藏歟不然葬能得其速如此乎地傍蹊間甚隘不

獲為之兆域諸陵式曰無陵地其此之謂歟

右一陵隸于十市郡

舒明陵在押阪內諸陵式押阪內陵北按今呼壇壇山壇三

成故詳斯名矣

倉梯之北為押阪又其北三輪三輪而北纏向之西是走山

邊道也

崇神陵在山邊道上諸陵式山邊道上陵北曰勾岡古事記按今

呼為向山蓋以勾向字形近以遂謬爾崇神陵旁滋谷村即山邊

山陵志第一 十五

古道而西距今道四町餘

景行陵乃其北相並諸陵式山邊道上陵北按史及諸陵式

崇神景行二陵並但書山邊道上而不言其孰南北也然

今以南者定為崇神則北是為景行可知矣且景行

御名忍代而北陵呼為忍代山即古遺言也古者尚質上下

相名而不敢諱乃若陵號或因御名不一而已仲津山按

神陵山案田山清寧陵曰白髮山此皆其御名也反

而此陵旁柳木村北隣牛養口

右三陵隸于城上郡

光仁陵在田原之東諸陵式田原東陵北城田原是寧樂東南

而寧樂之南乃山邊道也按諸陵式謂之東陵以其對西陵

也西陵是光仁帝之父皇太子墓也及帝之登極正

原村有古墳呼田原別為二村其東村之東有古墳呼曰

墓此即東陵也然其就荒穢侵未耕所象以為官車不可復

見更考之今京郊諸陵惟文德獨象官車其餘莫爾圓丘

而平地之所築無復如舊矣此自光仁既有然歟不必其

殘也

開化陵在寧樂春日鄉平川阪上諸陵式春日平川阪上按

今奈良念佛寺地有古墳焉此也率川其源發春日山經此

南而西北城方面繞五段昔時蓋以郊于京邑過於市廛而

山陵志第一

十六

致如此之陟爾

聖武陵在春日之北佐保山南曰南陵諸陵式佐保山南陵

按今為眉間寺地為之所殘削無完也然猶檢其跡則後

滿圓而前溝方所象官車尚有存焉無北陵何以謂之南凡

地偏處必無以其所偏一方不必取對也仲哀陵無

是也佐保又有西陵東陵東陵是聖武皇后藤原氏西

陵是文武皇后藤原氏文武皇后之陵今大黑紫

其音訛也其遺有刻石面如孤者七枚或云狗耳也非孤占

時人職守官門為狗吠故臨大夜亦以狗耳置祥官旁

聖武后之陵
元明陵在奈保山曰東陵諸陵式奈保山東陵北
元正陵並

在其西曰西陵諸陵式奈保山西陵北奈保乃佐保之西所

謂平城舊都北郊也按距今奈良之西十八町為法華寺村

是皇居趾也二陵即其北今呼在東者為大奈閉在西者為

小奈閉奈閉奈保之訛也大小以言前後之世次

平城陵號楊梅陵諸陵式楊梅陵北當時蓋裁以楊梅而

所號歟乃舊都少西按南陵記云法華寺西南有楊梅天神

祠即其北陵此也按今檢之其形象官車而南面見環

二匹蓋仁德陵以外其高莊無陵如此其以為帝陵也

獨平城而得然乎此可疑矣史考之仁德皇后

功與奈良之妃也已蓋其他是制率光卑小神野之開

山陵志第一

十七

也史及諸陵式安取諸

右六陵隸于添上郡

聖仁陵在菅原伏見曰東陵諸陵式菅原伏見東陵北安康

陵乃在其西曰西陵諸陵式菅原伏見西陵北是舊都西郊

按今伏見菅原分為二村伏見村西有古墳呼為蓬萊山因

其環溝池樹松柏俗以為仙島而所稱焉蓬萊不帝之世

其存也今陵北園家豈其地安思之為安東陵

則此其非是此即聖仁陵則其西數町又有呼為西蓬

萊山今已平為田惟其溝未埋環殘陵若半月然蓋方其

未毀與東陵屹乎相望也西蓬萊之名於是乎得此蓋安

諸陵式惠我長野西陵兆
東我長野濱石

川而南北長矣陵居其西偏故曰西陵按呼為什津山古來所傳仍仲哀御名也

允恭陵乃在其東北曰北陵諸陵式意我長野北陵北按呼為市野山此地故是所謂餅香市達也餅香即今為國府村

或以為市達王押營基然他無所徵不取也

應神陵當西陵之南所謂惠我藻伏山陵也諸陵式惠我藻伏山陵北按呼為譽田八幡山併用其御名與神跡也

而祀焉地南隣古市故其緣記曰葬於古市郡長野山人按

欽明天皇十一年一月十五長野明是此間總名也今西北二陵皆繁長野而此陵獨不言長野南陵何也蓋藻伏之名

山陵志第一

廿一

自古大聞即其地方不足詳言也藻伏古事記作黨伏王曰

百舌鳥百舌鳥本是和泉地名也因疑此自彼改葬而仍其

舊號遂喪陵地之故名故名曰蓬萊丘見於雄略紀且百

舌鳥八幡神祠相傳有改葬之說如今所疑也其八幡之山

觀然而象官車者蓋其故陵也書紀不言葬古事記云葬于

裳伏山陵而關其年月蓋追筆之未詳改葬否也古史之遺

亦從可知

右三陵隸于志紀郡

雄略陵在馬鷲原諸陵式馬鷲原陵北城東西二町南北二町是長野之西按鳴原

村有古墳其形圓而環以溝此也呼為丸山以今所觀也然

從遠眺之其地勢隆然所謂官車象可以想見矣未輒殘餘繞觀其圓悲夫高鷲之名久喪之但陵南有僧寺取以為寺

地山跡

其南壇生阪壇生今訛為羽或

仁賢陵在壇生阪本諸陵式壇生阪本陵北按今呼杜計山其城東西二町南北二町

御名所訛御名於計也

右二陵隸于丹比郡今分為南北二郡高鷲丹比郡也壇生阪門也和名抄郡名度八應即阪

其南阪門也壇生阪門也和名抄郡名度八應即阪

清寧陵在阪門原諸陵式阪門原陵北城東西二町南北二町按呼為白髮山仍其

御名也其地西浦村

山陵志第一

廿一

而其東古市即惠我長野之南

安閑陵在古市高屋丘諸陵式高屋丘陵北城東西二町南北一町按明應亂畠山

尚慶城據焉故今呼高屋城墟諸陵式安閑春日皇后高

屋墓北城東西二町南北二町與山陵自別北城史謂之合葬以地相隣

謬之爾今祀八幡之神此也

右二陵隸于古市郡

古市之東南磯長

敏達陵在磯長曰中尾陵諸陵式磯長中尾陵北城東西二町南北二町按葉室村西

有古墳此也其形象官車據史初殯于廣瀨廣瀨郡有仁基山酸山皆帝陵

形也疑其一是敏達初葬之陵崇峻之四年所其後

土御門陵在阿波板野郡之里浦

紹德錄東鑑增補要記云開元三年十月十一日崩于阿波

遷十土佐尋遷于阿波寬壽三年十月十一日崩于阿波然皆不載其葬於里浦畧之也

按板野緣海洲嶼之間今稱無

養莊里浦是洲中一村落有石塔土人莫知誰墓也但歲十

月十一日父老齋於其前以通夜焉古來以然矣十月十一

日即是土御門之御忌蓋方其喪也民之悲哀何如哉至

於今尚猶置齋奉祀不失其遺跡此僅可徵已

廢帝陵在淡路三原郡

諸陵志淡路城北城按和名鈔三原是

國府所在廢帝以孝謙之雄猜降封淡路公而幽于其

山陵志第一

十四

府既而公不堪憤踰垣而逃國守佐伯助祿高野並不等率

兵邀之公還厥翌暴崩則其葬當去府不遠府趾今距洲本

之治西南可三里曰市村其中稱國司館趾此也乃其西可

三町有古墳在焉其方二十步森如也廢帝陵即此而其

祠曰野田宮在旁焉

崇德陵在讚岐阿野郡之白峯寺

白峯寺緣起山起紹運錄按白峯寺緣起山

後所定其寺西北隅云其寺西北隅今檢之孤墳據岩壁

之上封土高八尺石牆以環之其前有廟安帝遺像以奉

祀焉又左有母后廟待賢門院藤原氏右有山神廟讚岐守源公

世能致堂宇之脩嚴然可畏敬他陵在阿波及薩摩封內鳴

乎亦異哉僻陋有陵寢其生也嘗有幽辱茲土而死也長見

靈威祭則授福比之他就荒穢可謂幸矣

後鳥羽陵在隱岐海部郡之前田山

百練鈔增補錄東鑑要記云此山向來原能茂收

華堂下大原運置焉藏於西林以下要記亦同按前田今

勝田山是也勝田山源福寺有塔廟即其火葬處

順德陵在佐渡雜大郡之真野山

長谷川要記又載按諸書並皆闕葬地

以其收骨歸京也雖然真野山至於今奉陵寢之祀不敢弛

廢云若謂此隱岐阿波諸陵亦皆為其國人畏敬則他郡停

朴之風此大可愛矣

山陵志第一

十五

山陵志

卷之二

京郊山陵除泉涌其餘凡三十有八所按京師雖平安其

四郊是山城之郡鄉蓋自桓武之真都于平安而累

聖山陵以香刹名蓋布列於郊其麗曷嘗數十而已哉

然喪亂之後已嘗毀兵火侵未耜而殘暴荒穢其跡幾

盡至於今所完以存蓋無幾焉且其地名亦變所在不

計曠野之間不可指定自史官之廢其所參考諸書率

皆定家乘私記其說紛紜而難適從將何以徵惟妙法

王家所藏西京古圖推按其地頗有可證足以為左券

矣而至其所難悉乃俟有識

中宗曰

天智天智陵在山科鄉是為山科陵

背鏡山面京路

按鏡山

前是陵地而其右旁有小祠有鳥居焉土人歲時奉祀幸無

所荒穢雖世有污隆道有盛衰天之顧於有通特如是然陵

之四野野御廟野廟之與陵俗言互通又東南有村落曰陵

村乃隣大津大津是

中宗所都也

檢之不然其陵狀與者此用明以米制也外則其內

無所殘毀則棺槨似以暴毀陵前有方石其石而廣長

外後移致於此以復其初

京之東郊曰粟田鄉

此古鄉名也中世其鄉東為白河因水

其繼之而東即山科鄉而京路之南岐走

伏見由醍醐醍醐陵在醍醐寺北並取山西

記云四面八十町水深五尺方三尺按倉高四尺三寸

為北城則似甚廣恐乃八町而何十字也故小野寺地也

其間集奉部王記在稱醍醐寺北山陵

科陵按今陵地平坦草莽穢蕪然而從檢之固非堅

傷而然也蓋嘗塔其上而塔為兵亂之間所除去歟

陵亦然

朱雀陵乃其少南

山陵志第二

屋後地名陵町也

而醍醐寺東

右三陵練子宇治郡

醍醐陵在南可三町在家人

也其地乃通深州山為伏見

記引山槐記指南云稻荷山南則極樂寺趾今是為寶塔寺

其南則霞谷是

仁明帝陵所也又其南伏見之山有柏原

焉是

桓武帝陵所也據武條北城及山槐記所載閱當時

地圖即今之伏見城山古御香大龜谷等地總是皆柏原則

陵之所在想當在城之中央蓋築城時為所毀壞又按仁部
記文永十一年以盜發柏原山陵諸陵案上言其狀曰御所
之巔東西一丈三尺南北一丈六尺發掘上似塞以石又云
件陵登十丈壇圍八十餘丈明是全體必不卑小而今問其
所終于難認則云壞於築城果然也廟記今呼曰金家噫
其城亦已墟來海之感又奚耐焉

仁明陵在深州山是為深州陵諸陵武深州陵北城東西
而西柏原而北故嘉祥寺地也中右記號霞谷古今集文屋
語也按嘉祥寺址即今谷口村也霞谷之谷有
據古圖山陵果在焉其西有貞觀寺址貞觀八年改定

山陵志第二

深州陵四至云西至貞觀寺東垣北至谷此二方足以取證
近世安人榜於此陵側曰
桓武天皇御陵甚哉歎物也

乃其西有法華堂以堂擬陵也是為後深州陵康富記伏

伏見後伏見同祈焉伏見據中陰記皇年代畧記並云

後深州帝之法華堂後伏見據皇代記皇年代
畧記並云火葬磯城野安遺骨於深州法華堂按深州安

樂行院中庭有小堂傳云是法華堂趾以其內安先帝遺

骨稱為御骨堂據古圖後深州伏見後伏見後柏

原後奈良同稱焉名五帝之陵更據泉涌寺說後柏原

後奈良後遷之於泉涌寺云故除之

自此其西為京之南郊曰鳥羽

鳥羽鄉有塔三基以擬陵白河陵其西塔也故成菩提院地

編年集成火葬香隆寺西邊中右記以此為本
云安道骨於香隆寺夫衣笠東麓即香隆寺西邊也
言舉其一百餘鈔天承元年遷於鳥羽三重塔所謂成菩提
院也故古記壽永二年所遺山陵使於成菩提院則注曰
白河院是也皇仁二年所遺時未言其級僧也更考長秋
是據百餘鈔蓋天仁二年所遺時未言其級僧也更考長秋
記及中右記要記皇仁二年及三年相尋建塔於鳥羽
皆稱曰多寶塔則天仁所建明是三重塔而成菩提院也
地今已開墾尚謂其田曰成菩提院其中有圓丘蓋塔之
基也里老相傳以鳥
近衛陵誤也

鳥羽陵其中塔也愚管抄百餘鈔要記皇仁編年記皇代記
帝土景國編年近衛陵其東塔也要記皇仁編年記並云
骨於知是院常行堂百餘鈔長寬元年火葬西邊安道
還鳥羽之東殿美福門院之塔此也並是安樂壽院地

山陵志第二

壽院其傳相傳保按山槐記鳥羽皇嘗創二塔於鳥羽之

東殿以其一令藏御骨一充之女院女院謂美福門院也

安樂壽院相傳以中塔成於保延五年謂之本御塔東塔成

於保元二年謂之新御塔所謂本御塔是鳥羽皇所最尊

焉故其落成也詔禪眾謂遷化之夕可托遺身於塔下安樂

今尚藏此其明證也紹運錄葬新御塔末由記葬安樂壽院

此詔書其內安彌陀像紹運錄葬新御塔末由記葬安樂壽院

御塔此皆妄說也今不取今就其趾構堂焉相傳

謂新御塔是美福門院遺令使別葬已於紀之荒河高野

山高野平野村有一丘上建五輪塔其高則其內空虛是
三尺銘曰奉為美福門院御骨葬此也

右六陵隸于紀伊郡

淳和陵在西岡鄉物集村

史葬於物集村粉碎御骨於大原西岡嶺上皇年代紀亦云

原野大

諸陵式

淳和陵不載以遺詔查粉其骨而過之

野也物集村有圓墳焉曰車冢里老相傳淳和帝發車火

於此猶可擬山陵蓋帝王薄葬以嗟峨為始

天地之定數物化之自然也故朝死夕葬宜作棺不厚覆之以麻約以黑葛擇山北幽僻不毛地其葬限不通二日夜刻

行葬地從者然至于 淳和其所為亦已甚矣當時中納言

藤原吉野諫曰不起山陵古無有之山陵猶宗廟也苟無有

之臣子何仰弗聽遂致其葬若是其慘也夫嗟峨淳和

兩帝中古明主也其遺風後王則焉而獨於薄葬者誠為

山陵志第二

可憾仁明帝遺詔以布帛代綾羅俾鼓吹方相而文德

惟方相而已 清和宇多亦遺詔依例以火其葬不起

山陵令百官及諸國不舉哀停未服而其停謚亦從 宇

多姑故 醍醐帝遺所謂荷前亦廢而不舉惜哉淳和帝

國忌雖在追遠及苦有司歲終荷前煩而無益並停之 夫喪

宇多帝遺詔亦停國忌荷前於其後世例也 不足復道

祭禮之大經也是而崩壞宜國亦從衰也吉野中納言言不

納千載遺憾

西岡鳥羽之西也其北田邑鄉為京之西郊

文德陵在田邑鄉真原諸陵式田邑陵北城真原今名廣野

其陵狀前方而後圓以象宮車環之以溝京郊山陵此特為

然其廣狹纔不過十餘步視之大和河內諸陵可謂兒孫

已實錄八月乙卯崩以九月甲子葬之其間僅十六日且平

地之所築不因以山宜其不如古也

光孝陵在其北鄉立屋里小松原是為後田邑陵

田邑鄉立屋里小松原四至西至芸原岳岑南限大道大

青木寺東北限大岑畧記皇年代紀或作小松

小松 仁和寺西南地也江次第作仁和寺西大教院史拾芥

今亡所謂立屋其原諸名亦皆失之清水寺既不知其處也

幸獨 仁和寺西南地也按今仁和寺西南有古墳在焉里老

相傳以為 光孝陵據古圖果然

北山宇多野京之東北郊也

宇多陵在宇多山皇年代私記畧記大鏡裏書立仁

宇多陵在宇多山 依遺詔不置山陵然已云火葬則其火

和寺西北限也按依遺詔不置山陵然已云火葬則其火

葬處猶足擬山陵大內山是其火葬處帝王采圖云在仁和

寺西據古圖即仁和寺西北丘頃果有 宇多陵今呼為九

山因形而命之此也御室相承記寬平法皇陵在神倉上

今九山而東北豁間有方地圖之以小溝其廣長東西四步

南北七步此蓋神倉趾亦可以備一證矣編年集成 宇多

池尾之山池尾山是山北山 宇多陵與諸書不合之九山而

東北之山有大石或謂為 宇多陵名勝志引三僧記曰

一條左大臣雅信

後朱雀陵古圖此間有 後冷泉陵乃列其側焉後朱雀

教寺圖教 按二陵是圖教寺安遺骨處也據古圖圖教寺在寺今亡

仁和寺東隅而二陵乃列於宇多陵側不知或嘗收葬于此歟抑圖教寺安遺骨處固離在焉也

其西隔一溪 曰中尾村村之北丘隴連遷乃其上方是

北中尾村

村上陵在北中尾村 紀畧葬田邑鄉北中尾一云宇多鄉北中尾陵按宇多即田邑鄉地其地廣故或

多鄉 按長明發心集云仁和寺之真僧二人一稱西尾聖一稱東尾聖聖者法印因其所居也據古圖村上陵在

東尾西尾之北當其西間也謂之北中尾不亦宜乎今之五

智山即其地呼為御廟山 山經記村上陵在仁和寺西元

時蓋其地有 天曆廟以廟稱陵也

圓融陵乃列於其側是為後村上陵 代私畧記百餘年

寺北安遺骨於 村上陵側左經記實仁元年遺一條陵

堀河陵又次焉 坂野榮華物語皇年代私記並云大葬北山民

記作岩陰即其地也 紀畧小右記左經記大鏡裏書並云

避方忌據安圓成寺左經記又云實仁四年遷於圓融寺

堀河據畧記皇代編年記皇代畧記並云大葬北山民

香隆寺坤原安遺骨於香隆寺長秋記百餘年並云大葬

年遷於仁和寺圓融院 一條陵左經記以為圓融寺

連 堀河陵長秋記百餘年以為圓融院據古圖二陵有列

於村上陵側而 圓融獨否別在圓融寺圓融寺是仁和寺

東南衣笠之麓也蓋其中有廟遂謬為陵故 村上陵側

得重圖然葬已云村上陵側又稱後村上陵則其次當列

一條 堀河然則云圓融寺連或云圓融院並當改作圓融

陵測恐是傳者之誤也

又其西愛宕之山其麓曰嵯峨

嵯峨陵在嵯峨大覺寺北 皇年代私記葬嵯峨陵北之山麓

陵此寺在山陵使左大辨經房造于攝政府曰至嵯峨

也 按道詔云擇山北幽辟之地以三日葬之不封不樹長

絕祭祀諸陵式由此無載然今大覺寺北山麓幽辟之間有

一丘呼為御貌山此蓋山陵也陵或稱廟廟之言貌也其音

近聖德太子磯長墓上人稱御貌山以訛微訛古蹟可考

自茲循山而東北 後宇多陵所在故蓮華峯寺地也

記葬蓮華寺 按寺之殿堂蓋自應仁亂已焦土里老猶識陵所

曰大覺寺東北山麓呼為八角堂此也舊是八角堂而金玉

其飾今者纔板屋底焉

大覺寺之南其為龜山 龜山陵所在故淨金剛院法華堂

地也 增鏡大葬龜山殿上山建法華堂而安骨焉 文應帝

寺 後嵯峨蓋同附焉 別院蓋其火葬者而王 諸官年畧

也 記並云藏遺骨於淨金剛院吉續記文永一年遷於法華堂

法華堂不蓋地蓋以其在淨金剛院內也然增鏡謂 龜山

帝之葬而建法華堂則似非與文永之法華堂是則以其

脩後謬為是之故一院中理不容有二法華堂焉故知是同

附 按龜山天龍寺是龜山殿趾相傳以其後林數畝之間為

窀穸所蓋法華堂址

登愛宕其途有僧院號福田院 後龜山陵所在按陵上安

塔院僧奉祀古來所傳是已無復他證

清和陵在愛宕西南水尾山實錄水尾山因稱水尾山按水尾

山本丹波國地今隸于山城葛野此山村極陋有寺希圓覺

圓覺寺者舊是京東栗田道場也 清和帝自遷大位乃御

清和院遂遷御山莊落飾入道山莊即圓覺寺也後歷覽名

山佛權乃卜水尾之山為終焉之地既而歸京崩於圓覺寺

故取其寺號以奉祀焉有遺詔不置山陵諸陵式由此無

然水尾山安遺骨處里巷相傳以指圓覺西北山隅為陵

山陵志第二

其間隔一溪此也

後三條陵在仁和寺之南故圓宗寺地畧記百鍊鈔編年記云

葬神樂岡南原藏遺骨於禪林寺然其後當遷于圓宗寺

畧記云永十年遷山陵使於圓宗寺則圓宗是為陵所無

乃在仁和寺之南莊嚴院都下按花園妙心寺西叢是圓

宗寺址 後三條塔廟存焉

仁和寺東丘曰衣笠之丘丘之東故香隆寺地 二條陵所

在編年集或火葬香隆寺民野自鍊鈔嘉應二年自香隆寺

寺本堂遷于三昧堂二昧堂不舊地蓋以其在寺內也按

香隆寺址今小松村此也據古圖 二條及其 后妃高松

院陵並在焉今亡

其東北山嶠曰鏡石以其光可鑑名焉隔一川紙屋而東厓

斗絕其與乎鏡石相映處曰石影遂稱其左右曰石影長阪

野此奔丹波路所謂北山長阪亦此也故一條大葬紀

作若陰長阪野但岩陰石陰用字不一是以易為且因于

地近就鏡石之傍過也故今定為石影取名義於其相映

華山陵在石影道長記葬大和寺東連紀畧葬於屋川上法音

寺東連也法音寺北葬古國法音寺之北飯屋川之上即大和

寺大和寺今亡三條陵乃列其側焉畧記大鏡裏書葬

編年集或葬於丹岡西邊丹岡西邊即石影皇代即

並云藏遺骨於北山小寺北山是為此間總名則所謂小寺

亦或在石按二陵並皆壞難得其所據古圖推問其地里人

云百年前有一農呼甚兵衛者開墾之地號甚兵衛開今其

樹梅園相傳以為御墓所疑是陵地矣

山陵志第

十

後華園陵在京北之正親町小川西岸也故悲田院地

畧記當時以泉涌寺方遇兵火而不能葬也悲田院今遷在泉

涌寺地親長記文明二年諸大原御墓注曰法華堂前是

後華園御墓於是則嘗致按悲田院址今為大應寺陵

是圓冢在寺東林

右二十陵隸于葛野郡

陽成陵在粟田鄉神樂丘東北畧記後一條陵乃其西而地

傍丘號櫻下故菩提樹院地皇年代私記大葬神樂丘

即神樂丘東也二書並云藏遺骨於神樂寺今鏡安聖院

菩提樹院百鍊鈔長久元年自神樂寺遷遺骨於菩提樹院

注曰後一條御墓地神樂丘東地古圖作菩提樹院是也冷泉

陵又其西北也畧記畧大鏡裏書並云火葬櫻木寺前

遺骨於山側。後二條陵又其西而左丘隅面吉田右日輪川矣。

要記皇代記並云葬北白河殿北白河按今真如堂前有佛音時此間總名也據古圖山陵有在

院自此傍丘而西北當是櫻木地然失櫻木之名已久故

陽成後一條亦喪所在自吉田東神樂丘未盡顯其北

是在原業早墓也晚筆記業平以元慶四年卒冷泉陵是而葬東山吉田之與而南為此即其廟之址

丘北之畝呼家圓處此也既被墾傷惟二條陵獨見存焉

呼福家

神樂丘而東如意岳之西今其間而有山焉曰中山乃其南

黑谷是故十樂院地也華園陵所在古圖大縣目

附在華園按陵今失其所古圖關之華園妙心寺有廟曰五

山陵志第二

鳳院妙心寺僧云其側即安遺骨處

粟田而南為部鄉

高倉陵在鳥部鄉東山清閑寺地百錄參編年記皇年六條

陵乃其南隅也明月清閑寺小堂即一條卿按清閑寺

相傳高倉陵是堂北丘墳植楓處六條陵乃堂之西園

怪石所伏俗謂此怪石曰要石要取其名摺扇軸處也處此

觀京地其形勢宛然若開扇然而自顧即扇骨所幅奏可以

喻矣

後白河陵在蓮華王院法華堂玉海百錄參編年記按今三十三間堂故

地法住寺為不曹義仲所火就其壘而按今三十三間堂故所創也故康富記謂此陵在法住寺

蓮華王院地法華堂乃在其東以內安聖容呼為御影堂其右側相傳火葬處

後堀河陵在今熊野觀音寺地要記編年記百錄參編年記按泉涌寺來迎院北觀音寺東丘是陵所據古

記云葬日輪圖當矣

圖當矣

法華堂自清閑而東南也觀音寺自法華堂而東南入山陂

也今熊野而南乃謂之我禪房谷是泉涌寺地

右九陵及泉涌寺隸于愛宕郡

四條陵在泉涌寺地上北以下泉涌寺齊衡三年左大臣藤原

緒嗣所創始號之曰法輪殿後更之曰仙遊建保六年大和

山陵志第二

守中原信房以法師俊務居焉務又更之曰泉涌當時以堂

宇荒穢務上疏以請理之元曆上皇為之降施甚渥貞應

三年秋七月勅中納言藤原通方昇以為官寺也傳自

四條帝之葬也而經十三世至後光嚴又以為陵所而後

後圓融後小松稱光後土御門後奈良正親町

相尋乃爾後陽成以降世世併與其后妃皇太子之喪

蓋亦皆例以葬焉官家固已存圖錄是以今不須考正而

所考正皆在乎遠陵矣欲不徒豐昵而孝祀百世天永

命焉

卷之二終

關東後學 蒲生秀實 稿

津久井清影 撰

陵墓一隅抄

明治元年（一八六八）京都府林芳兵衛刻本

據明治元年（一八六八）

京都府林芳兵衛刻本影印

陵墓一隅抄序

邈焉尚古。傳化子記。上張形之。治教下。儒學之。王澤。祀樂刑政。志典大富。於賢中。也。皇威。不振大阿。一。抑終。歸乎武人。及。受利以。堂。國命。分。郡。暴。時。豪。雄。雲。援。近。至。應。仁。京。師。進。土。朝廷。古今。之。國。生。法。錄。自。至。若。家。巨。室。之。秘。書。曰。記。概。不。免。烏。有。之。禍。中原。以。陽。斯。時。以。為。李。天。父。之。會。真。人。去。降。生。民。未。獲。王道。再。懋。而。殆。猶。集。武。成。既。定。文。教。運。變。官。乃。政。事。以。以。揚。端。合。廢。曲。月。以。復。之。祿。之。戎。寅。山。陵。檢。討。之。

山陵檢討之

命。始。此。之。歲。諸。侯。因。臣。成。就。記。其。當。時。內。秘。蓋。字。為。者。自。是。先。松。下。見。林。造。前。王。廟。陵。祀。以。發。時。以。為。其。時。也。為。時。意。文。未。及。載。勝。安。之。海。內。未。聞。有。唱。曲。故。之。學。者。榜。紳。先。生。雖。間。藏。焚。滅。之。錄。復。字。新。簡。未。許。人。男。之。流。傳。自。古。之。廣。大。開。書。向。相。率。豪。俊。傑。出。竟。興。自。說。本。臣。官。長。以。著。在。事。紀。傳。學。者。推。尊。稱。此。道。之。領。袖。而。其。所。載。帝。后。之。蹟。山。陵。之。地。多。出。于。記。聞。傳。說。遂。使。人。之。耳。目。迷。歧。途。會。並。河。五。一。修。藏。內。集。地。志。群。陵。後。藉。以。其。遠。依。者。多。無。文。以。年。間。又。有。南。王。君。滅。者。弱。冠。

務以諸明國書為己任。老而職官。山陵二志。偶罹

之禍。賴以。一。掌。書。之。翼。後。獲。保。其。天。祿。惜。乎。才。學。不。若。於。也。竟。令。死。於。窮。困。曰。誌。也。於。旬。服。之。陵。可。謂。執。紼。之。憾。矣。蓋。旬。服。之。陵。稱。呼。若。草。隨。物。乃。見。植。推。後。似。較。可。見。猶。如。京。師。之。屬。中。女。之。仕。城。當時。朝。野。被。佛。氏。蓋。灼。火。化。廢。行。至。尊。之。道。躬。付。之。一。把。火。不。封。不。樹。是。者。細。粉。以。教。山。嶽。嘆。哉。豈。遠。近。不。可。回。為。春。載。天。恩。者。所。不。忍。聞。也。況。祀。離。間。制。度。輕。薄。今。歷。之。仙。肯。置。之。于。小。堂。如。今。殿。法。何。在。偶。土。積。有。者。未。多。是。林。藪。而。已。田。園。而。已。與。者。果。依。何。持。不。校。之。論。

昔。彼。之。美。達。以。滿。生。曰。強。難。於。斷。主。僅。資。一。曰。之。秘。記。云。之。耳。故。其。主。從。性。之。事。附。不。足。取。證。也。曉。報。載。狀。志。向。特。奇。未。播。在。思。期。之。年。所。為。中。其。毀。毀。致。左。律。久。升。前。案。具。人。也。之。而。岳。嶺。隱。隱。山。陵。之。口。迴。缺。陷。歲。五。十。決。並。謝。仕。藉。驗。于。實。地。按。于。前。籍。世。來。歷。尋。十。數。葉。無。虛。日。物。之。傳。吻。合。之。曰。尚。未。及。旬。名。之。鉅。鄉。自。傳。意。上。說。以。至。後。公。稱。曰。又。皆。欠。數。里。無。不。文。字。酬。對。尋。究。推。申。以。誤。時。殊。矣。且。其。校。陵。之。命。果。下。而。雖。然。其。負。負。懸。於。寺。而。初。詞。通。辨。令。演。者。里。如。然。之。心。知。其。為。誤。乎。一。時。王。人。

所叙。皇武符同方將超不肖為之會。余以事
中道幾廢。而臣故筆曰吾老矣。荷負於後生耳
偶就一書。細次題曰陵墓一隅。以余平生之於
命以首。余者過一書乃徐象曰。昔先生過游名山
大川以寫一代曲。今翁之新。亦之乎海內諸公
函。隱。果。了。大。歌。近。生。而。功。殆。超。之。夫。人。之。當。主
植。切。者。富。多。了。待。也。如。翁。者。不。圖。寸。數。不。惜。力
欲。以。盡。志。乎。函。實。中。為。受。生。于。大。海。之。所。以
為。然。而。吾。勝。素。素。不。及。幸。可。不。非。辱。翁。余。中
時。於。國。之。書。年。之。其。人。陵。墓。之。墓。叔。於

松。公。之。中。於。滿。生。君。滿。至。為。大。成。于。時。鼎。中。此。業
餘。者。嘆。曰。翁。今。所。叙。列。陵。墓。之。下。歷。之。帝。陵。及。其
外。戚。之。墓。祠。保。二。百。七。十。余。所。見。以。皇。統。嗣。以
御。諱。歷。年。在。位。一。年。日。分。條。整。頓。歷。之。之。記。是
為。之。述。此。則。賜。賜。而。以。之。為。圖。表。有。寫。於。數。百。年
間。原。有。寫。者。證。在。今。見。前。著。定。皆。世。之。通。之。決。作
耳。余。之。不。窺。一。端。也。余。惟。讀。牙。篇。者。幸。謂。翁。之。不。領
畫。於。山。周。記。後。東。所。闕。及。其。後。著。於。世。之。後。未。意
其。以。此。年。多。日。山。城。之。飲。武。田。子。順。撰

(九)

陵墓一隅抄序

戊申春余觀花於芳野過上市村偶見一古謄本於
店頭引而檢之乃具載帝陵頗備焉但不記著人
姓名購歸雜之史籍他日閱之宿昔疑之未能質明
者漠然水釋其為喜何如歟干嗟山陵之類廢也
久矣彼大和河內之諸地有其物而名或不正若我
京郊其物既凶名亦隨凶悲哉繇是前賢往々覃思
極力各就所見樹一家之私議彼松下見林廟陵記
蒲生君城山陵志等雖頗益後生勢主閱博一從一
違同異混淆不免葑菲勞米也顧茲瑣々冊子未足
窺作者全力然而精鑿的實較諸前書大有徑庭
倍珍重以示之於老友水嶋永政々々亦奇之及聞

數四謂余曰今熟玩其辭意非淺者之所能辨其或
成於若宮水枝之手水枝者濃國郡上之一祝氏自
少慨山陵及式社之荒涼著書有數種嘗與同列
不合逃居京師終赴和沒於龍門土神之祠宜惜
大祿不長名亦不顯斯書必係其遺篋之物也耶余
深然之後屢訪永政拜聖蹟每揮之行囊苟有所
見輒加私註題曰陵墓一隅抄另作圖副之頃者但
謀更校訂以傳之世覽者留意於茲一隅庶幾三
可以及矣歟時

嘉永甲寅春王月 平安後學津久井清影撰

纂例

本編原據諸陵式其都趾及山陵現在
註地名要在昭明聖蹟不湮滅但都趾
可都者略山陵所在之郡名也
延壽以降至近朝綱目紹運錄或雜載家乘之書
丹志等為涉陵事者不用之以為附錄
曰今據者皆係余輩同社之私說曰詳干某考
當時識者之定論也者不云者厭其繁研
前約若何言及前薨皆代以
某宮葬於某陵或於仙院或於離宮不出
都者今不必言但其前行在諸葬亦能上

考載
齊明帝在位幾半者係於在位中之崩略
註法一者法皇也至法諱不悉記
女帝后妃皇女屬者施黑圈以別于他項
歷代山陵者不拘存亡前後列叙舉之后妃以下
諸墓存者記焉不存者闕焉惟示其訛靈地使人
便拜趨早良太子之八嶋廟檀林皇后之長明神
班了女王之福王子社等乃此也
抄中杜撰不自覺者極多博雅君子幸審其真偽
見正便將喜而改之以上

本朝帝系歌

原御藤原朝所承後高祖龍廣神次子再
以神朝及文化帝已下以正順序云

神武綏靜安寧始
孝靈孝元開化後
重仁景行及成務
仁德履中及正
安康雄略與清寧
繼體安閑宣化帝
敏達用明崇峻皇
孝德齊明天智帝
持統文武及元明
廢帝稱德授光仁
平城嵯峨淳和世
陽成光孝宇多後
懿德孝昭孝安嗣
崇神十代寶祚熾
仲哀神功攝應神
允恭天皇二十世
顯宗仁賢武烈達
欽明繼之三十代
推古舒明皇極尊
大友天武至四十
元正聖武又孝謙
桓武定興五十添
仁明文德清和傳
醍醐天皇六十延

朱雀村上冷泉院
三條後一後朱雀
後三白河堀河帝
後白河又二條院
安德後鳥羽土御門
後嵯峨後深草龜山
伏見後伏後二條
光明崇光後光嚴
先是後醍醐後位
後小松時稱一統
後奈良正親町後陽成
後光後西靈元皇
桃園後櫻次後桃
仁孝孝明真陵成
圓融花山一條迨
後冷泉院七十朝
鳥羽崇德近衛兼
六條高倉敷八十
順德後堀河四條院
後宇多夷業九十履
花園後醍醐光嚴興
後圓融帝一百義
後村後龜村南朝
稱光後花後土後柏原
後水尾明正百十孫
東山中御櫻町帝
光格百廿謚號後
今上踐祚萬歲

山邊道上陵

道上陵

菅原伏見東陵

伏見東陵

向珠城宮城上廟名樹木甚多長老星鎮御宇垂仁天皇
在大和國漆下郡案者寺姓字述來山兆域東山

山邊道上陵

道上陵

和國城上郡子集神陵相坐

扶城盾列池後陵

盾列池後陵

志賀高穴總官北太村即皇親御宇成務天
在大和國添下郡越界今皆在兆域東
町南北三町守戸五烟

惠我長野西陵

長野西陵

內國志紀郡今丹南郡屬桂管兆域東西
南北二町陵戸一烟守戸一烟煙鐵

陵墓隅抄

狹城盾列池上陵

惠我蕙爲二伏爲下崗陵

說作漢人。曰。前代。今。上。知。作。海。信。三。信。

百舌鳥耳原中陵

卷之二十一

皇在禾泉區大魚君
町南之八町陵戸五

耳原南陵

國大鳥郡上石津村俗
林檎鈴山兆域東西五町南北

五時、陵戸五

丹南柴籬宮 河内國丹波郡松原庄
楠田村廣福神祠之地 御宇反正天

町南北五町陵戸五烟

忘我長野北陵

內國志紀郡國府村
字市野山北域東海三町南北

二町 陵戸一炯 守戸四炯

五二九

二三代 九條
安康天皇
三年八月廿一日、五十六

菅原伏見西陵

石上穴穗宮 山梨縣 御宇安康天皇在大和國添下郡

北三町守戸三烟 今丹波郡 御宇雄略天皇在丹波郡

十八 大泊瀬如武
略天皇
三年八月廿一日、五十六

丹比高鷲原陵

泊瀬朝倉宮 大和國上郡 御宇雄略天皇在丹波郡

在河內國丹比郡 今丹波郡 御宇雄略天皇在丹波郡

河內國丹比郡

二三代 九條
安康天皇
三年八月廿一日、五十六

磐余麁栗宮

河內國古市郡 今丹波郡 御宇清寧天皇在丹波郡

北二町陵戸四烟 今丹波郡 御宇清寧天皇在丹波郡

二三代 九條
安康天皇
三年八月廿一日、五十六

傍丘磐杯丘南陵

近飛鳥八鈎宮 高市郡 御宇顯宗天皇在丹波郡

大和國 今丹波郡 御宇顯宗天皇在丹波郡

二町南北三町陵戸一烟守戸三烟 今丹波郡 御宇顯宗天皇在丹波郡

植生阪本陵 今丹波郡 御宇顯宗天皇在丹波郡

石上廣高宮 今丹波郡 御宇仁賢天皇在丹波郡

在河內國丹比郡 今丹波郡 御宇仁賢天皇在丹波郡

東西二町南北二町守戸五烟 今丹波郡 御宇仁賢天皇在丹波郡

傍丘磐杯丘北陵 今丹波郡 御宇仁賢天皇在丹波郡

泊瀬列城宮 今丹波郡 御宇武烈天皇在丹波郡

和國葛下郡 今丹波郡 御宇武烈天皇在丹波郡

二町守戸五烟 今丹波郡 御宇武烈天皇在丹波郡

應神天皇
二年八月廿一日、五十六

三鳥藍野陵

磐余玉穗宮 大和國上郡 御宇繼體天皇在大和國

津國島上郡 今丹波郡 御宇繼體天皇在大和國

二三代 九條
安康天皇
三年八月廿一日、五十六

古市高屋丘陵

勾金橋宮 大和國上郡 御宇安閑天皇在丹波郡

內國古市郡 今丹波郡 御宇安閑天皇在丹波郡

一町五段陵戸一烟守戸二烟 今丹波郡 御宇安閑天皇在丹波郡

二三代 九條
安康天皇
三年八月廿一日、五十六

身扶桃花鳥坂上陵

檜前廬入野宮 今丹波郡 御宇宣化天皇在丹波郡

大和國高市郡 今丹波郡 御宇宣化天皇在丹波郡

町南北二町守戸二烟 今丹波郡 御宇宣化天皇在丹波郡

二三代 九條
安康天皇
三年八月廿一日、五十六

破成嶋金刺宮

在大和國高市郡 今丹波郡 御宇欽明天皇在丹波郡

南北四町陵戸五烟 今丹波郡 御宇欽明天皇在丹波郡

河內磯長中尾陵 今丹波郡 御宇欽明天皇在丹波郡

譯語田宮 大和國上郡 御宇欽明天皇在丹波郡

內國石河郡 今丹波郡 御宇欽明天皇在丹波郡

北三町守戸五烟 今丹波郡 御宇欽明天皇在丹波郡

河內磯長原陵 今丹波郡 御宇欽明天皇在丹波郡

磐余池辺列槻宮 大和國上郡 御宇用明天皇在丹波郡

皇在河內國石河郡 今丹波郡 御宇用明天皇在丹波郡

二町南北二町守戸三烟 今丹波郡 御宇用明天皇在丹波郡

山王天皇
崇峻天皇
推古天皇
舒明天皇
孝德天皇
孝元天皇
孝武天皇
孝安天皇
孝和天皇
孝靈天皇
孝德天皇
孝元天皇
孝武天皇
孝安天皇
孝和天皇
孝靈天皇

倉梯岡陵
倉梯宮
十市郡
磯長山田陵
小治田宮
內國石河郡
二町陵戶一烟守戶四烟
押坂內陵
高市崗本宮
大和國城上郡
北六町陵戶三烟

大坂磯長陵
難波長柄豐碯宮
皇在河內國石河郡
西五町南北五町守戶三烟
越智崗上陵
飛鳥河原宮
大和國高市郡
兆城東西五町南北五町陵戶五烟

山科陵
近江國大津宮
在山城國宇治郡
十四町南北十四町陵戶六烟

倉梯岡陵
倉梯宮
十市郡
磯長山田陵
小治田宮
內國石河郡
二町陵戶一烟守戶四烟
押坂內陵
高市崗本宮
大和國城上郡
北六町陵戶三烟

大坂磯長陵
難波長柄豐碯宮
皇在河內國石河郡
西五町南北五町守戶三烟
越智崗上陵
飛鳥河原宮
大和國高市郡
兆城東西五町南北五町陵戶五烟

山科陵
近江國大津宮
在山城國宇治郡
十四町南北十四町陵戶六烟

倉梯岡陵
倉梯宮
十市郡
磯長山田陵
小治田宮
內國石河郡
二町陵戶一烟守戶四烟
押坂內陵
高市崗本宮
大和國城上郡
北六町陵戶三烟

陵墓一隅抄

倉梯岡陵
倉梯宮
十市郡
磯長山田陵
小治田宮
內國石河郡
二町陵戶一烟守戶四烟
押坂內陵
高市崗本宮
大和國城上郡
北六町陵戶三烟

大坂磯長陵
難波長柄豐碯宮
皇在河內國石河郡
西五町南北五町守戶三烟
越智崗上陵
飛鳥河原宮
大和國高市郡
兆城東西五町南北五町陵戶五烟

山科陵
近江國大津宮
在山城國宇治郡
十四町南北十四町陵戶六烟

倉梯岡陵
倉梯宮
十市郡
磯長山田陵
小治田宮
內國石河郡
二町陵戶一烟守戶四烟
押坂內陵
高市崗本宮
大和國城上郡
北六町陵戶三烟

大坂磯長陵
難波長柄豐碯宮
皇在河內國石河郡
西五町南北五町守戶三烟
越智崗上陵
飛鳥河原宮
大和國高市郡
兆城東西五町南北五町陵戶五烟

山科陵
近江國大津宮
在山城國宇治郡
十四町南北十四町陵戶六烟

倉梯岡陵
倉梯宮
十市郡
磯長山田陵
小治田宮
內國石河郡
二町陵戶一烟守戶四烟
押坂內陵
高市崗本宮
大和國城上郡
北六町陵戶三烟

大坂磯長陵
難波長柄豐碯宮
皇在河內國石河郡
西五町南北五町守戶三烟
越智崗上陵
飛鳥河原宮
大和國高市郡
兆城東西五町南北五町陵戶五烟

陵墓一隅抄

倉梯岡陵
倉梯宮
十市郡
磯長山田陵
小治田宮
內國石河郡
二町陵戶一烟守戶四烟
押坂內陵
高市崗本宮
大和國城上郡
北六町陵戶三烟

大坂磯長陵
難波長柄豐碯宮
皇在河內國石河郡
西五町南北五町守戶三烟
越智崗上陵
飛鳥河原宮
大和國高市郡
兆城東西五町南北五町陵戶五烟

山科陵
近江國大津宮
在山城國宇治郡
十四町南北十四町陵戶六烟

倉梯岡陵
倉梯宮
十市郡
磯長山田陵
小治田宮
內國石河郡
二町陵戶一烟守戶四烟
押坂內陵
高市崗本宮
大和國城上郡
北六町陵戶三烟

大坂磯長陵
難波長柄豐碯宮
皇在河內國石河郡
西五町南北五町守戶三烟
越智崗上陵
飛鳥河原宮
大和國高市郡
兆城東西五町南北五町陵戶五烟

山科陵
近江國大津宮
在山城國宇治郡
十四町南北十四町陵戶六烟

倉梯岡陵
倉梯宮
十市郡
磯長山田陵
小治田宮
內國石河郡
二町陵戶一烟守戶四烟
押坂內陵
高市崗本宮
大和國城上郡
北六町陵戶三烟

大坂磯長陵
難波長柄豐碯宮
皇在河內國石河郡
西五町南北五町守戶三烟
越智崗上陵
飛鳥河原宮
大和國高市郡
兆城東西五町南北五町陵戶五烟

陵墓一隅抄

河上
贈皇太后藤原氏
北城東西四町南北四町守戸

宇波
贈皇太后藤原氏在山城國已訓縣

石作
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

戸五烟
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

嵯峨
大皇太后藤原氏在山城國葛野郡

楊梅
平安宮御宇日本根子推國高

平城
尊天皇在大和國添上郡

城東
城東西二町南北四町守戸五烟

河上
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

宇波
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

石作
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

戸五烟
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

嵯峨
大皇太后藤原氏在山城國葛野郡

楊梅
平安宮御宇日本根子推國高

平城
尊天皇在大和國添上郡

城東
城東西二町南北四町守戸五烟

田邑
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

平安宮
御宇日本根子推國高

北城
北城東西四町南北四町守戸

宇波
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

石作
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

戸五烟
贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡

嵯峨
大皇太后藤原氏在山城國葛野郡

楊梅
平安宮御宇日本根子推國高

平城
尊天皇在大和國添上郡

五十瓊敷入彦命在和泉國日根郡

宇度墓

五十瓊敷入彦命在和泉國日根郡
東牟婁川上壬田山
土人建小祠于墓上
戶二烟

廣神子仁德天皇
廣道雅郎皇子

宇治墓

宇治墓
宇治縣宇治市
宇治縣宇治市
宇治縣宇治市

大伴皇子

押坂內墓

大伴皇子在大和國城上郡押坂陵域
域東西十二町南北十二町守戶三烟

廣道雅郎皇子

行岡等田墓

大伴皇子在大和國城上郡押坂陵域
域東西十二町南北十二町守戶三烟

廣道雅郎皇子

檜隈墓

大伴皇子在大和國城上郡押坂陵域
域東西十二町南北十二町守戶三烟

廣道雅郎皇子

磯長墓

大伴皇子在大和國城上郡押坂陵域
域東西十二町南北十二町守戶三烟

廣道雅郎皇子

押坂墓

大伴皇子在大和國城上郡押坂陵域
域東西十二町南北十二町守戶三烟

廣道雅郎皇子

三立岡墓

大伴皇子在大和國城上郡押坂陵域
域東西十二町南北十二町守戶三烟

陵墓一隅抄

廣道雅郎皇子

平城坂上墓

廣道雅郎皇子
平城坂上墓
東西六町南北四町無守戶

廣道雅郎皇子

淡路墓

廣道雅郎皇子
淡路墓
當麻氏在淡路國三原郡
小女子馬目土人三騎之地
北城東西二町南北二町守戶正丁五

廣道雅郎皇子

牧野墓

廣道雅郎皇子
牧野墓
大皇太后之先和氏在大和國廣瀨郡
大皇太后之先和氏在大和國廣瀨郡

廣道雅郎皇子

大野墓

廣道雅郎皇子
大野墓
大皇太后之先大枝氏在大和國平群郡
大皇太后之先大枝氏在大和國平群郡

廣道雅郎皇子

阿陀墓

廣道雅郎皇子
阿陀墓
贈太政大臣藤原朝臣良繼日本根子
推國彥尊天皇外祖父在大和國宇智郡
推國彥尊天皇外祖父在大和國宇智郡

廣道雅郎皇子

村園墓

廣道雅郎皇子
村園墓
守戶一烟

贈正一位安部命婦同天皇外祖母在
大和國添下郡在所不詳或云新水村內山家兆域東西四町
南北五町守戶一烟

用明應寺遷葬
山背大兄王
皇統元年庚申八月丙子葬
紀伊國入城寺領自莊嚴

平群北岡墓

山背大兄王在大和國平群郡法隆寺墓二有寺曰法隆寺
兆域東西三町南北二町墓戶二烟

用明應寺遷葬
山背大兄王
皇統元年庚申八月丙子葬
紀伊國入城寺領自莊嚴

龜田清水墓

間人女王在大和國平群郡龜田村南小吉田村清水山吉田寺
兆域東西三町南北三町墓戶二烟

山背大兄王

龜田菟部墓

石朝女王在大和國平群郡龜田村北信
兆域東西二町南北二町墓戶二烟

山背大兄王

多武峯墓

贈太政大臣正一位淡海公藤原朝臣
在大和國十市郡淡山羅觀即墓元享傳書云傳兆
域東西十二町南北十二町無守戶

山背大兄王

後阿陀墓

贈太政大臣正一位藤原朝臣武智麻呂
在大和國宇知郡小嶋村安山寺之北兆域東西十
五町南北十五町守戶一烟

山背大兄王

相樂墓

贈太政大臣正一位藤原朝臣百川淳
和太上天皇外祖父在山城國相樂郡

百川夫人

後相樂墓

巨幡墓

贈一品伊豫親王在山城國宇治郡

山背大兄王

加背山墓

贈太政大臣正一位橘朝臣清友仁明
天皇外祖父在山城國相樂郡山背大兄王

清友夫人

小山墓

贈正一位田口氏同天皇外祖母在河
內國交野郡田口氏兆域東西三町南北五
町守戶三烟

山背大兄王

後宇治墓

贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣文
德天皇外祖父在山城國宇治郡北不幡山東西十四町南北十四町守戶二
烟

冬嗣夫人後三位藤原氏

贈正一位藤原氏同天皇外祖母在山

愛宕墓

城國宇治郡贈太政大臣墓内二所

贈正一位源氏清和太上天皇外祖母

在山城國愛宕郡舊名北域東二町南一

町西一町五段北一町五段守戸一炊

大同墓

桓武天皇夫人從三位藤原氏在山城

守戸一人

後愛宕

太政大臣贈正一位美濃公藤原朝

在山城國愛宕郡一乘寺村

一
烟

深草墓

贈正一位藤原氏陽成太上天皇外孫

母在山城國紀伊郡母山縣

守戶一

高昌

高郵縣志

墓 息里君 地主人呼曰維子近望望山

字多外祖母
仲野字

河嶋墓

贈正一位富宗氏在山城國葛野郡

墓戶

八坂莫

陵墓一隅抄

（附）太政大臣藤原純公

拜志墓

贈正一位藤原朝臣総繼在山城國愛

宕郡鳥部郷清閑寺西方山
上在大石平乎墓地四町墓戸一

烟

○昭宣公康原基經一

次，宇治，墓。

贈正一位太政大臣越前公藤原朝臣

在山城國宇治郡本幅村東北一五墓戸一烟

小條内大臣高藤公
昌泰三年、六十三

小野墓

贈太政大臣正一位藤原朝臣高藤左

山城國宇治郡小野郷勸修寺村
塔西隣

後小野基

贈正一位宮路氏在山城國宇治郡小

野郷同村今
無様家

又、宇治、墓

贈太政大臣正一位藤原朝臣時平在

山城國宇治郡北木幡海井山西麓三十卷神家子墓戸一烟

以上

陵墓總百十箇所

津久井清影謹校

五三七

首註陵墓二隅抄

附錄

長等山陵

在天皇天皇、神野
在江國志賀郡園城寺（御在所不詳現云北原林中）

嵯峨院北山陵

在山城國葛野郡大覺寺北御廟山上

大原山陵

在同國乙訓郡大原野勝持寺山西茂間峰（按此寺火葬所同郡物集村土人号廟所家又在車家）

水尾山陵

在同國葛野郡水尾村西水尾岡（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡水尾村西水尾岡）

在同國愛宕郡上栗田山（今不知山所在）

神樂岡東地

在同國同郡真如堂門前人家後園中

大丹山陵

在同國葛野郡仁和寺北宇多野（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡仁和寺北宇多野）

火葬所同寺真池尾山

在同國宇治郡小野隨心院東村後平林中

後山階陵

在同國同郡後山階陵南三町許（此寺在長安天皇火葬所同郡後山階陵南三町許）

醍醐陵

在同國葛野郡田邑鄉北中尾（今隱寺寺北東宇春日谷原山頂處石案同之）

村上山陵

在同國葛野郡田邑鄉北中尾（今隱寺寺北東宇春日谷原山頂處石案同之）

櫻木寺山側

在同國愛宕郡神樂岡東麓（今山崎街南處宇春日谷原山頂處石案同之）

火葬所櫻木寺前野

村上山陵傍

在同國葛野郡村上山陵傍（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

又紫野雲林院邊（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

紙屋川上法音寺北

在同國葛野郡大北山村

圓融院陵傍

在同國同郡龍安寺及內（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

北山小山中

在同國同郡（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

船岡山西邊一條帝御葬地傍（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

提樹院

在同國愛宕郡神樂岡東麓（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

火葬所（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

在同國葛野郡北山龍安寺方丈後山

火葬所香隆寺乾原（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

仁和尚寺中圓教寺（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

仁和尚寺中圓教寺（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

仁和尚寺中圓教寺（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

仁和尚寺中圓教寺（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

仁和尚寺中圓教寺（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

仁和尚寺中圓教寺（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

仁和尚寺中圓教寺（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

仁和尚寺中圓教寺（此寺在長安天皇火葬所同郡葛野郡村上山陵傍）

在前同所後朱雀院並火葬所船岡西北

大德寺大野今風色安御骨於仁和寺山

同寺中圓宗寺

在同國葛野郡龍安寺中

火葬所神樂岡

鳥羽成菩提院御塔

在同國紀伊郡竹田村西畑中

火葬所香隆寺乾野

圓融院三重石御塔

在同國葛野郡龍安寺界內

火葬所香隆寺中

同寺後渡仁和尚

一林五

鳥羽安樂壽院御塔

在同國紀伊郡竹田安樂壽院

白峰陵

在讚岐國阿野郡綾松山頓證寺

火葬所白峰寺北石藏

鳥羽安樂壽院新御塔

在山城國紀伊郡竹田村安樂壽院

火葬所葛野郡船岡西野御骨暫安置

法任寺法華堂

在同國愛宕郡蓮華王院東

香隆寺三昧堂

在同國葛野郡松原村

火葬所香隆寺長蓮臺野奧奉終船岡

東山清閑寺小堂

在同國愛宕郡歌中山清閑寺

清閑寺法華堂

前同寺六條帝小堂跡北方中壇竹林即法花堂

火葬所東山麓

阿彌陀寺御影堂

在長門國豐浦郡赤間関

火葬所隱岐國海部郡葛田山

大原法華堂

在山城國愛宕郡大原勝林院中

火葬所隱岐國海部郡葛田山

一林五

金原法華堂

在山城國乙訓郡奥海印寺村南七八町計

火葬所阿波國板野郡無養村

大原法華堂

在同國愛宕郡大原來迎院藥師堂後山

火葬所佐渡國雜太郡竹田村真野山

廢帝社下圓丘

在同國紀伊郡伏見街道家本町

東山觀音寺北邊

在同國愛宕郡泉涌寺界內來迎院持山

月輪山莊我禪坊

在右同寺御廟所中

龜山殿勒御堂淨金剛院 此寺蓋二尊院古圖同院室地
在國萬野郡嵯峨天龍寺中 寺方丈北龜山帝司所建
火葬所龜山殿藥草院 同寺後山

深草法華堂 但深草院也
但深草院也
左同 國紀伊郡深草鄉 今安樂行院 南字漢寺殿之地
火葬所伏見 不知其云伏見是街渡丁日西方
龜山殿法華堂淨金剛院 又與龜山南嶺寺地
在同國萬野郡嵯峨天龍寺中 後深草院同院室地
火葬所龜山殿後山後嵯峨帝室空所 西方此院地
蓮華寺傍山 在同國同郡上嵯峨大覺寺東北山

龜山殿 在同國同郡上嵯峨大覺寺東北山

蓮華寺傍山 在同國同郡上嵯峨大覺寺東北山

蓮華寺傍山 在同國同郡上嵯峨大覺寺東北山

蓮華寺傍山 在同國同郡上嵯峨大覺寺東北山

蓮華寺傍山 在同國同郡上嵯峨大覺寺東北山

蓮華寺傍山 在同國同郡上嵯峨大覺寺東北山

蓮華寺傍山 在同國同郡上嵯峨大覺寺東北山

蓮華寺傍山 在同國同郡上嵯峨大覺寺東北山

在河內國錦部郡觀心寺後山谷之間 廢上寺
在河內國錦部郡觀心寺後山谷之間 廢上寺

百重原陵 在河內國錦部郡觀心寺後山谷之間
在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
北嵯峨小區 福田寺御塔是為北方陵

常照寺後山 在丹波國美田郡山國庄井戶村
火葬所常照寺後山之麓
勝尾寺東谷 在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
在攝津國嶋下郡勝尾寺封境之內
伏見大光明寺 在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
在山城國紀伊郡指月後山

伏見大光明寺 在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
在山城國紀伊郡指月後山

在山城國紀伊郡指月後山 在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
在山城國紀伊郡指月後山

在山城國紀伊郡指月後山 在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
在山城國紀伊郡指月後山

在山城國紀伊郡指月後山 在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
在山城國紀伊郡指月後山

在山城國紀伊郡指月後山 在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
在山城國紀伊郡指月後山

在山城國紀伊郡指月後山 在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
在山城國紀伊郡指月後山

在山城國紀伊郡指月後山 在同國交野郡市村櫛子窟山寺又山城國萬野郡
在山城國紀伊郡指月後山

山國常照寺後山

在丹波國柴田郡井戸村光嚴帝御陵西傍土名
火葬所悲田院今上京西陣扇屋町大應寺斯餘塚以十位見者即
魁力辰而後在此所止

泉涌寺後山
御印木又
伏見殿舟三昧院
無草法華堂今也

在山城國愛宕郡火華寺同寺此帝以下正親町院

四代御廟相並

泉涌寺後山
御印朽株 又 伏見船舟三昧院
又 榊橋 源草法華堂合

在前同所火葬于同寺

泉涌寺後山
御印本 又 伏見船舩三味院
ナシラ 御筆法筆堂全

在前同所火葬于同寺

泉涌寺後山

在銷同所火葬于同寺

泉涌寺後山
九重石
又
修父殿丹三昧
今安樂門院舊實文年中由噴

在前同所火葬于同寺

泉涌寺後山

在前所以後御火葬止御代々同之

後光明帝實天之時匹夫八共衛者上言以來朝議改為衛士應云推尋其說山可
謂門操子思一云恐傷氏固執復有死灰再燃之舉矣

天保十二年號御内典奉拜
光格天皇後月輪山陵 仁孝天皇弘化 實平安城以來之盛典也

北白川殿

在同國愛宕郡聖護院村
北竹林中

西方寺堂下

在同國紀伊郡伏見風呂屋町

泉涌寺後山
後西院御廟傍
無縫塔

在同國愛宕郡東山

陵墓一隅抄

狹木寺間陵 七俗詠曰神功皇后陵下
陵頭石種玉露。

在大和國漆下郡佐貴鄉超昇寺於

中津山陵
在河內國志紀鄉澤田村

小市岡上陵

在大和國高市郡

嗟殺圖山陵

在山

司馬遷
左司馬司馬
鳥龜寸
今羅王于社地是陵乎傳云所終

宇台凌江次第五字治三所一大后宇治陵二

在司國紀伊郡本幡村地處山中國內

中宇治陵火葬于愛宕郡東南野岡西北

1

在前同村五百山藥師院境內東竹林中
五輪石每世一人
社主無種姓

比叡山下觀音院

在同國愛宕郡岩藏村（昔已廢）

鳥部野陵

在同國同郡火葬于盧戶野一坊至不

附東元

船若寺
左司馬萬歸郎鳴龍村泉谷西北

太英論島那歸

在同國愛宕郡汰石路北山

火葬于大谷本院

在回國同郡知恩教院正堂西或西門陀陀堂北今立於石塔左為楊恩遺墓

火葬于大谷

在前同所 在國愛宕郡白河地

葬西院

在同國葛野郡西院村

圓城寺北櫻本

在同國愛宕郡

後朱雀院

在同國葛野郡仁和寺山

火葬于船岡西野

在同國同郡

皇后陵

在同國久世郡小倉村東折尾川

常壽院傍

在同國愛宕郡市原村

今宇治陵

在同國宇治郡本幡村廣淨妙寺界內

醍醐山圓光院

在同國同郡

雲林院尚侍堂

在同國愛宕郡雲林院村

後宇治陵

在同國宇治郡本幡村

法金剛院三味堂

在同國葛野郡法金剛院村

福勝院護摩堂

在同國愛宕郡白河地

高野山往生院谷

在紀伊國伊都郡

蓮華王院側新法華堂

在山城國愛宕郡

杏隆寺或云雲林院

在同國葛野郡松原村

大原寂光院

在同國愛宕郡草生村

今林法華堂

在同國葛野郡上嵯峨

伏見陵

在同國紀伊郡伏見元枝木町松林院

泉涌寺後山

在同國愛宕郡東山

畝傍山北墓

在大和國高市郡山本村林中

箸墓

在同國城上郡箸中村路傍

身狹桃花鳥坂墓

在同國高市郡

白鳥冢

在同國葛上郡富田村

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

○大和國宇智郡
○大和國宇智郡
○大和國宇智郡

那羅山墓
在同國漆上郡猿澤池東
○大和國宇智郡

蚊屋野墓
在同國漆上郡猿澤池東
○大和國宇智郡

植生山岡上墓
在同國漆上郡猿澤池東
○大和國宇智郡

赤石檜笠岡上墓
在同國漆上郡猿澤池東
○大和國宇智郡

長野墓
在同國漆上郡猿澤池東
○大和國宇智郡

二上山墓
在同國漆上郡猿澤池東
○大和國宇智郡

在大和國葛下郡二上神社東
○大和國宇智郡

藤尾社
○大和國宇智郡

在山城國紀伊郡稻荷社地
○大和國宇智郡

兵庫山墓
○大和國宇智郡

赤穗墓
○大和國宇智郡

赤穗墓
○大和國宇智郡

越智崗上墓
○大和國宇智郡

今城谷上墓
○大和國宇智郡

那富山墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

雙墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

石冢
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

庶人墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

親王墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

別所墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡圓妙寺村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

那富山墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

雙墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

石冢
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

庶人墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

親王墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

別所墓
在同國漆上郡佐保山眉間寺之西
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡圓妙寺村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

在山城國乙訓郡上羽村
○大和國宇智郡

清和帝三子
○四品貞元親王
建長九年十一月、四十一

親王墓

在上總國周准郡貞元村

同帝五子、應仁親王、南宮
○二品式部卿貞保親王
建長二年六月、五十五

官、峯山四宮權現

在信濃國小縣郡赤松村

同帝六子
○常陸大守貞統親王
建長十六年五月、四十四

葬于圓覺寺藏遺骨於水尾

○白河親王
應仁二年十一月、

在山城國葛野郡水尾村

○高仁親王
應仁二年十一月、

鳥邊野

○高仁親王
應仁二年十一月、

在同國愛宕郡沐石路北山

○高仁親王
應仁二年十一月、

光明山麓

○高仁親王
應仁二年十一月、

在同國相樂郡河田村

○高仁親王
應仁二年十一月、

醍醐山中通谷西麓

○高仁親王
應仁二年十一月、

鳥羽殿

○高仁親王
應仁二年十一月、

在同國宇治郡山上醍醐行炭山道

○高仁親王
應仁二年十一月、

龍翔寺森

○高仁親王
應仁二年十一月、

在同國紀伊郡竹田村

○高仁親王
應仁二年十一月、

奈良岡墓

○高仁親王
應仁二年十一月、

在大和國添上郡佐保山之西南

○高仁親王
應仁二年十一月、

後宇治墓

○高仁親王
應仁二年十一月、

在山城國宇治郡木幡村

○高仁親王
應仁二年十一月、

我禪房谷

○高仁親王
應仁二年十一月、

在同國愛宕郡東山泉涌寺之境

○高仁親王
應仁二年十一月、

小松谷

○高仁親王
應仁二年十一月、

陵墓御火葬地共凡百七十九箇所

○高仁親王
應仁二年十一月、

以上

○高仁親王
應仁二年十一月、

津久井清影謹校

四條帝升極父
○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

光明峯寺

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在山城國紀伊郡東福寺界內

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

長家

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在同國乙訓郡圓明寺村

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

補遺

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

鳥瀧之北梅畑

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在同國葛野郡

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

川上西陵

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在大和國吉野郡高原村

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

白川陵

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在同國城上郡笠間村笠間山

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

禪林寺

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在山城國愛宕郡永觀堂道南畑中

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

令湛寺毀墓

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在遠江國引佐郡井伊谷龍澤寺境內

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

淨光明寺

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在相模國鎌倉郡二階堂村

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

麓山悟真寺

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在肥後國八代郡宮地村

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

法泉寺

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在周防國吉敷郡山口

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

如意輪寺

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

在大和國吉野郡金峯山

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

以上

○關白藤原實家公
建長四年二月、六十一

陵墓御火葬地共凡百七十九箇所

上官長論山陵牋

洛西野人津久井某謹獻書，官長閣下恭以
閣下文武英果忠厚寬恕來茲茲都之日首拔民間
疾苦通寬滯賑貧困早朝晏退夙夜匪懈嘗惻上都
之損景勝去年春出令重禁毀傷高雄嵐峽之楓樹
延叱僧徒糾責不法都人士女同然庶嘉功美績繼
出其草莽鄙生殘喘棄物幸生盛明遭逢非常之大
君子俯喜時會之執仰感恩養之優遂有區々之志
情不可嘿而已閣下幸擴言路無拒其狂直某雖
今日奏而明日顯纖芥無憾寅告上如左某少小最
耽典藉特注心皇朝史乘偶閱山陵志中言
帝陵頽壞之狀未嘗不掩卷而應下也竊自謂方今

○世

聖上撫運百歲興發獨山陵一議未足飽人情也饒
教官家不暇修之苟食其土者何不盡尊崇焉乎
哉欲試以此于諸侯顧職非其人加以吏道之俗何
未公詔人矣居諸荏苒空抱素志某昔以廕補登庸
吏曹末而於材無可取於德無可議況亦天與疲弱
不欲永壅賢者之路屢移病乞休退職以來周流畿
甸歷拜累聖山陵因記其模制以備異日之采要
越士子春山陵點檢之命下不圖以賤息充奉役某
喜出望外私於使者曰凡墳陵事蹟踴紛勢茫已確
據者不特為少矣參摺咨謀不積以日月未輒易決
定古今論者騁說互出彼此牴牾大都雖傳故家之
筆札藉父老之口實要之不過臆度偏見之二今觀

元祿享保之論定似少有粗漏試言其一夫實平
幽宮奉于仁和寺大內山蓋下火所在于其山後宇
多野衆之所仰瞻和列適有同名以故至遂謂大和
國宇多陵所在不知夫審大正偽必無遺憾也識者
猶艱之而況其他哉宜台學問淵博通曉今古者以
揅之行間兩府故事凡審實機密悲田院垣外屬例
任之今亦踵襲舊制以至尊陵墓付之乎捕虜賤
人恐非所以副國家恭順之意也雨曹其心之庶
依學士柴野氏採訪和列故事分差使臣於四方檢
討陵地官薦其說祭酒林君時以儒官無堪其任者
弗錄用其甚失望然守志彌堅專尋探援之路知
閣下誤聽不以某駑下訪以富世某喜懼交荷

○世

帝陵頽敗之狀閣下每言稱吾當是之時早心
誇寵榮以為帝陵事必成於閣下之手亡幾果
有檢陵之令躬親巡視近郊持簡僚屬中緘密絕
者讚揚其議包容不舍於是好古篤志之倫爭獻所
見僉願為閣下用某領命以來感戴罔鄂刮目以
望事成仄某大朝重發令曰當今以國用蓋推庶
績蠲毛姑因循元享之旧制補理從前之垣柵又聞
坂府奉令既就祇役差然者山陵志已降諸家所
作當實不問是非某之所大望乎今日也恭以
聖子神孫臨御宇內奕葉累世宰制生民河山之固
六服來同帶礪之誓九列奔走可謂皇統億載天
下一家者而山陵之典饗未備具其竊為明時惜之

此年臺夷並進民情不靖朝廷大有事于群神於斯時也決行檢陵重禁禦之法於將來實足答上帝之眷相清邊陲之穢氣愚民之貪利帝陵后墓不識那物有盜土石斬樹木暴露斂具至甚者起亭樹窮宴佚於其上某偶觀之不覺汗洒透衣今舉狀其近以仰遠方之思案坊祈閣下少重鑒念伏惟迨京如深草木幡諸地桓武以下中葉妃嬪勲戚之壘壤相望郊野歷年之久遺址存者無幾耳近時陶瓦多取材此或往往墜闌田圃林藪山丘漸作干野封隧章為稻麥嗟取陵上一杯之土尊民間獲息之屋巨罪章益夥其軀何以足慰神威謹按畝人山之神武陵柏原之桓武陵此帝陵之尤者耳

○考

起他顯異崇禮今此二陵實滅厥所國家之闕典莫甚之某不量其分先以檢尋柏陵為已殆感其力履歷或覃思舊志其事雖細微勤苦不敢讓故人概昔之論者皆依準偽陵費嘴辨此即所以不得其真也一云今伏見城山古御香大龜谷總柏原之地也然而陵之所在為城中央築城時陵壞必矣一云小栗栖管内一丘鉢大兜者即是也一云谷口人家之東左傍俗呼山伏冢即陵也帝潛龍時稱山部山伏蓋山部之轉訛也以上紛紜不決其徒殆倦搜索遂泥執於山槐記中柏原者伏見山松原中也又入伏見柏原內等之章句雷同於松蒲二氏者有之按城山古之本幡山巨幡墓及閑址今現存焉陵壞

之說乃不取也仍憶雄略紀載深草埴器條曰山脊國內俯見古者深草都稱伏見三峰稻荷社今稱伏見稻荷此其額也然則山槐記之伏見山恐非城山矣以愚見論之山伏冢此為初葬之陵家畔有溪流一帶常史載大同元年十月御政葬事註云是歲大水或山陵壞損以故有遷築之舉者此邪又其東南有稻龜前堂原地豐公居伏見時穿其丘後通山隅自是遂失其位置惟南面存巍々之狀恰與延暦年間之制合又其東方有小丘呼曰御東家以此為人之指地為葬所不亦宜哉是為其一說隱名柏原今偏稱擬陵不唱他以故世俗莫知谷口之為柏原者而其邊總稱御草山廣袤東西六百十六

○考

弓南北千九十八弓中有深草管地之大牙焉東距山部原上西距于大龜谷合內大合明此所上言也山之官道南距于小栗栖道北距于瓦町東北距于龜谷俱十一町乃合於北城之古法而陵固伺西微置域內亦以有山谷經界不釐正故式云東八町西三町又云如足寅角二岑一谷今其北方有谷呼之谷其為域內可知也又古記載柏原陵從東邊一谷計入山稻荷山南野今之御草山古之為柏原者是其時大嶋武好山城名勝志云大谷口山石而者是恐柏原旧跡也又並河永山城志云柏原野在大龜谷北土人呼乞馬原類聚國史曰延暦十四年八月遊獵于柏原野又僧白慧山別名跡志云柏原

地名曰谷口同所但此號今不稱中比轉云癩病原其故地在御陵土人不知之豈穢者間為癩病依而號也谷口之為拍原此丘之為真陵是為其證其佗參證數柄今不煩條陳另欲具一書鳴痛哉聖王之山陵名實兩廢至雖父老田茲朝夕來往者不認辨之所以然者何請姑援他辨之隆治以還帝陵額地相踵如上演而大和地為尤甚猷廟時寧樂府進奏云大和國帝陵無之元祿頃京兆尹松平源公謂曰前年寧樂以何術隱伏其難隱伏者有司猶如此下情奚足怪往昔喪亂不失魏之姿却失於昇代檢陵之日者亡他檢吏之所臨視驅下民推究口狀求往緝尋不一而足土人不堪勞擾相爭

○聖

其頭目翹古谷口全村本桓陵之守戶諸今彼家有凶禮闔鄉來會葬事秦某亦佐執紼因示以正嘉二年諸陵雜事記一道中有云拍原陵下司大進阿聞梨其子永秀世又稱元祿檢陵時秦某恠奸詐之露與里人長三相謀指點他山為帝陵併後拍原之稱呼爾後其家宗屬並臻子孫不記餘殃之所及他人有室者亦皆死于狂癩癩疾乞丐原之名果不浮今也龕前堂原及山伏冢寔為野棋鉅竹只古數株財不失旧裝會泉涌寺土木之功興山伏冢古松亦所充用嘗聞伐此樹時役夫有蒙傷害者假今不真陵一旦神明之所憑決不可行凌辱如右蓋深草木幡或仁和寺諸地之陵墓被剝蝕也由於伏見

○聖

匡真欲以免其苛督也草山志有云深草山者東西十町餘南北十八町餘旧為深草任士秦氏之私德慶長頃其家獻馬糧於烈祖歷朝定以為貢草地京兆府世下制章禁侵犯山中原谷凡可五十皆古跡也此記蔽匿數多之古跡或亦指擬陵地曰拍原食匪徒之欺騙同和列某便遣人于秦氏後長谷川某乞貸御草山圖其家秘惜不出強請閱之暇昧罔標某爽然自失于昔偶聞山本院秀建者語遂獲其驗左傳者道曰山本院實淨藏之胃淨藏嘗以業力安法觀寺塔天子賞以深草山之地嗣法相傳住于龕前堂原中屬坊宇文書悉付兵火子孫遂衰世臣秦某幸之檀索賜地獻諸公所閑原役以功已為

聚樂之營築至此上來之諸說一一脗合龕前堂之為桓陵山本院之為守司又秦氏及長三等之為隸屬判然而定竟乃多日之疑驟漸洗豁乎自得因不自揣恭欲作聖蹟圖志一編以頌告四方成稿有日續當繕寫進呈嗚乎汚陵者之病癩秦氏之絕祖饗實天誅灼灼者可不憚畏哉今夫傭夫墓奴逢住時今日猶獲上墓望壙布香火陳酒菓以慰其先於地下赫々皇祖橫遭犯溢失威靈之所託其恒念之痛息慨嘆殆忘起臥方今財路日繁蠲租之地需貢賦封外之士羅金穀其下不堪誅求罪逆往往而出焉陵墓之壁實根乎此犯者固難下於誅上之人重設共恪之章誰敢穢之侮之仰

閣下傷陵所湮峨如彼怨患忠實直如此摘摘典
 故參畫公卿併與閣下向來所自考定仔細收錄
 輸送大朝載之簡冊納之秘府設必依旧制不許
 所告訪先簡按真陵頭著者宣喻國侯邑主厚行
 奉護又其羅掘辱者覆土石禁芻牧柵均皆如初以
 茲異日之裁命其小國無租廨及係寺觀之封內者
 所轄官署便宜共給吏者常以歲時按部專案奸民
 不法且後村上後龜山二陵本在撰方中請從
 今列之于諸陵速諭其郡國同加尊理策者苟有人
 心皆驩欣頃肯若夫寬平之於仁和寺弘仁之
 於大覺寺兆域崇侈時饗不闕并非今日考問之例
 也但有司錄之巡視勿失其時則長免可憾之患今

○聖

也中外多事度支告急之時雖然閣下少回慮以
 計事宜則不至多耗錢穀勞吏民矣在古策應帝
 之崩也賈人魚屋某盡傷天子火葬之違祖制感
 奮鳴志有司廟廊善之葬禮遂復古典又河尻氏使
 五條日加禮管內之山陵令民知其可敬畏以垂
 子載不遷之法後以善政多改任松前嘗請造巨艦
 攻山丹其忠勇凡如此時人錄其著者傳之乎世惟
 修陵一事遺而不載為可深惜況公侯有土之君
 於封地之陵墓闕其崇禮而可邪願閣下襲茲嘉
 謀服茲令聞聽其上稟則天下大幸也狂冒至愚不
 知所置惟閣下寬其罪某誠恐以聞

安政二年二月十七日
翁之上此書時乙卯春
 官長則淺野中書君也

安政己未春余失力遂致智時自六十六乃思
 本屋裏日檢山後筆記其中課抽譯時書及重讀國
 志以送又後世心獨謂以之平居故一旦驚水患
 付吾者又慮謀洩洩人或懷不指贊助之志遂受
 欲依其人秘之于休生島神宮以為身後之須布而
 未果其事也又久之遂載宇却之為清任諸陵修
 補職其族戶田和列代依律大小臣屬入京適余
 遭赦免罪尋令充檢陵之課
 朝廷當下發章抄必令其不也乙丑之秋修陵既
 宇都之族反和列以下重發賞或勸云今也百金所

明治紀元龍次戊辰歲十月
 官許

大坂 河內屋茂兵衛

發行 菱屋孫兵衛

書林 京都 勝村上勘兵衛

井上治兵衛
 林芳兵衛

日本漢文史
籍叢刊

第五輯

地理

[General Information]

□ □ =14664129

SS□ =14664129